國譯大藏經

經部

第十二巻

經部

第十二卷

目次

以上

法句經 (Dhammapada) 解題
長老偈 (Theragāthā) 解題
長老尼偈 (Therigāthā) 解題

譯者　立花俊道

巴利語の聖典は經律論の三藏より成り、經藏は長・中・雜・增一・小の五尼柯耶に分たる。小尼柯耶と稱するは屈陀迦波吒以下の十五經を含み、此に譯出したる法句經以下の五經は共に此の小尼柯耶に屬す。此等五經の中、法句經の一は我が國語にて世に紹介せられしこと、一再に止まらざれど、他の四經は本譯を以て國譯の嚆矢となすが如し。

諸經要集中の十七經の一部に散文を見るの外、五經總て韻文より成る。之を散文の國語に譯出したるために原文の重味を減殺したること幾何なるかを知らず。古人の例に倣ひて之を韻文に轉じ、簡朴にして莊重なる原文の意義を十分に寫したきは余が飽くまで希望する所なりしも、之は非凡の文才ありて始めて企て得べき事にて、余等の如き文藻の才乏しき輩の敢てし得べき所にあらず。よりて余は初

めより之を企つることを止め、全部譯するに散文を以てしたり。

一國語の書を他の國語に譯するの容易ならざるは、此が經驗を有する人の等しく悉知する所なるべし。忠實に原文の意を寫さんとすれば直譯に過ぎ、譯文を流暢にして了解し易からしめんと努むれば意譯に過ぎざるを得ず。原文に忠實にして而も了解し易き譯文を作らんことは實に至難の業たり。本譯の如く古代の文を現代の文に譯するに於ては此の難を感ずること特に切なるを覺えずんばあらず。本譯文恐くは不可讀の訾あらん。之れ一半は譯者の不文に出で、一半は此の飜譯難に出づ。讀者諸君幸に諒とせられよ。

【法句經】本經は二十六品四百二十三偈より成れる、全部偈頌の小經文にして、古來言ひ傳ふる所によれば、此經は釋尊の在世中、緣に隨ひ機に應じて出家在家の弟子等のために說かせ給ひしを、第一結集の際、摩訶迦葉を初め五百の諸大長老の會誦したるものにて、爾來師より資に口づから傳授せしを、西紀前第一世紀中、錫蘭のヴッタガーミニー王の時、始めて筆錄せしものなりと云ふ。長老偈以下の諸經も亦同じく第一結集の際に結集せられ、ヴッタガーミニー王在位の時、始めて筆錄せられたるものなること、法句經と異ならずと言ひ傳ふ。

法句經は南方佛教聖典中、最も通俗的なるものにて、本文及び佛音長老の之に附したる因緣譚、及び註釋は巴利文學を研究する上に於ても、佛教的道念を涵養する上に於ても、古來初學者に取りて、

最も必須の書として珍重せられしものなり。此の中或は深遠なる哲理を尋ぬべからずとするも、簡潔平易なる實際道德訓としては、全經の偈偈皆然らざるはなきなり。之を稱して佛門の論語と云ふも決して過言にあらざるべきを信ず。

【長老偈・長老尼偈】 此等兩書は佛在世時代に於ける長老及び長老尼の作に係る偈頌を集めたるものにて、前者は一千二百七十九偈より成り、後者は五百二十二偈より成る、而して共に小尼柯耶に屬すること、此に譯出せる他の諸經と異ることなし。長老及び長老尼の中、或ものは一偈を遺し、或ものは二偈を遺し、或ものは三偈・四偈乃至七十餘偈を遺せり。之を其の遺したる偈の數によりて分類し、一頌品・二頌品・三頌品乃至大集品等と名く。斯の如く之を分類するに、作者たる長老、又は長老尼の年齡や、法臘の順次によらずして、其の誦出せる偈頌の數によれるは、一種の興味あるを失はず。偈頌の數の多き場合に於ける諸偈は、一時に誦出せられしものにあらずして、種種の異れる場合に誦したるを集めたるものの如し。例へば、四十頌品の摩訶迦葉の作とせらるる四十偈中、初の三偈は比丘等の羣集に混在し、在家に往來するを誡めて誦したるもの、次の四偈は比丘の四要具に就て、次の四は自己の日日の登山に就て、次は比丘等を誡めて、或は舍利弗の德を推稱して誦出し、或は自己に關して誦出したる等あり。或は又他の場合にありては、某長老又は長老尼の事を他人の誦せしを一緒に出せるも之あり。斯く複雜なる種類の偈の、某某長老、又は長老尼の作として、世に傳へられしを、

後人の集めたるものにて、悉く佛の親口より出たりとせらるる聖典中、斯の如き偈集あるは、また一異彩たらずんばあらず。

此等兩偈の英譯はリス・デビヅ夫人の手によりて完成せられ、『原始佛教家の讃歌』として世に流布せらる。但し此の飜譯は意譯に過ぎたる傾ありて、此の國譯には大なる助を與へざりしを遺憾とす。護法の長老尼偈の古註『最上義燈』は譯者の最も多く參考としたる所なり。

國譯法句經

彼の祥者、尊貴者、正遍覺者に歸命す

雙雙品第一

【一】諸法は心に導かれ、心に統べられ、心に作らる。〔人〕若し汚れたる心を以て、言ひ且つ行はば、其よりして、苦の彼に隨ふこと、車輪の、之を挽けるものの跡に〔隨ふ〕が如し。

【二】諸法は心に導かれ、心に統べられ、心に作らる。〔人〕若し淨き心を以て、言ひ且つ行はば、其よりして、樂の彼に隨ふこと、猶影の〔形を〕離れざるが如し。

【三】「〔彼〕我を罵れり、打てり、敗れり、笑へり」と、斯る思を抱けるものは、其の怨解くることなし。

【四】「〔彼〕我を罵れり、打てり、敗れり、笑へり」と、斯る思を抱かざるものは其の怨解く。

【五】此の世に於て怨は怨を以てしては終に解くべからず、愛を以てぞ解くべき、これ(一)永劫不易の法なり。

【六】「我等は此處に(二)滅ぶるものなり」と、(三)愚者は之を覺らず。人若し之を覺れば、其よりして爭

息む。

【七】(四)清淨觀を抱きて住し、(五)諸根を攝することなく、飲食に於て量を辨せず、怠惰にして、精勤足らざる者、魔王の斯る人を動かすこと、猶ほ風の弱き樹を〔動かす〕が如し。

【八】不淨觀を抱きて住し、諸根を攝し、飲食に於て量を辨じ、信心あり、精勤なるもの、魔王の斯る人を動かすことなき、猶ほ風の石山に於けるが如し。

【九】人にして煩惱なきものこそ、黄色の衣服を著くべけれ。調御なく、實語なきもの、彼に黄衣は相應しからず。

【一〇】既に諸の(六)漏を棄て、善く戒に安住し、調御あり實語あるもの、彼にこそ黄衣は相應しけれ。

【一一】(七)非精に於いて(七)精の思をなし、精の上に非精を見るもの、此等(八)邪思境の人は、〔遂に〕精を得ることあらじ。

【一二】精を精として知り、非精を非精として知る、此等(八)正思境の人こそ、精に達するを得べきなれ。

【一三】惡く葺きたる屋舍は、雨の之を侵すが如く、修練せざる心は、愛欲之を侵す。

【一四】善く葺きたる屋舍は、雨の之を侵すことなきが如く、修練したる心は、愛欲の之を侵すことなし。

【一五】此處に憂へ來る世に憂へ、惡を作すものは兩處に憂ふ。彼は憂へ彼は悲む、己の汚れたる業を見て。

【一六】此處に喜び來る世に喜び、福を作せるものは兩處に喜ぶ。彼は喜び彼は悅ぶ、己の淨き業を見

て。

【一七】此處に苦み、來る世に苦み、惡を作すものは兩處に苦む。「われ惡業を犯せり」とて苦み、惡趣に陷りて益益苦む。

【一八】此處に歡び、來る世に歡び、福を作せるものは兩處に歡ぶ。「我福業を作せり」とて歡び、善趣に生れて益益歡ぶ。

【一九】(九)佛語を讀誦すること多しと雖も、放逸にして之を行ふことなくば、牧者の他人の牛を算ふるが如く、(一〇)沙門道に於て得る所なし。

【二〇】佛語を讀誦すること少しと雖も、正法の隨法行者たり、貪と瞋と又癡とを棄て、正智あり、心よく解脱せるものは、此の世彼の世に著なくして、(一一)沙門道に達すべし。

〔一〕原語には「古」の意もあり、法句經註解書には「古の法、總ゆる佛、辟支佛、漏盡の聲聞の踏みたる道」と釋せり。〔二〕Yamāmase 閻魔王の爲に服せらる、死に近く、死に行く、消え果つ等の意もあり、〔三〕原典にては「他」の字を用ひ、「智者を除きて他のもの」と釋す。〔四〕見聞し知覺する物體に對して壯美なり清淨なり愛すべきものなり等の觀念を抱くを云ふ。〔五〕眼耳鼻舌身意の六根を制せず、此等諸根の門戸を護らざるを言ふ。〔六〕漏とは煩惱の謂なり。〔七〕「精」とは「精髓、中樞、要部」等の義なり、「非精」とは之に反して、緊要ならざる部分なり。〔八〕「邪思惟」又は「正思惟」を其の分別の「境界」、範圍とするの意なり。〔九〕原語には、有義、有利等の義あり、佛の說かれたる敎を言ふ。〔一〇〕「沙門道の分得者にあらず、」〔一一〕涅槃に達するを言ふ。

精勤品第二

【二一】精勤は不死の道にして、放逸は死の道なり。精勤の人は死することなく、放逸の人は猶ほ死せるが如し。

【二二】賢者は精勤に於て、能く此〔の理〕を覺り、聖者の道を樂み、精勤を悅ぶ。

【二三】禪思あり、忍耐あり、常に勇健なる賢者は、無上の安隱・涅槃を獲取す。

【二四】向上あり、憶念あり、業淨く、〔事を〕なすに心を用ひ、自ら制し、道によりて生き、精勤するもの、〔斯の如き人の〕譽は增長す。

【二五】向上と精勤と自制と調伏とを以て、智者は(一)暴流の侵すことなき洲を作らんことを。

【二六】愚にして智なき輩は、放逸に耽り、智ある人は精勤を護ること、最上の珍寶の如くす。

【二七】放逸に耽ることなかれ、欲樂の愛著に〔耽ること〕なかれ。これ精勤にして禪思あるものは、大安樂を得べければなり。

【二八】智者の精勤を以て放逸を拂ふ時、彼は心に憂なく、智慧の樓閣に上りて、憂ある衆生界を〔見ること〕、猶ほ山頂に立てる賢者の、地上の愚者を觀るが如し。

【二九】放逸の徒の中にありて精勤し、眠れる人の中にありて能く醒めたる、斯の如き智者は、快馬の駑馬を遺つるが如くにして進む。

【三〇】精勤によりて帝釋は諸天の主となれり。精勤は人に稱へられ、放逸は常に賤めらる。

【三一】精勤を樂み、放逸の怖るべきを覺れる比丘よ、然ゆる火の如くに、大小の(二)纒結を[illegible]。

【三二】精勤を樂み、怠惰の怖るべきを覺れる比丘は、退墮すること能はずして、涅槃に近づく。

〔一〕涅槃の境をいふ。〔二〕煩惱を云ふ、是れ煩惱は衆生の心を纏ひ結びて生死海に流轉せしむるが故なり。

心品第三

【三三】躁ぎ、動き、護り難く、制へ難き心、智者は之を矯むること、箭匠の箭を〔矯むるが〕如くす。

【三四】陸に棄てられ、水中の家を離れたる魚の如く、此の心は躁ぐ、(一)魔王の領土を逃れ出んが爲に。

【三五】抑ふること難く、輕躁にして、隨處に欲を遂げんとする〔斯の如き〕心を御するは可なり、御したる心は樂を齎す。

【三六】見ること難く、微妙にして、隨處に欲を遂げんとする智者よ、〔斯の如きの〕心を護れ、護ある心は樂を齎す。

【三七】遠く行き、獨り動き、形なくして、胸に潛める、〔斯る〕心を制するものは、魔の縛より脫れん。

【三八】心堅固ならず、妙法を了解せず、信念定まらざる人の智慧は、成滿することなし。

【三九】心に貪染なく、心に迷惑なく、善惡〔の思〕を棄て、覺りたる人には、怖畏あることなし。

【四〇】此の身は水瓶に似たりと知り、此の心を(三)都城の如くにし、智慧の武器を以て魔と戰ひ、勝ち獲たるものは之を護り、住止することなかれ。

【四一】げに此の身は久しからずして地に委せん、棄てられ、意識を喪ひ、無用の木の端の如くなりて。

【四二】賊は賊に對し、敵は敵に對して、此をなし彼をなす、邪路に陷れる心は、更に大なる惡を此の人になす。

【四三】母も父も將た他の近親も之をなさず、正路に立てる心は、更に大なる善を此の人になす。

〔一〕生死海を云ふ。〔二〕堅く護るを云ふ。

華品第四

【四四】此の大地と、閻魔界と、此の人天界とに勝つものは誰ぞ。誰か善く說かれたる法句を〔集むること〕、巧者の華を集むるが如くなる。

【四五】㈠有學の人は大地と、閻魔界と、此人天界とに勝つ、有學者は善く說かれたる法句を〔集むること〕、巧者の華を集むるが如くす。

【四六】此の身は水泡に譬ふべきを知り、陽炎の質なりと悟りて、天魔の華箭を壞り、㈡死王不覩〔の地〕に往かんことを。

【四七】華を摘みて、心愛著せる人をば、死王の捉へて去ること、眠れる村里を、暴流の漂はし去るが如し。

【四八】華を摘みて、心愛著し、諸欲に飽くなき人は、死王之を服す。

【四九】猶ほ蜂の、花と、色香とを害

【五〇】他人の邪曲を〔見ず〕、他人の作不作を〔思はず〕、唯己の作と不作とを觀よかし。

【五一】愛しく色好き華の、香なきが如く、善く說かれたる語も、之を行はざるものには效なし。

【五二】愛しく色好き華の、加之香あるが如く、善く說かれたる語は、之を行ふものには效あり。

【五三】華堆よりして、種種の華鬘を作るが如く、生れ出たる衆生には、爲すべき善業多し。

【五四】華香は風に逆うて行かず、旃檀香・多伽羅香・摩利迦香も〔亦然り〕。善人の香は風に逆ひて行き、良士は諸方に風を送る。

【五五】旃檀香と、多伽羅香と、鬱波羅香と、將た婆師吉香と、此等諸香の中にて、戒香こそは最上なれ。

【五六】多伽羅香・旃檀香の如きは、其の香、量少し。戒德者の香は諸天の中にて香ふこと第一なり。

【五七】此等の戒德あり、精勤にして住し、善く證りて解脫せるものの道は、魔王之を窺ひ知らず。

【五八、五九】大道に棄てられたる塵堆の中、其處に淨香ある、快よき白蓮生ぜん。斯の如く、塵埃のうぢ、盲目なる凡夫のうちに、正徧覺者の弟子は、智慧を以て光り勝る。

〔一〕四向四果の中、最後の一果阿羅漢果を除き、前の四向三果の人を有學の人と云ふ、やがて阿羅漢となる人なり。〔二〕阿羅漢果を云ふ、是れ阿羅漢果を得れば、死王卽ち魔王を見ることなきが故なり。

闇愚品第五

【六〇】目醒めたるものには夜は長く、疲れたるものには〔一〕由旬は遠く、正法を知らざる、愚者の輪廻

は久し。

【六一】旅者若し己に勝り、〔己と〕等しき〔伴〕を得ずんば、必ず單行せよ、愚者に伴たるものはあらず。

【六二】「我に兒あり、我に財あり」とて、愚者は苦む。己、己のものに非ず、況や兒をや、況や財をや。

【六三】愚者の〔自ら〕愚なりと思へる、彼これによりて賢者たり。愚者の賢者の思せる、彼こそは愚者と云はるれ。

【六四】愚者は生を終ふるまで、賢者に奉事すとも、法を知らざること、猶ほ食匙の羹味を〔辨せざる〕が如し。

【六五】智者は、假令瞬時も、賢者に奉事せば、疾く法を知ること、猶ほ舌の羹味を〔辨する〕が如し。

【六六】無智なる愚者は、己、己の敵なるが如く振舞ふ、苦果を〔生ずべき〕罪業を身に行うて。

【六七】行うて後悔い、涙顏啼哭して、其の果報を受くべき業は、善く爲されたるにあらず。

【六八】行うて後悔なく、歡喜悅豫して、其の果報を受くべき業は、善く爲されたるなり。

【六九】罪業の未だ熟せざる間は、愚者之を蜜の如しと思ひ、罪業の熟するや、愚者は其の時苦惱を受く。

【七〇】(三)愚〔なる行〕者は、月に月に、茅の端にて食を取るとも、斯る人は善法行者の十六分の一にも値せず。

【七一】犯したる罪業は、固結せざること新しき乳の如く、〔而も〕灰に覆はれたる火の如く、熅りつつ、愚者に追隨す。

【七二】愚者の智慧の起ること、其の不利の爲なる間は、これ此の愚者の好運を損し、其の頭を碎く。

【七三】〔愚者は〕僞の名聞を願ひ、諸比丘の中にて上位に居らんと〔望み〕、家にありては主となり、他族の間には供養を〔得んと望む〕。

【七四】「在家出家共に、我之を爲せりと思へかし。總て爲すべき事、爲すべからざる事に於いて、皆我が命を受けよかし」。これ愚者の心にして、欲と慢とは〔ために〕增長す。

【七五】一は利養に導くものにして、一は涅槃に引き行くものなり。佛弟子たる比丘は、此の意を證りて、恭敬を喜ばず、遠離のために修習せよ。

〔一〕由旬とは里程の名、四哩より十八哩に至り、諸說一定せず。〔二〕一箇月毎に、茅草の端にかかるほど少量の食を取るとも、其の功德は善く法を行ふ人の功德の十六分の一にも當らず。

賢哲品第六

【七六】〔身の〕過を指し失を責むる智者、斯る賢者を見ば、〔寶の〕在所を告ぐる人の如くに事へよ、斯る人に事ふるものには、是ありて非あることなし。

【七七】誡めよ、敎へよ、不相應の事より遠ざからしめよ。彼善人には愛せられ、惡人には憎まれん。

【七八】惡友と交るなかれ、卑劣の輩と交るなかれ。善友と交り、尊貴の士と交れ。

【七九】法を喜ぶものは澄みたる心を以て快く臥す。賢者は常に聖者の說ける法を樂む。

【八〇】渠工は水を導き、箭匠は箭を矯め、木工は材を曲げ、賢者は己を調ふ。

【八一】一塊の磐石の、風に動かされざるが如く、賢者は毀訾と稱譽とに動かさるることなし。

【八二】底深き池水の、澄みて濁なきが如く、賢者は法を聞きて、心を澄ましむ。

【八三】善人は一切處に〔欲を〕棄て、良士は〔一〕欲を求むるが爲に語らず。樂に觸れ、將又苦に〔觸れても〕、賢者は〔二〕變れる相を現すことなし。

【八四】自の爲にも他の爲にも〔惡を行はず〕、兒をも財をも國をも、之を求むることなく、非道によりて、己の利達を求むることなし、これぞ德者・智者・義者なる。

【八五】人閒の中にて、〔三〕彼岸に到るものは少く、其の他のものは、岸邊にありて奔馳す。

【八六】善く說かれたる法に隨順する輩は、越え難き魔の領土を〔越えて〕、彼の岸に到らん。

【八七、八八】賢者は黑法を棄てて白〔法〕を修すべし、家より〔離れて〕家なき身となり、樂を得難き遠離の所に於て、此處に賢者は諸欲を棄てて、我有なき身となり、妙樂を求め、諸の心穢より、己を淨くすべし。

【八九】〔四〕正覺分に於て、善く心を修習し、執することなくして、著を棄つるを樂む、此の光輝ある〔五〕漏盡者は、世に靜穩を得たるなり。

〔一〕諸欲を求め、諸欲の爲に閑語を交ふることなし。〔二〕浮みたる類、沈みたる類をなすことなし。〔三〕彼岸とは涅槃を云ひ、此岸とは生死を云ふ、次偈の彼岸の意も同じ。〔四〕所謂七菩提分法なり。〔五〕漏盡者とは煩惱を盡したる人の意にて阿羅漢を云ふ。

阿羅漢品第七

【九〇】道を踏み終へ、一切處に離憂得脫せるもの、總ゆる纏結を斷じたるものには、執惱あることなし。

【九一】〔正〕念ある人は精勤し、彼等は王家を貪樂することなし。〔鵞王の〕池沼を棄つるが如く、彼等亦各各其の家を棄つ。

【九二】〔財物を〕蓄積することなく、知覺して食を受け、其の行處は空にして、相なく、而して解脫あり、空行く鳥の〔道の〕如く、斯る人の道を測ることは難し。

【九三】其の煩惱や悉く盡き、食に於て著あるなし、其の行處は空にして、相なく、而して解脫あり、空行く鳥の〔跡の〕如く、斯る人の跡を測ることは難し。

【九四】諸根の寂靜に歸せること、御士に善く馴らされたる馬の如く、慢を棄て煩惱を盡したる、斯る人は諸天も羨む所なり。

【九五】怒らざること大地に等しく、よく禁戒を守りて門閾に譬ふべく、泥土なき池の水の如し、斯る人には輪廻あるなし。

【九六】其の意は寂靜なり、其の語其の業亦寂靜なり、善く證りて解脫を得、安息を得たる此の人の。

【九七】妄信なく、無爲〔の法〕を覺り、且つ縛を破れる人、業緣を絕ち、欲を棄てたる、これぞ誠に上上の人なる。

【九八】聚落にても森林にても、海にても陸にても、聖者の止まる處、其處ぞ樂しき〔處なる〕。

【九九】森居は樂むべし、之は衆人の樂まざる處、離貪の人は之を樂む、彼等は諸欲を求めざるなり。

千千品第八

【一〇〇】意義なき文句の語は、〔其の數〕一千なりとも、人の聞いて寂を得べき有義の一語は之より勝る。

【一〇一】意義なき文句の偈は、〔其の數〕一千なりとも、人の聞いて寂を得べき一偈句は之より勝る。

【一〇二】意義なき文句の偈一百〔章〕を誦せんよりは、人の聞いて寂を得べき一法句〔を誦する〕ぞ勝れる。

【一〇三】戰場に於て千千の敵に克つものよりは、獨り己に克つもの、彼こそ最上の戰勝者なれ。

【一〇四、一〇五】己に克てるは、總て他の人人に克てるに勝る。天も乾闥婆も、魔王も、幷に梵天も、此の常に己を御し自ら制する人の勝利を轉じて、敗亡となすこと能はず。

【一〇六】人若し月に月に、千金を〔棄てて〕、犧を供すること百年、而して又一人の己を修めたるものを供養すること頃刻ならば、此の供養こそ、彼の百年の焚祀に勝りたれ。

【一〇七】人若し林閒にありて、火神に奉事すること百年、而して一人の身を修めたるものを供養することと頃刻ならば、此の供養こそ、彼の百年の焚祀に勝りたれ。

【一〇八】

敬禮するの四分の一にだも當らず。

【一〇九】敬禮を以て習となし、常に上位を尊重せる人には、四種の法增長す、壽と色と樂と力と。

【一一〇】人若し生くること百年ならんとも、汙戒にして定なくんば、戒を具し禪思あるものの、一日生くるに如かず。

【一一一】人若し生くること百年ならんとも、劣慧にして定なくんば、慧を具し禪思あるものの、一日生くるに如かず。

【一一二】人若し生くること百年ならんとも、怠惰にして精勤足らずんば、堅き精勤あるものの、一日生くるに如かず。

【一一三】人若し生くること百年ならんとも、(一)起滅を見ずんば、起滅を見る人の、一日生くるに如かず。

【一一四】人若し生くること百年ならんとも、不滅の道を見ずんば、不滅の道を見る人の、一日生くるに如かず。

【一一五】人若し生くること百年ならんとも、無上の法を見ずんば、無上の法を見る人の、一日生くるに如かず。

〔一〕事物の生起滅盡、卽ち生滅を云ふ。

惡業品第九

【一一六】善業には急ぎて赴き、惡業よりは心を防げ、福業をなすに懶きものは、其の心惡業に樂む。

【一一七】人假令惡業を爲すとも、再再之を爲すなかれ。作惡の欲は起さざれ、惡を積むは苦なり。

【一一八】人若し善業を爲さば、再再之を爲せ。作善の欲を起せ、善を積むは樂なり。

【一一九】惡人も、其の惡の未だ熟せざる閒は、福を見る。惡の熟するに至るや、惡人は禍を見る。

【一二〇】善人も、其の善の未だ熟せざる閒は、禍を見る。善の熟するに至るや、善人は福を見る。

【一二一】「惡は我に近づくこと無かるべし」とて、之を輕視することなかれ。滴滴水の落ちて水瓶に滿つるが如く、愚者は少少づつ惡を積みて惡に滿つるに至る。

【一二二】「善は我に近づくこと無かるべし」とて、之を輕視することなかれ。滴滴水の落ちて水瓶の滿つるが如く、賢者は少少づつ善を積みて善に滿つるに至る。

【一二三】貨財多く、從伴少き商估の危き路を〔避け〕、壽を望むものの、毒物を〔避くる〕が如く、惡を避けよ。

【一二四】手に瘡傷なくば、手を以て毒をも取ることを得。毒は瘡傷なきものには伴はず、爲さざるものには惡なし。

【一二五】人若し害心なき人、清淨にして執著なき人に忤はば、禍の此の愚者に還り來ること、逆風に投じたる細塵の如し。

【一二六】或は人胎に宿るあり、罪あるものは地獄に墮つ。善行の

る。

【一二七】空にありても海の中にありても、將た山間の窟に入りても、世に罪業より脱るべき、方所とてはあるなし。

【一二八】空にありても海の中にありても、將た山間の窟に入りても、世に死の勝たざる、方所とてはあるなし。

刀杖品第十

【一二九】總て〔有情〕は刀杖を怖れ、總て死を懼る。己を喩として〔他を〕殴つことなかれ、害ふことなかれ。

【一三〇】總て〔有情〕は刀杖を怖れ、生は總てのものの愛する所。己を喩として〔他を〕毀つことなかれ、害ふことなかれ。

【一三一】樂を求むる有情を、刀杖を以て害ふものは、己の樂を求めても、後世に之を得ることなけん。

【一三二】樂を求むる有情を、刀杖を以て害はざるものは、己の樂を求めて、後世に之を得ん。

【一三三】何人にも麤語を用ふることなかれ、受けては〔彼〕亦汝に返さん。憤怒の語は苦なり、返杖は汝〔の身〕に觸れん。

【一三四】汝若し默して語らざること、破れたる鐘の如くならば、これ涅槃に達せるなり、汝に憤怒ある

なし。

【一三五】牧牛士の杖を以て〔制し〕、牛を牧場に驅るが如く、等しく老と死とは、有情の壽命を驅る。

【一三六】愚者は罪業を犯して覺らず、無智の輩は、己の業に惱まさるること、猶ほ火に燒かるるが如し。

【一三七】暴意なく害心なきものの中にありて、暴を加ふるものは、疾く十處中の一に陷る。

【一三八】酷痛、損失、形體毀傷、重症に逢ひ、又は心散亂に至る。

【一三九】王禍に逢ひ、嚴しき誣告を蒙り、親族滅び、家財喪亡す。

【一四〇】或は又火の彼の家を燒くことあり、形體壞れて後、無智なる彼は(一)泥犂に陷る。

【一四一】裸行も、結鬘も、泥も、斷食も、又た露地臥も塵垢を身に塗ることも、不動坐も、未離惑の有情を淸うすることとなし。

【一四二】身を嚴飾せりとも、平等に行ひ、寂靜、調順、自制あり、梵行を行ひ、一切生類に對して(二)害意を抱かずば、彼は婆羅門、彼は沙門、彼は比丘なり。

【一四三】慚恥によりて制せられて、〔他の〕批難を意とせざること、良馬の鞭を〔意とせざる〕が如くなるもの、〔斯の如きもの〕誰か此の世にありや。

【一四四】鞭にて打たれたる良馬の如く、汝等も亦專心・銳意なれ。信心・持戒・精勤・禪定・正決斷により て、汝等は明と行とを具し、正念を有し、此の大いなる苦惱に勝たん。

【一四五】 渠工は水を導き、箭匠は箭を矯め、木工は材を曲げ、賢者は己を調ふ。

〔一〕地獄を云ふ。〔二〕原意は刀杖を措く。〔三〕第八〇偈に同じ。

老衰品第十一

【一四六】 〔世は〕常に〔慾火に〕燒かるるに、何の笑ぞ、何の歡喜ぞ。〔汝等は〕黑闇に覆はるるに、何故に〔智〕火を求めざる。

【一四七】 飾れる〔此の〕形體を見よ、合會して成れる腐壞物の塊、衆病を擁し、種種に測量し、堅實なく、安住なきなり。

【一四八】 此の形色や老朽し、衆病の棲所たり、壞るべきものなり、臭穢の身は損すべく、命は死に終る。

【一四九】 秋の日に棄てられたる葫蘆の如き、此等灰白の骨行を見て、何の喜樂ぞ。

【一五〇】 骨行の都市を建て、肉と血とに塗れり、此處に老と、死と、慢と、覆とを藏す。

【一五一】 能く飾りたる王車も古び、身體も亦た老に至る。賢人の法は老ゆることなし、賢人は賢人に法を傳ふるなり。

【一五二】 此の寡聞の人は、犢牛の如く老ゆ。彼の肉身は增せども、彼の智慧は加はることなし。

【一五三、一五四】 (一)屋舍の工人を求めて、之を看出さず、多生輪廻界を奔馳して、轉た苦の生死を經たり。屋工、汝今看出さる、再び家を構ふることあらじ、汝の桷材は總て破られ、棟梁は毀たる、滅に至れる心は諸愛の滅盡に達せり。

【一五五】壯時、梵行を修せず、財寶を得ずして、魚の棲まざる池の中なる老鴻の如くに亡ぶ。

【一五六】壯時、梵行を修せず、財寶を得ずして、朽ちたる弓の如く、過去を託ちて臥せり。

〔一〕渴愛を指す、是れ渴愛は生死輪廻の因なるが故なり、此の一五三、一五四の兩偈は佛大覺の後、初めて唱へられしものなりと傳ふ。

自己品第十二

【一五七】己を愛すべしと知らば、善く之を保護せよ。〔人生〕三期の一に於て、賢者は宜しく醒悟すべきなり。

【一五八】己を先づ正しき位に立て、而して他を敎へなば、賢者は勞する所あらじ。

【一五九】己を處すること、他を敎ふるが如くならば、能く己を制して他を制するを得ん、そは己は制し難きが故なり。

【一六〇】己こそ己の依所なれ、他何物か依所たるあらん。能く己を制する時は、得難き依所を得べし。

【一六一】自ら作りたる罪業は、己に生じ己に出でたるもの、其が愚人を損ふこと、金剛石の摩尼を〔鑽る〕が如し。

【一六二】汗戒甚しき人は其の身を處して、敵者の望むが如くすること、蔓草の其の覆へる樹に於けるが如し。

【一六三】不善にして、己に不利なる事は爲し易く、事の利ありて善なる、之は極めて爲し難し。

【一六四】應供者・聖者・道によりて活くる人の教を、邪惡の見に據りて謗る人は、(一)葦草の果の、己を滅すために實るが如し。

【一六五】自ら惡を作せば自ら穢れ、自ら惡を作さざれば自ら淸し。淨と不淨と共に己にあり、自ら他を淸くすること能はず。

【一六六】他人の務は大なりとも、爲に己の務を忘るることなかれ。己の務を辨して後、己の務に專心なるべし。

(一)葦は花を著け實を結べば自ら死するなり。

世間品第十三

【一六七】卑き法を奉ぜざれ、放逸の徒と共に棲まざれ、邪見に隨はざれ、世事を增長せしめざれ。

【一六八】起て、放逸なるなかれ、善行の法を修せよ。隨法行の人は樂く臥す、今世にも來世にも。

【一六九】善行の法を修して、惡行[の法]を修せざれ。隨法行の人は樂く臥す、今世にも來世にも。

【一七〇】泡沫の如くに見よ、陽炎の如くに見よ、斯の如く世界を觀るものは、死王之を見ること能はず。

【一七一】飾ありて王車に似たる、此の世界を來り見よ、愚者は之に迷へども、智者は之に著することなし。

【一七二】先に怠りて、後に怠らざるもの、彼此の世界を照すこと、雲を離れたる月の如し。

【一七三】人の作したる惡業、後善の爲めに覆はるれば、此の人世を照すこと、雲を離れたる月の如し。

【一七四】此の世界は暗黒にして、觀察「の力」あるものは少し。網を離れたる鳥の如くに、天に昇るものは少し。

【一七五】鴻雁は日の道を行き、神力あるものは空を行く。賢者は魔王と其の眷屬とを併せ破りて、世を離脱するなり。

【一七六】唯一の法を超え、妄語を吐く人、來世を等閑に思へるものは、罪として犯さざるなし。

【一七七】慈念なき輩は天界に入らず、愚人は施與を稱揚することなし。賢者は施與を隨喜し、之によりて彼は來世に於て安樂なり。

【一七八】世界を一王の國土となし、或は天界に赴き、有ゆる世界に主となる、預流果は此の何れにも勝る。

佛陀品第十四

【一七九】勝ちたるものは再び之に勝つこと能はず、其の勝利には此の世の何人も之に入ること能はず。
(一)斯く行履限りなく跡なき佛を、如何なる道によりてか導かんとする。

【一八〇】其の網其の欲其の愛、何處にも之を尋ぬべきなし。斯く行履限りなく跡なき佛を、如何なる道によりてか導かんとする。

【一八一】勇者の禪思に專にして、出離・寂靜を喜ぶ、斯の如き正覺・〔正〕念の人は、諸天も羨む所なり。

【一八二】人身を得るは難く、有情の生存は難し。妙法を聞くは難く、諸佛の出世は難し。

【一八三】(二)一切の惡事を作さず、善事に近づき、己の意を清淨にする、是れ諸佛の教なり。

【一八四】忍辱・堪忍は最上の修行、涅槃は最勝なりと諸佛は宣ふ、是れ人を害ふものは出家にあらず、他を惱すものは沙門にあらざるが故なり。

【一八五】罵らず、害はず、(三)婆羅提木叉に於て防護し、食に於て量を知り、閑處に坐臥し、增上心に住する、是れ諸佛の教なり。

【一八六】金貨を雨すとも、諸欲に飽くこと能はず、諸欲は少味にして苦なりと、之を知るは賢者なり。

【一八七】天の諸欲に對しても、尙ほ欲念を起さず。覺王の弟子は、諸愛を盡すを樂む。

【一八八】人人恐怖の念に迫られて、山林園樹制多に歸依するもの多し。

【一八九】されど之は安隱の依所にあらず、無上の依所にあらず。此の依所に歸依して、一切の苦より脫るることなし。

【一九〇】佛と、法と、僧とに歸依するもの、彼は勝智を以て、四種の聖諦を見る。

【一九一】(四)苦と、苦の起因と、苦の度脫と、苦の滅盡に達する賢聖八種道と。

【一九二】是れ安隱の依所、是れ無上の依所なり。此の依所に歸依して、一切苦より脫るべし。

【一九三】尊貴の人は得難し、彼は各處に生ぜず。此の勇者の生ずる處、慶福其の族に至る。

【一九四】諸佛の出世は樂しく、妙法を説くは樂し。僧衆の和合は樂しく、和合するものの修行は樂し。

【一九五、一九六】あらゆる迷妄に勝ち、憂と苦とを超えて、應供の德ある佛又は〔佛〕弟子を供養するもの、斯の如き得寂・離怖の人を供養するものの功德は、何人も之を算ふべからず。

〔一〕知覺の對境限りなきの意にて無限の境界を知覺し得るの意。〔二〕七佛通誡の偈として知らるる有名なる偈なり。〔三〕比丘比丘尼の大戒を指す。〔四〕苦集滅道の四諦なり。

安樂品第十五

【一九七】安樂に住せん、怨念ある人人のうちにありて怨念なく、怨念ある輩の中に怨念なくして、安樂に住せん。

【一九八】安樂に住せん、煩惱ある人人の中にありて煩惱なく、煩惱ある輩のうちに煩惱なくして、安樂に住せん。

【一九九】安樂に住せん、欲念ある人人の中にて欲念なく、欲念ある輩の中に欲念なくして、安樂に住せん。

【二〇〇】安樂に住せん、此の我等には、我有あることなし、光音天人の如く、喜悦を食とせん。

【二〇一】勝ちては怨を得、負けては起居苦なり。心靜なるものは勝負共に擲ちて、起居安樂なり。

【二〇二】貪の如き火あるなく、瞋の如き罪あるなし、(一)蘊集の如き苦あるなく、寂滅に勝れる樂あるなし。

【二〇三】飢餓は最大の病、諸蘊は最極の苦なり。之を實の如くに知れば、最勝の安樂・涅槃〔を得〕。

【二〇四】無病は最上の利、知足は最上の財なり。信頼は最上の親族にして、涅槃は最勝の安樂なり。

【二〇五】獨處の妙味と、寂靜の妙味とを味ひ、法悅の妙味を吸うて、怖畏もなく又惡もなし。

【二〇六】聖者を見るは好く、同じく棲むは常に樂なり、愚者を見ざれば、常に快からん。

【二〇七】愚人と共に道行くものには長き憂あり、愚者と共に住するの苦なるは、敵と〔同じく住するの〕常に〔苦なる〕が如し。賢者は同住して樂しきものにして、猶ほ親緣と合會するの樂しきが如し。

【二〇八】されば賢者と、智者と、多聞の士と、重擔を負ひ、禁戒ある聖者、斯の如きの善士、上智の人に〔よること〕、月の星道によるが如くせよ。

〔一〕五蘊の合會して成れる此の身體を云ふ、次偈に諸蘊と云へるも同じ。

愛樂品第十六

【二〇九】非處に就きて是處に就かず、利を棄てて愛樂を取るものは、是處に就きたる人を羨むに至る。

【二一〇】愛せるものと會ふこと勿れ、惡めるものと〔會ふこと〕勿れ、愛せるものを見ざるは苦、惡めるものを見るも亦〔苦なり〕。

【二一一】されば何物をも好愛する勿れ、愛者と別るるは禍なり、人に愛憎なければ、纏結あることなし。

【二一二】愛好より憂悲生じ、愛好より怖畏生ず。愛好より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。

【二一三】親愛より憂悲生じ、親愛より怖畏生ず。親愛より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。

【二一四】喜樂より憂悲生じ、喜樂より怖畏生ず。喜樂より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。

【二一五】貪欲より憂悲生じ、貪欲より怖畏生ず。貪欲より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。

【二一六】渴愛より憂悲生じ、渴愛より怖畏生ず。渴愛より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。

【二一七】淨戒と正見とを具し、法に依立し正理を知り、自ら己の業を作すもの、世は斯の如き人を愛す。

【二一八】(一)不言說の法に於て念を起し、其の心に滿足し、諸欲に於て著心なきは、上流の人と稱せらる。

【二一九】久しく異境にあり、遠くより健に歸れるを、親知朋友愛人は、彼の來るを迎ふ。

【二二〇】同じく善業を作して此の世より彼の世に赴けるを、福果は之を迎ふ、愛するものの來るを、親知の迎ふるが如くに。

忿怒品第十七

【二二一】忿を棄て慢を離れ、諸の纏結を超えよ。斯く名色に執せず、我有なき人には苦來ることなし。

【二二二】發れる忿怒を制すること、轉る車を制するが如くするもの、此の人をぞ我は調御者と云ふ、他は唯手綱を執るものなり。

【二二三】怒は愛を以て克ち、不善は善を以て克つべし。吝嗇の徒には仁惠を以て、虚言の人には實語を以て克つべし。

【二二四】實を語れ、怒る勿れ、些にても求められなば與へよ、此の三事によりて、諸天の所に到れ。

【二二五】害意なき牟尼は、常に身を攝して、〔一〕不死の所に到る、彼處に到りては憂ふることなし。

【二二六】常に覺寤し、晝夜に勤學し、涅槃を得んと努むるものの、煩惱は滅びん。

【二二七】〔二〕阿偸羅、之は古くして、今出來れるものに等しからず、曰く「人は默して坐せるものを誹り、多く語るものを誹り、少く言ふものをも亦誹る、世に誹を受けざるものなし。

【二二八】常に唯誹られ、常に唯讚めらるるもの、過去にあらざりき、未來になけん、而して今もあらず。

【二二九、二三〇】多智の人、若し行失なく、賢にして、智徳〔具はり〕、定意あるものを、日日絶えず稱揚することあらば、閻浮提金の貨幣の如く、誰か此の人を誹り得んや、諸天も之を讚め、梵天も之を讚めん。」

【二三一】身惡業を防護し、身を能く制せよ。身非業を棄てて、身に善業を修せよ。
【二三二】口惡業を防護し、口を能く制せよ。口非業を棄てて、口に善業を修せよ。
【二三三】意惡業を防護し、意を能く制せよ。意非業を棄てて、意に善業を修せよ。
【二三四】賢者の身を能く攝し、更に口を愼み、意を制せる賢者は、これ能く防護せる人なり。

〔一〕涅槃の意。〔二〕優婆塞の名なり、以下四偈は佛の此の優婆塞を敎へ給ひし時の偈なり。

垢穢品第十八

【二三五】汝、今、黃める木の葉の如く、閻魔の使者亦汝の傍に立つ、門出の門に立ち、路資汝の身にあるなし。
【二三六】此の汝、己の燈となり、疾く精勤して智者となれ。〔さらば〕垢穢を拂ひ、愛著を離れて、天上の聖地に到らん。
【二三七】汝、今、年老い、閻魔の傍に來れり。汝に途上休息の所なく、路資亦あるなし。
【二三八】此の汝、己の燈となり、疾く精勤して智者となれ。〔さらば〕垢穢を拂ひ、愛著を離れて、再び老死に入ることあらじ。
【二三九】智者は〔銀〕工の銀〔垢を去る〕が如く、次を逐ひ、剎那剎那に、些づつ、己の苦穢を去れ。
【二四〇】鐵より生じたる垢の、鐵より出でて鐵を食むが如く、分外の受用を望むものは、其の業のため

に悪趣に導かる。

【二四一】呪神の垢穢は讀誦せざるなり、家屋の垢穢は修理を怠るなり、色の垢穢は怠慢にして、防護の垢穢は放逸なり。

【二四二】婦女の垢は非行にして、施者の垢は慳貪なり。(一)垢は邪惡の法なり、此の世にも彼の世にも。

【二四三】之よりも更に穢多き垢あり、無明は最大の垢なり。此の垢を棄てて、諸比丘、無垢の人となれ。

【二四四】慚恥の念なく、烏の如くに勇に、傲慢に、無禮に、自負心强く、汚れたるものには生は易し。

【二四五】慚恥の念あり、常に淸白を求め、著なく、自負心なく、淸淨の生を營むものには〔生は〕難し。

【二四六、二四七】生きたるを害ひ、妄語を語り、此の世に於て人の與へざるを取り、他人の婦と交り、加之飲酒に耽る人、彼は此の世に於て己の脚下を掘る。

【二四八】汝、斯の如くして節制なきことは、邪法なることを知れ。貪望と非法と、長く汝を苦に陷るなからんことを。

【二四九】人は其の信仰に隨ひ、其の好む所に施をなす。人若し他の與ふる飮食に對して不滿を抱くことあらば、彼は晝夜に定を得ることなし。

【二五〇】斯る思を斷ち、根絕やし、盡せるもの、彼こそは晝夜に定を得べけれ。

【二五一】火は貪の如きはなく、執著は瞋の如きはなし。網は癡の如きはなく、流は愛の如きはなし。

【二五二】他人の過は見易く、己の過は見難し。他人の過は〔之を簸くこと〕糠を簸くが如くし、而も己の

〔過を〕覆ふことは、詐ある賭者の骰子を隱すが如くす。

【二五三】他の過を索め、常に憤恚の心を抱くものは、其の(三)漏益々增し、(三)漏盡には遠くして遠し。

【二五四】空中には路なく、沙門は〔佛法の〕他には之あらず。羣生は虛榮を樂み、如來には虛榮なし。

【二五五】空中には路なく、沙門は〔佛法の〕他には之あらず。諸行は常住なるなく、諸佛には動著あるなし。

〔一〕或は邪惡の法は垢なり。〔二〕九偈の註を見よ。〔三〕漏盡とは煩惱を盡すことにて、阿羅漢果に達するを云ふ、斯の如き人は煩惱を盡して、阿羅漢果を得ること能はず。

法住品第十九

【二五六】人の暴を以て事を決する、彼之によりて法住の人たるにあらず。正も邪も共に能く決するものは賢者なり。

【二五七】暴ならず、法により、平等に他を導き、法に護らるる智者、〔彼ぞ〕法住の人と稱へらる。

【二五八】〔人の〕多くを語る、〔彼〕之によりて賢者たるにあらず。堪忍あり、怨なく、恐なき〔もの、彼ぞ〕賢者と稱へらる。

【二五九】〔人の〕多くを語るも未だ持法者たるにあらず。法を聞くこと尠しと雖も、身にて之を(一)見、法を等閑にすることなくば、彼こそ法の護持者なれ。

【二六〇】［人の］頭の白き、［彼は］之によりて長老たるにあらず。斯の如きは、壽熟して、空しく老いたる人と稱へらる。

【二六一】人に諦と・法と・愛と・自約と、自調とあり、此の垢穢を除きたる此の賢者こそは、長老と稱へらるれ。

【二六二】唯言語ありとも、又美しき形色ありとも、嫉・慳・誑心あらば、人は善貌のものにあらず。

【二六三】此の惡を斷ち、根絕し盡して、此の瞋恚を除きたる智者こそは、善貌の人と稱へらるれ。

【二六四】自制なくして妄語を語らば、髮を剃るとも沙門にあらず。［人若し］欲貪あらば、奈何でか沙門たり得べき。

【二六五】人若し總て大小の惡を制せば、［彼は］諸惡を制せるによりて、沙門と名けらる。

【二六六】（二）他に［食を］乞ふが故に比丘たるにあらず。一切の法を學ぶも、尙ほ未だ比丘にあらず。

【二六七】罪業福業共に捨てて、淸淨行の人たり、智慧を以て世界を渡るもの、彼ぞ比丘と稱せらる。

【二六八、二六九】寂默なりとも、愚にして智なくば牟尼にあらず。（三）權衡を取るが如く、（四）勝法を取り、邪業を捨つる牟尼は、彼之によりて牟尼なり。人若し世の（五）兩事共に知らば、彼之によりて牟尼と稱へらる。

【二七〇】生命を害ふが故に（六）聖なるにあらず、一切生類を害はざるが故に、聖者と名けらる。

【二七一、二七二】（七）戒禁によりても、又（八）多聞によりても、又は得定・獨臥によりても、聖者の享くべき出離の樂に觸ることなし。比丘、漏盡に達するなくして自恃すること勿れ。

〔一〕僅にても聞きては、法に隨ひ、義に隨ひ、大法小法の依行者となり、身に苦等を知りて、四聖諦を見ると解せり。〔二〕比丘には種種の義あれど、中に乞人、乞士等と譯し、他に食を乞ふものの義ありとなす。〔三〕權ははかり、衡はおもりなり、權衡を取りて物を量らんとするものは、多きに過ぐれば取去り、少ければ更に加ふ、惡を棄てて善を取るも亦斯の如し。〔四〕勝法とは戒定慧解脫解脫智見を云ふ、此の蘊等の世界に於て、衡を擧げて度るが如く、此等は內蘊なり、此等は外蘊なり等、斯の如きの法により、兩義共に量るを云ふ。〔五〕內外上下等の別を知るの意。〔六〕聖者の原語、Ariya の aria には「敵」の意あり、故に生命を害ふ云云と云ふ。〔七〕四作淨戒又は十三頭陀行を行ふを云ふ。〔八〕三藏學を習するを云ふ。

道品第二十

【二七三】(一)八道は道の最妙、(二)四句は諦理の最上、離欲は法の最勝にして、(三)具眼者は兩足中の最尊なり。

【二七四】知見を淨くするの道は、此「の道」に外ならず。汝等此の道を踏め、是れ魔を困惑するものなり。

【二七五】汝等此の道を往けば、苦盡に達す。我は(四)除箭の「法」を知りて、汝等のために道を說きたり。

【二七六】汝等のなすべきは努力なり、如來は說者なり。禪思の人にして「此の道を」往くものは、魔の縛を脫る。

【二七七】「一切行は無常なり」と、智を以て斯の如く知る時、苦界嫌厭の情起る、是れ(五)淨に入るの道なり。

【二七八】「一切行は苦なり」と、智を以て斯の如く知る時、苦界嫌厭の情起る、是れ淨に入るの道なり。

【二七九】「一切法は無我なり」と、智を以て斯の如く知る時、苦界嫌厭の情起る、是れ淨に入るの道なり。

【二八〇】起つべき時に起たず、若く、強くして、怠惰に陷り、意志思想弱くして事に懶きもの、斯る逸者は智の道を得ず。

【二八一】語を愼しみ、意を能く制し、身に不善を作さず、此等の三を業道より淨除せば、諸大仙の說き給へる道を得ん。

【二八二】應念より智慧生じ、不應念なれば智慧滅ぶ。此の有と非有と、二種の道を知りて、智慧の增すが如く、然く己を處せよ。

【二八三】(六)〔煩惱の〕林を伐れ、單り樹を〔伐る〕勿れ、林よりは危難來る。林と下生とを伐らば、比丘等、煩惱の林なき人とならん。

【二八四】男子の女子に對する煩惱、些にても斷たれざる所あらば、彼の心は尙ほ囚はる。乳を貪る犢の母牛に於けるが如くに。

【二八五】自己の愛念を斷つこと、牛を以て秋時の蓮を〔折る〕が如くし、善逝の說き給ひし(七)寂靜の道、涅槃を增長せよ。

【二八六】「此處に雨時を過さん、寒暑の閒、此處に〔住せん〕」と、愚人は斯く思惟して、死の近くことを覺らず。

【二八七】兒や畜の愛に溺れ、樂に耽るものを、死王の拉し去ること、眠れる村里を大水の漂はし去るが如し。

【二八八】兒も、父も、親族も恃怙にあらず、死王に囚へられたるものには、親族も恃怙たらず。

【二八九】戒によりて自ら制せる賢者は、此の意を知りて、涅槃に赴く道を、疾く疾く淸くせよ。

〔一〕八正道を云ふ。〔二〕四聖諦の謂なり。〔三〕佛を云ふ。〔四〕欲等の箭を除くの法。〔五〕淨とは涅槃の謂なり、以下三偈皆同一の意に見よ。〔六〕天然の林間に猛獸毒蛇等の危險あるが如く、貪瞋癡煩惱の林にも種種の危難あり、由りて煩惱を林に譬へたるなり、或は Vana（林）Vanatha（下生）には共に又煩惱、欲等の意あり、三四四偈參照。〔七〕或は、寂靜の道を增長せよ、涅槃は善逝の說き給ひし所なり。

廣衍品第二十一

【二九〇】小樂を棄てて、大樂を見るべくば、賢者は大樂を觀て、小樂を捨つべし。

【二九一】他に苦を與へて、己の樂を望むものは、怨憎の繫縛に絆されて、怨憎より脫るることなし。

【二九二】爲すべきことを爲さず、爲すべからざることを爲し、虛誇にして〔而も〕怠惰なるもの、斯る人の諸漏は增長す。

【二九三】人常に精進して、身觀念を修し、非事に遠かりて、常に是事を行ひ、而して念と覺とあり、斯る人の諸漏は滅盡に至る。

【二九四】〔一〕母と父とを殺し、兩刹利王を殺し、國土も其の依屬も併せ滅して、婆羅門は苦患なきに至る。

【二九五】母と父とを殺し、〔二〕兩婆羅門を殺し、第五に虎類を滅して、婆羅門は苦なきに至る。

【二九六】〔三〕瞿曇の弟子は常に覺醒せり、彼等の晝夜常に念ずる所は佛にあり。

【二九七】瞿曇の弟子は常に覺醒せり、彼等の晝夜常に念ずる所は法にあり。
【二九八】瞿曇の弟子は常に覺醒せり、彼等の晝夜常に念ずる所は僧にあり。
【二九九】瞿曇の弟子は常に覺醒せり、其の心晝夜常に身念に住して。
【三〇〇】瞿曇の弟子は常に覺醒せり、其の心晝夜常に不害を樂みて。
【三〇一】瞿曇の弟子は常に覺醒せり、其の心晝夜常に修習を樂みて。
【三〇二】出家は難く、〔世を〕樂むは難く、菴〔住〕は難く、在家〔住〕は難く、同輩と棲むは難く、旅人は難に陷る、されば旅人たるなく、難に陷る勿れ。
【三〇三】信ありて戒德を具有し、名と富とを有てるものは、其の選ぶ所に隨ひ、隨所に恭敬せらる。
【三〇四】善人は遠く現はるること、雪山の如く、不善者は世に顯はるることなき、猶ほ夜陰に投ぜる箭の如し。
【三〇五】獨坐・獨臥・獨經行して倦むことなく、獨り己を制して林邊に樂しむものたれ。

〔一〕「愛は人を生む」と云ふ句よりして、愛を母と云ひ、「我は某なる王の子、又は某なる大臣の子なり」と云ひ、父によりて我慢の心起る、よりて我慢を父と云ふ、兩刹利王とは斷見常見の二、國土とは十二處、而して依屬とは十二處附隨の諸煩惱を云ふ。
〔二〕兩婆羅門王とは斷常の二見、虎類とは此處にては疑蓋を指すと註解書に釋せり。〔三〕瞿曇又は喬答摩は釋迦族の姓なるが故に、釋尊を時には瞿曇佛と呼びたり。

泥犁品第二十二

【三〇六】（一）非事を語るものは泥犂に入る、爲して爲さずと云ふものも亦、此等兩者の死後は同じ、劣業の人來世に〔ありては同じ〕。

【三〇七】邪業にして自制心なく、首に黃衣を纏へる衆多の人、此等邪業の人は、邪業の爲に泥犂に墮つ。

【三〇八】戒を破り、自制心なくして（二）信施を受くるよりは、熱して火焰に似たる鐵丸を噉むぞ勝れる。

【三〇九】人の怠惰にして、他の婦を娛むるものには、四事來る、不善業を得て、安臥を得ず、第三に毀訾、第四に泥犂。

【三一〇】不善業を得、其の趣く所は惡趣、恐れ恐れたるものの樂は尠く、王は之に重罰を加ふ、されば人、他の婦を娛まざれ。

【三一一】（三）功祚草の葉は、之を攫むこと惡しければ手を切る。沙門の道も之を行うて宜しからざれば、泥犂に導く。

【三一二】放逸なる行爲、汚れたる禁戒、猶豫して梵行を行ふ、之は共に大果を齎すものにあらず。

【三一三】若し事を爲すべくば之を爲し、斷斷乎として奮迅せよ。そは放逸なる沙門道は、塵垢を散ずること多ければなり。

【三一四】惡業は作さざるぞ好き、惡業は後に至りて苦を招く。作して苦を招くことなき善業は、これを作すぞ好き。

【三一五】邊地の都府を內外共に護るが如く、然く己を護りて瞬時も逸すること勿れ。瞬時を忽にするも

のは、地獄に墮ちて憂へ悲む。

【三一六】恥づべからざるに恥ぢ、恥づべきに恥ぢず、邪見に著せる衆生は、惡趣に趣く。

【三一七】恐なき所に恐を見、恐るべき所に恐を見ず、邪見に著せる衆生は、惡趣に入る。

【三一八】過なきに過の念を爲し、過あるに過を見ず、邪見に著せる衆生は、惡趣に到る。

【三一九】過を過と見、過なきを過なしと見、正見を抱ける衆生は、善趣に生る。

〔一〕諸經要集六六三偈。〔二〕國民の信仰によりて施す供養物。〔三〕茅に似たる草の一種。

象品第二十三

【三二〇】われは戰場に赴ける象の、弓を離れたる箭を〔忍ぶ〕が如く、罵詈を忍ぶ、是れ羣生は破戒の徒なればなり。

【三二一】〔人は〕調けたるを戰場に引き行き、王は馴れたるに騎る、人の中にて、自制心あり、罵詈を忍ぶは最第一なり。

【三二二】騾の馴れたるは善く、氣高き〔一〕辛頭馬は善し、大龍象王は善く、己を制せるものは更に善し。

【三二三】此等の乘物に〔騎り〕ては、〔人は〕〔二〕不至の地に到ることなし、己を制せるものは自制によりて〔其の處に〕達すること、猶は馴れたるに〔騎りて行くが如し〕。

【三二四】護穀と名くる象の、烈しく狂ひて禁制し難きも、縛せられては食を食ふことなし、象は象〔の

棲む」林を愛慕す。

【三二五】懶惰にして飽食長眠、轉輾して臥する愚者は、供食を以て飼はるる大豕の如く、數數胞胎に入る。

【三二六】(三)此の心曾て、望により、欲に隨ひ、樂に任せて流轉したり。我今日能く之を制すること、象師の猛象を「制する」が如くせん。

【三二七】精勤を樂とせよ、己の心を防護せよ、難處より身を拔くこと、泥中に陷れる象の如くせよ。

【三二八】若し思慮ある、善行の賢者を、同行の友に得ば、一切の危難に克ち、歡喜思惟して、彼と共に行へ。

【三二九】若し思慮ある、善行の賢者を、同行の友に得ずば、王の克ち取りたる國を棄つるが如く、摩登伽林中の象の如く、唯獨り行へ。

【三三〇】獨り棲むこそ好けれ、愚者と伴たるはなし、獨り行うて惡事を作す勿れ、寡欲なること摩登伽林中の象の如くなれ。

【三三一】事起れば友樂を得、滿足は何處より來るも樂し。命終にも善行は樂しく、一切の苦を棄つるは樂し。

【三三二】世に母たるは樂しく、世に父たるは樂し。世に沙門たるは樂しく、世に婆羅門たるは樂し。

【三三三】老後に至るまで戒を持つは樂、正信を樹つるは樂、智慧を得るは樂しく、惡を作さざるは樂し。

愛欲品第二十四

【三三四】放逸行の人には、愛欲の增長すること蔓草の如し、彼生生に轉輾すること、林中に果實を索むる猿の如し。

【三三五】賤しくして〔一〕毒ある此の愛欲、若し人に勝たば、彼の憂苦增長すること、〔二〕榮ゆる毘羅那草の如し。

【三三六】人若し賤しくして制し難き、此の愛欲に勝たば、憂苦の彼を去ること、蓮葉より落つる水滴の如し。

【三三七】されば吾汝等に告げん「汝等此に集れるものに幸あれ、愛欲の根を掘ること、優尸羅を求むるものの、毘羅那を〔掘る〕が如くし、汝等葦草の水流に折らるるが如く、數數魔に破らるる勿れ。」

【三三八】譬へば樹の根の、災なくして强ければ、伐るとも再び生ずるが如く、愛執は之を斷つことなくば、此の苦再再起る。

【三三九】三十六流、愛樂の流大なる時は、欲に沒在せる意志の水流は、〔此の〕邪見〔の人〕を運び去る。

【三四〇】〔欲〕流は一切處に流れ、葛藤は萌芽して存す。此の葛藤の生ずるを見ば、智慧を以て其の根を斷て。

【三四一】衆生の愛せるもの喜べるものは、過ぎ行くこと疾し。此の欲に湎れ樂を求むるもの、彼等は老死に至る。

【三四二】欲に纏はれたる衆生は、罝に囚はれたる兎の如く奔馳す。結使の爲めに縛せられ、再再苦に逢ふこと久し。

【三四三】欲に纏はれたる衆生は、罝に囚はれたる兎の如く奔馳す。されば離塵を望める比丘は、己の愛欲を斷つべし。

【三四四】人の(三)矮林〔＝欲〕を去りて(四)叢林〔＝欲〕に入り、一林〔＝欲〕を脫れて一林〔＝欲〕に入るもの、此の人を見よ、〔縛を〕脫して而も縛に赴くなり。

【三四五】鐵や木や又は草にて作れるものは、賢者は之を牢き縛と稱せず。珠環と妻子との欲は、貪著する所强し。

【三四六】賢者は、之をぞ强くして〔人を惡趣に〕墮し、牢くして解き難き縛と云ふ。人は之を破りて、無欲〔の身となり〕、愛樂を棄てて出家す。

【三四七】欲を樂しむものは〔欲の〕流に隨つて下ること、蜘蛛の自ら造りたる網を〔下る〕が如し。賢者は之を破りて欲なく、所有ゆる苦惱を棄てて去る。

【三四八】先なる〔＝過去〕を棄て、後なる〔＝未來〕を棄て、中なる〔＝現在〕を棄てよ、〔斯くするものは〕生有の彼岸に到れるなり。一切處に著心なければ、更に生老に絆さるることあらじ。

【三四九】疑念のために心惱み、欲熾にして不淨を淨と見る人は、其の愛念益益增長す、斯る人は［其の］縛を堅くするなり。

【三五〇】疑念の滅を喜び、常に念覺ありて不淨觀を修す、彼は［其の］愛念を滅さん、彼は魔の縛を斷たん。

【三五一】(五)圓成の域に達し、怖畏なく、愛を離れ、著なく、生有の棘を斷てり、是れ其の最後身なり。

【三五二】愛を離れ、著を去り、(六)詞句に巧に、(七)綴りたる文字と、其の前後とを解す。彼は(八)最後身にして、大智者大丈夫と稱せらる。

【三五三】(九)［我］所有ゆるものに克ち、所有ゆるものを知り、所有ゆる法に於て汙さるる所なし。所有ゆるものを棄て、(一〇)愛盡の上に於て解脫を得たり。自ら證り知りて、又誰をか［師と］仰がんや。

【三五四】法施は所有ゆる施に勝ち、法味は所有ゆる味に勝ち、法樂は所有ゆる樂に勝ち、愛盡は所有ゆる苦に勝つ。

【三五五】財は劣智の人を害へども(一一)度脫を求むる人を［害ふこと］なし。財欲のために無智者は其の身を害ふこと、［猶ほ］他を［害ふ］が如し。

【三五六】田は惡草のために損はれ、此の羣生は貪欲のために損はる。されば離欲の人に施せる［物］には、大果報あり。

【三五七】田は惡草のために損はれ、此の羣生は瞋恚のために損はる。されば離瞋の人に施せる［物］に

は、大果報あり。

【三五八】田は惡草のために損はれ、此の羣生は愚癡のために損はる。されば離癡の人に施せる〔物〕には、大果報あり。

【三五九】田は惡草のために損はれ、此の羣生は意欲のために損はる。されば離欲の人に施せる〔物〕には、大果報あり。

〔一〕Visattika を『長老偈』三九九偈の英譯にてリス・デビツ夫人は The poisoner of all mankind とす、あらゆる人類を毒するものの意、欲、欲望の意もあり。〔二〕學名を Andropogon murica tum と云ふ、一種の香草なり、其の敎を優尸羅と云ふ、三三七偈を見よ。〔三〕Vanatha には矮樹林、下生、闇欲等の意あり。〔四〕Vana にも森林、叢林、闇欲等の意あり。〔五〕阿羅漢果を指すと譯せり。〔六〕言語と文句。〔七〕文字を集めたるもの、卽ち文章と、文章中文字の前後。〔八〕阿羅漢や獨覺や佛は一旦無餘涅槃に入れば、再び世に出ることなし、故に此等を指して最後身の人と云ふ。〔九〕諸經要集二一一偈、イチウッタカ一一二偈、マハーヴッガ(大品)一の六參照。〔一〇〕愛欲、愛會を盡すことにて阿羅漢果を云ふ。〔一一〕彼岸に達せんと願へる人。

沙門品第二十五

【三六〇】眼を以て〔自ら〕攝するは善く、耳を以て〔自ら〕攝するは善し、鼻によりて攝するは善く、舌の上に〔自ら〕攝するは善し。

【三六一】身に於て攝するは善く、語に於て攝するは善し、意を以て攝するは善く、一切處に攝するは善し。一切處に攝する所ある比丘は、諸の苦痛より脫る。

【三六二】手を防護し、足を防護し、語を防護するは防護するの上なり、內に樂あり、定あり、獨居して、足ることを知るもの、彼を〔人は〕比丘と呼ぶ。

【三六三】比丘の、口を防護し、適度に語りて、(一)調戯ならざる彼れ、〔若し〕法と義とを明さば、其の說く所は、甘味なり。

【三六四】法を樂園とし、法を樂み法を思惟し、法を憶念する比丘は、正法より退墮することなし。

【三六五】己の得る所は之を輕んぜざれ、他の〔得る所は之を〕羨まざれ。他の〔得る所を〕羨む比丘は、安定を得ることなし。

【三六六】得る所少しと雖も、比丘若し之を輕んぜざれば、諸天は此の(二)淨活命、不屈撓〔の人〕を讃歎す。

【三六七】名色の上に於て、總て我有の念なく、又(三)其の消滅をも憂とせざれば、人は彼を比丘と呼ぶ。

【三六八】比丘の慈悲に住し、佛の教を悅べるものは、靜穩の處、諸行の息止、安樂を得ん。

【三六九】比丘、此の(四)船を戽め、戽まば汝の〔船〕は疾く走らん。貪欲と瞋恚とを棄てて、其より汝は涅槃に達せん。

【三七〇】(五)五を斷ち(六)五を棄て、更に(七)五を修せよ。(八)五著を越えたる比丘は、暴流を渡りたる〔人〕と稱せらる。

【三七一】比丘、禪思せよ、怠惰なる勿れ、心を諸欲に迷はしむる勿れ、怠惰にして〔地獄に墮ち熱〕鐵

丸を嚥む勿れ、〔獄火に〕燒かれて「苦し」と叫ぶこと勿れ。

【三七二】 智なきものに禪なく、禪なきものには智なし。若し人に禪と智とあらば、彼は涅槃に近づけるなり。

【三七三】 空屋に入りて、心を寂靜にしたる比丘、正しく法を觀察せば、其の樂人界の上に出づ。

【三七四】 〔人若し〕種種の方によりて、諸蘊の起滅を思念すれば、〔法〕喜〔法〕悅を得、是れ智者の、甘露味とする所なり。

【三七五、三七六】 此處に之は此の敎に於て、智ある比丘の先づ爲すべきことなり、諸根を防護し、足ることを知り、戒を以て〔自ら〕攝す、善良なる友の、淸淨に生活し、精勤なるものと交れ、慈悲を行ひ、義務を全うせよ、其より歡喜多くして苦惱を盡すに至らん。

【三七七】 凋みたる(九)拔師伽草の華を棄つるが如く、然く貪欲と瞋恚とを棄てよ、諸比丘。

【三七八】 身を靜かにし語を靜かにし、寂靜安定にして、世樂を棄てたる比丘、之を安息〔の人〕と云ふ。

【三七九】 己れ己を誡め、己れ己を檢めよ、比丘よ、斯く〔せば汝は〕自ら防護し、正念ありて、安穩に住せん。

【三八〇】 げに己は己の主、げに己は己の依所なり。されば己を調御すること、商估の良馬を〔調御する〕が如くせよ。

【三八一】 歡喜多く、佛の敎に悅べる比丘は、靜穩の地、諸行の息止・安樂を得ん。

【三八二】 比丘、年少なりとも、佛の教に精勤せば、彼此の世間を照すこと、雲間を出でたる月輪の如くならん。

〔一〕調戯乂は掉擧とも云ふ、心の浮きて落著かざる狀態を指して云ふ。〔二〕清淨なる生活を營む人を云ふ。〔三〕名色を指して云ふ。〔四〕此の身より邪思惟の水を除くを云ふ。〔五〕五下分結、欲界に屬する五種の煩惱、欲界貪・瞋・身見・戒禁取見・疑。〔六〕五上分結、色無色の上二界に屬する五種の煩惱、色界貪・無色界貪・慢・掉擧・無明。〔七〕五根、信・進・念・定・慧。〔八〕五種の著、貪・瞋・癡・慢・見。〔九〕Vassikā.

婆羅門品第二十六

【三八三】 努力して流を截ち諸欲を去れ、〔一〕婆羅門、諸行の滅を證れば、婆羅門、汝は〔二〕無爲〔の法〕を知らん。

【三八四】 婆羅門、若し〔止觀の〕二法に於て、彼岸に達する時は、此の智者の愛結は、總て盡くるに至る。

【三八五】 人に〔三〕彼岸なく此岸なく、彼此兩岸共になし、怖畏を離れ愛結を除きたる、斯の如きを我は婆羅門と呼ぶ。

【三八六】 禪思ありて離垢を求め、所作已に辨じて漏あるなく、〔四〕最上利に達せるもの、我はこれを婆羅門と呼ぶ。

【三八七】 日は晝照り月は夜輝く、武服せる刹利種は光り、禪思ある婆羅門は光る、されど佛は其の威光を以て總て晝夜に光る。

【三八八】惡業を除けるは婆羅門、行を寂にせるは沙門と稱せらる、己の(五)垢穢を棄てたるによりて、彼は出家者と稱せらる。

【三八九】婆羅門を毆つ勿れ。婆羅門は「毆たるるとも」怒を發つ勿れ。禍あれ、婆羅門を毆つものに。更に禍あれ、「毆たれて」怒るものに。

【三九〇】婆羅門若し心を其の愛好「する所」より遠ざくれば、之彼に小ならざる利益あり。「他を」害する意の消ゆる毎に、苦惱亦隨つて滅す。

【三九一】人の身にも、語にも、意にも、惡作なく、三處に攝する所ある、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【三九二】「人若し師」より「聞きて」佛の說き給ひし法を曉らば、此「の師」を敬ふこと、婆羅門の火祠を「敬ふ」が如くせよ。

【三九三】婆羅門は結鬘と姓と生とに依るにあらず、人に諦理と法とあらば彼は淸白なり、又婆羅門なり。

【三九四】愚者よ、結鬘は、汝に何「の用」かある、皮衣は汝に何「の用」かある、汝は內に愛著を「抱きて」、唯外を淨うす。

【三九五】弊衣を著たる人の瘦せて、脈管露はるるに至り、獨り林閒に「入りて」禪思せるもの、之を我は婆羅門と呼ぶ。

【三九六】(六)我は(七)「婆羅門女の」胎より出で、「婆羅門の」母より生れたるの故を以て婆羅門と呼ぶことなし。彼若し我有あらば、彼は「我を」(八)ボー爾と呼ぶの徒なり。我有なく取著なきもの、之を我は婆羅門と

呼ぶ。

【三九七】所有ゆる愛結を斷ち、怖るる所なく、著を超え繫を離れたるもの、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。

【三九八】(丸)紐と緒と索とを、之に屬するものと共に併せ斷ち、梁木を摧きたる智者、われは此の人を婆羅門と呼ぶ。

【三九九】惡罵も打擲も、監禁も怒ることなくして默受し、堪忍力ありて心猛き人、われは斯の如き人を婆羅門と呼ぶ。

【四〇〇】忿怒なく、行あり、戒あり、欲を離れ、自調して、最後身に達せるもの、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四〇一】荷葉の上なる水の如く、錐の頭なる罌粟の如く、諸欲に染せざるもの、我は之を婆羅門と名く。

【四〇二】己の苦惱の此處に滅ぶるを知り、重擔を卸し、繫縛を離れたるもの、我は之を婆羅門と稱す。

【四〇三】深智あり、賢才ありて、道非道を辨へ、最上利に到達せるもの、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四〇四】在家人にも、出家人にも、其の閒に混らず、家なくして遊行し、欲寡きもの、われは此の人を婆羅門と云ふ。

【四〇五】弱きも強きも、有情に對して刀杖を加へず、之を害ふことなく將た殺さしむることなき、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。

【四〇六】敵意ある人の閒にありて敵意なく、暴者の中にありて心溫かに、取著ある人の中にありて取著なき、之を我は婆羅門と名く。

【四〇七】人の貪と、瞋と、慢と、覆と共に落つること、錐頭の罌粟の如くなる、我は之を婆羅門と名く。

【四〇八】麁ならず、意義を含みて、眞なる語を吐き、之によりて他を怒らしむることなき、われは之を婆羅門と稱す。

【四〇九】此の世にありて、長きも短きも、小なるも大なるも、善きも惡きも、與へられざるを取ることなき、我は之を婆羅門と名く。

【四一〇】此の世にも彼の世にも、欲望あるなく意樂なく、繋縛を離れたる、我は之を婆羅門と云ふ。

【四一一】人に依處なく、智慧ありて疑惑なく、不死の極處に到れる、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。

【四一二】此處に福業も、罪業も共に「脫れて」、著を伏し、憂なく、染なく、清淨なるもの、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。

【四一三】曇りなき月の如く「心」清く、澄み、濁りなく、歡樂の心盡きたる人、我は之を婆羅門と稱す。

【四一四】此の泥途・難路・輪廻・愚癡を超え、渡りて彼岸に到り禪思ありて、欲なく、疑なく、執なくして靜穩に歸せる、我は此「の人」を呼んで婆羅門と云ふ。

【四一五】此處に諸欲を棄て、家を離れて遊行し、欲有を滅したる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四一六】此處に愛著を棄て、家を離れて遊行し、愛有を滅したる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四一七】人界の縛を棄て、天界の縛を超えたり、所有ゆる繋縛を離れたる人、我は之を婆羅門と云ふ。

【四一八】樂と非樂とを棄て、清涼に歸して、有質なく、所有ゆる世間に打ち勝ちたる勇士、我は此の人

を婆羅門と云ふ。

【四一九】總て有情の死と生とを知り、執著の念なき、善趣の智者、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四二〇】諸天も、乾闥婆も、人間も、其の行く道を窺ひ知るなし、此の漏盡の阿羅漢、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四二一】彼の過去にも、未來にも、將た中間にも、己の有とすべきものなし、我有なく取著なき、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四二二】最雄最勝の人、勇士・大仙・勝者、無欲にして學を訖りたる智者、我は之を婆羅門と呼ぶ。

【四二三】宿世を知り天界と惡趣とを見、更に生の滿盡に到り、智の極に達したる牟尼にして、總て果すべきを果したる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

〔一〕此の偈以下、偈毎に「婆羅門」の語を用ふ、是れ印度四姓中の婆羅門を指すにあらずして、煩惱を滅し惡業を除きたる人の義に用ひたるなり。〔二〕涅槃の謂なり。〔三〕法句經註解書には、彼岸此岸、彼此岸を、內の六入、外の六入、內外の六入なりと解し、アンデルゼンは、來生、此生、及び全一生なりと註し、而も疑を存せり。〔四〕阿羅漢果を云ふ。〔五〕愛欲等の諸煩惱。〔六〕以下四二三偈まで諸經要集六二〇―六四七偈參照。〔七〕生のために、母のために婆羅門と呼ぶことなし。〔八〕所謂四姓中の婆羅門族に生れたるものは世尊を呼ぶに bho（爾又は友）の語を以てせり、故に彼を稱して bhovadi（佛を呼ぶに爾の語を以てするもの）と名けたり。〔九〕紐は忿に譬へ、緒は愛に、索は六十二見に、梁木は之を無明に譬ふ、而して智者とは四諦の理を知りたる人の謂なり。

國譯法句經 終

國譯長老偈

彼の祥者、尊貴者、正遍覺者に歸命す。

(一)序偈

【一】山間の窟中に吼ゆる牙ある獅子の如き、心を修練したる〔人人〕一人一人の偈を聞け。

【二】其の名に應じ、其の姓に應じ、意嚮に順ひ、法に順ひて住する智者は懈倦なくして住しぬ。

【三】(二)終局の成就を思察する〔人人〕は處處を觀、不滅の道に達して、此の義を宣べたり。

〔一〕原典には此の題目なし。〔二〕直譯、成就したる終局の意、涅槃をいふ。

一頌品第一

第一章

【一】我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しく、天、思のままに雨を降せ、我が心は善定に住し、離脫し

たり、我は專心にして住す、「されば」天、雨を降せ。

斯く具壽須菩提長老は偈を唱へたりとぞ。

【二】寂靜に達し、止息に歸し、(一)咒神を誦し、輕噪ならず、邪惡の法を拂ふこと、風の樹葉を「拂ふ」が如くす。

斯く具壽摩訶拘絺羅長老は偈を唱へたりとぞ。

【三】如來の此の智慧を見よ、中夜に點されたる火の如し、來るものの疑を除く。「如來は」光を與へ眼を與ふるものなり。

斯く具壽(二)疑惑離曰長老は偈を述べたりとぞ。

【四】善人、識者、(三)利を見る人とのみ交を結べ、廣大、深遠にして見難く、微妙微細なる利は、精勤にして明眼なる智者、之に逮達す。

斯く具壽富樓那慈滿子長老は偈を唱へたりとぞ。

【五】御し難く、調御によりて御せられたる陀驃はよく滿足し、疑惑を超えたり、是れ勝利者にして怖畏を除きたる陀驃は寂滅を得、心安立せるが故なり。

斯く具壽陀驃長老は偈を唱へたりとぞ。

【六】比丘の、(四)寒林に赴き、獨り、滿足し、心定に住するものは勝利者なり、(五)悚懼を除き、身念を護れる堅固人なり。

斯く具壽(六)シータヴニヤ長老は偈を唱へたりとぞ。

【七】死王の軍を退くること、大水の弱き蘆の堤を〔退くる〕が如くするものは、勝利者にして怖畏を除けるものなり、是れ彼は調御あり、寂滅を得、心安立せるが故なり。

斯く具壽バッリヤ長老は偈を唱へたりとぞ。

【八】御し難く、調御によりて御せられたる勇士はよく滿足し、疑惑を超えたり、勝利者にして怖畏を除ける彼毘羅は、寂滅を得、心安立せり。

右(七)毘羅長老

【九】分別せる諸法の中に於て最勝なるものに我は達しぬ、これ我善く到れるなり、惡く到れるにあらす、我が之を度量するや邪ならず。

右畢蘭陀筏蹉長老

【一〇】(八)吠陀に通じ、寂靜に達し、自ら制して、此の世にも彼の世にも、欲望を捨てたるものは、あらゆる法のために、染せらるることなくして、世の起滅を知らん。

右プンナマーサ長老(九)

〔一〕Mantabhani マントラ卽ち神咒、明咒、咒文を誦するに堪ふるものの意にて此の人もと婆羅門なりしなり。〔二〕kankharevata. 〔三〕Attho 意、義、利、事などの舊き譯あり、リスデビッヅ夫人は good と譯す、善利と復譯すべきか、atthadassi を those who see the good とせるがファウスベルは諸經要集三八五偈にて (one) who looks for what is salutary となす、註書には hitanupassi と註するが故に利を見るものと譯し置きたり。〔四〕Sitavaniya 摩揭陀國の首都なる王舍城に近き處にある墓地なり。〔五〕Lonaa-

hamsa 身毛卓竪。〔六〕Sītavaniya 寒林に屬する、寒林に住めるなどの意あり、彼の本名はサンブータ(Sambhūta)なりしなり。〔七〕Viro 勇士の意あり。〔八〕Vedagu リスデビヅ夫人は one who hathe betw'en himself to truth 眞理に身を委ねたるものと譯し、長老尼偈二九〇偈には won the true Veda-lore と譯せり。ファウスベル氏は諸經要集中諸所に one who is accomplished とせり、此の句を如何に和譯すべきかは困難なる問題なるが、多分成熟したる人、完全熟練の人の意かと思はる、余は總ての場合、此處に同樣の譯を與へ置きたり。〔九〕以下各品の終に Uddānam (目次、摘要) を擧ぐ、皆偈頌體にして、上一品中に出たる人名又は偈を示せり、本譯にては悉く之を省きたり。

第二章

【一】佛の説示し給ひし法を喜ぶこと多きものは、(一)道、寂靜、諸行の寂滅、安樂を得ん。

右チューラ・ガヴッチャ長老

【二】智慧の力あり、戒行を有し、定に住し、禪思を樂とし、正念あるものは適量の食を食ひ、此〔の教〕にありて、貪欲を離れ、時〔の至る〕を待て。

右マハー・ガヴッチャ長老

【三】碧雲の色ありて美しく、(二)冷にして、清き水を湛へ、(三)インダゴーパカ蟲に掩はれたる此等の岩山は我を樂ましむ。

右ヴナヴッチャ長老

【四】〔我が〕師は我に語げて云へり「シーヴカ、我、此處より去らん、我が身は村里に住し、我が心

は森林に去れり、我疲倦せりと雖も去らん、識者には愛著あることなし」と。

右ヴナヴッチャ長老の〔弟子なる〕沙彌

【一五】 (四) 五〔下分結〕を斷ち、五〔上分結〕を捨て、更に五〔根〕を修練せよ、五〔著〕を超えたる比丘は暴流を渡りたる〔人〕と稱せらる。

右クンダダーナ長老

【一六】 猶ほ犂挽ける牛の優れて生善きは、行くに勞苦少きが如く、等しく安樂を得、貪欲を去りたる我は日夜を過して勞苦少し。

右ベーラッタシーサ長老

【一七】 懶惰にして飽食安眠、轉輾して臥する癡者は、供食を以て飼はるる大豕の如く、再再母胎に入る。

右ダーサカ長老

【一八】 ベーサカラー林中にありて比丘は佛の嗣續者となりき、唯骨想觀によりて此の大地に觸れたり、我が貪欲と思ひしもの、其は疾くにぞ捨てられたる。

右シンガーラピター長老

【一九】 渠工は水を導き、箭匠は箭を矯む、木工は材を曲げ、德行の人は自ら調ふ。

右クラ長老

【二〇】 我に死の怖畏なく、生の欲望なし、知覺あり正念ありて、我は積集〔の身〕を棄てん。

右阿逸多長老

〔一〕四語皆涅槃の異名。〔二〕冷なる水あり、淸き水湛ふる(池)あるの意。〔三〕Indagopaka 因陀羅卽ち帝釋天(の牛群)を保護するものの意、蟲類の一種にして、赤色又は白色なりと云ふ。〔四〕法句經三七〇偈註參照。

第三章

【一】我は畏しきを怖れず、我等の師は不滅の道を熟知したまふ。怖畏の住まることなき道、諸比丘は之によりて行く。

右尼拘律陀長老

【二】色碧にして、美しき頸あり、冠ある孔雀は、カーラヴ林中にありて叫ぶ、冷風の音聲ある彼等〔孔雀〕は、〔我が〕眠れる〔又は〕定に入れるを覺さしむ。

右チツタカ長老

【三】我(一)竹叢の中にありて甘き乳糜を喫し、好く諸蘊の起滅を思念し、心を遠離に專にして、(二)山巓を占得せん。

右ゴーサーラ長老

【四】我出家してより未だ一年に滿たず、法の善き性を見よ、我〔旣に〕三明に達し、佛の敎を成せり。

右スガンダ長老

【二五】彼の心は常に光輝より生じ、(三)〔極〕果に向ふ、(四)黒〔魔〕よ、斯の如き比丘を害せば、汝は苦惱に會ふべし。

右ナンヂヤ長老

【二六】日の親なる佛の善く説きたまひたる言教を聞きて、我は(五)微妙〔の法〕を證すること、猶ほ箭を以て毫端に〔中つる〕が如くなりき。

右無畏長老

【二七】(六)突婆草、(七)功祚草、(八)ボータリカ草、(九)憂尸羅根、(一〇)文邪草、(一一)婆羅婆草〔等〕、我は心を遠離に專にして、〔我が〕胸より〔此等の草を〕遠けん。

右ローマサカンギヤ長老

【二八】汝物〔欲を求むる〕に專心なることなきや、裝飾を樂むことなきや、(一二)戒德の香は汝の送る所にして、他の人の〔送る所〕にあらざるや。

右(一三)チャンブガーミカブッタ長老

【二九】己を矯むること、箭工の箭を〔矯むる〕が如くし、心を直くして、無明を斷ぜよ、汝ハーリタ。

右ハーリタ長老

【三〇】我が病起るや、我に正念起りぬ、「〔今〕我が病起れり、之我が放逸なるべき時にあらず」と。

右ウッチャ長老

〔一〕Veḷugumba 固有名詞なるが如し。〔二〕Sanu には絕頂、臺地、森林などの意あり、此處は、山頂に登り其處にて入定するの意、或は最上果に達するの意なり。〔三〕阿羅漢果を指す。〔四〕Kaṇha 黑の意あり、魔王を指す。〔五〕Nipuṇa 微妙。〔六〕Dabba 功祚草と同じ。〔七〕姑尸、吉祥と譯す、神草にして供犧の式に用ひたり、佛傳中に出づ。〔八〕Potakila 又 potagala とも云ふ、草の一種。〔九〕Usira は birana と名くる香草の根なり、此の譬喩は法句經三三七偈に出づ、就て見るべし。〔一〇〕Muñja 之も神聖なる草の一種なり、戰場に出るもの生きて還らざるの印として己の頭、旗又は武具に文邪草を著けたりと云ふ。〔一一〕Babbaja 粗き草の一種。〔一二〕戒より成れる香、戒之香、戒香なり。〔一三〕閻浮村の人の兒の意。

第四章

【三一】深林、大林の中に於て虻〔又は〕蚊に螫され、〔而も〕戰場に〔臨める〕象の如く、正念を失はずして其の處に住せん。

右ガフヴラチーリヤ比丘

【三二】老ゆるものを以て(一)老いざるものに〔換へ〕、熱苦あるものを以て(二)平安、(三)最上の寂靜、(四)無上の安隱に換へん。

右スッピヤ長老

【三三】〔母の〕愛しき一人兒に、慈悲を垂るるが如く、等しく總ゆる處に於て、總ゆる有情に對して、慈悲を垂れよ。

右ソーパーカ長老

【三四】智識ある人に取りては、此等の近きに在らざるものこそ常に尊きなれ、我村里より森林に來り、其より〔我が〕家に入りぬ、其より起ちて〔我〕ポーシャは告ぐることなくして去りぬ。

右ポーシャ長老

【三五】安樂を希ふものは之を行うて安樂を得ん、不死〔の境〕に達せんがために尊き、直き路なる、八種道を修習するものは、名を揚げ、譽を得ん。

右サーマンニャカーニ長老

【三六】〔我等の〕聞く所は善く、行ふ所は善く、常に住するに家なきは善し、義利を問ひ、右繞〔の禮を〕行ふ、之無一物者の沙門道なり。

右(二)クマー兒長老

【三七】自制心なきもの巡行して、諸の國に至り、定も亦之を喪ふ、巡國して何をか爲さんや、されば諍論を制して、(三)單り禪慮を凝せ。

右クマー兒長老の友〔なる某〕長老

【三八】神通を以て(四)舍勞浮河を設けたる彼の依賴心なく慾心なき牛主、此のあらゆる著を超え、生有の彼岸に到りたる大仙を、諸天は禮拜す。

右牛司長老

【三九】槍を以て刺さるるが如く、頭を燒かるるが如し、正念の比丘は貪欲を捨てんがために出遊せよ。

右帝須長老

【四〇】槍を以て刺さるるが如く、頭を燒かるるが如し、正念の比丘は生有の欲を捨てんがために出遊せよ。

右ワッダマーナ長老

〔一〕共に涅槃の異名なり。〔二〕Kunnī と呼ぶ母の兒。〔三〕A+purakkhata。〔四〕Sarabhū 恒河の支流にして、古昔沙計多(Sāketa)城の中を流れたり。長老此の河の溢るるを防ぎ止めしことあり、故にいふ。

第五章

【四一】雷は〔一〕毘婆羅山と、〔二〕槃茶婆山の岩窟に墜つ、斯の比倫なき〔佛〕の兒は、山窟に入りて禪思す。

右シリワッダ長老

【四二】〔一〕チャーラ、ウパチャーラ、シースーパチャーラ、意を用ひて住せよ、汝等の處に來れるは髮を裂くが如き人なり。

右カヂラヴニヤ長老

【四三】善く脱れ、善く脱れたり。我が三の曲れるものより善く脱れたるや善し。鎌と、犂と、小なる鋤となり。假令〔此等〕此處にあり、此處にあらんとも要なし、要なし。スマンガラ、禪慮を凝せ。スマンガラ、禪慮を凝せ。スマンガラ、精勤にして住せよ。

右(三) スマンガラ長老

【四四】 母よ、〔人は〕生きて〔而も〕見えざるもの、或は既に死したるものを嘆く。母よ、汝は我が生くるを見ながら、母よ、何故に汝は我を哭く。

右サーヌ長老

【四五】 恰も優れて生善き〔獸〕の倒れて、再び起つが如く、等しく〔正〕見を具ふる者、正遍覺者の弟子、生善き我を、佛の眞子なりと見よ。

右ラマニーヤギハーリ長老

【四六】 信心によりて我は在家を出で出家の身となり、我が正念と智慧とは增し、我が心は善定に住せり。〔魔王〕汝の好む所に隨つて〔變化〕相を作せ、〔之〕我を病ましむることなけん。

右サミッヂ長老

【四七】 覺雄、〔我〕汝に歸命し奉る、汝は一切處に於て離脫し給へり、汝の敎に住する我は無漏にして住す。

右ウッヂャヤ長老

【四八】 我在家より出でて出家の身となりし以來、卑く〔且つ〕過ある思惟〔の我に起りしこと〕を知らず。

右サンヂャヤ長老

【四九】 〔魔王、汝〕聲を揚げ、響を發すとも、我が此の心はために躁ぐことなし、是我〔心〕一境を樂

とすればなり。

右ラーマネーヤカ長老

【五〇】大地は雨に注がれ、風吹き、電は空に走る、〔我が〕疑惑は止息し、我が心は善く定に住せり。

右ギマラ長老

〔一〕Vebhara と Paṇḍava は王舍城に近く聳ゆる五峯中の二峯なり。〔二〕此等三人は長老の三姉妹の兒の出家せしものなり、一日長老病み、舍利弗來りて病を問ふ、長老遂に之を望み、偈を以て三人を誡めしなり。〔三〕此の長老の前身は農夫なりしことを思ふべし。

第六章

【五一】雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂し、我が心亦定に住す、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ。

右ゴーヂカ長老

【五二】雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂し、心は亦身に於て善定に住せり、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ。

右スバーフ長老

【五三】雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂し、此處に我精勤にして住す、されば天若し雨を〔降さん〕と欲せば〔之を〕降せ。

右ヷッリヤ長老

【五四】雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂し、我此處に第二人者なくして住す、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ。

右ウッチヤ長老

【五五】アンヂャナ林中に入り、座牀を屋舍となし、三明に達し、佛の教を成せり。

右アンヂャナーヷニヤ長老

【五六】誰人か（一）草舍中にある、草舍中なる比丘は貪欲を離れ、心を善定に住せり、汝斯の如く〔之を〕知れ、〔さらば〕汝の草舍を構へし功は空しからざるなり。

右草舍住長老

【五七】汝は此の草舍を古しと云ひ、他に新なる草舍を〔得んと〕願へりや、草舍の欲を去れ、比丘よ、新しき草舍は更に苦ならん。

右草舍住長老

【五八】信心によりて與へられたる我が草舍は樂むべく、愛すべし、我に幼女の要あるなし、汝婦女子等、汝等を要する人の處に去れ。

右（二）ラマニーヤクチカ長老

【五九】我信心によりて出家し、森林中に我が草舍を構へぬ、〔我は〕精勤熱烈にして知覺あり、正念を

失ふことなし。

右拘薩羅住長老

【六〇】我所要ありて草舍に入りしが、我が此等の思惟は成じぬ、我憍慢と惰眠とを捨て、明と解脱とを索めん。

〔一〕此の長老或日外に出でて雨に會ひ、草舍の中に之を避け、其の處にありて羅漢果を得たり、草舍の主來りて誰何せし時、長老は此の偈を以て答へたり。〔二〕可樂の草舍に屬する・住するの意。

第七章

【六一】〔自ら〕見るものは〔他の〕見る人を見、見ざる人をも亦見る、〔されど自ら〕見ざるものは〔他の〕見ざるものも、見るものも亦見ることなし。

右婆師波長老

【六二】林中に棄てられたる木屑の如く、我等は個個〔處を異にして〕森林中に住む。多くのものは我が斯の如くなるを羨むこと、恰も墮惡趣のものの生天のものを〔羨む〕が如くなり。

右伐地子長老

【六三】〔一〕死したるは墮ち、墮ちて欲心あるは又再び來る。〔我は〕作すべきことを作し樂むべきことを樂めり、安樂は安樂に隨ひ來る。

【六四】右バッカ長老

我は(二)樹の名を得たるものより生れ、(三)白旗を〔標とせるものを父として〕生ひ出でぬ、(四)旗を棄てたるにより、(五)旗によりて、我は(六)大旗を滅しぬ。

右離垢憍陳如長老

【六五】ウッケーパカタヴッチャの多年の間に蘊蓄したる所、そを〔彼は〕(七)安坐し大喜悦にして、在家人のために說示す。

右ウッケーパカタヴッチャ長老

【六六】あらゆる法門に熟通せる大雄氏は〔我がために〕教を垂れたまひ、我は其の法を聞き、樂みて〔其の〕側に住しぬ、三明に達し佛の敎を成じ覺れり。

右メーギヤ長老

【六七】我諸の煩惱を燒盡し、あらゆる生有を斷除し、生〔死〕輪廻を斷盡し〔たれば〕、今や〔我に〕再生あるなし。

右エーカダムマサヴニーヤ長老

【六八】增上心ありて放逸ならず、寂默の道に學修する智者、斯の寂靜にして常に正念あるものには、悲憂あることなし。

右エークッダーニヤ長老

【六九】我〔八〕勝一切智者の說きたまひし、大味ある大「人」の法門を聞き、不滅に到らんがために道を行ひぬ、彼は安隱の道に熟達せし人なりき。

右チャンナ長老

【七〇】此の處にありては戒こそは最第一なれ、而して智者は最上なり、人間界にも天上界にも、戒智ある人に勝利あり。

右プンナ長老

〔一〕一日乞食の後樹下に坐して食を取らんとせり、時に多くの鳶來りて長老の食を奪ひ去り、互に相爭ひしが、長老は之を見て開悟せり。〔二〕長老の母は Ambapali（菴婆波利）と呼ぶ遊女なりき、菴婆はマンゴー果樹なれば樹の名を得たるものと云ふ。〔三〕頻毘沙羅王を指す、白旗は此の王家の旗章たりしなり。〔四〕此の旗は欲を意味す。〔五〕此の旗は智慧の意。〔六〕大旗とは魔王波旬を指す。〔七〕Sunisinna 善く坐したるの意・英譯には seated in honour とす。〔八〕佛の別號。

第八章

【七一】極細微妙なる義を見、巧慧にして、行卑遜に、善く佛に事ふるを習とせるもの、斯る人には涅槃は得難からず。

右ヴッチヤパーラ長老

【七二】〔一〕猶は幼き樹の頂繁茂し、枝條生じたるは除き去ること難きが如し。我が妻を娶ることや之に等し、我を許せ、今や我出家せり。

右アーツマ長老

【七三】〔他人の〕年老い、惱み、病み、死せるを見、又壽盡に達せるを見、其より我は諸の樂しき欲を棄てて、出家して得度しき。

右マーナヴ長老

【七四】貪欲と瞋恚、昏沈と懶惰、調戲と疑惑と、總て比丘には之あることなし。

右スヤーマナ長老

【七五】修養宜しき人を見るは善く、疑は壞られ智は增す、〔彼等は〕愚者をも識者となす、されば善人の合會するは善し。

右スサーラーダ長老

【七六】起れるものの閒にありて倒れ、倒れたるものの閒にありて起れよ、住せざるものの中にありて住し、樂しむものの中にありて樂まざれ。

右ピヤンヂャハ長老

【七七】昔此の心は、望に任せ、欲に隨ひ、樂とする所に任せて流離せしが、我今日之を善く制御すること、鉤を取れるものの狂象を〔制御するが〕如くせん。

右ハッターローハブッタ長老

【七八】我〔便宜を〕得ずして、多生輪廻界を奔馳したり、〔今や〕此の苦より生ぜし我が苦蘊は抑止せら

れぬ。

右メンダシラ長老

【七九】我が貪は總て捨てられ、瞋は總て除かれ、我が癡は總て去れり、我清涼にして寂滅を得たり。

右ラッキタ長老

【八〇】我が造りたる業は、小なるも大なるも、總て斷じ盡され、今や我に再生あるなし。

右ウッカ長老

〔一〕彼に妻を娶らんとせし時、之を拒みて家を出で、得度したるなり。

第九章

【八一】昔他の生に於て我が犯したる惡業は此處に之を感ずべきなり、「されど」他に(一)素因あるなし。

右サミチグッタ長老

【八二】(二)兒よ、乞食に容易く、安全にして、怖畏なき處に往け、悲憂のために惱まさるること莫れ。

右迦葉長老

【八三】(三)獅子よ、精勤に、晝夜に懈倦なくして住し、善法を修習し、疾く積集「の身」を棄てよ。

右獅子長老

【八四】(四)終夜安眠し、晝間は會話を樂む、愚人は何時か苦惱を盡さんとする。

右ニータ長老

【八五】心像に巧に、遠離の妙味を識り、禪思あり智慧あり知覺あるものは、非世俗の樂を獲ん。

右スナーガ長老

【八六】此の〔敎の〕外なる他の多くの說者の道は、此〔の敎〕の如く涅槃に導くものにあらずと、斯く世尊師は衆を誡めたまふこと、己の掌に示すが如くしたまふ。

右ナーギタ長老

【八七】諸蘊を如實に見、あらゆる生有を壞り、生〔死〕輪廻を斷盡し〔たれば〕、今や〔我に〕再生あるなし。

右パギッタ長老

【八八】我我が身を水より陸に揚ぐるを得ず、大水に漂されつつ諦理を覺りき。

右アッヂュナ長老

【八九】泥濘を超え、魔界を遠かり、〔我は〕暴流と結縛とを脫れ、あらゆる憍慢を盡せり。

右デーヴサバ長老

【九〇】五種の蘊は知り悉され、根本を斷たれて存す、生〔死〕輪廻は斷盡せられ〔たれば〕、今や〔我に〕再生あるなし。

右サーミダッタ長老

〔一〕今後生を受くべき素因。〔二〕此の偈は迦葉長老の母、長老の遠行を送りたるなり。〔三〕之は世尊の獅子長老を誡めたまひし

偈なり。〔四〕之は世尊の二ータ長老を誡めたまひし偈なり。

第十章

【九一】我が今日享けたる「食の」如き、斯る百味の甘露食は未だ想望せざりし所なり。知見無量なる瞿曇佛は、法を說き給へり。

右パリプンナカ長老

【九二】其の漏や斷じ盡され、食に依著することなく、其の行處は空、無相、解脫なり、空を「行く」鳥の如く、其の跡を測ること難し。

右ギチャヤ長老

【九三】エーラカ、諸欲は苦なり、エーラカ、諸欲は樂にあらず、エーラカ、諸欲を求むるもの、彼は苦を求むるなり、エーラカ、諸欲を求めざるもの、彼は苦を求むるにあらず。

右エーラカ長老

【九四】世尊、釋子、吉祥者に歸命し奉る、此の最第一の法は此の最第一の達者によりて說き示されたり。

右メッタヂャ長老

【九五】我は眼を害ひたる盲者にして、長き難路を旅す、假令「路邊に」臥すとも、罪を犯せる伴とは行かじ。

右チャックバーラ長老

【九六】一本の花を［喜］捨して、八億年の閒、諸天の中に往來し、餘福によりて寂滅に歸したり。

右カンダスマナ長老

【九七】(一)價貴く、黃金と蟲脂とを以て造れる鉢を棄て、土製の鉢を取れり、是我が第二の灌頂なり。

右チッサ長老

【九八】愛想を思惟するものは、色を見て正念を忘失す、染著の心あるものは之を感受し、且つ愛執す、生有の根本を將來すべき彼が諸漏は增長す。

右アバヤ長老

【九九】愛想を思惟するものは、聲を聞いて正念を忘失す、染著の心あるものは之を感受し、且つ愛執す、輪廻を將來すべき彼が諸漏は增長す。

右ウッヂヤ長老

【一〇〇】正勤を具有し、念住を行處とし、解脫の華に覆はるる無漏［の人］は、寂滅涅槃に歸せん。

右テーヴサヴ長老

(一)彼王族より出でて出家したり。

第十一章

【一〇一】在家の生活を捨つとも、己「の務」を終へず、口を犂とし、腹を大事として懶惰なるものは、供食を以て飼はるる大豕の如く、數數胞胎に入る。

右ベーラッタカーニ長老

【一〇二】憍慢のために欺かれ、心は諸行の中に汚さる、利得と不利得とによりて「心」動著するものは、三昧に至ることなし。

右セーツッチャ長老

【一〇三】是は我が所要にあらず、我は安樂にして法味に飽けり。我は最上の第一味を喫して、毒と親交をなすことなし。

右バンヅラ長老

【一〇四】我が體は輕浮にして、大なる喜樂に觸る、我が體は風に吹かるる棉花の如くに浮ぶ。

右キタカ長老

【一〇五】厭うては住することなく、樂むとも去れ、明眼にして住するものは、斯く不利を以ては住せざれ。

右マリタヴンバ長老

【一〇六】百の標あり、百の相を有する意義の、一の標を見るものは愚者にして、百「の標」を見るものは識者なり。

右スヘーマンタ長老

【一〇七】我比量して在家を出でて、出家の身となれり、三明に達し、佛の教を成じ竟んぬ。

右ダムマサヴ長老

【一〇八】〔我〕齡百二十歲にして出家し、三明に通じ、佛の教を成就せり。

右ダムマサヴピッ長老

【一〇九】此の獨居の人は、(一)第一利濟慈愍者の教を復誦せず、彼は新に生れたる林間の鹿の如く、然く諸根を縱にして住す。(二)

右サンガラッキタ長老

【一一〇】樹は新に喜雨を灑がれて山巓に繁茂す、遠離を欲し、念を森林に掛くるウサバには、益益善事來る。

右ウサバ長老

〔一〕佛世尊を云ふ。〔二〕彼此の偈を作りて、其の同行の懈怠者を誡めたり。

第十二章

【一一一】出家は遂げ難く、在家は住み難く、法は深遠に、富は得難し、生活は艱難にして此とし彼とすべからず、常に無常を思念するぞ適はしき。

右チェンタ長老

【二二】我は三明を有し、心の安息に巧なる大禪定家なり。我「既に」己利に達し、佛の教を成ぜり。

右ヴッチャゴッタ長老

【二三】清みたる水あり、大なる磐石あり、黑面猿と鹿と羣り、水「草」セーヴーラに覆はる、此等の岩山は我をして樂ましむ。

右ヴナヴッチャ長老

【二四】「在家の」生活を捨つるとも、身の長大を重しとし、肉身の安樂を貪るものに、如何で沙門の好事あるべき。

右アヂムッタ長老

【二五】(一)數多の(二)クタヂャ樹と(三)サルラキー樹とある山、名高く聞え、「綠林に」覆はるる獵夫山のために、彼は「極果に」送られたり。

右摩訶那摩長老

【二六】六の觸處を捨て、「六根」門を護り、よく自ら制し、邪惡の根本を斷ちて、我は漏盡に達せり。

右パーラーパリヤ長老

【二七】能く塗粧し能く服裝し、あらゆる嚴身の具を著け飾れる「在家の身にして」、我は三明を獲、佛の教を成就せり。

右耶舍長老

【一八】齡の頽ることは恰も教令に出づるが如く、彼の女の形色は他〔の形色〕の如くなり、家を離れて住せしことなき此の正念の人、己を追憶すること、他を〔追憶するが〕如し。

右金毘羅長老

【一九】樹蔭を占得せよ、涅槃を胸臆に沈めよ、瞿曇、禪思せよ、放逸なることなかれ、汝空噪して何をかなさん。

右伐地子長老

【二〇】五蘊は了知せられ、〔其の〕根本は斷じ盡されたり、苦惱の滅盡に達し、我は諸漏の斷滅に到れり。

右イシダッタ長老

〔一〕彼出家を厭ひて山を攀ぢ崖より身を投ぜんとせし刹那、此の偈を誦し頓て極果に達しき。〔二〕Kutaja 瓶生と直譯すべし、Girimallika 山鬘と云ふ樹の名なり。〔三〕Sallaki 樹名、象は好みて食すと云ふ、Indasāla 因陀羅沙羅とも云ふ。

二頌品第二

第一章

【二一】有に常住なるものなく、又行に常恆なるものなし、此等諸蘊は生起し、順次に壞滅す。

【二二】此の患難を知りて、我は生有を求めず、あらゆる欲より離れて、我は漏盡に達せり。
具壽鬱多羅長老は斯の如く偈を唱へたりとぞ。

【二三】此〔の生活〕は制度なき生活にあらず、食は〔我が〕胸に近づく〔る所〕にあらず、〔されど〕身は食によりて住立することを辨へて、〔我〕乞食に赴く。

【二四】是れ〔賢者は〕在家の禮拜供養は、之を淤泥なりと知りたればなり、細き箭は之を拔くこと難く、惡人の恭敬は之を捨つること難し。
具壽なる賓頭羅跋羅墮闍長老は斯の如く偈を唱へたりとぞ。

【二五】(一)猿あり五の戶ある家に入りて、ムフンムフンと叫びつつ、戶戶を廻り歩く。

【二六】猿よ、立て、走ることなかれ、是れ汝〔今は〕曩にありけるが如くあらざるべきが故なり、汝智慧によりて制せらる、之よりして汝は遠きに到ることなけん。
右ヷルリヤ長老

【二七】恆伽河の岸邊に於いて、我三多羅葉の茅舍を構へたり、我が鉢は屍に〔乳を〕灑ぐの器、又た衣服は襤褸なり。

【二八】兩雨安居の閒、我は唯一語を發せしのみ、第三雨安居の閒に、〔我〕闇蘊を破れり。
右恆河岸住比丘

【二九】假令人三明あり、死を捨て漏を盡せりとも、愚者無智者は、之を少智者なりと〔云ひて〕輕視す。

【三〇】人の此の世に於て飲食を得るものは、彼假令邪法の徒なりとも、此等のために恭敬せらる。

右アヂナ長老

【三一】我師の〔法を〕說き給ふを聞きし時、一切智を具し、〔他に〕敗らるることなき人に對して、疑惑を懷かざりき。

【三二】隊商を導く人、大雄氏、御者中の最勝なる人、道、行路〔等〕の上に於て我疑惑する所なし。

右メーラヂナ長老

【三三】惡く葺きたる屋舍は、雨の之を侵すが如く、修練せざる心は、貪欲之を侵す。

【三四】善く葺きたる屋舍は、雨の之を侵すことなきが如く、修練したる心は、貪欲之を侵すことなし。

右ラーダ長老

【三五】我が生は盡され、勝者の敎は成ぜられ、羅網と稱せらるるものは壞られ、生有を引くものは除かれたり。

【三六】我、彼の利益のために、在家を出でて出家得度せしが、今此の利益、〔即ち〕あらゆる纏結の滅盡に達したり。

右スラーダ長老

【三七】婦女に囚はるることなき牟尼は、睡ること安樂なり、常に防護の要ある輩の間には、正理を得ること難し。

【一三八】欲、我等汝を戕賊せん、今や汝に負ふ所なし、今我等は行きて悔ゆることなき涅槃の地に行かん。

右瞿曇長老

【一三九】彼〔媒鳥〕先には己を害ひ、後には他を害ふ、鳥は媒鳥のために、己を害ふこと甚し。

【一四〇】婆羅門は外に色あるにあらず、婆羅門は内に色あり、(二)善生の主よ、罪惡業のあるもの、彼は實に黑者なり。

右ヴサバ長老

〔一〕猿な心又は意識に譬へたるなり。〔二〕善生 Sujā は帝釋天の配なり、よりて帝釋天を善生の主と云ふ。

第二章

【一四一】聞欲は聞を增長し、聞は智によりて增加す、智慧によりて義を知り、義を知れば安樂を齎す。

【一四二】邊土の坐臥を樂み、纏縛の離脫を行へ。若し此の處に歡樂を得ずんば、己を防護せる正念の人〔として〕僧伽の中に住せよ。

右マハーチュンダ長老

【一四三】麤暴を行ふ輩は、種種の暴力によりて人を惱まし、彼等亦同じく〔他に〕惱まさる、是れ業は滅ぶることなければなり。

【一四四】善にても惡にても、人若し業をなさば、彼は一一なしたる業の相續者となる。
右チョーチダーサ長老

【一四五】晝夜は過ぎ行き、生命は喪はる。生者の命の滅ぶることは、恰も小河の水の如し。

【一四六】然るに罪惡業を造りて愚者は覺らず、後に至りて彼に辛苦あり、是れ其の果は惡なるが故なり。
右ヘーランニャカーニ長老

【一四七】大海の上に於て、少量の木材に乘りては沈むが如く、同じく懈怠〔の人〕に依る時は、〔己〕假令善生活の身なりとも沈む、されば彼の懈怠にして精進乏しきものを避けよ。

【一四八】〔世間を〕遠かれる聖者、專心なる禪思者、常に精進發憤せる識者と共に住せよ。
右ソーマミッタ長老

【一四九】人は人に縛せられ、人は人に依る。人は人に害はれ、人は人を害ふ。

【一五〇】人彼に取りて何の要かある、或は〔假令〕生み出せる人たりとも、多の人を害ひ行く人を擯けよ。
右サッバミッタ長老

【一五一】大にして烏の〔如き〕色せる(一)パーリー婦は股骨を折りて、又股骨を〔折り〕、腕骨を折りて、又腕骨を〔折り〕、髑髏を切りて酪器の如くし、〔己〕篤信にして坐す。

【一五二】無智にして(二)有質を作るもの、〔此の〕愚者は再再苦に逢ふ、されば有情の有質を作ることなかれ、我は再び頭〔骨〕を切られて臥することなけん。

右マハーカーラ長老

【一五三】髪を剃り僧伽梨衣を纏ひ、飲食衣服、臥具を得るものは、數多の敵を獲。

【一五四】恭敬に此の患難あり、大怖畏あることを知りて、比丘は得ること少く欲なく、正念にして遊行せよ。

右チッサ長老

【一五五】(三)東竹林にある、友なる諸釋子等は、莫大なる富を捨て、遺穗を鉢に受くるを樂とす。

【一五六】精進を發し、專心にして常に堅固に勇猛なるものは、世俗の樂を捨てて、法樂を樂む。

右金毘羅長老

【一五七】我正しく思惟せざりしよりして、莊飾を專としき。輕浮にして動き易く、貪欲のために惱まされき。

【一五八】善巧方便の日の親、覺者に遇りて、正しく行修し、我心を生有より拔き去りき。

右難陀長老

【一五九】己定に住せざるに、他人は之を讚歎せば、他人の讚歎するは當らず、是れ「彼」自ら定に住せざるが故なり。

【一六〇】己善定に住せるに、他人は之を誹謗せば、他人の誹謗するは當らず、是れ「彼」自ら善定に住すればなり。

右シリマー長老

〔一〕カーリーは墓場に火葬の事を司れる婦人なり、彼女マハーカーラに兩腿兩腕及び髑髏を與へ、已も其の側に來りて坐したるなり。〔二〕Upadhi, a substratum of being, cause for life, germs of renewed life 等の英譯を與ふ、漢譯にては現相、有餘、受身などの文字を宛てたるを見る、生有の素の意にて未來の生有を作るべき煩惱を指す。〔三〕pātinavaṃsadāya.

第三章

【一六一】我諸の蘊を識知し、我渇愛を根絕し、我覺分を修習し、我諸漏の滅盡に達せり。

【一六二】我諸の蘊を識り、欲を拔き、覺分を修習し、無漏にして涅槃に入らん。

右鬱多羅長老

【一六三】〔一〕彼の王名をバナーダと呼び、其の宮殿は黃金を以て造り、橫に十六〔室〕の區劃あり、高は之に千倍なりといへり。

【一六四】千の楷段あり、百の門戶あり、玻璃製の戶牖あり、此處に六千を七倍せる數の乾闥婆は舞ひき。

右バッダチ長老

【一六五】正念あり智慧あり、力ある精進を發したる比丘、〔卽ち〕我は五百劫時を、一夜の閒に追憶しき。

【一六六】四念住・七〔覺分〕と、八〔支聖道〕とを修習しつつ、我は五百劫時を、一夜の閒に追憶しき。

右ソービタ長老

【一六七】堅き精進によりてなすべきこと、覺らんとする欲によりてなすべきこと、我は〔之を〕なして誤ることなけん、〔我が〕精進勇猛を見よ。

【一六八】汝又我に道、無滅〔涅槃〕に屬する道を語げよ。我(三)智によりて〔涅槃を〕知ること、恆伽河の大海に〔歸するが〕如くせん。

右ヴッリヤ長老

【一六九】我が髮を理めんとて、髮師は我が處に來り、其より我鏡を取りて、身體を觀察しき。

【一七〇】身は空虛なりと見え、暗黑界の闇は去れり。あらゆる被服は破られて、今や〔我に〕再生あらず。

右ギータソーカ長老

【一七一、一七二】安穩〔の地〕に達せんがために、五の障蓋を捨て、己の知見たる、法の鏡を取りて、此の身の內外、總て觀察しき、內にも外にも、身は空虛なりと見えにき。

右プンナマーサ長老

【一七三】猶は生善く優れたる馬の、倒れて起き驚動する所多くして、〔而も〕元氣を喪はず、重荷を運ぶが如し。

【一七四】同じく見識を具へ、正徧覺者の弟子となれる我を、生善き佛の自子なりと見よ。

右難陀迦長老

【一七五】來れ、難陀迦、師の側に赴かん、最勝佛の面前に於て、獅子吼をなさん。

【一七六】牟尼は我等の慈愍の故に、我等を出家せしめたまひき。我等は此の利益に達し、あらゆる結縛を滅盡にせり。

右バラタ長老

【一七七】戰に勝てる智ある勇者は、魔王と其眷屬とに併せ克ちて、獅子吼すること、山窟中の獅子の如し。

【一七八】我師に奉事し、法と僧とを恭敬しぬ。我〔三〕又兒の煩惱を除けるを見て、歡喜と滿足とを得たり。

右婆羅墮闍長老

【一七九】善良の士に事へ、常に法を聽けり。聞きて不滅の道を踏み行かん。

【一八〇】正念にして生欲を捨てたる我には、生欲は再びあらじ。「先に」我に生欲あらざりき、「未來にも」なけん、今も我に之あらず。

右カンハヂンナ長老

〔一〕此の兩偈は此の王在俗時代の事を述べたるなり。〔二〕或は默によりて默に歸すること。〔三〕彼の兒カンハヂンナ Kanhadinna は彼に先ちて出家し既に羅漢果に達し居たり。

第四章

【一八一】我正徧覺者の敎に於て、出家して以來、解脫を得て向上し、欲界を超越したり。

【一八二】〔佛〕淨梵士は〔我〕を監視したまひ、其より我が心は離脱しぬ。あらゆる結縛を斷じ盡せしが故に、我が解脱は確實なり。

右ミガシラ長老

【一八三】㈠無常なる小屋、處處に、造營せらるること再再なり、㈠屋舍の工人を求めて、我轉た苦の生〔を經たり〕。

【一八四】㈡屋工、汝今看出さる、再び家を構ふることあらじ、總て汝の桷材は破られ、屋頂は又碎かる、心は〔其の〕生起を遮られ、此の處に於てこそ消散せめ。

右シヷカ長老

【一八五】此の世界の阿羅漢、善逝、牟尼は風のために惱まされてあり、若し溫水あらば、婆羅門、〔之を〕牟尼に供せよ。

【一八六】供養すべきものに供養せられ、尊重すべきものに尊重せられ、禮敬すべきものに禮敬せらるる、彼〔の牟尼の〕㈢風氣〕を我は除き奉らんと欲す。

右ウバヷーナ長老

【一八七】我〔陽に〕法を持ちて「諸欲は無常なり」と說ける諸の信男子を見たり、彼等摩尼珠の環や、兒や、妻やに憧れつつ、強く欲望す。

【一八八】實に彼等は如實に法を知らず、〔而も〕また「諸欲は無常なり」と云へり、彼等には染著を破るべ

き力あらず、故に〔彼等は〕妻子と財寶とに頼れり。

右イシヂンナ長老

【一八九】雨降り雷鳴り、我は獨恐しき凹地に住す、此の獨凹地の中に住せる我に、怖畏なく驚悸なく、〔我が〕身毛竪立するなし。

【一九〇】我が獨恐しき凹地に住して、怖畏なく驚悸なく、〔我が〕身毛の竪立するなき、之我が性なり。

右サンブラカッチャーナ長老

【一九一】何人か其の心端立して磐石に喩ふべく震動するなく、染著すべきものの中にありて染を離れ、怒るべきものに對して怒ることなきや、彼が心斯の如く修練せるが故に苦何處よりか來らん。

【一九二】我が心は端立して磐石に比すべく震動するなく、染著すべきものの中にありて染を離れ、怒るべきものに對して怒ることなし、我が心斯の如く修練せるが故に苦何處よりも來るなし。

右キタカ長老

【一九三】(三)夜の星宿の鬘〔を以て飾らるる〕は、眠るがために來らず、斯る夜は智ある人の、驚覺するがためなり。

【一九四】若し〔我が戰に出でて〕象背より墜ちたるに、象は獨り進み行くとせば、我は敗れて生きんよりは、戰場に死するぞ勝れる。

右ボーチリヤの兒なるソーナ

【一九五】喜ぶべく樂むべき、五種の欲を捨て、信心によりて出家し、苦を盡すものとなれ。

【一九六】我死を歡ばず、生を歡ばず、〔唯〕我知覺あり正念ありて、時〔の到る〕を待つ。

右ニサバ長老

【一九七】我菴羅の新芽に似たる衣服を肩にし、象の首に騎りて受食のために、村落に入れり。

【一九八】其の時我象背より降りて動轉せり、其の時、憍慢なる我は善良となり、諸漏の滅盡に達しぬ。

右ウサバ長老

【一九九】（四）カッパタクラは「之は〔我が〕襤褸衣なり」と〔云ひ〕、極めて重き衣服〔を著けて〕、甘露の雨を〔灑ぎて〕法を行へるのみ、禪を修せんがために道を行ふことなし。

【二〇〇】汝カッパタ、坐睡することなかれ、汝の耳朶を打つことをなさじ。カッパタ、汝は僧伽衆の中に坐睡して、量を辨知するなし。

右カッパタクラ長老

〔一〕小屋、屋舍は吾人の身を指し、工人とは渇愛を指す。〔二〕Vātabādha 前偈にいへる風のために惱さるる病、風邪、風氣或は僂痲質斯、痛風の類。〔三〕二偈中一偈は釋尊の唱へてソーナを誡めたまひしなり。〔四〕此の二偈は世尊の唱へてカッパタクラ比丘を誡めたまひしものなり。

第五章

【二〇一】 (一)不思議なる哉諸佛、不思議なる哉諸法、不思議なる哉我が師の成就したまひし所、「佛の」弟子は此處に於て斯の如き法を證せん。

【二〇二】 無數劫の閒に於て、己身を獲得せしこと「無數」、其の中にて之は最後「身」なり、此の積集心「此の」生死輪廻は最後のものにして、今より更に生あることなけん。

右クマーラ迦葉長老

【二〇三】 年少なりとも心を佛の教に專にし、睡れる者の中にありて、覺めてありなば彼の生活や空ならず。

【二〇四】 されば智者は諸佛の教を思ひ、心を信と戒と(二)靜穩と法見とに專にすべし。

右護法長老

【二〇五】 何人の諸根か寂靜に歸すること、御士に善く馴らされたる馬の如くなる。慢を棄て漏結を盡したる、此の斯の如き人は諸天の羨む所なり。

【二〇六】 我が諸根は寂靜に歸すること、御士に善く馴らされたる馬の如くなり、慢を棄て漏結を盡したる、此の我は諸の天人にも羨まる。

右ブラフマーリ長老

【二〇七】 (三)膚あしく心よろしきモーガラージャよ、汝常に安定に住す。比丘よ、雪降る寒季の夜は、汝如何にか起居せる。

【二〇八】摩揭陀［國］は總て穀物に滿てりと我は聞けり。他處にて安樂に住する人［の家］よりも、我が藁にて葺きたる［家］ぞ可き。

右モーガラーヂャ長老

【二〇九】［自ら］得得たるなく、他を輕んずること莫れ、彼岸に達せる人を賤まず、困めず、羣集の中にありては虛浮ならず、言靜かに、行善く、己の讃言を口にすること莫れ。

【二一〇】極細微妙なる義を見、巧慧にして行卑遜に、善く佛に事ふるを習とするもの、斯の如き人には涅槃は得難からず。

右パンチャーリの兒なる毘婆佉長老

【二一一】よき冠あり、よき翼あり、よき青き頸あり、よき嘴あり、よき音聲を有てる孔雀は叫ぶ、此の大地はよく草生ひ、且つよく水に浸され、空はよく雲に［覆はる］。

【二一二】意よき人の健かなる身體と、禪思する人の、佛のよき敎に於てよく出家したるはよし。此の極淨白、微妙、難見、最上なる不滅の道を（四）獲よ。

右チューラカ長老

【二一三】歡びつつ徘徊する心は、杭木の立てる［處］、杭木と粗朶との存する處にのみ行く。

【二一四】心、我は汝を邪惡と呼び、心、我は汝を非運と呼ぶ、汝の師の得たる所は得難し、我を非利に陷るることなかれ。

右アヌーパマ長老

【三五】闇昧なる凡夫は、諸趣の間に輾轉しつつ、聖諦を見ずして、長時輪廻したり。

【三六】我が精勤なりしや、輪廻は毀たれ、あらゆる生趣は除滅せられ、今や更に生れ出ることあらじ。

右ヴッヂタ長老

【三七】阿說他〔樹の下〕青〔草〕光あり、樹鬱茂せる所に於て、我正念にして、一の佛念想を得き。

【三八】今より三十一劫以前、我〔一の〕念想を得たりしが、此の念想を以て住せしよりして、我が漏結の滅盡に達せり。

〔一〕Aho 驚愕、驚異、苦悶、悲哀、讃歎其他の感情を言ひ表す間投詞的不轉語。〔二〕Pasāda リス・デビツ夫人は諸佛の吾人に齎せる祝福と譯せり。〔三〕此の長老の體に腫物の類出來たり。〔四〕接觸せよ。

三頌品第三

【二九】實なき清淨を索め、我林間にありて火神に奉事しぬ。清淨の道を知らずして、我天神のために苦行を行ひぬ。

【三〇】我安樂〔の道〕によりて此の安樂を得ぬ。見よ法の良き性を、〔我〕三明に通達し、佛の教を成ぜり。

【三一】先には我(一)梵親にてありしが、今は(二)婆羅門なり、三明ある(三)洗浴者なり、(四)吠陀に通せる(五)

闍者なり。

右アンガニカバーラドヷーヂャ長老

【二二二】我出家してより五日、有學にして未だ阿羅漢果に達せず、精舍に入るや、心に誓願起りぬ。

【二二三】我愛の箭を拔かずしては、食はじ、飮まじ、精舍を出でじ、脇を〔著けて〕臥することをもなさじと。

【二二四】此の斯の如くして住せし、我が精進勇猛を見よ、三明に通達し、佛の敎を成就したり。

右バッチャヤ長老

【二二五】人の先に爲すべきことを、後に至りて爲さんと望むもの、彼は安樂の地より落ち、後又悔ゆ。

【二二六】爲さんとすること之を言ひ、爲さんとせざること之を口にせざれ。爲さずして〔唯〕言ふものを、識者は知る。

【二二七】實にも極安樂なるは、正徧覺者の說き示し給ひし涅槃なり、憂なく貪なく安穩にして、此處には苦滅びて〔存せず〕。

右バークラ長老

【二二八】沙門の道に希望あるもの、安樂に生活せんと願はば、僧伽に屬する衣服と飮食とを、輕視することなかるべし。

【二二九】沙門の道に希望あるもの、安樂に生活せんと願はば、坐臥處を見ること、蛇若くは鼠の穴の如

くすべし。

【三〇】沙門の道に希望あるもの、安樂に生活せんと願はば、一一を以て足れりとし、一の法を修習せよ。

右ダニヤ長老

【三一】極て寒く極て暑く、極て遲しと〔云ひて〕、青年の業を放棄したるに、機會は過ぎ去れり。

【三二】寒と暑とを見ること、草〔を見る〕にも及ばずして、丈夫の義務をなすもの、彼は安樂より遠ざかることなし。

【三三】突婆草、功祚草、ホータキラ草、憂尸羅根、文邪草、婆羅婆草〔等〕、我は心を遠離に專にして、〔我が〕胸より〔此等の草を〕遠けん。(六)

右マータンガ兒長老

【三四】巧説多聞なる沙門の、波吒梨子城に住せるもの、其等の一なり、此の門邊に立てる長壽者クッチヤソービタは。

【三五】巧説多聞なる沙門の、波吒梨子城に住せるもの、彼等の中の一人なり、此の風に支へられて門邊に住まれる長壽〔僧〕は。

【三六】善く戰ひ、善く犧を供し、又戰に勝ち淨行を行ひ、斯の如くして安樂增長す。

右クッチヤソービタ長老

【二三七】此處に人間の中にありて、他の生類を害ふもの、此の人は此の世、又彼の世の兩處より墜つ。

【二三八】又慈愛の心を以て、あらゆる生類を愍むもの、此の斯の如き人は、多くの善業を積む。

【二三九】善く語ることを習ひ、又沙門の奉事すること、竊に獨坐すること、又心を安靜にすることを〔習へ〕。

右ヴーラナ長老

【二四〇】此處に信心なき諸の親族の中に、一人にても信心あり知慧あり、法に立ち戒を持てるもの〔あるは、これ〕親族の利益のためなり。

【二四一】我慈愛よりして、親族等を制し之を詰責したり、親族の愛心よりして、比丘衆の中に事を行へり。

【二四二】彼等は過ぎ去れり逝けり、彼等は天界の安樂を獲たり、我が兄弟と母とは、諸欲を享くるものとして樂めり。

右バッシカ長老

【二四三】四肢はカーラー樹の結節の如く、痩せて脈管現る、飲食に量を知る人は、心貧しきことなし。

【二四四】深林大林の中にありて、虻〔又は〕蚊に螫され、〔而も〕戰場に〔臨める〕象の如く、正念を失ふことなくして其に堪へん。

【二四五】單なる時は恰も梵王の如く然り、二人なれば天人の如く、三人なれば村の如く、之に過ぐれば

〔猶ほ〕諍鬪の如し。

右(七) ヤソーヂャ長老

【二四六】先に汝の身にありし所の信心、今日汝に之あらず、汝にあるものは汝の有なり、〔之〕我が惡行にあらず。

【二四七】信心は常なくして動搖すと、斯の如く我は之を見たり。〔人は〕好愛し〔更に〕厭嫌す、牟尼、如何で之がために老い〔朽つ〕べきぞ。

【二四八】牟尼の食は、少しづつ家毎に調理せらる、我受食のため少づつに遊行せん、我に〔尙ほ〕脚の力あり。

右サーチマッチ長老

【二四九】信心によりて世を棄てたる、新得度の新參者は、善友の清淨に自活し、懈倦なきものに交れ。

【二五〇】信心によりて世を棄てたる、新得度の新參者、大衆の中に住める賢智の比丘は戒律を學ぶべし。

【二五一】信心によりて世を棄てたる、新得度の新參者は、作すべきこと作すべからざることを熟知して、單遊行すべし。

右優波利長老

【二五二】我は識者たり、利益を思求すること既に足れるものなりしが、世の迷惑たる五種の欲は、我を倒しぬ。

【二五三】我魔〔王〕の領域に入り、堅く箭に刺されて、〔而も〕能く死王の網より、脱るることを得たり。

【二五四】我あらゆる欲を捨て、あらゆる生有を破り、生〔死〕輪廻を斷じ盡し〔たれば〕、今や再び生るることあらじ。

右ウッタラバーラ長老

【二五五】聞け、總て此處に集り來れる諸親族、我汝等のために法を說かん、再再生を受くるは苦なり。

【二五六】〔精勤を〕發せ、出離せよ、心を佛の敎に傾けよ、魔軍を摧くこと、象の葦の家を〔摧く〕が如くせよ。

【二五七】此の敎に於て、精勤にして住するものは、生〔死〕輪廻を捨てて、苦惱の際を盡さん。

右アビブータ長老

【二五八】我流轉して泥犂に赴き、再再また餓鬼世界に入れり、苦〔趣〕に畜生道に、我が住みしこと一再ならず〔且つ〕久しかりき。

【二五九】また人〔界〕の生を喜び、稀に天界に入り、色界に無色界に、非無想處に非有想處に居れり。

【二六〇】我〔あらゆる〕生成〔の法〕の精質なく、造作にして、動轉し、常に浮動することを了得せり。之を了得し我正念にして、自ら生ぜる寂靜を獲たり。

右瞿曇長老

【二六一】人の先になすべきことを、後に至りてなさんと希ふもの、彼は安樂の地より落ち、又後に至り

て悔ゆ。

【二六二】なさんとすることは之を言ひ、なさざることは之を言はざれ、なさずして言ふものをば、識者は之を知る。

【二六三】正偏覺者の說かせ給ひし涅槃は、實にも極安樂なり、憂なく著を離れ安穩にして、此處には苦惱滅して［存せず］。

右ハーリタ長老

【二六四】惡友を擯け、上上の人と交れ、動なき安樂を願ひ、彼の誡むる所に止まれ。

【二六五】大海の上に於て少量の木材に乘りては沈むが如く、同じく懈怠［の人］に依りては、［己］假令善生活の身なりとも沈む、されば彼の懈怠にして精進乏しき［人］を擯けよ。

【二六六】［世間］を遠かれる聖者、專心にして禪思し、常に精進發憤せる、識者と共に住せよ。

右ギマラ長老

〔一〕Brahmabandhu 唯生によりて婆羅門たるものの意にて、婆羅門に對する輕蔑の語なり。〔二〕Brahmana.〔三〕nhātaka.〔四〕Vedagu.〔五〕Sotthiya.〔六〕二七偈註參照。〔七〕Yasoja 名稱生。

四頌品第四

【二六七】［身を］裝飾し美衣を纏ひ、栴檀木［を以て］彩りたる舞女は、大道の［羣衆の］中に、五樂に合し

て舞ひき。

【二六八】我乞食のために入城し、往きて此の〔婦の〕身を裝飾し美衣を著け、宛然死網に繫れるが如くなるを見ぬ。

【二六九】それより、我に正思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。

【二七〇】其より我が心は解脫しぬ、法の善き質を見よ、我三明に通達し、佛の教を成ぜり。

右ナーガサマーラ長老

【二七一】我隨眠のために屈せられ、精舍を出で、經行處に上り、其處に地上に倒れぬ。

【二七二】肢體を摩でつつ、再び經行處に上り、內心安定に住して、我は經行處に經行しぬ。

【二七三】それより、我に正思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。

【二七四】其より我が心は解脫しぬ、見よ法の善き質を、我三明に通じ、佛の教を成就したり。

右バグ長老

【二七五】(一)「我等は此處に滅ぶるものなり」と、愚者は之を覺らず、人若し之を覺れば、其よりして爭息む。

【二七六】人無智なる時は、〔則ち〕滅せざるものの如く振舞ふ、法を知るものは、病者の閒にある無病者〔の如し〕。

【二七七】放逸なる行爲、汚れたる禁戒、猶豫して行ひたる梵行、之は〔共に〕大果報を齎すものにあらず。

【二七八】同じく梵行〔を修する〕者の中に、尊敬を得ることなくば、彼正法より遠かること、空と地との如し。

右サビヤ長老

【二七九】滿ちて、惡臭あり、魔〔王〕の所屬にして、欲に充ちたる〔此の身は〕災なる哉、汝の身には九箇の孔あり、常時此より流出す。

【二八〇】古人を輕ずることなかれ、如來を惑すことなかれ。天上に於ても彼等は染著することなし、如何に況や人閒に於てをや。

【二八一】人の愚にして、邪智あり邪意ありて、愚癡に覆はるるもの、斯の如き人は、此處に魔王の投せる結縛に染著せん。

【二八二】貪欲と瞋恚と、無明とを遠ざけたるもの、斯の如く絲を斷ち縛を解けるものは、此處に染著することなし。

右サンダカ長老

【二八三】五十有五年の閒、我〔身に〕塵泥を塗り、月一回の食を喫し、鬚髮を拔きたりき。

【二八四】一脚にて立ち、臥牀を用ひず、若くは乾きたる糞を喰ひ、または〔己に〕充てられたる〔施食〕を受けざりき。

【二八五】我惡趣に導くべき、斯る多く〔の業〕を造り、大水に漂はれて、佛に歸依し奉りき。

【二八六】〔我が〕歸依を見よ、法の善き質を見よ、〔我〕三明に通達し、佛の敎を成就したり。

右チャンブカ長老

【二八七】我が(三)頗勒窶那の月に、伽耶城に來り、正徧覺者の最上の敎を、說きたまへるを見たるは實に宜しかりき。

【二八八】〔佛は〕大光明ある羣集の師、最上位に到れる導者、人天兩界の勝者、見比倫なき〔人なり〕。

【二八九】大龍象・大雄士、大光輝ありて漏結なく、あらゆる漏結を盡し、何處にも怖畏を有たざる師なり。

【二九〇】永く〔塵垢に〕汚され、〔邪〕見の繩に縛せられたる我セーナカを、彼の世尊はあらゆる纏結より脫れしめたまひぬ。

右セーナカ長老

【二九一】徐徐たるべき時に當りて急ぎ、急ぐべきに當りて徐徐たる、〔此の〕愚者は〔其の〕處理正しからざるによりて、苦惱を受く。

【二九二】此の人の利益の減損すること、恰も黑分の月の如く、彼は恥辱を蒙り、又朋友のために惱まさる。

【二九三】徐徐たるべき時に當りて徐徐たり、急ぐべきに當りて急ぐもの、斯る識者は、〔其の〕處理正しきによりて、安樂を獲。

【二九四】此の人の利益の增長すること、恰も白分の月の如く、彼は名聲・稱譽を獲、朋友のために惱さ

るることなし。

右サンブータ長老

【二九五】「羅睺羅跋陀は雙〔榮〕を具有す」と、智者は我を〔稱す〕、我は佛の兒にして、又諸法の上に眼を具ふるものなり。

【二九六】我が漏は斷じ盡され、今はまた更生なく、奉施の價ある阿羅漢にして、三明を具し、無滅〔涅槃〕を見たるものなり。

【二九七】諸欲に盲せる徒輩は、〔邪〕網に覆はれ、愛の覆蓋に覆はれ、放逸の縛に縛られ、恰も筌の中の魚の如くなり。

【二九八】我は此の欲を捨て、魔の縛を解き、愛を根本より拔きて、我は淸涼寂靜となれり。

右羅睺羅長老

【二九九】黃金を以て〔身を〕覆ひ、侍婢の羣に圍まれ、脇に兒を抱きて、妻は我に近き來りぬ。

【三〇〇】此の近き來れる我が兒の母の、身を飾り、美服を著け、死網に繋れるが如くなるを見。

【三〇一】其より我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。

【三〇二】其より我が心解脫を得ぬ、見よ、法の善き質を、我三明を逮得し、佛の敎を成就したり。

右チャンダナ長老

【三〇三】法は定て法行者を護り、善く修したる法は安樂を與ふ、之善く法を修行したる功德なり、法行

者は惡趣に陷ることなし。

【三〇四】法と非法と、雙者には同一の果報あらず、非法は〔人を〕泥犁に導き、法は善道に至らしむ。

【三〇五】されば諸の法に對して喜悅の心を起せ、と斯の如く善く來れることを喜び、法に住立せる尊善逝の弟子の賢にして、最尊最上の歸依をなせるものは〔斯の如く〕指導せらる。

【三〇六】惡瘡の根を斷ち、愛の網を破れり、彼輪廻を盡し〔たれば〕、一物として礙へざること、猶ほ十五日滿月の夜の月の如し。

右ダムミカ長老

【三〇七】淸白〔の翼〕に包まるる鶴の黑き雲に畏れ怖ぢて、避難の處を索め、避難の處に逃れんとす、其の時アヂャカラニー河は我をして娛ましむ。

【三〇八】淸淨純白の鶴の黑き雲に畏れ怖ぢて、所止處を索めて、之を見出さず、此の時アヂャカラニー河は我をして娛ましむ。

【三〇九】此處に此の雨〔岸〕なる閻浮樹は何人をか娛ましめざらん、〔樹は〕大巖窟の背後なる河岸を美うす。

【三一〇】(三)蛇群より脫れたる此等の蛙は徐に鳴いて云ふ、「今日は山の小川より移り住むべき時にあらず、アヂャカラー河は安穩、安全にして甚だ樂むべきなり」と。

右サッバカ長老

【三一】我生活の要ありて出家し、具足戒を受け、其より信心を獲、強く精勤し勇進しぬ。

【三二】欲を壞れよ、此の身より肉片を除去せよ、兩膝の關節よりして、我が脚は落ちよ。

【三三】我愛の箭を拔かずしては、食はじ、飲まじ、精舍を出でじ、脇を〔著けて〕臥することもなさじと。

【三四】此の斯の如くして住せし我が精進勇猛を見よ、我三明に逮達し、佛の教を成就せり。

右ムヂタ長老

〔一〕法句經六偈註參照。〔二〕Phaggu 月名、陽曆二月三月に亙れり、或は之は尼連禪河の一名なりとも云ひ、或は伽耶城の別稱なりとも云ふ、毎歲陽曆二三月の交、伽耶の民は尼連禪河に於て祭を行ふ、或年佛此の處に現れ、法を說きたまひける時、セーナカは之を聞いて阿羅漢果を證しぬ。〔三〕amatamadasaṅghasuppahina. amata は阿伽陀藥果 mada は樂むの意、阿伽陀果を樂むは蛇なれば、此の合成語は蛇群より免れたるの意なり。

五頌品第五

【三五】比丘あり、墓田に赴きて、婦女の〔死體の〕家閒に捨てられ、蟲類のために噉はれ、壞れたるを見き。

【三六】邪なる死屍を見ては、厭嫌の情起るものあるに、〔我には〕染欲起り、愚夫の如く遺精ありき。

【三七】飯の熟するよりも早く、我は其の處より去り、正念にして知覺を喪ふことなく一方に入れり。

【三八】それより我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。

【三九】其より我が心は解脫しぬ、法の善き質を見よ、〔我〕三明に逮達し、佛の教を成就せり。

右ラーヂャダッタ長老

【三一〇】不適所に身を措くものは、假令業を求めて徘徊すとも、得ること無からん、之我が悲運の相なり。

【三一一】若し〔人〕煩惱を拔き、克ち得たる所、一を棄てなば骰子〔を投ずる〕が如くなるべく、總て棄てなば、〔道の〕凹凸を見ざる盲者の如くならん。

【三一二】爲さんとすることは之を言ひ、爲さんとせざることは之を言はざれ、爲すことなくして唯言ふものは、識者は之を了知す。

【三一三】愛しく色好き華の、香なきが如く、善く說かれたる語も、之を行はざるものには效なし。

【三一四】愛しく色好き華の、加之香あるが如く、善く說かれたる語は、之を行ふものには效あり。

右スブータ長老

【三一五】雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しく、我寂靜にして其の處に住す、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ。

【三一六】……我心亦止息に歸して其處に住す……。

【三一七】……我貪欲を捨離して其の處に住す……。

【三一八】……我瞋恚を捨離して其の處に住す……。

【三一九】……我愚癡を捨離して其の處に住す……。

右ギリマーナンダ長老

【三三〇】諸法の中にて、師は其の望みし所、而して〔我が〕樂ひし所の無滅〔の法〕を示し、我は自ら作すべきことを作し竟んぬ。

【三三一】斯く斯くなりとて說き傳へられざる法は、自ら逮得し證知せられたり、我淨智あり、疑惑を解けるもの、汝の側にありて(一)告白をなさん。

【三三二】我宿住を知り、天眼を淨うしぬ、我己利を逮得し、佛の敎を成就しぬ。

【三三三】我精勤にして、汝の敎に於て能く(二)學を聞けり、總て我が漏結は滅され、今や〔我に〕更有なし。

【三三四】汝尊き〔道〕を以て我を訓へ、我を愍み、攝取したり、汝の敎示虛しからず、我敎を受けて弟子となれり。

右スマナ長老

【三三五】實にも我が母の刺針を用ひしは善し、我は彼の女の言を聽き、母のために敎へられて、精進を起し、專心にして、最上菩提を成じぬ。

【三三六】我は應供の德ある阿羅漢にして、三明あり、不滅〔の道〕を見たり、(三)ナムチの軍に克ち、無漏にして住せん。

【三三七】內に又外に、曾て我に存せし所の漏結は、總て斷じ盡されて餘りなく、復再び起ることなけん。

【三三八】大姉は(三)賢くも此の義を唱へて曰へり、「〔見よ〕、汝我に(四)愛著する所なからん」と。

【三三九】苦惱は斷じ盡されたり、之は我が最後の積集〔身〕なり、〔最後の〕生死輪廻なり、今や我に更有なし。

右ワッタ長老

【三四〇】佛は實に我が利益のために、尼連禪河に來らせたまひ、我は其の法を聞きて、邪見を捨てにき。

【三四一】我種種の犧牲を供し、火神を供養しぬ、盲目なる凡愚の我は、之を淸淨なりと思ひて。

【三四二】邪見の密林に迷ひ入り、〔戒行〕(五)取のために惑はされ、盲目にして無智なる〔我〕は、不淨を淸淨なりと思ひぬ。

【三四三】我邪見を捨て、あらゆる生有を壞れり、我(六)應供の德ある火神を供養し、如來を禮拜せん。

【三四四】我あらゆる愚癡を捨て、生有の愛を壞れり、生〔死〕輪廻は盡され、今や我に更有なし。

右那提迦葉

【三四五】早朝午時晡時と、日日三たび、我は伽耶なる(七)伽耶頗勒窶の水流に入りぬ。

【三四六】曾て他の生に於て我が犯せし惡邪業を此の水に流さしめんと、先には我に斯の如き見ありき。

【三四七】巧に說き明されたる語、法と義とを具ふる道を聞きて、如實に正しく、我は義を觀察しき。

【三四八】我あらゆる邪惡を洗除し、無垢・淸淨・潔白となれり、淸淨なるものは淸淨なるものの嗣續者たり、佛の生子たり。

【三四九】（八）八の支分ある流に、あらゆる邪惡を流し、三明を獲、佛の敎を成就したり。

右伽耶迦葉長老

【三五〇】（九）汝（一〇）風疾のために（一一）止むことを得ずして森林中に住む、麤粗なる行乞地を與へられて、比丘、汝は如何にか棲めるぞ。

【三五一】廣大なる喜樂を以つて、我が身を貫徹し、麤惡なるものをも受用して、我は林中に住せん。

【三五二】〔四〕念住、〔五〕根、〔五力〕と、〔七〕覺分とを修習しつつ、我は林中に住せん。

【三五三】精進を發し、專心にして、常に堅固に勇猛に、而して一致和合せる〔輩〕を見て、我は林中に住せん。

【三五四】調順せること最第一にして、安定に住したまへる、等覺者を追憶し、晝夜懈倦なくして、我、林中に住せん。

右ヴッカリ長老

【三五五】心、我汝を防止すること、象を小門に〔防止する〕が如くせん、汝欲網、身より生ぜるもの、我は汝を邪事に就かしむることなからん。

【三五六】汝は防止せられて進むことなからん、猶ほ象の門を開くを得ざるが如くに、災なる心よ、汝數數暴力を用ひ、惡事を快しとすることならん。

【三五七】猶ほ新に捕へて未だ調へざる象は、假令自ら厭へりとも、鉤を手にせる力人は、能く〔之を〕轉

するが如く、同じく我汝を轉せん。

【三五八】猶は駿馬を御するに巧なる、勝れる御者の生善き〔馬〕を調ふるが如く、同じく我五力の上に立ちて、汝を調御せん。

【三五九】我正念を以て汝を縛せん、自ら淸うして汝を調御せん、汝は精進の重荷に制せられて、此より遠く行くことなからん。

右ギヂタセーナ長老

【三六〇】怒る心ありて智鈍きものは、勝者の敎を聽く〔とも〕、正法より遠かること、猶は空と地との如し。

【三六一】怒る心ありて智鈍きものは、勝者の敎を聽く〔とも〕、正法より却退すること、恰も黑分の月の如し。

【三六二】怒る心ありて智鈍き者は、勝者の敎を聽く〔とも〕、彼、正法に於いて枯渇すること、猶は少水中の魚の如し。

【三六三】怒る心ありて智鈍きものは、勝者の敎を聽く〔とも〕、正法に於て增進せざること、猶は田中の腐りたる種子の如し。

【三六四】知足の心を以て勝者の敎を聽く人は、あらゆる漏結を捨て、不動〔の法〕を證知し、至上の寂靜に達し、無漏にして涅槃に入らん。

右ヤサダッタ長老

【三六五】我具足戒を受け、解脱を得て無漏となれり、我はまた彼の世尊を見たてまつり、また精舍の中に共に倶に住しぬ。

【三六六】世尊は夜中久しく、屋外に過したまひ、精舍［の事］に巧なる師は、其より精舍に入りたまひぬ。

【三六七】［瞿曇］尊は僧伽梨衣を擴げて臥牀を設け、石窟中の獅子の如く、怖畏を捨て［臥したまひぬ］。

【三六八】其より善く言語する、正等覺者の弟子須那は、佛尊の面前に於て、正法を說きぬ。

【三六九】普く五蘊を識り、道を修め、無漏にして、至上の寂靜に達せん。

右須那クチカンナ長老

【三七〇】賢にして師の言を知り、(二)此處に住し、［此處に］愛念を起すもの、彼は(三)實に歸依の心篤き人たり、また識者たり、また(四)諸法に特異の智ある人たらん。

【三七一】［假令］大なる災難起ると雖も、此の省慮ある［人］を挫くこと能はじ、彼は實に强力の人たり、また識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。

【三七二】大海の如く住止し、欲を無みし、深き智慧あり、微妙の義を見るもの、彼は實に動かすべからざるものたり、また識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。

【三七三】多聞にして法を護持するものたり、法の隨法行者たり、此の斯の如き人は識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。

【三七四】所說の義を知り、義を知りて其の如くに行ふもの、彼は實に內に義を「有するもの」たり、また識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。

右コーシャ長老

〔一〕此の五偈は長老が其の舊師の許に赴きて其の所解を告白するなり。〔二〕Namuci 不脫、邪惡の法を脫せざるものの意にて魔王の別稱なり。〔三〕Visārada 大膽なる、畏るる所なき、賢き。〔四〕Vanatha 森林の下生、灌木、園、貪欲、愛欲。〔五〕Parāmasa は sīlabbata＝sīla＋vata の後に附せられ、通常戒禁取と譯せらる、牛戒犬戒等の如き戒と牛行犬行等の如き行とにして、此等を清淨解脫の道と執せし外道ありしなり。〔六〕如來を指す。〔七〕此處にては Gayāphaggu 卽ち伽耶頗勒窶を尼連禪河の一名と見たり、上二八七偈註參照。〔八〕八聖道をいふ。〔九〕以下五偈は佛と此の長老との問答にして、初の一偈は釋尊他は長老の述べたる所なり。〔一〇〕上一八六偈の註參照。〔一一〕Abhiñita なリス・デビッ夫人は foredone と譯す、原語の意は近く齎されたるなり。〔一二〕師の言の上に。〔一三〕Bhattimā 分別家の意もあり。〔一四〕直譯「知りて諸法の上に特異者たらん」。

六頌品第六

【三七五】世に聞えたる瞿曇の神變を見て、「而も」嫉妬と憍慢とに瞞かれ、我初は卑下せざりき。

【三七六】我が思惟する所を知りて、人間の御者は「我を」難詰したまひ、其よりして我に苦惱生じ、身毛不思議に竪起したりき。

【三七七】先に結髮外道として、我が「得し」(一)神通は些細なりき。其の時我は之を空無なりとして、勝者の教に出家しぬ。

【三七八】先には供犧を以て足れりとなし、欲界を大事なりとせしが、後には貪も瞋もまた癡をも、之を

捨てにき。

【三七九】宿住を知り、天眼を清うせり、神通ありて他人の心を知り、天耳をも達得しぬ。

【三八〇】我が之を得んが爲に、在家を出でて得度したりし、其の利は我によりて達せられ、〔我は〕あらゆる結縛を盡せるものたり。

右ウルヹーラ迦葉長老

【三八一】(一)ギーヒ稻は收納せられ、(二)サーリ稻は連枷にて打たれぬ、我は食物を得じ、(三)我は如何になすべきぞや。

【三八二】不可思量の佛を追念せよ、和悅にして身喜に觸れ、常に歡喜踊躍せん。

【三八三】不可思量の法を追念せよ、和悅にして身喜に觸れ、常に歡喜踊躍せん。

【三八四】不可思量の僧を追念せよ、和悅にして身喜に觸れ、常に歡喜踊躍せん。

【三八五】汝屋外に住す、此の頃の夜は寒く雪氣あり、寒のために害はれ惱まさるること莫れ、門にて鎖せる精舍の中に入れ。

【三八六】我四無量〔心〕に觸れ、之によりて安樂に住せん、我動轉なくして住する〔が故に〕、寒のために惱まさるることなけん。

右テーキッチャカーニ長老

【三八七】ともに梵行を修する人人の中に、恭敬を受けざるものは、正法より卻退すること、猶ほ少水中

の魚の如し。

【三八八】共に梵行を修する人人の中にありて、恭敬を受けざるものは、正法に於て增進せざること、猶ほ田中の腐りたる種の如し。

【三八九】共に梵行を修する人人の中にて恭敬を受けざるものは、法王の敎に於て、涅槃より遠ざかれり。

【三九〇】共に梵行を修する人人の中にて、恭敬を受くべきものは、正法より卻退せざること、猶ほ大水中の魚の如し。

【三九一】共に梵行を修する人人の中に、恭敬を受くるもの、彼、正法に於て增進すること、猶ほ田中の良き種の如し。

【三九二】共に梵行を修する人人の中にて、恭敬を受くるもの「彼は」法王の敎に於て、涅槃の傍にあり。

右マハーナーガ長老

【三九三】クッラは墓田に赴きて、婦女の「死體」の冢間に捨てられ、蟲類のために啄はれ、壞れたるを見き。

【三九四】クッラよ、病に侵され、不淨にして、不潔なる身を見よ、滲下し、滴下して、「而も」愚人の歡とする所なり。

【三九五】智見を得んがために、法鏡を取りて、我は此の空なる身を、內外共に觀察しき。

【三九六】之の如く其もあらん、其の如く之もあらん、下の如く上も之あらん、上の如く下も之あらん。

【三九七】日中の如く夜閒も然り、夜閒の如く日中も然り、先の如く後も之あらん、後の如く先も之あり
き。

【三九八】(四)五種の樂器を以てしては、心を一境にし、正しく法を見る人の「得るが」如き、斯の如き喜樂
あることなし。

右クッラ長老

【三九九】放逸行の人には、渇愛の增長すること恰も蔓草の如し、彼生より生に轉輾すること、林中に果
實を求むる猿の如し。

【四〇〇】賤くして(五)毒ある此の愛欲、若し人に勝たば、彼の憂苦の增長すること、猶ほ繁茂せる(六)毘羅
那草の如し。

【四〇一】人若し賤くして世に制し難き此の愛欲に勝たば、憂苦の彼を去ること、猶ほ荷葉より水滴「の
落つる」が如くなり。

【四〇二】汝等此處に集り來れるものに告ぐ「總て汝等に祥福あれ、愛欲の根を掘ること、優尸羅を求む
るものの、毘羅那を「掘る」が如くし、汝等、葦草の流に「折らるる」が如く、數數魔のために破らるる
こと莫れ。

【四〇三】佛の言教を行へ、寸時も空過せしむること莫れ、寸時を空過せしむるものは地獄に墜ちて、憂
ふべきが故なり。

【四〇四】放逸は塵垢なり、放逸に隨ふは塵垢なり、不放逸と明智とによりて、己の箭を拔け。」

右マールンキヤ兒長老

【四〇五】我出家してより二十五年、一彈指の頃も心の寂靜を得ざりき。

【四〇六】心一境なることを得ず、貪欲のために窘められて、(七)腕を扼し、泣きつつ精舍より出で行きぬ。

【四〇七】「我刀を持ち來らんか、我生きて何の要かある、我が如きものは、戒を拋棄して、如何が死に就くべき」と。

【四〇八】我其の時剃刀を取りて、座牀に就き、己の脈管を斷たんが爲に、剃刀を拔きぬ。

【四〇九】其より我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。

【四一〇】其より我が心は解脫しぬ、法の良き質を見よ、我三明に逮達し、佛の敎を成就せり。

右サッパダーサ長老

【四一一】カーチャーナ、起て、坐せよ、醒めよ、多く睡ることなかれ、汝怠惰にして、放逸者の親族、死王のために、惡計を以て勝たるることなかれ。

【四一二】譬へば大海の震動の如く、同じく生老は汝を伏す、汝、己の良き(八)洲を作れ、これ汝には他の依處なければなり。

【四一三】師は道を設けたまひ、此[の道]は著と生死の怖畏とを超越せり、初夜にも後夜にも精勤して、專心に堅く努力せよ。

【四一四】先にありし縛を解け、僧伽梨衣〔を著け〕、剃刀にて〔頭を〕剃り、乞食物を食へ、遊戯の樂と、睡眠とに耽らず、禪定に入れ、カーチャーナよ。

【四一五】カーチャーナ、禪思せよ、勝を得よ、安隱の道に熟通せよ、無上の清淨に達し、涅槃に入ること、火の水に〔消さるる〕が如くならん。

【四一六】光少き燈火は、恰も風のために撓めらるる蔓樹の如し、斯の如く汝インダサ姓〔のカーチャーナ〕、取執することなくして、魔を撼がせ、汝諸受の上に貪欲を離れ、此の世に於て清涼〔の身〕となり、死の到るを待て。

右カーチャーナ長老

【四一七】具眼の佛、日種姓は、あらゆる結縛を超え、あらゆる轉生を滅する〔法門〕を、巧に說き示したまへり。

【四一八】〔涅槃に〕導き〔彼岸に〕渡し、愛欲の根本を枯らす、〔此の法門は〕毒の根と屠舍とを壞ちて、涅槃を成ぜしめたり。

【四一九】無智の根本を破るに、業の機械を除き、諸想を執持するに、智慧の金剛を投ずるなり。

【四二〇】受を知悉せしめ、取を離脫せしめ、智慧を以て生有を觀ること、火坑を〔觀る〕が如し。

【四二一】大味あり深遠にして、老死を遮止する、尊き八支道は、安泰にして苦惱を息止す。

【四二二】業を業と知り、果を果と〔知り〕、緣生の法を如實に觀照し、大安隱地に行く、善良〔の人〕は、

其の終や可なり。

右ミガヂャーラ長老

【四二三】我生の誇と財と權威とに迷はされ、身の色と形とに誇り狂ひて、徘徊しぬ。

【四二四】一人として己に等しきもの、優れるものありと思はず、過慢心のために傷けられ、愚に頑迷に傲慢なりき。

【四二五】母も父も他の恭敬すべきを認められしものをも、我は憍慢頑迷にして、恭敬の念なく、一として禮敬せざりき。

【四二六】第一の導師、調御者中の最優者の光り耀く太陽の如く、比丘衆に圍繞せられたまふを見。

【四二七】慢と迷とを捨て、清和の心を以て、あらゆる生類中の最上者を、頭を以て禮拜しぬ。

【四二八】過慢と卑慢とを捨て、よく之を除けり、「我有」の念は斷たれ、あらゆる類の慢を盡されたり。

右補臣の兒ヂェンタ長老

【四二九】我齡七歳にして、新に出家せし時、神變力を以て、大神通ある龍王を降伏し、

【四三〇】阿耨達の大池より、師に水を運び來りき。其より世尊は、我を見て宣へり、

【四三一】「舍利弗、近づき來れる此の兒を見よ、水瓶を携へ、內心能く定に住す。

【四三二】愛すべき行爲によりて威儀良く、阿㝹樓陀の沙彌は、神變力によりて、恐怖心を離る。」

【四三三】「彼」訓良き人によりて訓良きものとせられ、巧なる人によりて巧なるものとせられ、義務を終

へたる阿㝹樓陀によりて、導き敎へられたり。

【四三四】彼最上の寂靜に達し、不轉動［の法］を證得し、彼沙彌スマナは「我を賤むこと莫れ」と願へり。

右スマナ長老

【四三五】汝風疾のために止むことを得ずして森林中に棲む、粗にして顧みられざる行乞地に於て、汝は如何にか生活せるぞや。

【四三六】廣大なる喜樂を以て、我が身を貫き、粗なる［食物］をも之を受用して、林中に住せん。

【四三七】七覺支、［五］根、［五］力を增修し、禪定の樂を具有し、漏結なくして住せん。

【四三八】煩惱を離脫し、心淸淨にして、汚濁なき人を常に觀察し、漏結なくして住せん。

【四三九】內に外に、我にありし所の漏結は、總て斷じ盡されて餘りなく、復再起ることなからん。

【四四〇】五蘊は周く知られ、根本を斷たれて存す、苦惱の滅盡に達し、今や我に後有なし。

右ヌハータカムニ長老

【四四一】忿なく、調順にして、平等に生活し、能く知りて解脫し、寂靜なる、斯の如き人に何處よりか忿怒［來らん］。

【四四二】忿れるものに對して忿るもの、彼は之によりて愈惡し、忿れるものに對して忿らざるものは、勝つこと難き爭に勝つ。

【四四三】［彼は］自と他との兩者の利を行ふ、他の忿れることを知りて、正念の人は寂に歸す。

【四四四】自と他との兩者の醫者なる彼を、法に通ぜざる輩は、愚蒙なりと思へり。

【四四五】若し〔汝に〕忿起らば、鋸の譬喩を思ひ、若し味欲起らば、兒の身肉の譬喩を追念せよ。

【四四六】汝が心若し諸欲と生有との間に奔馳せば、正念を以て疾く之を制すること、生長せる穀を食ふ惡畜の如くせよ。

右ブラフマダッタ長老

【四四七】掩へるものには強く雨降り、顯なるものには強く降ることなし、されば掩へるを顯せ、斯の如くせば之に雨降ることなからん。

【四四八】世間は死のために礙へられ、老のために圍まれ、愛欲の箭に刺され、常に慳貪に燻べらる。

【四四九】世間は死のために礙へられ、また老のために取卷かる、常に依所なくして害を蒙ること、刃と杖とを取れる盜人〔に逢ふ〕が如し。

【四五〇】死病老の三は、火聚の如く迫り來る、〔之に〕抗はんには力なく、〔之を〕避けんには敏速ならず。

【四五一】一日〔の光陰〕は、少くとも多くとも、之を空しうすることなかれ、一夜を捨つれば之はこれ汝の生命を減ずるなり。

【四五二】遊行、住立、著座、偃臥、最後の一夜は迫り來る、汝放逸なるべき時にあらず。

右シリマンダ長老

【四五三】此の兩足〔の身〕は〔人に〕愛せらるれど、不淨、惡臭にして、種種の汙穢、其の中に滿ち、又處

處より滲み出づ。

【四五四】隱れたる鹿は蹄のために、魚は鉤のために、猿は黐のために［惱まさるる］が如く、凡夫は惱まさる。

【四五五】愛すべき色聲香味と所觸と、此等の五種の欲は、婦女の身にあるを見るべし。

【四五六】愛樂の心を以て、此等［の婦女］に交はる凡夫は、恐しき(九)墓田を擴げ、再生を積むものなり。

【四五七】此等［の婦女］を避くること、足、蛇頭を［避くる］が如くするもの、彼は正念にして、世に此の毒者を伏す。

【四五八】諸欲に患難［あること］を見、出離を安隱なりと見て、あらゆる欲より離れ、我は漏結の滅盡に達せり。

右サッパカーマ長老

〔一〕信者より受くる利得、尊敬等をいふ、佛又は佛弟子等の行ひし神通神變にあらず。〔二〕Vīhi 梵語にては vrīhi なり、我日本語の粳の原語にあらずやと云ふものあり、sāli も同じく稻の一種なり。〔三〕以下魔王の化身と長老との問答なり、一偈は魔王、次三偈は長老、第五は魔王、第六偈は長老の唱へし所なり。〔四〕五種の樂器とは(一)ātata 一面に革を張りたる鼓(二)ātatavitata 全面總て革を張りたる鼓(三)vitata 兩面に革を張りたる鼓、又は絃樂器(四)ghana 鐃鉢、銅鑼、鈴、扁鼓等の如く叩きて鳴す樂器(五)susira 管樂器。〔五〕法句經三三五偈註參照。〔六〕同上。〔七〕或は腕を差し延しての意。〔八〕燈、依所等の意もあり。〔九〕再三生れ出るが故に。

七頌品第七

【四五九】美衣を纏ひ、華鬘を著けて、莊校嚴飾し、足に蟲脂を塗り履を穿ちたる遊女。

【四六〇】履を脱ぎ、〔我が〕面前に合掌し、柔和〔なる聲〕にて、彼の女は未だ曾て禮敬せしことなき我に告げて曰へり、

【四六一】「汝齢尙ほ若くして〔而も〕出家せり、我が(一)道によれ、人界の欲を享けよ、我汝に財を贈らん、我は眞實を語れるなり、〔信せずんば、〕我汝に(二)火を持ち來らん。

【四六二】汝と我と老い朽ちて杖に凭る時、兩人共に出家せん、〔斯くせば〕兩處に固著あらん。」

【四六三】美衣を纏ひ、〔身を〕莊嚴し、魔王の羂索を張れるが如き彼の遊女の、合掌して〔我に〕求むるを見て。

【四六四】其よりして我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。

【四六五】其よりして我が心解脱しぬ、法の宜き安排を見よ、〔我〕三明に通じ、佛の敎を成せり。

右スンダラサムッダ長老

【四六六】アムバータカ遊園の彼方なる森林中に於て、跋提耶は愛欲を其の根と共に抜き、其處に多幸にして禪思せり。

【四六七】或は杖鼓を以て、箜篌を以て、また小鼓を以て樂むものあり、我はまた樹下に於て、佛の敎を

樂めり。

【四六八】佛、我に惠を與へ給へ、我此の惠を得なば、我はあらゆる世間〔の人〕に對して、恆に（三）身念を持たん。

【四六九】形色を以て我を量り、音聲を以て我を追ふもの、此の欲貪貪欲ある輩は、我を知ることなし。

【四七〇】内をも知ることなく、外をも見ることなく、四方礙へられたる愚者、彼は音聲のために誘はる。

【四七一】内を知ることなくして、外を觀、外なる果を見る人、彼も亦音聲のために誘はる。

【四七二】内をも知り、外をも觀、見るに障礙なき人、彼は音聲のために誘はるることなし。

右ラクンタカ・バッヂャ長老

【四七三】我は獨子にして、母の愛〔兒〕、父の愛〔兒〕なりき、多の苦行と祈願とによりて得られたるなり。

【四七四】彼の我が利を願ひ、益を求むる父と母との二人は、我を愍みて佛に捧げぬ。

【四七五】「艱難によりて得たる此の兒は華奢にして柔弱なり、主よ、我等は之を勝者の走使〔として〕捧げたてまつる。」

【四七六】師は、また我を受取りて、阿難陀に告げたまひぬ、「速に之を得度せしめよ、之は敎へて宜しきものとならん。」

【四七七】師は我を得度させ、〔而して〕勝者は精舍に入らせたまひぬ、其より太陽の未だ上らざるに、我が心は解脫しぬ。

【四七八】師は其より棄てて靜思より起ち、我を召びて「來れ、跋提耶」と宣ひき、是我が受戒なりき。

【四七九】生れて甫て七歳にして、我は受戒を得三明に達しぬ、不思議なる哉、法の宜き(四)安排や。

右跋提耶長老

【四八〇】樓閣の陰にありて、最上人の經行したまへるを見、其處に我は彼に近づき、最上人を禮拜しき。

【四八一】衣服を一肩にし、掌を合せ、一切生類中の最上者たる離塵〔尊〕に隨ひ經行しき。

【四八二】問ふことに通せる知解者は、其より我に問を質し、我は迷妄なく恐怖なくして、師に應對したてまつりき。

【四八三】如來は〔此等〕問の答に對して、隨喜の意を表し、比丘衆を顧みて、此の義を宣べたまひき。

【四八四】「多幸なる哉、央伽摩揭陀國の人、〔比丘衆は〕彼等の捧ぐる衣服、摶食、資具、臥牀、迎拜、適宜の恭敬を受く、彼等は多幸なる哉」と。また宣ひき。

【四八五】「ソーバーカ、今日よりして後我を見んがために近づき來れ、ソーバーカ、之また汝の受戒となれ。」

【四八六】生れて齡七歳にして、我は具足戒を得、最後身を持つ、不思議なる哉、法の宜き安排や。

右ソーバーカ長老

【四八七】手を以て葦を折り、小舍を設けて棲みき、之によりて世人一致して我に「破葦」の名を〔與へぬ〕。

【四八八】今日は、我手を以て、葦を折るべからず、名高く聞えたまへる瞿曇は、我等のために、戒法を

制したまへり。

【四八九】サラバンガは先に總て病は、一として見ることなかりしが、(五)超越天子者の語によりて、此の病見えたり。

【四九〇】毘婆尸〔佛〕の踏み、尸棄、毘沙浮〔兩佛〕の踏み、また拘留孫、拘那含牟尼及び迦葉〔佛〕の踏みたまひし道によりて、瞿曇佛は往かせたまへり。

【四九一】愛欲を離れ、取著を去り、七佛は滅盡に入りたまへり、此の法は此の斯の如き法ある〔人〕によりて說かれたり。

【四九二】四種の聖諦は、生類を愍むが故に〔說かれたり〕、苦、集、道、苦の滅盡たる滅これなり。

【四九三】此の輪廻起れば無限の苦あり、此の身の破壞と命の滅盡とよりして、他の生なく、我は一切處に上解脫を得たり。

右サラバンガ長老

〔一〕敎に住立せよ。〔二〕火を取りて誠實を誓ふの式。古代印度に行はれたるなり。〔三〕Kāyagatāsati 身に繫れる念、身は常住にあらずと觀ずる念。〔四〕或は法のよき質や。〔五〕佛を指す。

八頌品第八

【四九四】多の業を作すことなかれ、人人を遠けよ、(一)〔他に模し又は他と競はんと〕努むることなかれ、

彼の元氣旺にして切に諸味を求むるものは、安樂を與ふべき福利を捨つ。

【四九五】〔賢者は〕在家の禮拜供養は、之を淤泥なりと知る、細き箭は之を拔くこと難く、惡人の恭敬は之を捨つること難し。

【四九六】他の有情の邪業を作出するなく、〔隨つて〕自から之を感ずることなし、これ有情は、業に繫がるるが故なり。

【四九七】〔人は〕他人の語によりて盜人たらず、〔人は〕他人の語によりて牟尼たらず、〔人〕自ら己を知れるが如く、同じく諸天も亦彼を解す。

【四九八】㈢「我等は此處に滅ぶるものなり」と、愚者は之を覺らず、人若し之を覺れば、其よりして爭息む。

【四九九】智慧ある人は、財滅ぶとも尙ほ生く、智慧を得ずしては、財あるものも生くことなし。

【五〇〇】耳を以て總てのものを聞き、眼を以て總てのものを見る、見しもの、聞きしものを總て捨てんことは、賢者には應せず。

【五〇一】有眼は猶ほ盲の如く、有耳は猶ほ聾の如し、智者は猶ほ啞の如く、力人は猶ほ弱者の如くなれ、而して福利生ずれば死者の臥するが〔如く〕臥せよ。

右摩訶迦旃延長老

【五〇二】忿らず、恨まず、僞らず、〔又〕兩舌を離れたるもの、此の斯の如き比丘は、斯くして來世を憂

ふることなし。

【五〇三】恐らず、恨ます、僞らす、兩舌を離れ、常に〔諸根〕門を防護せる比丘は、斯くして來世を憂ふることなし。

【五〇四】恐らず、恨まず、僞らず、兩舌を謝し、戒善き比丘は、斯くして來世を憂ふることなし。

【五〇五】恐らず、恨ます、僞らず、兩舌を離れ、友善き比丘は、斯の如くして來世を憂ふることなし。

【五〇六】恐らず、恨ます、僞らず、兩舌を離れ、良智ある比丘は、斯の如くして來世を憂ふることなし。

【五〇七】如來に對する信心、確立して動くことなく、戒は善良にして、賢聖の樂とし、〔世閒の〕讃歎する所たり。

【五〇八】僧伽に對して喜悅を有ち、識見また直き時は、彼を貧者にあらずと云ふ、其の生活は空なることなし。

【五〇九】されば智者は諸佛の敎を憶念して信心と戒と、喜悅と法見とを專修せよ。

右シリミッタ長老

【五一〇】怖畏を離れたまへる師を始て見たてまつりし時、人中の最上者を見たてまつりて、我が〔心に〕感動起りき。

【五一一】手を〔延べ〕足を〔屆げて〕、福運の來るを迎ふるもの、彼は斯の如き師の惠愛を求めて得じ。

【五一二】其の時我妻兒と財穀とを捨て、鬚髮を剃りて、出家得度したり。

【五一三】〔三〕學と生活の規矩とを辨へ、よく諸の根を制し、等覺者を禮拜し、〔何物のためにも〕敗らるることなくして住しき。

【五一四】其より我誓願を起して、心に〔之を成ぜんことを〕切望しき、「愛欲の箭を拔かずしては、我寸時も坐せじ」と。

【五一五】此の斯の如くして住したる我が精進勇猛を見よ、三明通達せられ、佛の敎は成就せられぬ。

【五一六】我宿住を知り、天眼を淸うしたり、應供の德ある阿羅漢にして、解脫して生質なし。

【五一七】其より夜に入り、〔更に〕日の上る比、あらゆる愛欲を涸盡し、跏趺を結びて坐しき。

右摩訶般特迦長老

〔一〕リス・デビツ夫人の譯によりて之を補ひたり。〔二〕法句經六偈註參照。

九頌品第九

【五一八】無智なる凡夫の依執する老病を、識者は苦なりと〔識る〕、苦を識り正念にして禪思する時、人は之に優れる樂みを得ることなし。

【五一九】苦惱を齎し、妄心殺害の苦を與へ、毒ある愛欲を捨て、正念にして禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。

【五二〇】(一)雙重の四分に導き、安泰にしてあらゆる煩惱を淨除する最上の道を、智慧を以て見、正念に

して禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。

【五二一】 無憂、離垢、無作、寂靜、あらゆる煩惱を淨除し、結縛を破壞する道を修習する時、人は之に優れる樂を得ることなし。

【五二二】 空中に雲鼓響き、鳥路に四方より豪雨來る、比丘はまた山窟に入りてぞ禪思する、此時人は之に優れる樂を得ることなし。

【五二三】 花の叢あり、雜色のヴーネーヤ草を以て飾れる河の岸邊に坐し、妙意にして禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。

【五二四】 中夜、人なき森林中に於て、雨降り、有牙の〔獸類〕吼ゆる時、比丘はまた山窟に入りてぞ禪思する、〔此の時〕之に優れる樂を得ることなし。

【五二五】 山閒に〔入り〕、巖岫によりて、己の疑念を阻め、恐怖を離れ、剛愎を離れて禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。

【五二六】 安樂にして垢穢、剛愎、悲憂を滅し、關鑰なく、樹林なく、箭なく、あらゆる漏結を盡して禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。

右ブータ長老

〔一〕 Dve-catur-aṅga-gāmina チヤトルアンガ ガーミナ 是れ四向四果の兩種の四分に達するの意。

十頌品第十

【五二七】(一)大徳尊、葉を捨て果を求むる此等の樹木は今や紅色となり、火焰の如く光り輝く、大雄尊〔今は法〕味を分ちたまふべき時なり。
【五二八】樹と花とは愛すべく、四方普く葉を捨て果を求めて、香氣を吹き來る、雄尊、是より出立ちたまふべき時なり。
【五二九】寒きに過ぎず、暑きに過ぎず、大徳尊、今や樂しき時節の中にあり、釋迦族民と拘利族民と、尊の西に向ひてローヒニー河を渡らせたまふを見たてまつらんことを。
【五三〇】望を以つて田は耕され、望を以つて種は蒔かる、望を以つて財を齎す商主は海に入る、我がよりて存する所の彼の望、願くは成就せよ。
【五三一】〔人は〕再再種を蒔き、天王は再再雨を降す、耕夫は再再田を耕し、穀は再再國土に入る。
【五三二】乞食は徘徊すること再三、施主は施與すること再三、施主は施して天界に入ること〔また〕再三なり。
【五三三】廣智者、家に生るれば、〔其の〕雄者は實に七代の父母を淨くす、我天中の天〔又之を〕能したまふと思ふ、これ汝によりて眞の名の牟尼生れたればなり。
【五三四】淨飯はすなはち大仙の父、而して摩訶麻耶は佛の母なり、彼の女菩薩を胎中に護り、〔死して〕

身壞れて天界に喜樂す。

【五三五】 彼の(二)瞿曇彌は死し、此處より去りて天上の欲を享け、彼の女此等の天子群に圍繞せられ、五種の欲によりて喜樂す。

【五三六】 我は堪ふべからざるを堪へ、比倫を絶せる此の佛、(三)菴儗羅娑の兒なり、釋尊、汝は我が父の父、瞿曇尊、[汝は]法によりて我が祖父。

右迦留陀夷長老

【五三七】 前にも後にも、若し他に人なき時は、獨林閒に住する人に、大なる安樂あり。

【五三八】 今、我佛の稱讚したまひし森林に獨赴かん、之獨棲して專念なる比丘の安樂とする處なり。

【五三九】 定者に喜を與ふる、狂象出沒する、樂しき林に、獨急ぎて入らん、法利に心を專とせる我は。

【五四〇】 美しく花咲ける寒林に於て、冷しき山窟の中に、四肢に水を灑ぎて我獨り經行せん。

【五四一】 樂しき大林の中に、我唯一人にして第二人者なく、爲すべきことを爲し終へ、漏結を盡して住すること何時か之あらん。

【五四二】 斯の如く、爲さんことを思へる我が所願成せかし、我こそは[之を]成せん、他は他の作者にあらず。

【五四三】 我は甲冑を著けん、林中に入らん、漏結の滅盡に達せずしては、之より出ることなからん。

【五四四】 冷にして美妙の香氣ある風の吹き來る時、我山顚に坐して無明を破らん。

【五四五】花に掩はれたる林の中に、冷なる洞窟の中に、解脫の樂によりて安樂を得、我は山廓の中に樂まん。

【五四六】此の我〔今日〕、所願を成滿すること、猶ほ十五夜の如くなり、あらゆる漏結を盡して、今や再生なし。

右(四)　エーカギハーリヤ長老

【五四七】利益も、非利益も、兩者共に未だ來らざるに先づ見るものは、怨も親も其の罅隙を尋ぬ〔とも之を〕見ることなし。

【五四八】入・出息念をよく修習して成就し、次第に積集して佛の所說の如くしたり、此の我世界を照すこと、猶ほ雲を脫れたる月の如し。

【五四九】實に我が心は淨く、限界なく、よく修練せられ、理解せられ、抑制せられて、四方に光り輝く。

【五五〇】智慧ある人は、財亡ぶとも尙ほ生く、智慧を得ずしては、財あるものも生くることなし。

【五五一】智慧は所聞を裁斷するもの、智慧は名稱、頌辭を增加するもの、智慧を有てる人は此の苦〔界〕にありとも、安樂を得。

【五五二】〔有情の〕生れ、死する、之は今日の法にあらず、希有にあらず、未曾有にあらず、此處に何の未曾有事の如きかあらん。

【五五三】生れたるものの生の次には必ず死あり、生れ、生れたるものは此處に死す、これ斯の如きは生

命あるものの法なればなり。

【五五四】他の人の生くるに利なること、之は死者の利にあらず、死したるに悲泣する、之れは名譽にあらず、清淨にするにあらず、沙門婆羅門の稱歎する所にあらず。

【五五五】悲泣は眼と體とを害ひ、色と力と、又智とは〔之がために〕衰ふ、彼に取りては四方歡樂ならず、彼の親も安樂なることなし。

【五五六】されば在家に住みては、智ある人と多聞の人とを〔迎へんと〕願ふべし、此等の人の智慧分別によりて務を超ゆること、恰も船によりて滿ちたる河を〔超ゆる〕が如し。

右(五) マハーカッピナ長老

【五五七】我が進歩の遲遲たりしため、先には我輕蔑せられき、兄はまた我を追ひ出して云ひき、「今汝は去りて家に還れ」と。

【五五八】我は伽藍の房舍中にありて斯の如く追ひ出され、而も佛の敎に望を懷き、愁然として立ちたり。

【五五九】其處に世尊は現れたまひ、我が頭を撫で、我が手を捉へて、伽藍の中に導きたまひき。

【五六〇】師は我を愍みて、(六)足拭を與へたまひ、〔汝の心を〕一境に住めて、「此の(七)淨きものに定立せしめよ」と〔宣ひき〕。

【五六一】我世尊の語を聞き、〔佛の〕敎を樂みて住し、最上利に達せんがために、三昧を行じき。

【五六二】我宿住を知り、天眼を清淨にせり、三明に逮達し、佛の敎を成就せり。

【五六三】パンタカは己を化作すること二千體、樂しき菴婆林中に坐して、〔供養の〕時を報ずるを待ちたり。

【五六四】其より師は我に時を報ずるの使者を遣はしたまひ、時の報せらるるや、我は空中に上りき。

【五六五】我は師の足を禮して、一面に坐しき、我が禮敬して坐せるを、師はやがて攝受したまひき。

【五六六】一切世間の祭壇、焚施の受者、人間の福田は、供養物を受けたまひき。

右チューラパンタカ長老

【五六七】種種雜多の不淨物に滿てる大糞塊、大疱腫、大創傷、恰も滿ちたる泥沼の如し。

【五六八】膿血に滿ち、糞坑に祕める〔此の〕身は、水液を流出するもの、常に腐〔水〕滲み出づ。

【五六九】六十の腱に縛せられ、肉の硬膏を以て塗られ、皮の鎧を被せられたる、無用の腐臭身。

【五七〇】骨の鏁に繋がれ、筋の絲に結ばれ、互に相連りてあれば、種種の行動〔をなす〕に堪ふ。

【五七一】〔身によりて〕欲念を起す人は〔之を〕此處に棄て、死王の側に至ること必せり。

【五七二】身は無明のために障へられ、四種の結縛のために縛せらる、身は暴流に沈められ、惰眠の網に掩はる。

【五七三】五種の障礙に繋がれ、疑惑を所有す、愛欲の根たるものに追はれ、愚癡の蓋のために蓋はる。

【五七四】此の身は業の車に載せられて、斯の如く轉輾す、成は壞に終り、種種の生有は壞滅す。

【五七五】此の身を我が有なりと思へる、闇昧の凡夫輩は、恐ろしき墓田を擴げ、再再生を受く。

【五七六】此の身を捨つること、糞に塗れたる蛇の如くするものは、生有の根を棄て、無漏にして涅槃に入らん。

右カッパ長老

【五七七】〔人里を〕離れて音少く、猛獸の出沒するところ、比丘は靜思をなさんがために、〔此の如き〕坐臥を受用せよ。

【五七八】家閒より又は街路より、塵布を持ち來り、其を以て僧伽梨衣を縫ひ、麤服を著用せよ。

【五七九】心を卑うして、比丘は〔諸根の〕門を護り、善く自ら制して、家より家に戸戸乞食に步け。

【五八〇】麤なるにても滿足し、他の多くの美味を貪ることなかれ、諸味に著せるものの心は、禪思を樂むことなし。

【五八一】牟尼は少欲、滿足、他に遠ざかり、在家者にも出家者にも、共に混ずることなくして住せよ。

【五八二】自己を表示すること、恰も鈍者又啞者の如くなるべく、識者は群集の中にありて、時ならざるには言ふべからず。

【五八三】彼は何人をも罵ることなく、害ふことを避くべし、戒律に於て自ら攝し、飮食に於て量を知るべし。

【五八四】巧く相を執へて、心の起を知り、時に順じて、止と觀とを修習すべし。

【五八五】不休息の精進を具へ、常に努力すべく、苦惱の際涯を盡さずしては識者は信賴をなすことなし。

【五八六】斯の如くして住し、清淨を憧憬する比丘は、あらゆる漏を盡し、また涅槃に達す。

右ヴンガンタの兒なるウパセーナ長老

【五八七】自己の利益を知り、更に此處に〔佛の敎に於て〕沙門の道に入れるものに適せる語を觀察すべし。

【五八八】此の敎に於て、良友ある、廣く學を修むる、師の〔敎を〕聽かんと欲する、是沙門に適する所なり。

【五八九】諸佛に對して敬意ある、如實に法を供養し、また僧を尊敬する、是沙門に適する所なり。

【五九〇】行處親近處あり、生活は清淨にして難ずべき所なく、心を確立せる、是沙門に適する所なり。

【五九一】行とまた制とを具へ、愛すべき威儀あり、增上心に住止せる、是沙門に適する所なり。

【五九二】牟尼たるものは邊鄙にして騷少き森林中の坐臥處を受用すべきなり、是沙門に適する所なり。

【五九三】戒と多聞と法を研究するに如實なると、諦理を曉了すると、之沙門に適する所なり。

【五九四】〔世の〕無常なると、無我想と、不淨想と、世間不可樂想とを修習せよ、之沙門に適する所なり。

【五九五】〔七〕覺支、〔四〕神足、〔五〕根、〔五〕力、及び聖なる八支道を修習せよ、之沙門に適する所なり。

【五九六】牟尼は愛欲を捨て、諸漏の根本を壞り、解脫して住せよ、之沙門に適する所なり。

右ゴータマ長老

〔一〕此等の偈を唱へて世尊に歸鄕を勸めたてまつる。〔二〕Gotami 喬曇彌、瞿曇の女姓なり、摩耶夫人を指す。〔三〕Angirasa 佛の一名なり。〔四〕Ekavihārika 獨棲の意、此の長老、本名をチッサ・クマーラと云へり。〔五〕Mahākappina 摩訶劫賓那。〔六〕pāda-punchani 足を拭ふものをいふ。〔七〕これは上の足拭を指す。

十一　頌品第十一

【五九七】(一)ウッヂュハーナ兒よ、汝森林の中に於て、雨季の如くして何の利益かある、(二)季節の風は汝に取りて樂しかるべし、是れ入定者は「他より」遠離すべきが故なり。

【五九八】季節風の雨時に雲を拂ふが如く、我が(三)遠離の想は弘敷す。

【五九九】卵より生れ、黑色にして、「家閑を家「の如くに」(四)徘徊するもの、我をして身に就て(五)離欲の正念を起さしめき。

【六〇〇】他の護るものなく、また他を護ることなきもの、斯の如き比丘は諸欲に期望なくして安樂に臥す。

【六〇一】清みたる水あり、大なる磐石あり、黑面猿と鹿と羣り、水「草」セーヴーラに覆はる、此等の岩山は我をして樂ましむ。

【六〇二】我は森林、岩峽、洞窟、邊鄙の坐臥處、猛獸の往來する處に住し來れり。

【六〇三】此等の生類を打ち、屠り、苦に至らしめんと、我に斯る卑うして過ある思惟の起りしことを知らず。

【六〇四】我師に奉事し、佛の敎を成せり、我重荷を卸し、生有の因を滅せり。

【六〇五】我、彼の利益のために、在家を出でて、出家得度せしが、今其の利益を成就し、あらゆる結縛

を斷じ盡せり。

【六〇六】我は死を欣ばず、我は生を欣ばず、恰も務を終りたる奴僕の如く、時の至るを待つ。

【六〇七】我は死を欣ばず、我は生を欣ばず、正覺正念にして、時の至るを待つ。

右サンキッチャ長老

〔一〕Ujjuhāna とは山の名なり、矮林に掩はれ、山中淋池、洞窟多く、處處水流れて雨時には登ることを得ず、故に之を譬として引用せるなり。或は之は鳥の名なり、此の鳥寒に堪へず、雨時は密林中に祕みて出ることなし、故に之に譬へたりとも云ふ。〔二〕Veramba 季節風又は山窟なりとも云ふ。〔三〕遠離と結び著ける想、意識、智覺。〔四〕鴉。〔五〕Virāganissitasati 離欲に關する、離欲を旨とする正念。

十二頌品第十二

【六〇八】此處に此の世に於ては、能く學習せられたる戒をこそ學習せよ、これ戒は〔之を〕行ふものにあらゆる成效を與ふるが故なり。

【六〇九】智者は三種の安樂を望みて戒を護るべきなり、稱讃と、獲利と、死後天界に於ける喜樂と之なり。

【六一〇】持戒者は自制によりて多の友を得、汚戒者は邪惡を行ひて友より遠ざかる。

【六一一】汚戒の人は誹謗と汙名とを獲、持戒者は常に讚歎と令名とを受く。

【六一二】戒は第一の住立所なり、之諸善の母なり、あらゆる法中最第一なるものなり、されば戒を淨く

せよ。

【六一三】戒は渚岸なり、また(一)防護なり、心の(二)光明なり、また一切諸佛の(三)津頭なり、されば戒を清淨にせよ。

【六一四】戒は無比の力、戒は最上の武具なり、戒は最尊の莊嚴、戒は希有の甲冑なり。

【六一五】戒は勢强大なる堤防なり、戒は無上の薫香、戒は最上の塗香、［人は］之によりて方より方へ赴く。

【六一六】戒は第一の旅料、戒は最上の旅資なり、戒は最第一の運載にして、［人は］之によりて方より方へ行く。

【六一七】此の世に於ては毀訾を得、死後地獄に於ては憂苦す、戒の上に定住なき愚者は、一切處に憂苦あり。

【六一八】此の世に於ては稱譽を得、死後天上にありて喜樂す、戒の上に定住ある賢者は、一切處に喜樂あり。

【六一九】此の處にありては戒こそは第一なれ、而して智者は最上なり、人間界にも天上界にも、戒智あるものに勝利あり。

右(四)シーラヴー長老

【六二〇】我賤しき家に生れ、貧にして財乏しく、我は稼業卑しく、(五)不淨物の清除者なりき。

【六二一】人人には忌み嫌はれ、罵られ、我は心を卑うして、多の人を禮敬しき。

【六二二】時に我正覺者大雄者の、比丘衆に圍繞せられ、摩揭陀の最大都府へ入らせたまふを見奉りき。

【六二三】我擔杆を捨て、禮拜せんが爲に近きたてまつれば、人中最上者は我を慈愍して立たせたまひき。

【六二四】其より我は師の足を拜して一面に立ち、一切生類中の最上者に對して、出家「の許可」を求めき。

【六二五】其よりして悲愍の師、一切世間の慈哀者は我に對して、「來れ比丘」と宣へり、之我が受戒なりき。

【六二六】我は懈倦なくして、唯獨森林中に住し、師の言を行うて、勝者の我に教へたまひし如くせり。

【六二七】夜の初分に於いて前生を追憶し、夜の中分にありて天眼を清淨にして、夜の後分に至りて、闇蘊を碎きたり。

【六二八】其より夜に入り、「更に」日の上る比、因陀羅と梵天とは來りて合掌し、我を禮拜しき。

【六二九】「人間中にて生勝れたる人、汝に歸命す、人間中にて最上なる人、汝に歸命す、汝の諸漏は滅盡せらる、尊、汝は供養を受くるに堪ふるものたり。」

【六三〇】時に師は我が天子の羣に圍繞せらるるを見、微笑を漏して、此の義を宣べたまひき、

【六三一】「苦行と梵行と、自制とまた調順と、之によりて婆羅門たり、之を最上の婆羅門「といふ」と。」

右(六)スニータ長老

〔一〕saṁvara 攝護、持戒、律儀等の意あり。〔二〕abhibhāsana 喜悅滿足の意もあり。〔三〕涅槃の大海へ自ら渡り、また他をも渡

すべき。〔四〕具戒者の意。〔五〕Puppha-chaddaka 之をリス・デビツ夫人は花を取り棄つるものと譯せり、puppha には花の外に經水の意あることを知らば、此の貧人は之より生ずる婦人の不淨物を始末するを渡世とせしことを思ふべし。〔六〕Sunīta 善く指導せられたるの意。

十三頌品第十三

【六三二】嘗て央伽王の領土に於いて位高き扈從たりしもの、今日、我ソーナは諸法の上に勝れ、苦惱の彼岸に達せり。

【六三三】(一)五〔下分結〕を斷ち、五〔上分結〕を捨て、更に五〔根〕を修練せよ、五著を超えたる比丘は暴流を渡りたる〔人〕と稱せらる。

【六三四】虛誇放逸にして、外欲ある比丘は、戒も定も慧も、成滿するに至らず。

【六三五】爲すべきを爲さず、而も爲すべからざるを爲す、虛誇にして懈怠なる此等の輩の諸漏は增長す。

【六三六】人常に精進して自ら觀念を修し、非事に遠ざかりて常に是事を行ひ、而して正念覺知あり、斯る人の諸漏は滅盡に至る。

【六三七】直き道說き示されたらば、往きて還ることなかれ、自ら己を勵まし、涅槃を成就せよ。

【六三八】我極度の努力を爲すや、世間無上の師、具眼者は箜篌を喩として法を說き示したまひき。

【六三九】我其の言を聽き、敎を樂みて住しき、最上利に達せんがために止を行せり、我三明に逮達し、佛の敎を成就せり。

【六四〇】出離を專一とし、不瞋恚を專一とし、取を盡せし人の心の遠離と、

【六四一】愛欲を滅盡するを專一とせし人の心に愚癡なきと、處の生起とを見て、〔我が〕心解脫せり。

【六四二】善く解脫を得、心寂靜に歸し、既に爲し終へたるものは更に〔業を〕積むことなし、〔彼に〕爲すべきことなし。

【六四三】恰も一塊石より成れる山の風のために搖がされざるが如く、同じく色味聲香觸等總て、

【六四四】可愛不可愛の法も亦、斯る人〔の心〕を動かすことなし、其の心は住立し、繫結を離れ、又滅盡を觀る。

右ソーナ・コーリギサ長老

〔一〕法句經三七〇偈註參照。

十四頌品第十四

【六四五】我在家より出でて出家の身となりし以來、卑く〔且つ〕過ある思惟の、我に起りしことを知らず。

【六四六】此等の生類を打ち、屠り、苦に至らしめんと、此の長時の間、我に斯る思惟起りしことなし。

【六四七】無量の慈心の善く修練せられ、佛の教に隨ひて次第に積集せられたることを知る。

【六四八】あらゆるものを親とし友とし、あらゆる生類を哀愍する我、常に不瞋恚を樂み、慈愛心を修練す。

【六四九】我動かす、搖がざる心を悦ぶ、我善人の行へる梵行を修習す。

【六五〇】非尋に逮達せる、正徧覺者の弟子は、直に聖き沈默に達してあり。

【六五一】恰も石山の聳立して動かざるが如く、同じく比丘は愚癡を盡したるが故に、撼かざること山の如し。

【六五二】執著なくして、常に清淨を求むるものには、毫末量の邪惡も、虚空の大にぞ見ゆる。

【六五三】邊地にある都城を、内外より防護するが如く、等しく自己を防護せよ、瞬時も空過せしむることなかれ。

【六五四】我は死を欣はず、我は生を欣はず、恰も務を終りたる奴僕の如く、時の至るを待つ。

【六五五】我は死を欣はず、我は生を欣はず、正覺正念にして、時の至るを待つ。

【六五六】我師に奉事し、佛の敎を成せり、我重荷を卸し、生有の因を滅せり。

【六五七】我は彼の利益「を成せん」がために在家を出でて、出家得度せしが、今其の利益を成就し、あらゆる結縛を斷じ盡したり。

【六五八】精勤にして成せよ、之我が敎誡なり、今我圓寂に入らん、我は隨處に解脱を得たり。

右レーヴタ長老

【六五九】譬へば生善く、勝れたる「牛」の荷に繫がれ、荷を運ぶに、過度の重に壓されて「而も」軛を離るることなきが如く、

【六六〇】等しく智に飽滿せること、海の水に〔滿てる〕が如くなる人は、他人を輕侮することなし、之生類の賢き法なり。

【六六一】時〔の內〕にありて、時に降伏し、生有非有に降伏せる人人は苦を受く、此の青年の人は此の處にありて憂苦す。

【六六二】樂の法によりて上げられ、苦の法によりて下さる、如實に識知せざる愚人は、〔苦樂〕兩者のために惱まさる。

【六六三】苦惱の上に快樂の上に、又中〔道〕の上に欲念を超越せるもの、彼等は住立して恰も門柱の如く、彼等は煽られ壓へらるることなし。

【六六四】所得あるにも、所得なきにも、名譽にも令聞にも、批難にも稱讚にも、また苦痛にも安樂にも。

【六六五】彼等一切處に染著することなき、猶ほ蓮葉の上の水滴の如し、勇者は一切處に安樂を得、一切處に敗亡するなし。

【六六六】法によるが故に得ざると、不法なる利得とは、法に合うて得ざるこそ、不法の利得に勝りたれ。

【六六七】覺少きものの譽高きと、智ある人の譽なきとは、智ある人の譽なきこそ、覺少きものの譽高きに勝りたれ。

【六六八】智鈍きものに稱歎せらるると、智ある人に誹謗せらるるとは、智者に誹謗せらるるこそ、愚者に稱歎せらるるに勝りたれ。

【六六九】欲より出る安樂と、遠離に伴ふ苦惱とは、遠離に伴ふ苦惱こそ、欲より出る安樂に勝りたれ。

【六七〇】非法によりて生ると、法によりて死するとは、法に合へる死こそ、非法にして生るに勝りたれ。

【六七一】欲望と忿怒とを捨て、生有より生有に心寂靜に歸せるものは、世に依著なくして遊行す、彼等には愛なく〔また〕非愛なし。

【六七二】〔七〕覺支、〔六〕根、また〔五〕力を修習し、最上の寂止に達し、無漏にして涅槃に入らん。

右ゴーダッタ長老

十六頌品第十五

【六七三】大味ある法を聽いて、我益之を信す。說き示されたる時は欲貪を離れ、一切處に著することなし。

【六七四】此の世界地輪上にありて多の像は、欲貪を伴へる清淨の思惟を攪すが如し。

【六七五】猶ほ風のために揚げられたる塵埃を雨の鎮むるが如く、等しく智を以て見る時は思惟息止す。

【六七六】「一切諸行は無常なり」と、斯の如く智を以て見る時、人は苦に厭嫌す、之清淨の道なり。

【六七七】「一切諸行は苦なり」と、斯の如く智を以て見る時、人は苦に厭嫌す、之清淨の道なり。

【六七八】「一切諸法は無我なり」と、斯の如く智を以て見る時、人は苦に厭嫌す、之清淨の道なり。

【六七九】長老憍陳如は出離の念鋭く、佛に次いで開悟し、生死を捨離して、梵行を完成したる人。

【六八〇】暴流、羂索、强き杙、碎き難き山、杙と羂とを斷ち、破り難き巖を破りて、彼禪思者は渡りて彼岸に達し、魔の縛より脱れたり。

【六八一】浮虛にして動轉する比丘は、惡友に親近し、波のために倒され、大海の中に沈む。

【六八二】浮虛ならず動轉せず、愼重にして諸根を攝し、善友ある智者は、苦惱の際を盡すものたるべし。

【六八三】四肢はカーラー樹の結節の如く、瘦せて脈管現る、飮食に量を知る人は、心貪しきことなし。

【六八四】深林大林の中にありて、虻または蚊のために螫され、〔而も〕戰場に〔臨める〕象の如く、正念を失ふことなくして之に堪へん。

【六八五】我は死を欣はず、我は生を欣はず、恰も務を終れる從僕の如く、時の到るを待つ。

【六八六】我は死を欣はず、我は生を欣はず、正覺正念にして、時の到るを待つ。

【六八七】我師に奉事し、佛の教を成せり、我重荷を卸し、生有の因を滅せり。

【六八八】我彼の利益のために在家を出でて、出家得度せしが、此の利益我今之を成せり、羣棲して我に何の效かある。

右阿若憍陳如長老

【六八九】人にして己を調柔し、定に住し、動作は梵天の道に則り、心の寂靜を悅びたまへる正覺者。

【六九〇】人は此の一切諸法の彼岸に達したまへる〔佛〕を禮拜し、諸天も亦之を禮拜すと、斯の如く我は阿羅漢に聞けり。

【六九一】一切諸結を超越し、(二)林より非林に來り、諸欲より脱るるを樂みとすること、黄金の鑛より「脱るる」が如し。

【六九二】彼(一)那伽は雪山林中にありて快樂極まり、あらゆる那伽の名あるものの中にて、眞に此の名に相應する最上者なり。

【六九三】我汝がために那伽を說かん、彼は惡を犯さざるなり、慈愛と不害と此の二は、那伽の兩足なり。

【六九四】正念と正覺と、此等は那伽の他の「兩足なり」、大那伽は信心を手とし、平靜「と云ふ」白牙あり。

【六九五】正念は首、智慧は頭、(三)思惟は(四)法思、和住は法腹、遠離は其の尾なり。

【六九六】彼の禪思者は入息を樂とし、內心善く定に住す、那伽は行くにも定に住し、那伽は立つにも定に住す。

【六九七】那伽は臥すにも定に住し、坐するにも定に住し、那伽はあらゆる場合に防護す、之那伽の成就なり。

【六九八】過なきを受け、過あるを受けず、食物と被衣とを得て、蓄積したるを斥く。

【六九九】細麤の繫結を「斷ち」、あらゆる纏縛を斷ちて、隨處に行くに、期望する所なくして到る。

【七〇〇】猶ほ水中に生じて、淨香あり、愛すべき白蓮の、水のために汙さるることなくして生長するが如く、

【七〇一】等しくまた佛は世に生れ出で、世に住し、「而も」世のために汙されたまはざること、猶ほ赤蓮

華の水に「汚れざる」が如し。

【七〇二】 點じたる大火も薪を與へざれば、消滅に歸す、餘燼存すとも、「既に消えたり」と稱せらる。

【七〇三】 此の義理を啓示すべき譬喩、識者により説明せられぬ、那伽によりて説明せられたる那伽を、諸大那伽は知識せん。

【七〇四】 貪より離れ、瞋より離れ、癡より離れ、漏あるなし、那伽は身を捨て無漏にして圓寂に入らん。

右ウダーイ長老

〔一〕 Vanaṁ nibbanaṁ には林、非林、有欲、無欲、離欲等の意義あり、されば此處は語を互にして見るを可とす。〔二〕 Nāga は過ぐるものなき義 (na+aga)、又惡を犯さざるの意 (na+agu) にて、龍、象、また人中優れたる人の意。〔三〕 vimanisa. 〔四〕 dhammacintana.

二十頌品第十六

【七〇五】 (一)或は祭祀のため、或は富財のため、我等の先に害せしもの、總て之怖畏にして、此等のものは震ひ且つ悲めり。

【七〇六】 汝には此の怖畏の狀なく、顏色益和悅す、斯る大怖畏あるに、汝何故に憂懼せざるや。

【七〇七】 (二)長よ、期望なきものには心中苦悶なし、繫結を盡したるものは、あらゆる怖畏を超越せり。

【七〇八】 生有の因を盡し、如實に法を見たるが故に、死に恐怖なく、恰も重荷を卸すが如くなり。

【七〇九】我善く梵行を修し、道をも善く修習したり、我死に恐怖なく、恰も病の癒ゆるが如し。

【七一〇】我善く梵行を修し、道をも善く修習したり、〔我〕生有の愛樂なきことを見、嚥みて捨てたる毒〔の如くせり〕。

【七一一】〔生死の〕彼岸に度りて、取著なく、務を終り、無漏なり、命の盡るに滿足せること、恰も刑場を免れたるが如し。

【七一二】㈢最上法性に達し、一切世間に欲なく、焚ゆる家より脱れたるが如く、死に〔當りて〕憂苦せず。

【七一三】集合せるもの、又生有を得るもの、之は總て依止なしと、大仙は斯の如く宣ひたり。

【七一四】佛によりて說かれたるが如く、斯の如く之を知るものは、生有を執ふることなきこと、恰も熾熱せる鐵丸の如し。

【七一五】我には「ありき」と云ふ〔思〕なく、「あらん」と云ふ〔思〕なし、諸行は滅盡せん、此處に何の憂懼かあらん。

【七一六】長よ、純なる法の生起と、純なる行の繁衍とを見ること如實なるものには、怖畏あることなし。

【七一七】草や薪に等しき世間を、智慧を以て見る時は、彼我有の念を有たず、「我に之なし」とて憂苦することなし。

【七一八】我身を厭嫌し、生有に欲望あるなし、これ此の身は破られ、他〔の身〕は更にあることなければなり。

【七一九】汝等〔我が〕身を以て爲すべきことあらば、望む所によりて之を爲せ、我には之を縁としてここに瞋恚も情愛もあることなけん。

【七二〇】彼の此の語を聞いて、希有にも身毛卓立しき、劍を抛ちて、諸青年等は下の如くいへり。

【七二一】「大德、何を爲してか、將た誰か汝の師たり、誰人の敎に依りてか、汝は此の無憂性を得たる。」

【七二二】「一切智者、一切見者、勝者は我が師範なり、大悲愍者、一切世間の醫者たる師なり。

【七二三】彼によりて此の滅盡に達する無上の法を說き示されたり、彼の此の敎によりて、〔我は〕此の無憂性を得たり。」

【七二四】盜賊等は仙士の善く說きたる語を聞いて、劍と〔他の兇〕器とを捨て、或者は其の業より離れ、或者は出家を樂へり。

【七二五】此等の識者は、善逝の敎に於て出家得度し、〔七〕覺支〔五〕力を修習して、心歡喜し、滿足して無爲涅槃の道に達しき。

右アヂムッタ長老

【七二六】沙門比丘パーラーパリヤの閑居、獨坐、禪思してありし時、〔下の如き〕思起りき。

【七二七】如何なる次第により、如何なる禁行と(四)行とに〔よりてか〕、人は自己の義務を果せるものなる、而して何人を害はざるや。

【七二八】人間の諸根は、利益となり、また不利益となる、護られざるは不利益となり、護られたるは利

益となるなり。

【七二九】諸根を護り、諸根を防ぎてぞ、人は自己の義務を果せるものなり、又何人をも害はざらん。

【七三〇】若し〔人〕諸の形色に走らんとする眼根を制せず、患難を見ることなくば、彼は苦惱より脫せず。

【七三一】若し〔人〕諸の音聲に連らんとする耳根を制せず、患難を見ることなくば、彼は苦惱より脫せず。

【七三二】未だ出離を見ざるもの、若し諸の香氣を嗅がば、彼は香氣に迷惑して、苦惱より脫せず。

【七三三】酸味甘味または辛味を記憶し、味欲に執著するものは、心覺醒することなからん。

【七三四】美にして快き諸の觸を記憶し、貪欲の根に染著せるものは、種種の苦惱を得。

【七三五】此等諸の法より、心を防止すること能はざるものは、其よりして、總て此の五〔根〕より、苦惱彼に追隨す。

【七三六】膿血に滿ち、また數多の死屍〔に滿てる身〕は、勝れる人の手に成り、彩られて美しき籃の如し。

【七三七】辛き甘味、苦しき愛の繫縛を覺らざること、蜜を塗りたる剃刀を〔覺らざる〕が如し。

【七三八】女の形貌、女の味、また女の觸、女の香氣、此等のものに染著するものは、種種の苦を得。

【七三九】婦女の孔穴は、總て五處五處に〔汁液を〕滲み出す、精進して此等を防止し得るもの、

【七四〇】彼は利益の人、彼は法住者、彼は巧妙、明辨の人なり、是れ〔彼〕法あり、義ある務を樂みて、爲すべきが故なり。

【七四一】不放逸にして明辨なる人は、(三)沈下を來すべき、利益なき務を、務と見做さずして斥けよ。

【七四二】利益の伴へることと、法によれる喜樂と、之を執して行へ、之ぞ最上の喜樂なる。

【七四三】種種の方便を用ひて他に克たんことを希ひ、打ち、殺し、更に憂苦し、暴力を以て他を侵し、

【七四四】猶ほ力ある人の〔物を〕割くに、橛を以て橛を拔くが如くす、巧慧の人は、諸根を制するに諸根を以てす。

【七四五】信心、精進、定念、慧を修習し、五〔力〕を以て五〔欲〕を打ち、婆羅門は往くに苦悶あることなし。

【七四六】彼は利益の人たり、法住者たり、總て佛の言敎を爲し行ひて餘す所なし、彼の人は安樂を加ふ。

右バーラーダリヤ長老

【七四七】熱誠にして法を追憶すること長時、沙門婆羅門に問うて、〔而も〕心の安靜を得ざりき。

【七四八】此の世に於て彼の彼岸に達せるものとは誰ぞ、誰か無滅〔の法〕に達せる、誰人の法にして最上義に通せしむるものをか、我は受取せん。

【七四九】餌を食ふ魚の愚にして鉤に懸れるが如く、恰も〔六〕エーバチッチ阿修羅王の大因陀羅の羂に縛せられたるが如くなりき。

【七五〇】我は〔七〕之を曳摺らん、我は此の憂苦より脱れん、誰か此の世に於いて、我が縛を解き、正覺を得せしむるぞ。

【七五一】何の沙門婆羅門か、我は〔其の〕斷絕を指示する、何人の法にして老死を排除するものをか、我は受取せん。

【七五二】疑惑、猶豫と絡まり、議論の力と結び、忿怒を得、心戻にして、貪欲と、

【七五三】愛欲の弓より放たれたるもの、(八)三十〔の身見邪見〕と結べるもの、凡そ立てるものは、之を破りて、己の力を見よ。

【七五四】他の諸の見を捨てず、思惟、追憶によりて益熾ならしめたる、我之がために衝かれて動轉すること、恰も風に搖がさるる木葉の如し。

【七五五】我有の念は、我が內心に起りて疾く熟するに至る、身は六の觸處にして、〔我有は〕常に此處に發出す。

【七五六】我未だ疑惑なる我が此の箭を拔くに、探針を以てして、他の刀を以てせざる醫者を見ず。

【七五七】誰か刀なく傷なくして、我が內心にある箭、總て我が四肢を害はずして、我が箭を拔かんや。

【七五八】彼の最尊にして毒と過とを排除したまふ法主は、深處に陷りたる我に、陸を〔示し〕手を示したまはん。

【七五九】我は沼の中にあり、除き難き塵埃の側に祕む、虛僞、嫉妬、議論、昏沈、隨眠の蔓れる中にあり。

【七六〇】染欲によれる思惟の車乘は、調戲の雷、繫結の雲、橫邪の見を運載す。

【七六一】流は四方に流れ、蔓は芽を生じて存す、誰か此等の流を防ぎ、誰か此の蔓を斷たん。

【七六二】大德、流を防止する堤防を築け、汝の心より生ぜる流をして、暴力を以て樹を擊つが如くせしむることなかれ。

【七六三】斯の如く我が恐怖を生じ、此岸にありて彼岸を索むるに依止處となりたまひしは、仙士の羣に圍繞せられ、智慧を武器としたまへる師なりき。

【七六四】水に流さるる我に對し、構よく、淸く、法の精を以て造りて強き階を與へたまひ、尙ほ「恐るることなかれ」とも我に宣ひたり。

【七六五】念處の樓閣に上りて、我は先に身見を愛樂せりと思ひし輩を觀察したりき。

【七六六】我船に上るべき道を見しとき、己に住止することなくして、最上の埠頭を見たり。

【七六七】己より出で、生有の因より生ずる箭、此等を止めんがために、最上の道を說き示したり。

【七六八】長時我に隨臥し、長夜定著したりし我が結縛を、毒と過とを除きたまふ佛は、我がために拂ひたまへり。

右テーラカーニ長老

【七六九】飾りたる像、瘡腫の塊、病を懷き、多の思惟を有てる積集の身を見よ、之に確固なく、住立なし。

【七七〇】摩尼珠と耳環とを以て飾り、骨と皮とを以て組みたる色身を見よ、衣服を以て美しきなり。

【七七一】足には蟲脂を塗り、顏には香粉を施せり、これ愚人愚迷のためには可矣、「されど」彼岸を求むるものには然らず。

【七七二】髮は組みて八辮となし、眼は安繕那膏を塗れり、之愚人愚迷のためには可矣、彼岸を求むるものには然らず。

【七七三】新しくして飾ある安繕那壺の如く、腐臭の身は裝飾せらるゝ、之愚人愚迷のためには可矣、彼岸を求むるものには然らず。

【七七四】獵夫羂を設け、鹿は之に繫らず、餌を食ひ盡して、「獸獵者は泣悲めり、我等は去らん」と云ふ。

【七七五】獵夫の羂は破られ、鹿はこれに繫らず、餌を食ひ盡して、「獸獵者は憂へ悲めり、我等は去らん」と云へり。

【七七六】此の世にありて財ある人を見るに、愚にして財を得て「而も」施すことなし、慳貪の人は財を蓄積し、諸欲を貪ることまた益甚し。

【七七七】王は暴力を用ひて地上を征服し、全地海に至るまで併せ有して、海の此方にては滿足せず、海の彼方をも得んと求む。

【七七八】王者も他の多の人人も、愛欲を離れざるに死に會ひ、未だ十分ならざるに身を捨つ、これ此の世に於て諸欲を滿すことなければなり。

【七七九】親族のものは髮を亂して其を泣き悲み、また「願くは我等不死なれ」といふ、衣服を以て包みたるを外に運び、火葬堆を組みて其より荼毗に附す。

【七八〇】彼は串を以て刺され、富財を捨て、單一衣にして燒かる、死せるものには、親族朋友または同人も依止にあらず。

【七八一】嗣續者は彼が財を持ち去る、人は其の業によりて赴くものなり、死せるものには財は隨ひ行か

ず、兒も妻も財も國も〔隨ひ行かず〕。

【七八二】財によりて長壽を得ず、富によりて老を滅さず、これ賢者は彼の壽命を少量なり、無常なり、變壞の法なりと稱すればなり。

【七八三】富めるも貧しきも共に〔死の〕觸に觸る、愚なるも賢なるも同じく觸れらる、愚者は愚に打たれて臥し、賢者は〔死の〕觸に觸れて震ふことなし。

【七八四】されば智こそは財に勝りたれ、智によりて〔人は〕此世に於て終末に達す、終末に達せざるよりして、愚癡のものは生生邪業を犯す。

【七八五】人は輪廻界に入りて次第に胎に入り、また他の世界に入る、其の少智にして〔而も〕信心あるものは胎に入り、また他の世界に入る。

【七八六】恰も盜賊の現行中捕へられ、己の業によりて、邪法のものは滅さるるが如く、同じく羣衆は來生、他の世界に於て、己の業のために、邪法あるは滅さる。

【七八七】諸欲は美しく、甘く、愛すべく、種種の形色によりて心を攪す、されば大王、我は諸欲の上に患難を見て出家したり。

【七八八】弱齢の青年も老年も、身體の壞るるや、樹果の落つるが如くなり、大王、我は之をも見て出家せしなり、眞の沙門道こそ勝りたれ。

【七八九】我信心によりて出家し、勝者の敎に入れり、我が出家には失なし、我負債なくして食を受けん。

【七九〇】諸欲を見ること熾火の如く、黃金を「見ること」刃の如く、胎に下るより來る苦と、地獄の大苦とを見、

【七九一】此の患難を見て、我は其の時震驚しき、我は其の時刺されて、諸漏の滅盡に達せり。

【七九二】我師に奉事し、佛の教を成就したり、我重擔を卸し、生有の因を滅せり。

【七九三】我、彼の利益のために、在家を出でて、出家得度せしが、今其の利益を成就し、あらゆる結縛を斷じ盡せり。

右ラッタパーラ長老

【七九四】色を見て愛相を思惟するものは、正念を妄失す、染著の心あるものは「色を」感受し、且つ之を愛執して存す。

【七九五】色より生ずる彼が種種の受と貪と害とは增長し、其の心は苦惱に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。

【七九六】聲を聞きて愛相を思惟するものは、正念を妄失す、染著の心あるものは「聲を」感受し、且つ之を愛執して存す。

【七九七】聲より生ずる彼が種種の受と貪と害とは增長し、其の心は苦惱に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。

【七九八】香を嗅ぎて愛相を思惟するものは、正念を妄失す、染著の心あるものは「香を」感受し、且つ之

を愛執して存す。

【七九九】香より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増長し、其の心は苦惱に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。

【八〇〇】味を喫して愛相を思惟するものは、正念を妄失す、染著の心あるものは「味を」感受し、且つ之を愛執して存す。

【八〇一】味より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増加し、其の心は苦惱を受く、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。

【八〇二】觸に觸れて愛相を思惟するものは、正念を妄失す、染著の心あるものは「觸を」感受し、且つ之を愛執して存す。

【八〇三】觸より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増加し、其の心は惱害を蒙る、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。

【八〇四】法を知りて愛相を思惟するものは、正念を妄失す、染著の心あるものは「法を」感受し、且つ之を愛執して存す。

【八〇五】法より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増加し、其の心は惱害に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。

【八〇六】彼は諸の色に染せられず、色を見て正念を失はず、離染の心を以て「色を」感受し、且つ之に愛

執せずして存す。

【八〇七】色を見、或はまた受を感ずること彼が如くならば〔其の苦は〕滅せられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す。斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。

【八〇八】彼は諸の聲に染せられず、聲を聞きて正念を失はず、離染の心を以て〔聲を〕感受し、且つ之に愛執せずして存す。

【八〇九】聲を聞き、或はまた受を感ずること彼が如くならば〔其の苦は〕滅せられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。

【八一〇】彼は諸の香に染せられず、香を嗅ぎて正念を失はず、離染の心を以て〔香を〕感受し、且つ之に愛執せずして存す。

【八一一】香を嗅ぎ、或はまた受を感ずること彼が如くならば〔其の苦は〕滅せられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。

【八一二】彼は諸の味に染せられず、味を喫して正念を失はず、離染の心を以て〔味を〕感受し、且つ之を愛執せずして存す。

【八一三】味を喫し、或はまた受を感ずること彼が如くならば〔其の苦は〕滅せられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。

【八一四】彼は諸の觸に染せられず、觸に觸れて正念を失はず、離染の心を以て〔觸を〕感受し、且つ之に

愛執せずして存す。

【八一五】觸に觸れ、或はまた受を感ずること彼が如くならば〔其の苦は〕滅せられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。

【八一六】彼は諸の法に染せられず、法を知りて正念を失はず、離染の心を以て〔法を〕感受し、且つ之に愛執せずして存す。

【八一七】法を知り、或はまた受を感ずること彼が如くならば、〔其の苦は〕滅せられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。

右マールンキャプッタ長老

【八一八】圓滿の身、善美にして、生よく、愛すべし、世尊、汝は金色なり、汝は皓白歯なり力用の人なり。

【八一九】生よき人にある相好、此等大人の相は、總て汝の身にあり。

【八二〇】清明なる眼、大にして端しく、嚴かなる好き顔ありて、沙門團の中に光を放つこと、恰も太陽の如し。

【八二一】相貌美く、黄金に似たる膚ある比丘、斯く優れたる色ありて汝沙門となりて何の利益かある。

【八二二】汝は王、轉輪王、四方の主、征服者、閻浮洲の君たるに適せり。

【八二三】刹帝利種、富財の王も汝の附随者たらん、「瞿曇、諸王中の王者、人間の主、王子を領理せよ。」

【八二四】世尊宣はく「セーラ、我は王なり、無上の法王なり、法によりて輪を轉ず、轉せられざる輪を。」

【八二五】セーラ言はく「汝瞿曇、正覺者、婆羅門、無上の法王と名乘り、法を以て輪を轉ずと云ふ。

【八二六】誰か尊の軍帥、師の嗣續の弟子なる、誰か此の轉ぜられたる法輪を倣ひて轉ずる。」

【八二七】世尊宣はく「セーラ、我が轉じたる輪、無上の法輪を、如來隨生の舍利弗は倣ひて轉ず。

【八二八】識知すべきものを識知し、修習すべきものを修習し、捨棄すべきものを我は捨棄したり、されば婆羅門、我は佛にぞある。

【八二九】我に關する疑惑を除け、信ぜよ、婆羅門、正等覺者を常に見ることは有り難し。

【八三〇】其の常に世に現ることは有り難し、婆羅門、我はこれ覺者なり、無上の醫者なり。

【八三一】至高無比にして魔軍を伏するもの、あらゆる敵に克ち、四方懼る所なくして喜ぶ。」

【八三二】セーラ言はく「諸友、具眼者の語る所を聞け、彼は醫師なり、大雄者なり、林閒の獅子の如く吼ゆ。

【八三三】至高無比にして、魔軍を克服するものを見て、誰か信仰せざらん、假令黑族の生ならんとも。

【八三四】（九）我に〔伴はんと〕願ふものは伴へ、また願はざるものは去れ、我は此處に、勝智者の側にありて出家せん。」

【八三五】「尊、若し正徧覺者の此の教を喜ばば、我等も亦勝智者の側にありて出家せん。」

【八三六】此等三百の婆羅門、合掌して願ふらく「世尊、我等、汝の側にありて梵行を修せん。」

【八三七】「セーラ、現生、卽時に〔果を齎す〕梵行は善く說かれたり、精勤に修學する人の、此の處にあ

りて出家するは徒爾にあらず」と世尊は宣ひき。

【八三八】「具眼者、世尊、我等は今より先第八日、汝に歸依して、七夜に汝の教に調御を得たり。

【八三九】汝は佛、汝は師、汝は魔羅に克てる牟尼、汝は（一〇）愛著を破りて、自ら〔生死の流を〕度り、〔更に〕此の羣生を渡す。

【八四〇】汝は生の素質を超え、諸漏を盡せり、〔汝は〕取著なく、恐怖畏懼を捨てて、獅子の如し。

【八四一】此等三百の比丘は、掌を合せて立てり、雄尊、足を伸せ、諸龍象、師〔の御足〕を禮せよ。」

右セーラ長老

【八四二】我がために象の首に柔かなる被衣は敷かれ、我はサーリ稻の飯に淨き肉を撒きたるを食ひしが、

【八四三】我今日運よく、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八四四】塵衣の受用者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八四五】常乞食者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八四六】但持三衣者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著な

して禪思す。

【八四七】次第乞食者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八四八】但一坐食者にして、根よく、遺穗の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八四九】鉢乞食者にして、根よく、遺穗の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五〇】不重受食者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五一】阿練若住者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五二】樹下住者にして、根氣よく、遺穗の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五三】露地住者にして、根氣あり、遺穗の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五四】冢間住者にして、不屈不撓なり、遺穗の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは。

取著なくして禪思す。

【八五五】隨處住者にして、根氣強く、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五六】常坐者にして、根氣よく、遺穗の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五七】少欲者にして、根氣よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五八】知足者にして、根氣強く、遺穗の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八五九】遠離者にして、根氣よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八六〇】非交遊者にして、精力強く、遺穗の鉢に來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八六一】精勤者にして、根氣強く、遺穗の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッヂャは、取著なくして禪思す。

【八六二】價貴く、黄金と蟲脂とを以て造れる鉢を棄て、土製の鉢を取れり、之我が第二の灌頂なり。

【八六三】先には我高く圓形なる城壁の中に、堅固の望樓ある家に、劍を手にする人に護られ、「而も」恐懼して住せり。

【八六四】我今日運よく恐懼なく、恐怖畏懼を捨て、ゴーダーの兒バッヂャは、森林に入りて禪思す。

【八六五】戒蘊の上に住立して、念と智とを修習し、次第に一切繫結の滅盡に達せり。

右カーリ・ゴーダーの兒、バッヂャ長老

【八六六】沙門、汝は行きつつ、「我は立住まれり」と云ひ、また我が立住まれるに、「立住まらず」と云ふ、沙門、汝に此の義を問ふ、如何なれば汝は立てるに、我は立てるにあらざるや。

【八六七】アングリマーラ、我は常にあらゆる生類に對し、(一)害意を捨てて立つ、然るを汝は生類に對して自制心なし、されば我は立ち汝は立たざるなり。

【八六八】久しい哉我が大仙を崇拜したることや。沙門大林に入らせたまへり、我敎を含める汝の偈を聞いて、千の罪惡を棄てん。

【八六九】斯の如くして、盜賊は、刀と武具とを穴、崖、那落に投じ、盜賊は善逝の御足を禮し、其處にありてぞ佛に出家を願ひたる。

【八七〇】佛はまた悲愍の大仙、人天兩界の師、其の時彼に向ひて「來れ、比丘」と宣ひき、之ぞ彼の比丘たることとなりける。

【八七一】人の、先に放逸にして、後に放逸ならざるもの、彼此の世を照すこと、雲を離れたる月の如く

なり。

【八七二】人の作したる惡業、善の爲に覆はるれば、彼此の世を照すこと、雲を脱れたる月の如し。

【八七三】若齡の比丘の、佛の敎に勤むもの、彼は此の世界を照すこと、雲を脱れたる月の如くなり。

【八七四】我が敵、法の談を聽け、我が敵、佛の敎に勤しめ、我が敵、法を領納せしむる、此等安靜の人人に交はれ。

【八七五】我が敵、忍辱を談じ、和合を讚する「人人」の敎を、折折に聽聞し、且つ之に順ひ行へ。

【八七六】斯の如き「敵」は必定して、我をも亦他の何人をも害ふことなく、最勝の寂靜に達し、強きをも弱きをも護らん。

【八七七】渠工は水を導き、箭工は箭を矯む、木工は材を曲げ、賢人は己を調ふ。

【八七八】或ものは杖を以て、鉤叉は鞭を以て矯む、我は斯の如き杖と刃とを以てせずして、調柔に歸したり。

【八七九】先に我意念ありて「他を」害するものたりしに、我が名を「不害」と稱へき、今日我眞實の名を得たり、我は何人をも害ふことなし。

【八八〇】我、先には盜賊にして、アングリマーラとして知られき、大水のために流されて、佛に歸依するに至りぬ。

【八八一】我、先には血染の手にして、アングリマーラと稱せられき、「我が」歸投を見よ、生有の因は滅

せられたり。

【八八二】苦趣に導くべき斯の種の多の業を作して、業果に觸れられ、負債なくして食を受く。

【八八三】愚にして智劣れる輩は、放逸に耽り、智ある人は不放逸を護ること、最勝の珍寶の如くす。

【八八四】怠惰に耽ることなかれ、欲樂の愛著に〔耽ること〕なかれ、精勤にして禪思あるものは、最上の安樂を獲ん。

【八八五】分別せる諸法の中に於て、(三)最勝なるものに我は達しぬ。これ我善く到れるなり、惡く到れるにあらず、〔而して〕我が之を度量せるや邪ならざりき。

【八八六】我三明に逮達し、佛の教を成就したり、これ我善く到れるなり、〔而して〕我が之を度量せるや、邪にあらず。

【八八七】林中に、若しは樹下に、山間に、若しは窟中に、我は其の時怖えたる心を以て、處處にぞ立ちつる。

【八八八】我安樂に臥し、立ち、安樂に生活を營みて、魔羅の羂に懸らず、嗚呼、我は師の慈愍を蒙れり。

【八八九】我先には父母兩系共に高き婆羅門族の生なりき、今は我善逝、法王、師の兒なり。

【八九〇】愛欲を離れ、取著あることなく、〔六根〕門を護り、よく自ら制し、邪惡の根本を斷ちて、我は漏盡に達せり。

【八九一】我師に奉侍し、佛の教を成就せり、我重擔を卸し、生有の因を滅せり。

右アングリマーラ長老

【八九二】父母、姉妹、親族を捨て、五種の欲を捨てて、アヌルッダは禪思す。

【八九三】舞踏、唱歌に伴はれ、鐃鉢の〔響に連れて〕醒めしが、魔羅の境界を樂みし我は、之によりて

(三)清淨を獲ることなかりき。

【八九四】之をも超えて佛の敎を樂とし、あらゆる暴流を超えて、アヌルッダは禪思す。

【八九五】色聲香味と愛すべき觸と、此等をも亦超越して、アヌルッダは禪思す。

【八九六】牟尼は受食を終り、單獨にして第二人者なく、無漏なるアヌルッダは塵衣を尋ぬ。

【八九七】牟尼は塵衣を選び、取り、洗ひ、染め、被著したり、有慧無漏のアヌルッダは。

【八九八】大欲あり、不知足、輕噪にして交際を好むもの、此等の邪惡にして染汚なる諸法は、斯の如き人の〔法〕なり。

【八九九】正念、少欲、知足、非破壞的にして閑居を樂み、智慧ありて精勤なり。

【九〇〇】此等善良にして、菩提の支分たる諸法は、斯の如き人の法にして、彼はまた無漏なりと、斯く大仙は宣へり。

【九〇一】我が思惟する所を知りて、世の無上なる師は、心所造の身を以て、神通によりて近きたまひき。

【九〇二】我が思惟せし所、之よりも上なるを說きたまひ、亂想を解くを樂みたまへる佛は、非亂想を說きたまひき。

【九〇三】我其の法を知りて、教を樂みて住しき、三明に通達し、佛の教を成就したり。

【九〇四】五十五年の間、我は自ら制せる[常坐]不臥者、二十五年の間、我は自ら制して懶惰を泯せり。

【九〇五】斯の如く心安立せるものには、入息出息なし、無欲なる具眼者は、寂靜によりて圓寂に歸せん。

【九〇六】毅然たる心を以て、受を降伏しき、心の解脫は、燈火の滅するが如くなり。

【九〇七】今や此等の觸を第六とせるものは、牟尼の最後[身]なり、正覺者入滅したまはば、他の法[生ずること]なからん。

【九〇八】今や天界に於て、再び有網の住居なく、生[死]輪廻は斷じ盡され、今や再生あるなし。

【九〇九】彼の比丘は、大梵天王の如く、一瞬時間に世間を見ること一千方、諸種の神通力を具へ、[人天の]生死と其の時機とを見る、天子よ。

【九一〇】(一四)我昔(一五)アンナバーラと呼べる、貧しき食物運搬者にして、譽高き沙門(一六)ウパリッタに供養を爲しき。

【九一一】我釋氏族に生れ、アヌルッダとして知られたり、舞踏唱歌に伴はれ、鐃鉢の音に連れて目覺めき。

【九一二】其より正覺者、怖畏なき師を見奉り、信心を起し、出家得度しき。

【九一三】我が往昔住みし所のままに、宿住を知り、帝釋天の生によりて、三十三天の中に立てり。

【九一四】七たび人主として、國事を領理し、四方の主、勝利者、閻浮洲の君として刀杖を用ひず、法を

以て〔民を〕訓誡しき。

【九一五】之より七〔輪廻〕、之より〔七輪廻〕と、十四の輪廻を、其の時我は天上界に立ちて知識しぬ。

【九一六】五分の定に於て、寂靜、(一七)單一の修習に於て、我輕安を獲、我が天眼を淨うしぬ。

【九一七】群生の生死、去來を知り、五分の定に立ちて、〔群生の〕斯くなり、斯くならざるをも〔知りき〕。

【九一八】我佛に奉事し、佛の教を成就したり、我重擔を卸し、生有の因を滅せり。

【九一九】伐地族のヱールブ村にて命盡き、下の竹林中に於て我は無漏にして入滅せん。

右アヌルッダ長老

【九二〇】花咲ける大林中に閑居して〔心を〕一境にし、坐して禪思せる沙門の思は下の如くなりき。

【九二一】「世尊・人中最上者の世に存したまふや、比丘の威儀は異らざりしが、今や異れるが如し。

【九二二】如何なるものにも滿足して、之もて寒風を防ぎ、陰所を蔽ふに、適度の量を受用しぬ。

【九二三】美味なる、或は不味なる、少き、或は多きを貪らず、惑はず、唯生命を繫がんがために受用しぬ。

【九二四】汝の漏結盡くるや、生活の要具、藥物、更に〔他の〕物品に對して、強き欲念あらざりき。

【九二五】林中に、樹下に、岩窟の間に、幽靜の情を長じつつ、其を目的として住しき。

【九二六】謙遜に、節儉に、溫柔にして、心剛愎ならず、優美にして饒舌ならず、〔自他の〕利を思ふに心專なり。

【九二七】其より、行く所、食ふ所、受用する所、愛すべく、威儀は宛然滑かなる油河の如し。

【九二八】あらゆる漏結を盡したる大禪定家、大慈利者、斯る長老は今や涅槃に入れり、斯の如きは今や少し。

【九二九】善法と智慧との消盡によりて、一切善勝の方を具備せる勝者の教は滅さる。

【九三〇】邪法と、塵勞の時季と、遠離顯現と、正法特異の時季と、

【九三一】此等塵勞は增加して衆多の人に入り、愚人を弄ぶこと、猶ほ羅刹の狂を「弄ぶ」が如く見ゆ。

【九三二】彼等は塵勞のために、彼此「の塵勞」のために敗られ、自ら攝り、或は公告せる塵勞物の上に奔馳す。

【九三三】彼等正法を捨てて互に相諍はん、邪見に隨ひて之を最上なりと思はん。

【九三四】彼等財と兒と妻とを捨て家を去りたるもの、一匙の量の乞食のためにも、爲すまじきことを行はん。

【九三五】腹に滿つるまで食ひて、(八)背を下にして臥し、目覺めては談話・師の禁じたまひし談話をなす。

【九三六】總て技工の術を尊重して學び、內心安靜ならずして、沙門道を求むと云ひて徒坐す。

【九三七】土、油、洗粉、水、座牀、飮食等、在家人の捧ぐるものは、之を求むること多量なり。

【九三八】楊枝と(九)カピッタ果と花の食ふべきものと、豐富なる搏食と、菴羅果と阿摩勒果と。

【九三九】藥物の上に於ては醫者の如く、爲すべき・爲すまじき事の上には俗人の如く、莊飾には遊女の如く、權威には刹帝利種の如し。

【九四〇】彼等は二心ある者、詐欺者、僞證者、瞞著者にして、多の手段を以て財施を受けん。

【九四一】計略に適せる手段や意向に奔走し、生活のために方便を用ひて多の財を引き寄す。

【九四二】集會を起すには、業のためにして法のためにせず、他人のために法を說いては、利得のためにして法義のためにせず。

【九四三】教團の外にありて、教團の利得を爭ひ、他人の所得を受用し、無慚にして愧ぢず。

【九四四】或は頭を剃り、僧伽梨衣を纏へるものは、斯の如く耽著するなく、利得名聞に放心して、名譽をのみぞ求むる。

【九四五】斯くして種種の事去れるに當り、今や先の如くに之を爲すことは容易ならず、觸れざるものに觸れ、既に觸れたるものを護ることは「又容易ならず」。

【九四六】譬へば正念を現前せしめ、履なくして荊棘の地を行くが如し、牟尼は斯の如く行履すべし。

【九四七】往昔の行者を思ひ、彼等の梵行を憶念して、假令今日最後なりと雖も、無滅の道に觸れよ。」

【九四八】沙羅樹林に於いて、之を語りて、諸根を修練せる沙門、婆羅門「大」仙、再生を斷盡せる人は、圓寂に歸せり。

〔一〕長老或時獨り行きて盜賊の群に捕へられ、泰然自若たりしより賊の首領偈を以て長老に問へり。〔二〕以下七一九偈迄アヂムッタ長老の答辯なり。〔三〕Uttamadhammata 最上法の性質、情態、又は最上の法たることの意。〔四〕Vata 上三四二偈の註を見よ。〔五〕巴利原典出版協會の版本には atho sīlati saññuttaṁ とあれど之にては意義通じ難きによりて同版本の脚註によりて adhosīlaṁ saññuttaṁ を取れり、下に沈むことと翻譯せる、沈下の伴ふべき。〔六〕Vepacitti 毗摩質多羅。〔七〕魚鉤。〔八〕deva

ca paññasā-yuta 二重の十五と混ずるの意、之は二十の身見と十の邪見とを指すといふ。〔九〕己に隨へる婆羅門等に對ひて云ふ。〔一〇〕anusaya 惰眠。〔一一〕法句經一四二偈註。〔一二〕〔一三〕涅槃。〔一四〕此の二偈はアヌルッダの前生物語の如し。〔一五〕Annabhāra 食荷、食物を荷物として運搬する人の意か。〔一六〕Uparittha 上に立てる人の意、固有名詞と見ざるも、意通ぜざるにあらず、リス・デビッ夫人の譯に隨ひ兩者とも固有名詞と見たり。漢譯中阿含經十三卷說本經に「我憶昔貧窮、唯仰捃拾活、闍己供沙門、無患最上德、因此生釋種、名曰阿那律」といへる、併せ見るべし。〔一七〕ekodibhāvita.〔一八〕背を下にし、仰向に臥するは稚兒の法にして比丘は右脇を下にして臥するが法なり。〔一九〕kapittha 學名 Feronia elephantum.

三十頌品第十七

【九四九】心を莊嚴し、自ら攝せる、多の愛すべき〔比丘衆〕を見て、バンダラサ姓の仙人は、ブッサと呼べる〔人〕に問ひて云へり。

【九五〇】「未來に於て、如何なる欲望の〔人〕、如何なる意志の〔人〕、如何なる擧動の〔人〕かある、問はれて汝、我に之を語れ。」

【九五一】「バンダラサと呼ぶ仙人、我が言ふ所を聽け、好く之を思念せよ、我〔汝がために〕未來を語らん。

【九五二】未來に於ては、忿り又は恨み、〔己の惡を〕覆ひ、剛愎にして詐僞心あり、嫉妬心あり雜言を吐くもの多からん。

【九五三】〔己れ〕法を識知せりと思ひ、〔而も〕深海の邊に立てるものは、法を輕んじて重からず、且つ互に相恭敬することなし。

【九五四】未來世に於て世に多の患難起らん、劣智慧〔の輩〕は善く說かれたる此の法を汙さん。

【九五五】(一)會議に際しては、假令德卑くとも、大膽に陳述する饒舌無學のもの、優勢の人たらん。

【九五六】會議に際しては假令德具はれりとも、正義に隨ひて陳述する、彼の慚恥心あり、〔而して〕欲念なきものは劣勢ならん。

【九五七】未來世に於ては劣智慧〔の輩〕金及び銀、田地、宅地、山羊、羊、奴婢とを愛好せん。

【九五八】愚にして怒り易く、戒に於て心を安定せず、虛誇にして爭鬪を樂とする獸〔の如き輩〕橫行せん。

【九五九】又輕浮にして、碧色の衣服を纏へるものあらん、詐欺心あり、頑固に、而も巧辯にして交際に巧なるもの、貴人の如く濶步せん。

【九六〇】油を以て髮を滑かにし、眼に(二)安繕那藥を〔塗りたる〕輕躁〔の輩〕は、牙色の衣服を纏うて、街路を行かん。

【九六一】善く染めたる阿羅漢の(三)幢旗は、解脫せる人の嫌はざる所なり、〔然るに〕白衣に戀著せる輩は、〔此の〕六袈裟衣を嫌はん。

【九六二】利得を望み、怠惰にして精勤乏しく、邊土の林閒を厭ひて、村落の中に住止せん。

【九六三】常に邪なる生活を樂みて利益を得んものに從はん、〔彼の〕自制心なくして〔他の行に〕倣ふものは。

【九六四】利益を得ざるものは恭敬すべからざらん、假令好愛すべき賢者なりとも、〔利を得ざる〕時は人

之に隨事せざらん。

【九六五】己の(四)幢旗を賤みて、蠻民の染めたる紅きを〔著け〕、或は外道輩の(五)白き幢旗を護持せん。

【九六六】其の時は又た彼等(六)袈裟に對して、尊敬を拂はざるべく、比丘も亦た袈裟に對して、省察することなからん。

【九六七】苦のために打勝たれ、矢を以て貫かれて痛み惱める象の省慮は大恐怖なりき、不可思議なりき。

【九六八】其の時六牙の象は深紅なる應供者の幢旗を見、即時に意味深き偈を唱へけり。

【九六九】「人にして煩惱なきものこそ、黃色の衣服を著くべけれ、調御なく實語なきもの、彼に黃衣は應はしからず。

【九七〇】既に煩惱を捨て、戒に於て善く安住し、調御と實語とある人、彼にこそ黃衣は應はしからめ。

【九七一】破戒劣智邪曲にして、諸欲に放縱にし、心散亂して憤勵乏しきもの、斯の如き人には、黃衣は應はしからず。

【九七二】人にして戒を具へ、貪欲を離れ、安定に住し、心思惟潔白なるもの、彼にこそ黃衣は適すべけれ。

【九七三】輕噪、浮誇の愚人にして戒なきもの、彼にこそ白衣は適せめ、〔彼〕黃衣を何にかせん。

【九七四】若しは比丘、若しは比丘尼の心汚れ、恭敬の念なきもの、未來世に於て、此れ等慈悲心ある人を抑壓せん。

【九七五】愚者は長老によりて衣服を護持することを敎へらるるとも、劣智邪曲にして、諸欲を縦にするものは之を聽くことなからん。

【九七六】斯の如くして敎を受けたる此等愚者は、互に相敬ふことなく、恰も(七)駻馬の馭者に〔對する〕が如く、師〔の言〕に意を用ふることなけん。

【九七七】最後の時至れる未來世に於ては、比丘及び比丘尼の行跡は斯の如くならん。

【九七八】此の未來大恐怖の來るに先ち、溫柔に友愛にして相恭敬せよ。

【九七九】慈心あり悲愍あり、戒に於て攝し、精進熱烈にして、常に堅く奮迅せよ。

【九八〇】放逸を恐るべきものと見、精勤を安隱なりと〔見て〕、八支の道を修習せよ、甘露の道に觸れん。」

右ブッサ長老

【九八一】其の力に隨ひて行ひ念ひて、正念を失はず、其の思惟行によりて、放逸ならず、內に樂み、心善定に住し、單り滿足せるもの、これをこそ比丘とは云ふべけれ。

【九八二】濕りたる又は乾きたるを食ひて、〔而も〕甚く飽くことなく、腹滿たず、飮食量あり、正念ありて、比丘は遊行せよ。

【九八三】四五片の飯をも喫するなくして、水を飮まば、これ專心なる比丘の樂住には足る。

【九八四】此〔の敎〕に於て、求むることを得べき適度の衣服を受く、これ專心なる比丘の樂住には足る。

【九八五】跏趺を組みて坐せるものの膝に雨降ることなし、これ專心なる比丘の樂住には足る。

【九八六】樂を苦なりと見、苦を樂なりと見、兩者の中間に存することなくば、世に誰［人］によりてか、何かあらんや。

【九八七】我に邪欲なく、怠惰なく、我精勤乏しきことなく、寡聞ならず、（八）不行跡なるなくば、世に誰［人］によりてか、何かあらんや。

【九八八】博聞にして、而も智慧あり、諸の戒法に於いて善く定に住し、念を心止息に專にするものは、頭上にも立て。

【九八九】亂想を專とし、亂想を喜とする獸［の如きもの］、彼は無上の安隱、涅槃を得ることなし。

【九九〇】亂想を棄て、亂想なき道に樂むもの、彼は無上の安隱、涅槃を獲得す。

【九九一】村里又は森林に於て、窪地又は陸地に於て、阿羅漢の住止する處、其の地は樂むべき［處］なり。

【九九二】森林は樂むべし、凡夫は此處に樂むことなけれど、貪欲を離れたる［人］は樂む、彼等は諸欲を求むるものにあらず。

【九九三】［己の］過を指示し［失を］責むる智者、斯る賢者を見ば、［寶の］在所を告ぐる人の如くにして事へよ、斯る人に事ふるものには是ありて非あることなし。

【九九四】誡めよ、敎へよ、不相應の事より遠ざからしめよ、彼善人には愛せられ、惡人には憎まれん。

【九九五】具眼の佛世尊は、無智［なる我が］爲に法を說かせたまひぬ、法の說かるるや、［我］欲心を抱きて耳を欹てぬ。

【九九六】我が聞きしことは徒勞ならざりき、我解脱を得、無漏〔の身〕となり、〔而も〕宿住〔通と〕、天眼〔通と〕、

【九九七】心差別神〔通と〕、死〔通と〕、生〔通と〕、耳界清淨〔通と〕は、我が誓願にあらざりき。

【九九八】頭を剃り、僧伽梨衣を纏ひ、智慧第一の長老なる優波帝須は、樹下によりてぞ禪思する。

【九九九】非尋を具有したる彼最尊覺者の弟子は直に尊き寂默を獲。

【一〇〇〇】猶ほ巖石の山の、堅く立ちて動かざるが如く、等しく比丘は愚癡を滅して、動せざること宛然山に似たり。

【一〇〇一】執著なくして、常に清淨を求むるものには、毫端の邪業も、虚空の大にぞ見ゆる。

【一〇〇二】我は死をも歡ばじ、我は生をも歡ばじ、智覺あり正念ありて、此の身を放棄せん。

【一〇〇三】我は死をも歡ばじ、我は生をも歡ばじ、務を終りたる奴僕の如く、時の至るを待つ。

【一〇〇四】此の死は兩處ともに之あり、後にも先にも不死あることなし、〔されば〕修せよ、失ふことなかれ、瞬時を〔空〕過せしむることなかれ。

【一〇〇五】邊地にある都城を內外より防護せるが如く、等しく自心を防護して瞬時も〔空〕過せしむることなかれ、これ瞬時を〔空〕過せしむるものは、(九)泥犂に墮ちて憂ふべきが故なり。

【一〇〇六】寂靜に達し、止息に歸し、(一〇)神咒を語り、輕躁ならず、邪惡の法を拂ふこと、風の樹葉を〔拂ふ〕が如くす。

【一〇〇七】寂靜に達し、止息に歸し、神咒をかたり、輕噪ならず、邪惡の法を拔くこと風の樹葉を〔拔く〕が如くしぬ。

【一〇〇八】寂靜に達し、住著を去り、清澄にして汚濁なく、戒善く、智慧ありて、苦惱を盡すものとなれ。

【一〇〇九】在家の人にも、或は又出家の人にも、信賴すべからざるものあり、〔初〕善良なりとも不良となるあり、不良にして再び善良となるあり。

【一〇一〇】貪欲、瞋恚、（二）疎懶、（三）輕噪、疑惑、此等の五は、比丘の心を汚すものなり。

【一〇一一】精勤にして住し、〔他の〕恭敬を受くるものは、〔他の〕不敬に逢ふとも、等しく其の定を動ずることなし。

【一〇一二】禪思あり、堪忍あり、微細の見觀あり、取〔蘊〕を滅すを喜とするもの、彼を善人と呼ばん。

【一〇一三】大海、大地、山又火も、師の勝れたる解脫には、譬とするに足らず。

【一〇一四】〔佛に〕倣うて〔法〕輪を轉じ、大智あり安定ある（三）長老は、地水火〔の如く〕にして染せられず、汚さるることなし。

【一〇一五】智慧波羅蜜に達したる大智者、大牟尼は愚なる〔が如くに〕して愚ならず、常に淸涼にして遊行す。

【一〇一六】我（四）師に奉事し、佛の敎を成じ、重き荷を卸し、再生の因を除けり。

【一〇一七】精勤によりて〔道を〕成ぜよ、之我が敎誡なり、今我圓寂に入らん、我は隨處に解脫を得たり。

右舍利弗長老

【一〇一八】（一五）識者は兩舌を吐く人、怒る人、〔己の惡を〕覆ふ人、〔他の〕破滅を歡ぶ人と交を結ぶべからす、惡人と合會するは禍なり。

【一〇一九】識者は須らく信心ある人、好愛すべき人、智慧ある人博聞の人と交を結ぶべきなり、善人と合會するは幸なり。

【一〇二〇】飾りたる像、瘡腫の塊、病を抱き、多の思惟を有てる積集の身を見よ、之に確固なく、住立なし。

【同】摩尼珠と耳環とを以て飾り、骨と皮とを以て組みたる色身を見よ、衣服によりてぞ美しき。

【一〇二一】（一六）多聞にして、演說巧なる佛の侍者、（一七）瞿曇は擔を卸し、結を離れて〔己の〕臥處を設く。

【一〇二二】煩惱を盡し、結を離れ、著を超えて清涼となり、生死の彼岸に到りて最後身を持つ。

【一〇二三】日の親なる佛の〔說き給ひし〕法の住止する處、〔此の〕涅槃に達るべき道の上にぞ、此の瞿曇は立てるなり。

【一〇二四】佛より得たる〔法門は〕八萬二千にして、比丘より得たる〔法門は〕二千なり、此等八萬四千の法門を〔我は〕護持す。

【一〇二五】此の寡聞の男は、老いること牛の如し、彼の肉は太れども、彼の智慧は加はることなし。

【一〇二六】博聞の〔其の〕所聞を以て、寡聞の人を輕視するは、恰も盲者の燈火を携ふるが如し、我は然くこれを了解す。

【一〇二七】博聞の人に敬事せよ、聞きし所は喪はざれ、之梵行の根なり、されば持法者たれ。

【一〇二八】〔一部を聞いて〕始終を知り、義理を知り、詞句に熟通するものは、正しく法を學び、義理を觀る。

【一〇二九】堪忍によりて願樂生じ、努力して之を測る、彼の内心善定に安住せるものは、時に隨ひて奮努す。

【一〇三〇】博聞にして法を護持し、智慧を有し法を識らんことを望める佛弟子、此の斯の如き人に事へよ。

【一〇三一】彼の博聞なる持法者は、大仙の〔寶〕藏を保護するものなり、博聞の人は、あらゆる世界の敬ふべき眼目なり。

【一〇三二】法を遊園とし、法を樂み、法を思議し、法を憶念する比丘は、正法より退墮することなし。

【一〇三三】身〔の勞苦〕を慳むこと甚だしく、命は〔時時に〕衰ふるに奮起することなく、肉身の安樂を貪ぼるものに、沙門の樂何處よりか來らん。

【一〇三四】(八)諸方〔我に〕分明ならず、諸法我に了解せられず、良友〔世を〕去りて、宛然黑闇の如くなり。

【一〇三五】朋友失せ亡び、師過ぎ去れるものには、身念の如き、斯の如き〔良〕友あるなし。

【一〇三六】古きものは世を去り、新きものは我に和せず、我今日獨禪思すること、雨時に巢籠りせる鳥の如し。

【一〇三七】 (一九)諸國より來り、「法を」聽かんとする、衆多のものの「我を」見るを遮らざれ、見よ、これ我が時到れるなり。

【一〇三八】 (二〇)諸國より來れる衆多のものに、師は「師を」見奉ることを許したまひ、具眼者は「これを」遮りたまはざるなり。

【一〇三九】 二十五年の間、有學者たりし我に、貪欲の想起らざりき、法の善き性を見よ。

【一〇四〇】 二十五年の間、有學者たりし我に、瞋恚の想起らざりき、法の善き性を見よ。

【一〇四一】 二十五年の間、我慈悲身業を以て、世尊に隨侍し奉ること、恰も「體を」離れざる影の如くなりき。

【一〇四二】 二十五年の間、我慈語業を以て、世尊に隨侍し奉ること、恰も「體を」離れざる影の如くなりき。

【一〇四三】 二十五年の間、我慈意業を以て、世尊に隨侍し奉ること、恰も「體を」離れざる影の如くなりき。

【一〇四四】 佛の經行したまへるには、後より隨ひ經行し、法を說きたまへば、我に智慧生せり。

【一〇四五】 我所作未だ辨せず、有學にして、心意未た熟せず、而も我等を慈愍したまひし師の圓寂に「逢ふ」。

【一〇四六】 あらゆる人に勝れ給ひし正遍智者の圓寂に歸し給ふや、其の時恐怖ありき、其の時身毛卓竪しき。

【一〇四七】 「(二一)多聞者、持法者、大仙の「寶」藏を護る人、一切世間の眼目たる阿難陀「尊」は圓寂に入れり。

【一〇四八】多聞者、持法者、大仙の〔實〕藏を護る人、一切世間の眼目にして、暗中に黒闇を拂ふ〔人〕なり。

【一〇四九】行處あり、正念あり、堅固ある仙士、正法の支持者、阿難陀長老は寶の源なり。」

【一〇五〇】「(二二)我師に奉事し、〔我〕佛の教を成ぜり、〔我〕重擔を卸し、再生の因を除けり。」

〔一〕sanghamhi とあり、僧伽の中にありての意とも解せられざるに非ず、今はリス・デビツ夫人の譯に倣ふ。〔二〕九六一偈の註を見よ。〔三〕anjana 安膳那とも音譯す、黒色の塗藥にして眼瞼に塗り以て黒くしたり。〔四〕黄色の法衣、卽ち袈裟をいふ。〔五〕白衣をいふ。〔六〕kāsāva 又は kāsāya 袈裟、袈裟耶、迦羅沙曳、もと帶紅黄色、又は黄色の意なりしが轉じて此等の色に染めて作りたる出家の法衣をも袈裟と稱するに至れり。〔七〕khalunka 更に適切に直譯すれば荒荒しく走る馬と云ふべし。〔八〕anācaro の形を取れり、anādara を取らば不注意なり。〔九〕niraya 惡趣。〔一〇〕二偈註參照。〔一一〕thīnamiddha 昏沈、睡眠の二。〔一二〕uddhaca 掉擧、調戲、疑動等の譯あり。〔一三〕舍利弗長老。〔一四〕佛を指す。〔一五〕以下二偈は阿難陀の提婆達多に黨せし者を誡めたるなり。〔一六〕以下兩偈は阿難陀の開悟の時唱へし偈。〔一七〕阿難陀自身を指す。〔一八〕舍利弗の入寂を聞いて。〔一九〕世尊の其の侍者たる阿難陀を誡め給ひし偈。〔二〇〕阿難陀の之に就て述べし偈。〔二一〕以下三偈は第一結集の時集りし比丘等の阿難陀尊を讃歎して唱へしものなり。〔二二〕之は長老入滅の時自ら唱へし偈。

四十頌品第十八

【一〇五一】(一)羣集の長者となりて遊行することなかれ、心亂れ、定得難からん、衆人の集るは苦なりと見て、羣集を喜ぶこと莫れ。

【一〇五二】牟尼よ、俗家に入ることなかれ、心亂れ、定得難からん、彼の元氣旺にして諸味を貪るに切なるものは、安樂を與ふる福利を捨つ。

【一〇五三】是れ［昔人は］俗家の此の禮拜供養は、之を泥土なりと知りたればなり、細き箭は之を拔くこと難く、惡人の尊敬は之を擯くること難し。

【一〇五四】(二)［山間の］坐臥處を下り、我は乞食のために都城に入りぬ、癩人の食を取れるを［見］、我は恭しく之に近きぬ。

【一〇五五】彼は腐り果てたる手をもつて、我に其の食を薦めぬ、食を［我が鉢に］投ずるや、指も亦た其處に壞れ落ちぬ。

【一〇五六】井に凭れて我は其の食を食ひぬ、食ひつつありても、食ひ終りても、我に厭嫌の念起らざりき。

【一〇五七】(三)施食の來るに隨ひて之を食とし、牛溲を藥とし、樹下を坐臥とし、補綴衣を衣服とす。此等を受用するもの、彼こそは四方の人なれ。

【一〇五八】(四)山を上りながら命を喪ふものある所を、彼の佛の嗣續者たる迦葉は、知覺あり正念あり、神通力を以て、毅然として上り行く。

【一〇五九】迦葉は乞食より歸り、岩山を上りて、取著なく、怖畏を捨てて禪思す。

【一〇六〇】迦葉は乞食より歸り、岩山を上りて、取著なく、燒かるるものの中に於て清涼にして禪思す。

【一〇六一】迦葉は乞食より歸り、岩山を上りて、取著なく、(五)爲すべきを爲し終り、(六)煩惱なくして禪思す。

【一〇六二】カレーリの蔓草に掩はれて、愛すべく、樂むべく、象聲の［響く處］、此等岩山は我をして樂し

ましむ。

【一〇六三】碧雲の色ありて美しく、冷にして淸き水を湛へ、(七)インダゴーパカ蟲に掩はるる、此等岩山は我をして娛ましむ。

【一〇六四】碧雲の峯に似、樓閣の秀でたる頂に譬ふべく、象聲「響き渡りて」、樂むべき此等岩山は我をして娛ましむ。

【一〇六五】雨降り注ぎたる、樂むべき高臺、諸仙の往來する山地、(八)冠ある鳥の聲繁き處、此等岩山は我をして娛ましむ。

【一〇六六】專心正念にして、靜慮を凝さんとする我には「之にて」足る、福利を求め、專心なる比丘の我には足る。

【一〇六七】安樂を求め、專心なる比丘の我には足る、觀行を求め、專心なる斯の我には「之にて」足る。

【一〇六八】烏麻花「の衣」を著け、雲に覆はれたる虚空の如く、種種の鳥類「此處に」羣れり、此等岩山は我を樂ましむ。

【一〇六九】「此處には」在家の人は集らず、獸羣悠遊し、種種の鳥類羣集せり、此等岩山は我を樂ましむ。

【一〇七〇】淸みたる水あり、大なる磐石あり、黑面猿と鹿と羣り、水「草」(九)セーヴラは「之を」覆へり、此等岩山は我を樂ましむ。

【一〇七一】(10)五種の樂器を以てしては、心を一境にし、正しく法を見る人の「得る」が如き、斯の如き喜

悦我にあるなし。

【一〇七二】多の業を作すことなかれ、人人を遠けよ、(一)「他に模し、又は他と競はんと」努むることなかれ、彼の元氣旺にして切に諸味を求むるものは、安樂を與ふる福利を捨つ。

【一〇七三】多の業を作すことなかれ、此の非利を與ふるものを遠ざけよ、身は困み疲る、彼は苦み惱みて(二)止息を得ることなし。

【一〇七四】(三)彼、唇を動したるのみにては、自己を見ることなく、而も(四)首を強くして徘徊し、「我は優れり」と思ふ。

【一〇七五】愚者は劣れる身にして、己は優れりと思ふ、識者は此の强頑の心ある人を稱揚せず。

【一〇七六】或は「我は優れり」と、或は更に「我は優れるにあらず」と、「我は劣れり、又は等し」と、「智者は」憍慢の中に動ずることなし。

【一〇七七】智慧あり、眞實を談り、戒律の上に安定を得、心の止息に達したるもの、彼をも亦智者は稱揚せん。

【一〇七八】同じく「梵行を修する」者の中に、尊敬を得ることなく、正法より遠ざかること、空と地との如し。

【一〇七九】梵行を增長し、常に正しく慚愧の念を存するもの、彼等の再生は、斷じ盡されたり。

【一〇八〇】輕躁にして心定まらざる比丘は、假令補綴の衣を纏ふと雖も、猶ほ猿の獅皮「を纏へる」が如

く、彼之によりて美なることなし。(二四)

【一〇八一】輕躁ならずして心定まり、愼重にして、諸根を攝したるものは、美しきこと猶山窟中の獅獸の如し。

【一〇八二】此等許多の天子、神通力あり、名譽あるもの、十千數の天子、總て此等は梵身〔天〕に屬す。

【一〇八三】賢にして大禪慮あり、善く定に住せる(二五)法將軍、舍利弗〔尊〕を〔彼等は〕禮拜し合掌して立つ。

【一〇八四】「人閒中の生よきもの、汝に歸命す、人閒の最上なるもの、汝に歸命す、汝の禪思する所、我等は其〔の如何なるか〕を知らず。

【一〇八五】諸佛各各の行處は實に深遠にして、思議せられず、我等假令毛端を裂くもの集りたらんとも、〔之を〕知らず。」

【一〇八六】斯の如く此の恭敬の德ある舍利弗〔尊〕の、天子の羣に恭敬せらるるを見て、劫賓那は笑を漏しぬ。

【一〇八七】佛刹田を盡し、大牟尼〔世尊〕を除き、頭陀の德に於ては我優れり、我に等しきものなし。

【一〇八八】我師に奉事し、〔我〕佛の敎を成せり、〔我〕重擔を卸し、再生の因を除きたり。

【一〇八九】衣服にも、臥榻にも、飮食にも染せられず、瞿曇は不可測量にして水のために汚されざる蓮華の如く、意出離に傾き、三界を離脫せり。

【一〇九〇】彼大牟尼は念住を頸とし、信仰を手とし、大智者は智慧を頭とし、常に寂滅を得て遊方す。

右大迦葉長老

〔一〕下の三偈は大迦葉長老の比丘の群集に混じ、在家に往來するを見て唱へしものなり。〔二〕以下四種の要具に就て比丘を誡む。〔三〕piṇḍa 摶食。〔四〕日日の登山に就て述ぶ。〔五〕所作已辨。〔六〕無漏。〔七〕一三偈註を見よ。〔八〕孔雀。〔九〕sevala 學名 vallisneria 若婆羅(?)。〔一〇〕三九八偈註參照。〔一一〕リス・デビッ夫人の譯によりて意を補ひたり。〔一二〕samatha 舍摩他、止、止息、寂靜、能滅、能調。〔一三〕直譯すれば唇を打ちたるだけにての意、唯反復讀誦するのみなるを云ふ、之のみにては人は自己の實情を悟ることなし。〔一四〕傲慢にして首を屈することなし。〔一五〕dhammasenāpati 舍利弗の一稱號なり。

五十頌品第十九

【一〇九一】我あらゆる生有を無常と觀じつつ、山窟の中に第二人者なく唯獨、住すること何時か之あらん、之我に何時か來らんや。

【一〇九二】我破れたる衣服を纏へる牟尼〔として〕、黄衣を著け、我意なく、欲念なく、貪と瞋と同じく癡とを盡し、安樂にして、〔一〕山坂に入りて住すること、何時か之あらん。

【一〇九三】無常にして、殺と病との據所たり、死と老とに惱まさるる此の身を觀察しつつ、怖畏心なくして、獨り林間に住すること、何時かこれあらん、これ何時か來らんや。

【一〇九四】我智慧を以て造れる鋭き刀を取りて、怖畏を生じ、苦惱を齎す渇愛の蔓を其の種種の附生物〔と共に〕、斷ち切りて住すること何時か之あらん、之亦何時か來らんや。

【一〇九五】我智慧を以て造り、火熱熾なる諸仙の劍を急ぎ取り、獅子座の上にて魔王を其の軍勢と共に

敗らんこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一〇九六】我善良の輩、法を尊ぶこと、斯の如くなる人人の間に交はり、如實に〔諸法を〕觀、諸根に勝てるものの長者たること、何時か之あらん、これ何時か來らんや。

【一〇九七】我が山郭中に〔入りて〕己利を〔念せるを〕疎懶、飢渴、風熱、蟲蛇の惱まさざること、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一〇九八】大仙の知得し給ひて、見ること難き四種の諦理を、〔我〕己を安定し、正念を喪はず、智慧を以て之に達せんこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一〇九九】無量の色聲香味と可觸と法とを、熱氣あり、(三)止を有する我、智慧を以て之を見んこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一一〇〇】麤惡の語を以て談ぜらるるとも、之を原として惑ふことなく、又た稱讚せらるるとも、之を原として踊躍せざらんこと、何時か之あらん、これ何時か來らんや。

【一一〇一】木と、草と、蔓と、此等の諸蘊と、(三)無量の法と、内外共に同じく秤量せんこと、何時か之あらん、之何時か我に來らんや。

【一一〇二】衣服を著けて森林の中に、仙士の踏める道を行く我に、雨季の雲の新なる水を以て降り注がんこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一一〇三】冠ある鳥、孔雀の森林中に〔將〕山窟中に鳴くを聞いて、起ち上がり、不滅〔の道〕に達せんが

ために思を致さんこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一一〇四】龍界に流入し、河口强くして、怖るべき恆伽河、閻牟那河、薩羅婆縛底河を沈むことなく神通力を以て渡らんこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一一〇五】我戰場を徘徊する象の如く、諸欲に欲を斷ち、心を禪思に繫けて一切淸淨の相を斥けんこと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一一〇六】貧者の負債に窘められ、富者のために惱まされたるが、隱れたる［寶］を獲て踊躍するが如く、大仙の敎に通じて［踊躍する］こと、何時か之あらん、之何時か來らんや。

【一一〇七】「在家人の生活を營むの要なからずや」と云ひて、汝我を勸誘すること多年なりき、心、今我が出家せるを何故に汝は意を注ぐことなき。

【一一〇八】心、汝は我を勸誘せしにあらずや、「山郭の中なる種種の羽翼ある鳥の雷電の轟轟たる響に應する、此等は森林中に入定せる汝をして娛ましめん」［と云ひて］。

【一一〇九】家、愛すべき朋友親族及び世界に嬉戲するの樂と諸欲の欲とを總て捨てて、之に達しぬ、然るに、心、汝は我に滿足することなし。

【一一一〇】之は我がためにこそあれ、他のためにあらず、武裝の時至れるに、何の要ありてか悲傷する、總て動搖すべきものなりと觀じ、不滅の道を求めて出家したり。

【一一一一】善語者、兩足中の勝者、大醫師、可化丈夫の御者は宣へり、「心は動搖して猿に似、貪欲を離

れざるものには制すること難し。

【二二二】欲は種種にして甘く樂しく、無智の凡夫は之に賴る、彼の再再生を求むるものは苦を願ひ、心のために導かれて惡趣の中に亡ぶ。

【二二三】孔雀、蒼鷺の聲頻なる森林の中に、汝は豹や虎に圍繞せられて住し、身の欲望を捨てて、樂著することなかれと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。

【二二四】禪と根と力と(四)覺支定修とを修習せよ、佛の敎に於て三明に觸れよと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。

【二二五】不滅に到り、救濟に達り、あらゆる苦惱を斷盡し、あらゆる煩惱を淨除する八支の道を修習せよと、心、汝は斯の如く我を慫慂したりき。

【二二六】蘊の上に苦「あり」と正しく見よ、苦の由りて出る所、之をも捨てよ、此處にありて苦を斷じ盡せよと、心、汝は先に斯の如く我を慫慂したりき。

【二二七】苦は無常なりと正觀し、空なり無我なりと、又邪惡なり殺害なりと「正觀し」、心の度量を止めよと、心、汝は先に斯の如く我を慫慂したりき。

【二二八】圓頭醜形、凜乎として來り、髑髏「形の鉢」を手にして諸家の間に乞食せよ、師なる大仙の敎に身を委ねよと、心、汝は先に斯の如く我を慫慂したりき。

【二二九】善く己を攝して、街路の間を往來し、家にも欲にも愛著の心なく、明なる滿月の夜の月の如

くなれと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。

【一一三〇】森林住者たれ、乞食者、冢間住者、著糞掃者、坐不臥者たれ、常に頭陀を樂とせよと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。

【一一三一】樹を植ゑて果を「得んと」望むものの、樹を根より斫らんことを望むが如く、心、汝の我を無常動轉に慫慂せんとするは、之に比すべきことをなすにあらずや。

【一一三二】形色なくして遠行し獨遊するものよ、今や我汝の語に服せざるべし、是れ諸欲は苦なり辛なり大怖畏なればなり、我は涅槃をこそ想望して遊行せめ。

【一一三三】我が出家したるは不運のためにあらず、無慚恥のためにも、不面目のためにもあらず、轉氣にも、また生活のためにもあらず、心。

【一一三四】欲の少きと、覆を捨棄すると、苦を息止するとは善人の稱嘆する所なりと、心、汝は其の時斯く我を慫慂したり、今汝は先に修習せし所に歸る。

【一一三五】愛欲と無明と、愛と非愛と、美しき色と、樂しき受と、適意の欲とは旣に擲けられたり、我は擲けたるを再び返さんがために努力せじ。

【一一三六】心、あらゆる場合にありて、我汝の語に隨ひ、多生の中、我汝の怒に觸れしことなし、「此の」內生の身は汝の智恩より「來れり」、汝苦を作るや、輪廻久しきに及べり。

【一一三七】心、我等を婆羅門となすは汝なり、汝は「我等を」刹帝利、王、仙士となす、「我等」或時は吠

奢、首陀となる、天子たるも汝の運載による。

【一二八】汝の因によりてぞ、我は阿修羅となる、汝を本として我等墮地獄者たり、其より或時は畜生となる、餓鬼たるも汝の運載による。

【一二九】〔香具師の〕度度假面を示すが如く、汝我を誑すこと再再なることなけん、我狂すれば汝は氣力衰ふ、心、我汝に對して何の非をか爲せる。

【一三〇】先には此の心、望により、欲に隨ひ、樂に任せて流轉したり、我今日能く之を制すること、象師の猛象を〔制する〕が如くせん。

【一三一】師も亦我に此の世界を無常、不堅實にして精質なしと示したまへり、心、我を勝者の敎に入らしめ、大にして超え難き暴流を超えしめよ。

【一三二】心、汝今や先にありし如くあらざるべし。(五)我今更に汝の制抑を蒙らじ、我大仙の敎に於て出家せり、我の如きものは損失を忍ぶことなし。

【一三三】山海河地、四〔方〕、四維〔上方〕下方總て無常にして、三有は患難あり、心、何處に行いてか汝は安樂を享けん。

【一三四】醜なり、醜なり、我が心、更に何をか爲んとするぞ、心、(六)〔我〕汝の制抑を蒙むるものたらじ、我は斷じて兩口の鞴に觸れじ、醜なり、滿ちて九の孔より滲み出るもの。

【一三五】野猪、羚羊の竊に出沒する天作巧妙なる窟舍の中に、又は新雨の降り濺ぎたる森林の中に、

心、汝は此處に窟に入りて樂を享けん。

【一一三六】深青色の頸あり、善き冠あり、善き翼あり、雜色の羽に包まるる空中の飛行者は美妙の聲、雷[の如き]音を有す、此等は汝の林中に禪思するを樂ましめん。

【一一三七】(七)四指草の上、美しく花咲きて雲[の色]に似たる森林に雨降るや、我山中に臥して樹木の如くせん、我が[臥床は]柔にして綿の如くならん。

【一一三八】主のなしたまふが如く、同じく我はなさん、[我が]得る所のもの、之を以ってまた足れりとせん、懈なき[革工の]柔に鞣したる猫皮の嚢を作るが如くに我はなさん。

【一一三九】主のなしたまふが如く、同じく我はなさん、[我が]得る所のもの、之を以ってまた足れりとせん、精進によりて我れ汝を伏すること、巧なる象師の狂象を[伏する]が如くせん。

【一一四〇】調馬師の馬を矯むるが如く、善く汝を調順し、固定せしむることによりて、我は安泰にして、心を防護する人の常に行へる道を履むことを得。

【一一四一】强力を以て汝を緣境に縛すること、强き繩を以て柱に象を[縛する]が如くせん、我正念を以て能く汝を護り、能く修練せば、あらゆる生有に依著することなからん。

【一一四二】智慧を以て邪路に依るものを遮り、努力によりて制して、[正]路を行はしめよ、[苦の]集の起滅あるを見て、第一語者の嗣續者とならん。

【一一四三】心、汝は我を指導するに、四種顚倒の制御する所となれる野人の如くす、汝は結縛を破れる

悲愍の大牟尼に師事するにあらずや。
【二四四】美しく飾れる森林中にありて、心自在なる獸の、雲の鬘ありて樂しき山に入れるが如く、心、汝は其の人影稀なる山間にありて樂まん、心、汝は必して彼岸に到らん。
【二四五】男子又は女子の汝の欲望と制御とに從ひ、安樂を享くるものは、無智にして魔羅の制御に從ひ、生有を喜びて、心、汝の從屬たるものなり。

右パーラプタ長老

〔一〕pavana 山又は岡の中腹、險しき傾斜面、坂。〔二〕samatha 一〇七三偈の註參照。〔三〕無常、無我にして精(sāra)あるなし等。〔四〕bojjhangasamādhibhāvanā。〔五〕〔六〕生類の身を指す、再び生を受けざるの意。〔七〕caturangula tina 紅色の毛氈に似たる草の一種。

六十頌品第二十

【二四六】（一）我等森林に住し、乞食を食とし、遺穂の鉢に入るを樂むもの、内心善く定に住して、魔王の軍を破らん。
【二四七】我等森林に住し、乞食を食とし、遺穂の鉢に入るを樂むもの、魔王の軍を震はすこと、象の葦の舍を［震はす］が如くせん。
【二四八】我等樹下に住し、耐忍力あり、遺穂の鉢に入るを樂むもの、内心善く定に住して、魔王の軍

を破らん。

【一四九】我等樹下に住し、耐忍力あり、遺穂の鉢に入るを樂むもの、魔王の軍を震はすこと、象の葦の舎を「震はす」が如くせん。

【一五〇】(二)醜なる哉、骨を以て組み、肉と筋とを以て縫ひたる小舍、滿ちて惡臭あり、他の肢體なるを己の有なりと思へり。

【一五一】胸に潰瘍を有てる妖魅、皮膚に包める糞袋、汝の身には九の孔あり、之より「液汁」常に滲み出づ。

【一五二】汝の身は九の孔ありて惡臭を有つ、結縛を作るもの、比丘は之を避くること、恰も潔白を好める人の糞を「避くる」が如くす。

【一五三】若し人我が之を知れるが如く、斯くの如く之を知らば、遠くより「之を」避くること、雨期の糞坑の如くすべきなり。

【一五四】(三)如是、如是、大雄士、沙門、汝の云ふ所の如し、然も此の處にありて淪落すること、恰も泥中の老牛の如くなる人あり。

【一五五】(四)薑黄を以て、又は他の顏料を以て、空中に描き得べしと思へる、之は之を害ふものにして他にあらず。

【一五六】彼の虚空に等しくして、内能く定に住せる我が心を「汝の」邪心に接せしむることなかれ、恰

も鳥の火聚に〔入る〕が如くに。

【二五七】飾れる像、瘡腫の塊、病を抱き、多の思意を有てる積集の身を見よ、之に堅固なく、住立なし。

【二五八】(三)種種の方便を具有せし舍利弗の涅槃に歸するや、其の時恐怖ありき、其時身毛卓起しき。

【二五九】げにも諸行は無常にして、起滅を性となし、生起して〔而も〕滅盡す、其等の息止は安樂なり。

【二六〇】五蘊を己と見ずして、他と見るものは、微細なるを貫くこと、箭を以て毫末を〔貫く〕が如くす。

【二六一】諸行を己と見ずして、他と見るものは、微妙〔の理〕を穿つこと、箭を以て毫末を〔穿つ〕が如くす。

【二六二】槍を以て刺さるるが如く、頭を燒かるるが如し、正念の比丘は、欲貪を捨てんがために出遊すべし。

【二六三】槍を以て刺さるるが如く、頭を燒かるるが如し、正念の比丘は、生有の貪欲を捨てんがために出遊すべし。

【二六四】己心を修練し、最後身を持ちたまへる人に勸められ、我足の大指を以て、鹿母樓閣を震ひ動かしき。

【二六五】あらゆる纏結を解く此の涅槃は、柔惰によりても、小なる力を以ても、達すべきにあらず。

【二六六】此の年若き比丘、此の優勝なる人は、魔を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持つ。

【二六七】雷は毘婆羅山と、槃荼婆山との岩窟に墜つ、斯の比倫なき〔佛の〕見は、山窟に入りて禪思す。

【二六八】(六)安靜寂滅に歸し、邊地に坐臥せる牟尼は、佛尊の嗣續者にして、梵天に敬禮せらる。

【二六九】安靜寂滅に歸し、邊地に坐臥せる牟尼、佛尊の嗣續者たる迦葉等を敬禮せよ、梵志。

【二七〇】人また百生の間、總て婆羅門の生を經、婆羅門として人間中に吠陀を知ること再再。

【二七一】三吠陀の讀誦者にして、其の彼岸に度れるものたらんとも、此「の人」を禮拜するは、「迦葉尊を禮拜するの」十六分が一にも價せず。

【二七二】朝餐に先ちて、順次幷に逆次に、八解脱を見、其よりして受食に赴くもの、

【二七三】斯の如き比丘を侵すことなかれ、婆羅門、(七)己を穿つことなかれ、斯の如き阿羅漢に對して汝の心に信念を起せ、速に合掌して禮拜せよ、汝の頭を破らるることなかれ。

【二七四】彼の輪廻のために惱まされ、正法を見ざるものは、非行處、曲路、邪道に奔馳す。

【二七五】糞に塗れたる蛆蟲の如く、行に惑はされ、利養恭敬に心を專にして、「而も」ポッチラは空しく去る。

【二七六】(八)兩處に於て解脱を得、內心善く定に住せる、彼の端嚴なる舍利弗の來るを見よ。

【二七七】「愛欲の」箭を去り、結縛を盡し、三明ありて、魔王を賊するもの、人間の供養を受くるの德あり、最上の福田なり。

【二七八】(九)此の數多の天子等、神通力あり名稱あるもの、十千の天子は總て梵輔天に屬す、目犍連に歸命しつつ合掌して立てり。

【二七九】「生善き人、汝に歸命す、最上の人、汝に歸命す、尊、諸漏汝の身に盡き、汝は應供の德あり。

【二八〇】人天のために恭敬せられ、生れて死に勝てり、白蓮華の水のために〔汚されざる〕が如く、行に汚さるることなし。」

【二八一】彼の比丘は大梵天王の如く、一瞬時間に世間を見ること一千方、諸種の神通力を具へ、〔人天の〕生死と其の時機とを見る、諸天子よ。

【二八二】(10)智慧と、戒と、寂靜とによりて彼岸に達れる比丘、彼舍利弗こそは最上者ならめ。

【二八三】百千俱胝生の己身を、一刹那の閒に化作せん、彼は變化に巧にして、神通に熟せり。

【二八四】目犍連は定と明とに熟通し、無依著者の教に於て成滿に達し、賢智ありて諸根を寂靜にし、結縛を破毀すること、恰も象の腐りたる蔓樹を〔破毀する〕が如くしき。

【二八五】我師に奉事し、佛の教を成じ、重擔を卸し、再有の因を除けり。

【二八六】我、彼の利益のために、在家を出でて出家得度せしが、今此の利益、〔卽ち〕あらゆる纏結の滅盡に達したり。

【二八七】(11)佛弟子ギヅラと、婆羅門カクサンダとを害して、ヅッシーの煮られたる地獄は如何なりしぞ。

【二八八】一百の鐵杙あり、各各〔苦〕感を與ふ、佛弟子ギヅラと、婆羅門カクサンダとを害して、ヅッシーの煮られたる地獄は斯の如くなりし。

【二八九】佛の弟子なる比丘にして、(三) 之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。

【二九〇】大海の中部に宮殿峙つこと一劫、瑠璃色にして、樂しく、火焔の〔如き〕光明あり、此處に種種の色なせる天女數多ありて舞踏す。

【二九一】佛の弟子たる比丘にして、之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。

【二九二】佛の勸告により、比丘衆の期待に應じて、足の大指を以て、鹿母樓閣を震ひ動かせしもの、

【二九三】佛弟子たる比丘にして、之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。

【二九四】神通力により、我足の大指を以て、堅固なるヱーヂャヤンタ樓閣を震ひ動かすや、天子は震ひ驚きぬ。

【二九五】佛弟子たる比丘にして、之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。

【二九六】ヱーヂャヤンタ樓閣の中に於て、帝釋天に問うて言へり、「汝卻いて愛欲の滅盡解脫を知れりや」と、帝釋天は彼に問はれて如實に答へき。

【二九七】佛弟子たるものにして、之を知る比丘、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱を受けん。

【二九八】善法樓閣の中に於て、衆の面前に、大梵王に問うて言へり「汝、今日も尙ほ、汝が先きに有ちけると、同じき見を有てりや、汝は梵界に於て、光輝の過去しつつあるを見るや。」

【二九九】大梵王は彼に問はれて、如實に答へき、「尊、我が先に有ちたる彼の見は、今我之を有たず。

【一二〇〇】我梵界に於て光輝の過去しつつあるを見る、我今日我は常住なり、恆久のものなりとの語の虚なりしことを〔知る〕。」

【一二〇一】佛弟子たるものにして、之を知れる比丘、汝若し斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。

【一二〇二】解脱〔の喜〕を以て、大彌樓山の頂を見、東弗婆提洲の森林と、地上に棲息せる人人とを〔見き〕。

【一二〇三】佛弟子たるものにして、之を知れる比丘、魔王、斯の如き比丘を害せば、汝は苦惱を得ん。

【一二〇四】火は「我愚人を燒かん」と思ふことなし、而も愚人は此の燃ゆる火に觸れて燒かる。

【一二〇五】之と同じく、魔王、汝は此の如來を襲うて、自ら己を燒くこと、猶ほ火に觸れたる愚人の如し。

【一二〇六】魔王、汝如來を襲へば、不善業を積む、波旬、汝は「我が邪業は熟せず」と思へりや。

【一二〇七】魔、汝罪業を犯せば、長夜に積集せらる、魔王、佛より縛を解け、諸比丘に對して、欲想を起すことなかれ。

【一二〇八】斯の如く比丘は、ベーサカラー林中にありて、魔王を叱しき、其より彼の夜叉は、不興にして其の處に隱沒しぬ。

斯の如く具壽摩訶目犍連は偈頌を唱へけるとぞ。

〔一〕以下目犍連の諸比丘を誡むるの偈。〔二〕以下長老を誘惑せんとしたる遊女に對して。〔三〕遊女之に答へて。〔四〕以下三偈長老の之に答ふるなり。〔五〕以下四偈舍利弗の入滅したる時。〔六〕以下六偈大迦葉に就て。〔七〕己の利を損ち褻すをいふ。〔八〕二偈舍利弗を稱歎す。〔九〕以下舍利弗目犍連を稱歎す。〔一〇〕以下目犍連の語。〔一一〕二長老と魔王との問答。〔一二〕地獄の狀態。

大集品第二十一

【二〇九】(一)我在家より出でて、出家得度したるに、魔より〔出來れる〕此の強暴の思想、我を追尾す。

【二一〇】生善くして、術に習ひ、堅く武裝せる大弓手たり、逃れざるもの一千、之を四方に退散せしめん。

【二一一】若し此の數よりも多き婦女出で來らんとも、我を惱ますことなからん、我は法に住立す。

【二一二】此の日の族なる佛の〔說きたまひし〕、涅槃趣向の道を、我一たび聞いて、我が心之を樂む。

【二一三】我れ斯くして住せるに、波旬、汝は近き來る、死〔王〕我も同じく之をなさん、汝は我が道を見ることなからん。

【二一四】(二)樂と非樂と、家に依れる思とを總て抛ちて、何處にも欲を起すことなくば、彼比丘は欲なきによりて無欲者たり。

【二一五】此處に大地と、形色ある天上界と、總て無常にして老い朽つ、識者は斯の如く學び識りて遊行す。

【二一六】人は(三)本質の上に執著心を起す、見聞し觸知する處にも亦、此處に欲なくして欲念を除去せよ、これ此處に染せらるることなきもの、彼は牟尼と名けらるればなり。

【二一七】六十八〔の邪見〕に依るものは凡夫の思想を具へ、非法の上に住著す、何の宗派にも屬するこ

となく、而して邪執あらざるもの、彼こそは比丘なれ。

【三二八】性格豐に具はり、長夜に定に住して、僞ならず、欲なくして智慧ある牟尼は寂靜の道に達し、緣起を滅して死の至るを待つ。

【三二九】瞿曇の弟子、憍慢を捨てよ、憍慢の道を捨てて餘す所なくせよ、汝憍慢の道に迷惑して、追悔すること久し。

【三三〇】群生は覆のために覆はれ、慢のために災せられて地獄に墮つ、群生は慢のために災せられ、地獄に生れて長夜に憂苦す。

【三三一】道〔によりて〕勝てる比丘の、能く〔道を〕履修せるものは絕て憂苦することなし、名譽と安樂とを享く、之を法見〔の人〕と呼ぶは正し。

【三三二】されば此の世に於て、剛愎なく、憍慢なく、障礙を捨てて、淸淨となり、憍慢を捨てて餘す所なく、安靜にして、智慧により、〔苦の〕際を盡すものとなれ。

【三三三】(四)我貪欲のために燒かれ、我が心燃燒せらる、可矣、瞿曇、慈愍を垂れて、我に消除の法を說け。

【三三四】想の顚倒によりて汝が心は燃燒せらる、貪欲と俱有なる淸淨相を捨離せよ。

【三三五】一境性にして、善く定に住せる心を、不淨〔相〕に修練せよ、汝に身念あるべく、厭嫌〔の情〕多かるべし。

【三三六】非相をも修練せよ、憍慢、愛執を拋捨せよ、其より憍慢を知悉し、寂靜にして遊行せん。

【二二七】「人の」よりて己を苦むることなき、斯の如き語をこそ說け、他人をも害することなかれ、斯かる語は善く說かれたるなり。

【二二八】他の聞きて喜ぶ語、「此の」愛語をこそ口にせよ、他の惡を擧げずして言ふはこれ愛「語なり」。

【二二九】不滅の語は眞なり、之不朽の法なり、寂靜の人は、眞と義と法との上に住立すと稱せらる。

【二三〇】涅槃に達せんがために、苦惱の際を盡さんがために、佛の說きたまひし安隱の語、之語中の最上なるものなり。

【二三一】深智の智者にして、道と非道とを熟知せる、大智の舍利弗は、比丘のために法を說く。

【二三二】略しても說き、廣くも語る、九官鳥の聲の如く、「彼は其の」無礙辯を表す。

【二三三】彼の此の說法の美音を聞いて、愛すべき、耳にして樂しむべき音聲のために、比丘等は心歡喜し、怡悅して耳を傾く。

【二三四】(五)今日十五日、五百人の比丘は清淨に達せんがために集り來れり、諸仙は結縛を斷ち、苦を解き、再生を盡せり。

【二三五】猶ほ轉輪王の、諸大臣に伴はれて、此の大地を海際に至るまで、普く巡行するが如く、

【二三六】同じく、三明ありて死魔を滅せる弟子輩は、無上にして戰に克ち、(六)隊の主たる師に奉侍す。

【二三七】總て世尊の兒にして、此の中實なきはあらず、愛欲の箭を去る此の日族「の佛尊」を禮拜せよ。

【二三八】(七)一千を超ゆる比丘は、善逝に奉侍す、塵垢なき法、怖畏なき涅槃を說きたまふ人に。

【二三九】彼等は正徧覺者の說きたまへる廣大の法を聞く、正徧覺者は比丘衆等に圍繞せられて、光輝を發ちたまふ。

【二四〇】世尊、汝は龍の名を有ちたまひ、諸仙中第七仙に當らせたまふ、大雲の如くして弟子に〔法〕雨を澍ぎたまふ。

【二四一】日中住より去りて、師を見たてまつらんがために、大雄氏、弟子鵬耆娑は汝の足を禮す。

【二四二】魔の邪路に克ち、障礙を破りて、遊行したまふ、此の纏縛を解く人、分分に分別して依著なき人を見たてまつれ。

【二四三】暴流を度らんがために、種種なる道を說きたまへり、此の不滅〔の法〕の說き示さるるや、諸法見の人住立して動さるるなし。

【二四四】〔世の〕燈明となる人は、あらゆる立處の彼岸を透視したまへり、彼十法中最上〔の法〕を證知して說示したまへり。

【二四五】斯の如くして善く法の說かれたるに、法を知れるものの中、何人か果して放逸ならんや、されば此の世尊の敎に於て精勤にして常に禮拜しつつ學べ。

【二四六】(ヘ)憍陳如長老は、出離の志銳く、佛に續いて悟を開きたるもの、常に安樂住と遠離とを獲る人なり。

【二四七】佛弟子にして師の敎を行ふものの達すべきことは、總て此の精勤にして學習する人の成就せ

る所なり。

【二四八】大威力、三明あり、〔他の〕心の所趣を知る、佛の嗣續者たる憍陳如は、師の足を禮拜す。

【二四九】苦惱の際を盡したる牟尼の、山の中腹に坐せるを、三明ありて死魔を滅せる佛弟子は、侍事したてまつる。

【二五〇】（九）大威力ある目犍連は、〔己の〕心を以て、解脫を得て、精質を滅せる彼等の心を驗す。

【二五一】斯の如くしてあらゆる支分を具備し、苦惱の際涯を盡し、種種の方便を具有せる瞿曇に師事す。

【二五二】猶ほ雲なき空に、垢穢なくして輝く月の照らすが如く、同じく、大牟尼、（一〇）鵬耆羅娑、汝は名稱によりてあらゆる世界を照す。

【二五三】（一一）我先に詩歌に醉ひて村より村へ、都より都へと流離しけるが、其より一切法の彼岸に達したまへる正徧智者を見たてまつりき。

【二五四】苦惱の彼岸に達したまへる彼牟尼は、我がために法を說きたまひき、我法を聞きて和悅し、信心我に起りき。

【二五五】我彼の語を聞き、〔五〕蘊、〔十二〕處、〔十八〕界を知りて、出家得度しき。

【二五六】如來は此等の佛の敎を行ふ、數多の婦女また男子の利益のために現れたまふ。

【二五七】世間に來れるものを見る、此等比丘、比丘尼の利益のために、牟尼は菩提を得たまひき。

【二五八】有眼者、日族の佛尊、有生を慈愍して、四種の聖諦を說きたまへり、苦と、苦の生起と、苦の超越と、苦を息止する聖き八支の道と之なり。

【二五九】此等は斯の如く、如實に說かれ、我は此等を說かれし如くに見たり、われ己利に達し、佛の教を成就しぬ。

【二六〇】實にも我れ佛の側に來りしことは徒爾ならざりき、分別せられたる諸法の中にて、最も尊きものに我は通じき。

【二六一】神通の彼岸に達し、耳根を清淨にし、三明あり、神足を獲、〔他人の〕心の所趣を知悉す。

【二六二】(二)「現法に於て疑惑を斷じたまふ尊智の師に問ひたてまつる、世に知られ、譽高く、心寂靜に歸したる一比丘アッガーラヴにありて死しき。

【二六三】尼拘律陀劫波とは彼の名なり、之世尊の〔此の〕婆羅門に與へたまひし所、(三)堅固の法を見たまへる世尊、彼は世尊を禮拜し、解脫を索め、勤めて精進して行じき。

【二六四】釋氏、普眼者、我等は總て彼の佛弟子を知らんと欲す、我等の耳は總て聽くの用意をなせり、世尊は我等の師、世尊は無上者なり。

【二六五】我等の疑惑を斷ち、之を我等に語りたまへ、饒智者、圓寂せる〔比丘〕を指示したまへ、普眼者、我等の中にありて〔之を〕示すこと、千眼の帝釋天の〔中にありて示すが〕如くしたまへ。

【二六六】此の世のあらゆる纏縛、愚癡の道、無智の伴、疑惑の處、此等は如來に到れば〔更に〕存する

ことなし、これ如來は最上の人眼なればなり。

【二六八】眞に若し人煩惱を[斷つこと]、譬へば風の空中に[浮べる]雲羣を[斷つ]が如くすること能はずんば、一切世間は黑闇に覆はれ、光あるものも輝くことなからん。

【二六九】賢人は光明を作すものたり、賢者、我は汝を然なりと思ふ、我等(一四)禪觀を見る汝の處に來詣したり、[此の]衆の中にありて我等に劫波を示したまへ。

【二七〇】妙好の人、疾く妙好の音聲を揚げさせたまへ、白鳥の[其の首を]擡げて、善く調ひて、圓かなる聲を以て徐ろに歌ふが如くに、[我等]總て意を傾けて聞かん。

【二七一】生死殘りなく棄て、[邪惡を]掃ひたまへる[佛]に切望して說法を請ひたてまつらん、そは凡夫の欲は果つべからず、如來は慮りて[事を]行ひたまふが故なり。

【二七二】汝全智者のなし給へる此の十全の說示は領受せられたり、我は此の最後の合掌を手向けたり、[劫波を]知りながら、[我等を]誑したまはざれ、尊智の人。

【二七三】漏す所なく、聖者の法を覺り、知りて誑したまふことなかれ、大精進の人、猶ほ熱時暑熱に惱める人の水を[求むる]が如く、汝の語を得んと願ふ、聽者に雨を降したまへ。

【二七四】劫波は法利ある梵行を修したり、之彼に取りて空なりしや、彼は圓寂せりや、將た有餘滅に入れりや、我等は彼が解脫せし如くに之を聞かん。」

【二七五】「此處に名色の上に、彼は愛欲を斷ちたり」と世尊は[宣へり]、「長時依著せし愛欲の流を[斷

ち」、生死を渡りて、殘りなし」と、五者の最長たる世尊は宣へり。

【三七六】「汝の此の語を聞きて、「我が心」悅ぶ、仙士中の第七者、我は徒には問はざりけり、婆羅門は我を欺きたまはず。

【三七七】佛の弟子は「口に」言ふが如く、「身に」行ひ、虛僞の死王の强き網を破れり。

【三七八】世尊、劫比耶は取著の初を見たり、劫比耶は渡ること難き死王の領域を超えたり。

【三七九】兩足中の最上者、我は汝天中の天を拜し、汝の兒、「汝の」後に出て、龍象の眞子なる龍象を拜す。」

右鵬耆娑長老

〔一〕鵬耆娑長老、未だ沙彌たりし時、數多の著飾りたる婦人の精舍に入り來るを見て。〔二〕以下自己の境界を述ぶ。〔三〕一五二偈註を見よ。〔四〕以下阿難陀長老に向ひて。〔五〕佛自恣の經を說き給ひし後。〔六〕sattha-vāha 武具を携ふるものと見るも可なるか。〔七〕涅槃に關する說法の後。〔八〕憍陳如の事。〔九〕目犍連。〔一〇〕佛の異名。〔一一〕過去の追憶。〔一二〕以下尼拘律陀の死に就て問ふ。〔一三〕涅槃。〔一四〕vipassanā 觀と譯す、samatha（止）と對して、禪の觀念の方面を表す。

國譯長老偈終

大集品第二十一

國譯長老尼偈

彼の祥者、尊貴者、正遍智者に歸命したてまつる

一頌品第一

【一】長老尼、襤褸を以て〔衣服を〕作り、〔之を〕纏ひて快く臥せよ、是れ汝の愛欲は制せられて、鍋中の枯菜の如くなりたればなり。

斯く姓名不詳の長老尼は此の偈を唱へたりとぞ。

【二】解脫尼、(一)〔四種の〕結より脫るること、(二)羅睺の捕へし月の如くせよ、解脫の心を以て負目なき〔身となり、世の〕施食を受けよ。

斯く世尊は解脫〔と呼べる〕(三)式沙彌尼を常に此の偈を以て誡め給へり。

【三】富樓那尼、諸の法を成滿すること、十五日の月の如くせよ、圓滿なる智慧を以て〔愚癡の〕闇塊を破れ。

右佛の富樓那尼に示し給ひし偈。

【四】帝須尼、(四)學によりて學修せよ、汝諸の(五)繫結に敗らるること莫れ、所有ゆる繫結より離れ、無漏「の身となりて」世に遊行せよ。

右佛の帝須尼を誡め給ひし偈。

【五】(六)帝須尼、心を諸法に專にして、(七)刹那も「空」過せしむる勿れ、そは刹那を「空」過せしむるものは、(八)泥洹に墮ちて憂ふべきが故なり。

右他の帝須尼の偈

【六】堅固尼、滅を得よ、「諸の邪」想を制むるは樂し、無上の安隱、涅槃を成ぜよ。

右堅固尼の偈

【七】(九)諸根を習修せる尼は、堅固の法によりて堅固なり、(10)魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持せよ。

右他の堅固尼の偈

【八】友尼、信心によりて出家して、交友を悦べ、安隱「涅槃」に達せんがために、諸の善法を修せよ。

右友尼の偈

【九】善尼、信心を以て出家して、善法に於て樂め、諸の善法を修習せよ、安隱「涅槃」は無上「の法」なり。

右善尼の偈

【一〇】寂靜尼、超え難き(一)死王の領土を〔超え〕、暴流を渡れ、(二)魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持せよ。

右寂靜尼の偈

【一一】三の屈れるものを脱るる上に於て、我は巧に脱れ善く免れぬ、(三)〔三とは〕臼と杵と屈れる主となり、我は生と死より脱れ、生有の慾を盡せり。

右解脱尼の偈

【一二】〔最上果に達せんとして〕願樂を起せるものは、終に心を以て〔涅槃に〕接せん、諸欲に繋縛せらるることなきものは、上流〔般の人〕と稱せらる。

右法與尼の偈

【一三】行ひて後に悔なき佛の教を行へ、(四)疾く足を洗ひて一面に坐せよ。

右毘舍法尼の偈

【一四】諸界の苦なることを見、生をして再び〔汝の身に〕來らしむること勿れ、生有の愛欲を斷たば、寂靜にして遊行せん。

右佛の善意尼に示し給ひし偈

【一五】我は身業を攝し、語業さては意業を〔攝せり〕、愛念を其の根より拔きて、清涼寂靜となれり。

右鬱多羅尼の偈

【一六】 （一五）老尼、（一六）汝襤褸を以て〔衣服を〕作り、〔之を〕纏うて快く臥せよ、是れ汝の愛欲は制せられて、清涼寂靜〔の身〕となりたればなり。

右佛の善意老尼に示し給ひし偈

【一七】 〔我〕力弱く杖に凭りて食を乞ひ廻り、四肢震ひて其處なる地上に倒れぬ、肉身に過難あることを見て、其より我が心解脫せり。

右達磨尼の偈

【一八】 家を捨てて得度し、愛したる兒と畜類とを捨て、貪と瞋とを捨て、無明を除き、愛念を其の根より拔きて、我は寂靜寂滅を得たり。

右僧伽尼の偈

〔一〕四種の結とは欲・有・見・無明等四種の繫縛を云ふ。〔二〕日蝕月蝕は日月の羅睺と稱ふる阿修羅王のために捕へらるるによると信ぜられたり。〔三〕Sikkhamānā 學法女、又は正學女と譯す、成年の婦女にして比丘尼たらんと志すものを二年間戒律を學修せしめて、其の品行を驗し、特に懷胎の有無を驗す。〔四〕戒定慧の三。〔五〕煩惱の異名。〔六〕諸經要集三三三偈。〔七〕Khaṇa 機會を去らしむ、好機を逸せしむるの意と見るも可なるが如し、四五九偈參照。〔八〕地獄餓鬼畜生修羅の四惡趣を云ふ。〔九〕信・進・念・定・慧の五種の根を云ふ。〔一〇〕法句經一七五偈參照、大小の煩惱を盡して、再び世に生れ出ることなし、故に最後身を持すると云ふ。〔一一〕死王の領土卽ち暴流の意、共に此の輪廻界を指す。〔一二〕七偈參照。〔一三〕此の婦もと、他のために舂きて生計せしが如く、而して其の夫は傴僂なりしなり。〔一四〕師に事ふる禮の一端を示すなり。〔一五〕原語の意は晚年にして出家したる尼。〔一六〕一偈參照。

【一九】難陀、病み、汚れ、腐りたる「此の」合成「の身」を見よ、（一）靜穩に歸し、心を定念に住せしめ、不淨想を修習せよ。

【二〇】又無相念を修習し、憍慢心を捨てよ、其の憍慢の除滅より、汝は寂靜にして遊方せん。

斯の如く世尊は常に此等の偈を以て難陀式沙彌尼を敎へ給へり。

【二一】此等（二）七種の菩提分、涅槃に達するの道は、我總て之を佛の指示に從ひて修習したり。

【二二】我既に彼の（三）世尊を見奉りたれば、此は「我が」最後の合成「身」にして、轉生輪廻は斷じ盡され、今より再び生を受くることあらじ。

右ヂェンター尼の偈

【二三】解脫したる者、我は巧く脫れ、（四）杵「取る業」より善く免れたり、我が「夫は」無慚恥にして我を傘ほどにも「思はず」、我が釜は（六）疽「の如く」なりき。

【二四】我は貪と瞋とを斷盡して住す、我は樹下に入り、「吁、樂なる哉」と「云ひて」、快く禪思す。

右姓名不詳の某比丘尼の偈

【二五】我が所得は、（七）迦尸國歲入の額に達しぬ、都民は（八）我に價を附して、價なき我に價を定めぬ。

【二六】其より我は色に於いて嫌厭の念を起し、嫌厭の念を起して我は欲を離れぬ、我は再び生死輪廻に流轉せざらんことを、「我は」（九）三明を證知し佛の敎を成ぜり。

右アッダカーシー尼の偈

【二七】假令〔我〕羸せ、病みて、甚く力衰へたりとも、杖に恁れて山を登り往く。

【二八】(一〇)僧伽梨衣を下し、鉢を伏せて、岩石の上に身を休む、〔愚癡の〕闇塊を碎きつつ。

右質多尼の偈

【二九】〔我〕假令苦み惱み力乏しく年邁きたりと雖も、杖に恁れて山を登り往く。

【三〇】僧伽梨衣を下し、鉢を伏せて、岩上に坐し、其より我が心解脱せり、我三明に達し佛の教を成せり。

右慈愍尼の偈

【三一】(一一)〔白黒〕分の十四日、十五日、又八日に、及び(一二)變改分に於て、天群を欣讃して八支具足せる布薩戒を護れり。

【三二】其の我今は一食を〔取り〕、頭を剃り、僧伽梨衣を纏ふ我は天群を願はず、胸中の怖畏を制せり。

右友尼の偈

【三三】母、下足蹠より、上頭髮の頂に至るまで、此の不淨にして汚臭ある身を觀察せよ。

【三四】斯の如くして住せる者には、所有る貪愛根絶され、熱惱斷じ盡さる、我は(一三)清涼滅熱に歸したり。

右(一四)無畏母の偈

【三五】(一五)無畏尼、凡夫の愛著せる〔此の〕身は、壞滅すべきものなり、〔我〕正知正念あり、此の身を捨

てん。

【三六】我多の苦法より〔脱れ〕、精勤を樂めるよりして、愛盡に達し、佛の敎を成せり。

右〔一六〕無畏長老尼の偈

【三七】四たび五たび、我は精舍を出で去りぬ、心の安靜を得ず、心を歸順せしむることを得す。

【三八】其の第八夜に於て我が愛欲斷たれぬ、我多數の苦法より〔脫れ〕、精勤を樂めるよりして、愛盡に達し、佛の敎を成せり。

右婆摩尼の偈

〔一〕諸經要集三四二、三四三偈。〔二〕念・擇法・精進・喜・輕安・定及び捨の七をいふ、覺支・覺分・覺意等の異譯あり。〔三〕此處に云へる世尊とは法身の佛にして色身の佛の意に非ずと解せり。〔四〕此比丘尼の前身は貧うして穀物を舂きて渡世したるなり。〔五〕此の夫は傘を造りて渡世したり。〔六〕Daddu は惡臭を放つ皮膚病の一種、物を煮る釜の不潔にして惡臭を放てるをいふ、或は註解書にては tain Dalidda とす、貧の意。〔七〕此女もと迦尸國の遊女たりしなり、迦尸とは婆羅奈斯城を首都とせし國なり。〔八〕註解書にては五百金の金と見て、此の五百金の財を價となし云云とせり。〔九〕六神通の中、宿命通、天眼通、漏盡通の三を云ふ。〔一〇〕下七五偈註參照。〔一一〕諸經要集四〇二偈參照、陰曆一箇月を白分黑分の二分に分ち、各分の八日、十四日、十五日の三日を布薩日と稱し、比丘、比丘尼は一處に集會して懺悔の式を行ひ、在家人は八齋戒を持つ、所謂六齋戒日なり。〔一二〕布薩式は每半月の八日、十四日、十五日の三日に行ふべき定なれど村落に入るべき用あるため此等の日を變更して七日又は九日、十三日及び翌分の初日に行はざるを得ざることあり、之を變改月分と云ふ。〔一三〕煩惱の熱惱なるに對し涅槃の狀態を淸涼なりと云ふ。〔一四〕無畏と云ふ子(出家して長老となる)ありて後出家したる故に無畏の母と云ふ、此の二偈の中初の一は無畏長老が其の母を誡むるの偈、後の一は母尼の之に答ふる偈なり。〔一五〕自ら己を呼ぶなり。〔一六〕愛欲の盡きたるを謂ひ、涅槃を指す。

三頌品第三

【三九】我が出家よりして二十五年の間、未だ曾て心の安止を得たることを知らざりき。
【四〇】我が未だ歸順せざるや、我心の安靜を得ず、其より(一)時那の教を記憶して、不安を抱けり。
【四一】我多數の苦法より[脱れ]、精勤を樂めるよりして、愛の滅盡に達し、佛の教を成じぬ、我が愛念の涸らし盡されてより今日は第七夜なり。
右他の娑摩尼の偈
【四二】四たび五たび、我は精舍より出で去りぬ、心の安靜を得ず、心を歸順せしむることを得ずして。
【四三】我が信仰する所たりし、彼の尼は我に近寄り、我が爲に法を演説せり、(二)蘊處界の法を。
【四四】我に説き教へしが如く、我は其の法を聞きて七日の間一跏趺を組みて坐せり、喜と樂とに飽きつつ、第八日に[愚癡の]闇塊を破りて我は足を伸せり。
右鬱多羅尼の偈
【四五】涅槃に達するの道なる、此等(三)七種の覺支は、佛の指示し給ひしが如く、我は之を修習したり。
【四六】(四)空無相[定]は願ふ所に從つて我之を得、佛の御子[として]常に涅槃を樂む。
【四七】諸欲の天界に屬するものも、人界に屬するものも共に斷ぜられ、生死輪廻は盡されて、今や、我に再生なし。
右他の鬱多羅尼の偈
【四八】(五)我鷲頂山の日中住より去りて、岸頭に象の暴流を渡れるを見たり。

【四九】一人あり鉤を取りて「足を與へよ」と云ひて請ひ、象の足を伸すや、人は之に騎りたり。

馴れざるものの馴れ、人人に服從するを見、之によりて我は其より林間に入り、心を定に決めぬ。

【五〇】右柔順尼の偈

【五一】(六)「母耆婆」と〔呼び〕汝は林中にありて泣く、己を知れウッビリ、八萬四千の人は總て同く耆婆と名け、此の墓にて焚かれぬ、此の中汝は誰をか哭せるぞ。

【五二】憂に沈める(七)我が娘の憂を除けるが故に、我が胸に立ちて見ること難き箭を拔けり。

【五三】我此の日箭を拔き取りて、(八)饑餓を離れ、寂靜の身となれり、佛法僧、牟尼に歸依し奉る。

右ウッビリーの偈

【五四】佛の敎を說くスッカー尼に事へざる此の王舍城の民は何をか爲せる、蜜を食へるが如く放心せり。

【五五】智ある人は此の滅することなくして噴き出る甘露を吸はんと思ふこと、道行く人の雲を〔望むが〕如し。

【五六】汝スッカー、白淨の法によりて、諸の貪欲を離れ、定に住し、魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持せよ。

右スッカー尼の偈

【五七】(九)世に出離〔の法〕あるなし、遠離によりて何をか爲す、諸欲の樂を享けよ、後に至りて悔ゆる

勿れ。

【五八】諸欲と諸蘊の縛著は、槍と戟とに喩へらる、是等を汝は欲樂と云へど、之我が樂とする所に非ず。

【五九】歡樂は一切處に斷ぜられ、闇愚の蘊は破られぬ、(一〇)波旬よ、斯の如く之を知れ、魔王よ、汝は〔我に〕敗られぬ。

右セーラー尼の偈

【六〇】(二)諸仙の〔獨り〕到るべくして、〔凡夫には〕入り難き處は、少智の婦女は、此處に達すること能はず。

【六一】若し正しく法を觀る人の、心善く定に住し、智慧現前する時は、我等が婦人たるに於いて、何〔の障礙〕かある。

【六二】歡樂は一切處に斷ぜられ、闇愚の蘊は破られたり、波旬よ、斯の如く之を知れ、魔者よ、汝は〔我が爲に〕敗られたり。

右ソーマー尼の偈

〔一〕勝者の意、佛のことなり、盲龜の喩の如き世尊の平生敎へ給ひしことを憶ひ起して。〔二〕五蘊、十二處、十八界に關して法を說きたるなり。〔三〕上二一偈參照。〔四〕空等至及び無相等至なり。〔五〕靈鷲山を云ふ。〔六〕五一偈は耆婆と名くる娘を喪ひて林中の墓間に泣き悲める母を世尊の誡め給ひし偈、此に「母耆婆」と云へる母は親む意の語、我が娘なれども斯く呼べるなり、後の二偈は母の覺を開きて述べたるなり。〔七〕娘の爲の愛。〔八〕愛、渴愛を云ふ。〔九〕魔王とセーラー尼との問答なり、初の一偈は魔王の語にして、後の二偈はセーラーの之に答へたるなり。〔一〇〕Pāpimā（パーピマー） 惡事を願ひ、惡事をなし、又は惡事に關係するもの

の意にて魔王の異名なり。〔二〕之もソーマー尼と魔王との應對なり、初の一偈は魔王の言、次の二偈はソーマー尼の語。

四頌品第四

【六三】(一)定心に安住せる迦葉は、佛嗣續の兒子にして、宿住智あり、又天道と惡趣とを見る。

【六四】又生の滅盡に達し、上智を得て、所作已に辦じたる牟尼は、此の(二)三種の明智あるによりて、三明の婆羅門たり。

【六五】同じくバッダー・カピラーニーは、三明を具して死を棄つるものなり、魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持つ。

【六六】(三)我等兩者は、世に過難あることを見て出家せるもの、諸漏を盡し、柔和にして清涼寂靜となれり。

右バッダー・カピラーニー尼の偈

〔一〕此の四偈はバッダー・カピラーニー尼が摩訶迦葉の德を述べたるものなり。〔二〕三種の明智とは所謂三明のことにて、六神通の中、宿住通(上に宿住通と云へるもの)天眼通(上に天道と惡趣とを見ると云へるもの)、漏盡通(上に所作已に辦じたる牟尼と云へるもの)の三を云ふ。〔三〕摩訶迦葉と已バッダー・カピラーニー尼となり。

五頌品第五

【六七】我出家してより、二十五年の閒、一彈指の閒も、心の安息を得ざりき。

【六八】心の安靜を得ず、欲樂の爲に染せられ、我は腕を擴げて泣きつつ、精舍の中に入り來りぬ。

【六九】我が歸依者とせし比丘尼は我に近づき來り、我が爲に蘊處界の法を說きぬ。

【七〇】彼〔の尼〕の法を聞きて、我は一面に坐して、(一)宿住を知るに至り、天眼を淸うしぬ。

【七一】〔他の〕心を知る智を〔得〕、又耳界を淨うし、神〔足〕をも亦我〔之を〕證得し、諸漏の滅盡に達せり、我六神通を證得し、佛の敎を成せり。

右姓名不詳の某比丘尼の偈

【七二】(二)色と形と、幸運と又譽とに醉ひ、年の若きに心亢りて、我は他人を見下したり。

【七三】愚者に言ひそやさるる此の身を、樣樣に飾りて、獵夫の網を張るが如く、妓宅の戶に立ちたり。

【七四】陰なる又陽なる、多くの裝飾を見せ、笑顏して、多數の人を欺きたり。

【七五】此の己れ今日は髮を剃り、(三)僧伽梨衣を纏ひ、乞食〔の爲に〕遊行し、(四)非尋を得て樹下に坐す。

【七六】天界人界共に有ゆる結縛を斷ち、總て漏を盡して、淸涼寂靜の身となれり。

右もと遊女たりし離垢尼の偈

【七七】思惟の正しからざるよりして、我は欲染に惱まされ、心從順ならずして、散亂せしことあり。

【七八】煩惱の爲に囚へられ、樂觀に從ひ、染著心の虜となりて、心の平安を得ざりき。

【七九】瘦せて〔膚色〕黃ばみ、又醜くなりて、我は遊行すること七年、晝夜苦み惱みて樂を得ず、

【八〇】其より繩を手にして、森林の中に入りぬ、我再び俗〔生活〕をなさんよりは、此處に縊るぞ宜し

きと思ひて。

【八一】繩を堅くして樹枝に縛り、繩を頸に投げ掛けし時、我が心解脱を得き。

右獅子尼の偈

【八二】(五)歡喜尼、〔病に〕冒され、汚れ腐りたる〔此の〕身を見よ、靜穩に歸し、心を安定に住せしめ、不淨〔觀〕を修習せよ。

【八三】此の身の如く彼の身もあるべく、彼の如く此もあるべし、凡愚の歡とする〔身〕は、不潔にして惡臭を發つ。

【八四】斯の如く晝夜倦まず之を觀察せば、其より〔汝は〕己の智慧によりて厭ひて〔之を〕見るに至らん。

【八五】我は精勤して、如實に〔之を〕尋ね討めたれば、此の身の內、我正に之を觀たり。

【八六】其より我は身に於て厭離の念を抱き、內心又欲を離れたり、精勤にして繫結なく、寂靜にして涅槃を得たり。

右歡喜尼の偈

【八七】(六)火と月と日と天とを我は拜し、(七)河岸に赴きて我は水に入りにき。

【八八】多の(八)禁行に凝り固まりて、頭の半を剃り、地上に臥して、我は夜食を取らざりき。

【八九】我は嚴飾の欲念〔を抱き〕、貪染に惱まされ、洗沐塗身によりて、此の身を寵したり。

【九〇】其より信心を得、得度して出家となり、如實に身を見て、貪染斷せられたり。

【九一】一切の生有も、欲も願も亦共に滅され、我は一切の纏結を離れて、心の安靜に達せり。

右歡喜上長老尼の偈

【九二】信心により得度して、在家より出家の身となり、彼より此より、利養恭敬を熱求して行じぬ。

【九三】我最上の利を捨てて、卑小の利に就き、煩惱の虜となりて、沙門の福利を厭ひぬ。

【九四】〔時に〕我室中に坐するや、心に不安生ぜり、我は邪路に陷れり、我は愛の虜となれり。

【九五】我が命は短少にして、老と病とは〔之を〕害ひ、身は老〔の爲〕に毀らる、放逸なるべき時にあらず。

【九六】如實に諸蘊の起滅を觀察して、心解脫を得、安立し、佛の教を成せり。

右ミッタカーリー尼の偈

【九七】我在家に住める〔身として〕比丘尼の法を聞き、離塵の法、不滅の道、涅槃を見ぬ。

【九八】我は兒女と財穀とを棄て、髮を落させて、得度し出家の〔身となりぬ〕。

【九九】我は(九)式沙摩那となりて、寂靜の道を修習し、貪欲瞋恚と、其の(一〇)共立の煩惱を捨てたり。

【一〇〇】【一〇一】比丘尼の大戒を受けて、前生を追憶し、能く清淨無垢の天眼を修得したり。敗壞因生の諸行を、他處に見て、有ゆる煩惱を捨て、清涼寂靜となれり。

右サクラー尼の偈

【一〇二】此の色身に、十人の兒を生み、其より年老い力弱りて、我は比丘尼の處に到りぬ。

【一〇三】比丘尼は我が爲に、蘊處界の法を說き、其の法を聞いて、我は髮を斷り出家しぬ。

【一〇四】我式沙摩那となるや、天眼は淸淨となり、我が嘗て住せし宿世〔の事〕を知る。

【一〇五】靜穩に歸し、安定に住して、無相念をも修習し、(二)繼起の解脫を得、取著なくして涅槃を〔現せり〕。

【一〇六】〔我〕既に遍く五蘊を證知し、其の根元を斷ちたり、我は堅固體の生、無欲のものとなれり、今や我再び生を受くることあらじ。

右ソーナー尼の偈

【一〇七】(三)往昔は斷髮一衣垢齒にして、過なきを過ありと思ひ、過あるを過なしと見て周行しぬ。

【一〇八】靈鷲山上に日中の休息をなして歸り、塵垢を離れ給へる佛の、比丘衆に圍繞せられ給へるを見ぬ。

【一〇九】地に膝を衝き禮拜して、面前に合掌するや、〔世尊は〕我に「來れ、跋提」と宣ひぬ、之我が受戒なりき。

【一一〇】央伽・摩揭陀・伐地・迦尸・及び拘薩羅を周遊し、五十年間失なくして民の施食を食みぬ。

【一一一】有ゆる纏縛より脫れんが爲に、跋提に衣服を奉せる此の有智の優婆塞も亦多の福業を積めり。

右跋提尼の偈

【一一二】(三)男子は犂を以て田を耕し、種を地に播き、妻兒を養ひ、財を貯ふ。

【一一三】我戒德を具有し、師の敎を行ひ、怠惰せず散心せずして、奈何で涅槃を得ざるべき。

【二四】（一四）我水中に足を洗ひ、水の平地より凹處へ來るを見て「相を得」、其より心を定めて、恰も「御者の」生善き良馬を「調ぐる」が如くしぬ。

【二五】其より燈火を取りて、我は精舍に入り、臥具を見て、臥床「の上」に坐しぬ。

【二六】更に針を取りて、我は燈心を搔き下ぐるに、燈火の消ゆると共に、心解脫しき。

右パターチャーラー尼の偈

【二七】男子は杵を手にして、穀を舂く、男子は「其の」妻子を扶助し、財物を貯ふ。

【二八】行うて悔ゆることなき佛の教を行へ、疾く足を洗うて一面に坐せよ、一向に心の寂止を求めて、佛の教を行へ。（一五）

【二九】彼等は此のパターチャーラー尼の教の語を聞き、足を洗ひて一面に坐し、念を心の寂止に專にして、佛の教を行へり。

【三〇】夜の前分には前生を追念し、夜の中分には天眼を淨うし、夜の後分には、黑闇の蘊を除けり。

【三一】「座より」起ちて、「パターチャーラー尼の」足を禮して「曰へり」、「我等汝の教を行へり、忉利天衆の戰場に勝ちたる帝釋天に奉事するが如く、「我等も汝に奉事して」住せん、我等三明あり無漏なり。」

此等三十人の長老比丘尼はパターチャーラー尼の處にありて「其の」所知を述べたり。

【三二】我先に貧しくして、夫なく兒なく、朋友親族もなく、衣食をも得ざりき。

【三三】鉢と杖とを携へ、家より家に乞食して、寒熱に苦められ、我は七年周行せりき。

【二四】然るに飲食物を得たる比丘尼を見、之に近づき云へり、「[我を]出家せしめよ」と。

【二五】彼のパーチャーラーは、亦我を愍みて出家せしめ、其より我を誡めて、(一六)涅槃の道に我を勵ましぬ。

【二六】彼の[尼の]其の語を聞いて、[我は]敎を行ひたり、大姉の誡は空しからず、我は三明ありて無漏なり。

右闍陀尼の偈

〔一〕宿住を知るは宿住通(一)、天眼を淸うするは天眼通(二)、他の心を知る智は他心通(三)、耳界を淨うするは天耳通(四)、神足を證得するは神足通(五)、諸漏の滅盡に達するは漏盡通(六)、以上を六神通と云ふ。〔二〕もと遊女たりし女の出家して後得たる安樂の境界を述べたるなり。〔三〕大衣、重衣、重複衣と譯す、三衣の一にして上衣を合せ縫ひたるもの、外出又は防寒用として用ふ。〔四〕尋(思量)と伺(熟慮)とは一は麁に一は細に分別する精神上の作用なり、此の二は色界初禪まで存し其以上には之なし、故に非尋を得るとは第二禪以上のものとなるを云ふ。〔五〕歡喜尼又孫陀利、國美とも云ふ、もと世尊の異母弟難陀(歡喜)の妻と定まりしものなり、此の五偈の中初の三偈は世尊の歡喜尼を敎へ給ひしもの、後の二偈は尼自ら述べたるなり。〔六〕此の尼初は外道に歸依して苦行を行ひ(二偈)、次には之を廢して身を莊飾し(一偈)、更に歸依して煩惱を斷ち涅槃に達せり(二偈)。〔七〕河岸に設けたる禮拜供養の式場。〔八〕外道の苦行。〔九〕二偈の註を見よ。〔一〇〕貪欲瞋恚と共に起り共に滅する煩惱と云ふ意。〔一一〕初向を得れば直に之に續いて起る所の解脫の謂なりと譯せり。〔一二〕髮を斷ち一衣を纏ふは尼乾子外道の法なり、楊枝を用ひて齒を磨かざるが故に齒は垢づきたるなり、〔一三〕世上の男子は皆斯の如くす。〔一四〕原文の意を補うて譯すれば兩足を洗はんとして、三たび灌ぎたる水の中にて、平地より窪地へ流れ來れる洗足の水を見て、暗示を得たり。〔一五〕以上三偈はパターチャーラー尼の偈にして、後の三偈は此の尼の敎によりて出家したる三十比丘尼の開悟と其感想とを述べたるなり。〔一六〕原語には最上利益の意あり、涅槃を云ふ。

六頌品第六

【一二七】(一)來るものも去るものも共に、其の道を知らざるに、其の何處より來れる有情を、「我が兒なり」と云ひて泣き悲むぞ。

【一二八】來り又去るもの道を知るとも、爲に憂ふること勿れ、そは斯の如き「去來は」、生あるものの法なればなり。

【一二九】求められざるに彼處より來り、許されざるに此處より去る、何處よりか來りて少時住み「たる後」。

【一三〇】此處よりは「他の有情」として去り、彼處よりは他の有情として來り、死者は人間の形にて轉生し來る、去れるが如くにして來らば、其處に何の悲むことかある。

【一三一】實に我が胸に立ちて見難き箭を抜き、憂に沈める我が兒の憂を拂へり。

【一三二】我今日箭を抜かれ、饑餓を離れ、寂靜の身となれり、佛と法と僧と牟尼とに歸依す。

右パターチャーラー長老尼の弟子なる五百尼の偈

【一三三】我兒の憂の爲に惱み、心亂れ狂ひて、裸身亂髮、處處を徘徊しき。

【一三四】街路や、塵塚や、墓所や、大道や、飢ゑ渇きながら徘徊すること三年ならき。

【一三五】時に、柔和ならざるものを柔和にし、何物をも畏れ給はざる正覺者善逝の(三)彌絺羅の都に入り

給ふを見ぬ。

【一三六】我常の心を「復し」得て、禮拜著座しければ、瞿曇は慈悲を垂れて、我が爲に次第に法を說き給ひぬ。

【一三七】彼の法を聞き、得度し出家の身となりて、專心師の敎を守り、安穩の道を證せり。

【一三八】有ゆる憂は斷ぜられ捨られ、此に果つべきものたり、そは諸の憂の生ずる因を、我知り得たればなり。

右ヴーシチー尼の偈

【一三九】(三)汝は年少くして眉目美しく、我も亦年少弱齡なり、來れ讖摩、五樂を以て共に樂まん。

【一四〇】(四)病みて廢るべき此の腐臭の身に惱まされ、「且つ之あるを」恥づ、「我が」欲愛は斷に盡されたり。

【一四一】諸欲及び諸蘊の縛著は、槍と戟とに喩ふべきなり、之を汝は欲樂なりといへど、之は今我が樂とする所に非ず。

【一四二】歡樂は一切處に斷ぜられ、闇愚の蘊は破られぬ、破旬よ、我は斯の如く知る、魔王よ、汝は我が爲に敗られたり。

【一四三】愚者は實を知らずして、星宿を禮拜し、林閒に火神を祀り、之を清淨なりと思へり。

【一四四】我も亦人閒中の最上者なる正覺者を禮拜す、「我は」有ゆる苦惱より脫れ、佛の敎を行ふものたり。

右識摩尼の偈

【一四五】莊嚴して美衣を著、華鬘を著け旃檀香を塗り、有ゆる瓔珞は以て〔身を〕覆ひ、侍女の群に傅かれき。

【一四六】飲食をも携へ、堅輭の食を夥しく〔携へて〕、家を出で、園林に赴きぬ。

【一四七】其處に遊樂嬉戲して、我が家に歸るに當り、精舍の森なる沙祇多なる安繕那林に入りき。

【一四八】〔此處に〕世間の光明なる〔世尊〕を見、禮拜して坐しければ、世間眼〔世尊〕は愍みて、我が爲に法を說き給ひぬ。

【一四九】大仙の〔敎〕を聞きて、我正理を了解し、卽處に離塵の法、不滅の道に達せり。

【一五〇】而して法を了知したる〔我〕は得度して出家の身となり、三明を得たり、佛の敎は空しからざりき。

右善生尼の偈

【一五一】我は貴くして寶多く財夥しき家に生れ、(五一)末提の生みの娘にして、眉目形好かりき。

【一五二】王子に求められ、長者の子等に欲しがられ、〔彼等は〕我が父に書を送りて云へり、「我にアノーパマーを與へよ。

【一五三】此の汝の女なるアノーパマーの重を八倍して、金と寶とを與へん。」

【一五四】我は世間最勝の無上の正覺者を見て、其の足を敬禮し、一面に坐したり。

【一五五】彼瞿曇は慈悲を垂れて、我が爲に法を說きたまひければ、我は其座に坐しながら、第三果に達せり。

【一五六】而して髮を切りて、出家得度し、今日より第七夜に、我が愛欲は盡されたり。

右アノーパヤー尼の偈

【一五七】一切有情中の最上者たる(六)覺者、勇者、我と他の衆多の人とを苦惱より脫れしめたる汝に歸命す。

【一五八】有ゆる苦惱は證知せられ、「苦の」因たる愛欲は盡され、賢聖八支道「及び」寂滅は我之を獲たり。

【一五九】昔は「我に」母子、父兄、又祖母ありき、我は如實に知らず、「安住地を」見出さずして輪廻せり。

【一六〇】我は彼の世尊を見奉りたれば、之は我が最後の身にして、生「死」輪廻は斷たれ、今より再生あらじ。

【一六一】精進努力し、常に專心勇猛にして、相和合せる佛弟子を見よ、之ぞ諸佛の禮拜なる。

【一六二】げにも衆人の利益のために、摩耶「夫人」は瞿曇「佛」を生み奉り、病死の重荷、苦蘊を拂へり。

右摩訶波闍波提瞿曇彌の偈

【一六三】グッター、「愛して」兒の如くせる蓄積を棄てて利益「を得ん」が爲に汝は出家したれば、汝「此の利益を」增長して、心の囚となること勿れ。

【一六四】心の爲に欺かれたる有情は、魔王の國土を樂み、智慧なくして、轉轉生死を經。

【一六五】欲愛、瞋恚、及び身見、戒禁取、及び第五に疑。

【一六六】比丘尼は此等下分の結使を棄てたれば、此等は再び來ることあらじ。

【一六七】貪、慢、無明と調戲とを除き、諸結を破りて、汝は苦惱を盡さん。

【一六八】生〔死〕轉生を擯け、再生を知りて、現生に離欲安靜の人とならん。

右グッター尼の偈

【一六九】心の安息を得ず、心從順ならざるより、四たび五たび、精舍を出でたり。

【一七〇】〔識摩〕尼に近づきて、我は恭く〔道を〕訪ひ、尼は我が爲に、界と處との法を說きたり。

【一七一】(四)聖諦、(五)根、(五)力と(七)覺支、八支道との、最上利に到るべき、

【一七二】彼の〔尼の〕語を聞き、教を行うて、夜の初分に前生を憶ひ。

【一七三】夜の後分には愚闇の蘊を破れり。

【一七四】其の時我は又喜樂を身に感じて住し、第七〔夜〕には闇蘊を破りて、(七)兩足を伸せり。

右ギヂャヤー尼の偈

〔一〕此の六偈の中、初の四偈はパターチャーラー尼の幼兒を失ひたる五百の母のために說く所、後の二偈は此等五百人の一人づつ唱へし所なりと云ふ。〔二〕Mithilā 東弗提訶利の首都。〔三〕此の六偈は魔王と識摩との應對なり、初の一偈は魔王の語、次の五偈は識摩の語、識摩はもと摩揭陀國頻毗沙羅王の妃たり。〔四〕上五八偈參照。〔五〕Majjha〔六〕覺男又は覺雄として一語と見るも可なり。〔七〕跏趺を組みて入定思惟したるなり。

七頌品第七

【一七五】男子は杵を携へて穀を舂き、男子は妻子を養ひ財を貯ふ。

【一七六】行うて後に悔なかるべき佛の敎に勤み、疾く足を洗うて一面に坐せよ。

【一七七】心を定著して靜穩に歸し安定に住せしめ、他の爲めに諸行を觀察せよ。

【一七八】我彼の〔尼の〕語・パターチャーラーの敎を聞いて、足を洗ひ一面に坐しぬ。

【一七九】〔而して〕夜の初分に前生〔の事〕を追憶し、夜の中分には天眼を淨うし、

【一八〇】夜の後分には闇蘊を破り、而して三明を獲、〔座より〕起ちて汝の敎を行ひ果せり。

【一八一】〔我は〕忉利天衆の、戰場に勝てる帝釋天に奉事するが如く、〔汝に奉事して〕住せり、我は三明ありて無漏なり。

右ウッタラー尼の偈

【一八二】諸根を修練したる比丘尼は、念を定め、安息の道、諸行寂滅の安樂を了知す。

【一八三】(一)誰を〔師と〕仰ぎて、汝は頭を圓くし、沙門尼の相をなせるや、汝異敎を喜ばざるや、如何なれば愚にして之を行ふぞ。

【一八四】之より他なる異敎は、見を據とせり、彼等は法を知らず、法に熟せず。

【一八五】釋迦族に生れ出でたまへる佛・無等倫の人あり、彼我が爲に諸見度脱の法を說きたまふ。

【一八六】苦、苦の生起、苦の度脱、又諸見の寂滅に達する賢聖八支道となり。
【一八七】彼の〔佛の〕語を聞き、〔其の〕敎を樂みて住し、三明を獲、佛の敎を成ぜり。
【一八八】一切處に歡樂を斷じ、闇蘊を破れり、波旬斯の如く之を知れ、惡魔汝は我に敗られたり。

右チャーラー尼の偈

【一八九】〔正〕念あり〔五〕眼ありて、諸根を修練したる比丘尼は、善良の士の受用する所たる、寂靜の道を了知す。
【一九〇】如何ぞ生を喜ばざる、生あるものは諸欲を享く、欲樂を享けよ、後に至りて悔ゆることなかれ。
【一九一】生あるものには死あり、手足を切斷せられ、殺戮捕縛の虞あり、生あるものは苦に會ふ。
【一九二】釋迦族に生れ、〔他に〕敗らるることなき正覺者あり、彼我が爲に、生の超脱の法を說き給へり。
【一九三】苦、苦の生起、及び苦の度脱、苦を滅するの道なる賢聖八支道。
【一九四】彼〔の佛〕の語を聞き、〔其の〕敎を樂みて住し、三明に達し、佛の敎を果せり。
【一九五】一切處に歡樂を滅し、闇蘊を摧けり、波旬、斯の如く〔之を〕知れ、汝は我が爲に敗られたり。

右ウパチャーラー尼の偈

〔一〕魔王とチャーラー尼との問答なり。

八頌品第八

【一九六】戒徳を具有し、諸根を攝護する比丘尼は、自らにして美味具はれる、寂靜の道を得ん。
【一九七】忉利天と、耶摩天と、又兜率天衆と、化樂天と及び他化自在天衆と、汝が昔住みしことある此〔等諸天〕に心を定めよ。
【一九八】忉利天と、耶摩天と、兜率天衆と、化樂天と、他化自在天衆と、
【一九九】〔此等は〕生より生〔を經〕、常に身を尊しとなし、身を追ひて生死を反覆す。
【二〇〇】總て世界は〔欲火に〕燒かれ、燃され、總て世界は〔欲・愛・煩惱に〕焦され、搖がさる。
【二〇一】搖がすべからず、計るべからずして、非凡の人に受用せらるる法を、佛は我が爲に說かせ給ひ、此處に我が心は欲を離れたり。
【二〇二】我は其の語を聞き、教を樂みて住し、三明に到達し、佛の教を成せり。
【二〇三】一切處に歡樂を除き、冥蘊を解けり、波旬、斯の如く〔之を〕知れ、魔者、汝は我が爲に敗られぬ。
右シースーパチャーラー尼の偈

九頌品第九

【二〇四】(一)ヴッダ、俗世に汝の愛欲生せざれ、愛兒よ、再再苦惱の分取者となることなかれ。
【二〇五】ヴッダ、欲を無くし疑を解き、清涼善順にして、漏なき智者は、安樂にして住す。
【二〇六】此等諸仙の〔正〕見に到らんが爲に行へる道を、汝ヴッダ、苦惱を盡さんが爲に增修せよ。

【二〇七】我が母は愛欲を離れて此の義を說く、我に對する汝の愛欲は無きが如くなり。

【二〇八】ヴッダ、諸の有爲の法には、卑きも尊きも中なるも、些も微量も、我が愛欲は之あらず。

【二〇九】我精勤に禪思して、有ゆる煩惱を盡し、三明に到達し、佛の敎を成せり。

【二一〇】げにも我が母は、大なる鉞を投じたり、最上利の義を含める偈頌〔を說きて〕、猶ほ〔他の〕慈悲者の如く。

【二一一】我は此の母の誡の語を聞きて、正しき感激を得、安穩の境に達せんとす。

【二一二】我は專心努力して、晝夜懈倦なく、母の爲に勵まされて、最上の寂靜を得たり。

右ヴッダ母尼の偈

〔一〕此の八偈はヴッダ長老と其母にして出家したるヴッダ母尼との間の應對なり、初の二偈は母尼、最後の三偈は長老の述べし所なり、長老偈三三五—三三九偈參照。

十頌品第十

【二一三】良友を有することは、牟尼の世間に示して稱揚し給ふ所、良友に奉事すれば愚者も賢者となる。

【二一四】正士には奉事すべし、〔然すれば〕奉事者の智慧は增加すべし、正士に奉事すれば、あらゆる苦惱より脫れん。

【二一五】〔一〕苦をも知れ、苦の集をも滅をも、八支道、四聖諦をも亦。

【二六】「婦女たることは苦なり」と、調御可化丈夫者は說きたまへり、夫あるは苦なり、或ひは一たび兒を產むあり。

【二七】孱き身にて〔自ら〕首を斬るあり、毒を仰ぐあり、死兒胎內にあれば、兩者共に滅ぶるに至る。

【二八】我分娩の時近づけるに〔道を〕往きて、己の家に達せずして產み、〔而して〕我が夫は、路上に死せるを見たり。

【二九】兩兒は死し、夫は亦貧苦の爲め路上に死し、母父兄弟は、同じき火葬堆に燒かれたり。

【三〇】一族滅び家貧しき者、汝苦惱を受くること無量、更に又轉轉すること、幾多千生ならん。

【三一】又之を墓所の中に見たり、兒の肉は噉はれたり、一族を喪ひ、他には嘲られ、夫を失ひたる〔我は〕不滅〔の涅槃〕を得たり。

【三二】我は不滅に達する賢聖八支道を修習し、涅槃を證知し、法鏡を見たり。

【三三】我は箭を拔き擔を卸し、我が爲すべきことを爲し終れり、機舍瞿曇彌長老尼は、心善く解脫して此〔の偈〕を唱へぬ。

右機舍瞿曇彌尼の偈

〔一〕苦・苦の集・苦の滅・八支道、之を四聖諦と云ふ。

十一頌品第十一

【二二四】（一）我等母娘は共に同じき人を夫としけるが、我驚懼〔を抱き〕、烈しく身毛の彌立つ〔を感じたり〕。

【二二五】母と娘との我等の、同じき人の妻となれること、愛欲の不淨異臭にして、苦患多きは呪はしきかな。

【二二六】諸欲に患難を見、出離を堅固に安隱なりと〔見〕、王舍城に於て、我は出家得度しき。

【二二七】宿世を知り、天眼を清淨にし、〔他の〕心に關する智慧も、天耳をも清淨にせり。

【二二八】我神〔足〕をも證知し、漏盡に達せり、我六神通を得、佛の敎を行じ了れり。

【二二九】我神〔足通〕を以て四馬〔を附けたる〕車を化作し、世間の主にして、榮多き佛の御足を禮して〔一面に立てり〕。

【二三〇】（三）頂上全面に花咲ける樹に近づき、汝は唯一人樹下に立つ、汝に第二人者なし、奈何ぞ汝愚者は誘惑者を怖れざる、

【二三一】〔汝の〕如き誘惑者百千集りてあらんとも、〔我は〕一毛も動かさじ、震はさじ、汝一人、我に何をか爲さんとする。

【二三二】我隱沒せん、或は汝の腹中に入らん、眉間に留まらん、留まれるを汝は見ざらん。

【二三三】心を克服し、〔四〕神足を修習し、六神通に達し、佛の敎を行ぜり。

【二三四】諸欲と五蘊に纒綿せるとは、槍と戟とに喩ふべきなり、汝の欲愛と呼べるは、其は今我が非樂

とする所。

【二三五】一切處に歡樂を斷ち、闇蘊を破れり、波旬斯の如しと知れ、魔王、汝我がために敗られたり。

右蓮華色尼の偈

〔一〕長老偈一二七、一二八偈參照、此の男をダッバと呼べり、後出家したり。〔二〕以下魔王と尼との問答。

十六頌品第十二

【二三六】〔一〕我水汲女〔となりて〕、寒時常に水に入れり、諸姉に鞭たるるを怖れ、語もて罵らるるを苦として。

【二三七】婆羅門、汝は何人を怖れて、嚴しき寒さに堪へて、四肢顫ひながら、常に水に入るぞや。

【二三八】〔二〕汝プンニカーは、〔我が〕福業を行ひ、惡業を阻むることを知りて、而も汝は之を問ふ。

【二三九】〔人の〕老いたるも幼きも、惡業をなさば、彼は〔其の〕水に浴してぞ、惡業より脫る。

【二四〇】〔三〕孰の癡人か癡人汝に、此の水に浴して惡業より脫るべきことを說き敎へたる。

【二四一】總て蛙も龜も、龍も鰐も、其他の水を潛るものは、天に生るべきに非ずや。

【二四二】屠羊・屠猪・捕魚・獵鹿の人・盜賊・刑人・及び他の造惡の輩も、水に浴して惡業より脫れん。

【二四三】此等の諸河、若し汝が先に犯したる邪業を運び去るとせば、此等は〔同じく〕善業をも運び去りて、汝は善業なき身とならん。

【二四四】婆羅門、汝は〔惡業を〕怖れて、常に水に入る、婆羅門、汝其惡業を犯さざれ、寒氣汝の膚を損はざれ。

【二四五】(四)我が邪道を踏めるを、汝は聖道に導きたり、大姉は〔是れ〕水浴なり、汝に此の衣を奉施せん。

【二四六】(五)衣は汝のものとせよ、我は衣を望まず、汝若し苦惱を怖れ、汝若し苦惱を愛樂せずば、

【二四七】邪業を造ることなかれ、陽にも陰にも。當來又は現在に、汝若し邪業を造らば、

【二四八】汝は苦惱を脱るることなく、それより免るることもなからん。汝若し苦惱を怖れ、汝若し苦惱を愛樂せずば、

【二四九】汝斯の如き佛と法と僧とに歸依し、戒法を守れ、之れ汝の利益のためならん。

【二五〇】(六)我斯の如き佛と法と僧とに歸依し、戒法を守らん、之れ我が利益のためならん。

【二五一】先には我婆羅門族者なりしが、今日我は眞に婆羅門たり、三明を得、智慧を具足し、聞經者たり、淨業者たり。

右プンニカー尼の偈

〔一〕もと給孤獨長者の家の婢女たりしが、後解放せられて出家したり。苦行婆羅門と尼との問答にして、初は尼の語。〔二〕婆羅門の語。〔三〕尼の語。〔四〕婆羅門の語。〔五〕尼の語。〔六〕婆羅門の語。

(一) 二十頌品第十三

【二五二】(二)我が髪は黒くして、蜜蜂の色の如くなりしが、其が〔今〕老の爲に麻や樹の皮に等しくなりたり、實語者の語は相違あることなし。

【二五三】我が頭は香氣ありて香奩の如く、花に滿ちたりき、其が〔今〕老の爲に兎毛の香をなす、實語者の語には相違あることなし。

【二五四】よく植ゑられよく茂れる森の如く、〔我が髪は〕櫛と針とを以て端を梳りて飾られたり、其が〔今〕老のために處處稀薄となれり、實語者の語には相違あることなし。

【二五五】(三)柔かにして香ある〔髪〕をば、黄金を以て飾り組髪として飾りたるは美しかりき、其の頭髪は〔今や〕老の爲に脫け落ちぬ、實語者の語には相違あることなし。

【二五六】先に我が眉は、畫師の巧に畫きたる繪の如く美しかりき、其が〔今〕老によりて皺の爲に垂れ下れり、實語者の語には相違あることなし。

【二五七】眼は光ありて愛らしく、摩尼珠の如く紺色にして大なりき、其が〔今〕老の爲に損はれて光なし、實語者の語には相違あることなし。

【二五八】年若かりし時〔我が〕鼻は平滑にして高く、釣合ありて美しかりき、其が〔今〕老の爲に美を失へるが如し、實語者の語には相違あることなし。

【二五九】我が耳朶は先には、巧に造り巧に調へたる臂環の如くなりしが、其が〔今〕老によりて皺の爲に垂れ下れり、實語者の語には相違あることなし。

【二六〇】我が齒は、先に芭蕉の新芽の色に似て美しかりしが、其が〔今〕碎け落ち〔又は〕麥色に黄めり、實語者の語には相違あることなし。

【二六一】森林内に林住者として、拘者羅鳥の如く美妙の音聲〔をなせり〕、其が〔今〕老の爲に處處中斷す、實語者の語には相違あることなし。

【二六二】我が頸昔は、よく(四)磨きたる金螺の如く美しかりしを、其は〔今〕老の爲に傷けられ曲げられぬ、實語者の語には相違あることなし。

【二六三】我が兩腕は先に、圓き鐵桿に喩へられて美しかりしが、〔今は〕力弱りて波吒利華の如くなれり、實語者の語には相違あることなし。

【二六四】我が手先は滑かに柔かに、金を以て飾りたりしが、老の爲に〔樹の〕根や幹の如くなれり、實語者の語には相違あることなし。

【二六五】我が二の乳房は昔肉付好くして圓く、相釣合ひて仰ぎたりしが、〔今は〕水なき水風箱の如く垂れ下りてあり、實語者の語には相違あるなし。

【二六六】我が身體はもと、巧く磨かれたる黃金の板の如く美しかりしが、〔今は〕細き皺の爲に覆はる、實語者の語には相違する所なし。

【二六七】我が兩の太腿は、もと象の鼻の如しとされて美事なりしが、〔今は〕老の爲に竹筒の如くなれり、實語者の語には相違する所あらず。

【二六八】 我が兩脚は昔、滑かなる黄金の脚環を以て飾りて美事なりしが、此等は〔今〕老の爲に胡麻の莖の如くなりたり。實語者の語には相違する所なし。

【二六九】 昔我が兩の趾は、綿を滿せる〔履に〕似たりとせられ美しかりしが、之は〔今〕老のために顫ひ皺寄れり、實語者の語には相違あることなし。

【二七〇】 〔我が〕此の身は斯の如く弱りて、衆苦の依る處となり、膏脂なく廢屋〔の如く〕なれり、實語者の語には相違あることなし。

右菴婆波利尼の偈

【二七一】 (五)〔婆羅門は云へり〕、「汝我を觀ては沙門と〔云ひ〕、目醒めては又沙門と〔云ふ〕、沙門〔の德〕をのみ稱揚せるが、〔汝〕沙門尼たらんとするや。

【二七二】 汝多くの食物と飲料とを沙門に施す、ローヒニー、〔我〕今汝に問ふ、何に由りてか、汝は沙門を愛するぞや。

【二七三】 業をなすことを厭ひ、怠惰にして他人の施に依りて活き、他に寄食して〔而も〕旨きを好めり、何に由りてか汝は沙門を好愛するぞや。」

【二七四】 〔ローヒニーは云へり〕「父、久しうして初めて汝は我に沙門〔の事〕を問ふ、〔我〕汝に沙門の智慧と戒德と勇猛精進とを說かん。

【二七五】 業をなすを好みて怠惰ならず、最勝の業をなすものにして、貪染と瞋恚とを捨つ、是に由りて

沙門は我が愛好する所たり。

【二七六】作淨者は、(六)三種の邪業の根を絕す、其の邪業は總て捨てられたり、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二七七】彼等の身業は清淨に、語業も亦た同じく、彼等の意業は清淨なり、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二七八】塵垢を離れて內外清淨なること、硨磲眞珠の如く、淨白の法に滿ちたり、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二七九】多聞にして法を護持し、聖にして法によりて活き、義と法とを說く、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二八〇】多聞にして法を護持し、聖にして法によりて活き、心を一境にして「正」念あり、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二八一】遠く「林間に」入りて「正」念を失はず、(七)神呪を誦して「心」浮虛ならず、苦惱の極際を知る、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二八二】村里を出で去るに、何物をも顧みることなく、貪る「心」なくして去る、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二八三】彼等は自物を庫中に藏さず、鍋にも筐にも「藏すこと」なく、既に調熟したるを求む、是に由り

て沙門は我が愛好する所たり。

【二八四】 彼等は貨幣を手にせず、金も銀も〔手にすること〕なく、現在によりて生く、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。

【二八五】 異れる族、異れる土地より〔來りて〕出家せるに、彼等は互に相和親す、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。」

【二八六】 〔婆羅門は云へり〕、「ローヒニー、實にも汝は利益の爲に、我等の家に生れ出たり、佛と法と僧とに信心あり、强き恭敬の念あり。

【二八七】 是れ汝は此の無上の福田を知るが故なり、此等沙門は又我が襯施を受けん、此處に我等の夥しき供物設けられん。

【二八八】 汝若し苦を怖れ、汝若し苦を厭はば、佛と法と又た其の僧とに歸依し、戒法を護れ、これ汝の爲に利とならん。

【二八九】 我は佛と法と又其の僧とに歸依し、戒法を持たん、之我が爲に利益とならん。」

【二九〇】 「先には我(八)婆羅門族者なりしが、今は婆羅門なり、三明あり聞經者たり、得道者たり、淨業者たり。」

右ローヒニー尼の偈

【二九一】 (九)〔優波迦は云へり〕「我先には執杖〔道士〕なりしが、今は獵鹿夫となりて、愛欲、泥淤、怖畏

より〔脱れ〕、彼岸に達すること能はず。

【二九二】チャーパーは、我は彼の女に執心せりと思ひて、兒を戯かせり、チャーパーの愛繋を捨てて、我は再び出家せん。」

【二九三】〔チャーパーは云へり〕、「大勇者よ、我に對して怒ることなかれ、大智者よ、我を怒ることなかれ、そは忿怒に身を滅すものには清淨なし、〔同じく〕苦行あることなければなり。」

【二九四】〔優波迦〕「〔我は〕那羅〔村〕より去らん、誰か此の那羅〔村〕に住まんや、〔汝は〕婦女の形色を以て法によりて活くる沙門を縛す。」

【二九五】(10)「チャーパー」「來れ、迦羅、還れかし、前の如く諸欲を享けよ、我も汝に服し、我が親族たるものも亦〔汝に服せり〕。」

【二九六】〔優波迦〕「チャーパー、汝が今語る所の四分一だも〔汝の愛〕あらば、其は汝に染著せる男子には、實に大なる事たり。」

【二九七、二九八】〔チャーパー〕「山巓にありて、枝條調ひ、花咲ける葛の如く、花咲ける柘榴の如く、島の中なる波吒梨花の如く、赤旃檀を以て四肢を塗り、最上の迦尸衣を著け、眉目好き此の我を、如何で汝は捨てて去るぞや。」

【二九九】〔優波迦〕、「猶ほ鳥師の鳥を繋がんと願へるが如く〔するも〕、汝は虚の形色を以て、我を縛し得ざるべし。」

【三〇〇】〔チャーバー〕、「迦攞、此の又た我が兒なる果は汝に生じたり、此の兒を有てる我を如何で汝は捨てて去るぞや。」

【三〇一】〔優波迦〕、「智慧ある人は兒を捨つ、これより親族、其より財、大雄者は、象の縛を斷つが如く、それを捨つ。」

【三〇二】〔チャーバー〕、「今汝の此の兒を杖を以て、又は刀を以て、地上に於て打たん、〔斯くせば〕兒の憂の爲に〔汝は〕去らじ。」

【三〇三】〔優波迦〕、「假令〔汝〕兒を野干、〔又は〕犬に與へんとも、兒を設けたる汝賤女、〔汝は〕再び我〔が心〕を回さざるべし。」

【三〇四】〔チャーバー〕「さらばよし、迦攞、今汝は何處に住せんとする、何の村邑、聚落、都府、王城に〔往かんとする〕。」

【三〇五】〔優波迦〕「我先には徒を有し、沙門ならずして沙門の思をなし、村より村に、都府王城を徘徊したり。

【三〇六】彼の世尊覺者は尼連禪河の邊に於て、一切の苦惱を捨てんが爲に有情の爲に法を說き給ふ、我は彼の許に往かん、彼は我が師たるべし。」

【三〇七】〔チャーバー、〕「無上の世尊に〔我が〕禮拜を傳へよ、右繞三匝して恭敬の意を表せよかし。」

【三〇八】〔優波迦〕「チャーバー、汝の語る所、之我が得る所なり、今無上の世尊に〔汝の〕禮拜を傳へん、

右繞三匝して恭敬の意を表せん。」

【三〇九】其より迦羅は去りて尼連禪河の邊に赴き、彼は正覺者の不滅の道を說きたまへるを見たり。

【三一〇】苦と、苦の生起と、苦の超越と、苦の息滅に至る賢聖八支道とを。

【三一一】彼の足を禮し、彼を右繞三匝して、チャーパーの爲に〔敬意を〕表し、出家得度して三明に通じ、佛の敎を成せり。

右チャーパーの偈

【三一二】(一)〔婆羅門〕、「汝は(二)先に餓鬼兒を噉ひ、汝は晝となく夜となく、甚く思ひ惱みたり。

【三一三】婆羅門女よ、今日、〔汝は〕此の總て七人の兒を(三)噉へり、ヴーセッチーよ、汝は何故に強く思ひ惱まざる。」

【三一四】〔ヴーセッチー〕「我が多數百の兒、又婆羅門、汝及び汝の數百の親族衆は、過去世に於て噉はれぬ。

【三一五】我は生及び死の所依處を知るが故に憂へず、泣かず、又我は思ひ惱むことなし。」

【三一六】〔婆羅門〕「實に未曾有なり、ヴーセッチー、汝斯の如き語をなす、汝何人の法を知りて、斯の如き聲をなす。」

【三一七】〔ヴーセッチー〕、「婆羅門、彼の正覺者は、彌絺羅城邊にありて、一切苦惱捨離の爲に、有情に法を說きたまへり。

【三一八】婆羅門、我は此の應〔供〕者より、（一四）生質なき法を聞きて、即座に正法を了知し、兒の愛を除
けり。」
【三一九】〔婆羅門〕「我も亦彌絺羅城の邊に行かん、恐くは彼世尊は我を有ゆる苦惱より拯ひたまはん。」
【三二〇】婆羅門は解脱を得、本質を除ける佛を見、苦惱の彼岸に達したまへる牟尼は、彼が爲めに法を
說きたまへり、
【三二一】苦と、苦の生起と、苦の超越と、苦の息滅に達する賢聖八支道とを。
【三二二】卽座に正法を了知して、彼は出家を願へり、善生は三夜にして、三明に達せり。
【三二三】〔婆羅門は御者に告げて云へり〕「さて、御者、往いて此の車を婆羅門婦に還し、〔我が〕健かな
ることを婦に語り、今婆羅門は出家し、善生は三夜にして三明に通せり〔と云へ〕。」
【三二四】其より御者は車と千金とを携へ、〔歸て〕婦に〔婆羅門の〕健かなることを語り、「今婆羅門は出
家得度し、善生は三夜にして三明に通達したり」といへり。
【三二五】〔婆羅門婦〕「御者、我は〔夫〕婆羅門の三明を〔得たることを〕聞き、此の馬車と千金とを祿物と
して汝に贈らん。」
【三二六】〔御者〕「婦、馬車も千金も共に汝のものとせよ、我も勝智者の許にありて出家せん。」
【三二七】〔婆羅門婦は娘孫陀利に告げて云へり〕、「象・牛・馬・摩尼・耳環・家にある寶物を捨て、汝の父は
出家しぬ、孫陀利、富を享有せよ、汝は家の嗣續者なり。」

【三一八】「孫陀利」「象牛馬、摩尼耳環、家にある樂しきものを捨てて、我が父は兒の憂に思ひ惱みて出家したり、我も亦我が弟の憂に惱みて出家せん。」

【三一九】「婆羅門婦」「孫陀利、汝の望める其なる思惟成就せんことを、「戶邊に」立ちて「得る」團食・遺穗・糞掃・衣服、此等を受用するものは、來世に於て煩惱なし。」

【三二〇】「孫陀利、其の師たりし尼に白して云へり」「大姉、我式沙摩那となりて、天眼清淨となり、我が前に住せし如く、宿世を知れり。

【三二一】長老尼衆の光明たる汝善妙「の師」、汝によりて、三明に通じ、佛の敎を成ぜり。

【三二二】大姉、我に容せ、我舍衞城に赴かんと欲す、尊き佛の傍に於て、我は獅子一吼せん。」

【三二三】「孫陀利自ら呼びて云へり」、「孫陀利、金色、金膚にして、調柔し何物にも怖ぢ畏れざる正覺者を見よ。」

【三二四】「更に佛に白して云へり」「孫陀利の來るを見たまへ、解脫を得、本質を無くし、貪染を離れ、結縛を去り、義務已に果して、煩惱なき、

【三二五】彼女は婆羅尼城より汝の許に來れり、大雄「尊」、聲聞女孫陀利は汝の足を禮す。」

【三二六】「婆羅門よ、汝は佛、汝は師、我は汝の女なり、汝の口より生れたる實子にして義務を果し、煩惱を盡せり。」

【三二七】「佛」「善尼、汝の來りしことは是なり、汝の來りしことは非ならず、そは調柔を得て、師の足

を頂禮し、貪染を離れ、結縛を解き、義務を終へ、煩惱なきものに斯の如くして、

右孫陀利尼の偈

【三三八】 (一五)年若く、淨衣を纏へる〔身として〕我曾て法を聞きぬ、〔聞いて〕精勤なる我は、正理を了解しぬ。

【三三九】 其より我は、あらゆる欲の上に厭嫌の情を起すこと多く、(一六)己身に怖畏あることを見て、出離をぞ願ひたる。

【三四〇】 我親族の羣と奴僕傭使とを捨て、村邑と實りよくして樂むべく喜ぶべき田野とを〔捨て〕、量多き財産を捨てて我は出家しぬ。

【三四一】 斯の如く信仰によりて、善く說かれたる正法に於て出家して、一物をも得んと望まず、金銀を捨てたる我は、再び〔之を求めて〕來らず、これ我に適せりとせんや。

【三四二】 金と銀とは、覺悟と寂靜のためにあらず、之は沙門に適はしからず、之は尊き財にあらず。

【三四三】 貪と憍と愚癡と、(一七)塵垢の增長と、疑惑と多の懸念とあり、此處に堅固なく住立あるなし。

【三四四】 此處に樂み醉ひ、心汚れたる人人は、互に相爭ひ、廣く諍論をなす。

【三四五】 殺害・捕縛・苦責・破滅・憂悲と、諸欲を縱にする人の災禍を示すこと夥し。

【三四六】 親族は我を敵の如くにす、〔彼等〕何故に我を諸欲に縛せんとするぞ、我は出家して諸欲に怖畏を見ることを知れ。

【三四七】諸漏は黄金によりて斷じ盡さるることなし、欲は無慈悲なる殺害者なり、敵人なり、(一八)荊棘なり、繋縛なり。

【三四八】我が親族は我を敵の如くにす、〔彼等〕何故に我を諸欲に縛せんとはするぞ、我は出家し、剃髪し、僧伽梨衣を纏へることを知れ。

【三四九】〔門邊に〕立ちて〔得たる〕食、遺穗、糞掃衣と、之こそは我に適はしけれ、〔之〕家を捨てたる人の生活の要具なり。

【三五〇】大仙は天界人界共に其の欲を棄てたり、彼等は安隱の處に於て得脱し、彼等は動なき樂を得たり。

【三五一】諸欲の上には(一九)護あるなし、我之を追求することなからん、諸欲は無慈悲なる殺害者なり、苦にして火聚に喩ふべきものなり。

【三五二】之には障あり難あり、虞あり荊あり、此の貪は極めて不平等に、且つ大にして愚癡に向へり。

【三五三】〔貪は〕患難なり、恐怖の相なり、諸欲は蛇の頭に喩ふべきものたり、これを喜ぶものは、闇昧なる愚人と凡夫となり。

【三五四】此の世に於ける、多くの無智なる輩は、諸欲の泥中に陷りて、生又死の終を知らず。

【三五五】諸欲の因により、惡趣に至るべき道、己の病〔苦〕を起すこと多き〔道〕を、人人は歩めり。

【三五六】斯の如くにして諸欲は敵意を生むものなり、苦責・染汚・俗樂なり。(二〇)束縛せらるべく、〔而し

て我等を〕死に縛するものたり。

【三五七】 諸欲は狂亂・浮躁にして、心を動搖せしむるものなり、有情を惱惑せんがために、魔王は直に〔網を〕張れり。

【三五八】 諸欲には限りなき災禍あり、苦多く、毒大にして、甘味少し、〔欲は〕爭闘を起し、〔人の〕光輝ある側面を損す。

【三五九】 我斯の如き諸欲の因を滅して、常に涅槃を喜とし、〔再び〕之に還ることなからん。

【三六〇】 我諸欲の清涼を求むるものとして、闘をなし、此等の結縛を斷じ盡さんがために精勤して住せん。

【三六一】 我は憂なく、塵なく、安隱にして直く聖き八支ある、此の道によらん、之によりて諸大仙は〔輪廻の暴流を〕超えたり。

【三六二】 法に立てる此の須婆、鍛冶の女を見よ、彼の女は(三一)離欲〔の道〕に達して、樹下に禪思す。

【三六三】 今日出家して八日なり、信心あり、正法によりて美なり、蓮華色尼によりて懷けられ、三明あり、死に克てり。

【三六四】 (三二)此の比丘尼は(三三)自由にして負債なく、諸根を修練せり、あらゆる纏結を解き、義務を果して、煩惱なきなり。

【三六五】 此〔の尼〕に天帝釋は來り天子の羣を連れ、神通によりて近き來り、生類の長者は、鍛冶の女な

る須婆を禮拜す。

鍛冶の女須婆尼の偈

〔一〕此の品二十頌品と云へど十九・二十・二十一・二十六・二十八等一一異れる頌數より成れり。〔二〕菴婆波利はもと毘舍離城の遊女にして城外なる其の林園中に精舍を構へて佛に奉施せしことあり、後其子にして出家せる離垢憍陳如長老の爲に度せられ、比丘尼となれり。〔三〕黄金金剛石等を以て莊飾したる黑髮の房、又は柔かなる黄金の針を以て捌きて飾りたる髮とも解せり。〔四〕原典の異るに隨ひ原語一致せず、幾樣にも譯し得べし、今は最も穩當なりと思はるるものによる。〔五〕以下二十偈はローヒニー尼に關する偈。〔六〕食瞋癡の三不善根を云ふ。〔七〕長老偈二偈註參照。〔八〕生れのみの婆羅門と云ふ意にて、聊か輕侮の語なり。〔九〕優波迦は世尊が伽耶成道の後婆羅捺斯城に赴かせらるる途中、會談し給ひし邪命外道なり、彼其の後獵夫の村に入り、一獵夫の娘チャーパーを得て妻として獵夫の生活をなせしが、世尊の舍衞城に居給ひし頃、來りて比丘となり、チャーパーも同じく比丘尼となれり、之は往事を追憶して唱へし偈なり。〔一〇〕迦攞は優波迦の姓なり。〔一一〕孫陀利在俗の時、其父善生婆羅門は一兒を喪ひて憂に堪へず、ヴーセッチー尼の處に來りて二偈を唱へ、尼は之に對して二偈を唱へたり、父は之を聞いて佛の處に走り、佛の教を聞いて出家すれば、其の女孫陀利も亦出家し、後佛の處に赴きたり。〔一二〕之は此の尼の前生物語に關するものの如し。〔一三〕原文には Khād の字を用ひあれど、單に喪ふの意なるが如し。〔一四〕長老偈一五二偈註を見よ。〔一五〕須婆尼出家の後親族等還俗を勸めたれば、尼は此等の偈を以て答ふ。〔一六〕Sakkāya 普通單に身と譯すれど我身己身と譯する方當れるが如し、人格體又は個性などと稱するものを指す。〔一七〕食等の汚塵を增長すること。〔一八〕Sallabandhanā 幾樣にも譯し得らるるが如し。〔一九〕Tāṇaiṃ 涅槃を云ふ。〔二〇〕Bandhaniyā 縛せらるべきの意、リス・デギッ夫人は譯して To bind us to the world とせり。〔二一〕最上果。〔二二〕須婆尼自身を指す。〔二三〕Bhujissā 解放せられたる婢女の意。

三十偈品第十四

【三六六】樂しき耆婆迦の庵婆林に赴かんとする比丘尼須婆を好色漢ありて道を遮れり、時に須婆は彼に

語げて曰へり、

【三六七】「〔汝〕我を遮りて立つ、我汝に對して何の罪かある、汝、男子の女出家人に觸るるは宜しからず。

【三六八】我が師の尊き教に於て、善逝は戒學を說き給ひたり、汝は何故に行道清淨にして、著なき我を遮りて立つや。

【三六九】濁りたる心あり塵垢あるものにして、濁なく著なく塵垢を離れ、諸處に心解脫せる我を、汝は何故に遮りて立つや。」

【三七〇】「年若くして姿勝れたり、汝は出家して何をかなすや、袈裟衣を脫ぎ捨てよ、來れ、花咲ける林中に娛まん。

【三七一】(一)花塵によりて自ら〔香氣を〕起せる樹木は、諸方に蜜味を散ず、初春は樂しき時季なり、來れ、花咲ける林中に娛まん。

【三七二】冠に花を著けたる樹木は、又風に搖れて騷音をなす、汝若し獨り林閒に入らば、汝に何の樂かある。

【三七三】猛獸の羣出沒し、狂象〔のために〕塵埃狼藉たり、人なくして怖畏多き大林中に、汝は伴なくして入らんと願へりや。

【三七四】黃金を以て造れる如く、(二)質多羅他園中の天女の如く逍遙す、迦尸國〔に產し〕細軟にして麗美

なる衣服によりて美しく喩へ方なし。

【三七五】 汝若し樹林の中に住せんと欲せば、我汝の家僕とならん、(三)緊那利〔に似て〕柔かなる眼ある汝、我には汝よりも更に愛しき生物他に之なければなり。

【三七六】 若し我が言に從はば汝は安樂〔ならん〕、來れ、在家人の生活をなせ、(四)風なき樓閣の中に住せよ、婦女子等は汝のために走使せん。

【三七七】 迦尸國產の細軟なる〔衣服〕を著け、〔身を〕裝飾せよ、華鬘(五)彩料と黃金摩尼眞珠と數多の異れる莊嚴の具とを汝のために作らん。

【三七八】 善く塵垢を洗ひたる(六)被具ありて美しく、(七)上覆と敷具とを布きて新しく、旃檀材を以て飾り、高價にして樹精の香ある臥床に上り〔臥せ〕よ。

【三七九】 譬へば蓮華の水より出でたるを(八)夜叉羅刹の守れるが如し、等しく汝梵行を修するもの、未だ己の肢體を用ひざるに、汝は老に至らん。」

【三八〇】 「死屍に滿ち、墓田を增すべき、敗壞の質なる身を、汝は喪心して之を見る、此處に汝は何の精をか認めたる。」

【三八一】 「眼は牝鹿の〔其の〕如く、山間なる緊那利の〔其の〕如し、我汝の眼を見てより、欲樂愈愈增長す。

【三八二】 蓮華の頂に似、塵垢なく、黃金に似たる顏の上に、我汝の眼を見てより、欲種愈愈增長す。

【三八三】 汝遠く去らんとも、我は長き睫毛と、淸き眼とを思ひ出ん、是れ汝緊那利の柔かなる眼あるも

の、我には汝の眼より更に愛しきものなければなり。」

【三八四】「汝佛子を〔捕へんと〕求む、其は道なきに行かんと望み、月輪を戲具となさんと願ひ、須彌山を越えんと望むなり。

【三八五】人天兩世界に於て、今は我が貪欲を起すべき處あるなし、我は〔貪欲の〕如何なるものなるかをも知らず、根本を併せ〔聖〕道によりて斷たれたるなり。

【三八六】火坑に投じたる〔燃燒物〕の如く、面前に置きたる毒器の如し、其が如何なるものなるかをも見ず、〔聖〕道によりて根本を併せ斷たれたるなり。

【三八七】〔五蘊を〕觀察せず(九)〔而も〕或は師を敎ふるものあらば、汝斯の如き〔婦女〕を誘惑せよ、(10)汝は此の識ある〔須婆の〕ために惱まん。

【三八八】罵詈せらるるにも禮敬せらるるにも、苦にも樂にも、我が正念は〔常に〕起立せり、有爲〔の法〕は不淨なりと知りて、我が心は一切處に汚るることなし。

【三八九】此の我は善逝の女弟子にして、八支道の乘物に乘り行くものなり、〔煩惱の〕箭を拔き漏を盡し、我は空屋に入りて樂む。

【三九〇】我は木製の傀儡の出來好くして、美しく新なるを見たり、絲と串とを以て縛せられ、種種に舞ひ踊れり。

【三九一】其の絲と串とを拔き、解き散らし、分分にして、跡なきに至りたる時、此處に其の何物にか心

を住めんや。

【三九二】身は此〔の傀儡〕に喩ふべきものなりと、我に〔智慧生せり〕、此等の法なくしては〔身は〕存せず、法なくしては〔身は〕存することなし、此處に何物にか心を住めんや。

【三九三】猶ほ（二）雄黃を以て塗り、彩りて壁となせるを見るが如し、此處に汝の顚倒の見あり、人閒の智慧は價値あるなし。

【三九四】目前に現れたる幻の如く、夢中の金樹の如く、衆人中にて〔觀とせる〕作りたる像の如き、愚者汝は虛なるものを〔追うて〕走る。

【三九五】〔眼は〕樹洞の中に置ける（三）樹脂の團塊の如く、中部に泡〔狀のもの〕ありて淚を帶び、眼渣も亦此處に生ず、種種多樣の眼ありとせらる。」

【三九六】眉目美しくして心に執著なき〔尼〕は、〔眼を〕刳りて愛著を起さず、「今（三）汝の眼を持去れ」〔と云ひて〕、即時に其を彼の人に與へぬ。

【三九七】彼の男の尼に對する貪愛の情も即時に滅び失せ、彼は尼に對ひて識謝したり、「梵行者に祥福あれ、〔我〕再び斯の如きことをなさじ」とて。

【三九八】「斯の如き人を害ひ、恰も點したる火を抱くが如くし、蛇を攫むが如くして、而も我に福あらんや、我を恕せよ。」

【三九九】彼の尼は其〔の人〕より遁れ、最勝覺者の傍に來れり、勝れたる善業の相を見て、〔尼の〕眼は前

の如くなりき。

〔一〕此等の樹木は軟風のために起れる花粉の風により己の花塵を自ら起せるが如くにして諸方に香氣を散す。〔二〕Cittaratha 天上界の林園、種種車又は飾車と譯すべし。〔三〕Kinnari 緊那羅女。〔四〕直譯、樓閣(中)に風なくして住するもの。〔五〕Vaṇṇakani 香料塗油と釋せり。〔六〕胸を覆ふもの。〔七〕長き毛の附きたる襲具。〔八〕直譯、非人。夜叉羅刹の受用し、憑依守護せる蓮華は人間は之に近づくことを得ず、其のまま朽ち果つべし。〔九〕師は教ふるにあらずして、却つて教へらるるの意。〔一〇〕汝は智識ある此の須婆を誘惑するがために現在及び未來に苦惱を受けん。〔一一〕Haritālaṃ, yellou orpiment, Ochre の譯語を與ふ。〔一二〕Vaṭṭani 註して Lakhāyaguḷikā とせり、Lakhā は英語の lac にて樹脂又は蟲類より取りたる一種の染料なり、Rhys Davids 夫人は譯して a little ball とせり、小球の意にて眼球を指せるなり。〔一三〕己の有なれども彼に與へたる故、汝の眼と云へるなり。

四十四頌品第十五

【四〇〇】大地の醍醐なる波吒利子城、(一)拘蘇摩の名ある都市に於て、釋迦族の家に生れたる、二人の有徳の尼〔ありき〕。

【四〇一】其處なる一人を(二)仙婢、第二者を(三)菩提と〔云ひて〕、戒徳を具し、(四)禪慮を樂とし、多聞にして、煩惱を撤へり。

【四〇二】彼等は乞食のために〔處處を〕回り、飯食訖りて鉢を洗ひ、人なき〔處〕に安坐して、二人は此等の事を語れり。

【四〇三】「大姉仙婢、汝は眉目美しく、年齢未だ朽ちず、何の失を認めてか、汝は出離に心を傾けたるぞ。」

【四〇四】斯の如く問はるるや、說法に巧なる仙婢尼は、〔其の〕人なき處に於て此の言を語げて云へり、

「聞けよ、菩提我が出家せしさまを。

【四〇五】(五)優禪尼と云ふ秀でたる都に於て、我が父は德行具はれる長者なりき、我は其の一女にして愛すべく、喜ぶべく、而して仁慈なりき。

【四〇六】其より(六)沙祇多の名族より〔遣はされたる〕我が媒介者は來れり、〔名族とは〕財多き長者にして、父は其の(七)婦として我を與へぬ。

【四〇七】夕及び旦には、舅と姑とに近づき、頭を以て足下に禮拜し、敎へられたるままに敬禮せり。

【四〇八】我が夫の姉妹や兄弟や近親や、其を(八)一たび見ても、(九)畏れ憚りて座を讓りぬ。

【四〇九】食物、飲料、又は噉食の其處に貯へられしものは、分ち、持來し、而して〔適するの〕人に適するものを與へぬ。

【四一〇】起くるには時に遲るることなくして家に赴き、手と足とを洗ひ、掌を合せて夫の處に行けり。

【四一一】櫛と顏料と塗藥と鏡とを携へ、婢女の如くに自ら夫に裝飾せしめぬ。

【四一二】我は手から飯を炊き、手から器物を洗ひぬ、母の其の一子に對するが如く、同じく我は〔我が〕夫に事へぬ。

【四一三】斯く此の貞淑にして最善を盡し、慢心を除き、〔疾く〕起き、精勤にして、婦德具はれる我を〔我が〕夫は嫌へり。

【四一四】かれ〔夫〕は母と父とに語げて云へり、「許を與へよ、我は去らん、我仙婢と共に棲まじ、我同

じ家に共に住はじ。」

【四一五】「兒よ、然く云ふことなかれ、仙婢は賢くして、智慧あり、〔疾く〕起きて、精勤なり、兒よ、汝何事をか喜ばざる。」

【四一六】「彼の女は些も我を害ふにあらず、而も我は仙婢と共に棲はじ、嫌はしきものは我に要なし、許を與へよ、我は去らん。」

【四一七】彼の語を聞きて、姑と舅とは我に問へり、「汝何としてか彼の怒に觸れたる、あからさまに、ありしままを語れ」と。

【四一八】「我は何事にも〔彼の〕怒に觸れしことなく、〔彼を〕害ひしことなく、〔彼の失を〕算へしことなし、夫の我に對して怒るが如き惡語を、我奈何で之をなすことを得べき。」

【四一九】憂へ惑へる彼等〔二人〕は(10)其の兒の意に逆はず、苦悶の中に、我を〔我が〕父の家に送り還して〔云へり〕、「美しき吉祥神よ、我等は敗られぬ」と。

【四二〇】其より父は我を次なる富める家に與へぬ、〔第一の〕長者の我を得て〔拂ひたる〕身代の半を以て。

【四二一】我彼の家に住むこと一箇月なりしが、其より彼も亦我を追へり、假令我は婢女の如く勤みて仕へ、貞淑にして婦徳具はりたりと雖も。

【四二二】乞食のために徘徊せる〔一人の男の〕自ら制し〔他を〕制する〔に堪ふる〕ものに我が父は云へり

「汝我が女婿とならん、襤褸衣と乞鉢とを捨てよ」と。

【四一三】彼亦住むこと半箇月なりしが、其より父に語げて云へり、「我に襤褸衣と乞鉢と帽とを還せ、再び乞食のために流離せん」と。

【四一四】其の時父と母と、及び我があらゆる(一)親族は、一團となり、彼に語げて云へり、「此處に汝何事をか成就せざらん、汝のために［我等の］爲すべきことを疾く云へ。」

【四一五】斯く問はれたる彼は答へて云へり、「我が心［自由なること］を得ば我は足れり、我は仙婢と共に棲まじ、我同じ家に共に住はじ。」

【四一六】追はれて去れり彼は、我亦獨り思へり、「許を求めて出で行かん、死せんがために、或は出家せん」と。

【四一七】時に大姉(二)勝施は、乞食の爲めに遊行しつつ、父の家に來れり、［彼の女は］持律博聞にして戒德具はれり。

【四一八】彼［の尼］を見るや我は起ち、我は尼のために座席を設けしめ、坐したる［尼］の足を禮拜し、食物を奉施したり。

【四一九】食物と飲料と噉食と、其處に貯へありしものを、飽くまで薦めて云へり、「大姉、我は出家を願ふ」と。

【四二〇】時に父は我に語げて云へり、「我が女、(三)此處にありて其の法を行へ、食と飲とを以て沙門と

婆羅門とを供養せよ」と。

【四三一】時に我悲泣合掌して父に語れり、「我邪業を犯せり、我之を滅さん」と。

【四三二】其より父は我に語りて云へり、「菩提と最勝法とを成ぜよ、兩足中の長者なる〔佛〕の證得し給ひし涅槃を得よ」と。

【四三三】母と父とを敬禮し、又總て親族の羣を〔敬禮〕し、出家七日にして、三明に達したり。

【四三四】我は我が七生を知る、某の生に某の果報あり、結果ありと、汝がために之を說かん、心を一にして傾聽せよ。

【四三五】〔往昔〕(一四)エーラカカッチャの都に於て、我は財豐かなる金工なりき、若氣のために心狂ひて、我は他人の婦を犯せり。

【四三六】我は其より死して地獄の中に煮られ、苦を受くること久しく、其より出でて牝猿の胎にやどれり。

【四三七】生れて七日にして、猿羣の長なる大猿は、我が睾丸を拔き取りたり、これ此の我が〔曾て〕他人の婦を姦したるの業果なり。

【四三八】我は其より死し、往にて身を(一五)仙陀婆の林中に、隻眼跛足の牝山羊の胎に身を托せり。

【四三九】我精子を除かれ、幼兒を負ひ歩くこと十有二年、蟲類に惱まされて病に罹れり、これも我他人の婦を姦したるが故なり。

【四四〇】我は其より死して、牛商の有てる牝牛に生れぬ。赤きこと(一六)樹脂の如き犢にして、去勢せられて十二箇月の間、
【四四一】我は再び犂と車とを挽けり、盲にして惱み〔且つ〕病めり、これ我他人の婦を犯したるが故なり。
【四四二】其より我は死し、市の街路に沿へる婢女の家に生れ、女性にも將男性にもあらざりき、これ我他人の妻を犯したるを以てなり。
【四四三】年三十歳にして我は死し、馭者の家に女兒と〔なりて〕生れぬ、貧にして財尠く、富みたる人に夥しき負債ある〔家に〕。
【四四四】其の後〔負債の〕増し加はり殖ゆるや、隊商の(一七)主は我が泣き悲むを主の家より引き行けり。
【四四五】其より十六歳の時、彼の〔商主の〕兒の名を(一八)山奴と呼べるもの、成年に達したる我を見て、戀慕したり。
【四四六】彼には他に妻ありき、行善く德具はり、譽あり、夫を魅するものたり、我此〔の夫〕に憎惡の情を起さしめぬ。
【四四七】我が婢女の如く事ふるを捨てて、夫の去るは、これ〔我が〕此の業果なり、〔而して〕我は今此〔の業果〕を盡したり。」

〔一〕Kusuma 拘(瞿)蘇摩、此に華と譯す、波吒利子城の古名なりしが如し。〔二〕Isidāsī. 〔三〕Bobhi. 〔四〕世間出世間の禪定を樂とせるの意と譯す。〔五〕Ujjeni 〔六〕Sāketā. 〔七〕子の妻。〔八〕ちらりと見たるのみにて。〔九〕Nibbigga 註には Saṅgantvā

會ひて、出迎へてと註すれど如何にや、mitvā なれば、畏る、震ふ、驚き悸るなどの意と見るべし。〔一〇〕見た誤り。〔一一〕我があらゆる親族群の闘。〔一二〕Jinadatta 時那達多。〔一三〕出家せず家にありての意。〔一四〕Erakakaccha.〔一五〕Sindhava 辛頭地方。〔一六〕三九五偈の註を見よ。〔一七〕己の父なる馭者を云ふ。〔一八〕Giridāsa.

大集品第十六

【四四八】 (一)マンターヴチーの都に於て(二)コンチャ王の首妃に女兒あり、(三)スメーダー〔と呼ぶ、聖の〕敎によりて美しかりき。

【四四九】 彼の女は德行を具へ、演說巧に、博聞にして、佛の敎に於て調攝したり、共に父母に近づきて云へり(四)「母よ父よ〔我が言を〕聞け。

【四五〇】 我は涅槃を樂とす、(五)生成せるものは假令天界にありとも常住にあらず、況や諸欲は空虛少味にして、苦惱〔を與ふること〕多きに於てをや。

【四五一】 諸欲は辛烈にして蛇に譬へられ、愚夫は之に迷惑す、彼等は長時地獄に投せられて、苦み害を受く。

【四五二】 常に身語と意とによりて攝することなく、邪業を犯す愚夫は、惡趣にあり、己の邪業を識りて悲む。

【四五三】 (六)彼等愚夫は劣智慧、無思慮にして、苦集〔の理〕に闇く、說き示さるるも、無智にして聖諦を知ることなし。」

【四五四】（七）「母よ、尊き佛の說き給ひし諦理を知らずして、生有を悅び、天人の閒に生るることを希ふものぞ多き。」

【四五五】「天人の閒にも、無常なる生有の上に常住の生あることなし、愚夫は再三出生すべきことを恐れず。

【四五六】（八）四惡道と（九）二趣とは、如何にして得らるるぞ、惡趣に入れるものは（一〇）泥犁にありて、出家を得ることなし。

【四五七】〔母も父も〕共に我が十力尊の言敎に於て出家することを許し給へ、〔餘事に〕念なくして生死捨離の爲に努力せん。

【四五八】生成して歡喜せられ、〔而も〕堅質なき泡沫の身に、奈何で〔喜ぶことを〕なさん、生有の欲愛を滅さんがために、許し給へ、我出家せん。

【四五九】諸佛の出世は、之を避けなば機を失はん、〔今や好〕機得らる、戒德、梵行、我は生を終るまで、之を瀆すことなけん。」

【四六〇】斯の如くスメーダーは云へり、「母よ、父よ、我は在家のものとしては、食物を受けじ、我は死に從はんのみ」と。

【四六一】母は苦み惑ひて泣き、父は亦常に彼の女を愛でてありしが、〔今〕樓閣上に於て倒れたる〔女〕を諭さんと努めたり。

【四六二】「娘よ、起て、悲みて何の效かある、汝は嫁がせられたり、（二）ヴーラナヴチー「の都なる」王なる（三）アニカラットーは容姿端麗なり、汝は彼「の王」に嫁がせられたり。

【四六三】汝はアニカラッタ王の配者、首妃とならん、娘よ、戒と梵行と出家とはなすこと難し。

【四六四】王には威勢あり、財貨、主權あり、汝榮耀安樂に、年若き身にして諸欲を享けよ、娘よ、汝の「婿」決めせよ。」

【四六五】時にスメーダーは彼等に語げて云へり「斯の如きことあるべからず、生は堅質ならず、出家あるべく、然らずんば死「あるべし」、我が決擇は之にこそあらめ。

【四六六】不淨にして、惡臭を漏し、怖るべき腐壞の身、一たび滲出して不淨に滿ちたる死屍、革嚢は如何なるものぞと、

【四六七】身は厭ふべく、肉と血とを以て塗られ、蟲類の棲處たり、鳥類の食物たることを知れる我「が身」は、何が故にか與へられたる。

【四六八】意識去りたる身は、久しからずして墓所に運ばれ、厭ひ嫌へる親族等の爲に捨てられて、宛然木片の如くなり。

【四六九】他の食物となるべき此「の屍」を墓所に捨てて、厭ひ嫌へる「輩」は洗浴をなす、生みたる父母「然り」、況や常の人に於てをや。

【四七〇】堅質なく、骨と筋とを集めて成せる肉身、涎涙・尿屎に滿てる腐壞の身に愛著せり。

【四七一】若し此「の身」を切開して內を外に轉ぜば、其の臭氣に堪へずして、生みたる母すら之を厭はん。

【四七二】蘊處界は造作「の法」、生に基し、苦にして如實に厭ふべきものなりと云ふ、如何なれば我「夫の」決擇を願はん。

【四七三】日日新に「磨ぎたる」矛三百を以て、身を刺すこと百年ならんも、(三)「此の」割截ぞ勝れる、「之によりて」苦惱亦盡されん。

【四七四】斯の如くして師の言を知れるもの、若し「此の」割截を是なりとせば、「之によりて」亦其の苦惱盡されん、「師の言とは」「再再惱さるる此等の人人の輪廻は久し」となり。

【四七五】天人、人間と、畜生、阿修羅界、餓鬼と地獄とに於て、割截を加へらるることは限りあるなし。

【四七六】(四)地獄に「入れるもの」、惡趣に墮つるもの、苦を受くるものには「割截の加へらるること」多し、天上界にも依處なし、涅槃の樂に過ぐる「樂」はあらず。

【四七七】(五)十力尊の言教に心を委ね、「他に」力を用ふること少く、生死を捨てんがために精進するもの、彼等は涅槃に達したるなり。

【四七八】父よ、今日こそは我出家をなさめ、實なき榮耀に何「の要」かある、我諸欲を脫れ、棄て、(六)多羅樹の餘株の如くなせり。」

【四七九】彼の女は父に向ひて斯くの如く云へり、彼女を乞ひしアニカラッタ王は、時近づくや、曙光「の如き光明」に包まれ、求婚のために赴けり。

【四八〇】時にスメーダーは、黑く濃く〔且〕柔かなる髮を刀を以て斷ち、樓閣を閉して第一禪に入りたり。
【四八一】彼の女の此處に入定せる時、アニカラッタ王は亦都に來れり、樓閣中にありてスメーダーは、無常想を修習したり。
【四八二】彼の女は思念せしが、アニカラッタは急ぎて上り來り、如意寶珠・黃金を以て身を飾れる〔彼王〕は、掌を合せてスメーダーに請へり。
【四八三】王には威勢・財貨・主權あり、汝榮耀に安樂に、年若き身にして諸欲を享けよ、諸欲の樂は世に之を享くること難し。
【四八四】王國は汝に托せられたり、榮耀を樂み、施與をなせ、愁然たること莫れ、汝の父母は苦悶せり。」
【四八五】其の時、諸欲を願はず、愚癡を脫れたる彼スメーダーは其〔の王〕に語りて云へり「諸欲を樂むこと莫れ、諸欲に患難を見よ。
【四八六】(一七)マンダーターは四洲の王にして、諸欲を享くるものの最上者なりき、〔而も〕飽かずして死し、其上の欲は滿されざりき。
【四八七】雨神七寶を普く十方に降らすとも、諸欲に飽くことなけん、人は〔諸欲に〕飽かずしてぞ死する。
【四八八】諸欲は劍と(一八)槍とに喩へられ、諸欲は蛇の頭に喩へられ、燒く〔が故に〕炬火に喩へられ、曝されたる骨に似たり〔とせらる〕。
【四八九】諸欲は無常にして堅固ならず、苦多くして毒大なり、熾熱したる鐵丸の如く、害惡を根とし苦

を果とす。

【四九〇】 諸欲は樹果に喩へられ、苦なる「が故に」肉臠に喩へらる、諸欲は欺瞞の質なるによりて、夢に喩へられ、借りたる「物品」に喩へらる。

【四九一】 諸欲は(一九)槍に喩へらる、疾病・瘍腫・害惡・災禍なり、火坑の如く、害惡を根とす、怖畏なり、殺害なり。

【四九二】 斯の如く諸欲には數多の苦痛伴ひ、障礙ありと唱へらる、王よ、去れ、我「此の」生有に於て己の信頼すべき所「を得」ず。

【四九三】 己の頭燒かれ、老死追ひ來るに、他は我がために何をなすや、此「の老死」を滅さんがため、努力すべきなり。」

【四九四】 此「の女」は、戸邊に至り、地上に坐して、泣き悲める父母と、アニカラッタ王とを見て、之に語げて云へり。

【四九五】 「愚なる輩の輪廻は長く、果なき「世」に父死し、同胞害せられ、又は己害せられて、泣き悲むことも再再なり。

【四九六】 涙と乳と血と輪廻との果なきことを思へ、生類の輪廻を思ひ、積み集めたる骸骨を「思へ」。

【四九七】 (二〇)涙・乳・血は、四大海に譬へらるるを思へ、「一劫」の間骸骨を積み集むれば、(二一)毘布羅山に等しきことを思へ。

【四九八】果なき〔世〕に輪廻するものの父母を、閻浮洲の地に較ぶるに、(三一)〔之を〕棗核大の丸〔となす〕も、(三二)之に比するに〕足らず。

【四九九】草や材や枝や葉や、果なく〔輪廻する〕ものの父や父の父やに比ぶる時は、(三四)分ちて四指量とすとも、(三三)〔其の數に〕比するに足らずと思へ。

【五〇〇】盲龜あり、又東の海に於て西より〔漂ひ來る〕軛に穴ありと思ひ、其〔の盲龜〕の頭を〔之に〕投入せんことを〔思へ〕、人身の得〔難き〕は之に喩へらる。

【五〇一】泡沫の團塊に譬へられ、堅質なく、穢多き色身を思へ、諸蘊の無常なるを見、地獄には割截多きことを思へ。

【五〇二】再再此の生、又は彼の生にありて、墓田を擴ぐる身を思ひ、また鱷魚の怖しきを思ひ、四種の諦理を思へ。

【五〇三】(三六)甘露の存するに、汝は何〔の要ありて〕か五辛を嘗むるや、是れ總て欲樂は、五辛よりも更に辛辣なればなり。

【五〇四】甘露の存するに、汝、熱惱の諸欲に何〔の要かある〕、是れ總て、欲樂は燃え、煮え、怒り、沸きてあればなり。

【五〇五】(三七)非敵の存するに、汝多の敵を有てる諸欲に何〔の要かある〕、諸欲には衆多の敵ありて、王・火・盜・水及び怨憎の徒に等し。

【五〇六】 (二八)解脱の存するに、汝戕殺繫縛ある諸欲に何「の要かある」、是れ諸欲には戕殺あり繫縛あり、諸欲を貪るものは苦惱を受くればなり。

【五〇七】 火を點じたる草の炬は、之を把れるものを燒きて、放てるものを燒かず、諸欲は炬火に譬へらる、之を放たざるものを燒く。

【五〇八】 少少の欲樂のために、廣大なる安樂を捨つること莫れ、(二九)衆毛魚の如く曲鉤を嚥み、後に至りて苦しむこと莫れ。

【五〇九】 諸欲に欲を制すること、鎖にて繫がれたる狗の如くせよ、是れ諸欲は汝を「害すること」、餒ゑたる(三〇)旃陀羅の狗を「害する」が如くすべければなり。

【五一〇】 汝、諸欲に心を傾くるものは、限なき苦惱と、衆の心憂とを受けん、「されば」堅固ならざる諸欲を捨てよ。

【五一一】 (三一)不老の存するに、疾く老ゆる諸欲汝に何「の要かある」、あらゆる生はあらゆる處にありて死と病とに捕へらる。

【五一二】 之は不老なり、之は不死なり、之は憂なく、老死なく、敵なく、混雜なく、失誤なく、怖畏なく、熱惱なき道なり。

【五一三】 此の不滅は衆の人の得たる所、正しく心を定むるものは、今日亦之を得べきなり、「されど」努力せざるものは「得ること」能はじ。」

【五一四】諸行の運行に樂を得ざる所のスメーダー尼は上の如く云へり、アニカラッタ王を教へたる彼
スメーダー尼は〔其の〕髪を地に投せり。

【五一五】彼アニカラッタ〔王〕は座を起ち、掌を合せ、尼の父に乞ひて云へり、「スメーダーの出家を
許せ、彼の女解脱と諦理とを見るもの〔とならん〕。」

【五一六】父母に許されて出家しぬ、憂と畏に怖ぢたる〔スメーダー〕は、最上果を學びつつ、六神通を
證せり。

【五一七】王女〔スメーダー〕の得たる涅槃は、希有・未曾有なりき、最後時に於ける宿生を、如實に說き
明せり。

【五一八】(三一)「拘那含牟尼世尊の出世し給ふや、新しく建立したる僧伽藍にありて、(三二)三人の朋友たる
人人、精舍の奉施を行へり。

【五一九】十たび七たび、十百たび又百百たび、天人中に出生したり、況や人中に於てをや。

【五二〇】諸天中にありて大神通を具有したり、如何に況や人朋中に於てをや、我は〔具〕七寶者、〔轉輪
聖王〕の首妃女寶なりき。

【五二一】(三三)師の教に於て堪忍せる、之ぞ因、之ぞ源、之ぞ〔其の〕根なる、之第一の連關、これ法を樂
むものの涅槃なり。」

【五二二】(三四)卓智者の言教を信ずるものは、斯の如く云ひ、出生を厭ひ、厭ひて而して欲より脫る。

〔一〕Mantāvatī. 〔二〕Koñca. 〔三〕Sumedhā. 〔四〕原文には ubhaya 雙者と出せり。〔五〕Bhavagatam 生有を受けたるもの、又は生を受くることの意、四五四・四五五・四六五・四九二等右偈の生、生有等皆同一原語なり。〔六〕苦果生起の上に障礙せられて。〔七〕Ammā 己等の女なれども尊びて母と呼ぶなり、國語のアマは之より來れり。〔八〕Vinipāta 墮と譯すべし、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四道を云ふ。〔九〕Gati 趣・行の意、天上・人間の道を云ふ。〔一〇〕Niraya 四惡趣を指す。〔一一〕Vāraṇavatī. 〔一二〕Anikaratto. 〔一三〕三百の矛を以て刺さるること。〔一四〕之は(一)地獄に於て(二)他の惡趣に墮せるもの(三)畜生道などに生れて苦を受くるものの三者を云ふ。〔一五〕佛世尊には十種の尊き力あり、故に佛を十力と云ふ。〔一六〕多羅樹(Tāla)は其の幹を切りて株のみを餘す時は再び生ひ出ることなし。〔一七〕Mandhātā 語を pīta+armṇa+āvnta と分解せり。〔一八〕〔一九〕或は槍と投槍とに、或は槍の刃に喩へらる。〔二〇〕一人のもの長時輪廻轉生して種種のものに生れ變る、其の間に流したる涙、飲みたる乳、爭闘などの際に流したる血、又は其の殘骸を積みたるものの多かるべきを云ふ。〔二一〕王舍城に近き處にある山。〔二二〕閻浮洲の地。〔二三〕父母の數。〔二四〕草材枝葉を。〔二五〕父や父の父やの數。〔二六〕涅槃の異名。〔二七〕涅槃の異名。〔二八〕涅槃の異名。〔二九〕Puthuloma 面部に多くの毛を有する一種の魚なりと釋す。〔三〇〕Caṇḍāla 印度の賤民の一種。〔三一〕涅槃の異名。〔三二〕Koṇāgamana. 〔三三〕三人の友とは自身とダナンヂヤーニー(Dhanañjānī)とケーマー(Khemā)なりと云ふ。〔三四〕拘那含牟尼佛を指す。〔三五〕佛。

國譯長老尼偈　終

（一）彌蘭陀王問經解題

譯者　山上曹源

【序言】此の經は、一國の大權を統率する王者と、三界の大導師を以て任ずる一僧との、佛教教理及び戒律等に關する質問應答を集成したものである。而して問者・彌蘭陀王は、希臘種族の君主であつて、現今のアフガン地方から、印度の西北部にかけて併呑し、更に恆河流域の平原までも侵略して、奢掲羅城に都した人であり、答者・那伽犀那は、中天竺に生れた人で、學は內外を兼ね、識は大小に通じた、心地明了の大沙門である。されば此の經は、釋尊の直說を結集したものでもなく、亦た後世佛教思想發展の成果を編纂して、冠するに「佛說」の二字を以てせるものでもない。隨つて他の佛教經典の如く、開卷第一（二）「如是我聞」の句なく、但（三）「如是傳聞」の語を以て是れに代へ、直に彌蘭陀王と那伽犀那尊者との前生譚を叙述してある。是の故に此の書に「經」と云ふ名を命けては、穩當を缺いて居るかも知れないが、此の書の一小部分に當れる漢譯に、「那先比丘經」と云ふ名を命け、嚴として漢譯大藏經中に

【一】眞諦譯の倶舍論には、畢憐陁、玄奘譯の倶舍論には、晏憐陁、雜寶藏經には、難陀王とあるが、何れも此の王の印度名 Milinda 又は希臘名 Menandros, Menander の音譯であらう。

【二】Evam mayā srutam.

【三】Tamyathā nusūyate.

存するのであるから、必らずしも譯者一個の私見を以て、勝手に「經」と云ふ名を與へたのではないことを斷つて置く。

【兩者の史傳】 (四)那伽犀那とは、譯して龍軍と云ひ、原音を略稱して「那先」とも云ふ。尊者は佛滅後第四世紀より第五世紀に亙り、卽ち西曆紀元前第一二世紀中、中天竺のカヂャンガラと云ふ地方の一婆羅門の家に生れた人である。漢譯によれば、尊者御生誕の日に、同家に大きな象が生れたので、(五)象と梵名を同うする龍の字を冠し、龍軍卽ち那伽犀那と命名したとある。然し、巴利語の原典には、彼が命名の由緒因緣は何とも記してない。又漢譯には、彼は年十五六にして、一日舅父の(六)樓漢〔那〕と云ふ阿羅漢の所に詣り、

「我、佛道を喜び、沙門と作り、舅父の弟子たらんと欲す、願くは我を持して沙門たらしめよ。」

と哀願懇望したので、

「樓漢〔那〕之を哀れみ、卽ち聽して沙門となす。」

と記してある。が、原典には、那伽犀那と樓漢那との親戚關係に就て一言も記さず、

「彼は七歲にして、一人の家庭教師に就き、婆羅門の子弟として學習すべき吠陀の聖典を初め、詩學・文典・傳說等の諸學を修了した。而して一日、幽靜なる場所に往き、今まで學習した事柄に就

【四】 曹洞宗などで讀む十六羅漢名中、ナギャサイナ尊者と稱するのは、卽ち此のナーガセーナの訛である。
【五】 象も龍も梵語は共に那伽(Nāga)である。
【六】 樓漢那 (Rohaṇa)。

て、沈思冥想した結果、吠陀の經典は、全く空虛であり、稍のやうなものであると喝破し、心中轉た煩悶の情に堪へず、眞理達觀の道が、まだ他にあるだらうと考へて居た。

時に樓漢那尊者が、那伽犀那の煩悶せることを感知し、ヴッタニヤから雲隱れして、行乞のために那伽犀那の村に現れ給うた。然るに那伽犀那は、尊者の遙か向の方から安詳として來り給ふを望見して居たが、遂に彼の家に行乞に立たれるのを待ち構へ、二三の問答を交換して、父母に對つて出家たらんとの希望を述べ、其の許諾を得て、樓漢那尊者の弟子となつた。」

と叙してある。されば原典では彼が出家の年齡は全く不明であるが、漢譯の十五六歲にして出家したとの說は事實に近いやうに思はれる。蓋し吠陀の聖典や、文法・詩學・傳說學等、其他一人前の婆羅門たる學術を修得するには、少なくとも七八年を要するからである。卽ち七歲から習ひ始めたとして、十五六歲にならねば修了することは能きないからである。それから又漢譯には、

「那先年二十に至つて大沙門經戒を受く。」

とあるが、原典には、二十四歲の時具足戒を受けて、愈一人前の僧たる資格を許されたとある。要するに彼は十五六歲にして出家し、二十歲乃至二十四歲にして、敎團中に於ける一人前の團員となつたのであらう。茲に吾人の一言注意して置かねばならぬのは、漢譯に於ける彼が前生譚と、原典に於けるそれとは、殆んど全く符合する點がないことである。兎に角彼は、比較的に短かき年月の閒に、佛

敎の聖典たる經・律・論の三藏を學習し、其の深遠幽妙の意義を了得して、當時の印度佛教界に於ける代表的人物の一員となりしことは疑ふべくもない。

彌蘭陀王は、印度に於ける希臘の殖民地なる大秦國の阿荔散に生れ、幼少の時から好んで經書を讀み、極めて聰明睿智の君主であつた。彼は當時印度に盛なりし哲學宗教の研究を重ね、時の名僧智識を訪問し或は招聘して、互に議論を上下し、以て彼等を窮地に陥いれ、廣い印度は空虛だ、稻のやうだと叫び、高慢の鼻を高くして居た。其の議論の狀態は、漢譯にも一寸出て居るが、原典の方が更に詳しいから、本經に就て讀まれたい。

然るに恰も好し、敎界新進の英傑・那伽犀那なるものが、王の都城なる奢揭羅國に入つて宣教を始めた。此に於いて王は、一日尊者を訪うて大いに敬服し、更に尊者を宮廷に聘して質問應答を重ね、愈尊者の大檀越となつて、彌蘭陀寺と云ふ寺院を建立した。尊者と王との事蹟は、此の外に殆んど調ぶべき史料が見出せない。唯此の彌蘭陀王時代の貨幣、その他碑文などを研究して、王が實際佛教の信者であつたか何うかを推定すべきであるが、今は到底この叢書の紙數が許さないから、其等のことは全部省略するの止むを得ないことを陳謝し、以て他日因緣純熟の時機をまち、研究の成果を公にすべきを誓ひ、讀者諸賢の諒察を乞ふのである。

【尊者の立場】　概括的に云へば、現存の巴利語の聖典は小乘敎で、梵語のそれは大乘敎だと言ふこと

に定めてあるが、尊者の說明は純乎たる小乘でなく、往往にして大乘的の口吻を加味した所がある、例せば供養の效果や、涅槃の意義などを說けるあたりは、何う考へても純小乘とは思へない。勿論予一個の私見を云へば、佛教を大乘と小乘との二の教義に區別判釋するのが、根本から間違つて居る。大乘だ小乘だと八釜敷議論するのは、所謂葉を摘み枝を尋ぬる底の閑事業で、我等の要とする所は直に根本精神を摑むにある。で、那伽犀那尊者を見るにも、小乘教の人だとか、大乘教の人だとか、一方に方附けて了はないで、卽ち頭から其麼な考を取り除いて、公平著實に研究して見るがよい。然らざれば(七)秋篠善珠のやうに、小乘教の那伽犀那と、大乘教の那伽犀那と二人あつたと、假定的に速斷せねばならぬやうになる。いま左に現存の佛典中より尊者の教說に關するものを拔出して、尊者の立場を測定し、尊者が果して小乘の人たりしか、否かを明にしやう。圓測の深密經疏第一の八紙に、

「那伽犀那は此に龍軍と云ふ。卽ち是れ舊翻三身論の[論]主なり。彼は佛果を說いて、唯眞如及び眞如智のみあり、色聲等の粗相の功德なしとせり。堅慧論師及び金剛軍は、皆此の釋に同じ。」

と言ひ、又慈恩の對法論疏一の五十一紙にも、

「餘門は三身論等の如し。彼の三身論に曰ふ、佛果は唯眞如及眞如智のみあり、音聲等の粗相の功德なし。」

【七】 增明記第一の十六紙。

と言つてある。是の如く龍軍論師が三身論を主張されたとすれば、（八）前田博士の言の如く、尊者は、馬鳴の主張にかかる、眞如緣起論の先驅をなせるものと推定するも、決して妥當を缺けるものではあるまいと思ふ。加之、尊者が業の說明をなすに當り、

（九）「大王よ、何人と雖も、佛陀の智見がなくては、業の活動範圍を決めることは能きませぬ。」

と說破せるは、起信論に於ける、

「無明熏習に於つて起す所の識、卽ち不思議業相は、凡夫の能く知る所にあらず。亦た二乘の智慧の覺する所にあらず。謂く、菩薩に依るに、初め正信より發心觀察し、——乃至菩薩究竟地も盡く知ること能はず。唯、佛のみ窮了す。」

と言へる文の先驅をなせるやうな感がする。此の故に吾人は、尊者の立場を判じて、所謂大乘敎の先驅をなせる、大衆部的色彩を加味せるものと言ひたいのである。但し吾人の判斷に苦しめるは、巴利語の原典に尊者は（一〇）九分敎を完全に心讀し、九分敎の寶を開示されたとあるのと、漢譯に尊者が巧みに十二品經（一一）卽ち十二分敎を說かれたとあるのと、其孰れが眞なるべきかである。蓋し從來の佛敎學者の定說によれば、九分敎は小乘的で、十二分敎は大乘的だと言ふことになつて居るからである。然し、那先比丘經の十二品經なる名目が、十二分敎の意味でないとすれば議論はない。

【八】前田博士著、大乘佛敎史論一二三頁參照。
【九】本經二〇六頁に出づ。
【一〇】本經三十三頁及び三十四頁を見よ。
【一一】卍藏那先比丘經七百七十紙表下段左より二行を見よ。

【本經の內容】此の經は卷を分つこと七、章を分つこと二十五、質問應答の數二百六十二個條より成つて居る。此等數多の答話中には、幾らか詭辯を弄したやうな跡方がないでもないが、概觀するに論理明晰、首尾一貫して、佛教の大綱を提げ、時に或は（一二）現象論の立場より說明を試み、時に或は（一三）本體論の立脚地より解說を下し、縱橫の問に對して、縱橫の答が與へられてある。吾人は浩瀚なる佛典中、未だ是の如く、深遠複雜なる教理を平易明白に說き去り說き來りて、讀者の倦厭を忘れしむる底の書あるを知らない。若し夫れ卷中自由自在に列擧せられある巧妙の比喩と、的確の實例とに至りては、恐く世界文學書中の壓卷と言ふも、決して過賞ではあるまいと思ふ。然し譯者の淺學なる、文章の拙劣なる、原典の妙味を傷け、古聖の尊嚴を瀆したるは、實に尊者幷に大方の諸賢に對して、慚愧恐懼に堪へない次第である。

【一二】佛教哲學にては之を緣起論と云ふ。
【一三】佛教哲學にては之を實相論と云ふ。

彌蘭陀王問經の國譯に就て

此の經は、本叢書最初の豫定書目中に加へられざりしが、中途俄に之を全一卷として編入し、大正六年一月に稿を起し、同年十月に擱筆せざる可らざる事となれり。此を以て此の經の全部を巴利語より逐字譯するの暇なく、多く英譯に依憑するの止むを得ざりしは、不肖の最も遺憾に堪へざる所、隨つて多少不穩當の譯語もある可ければ、謹んで讀者諸賢の寛恕を乞はんと欲す。

又此の經の卷頭に約二百頁の詳密なる解題を揭げ、全一冊として發行する豫告なりしも、本叢書全部の紙數に違算を來せしため、之を果すこと能はざりしは、一に編纂主事者たる予が不明の罪なることを謝せざる可らず。尙又此經の譯文を口語體にせるは、一に不肖の私見に出づ。世或は經文の品位を下げたりとの非難あるやも知る可らず、願くは累を監護證義の諸大德に及ぼさざらんことを。

予が此經の國譯を擔當するや、ドクトル荻原雲來先生は、歐洲戰亂中、我國にて最も得難き、巴利語の原典を割愛貸與せられ、畏友立花俊道學兄は、譯語上の援助を與へられたり。茲に特記して感謝の誠意を表す。

大正七年二月紀元節の日

山上曹源　謹白

國譯彌蘭陀王問經

世尊・應供・正徧智に歸命し奉る

卷の第一

世俗物語

花の城下の奢揭羅府に都せる彌蘭陀王は、恒河の大海に注ぐが如く、世に名も高き聖者・那伽犀那のもとに詣りき。

王は、妙辯宏辭・眞諦の炬火を操り・人心の迷闇を破る此の聖者に向ひ、複雜錯綜せる數多の難問を提出せり。

而して王は「那伽犀那より」意義甚深にして・心に可ひ・耳に適する・甚深微妙の解答を得ぬ。蓋し那伽犀那の言説は深玄幽妙なる律と論との堂奥に突入し、經の網を解き明すに、美妙の比喩と高遠なる推論とを以てしたればなり。

來れ、而して汝等の智識を向上せしめ、汝等の心意を悦ばしめ、而して一切の疑惑の根本を裁斷する、此の微妙の問答に耳傾けよ。

是の如く聞き傳へられた。希臘人の〔殖民して〕國をなせる地方に、奢揭羅と云ふ都府があつた。其處は通商貿易の一大中心地で、山紫水明、公園あり花園あり、森あり池あり湖水あり、山川林野、〔天然の〕極樂淨土をなせる愉快なる土地柄で、其處に住める人民は、敬虔の念に富んで居た。加之、その敵手は盡く掃蕩されて居たものだから、彼等は秋毫の不安壓迫をも感じなかつたのである。また其の王城は、周らすに數多の砦、種種の壘、宏壯なる門、嚴めしい拱門、白い高塀、深い壕などを以てし、防備極めて嚴重に整つて居た。且つ其の市街の廣辻場、十字街、市場などは、いとも巧に設計せられ、美しく店頭を飾れる商賈は、無數の高價な商品を以て充ち滿たされ、數百の慈惠院は、優に市街の莊嚴となり、數千の大厦高閣は、恰もヒマラヤ山顚の如く、巍巍乎として雲表に聳えて居た。而して市街には、松の如な男子、花の如な女子、(一)婆羅門・刹帝利・毘舍・首陀など、上中下各階級の人人が、群をなして往き來して居た。

彼等市民は、各教各派の學者教師を歡迎したものだから、奢揭羅府は宛然各宗の長老碩學の巢窟の如な觀を呈して居た。また街頭には、コーツムバラと稱するベナレス產の織物や、其の他種種の反物を商へる大小の店が軒をならべ、花香の市場からは、馥郁たる芳香が發散して市中を淨化し、如意寶珠、其の他樣樣の寶石類を商ふ店や、金銀銅石の器物を商ふ店も澤山あつて、眞に眩暈しい寶珠の鑛

【一】婆羅門 (Brāhmaṇa)、刹帝利 (Khattiya)、毘舍 (Vessa)、首陀 (Sudda) は、古代印度社會の階級の名にて、世にこれを印度の四姓と云ふ。而して上記の羅馬字は、梵語でなく、巴利語である。

山に入つたやうな趣があつた。更に「歩を他方に轉ずれば」、穀物類の大商店もあり、高價な商品の充滿せる倉庫もあり、各種の飲食物や、各樣の菓子類などの商店もあり、何に一つとして不自由なものはなかつた。約言せば此の奢揭羅府は、富に於て（二）北倶盧州に匹敵し、繁華な點では（三）アーラカマンダー、卽ち天上界の市街に拮抗して居た。

奢揭羅府の市街の狀況は、これ位にして置いて、我儕はこれから、彌蘭陀王と那伽犀那尊者と、此の二人者の前生譚や、及び種種の難しい問題に就て記述せねばならぬ。で、左の六項に分つて之を述べやう。

一　二人者の前生譚
二　彌蘭陀王の疑問
三　法相に關する問答
四　所說の矛盾に關する問答
五　推論に關する問答
六　隱喩に就ての問答

この內、彌蘭陀王の疑問は、(イ)法相問答と、(ロ)斷惑問答との二部に分れ、所說の矛盾に關する問答は、(イ)大品と、(ロ)出家の生活に關する問題との二部に分たれる。

【二】Uttara-kuru.
【三】Ālakamandā.

前生譚

前生譚とは、此の生または前生に於いて作せる、彼等が過去の(一)業を意味するのである。傳へ聞く、昔時、迦葉佛が宗敎の信仰を宣傳し給ふ時、恒河の大流に近い處に、佛敎(二)僧伽の一大團隊が住んで居た。〔その團員卽ち〕比丘衆は、制定された清規戒律に隨ひ、朝早く起き出でて、手に長柄の箒を取り、心に佛陀の功德を念じつつ、庭を掃き、芥溜に塵芥を集めて居た。

某日、一人の比丘が、一人の(三)新發智の沙彌に、芥溜を掃除せよと告げた。然るに其の新發智は、恰も〔比丘の聲が〕聞えないやうな風をして、餘念なく仕事をして居た。で、其の比丘は、二度三度、新發智に命じたが、それでも新發智は聞えないやうな風で、ズンズン自分の仕事の方に往つて了つた。そこで比丘は、新發智のくせに、生意氣だ片意地だと怒つて、箒の柄で彼を擲りつけた。

時に新發智は、敢て拒むが如き顏色もせず、其の仕事に著手し、『われ此の塵芥を掃除する功德行によつて、生を代へ身を代へて、涅槃を遂ぐる

【一】業(Kamma)とは、普通には行爲・作業など譯すべき語なれども、佛敎哲學上極めて重要なる術語にて、或時は性格の意味に用ひられ、或時は品格・人格など種種の意味に用ひらる。故に讀者は常に用心して此語を讀むがよい。

【二】僧伽(Saṅgha)とは、佛敎の僧團または敎團を意味する語なるが、古人はこれを和合衆と譯された。現代日本語の僧なる名詞は、僧伽の略稱である。

【三】新發智とは、眞に僧團の團員たる資格なきもの、新人の小僧、卽ち具足戒を授からない雛僧を云ふ。

まで、此の世に生れ、終に正午の日輪の如く、天晴れ赫赫たる大勢力の人たらん』と獨語した。これ彼が第一最初の誓願であつた。

而して彼は其の仕事を了へてから、沐浴のために恒河の浴場に往き、澎湃として奔騰する恒河の大浪を視て、『われ涅槃を成し遂ぐるまで、生を代へ身を代へて、此の世に生れ、此の〔大河の〕波浪の如く、わが眼前に起り來る何な事情境遇の下にありても、閒に髮を容れず、過誤なく正しき事を道破する底の力を得るやうになりたい』と叫んだ。これ彼が第二の誓願であつた。

さて彼の比丘も亦た帚を帚部屋に納めてから、沐浴のために恒河の沐場に下りて往つた。然るに彼は雛僧が叫んだ〔誓願の〕事を聽き附けて、「若し此奴が、斯る德行——そは畢竟予が激勵した爲に彼が行つた——によりて、是の如き希望を達し得るならば、われも亦如何で希望を達せずに居られやう」と、心に思ひつつ、『われ涅槃を成し遂ぐるまで、生を代へ身を代へて、此の世に生れ、此の大浪の如く、わが眼前に起り來る都ての事件に對して、閒に髮を容れず、過誤なく正しく處置し得るやうになりたい。して又この少年が提出する一切の問題に解答し、都ての難問を解決する力を得るやうになりたい』と誓願を立てた。

それから此の二人者は、一佛の出現より他佛の出世し給ふまで、長い閒、生を代へ身を代へて、(四)人天の閒に轉生したのである。而して我が佛陀〔釋尊〕は、彼等を見そなはし

【四】人天とは、人間界と天上界との略語である。

て、(五)目犍連子帝須長老に對して、(六)授記し給ひしが如く、此の二人者に對しても、亦た其の未來の運命を豫言して、

『わが寂滅してより五百歳の後、此の二人者は世に再現し、わが教へた教法と戒律とに關して、疑問を提出し實例を擧げ、以て其の疑難を解決し說明するだらう。』

と授記し給うたのである。

此の二人のうち、雛僧は(七)閻浮提の奢揭羅府に都し、其の名を彌蘭陀と云ひ、博學・雄辯・明哲・敏腕の大王となつた。而して彼は過去現在未來の事柄に關し、自ら聖歌を以て勅命せる、敬虔如法なる威儀作法の、忠實なる遵奉者であつた。彼は又多くの學問技藝に達して居た。卽ち(八)啓示錄・(九)傳說錄・(一〇)數論・(一一)瑜伽・(一二)因明・(一三)勝論等の哲學體系、數學・音樂・藥學・(一四)四吠陀・(一五)富蘭那・(一六)傳話・天文學・法術・論理・咒文・戰術・詩學・公證等の十九の學術に通達し、[弘い印度に]議論を上下して、一人の彼に雙ぶものなく、彼を說き伏せ得るものは勿論一人もなかつた。で、彼は有ゆる思想系統の、有ゆる教祖にも優ると認められて居たのである。而

【五】目犍連子帝須(Moggaliputtatissa)。

【六】授記とは、記莂を授くるの意味にて、個人の未來を豫言することである。

【七】閻浮提(Jambudvīpa)、とは州名にて、我が國の佛教典籍中には日本國をも、其の中に含めてあるが、印度の原典によれば、印度大陸の又の名として用ひらるる場合が多い。

【八】啓示錄(Suti)は、梵語の所謂Śruti である。こは吠陀の一名にて、梵天の啓示になるもの、卽ち人間の作れるものにあらず、Apauseya と云ふ意味である。

【九】傳說錄(Sammuti)は、梵語の所謂Smriti である。こは前の啓示錄と異ひ、人間の作り出せるものと云ふ意味で

して彼は單に智力に於て優れて居た計りでなく、體力に於ても亦太甚だ優れ、其の機敏にして豪勇なる、閻浮提州中、實に絶倫無比であつた。彼は又大なる資產と大なる富とを有し、且つ其の武裝せる兵士の數は、とても數へきれないほどであつた。

某日、彌蘭陀王は、其の武裝せる無數の四兵を檢閱するため、城外に出御された。而して議論好きなる此の王は、閲兵を了へてから、正邪決疑の學者や、詭辯學者や、其の他種種の溫和なる學者と與に、議論を戰はさんと熱望し、太陽を仰ぎ見て、其の大臣に向ひ、

『まだ大分時間があるやうだ。こんなに早く城內に還つても仕方がない。で、(一七)沙門でも婆羅門でも、又は阿羅漢果の正覺を得たりと自認する一團の學徒の首長でもよいが、誰か朕と與に議論を上下し、朕の疑惑を芟除し得る學者が、(其處らに)居はしまいか。』

と下問された。此處に於て、五百の(一八)希臘人は、彌蘭陀王に向ひ、

『陛下よ、彼處に(一九)富蘭那迦葉と、(二〇)マッカリ・ゴーサーラと、(二一)ニガンタ・ナータプッタと、(二二)サンジャヤ・ベーラッタプッタと、(二三)アジタ・

ある。

【一〇】數論(Sankhya)は、印度の六派哲學の隨一である。此の派の學說は、佛陀の直說に影響せること勿論なるが、後世の唯識論なども大に其の影響を受けて居る。

【一一】瑜珈(Yoga)も亦印度六派哲學の隨一である。禪定の方式を樣樣に說ける所などは仲仲に面白い。

【一二】因明(Nīti)は、梵語の所謂Nyaya にて、六派哲學の隨一たる論理學派である。

【一三】勝論(Visesika)も亦た印度六派哲學の隨一である。梵語では(Vaisesika)と云ふ。

【一四】四吠陀(Cātubbedā)とは、印度最古の聖典、否な世界最古の典籍たる梨俱・蹉摩・阿假婆・耶柔の四記錄である。

【一五】富蘭那(Purāṇa)とは、優婆尼沙土時代の後に起れる特

ケーサカムバリーと、（二四）パクダ・カッチャーヤナの六學者が居ます。彼等は何れも各學派の名高き教師で、多くの弟子及び信者の隨徒を有し、人民から大變に尊敬されて居ます。で、陛下よ、陛下は、彼等の所に詣り、問題を提出して、疑惑を芟除し給へ。』

と奉答した。そこで彌蘭陀王は、五百の希臘人を隨へ、堂堂たる鹵簿に輿つて、先づ富蘭那迦葉の住處を訪づれ、互に慇懃なる挨拶を交換して、恭しく如法の座に卽かれた。斯くて王は迦葉に向ひ、

『迦葉尊者よ、此の世界を支持するものは誰ですか。』

と問矢を放たれた。すると迦葉は、

『大王よ、此の世界を支持するものは大地です。』

と答へた。此に於いて王は、

『ですが、迦葉尊者よ、若しも大地が此の世界を支持するならば、人が大地の外なる（二五）阿鼻地獄に往くのは、何ういふ道理ですか。』

と反問した。然るに此の時、富蘭那迦葉は、此の難問を呑み込むことも能きなければ、其の論難に對して辯駁することも能きず、頭を垂れたまま、默りこんで、鬱然として坐して居たのである。

種の文學の名にて、種種の神話・昔物語などを蒐めたものである。

【一六】傳話（Itihāsa）も亦た印度に於ける一個特種の文學を形成せる典籍で、主として史話を蒐めたものである。

【一七】沙門（Samaṇa）とは、佛教僧侶の代名詞。

【一八】希臘は印度にて Yonaka と云ふ。

【一九】Pūraṇa Kassapa.

【二〇】Makkhali Gosāla.

【二一】Nigaṇṭha Nātaputta.

【二二】Sañjaya Belaṭṭhaputta.

【二三】Ajita Kesakambalī.

【二四】Pakudha Kaccāyana.

【二五】阿鼻地獄（Avīci）。

そこで彌蘭陀王は、マッカリ・ゴーサーラ「を訪ひ」、彼に向つて、

『ゴーサーラ尊者よ、世に善惡の業が在りますか、また世に善惡業の結果或は應報がありますか。』

と問はれた。すると、尊者は、

『大王よ、世には善惡業もなく、又その結果や應報もありませぬ。大王よ、此の世で刹帝利であるものは、他界に往つても刹帝利となり、此の世で婆羅門・毘舍・首陀、若くは(三六)旃陀羅族であるものは、次の世に往つても、矢張り婆羅門・毘舍・首陀、若くは旃陀羅となるのであります。されば如何で善惡業の必要がありませうぞ。』

と答へた。此に於いて王は更に、

『ゴーサーラ尊者よ、若し貴衲の言の如くならば、同一の推理により、此の世で手を切り去つたものは、彼の世でも手を切り去つた人となり、又それと齊しく、此の世で足を切り、耳を切り、鼻を切り去つたものは、次の世でも矢張り足を切り、耳を切り、鼻を切り去つた人とならねばなりますまい。』

と反問した。すると、ゴーサーラ尊者は、沈默して了つたのである。

そこで彌蘭陀王は、獨り心に「閻浮提州は全く空虛である。閻浮提州は全く稃の如なものだ。此の國には、朕と事物「の理」を論じ、吾が疑惑を芟除し得る、一人の沙門もなければ、一人の婆羅門

【三六】旃陀羅（巴 Caṇḍāla）とは、印度社會に於ける最下等の職業に從事する人種の名にて、我が國の新平民よりも賤まれて居る。

も居ない」と考へた。而して彼は其の大臣等に向ひ、

『實に愉快な好い夜だ。朕は、今夜これから、沙門又は婆羅門のうち、誰かに疑問を提出して、朕と會話し、朕の疑惑を芟除し得るものを訪づれたいが、其の人は誰だらうか。』

と言はれた。すると大臣等は、王の言を聽き、沈默して、王の顏を仰ぎ見つつ立つて居たのである。

＊　＊　＊

今や奢揭羅府には、十二ケ年の長きに亙つて、沙門のうちにも、婆羅門のうちにも、將た又た俗人のうちにも、一人も學者は居なかつた。で、大王は、沙門・婆羅門、又は俗人の學者の棲める處は、何處でも聽き出して、其處に往いて疑問を提出された。然るに彼等は何れも齊しく無能で、王の疑問を解決し、以て王を滿足せしむることが能きないものだから、此處彼處に逃げ去つて了ふか、さなくば他處に去らないまでも、兎に角〔王に對して〕沈默して了つたのである。而して佛教教團の比丘衆の大部分は、大雪山の中に往いて居た。

爾の時、ヒマラヤの山地に、無數の阿羅漢等が棲んで居た。而して尊者(二七)アッサグッタは、天耳通を以て、彌蘭陀王の言を聽き附け、(二八)ユガンダラ山の頂上に於いて、教團の團員會議を召集して、彼等に向ひ、「此の教團の團員中、誰か彌蘭陀王と會話して、彼の疑惑を芟除し得るものはあるまいか」と尋ねた。

【二七】アッサグッタ Assagutta.
【二八】ユガンダラ Yugandhara.

然るに比丘衆は皆沈默して、何とも言ふものが無かつたので、尊者は再三同じことを繰り返して尋ねられた。それでも全團員中、一人の能く口を開くものは無かつたのである。そこで尊者は會衆の比丘等に向ひ、「諸君、彼の三十三天の(二九)エージャヤンタ王宮の東方に、(三〇)ケーツマティーと稱する館があつて、其處に(三一)摩訶犀那といふ天人が棲んで居ます。彼こそは彌蘭陀王と會話して、王の疑問に解答することが能きます」と言つた。すると無數の阿羅漢等は、ユガンダラ山の頂上から雲隱れして、三十三天の中に出現されたのである。

而して帝釋天は、僧團の比丘衆が、遙か遠方から來るのを見て、アッサグッタ尊者の許に詣り、尊者を禮拜して、恭しく其の側に立ち、「尊者よ、多勢の比丘衆が見えましたが、彼の人達は何物を要求なさるのですか。私は僧團の(三二)淨人を勤めて居ます、が、私は貴衲等の爲に、何を爲たらいいでせうか」と言つた。

そこで、アッサグッタ尊者は、「大王よ、彼の印度の奢掲羅府に、彌蘭陀といふ王が居ます。彼は〔仲仲の〕論客でありまして、〔一人の能く〕彼に匹敵するものなく、彼を說き伏せ得るものは尙ほ更ありませぬ。で、彼は有ゆる學派の有ゆる敎師にも優れたものと認められて居ます。彼は僧團の比丘衆を訪づれて、思索上の難問をもちかけ、比丘衆を困惱せしむるのを道樂にして居ます」と答へた。

【二九】Vejayanta.
【三〇】Ketumati.
【三一】Mahāsena.
【三二】淨人(Ārāmiko)とは、僧團の給士である。今でも禪宗の寺では、給士のことを淨人と云つて居る。

此に於いて、帝釋天は尊者に向ひ「尊者よ、其の彌蘭陀王は人閒に生るる因緣を斷つたのです。而して彼のケーツマティーの館に、摩訶犀那と稱する一人の天人が棲んで居ます。彼こそは、彌蘭陀王と會話し、其の疑惑を芟除することが能きませう。で、我儕は、彼の天人が〔今一たび〕人閒世界に生れて吳れるやうに懇請しませう」と言つた。

斯くて帝釋天は、僧團に導かれて、ケーツマティーの館に入り、天人摩訶犀那を抱き、彼に對つて「尊大人よ、僧團の比丘衆は、貴下が再び人閒世界に生れ出られんことを懇請して居ます」と告げた。すると、摩訶犀那は「帝釋天よ、私は最早人閒世界に生れたいと思ひませぬ。人閒世界では業の重荷に堪へきれませぬ。人閒としての生活は、實に難かしいものです。帝釋天よ、私が（三三）般涅槃して、一層高き地位に生れやうと思ふ處は、此の天上世界の中にあるのです」と答へた。

そこで帝釋天は、再三、同じ事を繰り返して、懇望したけれども、而も摩訶犀那は、私は最早人閒世界に生れたいと思ひませぬ。人閒世界では業の重荷に堪へきれませぬ。人閒としての生活は實に難かしいものです云云と答へたのである。時に尊者アッサグッタは天人摩訶犀那に向ひ、尊大人よ、我儕いま人天の世界を通觀するに、彌蘭陀の異端的なる見解を擊破して、我が教法の正信を〔維持し〕援助し得るものは、尊大人の外にはありませぬ。今や僧團の比丘衆は舉つて、尊大人が（三四）十力者の教法〔の維持〕に、尊大

【三三】般涅槃(Parinibbāna)は、此所では逝去又は寂滅の義である。

【三四】十力者とは、釋尊の異名

人の勢力を貸さんがため、再び人閒世界に生れられんことを懇望し、禮を厚うして尊大人を迎へんとして居ます」と言つた。

此に於いて天人摩訶犀那は、自分が彌蘭陀王の異說を擊破して、正信を〔維持し〕援助し得るだらうとの思想を聽いて、心大いに打ち喜び、「よろしい、それでは、再び人閒世界へ生れ出づることを承諾しませう」との返事を與へた。

そこで、比丘衆は其の使命を果たし、手に手を取り、三十三天から雲隱れして、大雪山中の(三五)ラッキタタラに現はれた。時にアッサグッタ尊者は、僧團の比丘衆に向ひ、「諸君、此の僧團に屬する比丘で、誰か此の集會に出席しなかつたものがありますか」と尋ねられた。此に於いて比丘の一人が「あります。(三六)ローハナ比丘は、一週閒以前から山中に往き、(三七)滅盡定に耽つて居ます。だから使者を送つて、此の事を彼に知らせた方がよろしいでせう」と答へた。然るに丁度この時ローハナ比丘は、自ら滅盡定より起ち、僧團で自分の歸るのを待ち設けて居ることに氣附き、山顚から雲隱れして、無數の比丘衆の集會せる處に現はれた。

此に於いてアッサグッタ尊者は彼に對ひ、「おい如何したのです、ローハナ師よ。今や我が佛敎は

である。蓋し釋尊は十種の力を具有し給うたからである。

【三五】 Rakkhitatala は守護坂とでも譯すべきであらう。

【三六】 Rohana.

【三七】 滅盡定 (Nirodha Samapatti) とは滅定または滅受想定とも云ふ。心の散動を厭ひ靜住を求むるがために聖者の修する所である。此の定に入れば、能く心・心所を起らしめざる功能がある。

破碎し去られんとする危急存亡の秋に際して、貴師は僧團の作すべき事に注意しないのですか」と詰問した。

ロ『尊者よ、それは全く私の不注意でした、如何したら宜しうございませうか。』

尊『ローハナ師よ、彼の大雪山の麓に（三八）カジャンガラと云ふ婆羅門の村があつて、其處に（三九）ソーヌッタラと言ふ一婆羅門が棲んで居る。而して彼に那伽犀那と云ふ一人の令息があります。で、貴師はこれから七年と十ケ月の閒、［毎日］彼の家に托鉢に行きなさい。而して其の年月を經過してから、貴師自ら［工夫して］其の子―卽ち那伽犀那―を出家入道せしめなさい。若し彼を出家入道せしめられたならば、貴師の［不注意の］罪業は消滅しませう。』

ロ『かしこまりました、仰せの通りに致しませう。』

さて天人摩訶犀那は、天上世界を辭して［人閒世界に下り］、ソーヌッタラと云ふ婆羅門の妻の胎内に宿つた。そして彼女が懷妊の際に、三つの不思議な事變が起つた。卽ち（一）兵器武器が皆熾に燃え立ち、（二）まだ青い顆粒が一瞬閒のうちに成熟し、（三）［乾燥期なるに］大雨が降つたのである。

斯くてローハナ比丘は、摩訶犀那の再現の日から、日日七年と十ケ月の閒、其の家に托鉢に通つた。が、只の一度でも、匙一杯の飯、杓子一杯の粥すら、供養にあづかつたことはなかつた。加之、その

【三八】カジャンガラ Kajangala.
【三九】ソーヌッタラ Sonuttara.

家人から、只の一度でも、お世辭の挨拶（四〇）合掌又は何等の敬意も表されたことはなかつた。否な寧ろ一人の彼に對して（四一）「今日は何うぞ、お隣へお出下さい」と云ふものすら無かつたのは、彼に取りては大なる侮辱であり毒罵であつたのである。

然るに其の七年十ヶ月の年月が經つて了つた時、一日此の婆羅門がローハナ比丘に口をきくと云ふ［空前の］事件が起つた。即ち其の日、婆羅門は、畑の仕事から歸るさ、ローハナ長老に出會した。而して彼は長老に向ひ、

『もしもし行脚僧、貴衲は私の家にお出になりましたか』

と尋ねた。

長『はい參りました。』

婆『では、貴衲は私の家で何かお貰ひになりましたか。』

長『はい貰ひました。』

婆羅門は、これを聞いて不快な心を起し、其の家に歸り、家人に向ひ「お前達は彼の行脚僧に何か與へたのか」と尋ねた。すると家人は「いいえ何にも與へませぬ」と答へた。此に於いて、婆羅門は翌日「彼の行脚僧奴、虛言吐きあがつたから、今日は一つ彼奴を辱めてやらうー」と考へつつ、戶口に坐つて［待ち構へて］居た。而して長老が順を追うて、彼の家に詣るや否や、

【四〇】合掌は印度社會に於ける一般の敬禮である。それが日本では佛を拜む時のみの禮儀となつて居る。

【四一】これ印度の人民が托鉢僧に對し、食物の布施の能きない時、常に用ひる文句である。東京地方で乞食に對し「今日は出ませんよ」とか、「今日は出ないよ」とか云ひ、九州の一地方で「今日はお通過なさい」と云ふに當る言葉である。

彼は長老に對ひ「昨日、貴僧は私の家から何にも貰ひもしないくせに、貰つたと云はれたが、貴僧の宗旨では、虚言を吐いても好いのですか」と詰問した。

此に於いて、長老は「婆羅門よ、七年十ケ月の年月が經過するのに、貴下の家では、誰も私に慇懃にもの言ふ人すらなかつた。然るに昨日初めて貴下が私に言葉をかけられた。私が貰つたと言つたのは、其を指したのです」と答へた。

此に於いて、婆羅門は「此の人達は一寸慇懃に言葉をかけたばかりですら、布施を得たと認めて感謝するのだから、眞個に施物を與へたなら、何なに喜び謝するか知れない」と考へた。斯くて彼は大いに感激して、自分の爲に料理してあつた(四二)カレーライスを長老に與へ、尚ほ又「これから毎日、貴衲にこの種の食物を差上げませう」と言つた。而して彼は、其の後、長老が日日彼の家を訪づれるを觀、且つ長老の態度が如何にも溫順平和なるを察し、心から打ち喜んで彼を歡迎し、次第に尊敬の情を增し、終に毎日の(四三)中食に彼を請待するやうになつたのである。斯くて長老は、「佛家の淸規に隨ひ、」默して滿足の意を表し、食事を了へて辭し去る時は、口に佛陀の(四四)金言を唱ふるのを常として居た。

【四二】カレーライスは印度の常食で、西洋人は印度から、カレーライスを輸入したのである。

【四三】中食。印度の佛僧は所謂日中一食で、大概午前十一時頃から十二時までの間に食事するのである。十二時過ぎれば、決して食物は喰はないばかりでなく、牛乳すら飮むことは能きない。

【四四】佛僧が人より供養を受け布施にあづかつた時、口に唱ふる一定の佛語がある。今その佛語を指して佛陀の金言と云ふのである。

さる程に、婆羅門の妻は、十ヶ月の期みちて、一人の男兒を産み、其の名を那伽犀那と命けた。彼は次第に成長して、早や既に七歳になつた。で、彼の父は一日「那伽犀那よ、お前は吾が婆羅門族傳來の學問をしたいと思ふか」と言つた。すると那伽犀那は、「お父さま、それは何といふ學問ですか」と尋ねた。

父『そは三吠陀といふ學問である。而して其の他の智識は、單に技術に過ぎない。』

那『では、お父さま、私は其を學びたう御座います。』

此に於いて婆羅門ソーヌッタラは、一人の婆羅門の敎師を雇ひ、其の報酬として一千疋を呈し、且つ一室の中に其の褥椅を備へ、敎師に向つて、「何うぞ、此の子に聖歌を暗誦させて下さい」と頼んだ。

そこで此の敎師は、那伽犀那をして、聖歌を繰り返さしめ、其を暗誦するやうに激勵した。すると那伽犀那は、一通り習つただけで、三吠陀を覺え、正しく其を吟誦し得るやうになつた。しかのみならず、其の意味をも理解し(註)一一の聖歌の用ひらるべき場合をも正しく覺え、其中に含める奥義をも了解することが能きたのである。斯くて那伽犀那は、間もなく、吠陀の名義集や、詩形學や、傳說學の智識も出來、三吠陀に關する直覺的見識も出來た。で、今や彼は一躍して博言學者、文典學者、正邪決義の學者、觀相學者となつたのである。

【註】吠陀では、何何の歌は何う云ふ儀式の際に用ひ、これこれの歌は斯く斯くの場合に歌はるると云ふ風に一定の用處がきまつて居る。

一日彼は父に向ひ、「お父さま、我が婆羅門の家には、まだ何か學ぶべきものがありますか、それとも是でお了ひですか」と尋ねた。すると父は、「那伽犀那よ、もう何にもない、之でお了ひだ」と答へた。

それから、那伽犀那は、先生の前で、其教課を復習して、家を出で、彼が過去の業の結果として、其の心に起つて來た衝動のままに、幽寂な場處を探し、其處で沈思冥想に耽つた。そして始から終まで其の學んだことを回顧して、「吠陀の」何處にも、全く何等の價値もないことを覺り、心中の煩悶に堪へずして「此等の吠陀は眞に空虛であり、稃のやうなものである。其の中には、何等の意義もなければ、何等の價値もなく、また何等の眞理もない」と叫んだのである。

時にローハナ尊者は(四六)ヴッタニヤの菴に坐して居られたが、那伽犀那の心中に、煩悶の起れるを感知して、直に袈裟を著け(四七)應量器を手にし、ヴッタニヤから雲隱れして、カジャンガラの婆羅門村附近に現はれ給うた。すると那伽犀那は、家の戶口に立て居て、遙か向の方からローハナ尊者の來り給ふを見た。そして尊者を一見するや、彼は心に禪喜法悅の情を催し、且つ尊者から眞個の眞理を學ばうと云ふ、希望の光明を見出した。そこで彼は尊者の前に往き、

『頭を剃り黃色の衣を著て居らつしやいますが、貴納は何方ですか。』

と言つた。

【四六】ヴッタニヤ Vattaniya.
【四七】應量器とは、僧侶の鐵鉢即ち食器である。

尊『坊ちゃん、世間では衲を出家の人と呼びます。』
那『何せに世人は貴衲を出家の人と呼びますか。』
尊『罪障の染汚を離れんが爲に、世を棄てたから、世人は私を出家の人と呼ぶのです。』
那『尊者よ、貴衲は何せ普通の人の如に、頭髪をお生やしになりませんか。』
尊『出家の人は、頭髪や鬚を生せば、道人生活に十六種の障礙となるから、それを剃るのぢや。』
那『その十六の障礙とは何ですか。』
尊『〔一には〕莊嚴せねばならぬから障礙となり、〔二には〕美装せねばならぬから障礙となり、〔三には〕油をつけねばならぬから障礙となり、〔四には〕擦り洗はねばならぬから障礙となり、〔五には〕頭髪の周圍に飾を附けねばならぬから障礙となり、〔六には〕香料を使用せねばならぬから障礙となり、〔七には〕軟膏をつけねばならぬから障礙となり、〔八には〕乾果の實のやうになるから障礙となり、〔九には〕染めねばならぬから障礙となり、〔十には〕紐をつけねばならぬから障礙となり、〔十一には〕梳けづらねばならぬから障礙となり、〔十二には〕理髪所に往かねばならぬから障礙となり、〔十三には〕縺れ、縮れるから障礙となり、〔十四には〕蚤・虱などの生ずる所となるから障礙となり、〔十五には〕其の頭毛が減少すれば、人は之を嘆き悲んで困惱し、〔十六には〕悲嘆のあまり、急に卒倒するやうなことすらあるから障礙となるのぢや。人は此等の障礙のために困惑されて、微妙な智慧や學問を忘却して了

ふのである。』

那『尊者よ、では貴衲の衣は、何ぜ普通の人のと異ひますか。』

尊『世人の着て居るやうな美しい衣は、五欲を離れることが能きない。然るに黄色の衣を着て居れば、着物に關する危險は全く起らない。これ衲が世間の人と異つた衣を著て居る所以である。』

那『尊者よ、貴衲は、何が眞の智慧であるか、御承知ですか。』

尊『うむ、衲は眞智慧の何なるかも、亦た世界最上の頌をも知つて居る。』

那『尊者よ、貴衲は私にも、其を敎へ得ますか。』

尊『敎へ得るとも。』

那『では何うぞ、敎へて下さい。』

尊『今は時がよくない、我儕は村に托鉢に來たのだ。』

そこで那伽犀那は、ローハナ比丘が持つて居た應量器を取つて、尊者を家の内に連れ往き、彼自ら尊者が喰べられるだけの硬軟の食物を給仕した。而して尊者の食事を了はり、其の手を應量器から退き給ふを見て「さあ、尊者よ、其の頌を私に敎へて下さい」と言つた。

尊『坊ちやん、汝が「一切の」障礙を脫し、兩親の許諾を得たら、衲は汝を衲の菴に連れて行き、汝に出家の衣を著せて、それから汝に其を敎へやう。』

此に於いて那伽犀那は兩親の許に行き、「彼の僧は、世界最上の頌を知つて居られるさうです。が、其の弟子となつて、僧團に入つたものでなければ、何人にも其を教へることが能きないと云つて居られます。で、私は僧團の人となつて、其の頌を學びたうございます」と言つた。

すると彼の兩親は直に許諾を與へた。蓋し彼等は、其子に世を棄てさしても、〔世界最上の〕頌を學ばしめたい。而して學んで了つたら、彼は復た家に戻つて來るだらうと考へたからである。

それからローハナ比丘は、那伽犀那をヴッタニヤの菴に連れ行き、其處に一夜を明かし、翌日無數の阿羅漢の棲へるラッキタタラに彼を連れて行つた。而して那伽犀那は沙彌として、僧團の人となることを許されたのである。

此に於て那伽犀那は、僧團の人となることを許されたので、ローハナ比丘に向ひ、「私は既に貴衲等の衣を著ました。さあ、彼の頌を教へて下さい」と言つた。

そこで、ローハナ比丘は、「如何なる順序で、此の新發智を教へやうか、〔三藏中の〕經部を先に教へやうか、それとも〔一足飛びに〕論部を教へやうか」と一寸思案された。が、那伽犀那は仲仲悧口さうだから、論部でも樂に覺えるだらうと察して、最初に論部の課程を教へられた。

すると那伽犀那は、唯一邊通り尊者の誦せらるるを聞いて、論部全體を暗記して了つた。即ち善法と不善法と（四八）無記法の三大分類、並に其の細

〔四八〕無記法とは、善法の範疇にも、惡法の範疇にも入らな

別を論ずる（四九）法數と、（五〇）衆生成立の要素より說き初め、全部十八章より成る解說と、攝非攝より說き初め、全部十四卷より成る（五一）原理論と、衆生成立の種種の要素に關する分別と、種種の感覺に關する分別等を說き、六部より成る施設と、五百以上の佛徒の見解と、五百以上の敎敵者の見解とを列擧し、千章より成る（五二）カターヴッツと、萬有の本源と其の要素等に關し、補足的敎條を說ける十部の（五三）ヤマカと、因と想と及び其の他の事項を論じ、二十四章より成る（五四）パッターナとを誦出して聽かせたら、那伽犀那は、「もう宜しうございます、貴衲は再び其を誦出して下さる必要はありませぬ。私は十分に復誦することが能きます」と言つたのである。

それから那伽犀那は、無數の阿羅漢の前に行き、「私は論藏全部を省略せず、善法・不善法・無記法の三部に配列して、詳說する爲に暇を戴きたいのです」と請うた。そこで阿羅漢等は、「善哉、那伽犀那よ」と言つて彼に暇を與へた。斯くて那伽犀那は七ケ月の間に、七部の論藏を十分に暗誦した。此に於て大地は鳴動し、諸天は讃歎し、梵天は拍手し、天空からは芳香馥郁たる栴檀の粉抹、曼陀羅華の雨を降らした。それから其守護の坂に居た無數の阿羅漢等は、那伽犀那が年齒二十四歲に達した時、具足戒を授けて愈比丘たる資格を許したのである。

いものを云ふ。

【四九】法數（Dhamma-sangani）。

【五〇】衆生成立の要素は、古來の佛典に蘊とある。蘊はKhandha（梵語 Skhandha）の譯語にて、五蘊と云へば、五の要素と云ふ意味である。

【五一】Dhātukathā は、古來界論と譯す。

【五二】Kathā-Vatthu は、譯して論事と云ふ。

【五三】Yamaka は雙と譯す。

【五四】Paṭṭhāna は、譯して發趣と云ふ。

さて大徳那伽犀那は、具足戒を受けた翌日の朝ぼらけ、自ら衣を著け、鉢を手にし、其の師に隨つて、村落の閒に托鉢に往つた。而して彼は路すがら、其の意に、「佛語、卽ち經部を後廻しにて、先づ阿毘達磨、卽ち論部を敎へられたのは、畢竟するに、我が師の頭腦の、空虛愚昧なためである」と考へた。

此に於て大徳ローハナは、其の意に、那伽犀那が、今思つて居る事柄を知り、「那伽犀那よ、今お前は、斯樣斯樣の事柄を考へて居る筈だが、それは宜くないことだ。お前は左樣なことを考へてはいけない」と、那伽犀那に告げられた。

此に於いてか那伽犀那は、「我が師の、己が心に思へることを、讀破し給うたのは、實に不思議だ、奇妙だ。我は懺謝せねばならぬ」と思ひ、直に師に向つて、「御師よ、何うぞお許し下さい。私は以後決して斯樣な考を起しますまい」と云つた。

すると大徳ローハナは、「那伽犀那よ、衲は單にお前が、什麼約束をしたばかりでは、許してやることは能きない。が、彼の奢揭羅城に彌蘭陀と云ふ王が居る。彼の王は異端的な難問題を提出して、數多の比丘等を困らせるさうぢや。で、那伽犀那よ、汝もし彼處に往いて、彼の王と議論を上下して、王を說き伏せ、以て彼を正法に歸せしむることが能きたならば、汝の謝罪を聽許してやらう」と答へられた。

此を聞いて、那伽犀那は、「御師よ、啻に彌蘭陀王のみならず、閻浮提の、有ゆる王をして、私に難問題を提出せしめられよ。若し私の懺謝が聞き屆けられますなら、私は彼等が提出する一切の問題を說明し、解決いたしませう」と言つた。が、尙ほ師の許容し給はざるを見て、彼は、「御師よ、私は將に來るべき、三ケ月間の雨期を、何處で暮したら可いでせうか、それを敎へて下さい」、と言つた。

此に於てローハナ尊者は、「那伽犀那よ、ヴッタニヤ菴に、アッサグッタと云ふ御方が居られる。汝は彼の許に往き、我が名に於て彼の御足を禮し、以て尊者の安否を問ひ、三ケ月の雨期を、尊者の指敎の許で暮すやうに、ローハナが私を遣はしましたと言ふがよい。而して彼が若し汝の師の名を問うたら、我が名を言つてよいが、若し彼自らの名を問うたら、尊者の御名は私の師匠が存じて居ますと答へるがよい」と言はれた。

そこで那伽犀那は、ローハナ尊者の前に膝づき、右に繞つて尊者の許を辭し、鉢を持し衣を著て、ヴッタニヤ菴に到著するまで、路すがら食を乞ひつつ旅したのである。而して彼はヴッタニヤ菴に到著するや、直にアッサグッタ尊者を拜して、ローハナ尊者から、言ひ聞かされた通りに陳述した。すると、アッサグッタ尊者は、「宜しい、那伽犀那よ、汝は衣鉢をおろせ」と答へられた。

翌朝、那伽犀那は、師の室房を掃き、飲料水を汲み、齒磨きの準備を整へて、師の使用に供した。然るにアッサグッタ長老は、復た自ら其の室房を掃き、那伽犀那が汲んで置いた飲料水も、齒磨き用

の水も投げ棄てて、自ら更に水を汲み、一言も口をきかれなかつた。斯くすること一週日にして、アッサグッタ長老は、第七日目に、那伽犀那に向ひ、復初相見の時と同樣の問を發した。此に於て那伽犀那も、亦以前と同樣の答を呈した。かくて長老は雨期の閒、那伽犀那の安居を許されたのである。

さて其の長老に一婦人の熱心な信者がついて居て、三十年以上も、アッサグッタ尊者の須要物を供給し布施して居た。然るに其の雨期の末つかた、一日、彼女は長老の菴を訪づれ、師と共に誰か安居して居るものがありますかと訊ねた。而して那伽犀那と言ふものが安居して居るとの返事を聞き、彼女は明日の晝食に御二方でお出下さいと拜請した。すると尊者は言葉には出されなかつたが、承諾の意を身振りで表示された。斯くて翌日の午前に、尊者は自ら衣を著、鉢を手にし、那伽犀那を隨へて、(五五)優婆夷の住所に往き、設けの席に坐られた。そこで彼女は手から親ら給仕して、二比丘が取られるだけの、硬軟の食物を供養した。而してアッサグッタ尊者は、食事を了へ、其の手を鉢から退いて、那伽犀那に向ひ、「お前、此の優婆夷に謝辭を陳べよ」と云つて、其の座より立ち去られた。此に於いて此の優婆夷は、那伽犀那に向ひ、「友なる那伽犀那よ、妾は年老けて居ます。で、何うぞ極極有り難い謝辭を陳べて下さい」と言つた。すると那伽犀那は、唯單に普通一片の德義の意味を含める謝辭でなく、論部の甚深微妙なる部分から取つて、阿羅漢果に關する事柄の謝辭を述べたのであ

【五五】優婆夷（Upāsikā）は近事女・近信女・淸信女・近宿女・善宿女など譯す。要するに女性の信者のことである。

る。而して彼女は坐して其の謝辭を謹聽して居たが、其の心に清淨無垢なる法眼を開くことが能きた。加之、那伽犀那も亦た其の謝辭を述べ終るや否や、自ら述べた法力の感應する所により、智見を開發して「阿羅漢の位に進み入る聖流の最初の狀態たる」須陀洹果を獲得することが能きたのである。

時にアッサグッタ尊者は、其の園亭に坐して居られたが、「那伽犀那も優婆夷も」兩人ともに智見を開發したのを知り、「善い哉、善い哉、那伽犀那よ、汝は一本の箭で、二つの聖き獲物を射とめた」と叫ばれた。而して數千の天人等も亦た同時に、讚歎の音聲を揚げたのである。

それから那伽犀那比丘は、優婆夷の家を辭して、師の許に還り、アッサグッタ大德を禮拜して、恭しく一面に坐した。するとアッサグッタ尊者は那伽犀那に向ひ、「那伽犀那よ、最早、汝は（五六）華子城に往くがよい。而して彼處の無憂園の中に、（五七）護法尊者と云ふ御方が住んで御座る。で、汝はこれから、其の御方の許で佛敎を學ぶがよい」と言はれた。

那『御師よ、此處から華子城までの里程は、如何ほどで御座いませうか。』

師『一百（五八）由旬ある。』

那『御師樣、それは大層遠う御座います。途上の食物に困るでせう。如何して食物が得られませうか。』

【五六】華子城は、原名をパータリプットラと云ひ、現代印度のパトナ市のことである。

【五七】護法尊者（Dhammarakkhita）。

【五八】由旬（Yojana）は古代印度の里數の單位、一由旬は今の約十二哩に相當すと云ひ、或は八哩、又は九哩に相當すと云ふ。その何れが正しいか明かでない。

師『ただ眞直に往くがよい。汝は途上の食物に困ることはあるまい。黑粒を選り去つた御飯も、カレーや種種の肉汁も得ることが能きやう。』

此に於いて那伽犀那は、「かしこまりました」と言つて、師を禮拜し、右繞して、鉢を手にし衣を著けて、華子城に向つて出發した。

時に華子城の一商人が、五百輛の馬車を率ゐて、華子城への歸途に就いて居た。彼は遙に那伽犀那比丘の來れるを見て、馬車を留め、比丘を拜し、「長老さま、貴衲は何處へ御出あそばしますか」と訊ねた。

那『衲は華子城まで參ります。』

商『それは善い道連れで御座います。吾等も亦華子城まで參ります。貴衲は吾等と路連れになられて、一層御便宜でせうと思ひます。』

それから此の商人は、那伽犀那の態度が氣に入り、那伽犀那が要するだけの、硬軟の食物を供養し、手づから親ら給仕した。而して食事が濟んでから、彼自らは下の座を占め、恭しく一面に坐り、尊者に向つて、「長老よ、貴衲の御名前は何と申しますか」と問うた。

那『衲の名は那伽犀那と申します。』

商『貴衲は何か佛語を御存じですか。』

那『私は阿毘達磨卽ち論部を知つて居ます。』
商『長老よ、我等は洵に幸運です、また實に好い境遇です。私も亦た阿毘達磨卽ち論部の學者です。何うぞ私のために、何か阿毘達磨の一節を讀誦して下さい。』
此に於いて那伽犀那は、彼のために阿毘達磨の一節を說いた。而して那伽犀那の心には、(五九)集法と(六〇)滅法とを見破し得る、無垢清淨の法眼が開發した。

それから此の華子城の商人は、其荷馬車を前に進め、自らは其の後に隨いて旅したのである。而して華子城から程遠からぬ分れ道の所で、那伽犀那に向ひ、「此處は無憂園に行く曲がり角です。私は茲に八尺巾の稀有な毛織物を、十六尺有つて居ます。で、私は此を貴衲に差上げたう御座いますから、何うぞ此を御受納下さい」と言つた。そこで、那伽犀那が其を受納したら、商人は大いに喜び、滿足愉悅の心を以て、尊者を禮拜し、右繞して分れ去つた。

那伽犀那は無憂園なる護法尊者の許に著いた。而して彼は先づ尊者を拜して、其使命を語つた。其後、護法尊者が唯一度づつ、三藏經の文句を誦せらるれば、彼は一言一句の誤りもなく之を覺え、三ケ月の間に、悉く佛敎の三藏の文句を諳誦して了つた。而して後の三ケ月間には、三藏の眞精神を領得することが能きたのである。

【五九】集法（Samudaya-dhamma）。
【六〇】滅法（Nirodha-dhamma）。

然るに其の時、護法尊者は那伽犀那に向つて、「那伽犀那よ、恰も諸の牝牛は、牧牛者によつて馴されるが、而も彼等の產出物は他の人の享受する所となる如に、御身も亦た佛陀の御言葉たる、三藏の經典を御身の頭腦の中に攝持して居るが、而も汝はまだ、沙門果の享受者たることは能きないのである」と言はれた。

此に於いて那伽犀那は、「尊者よ、それは然うですが、それ以上は仰せ給ふな」と答へ、卽日卽夜、四無礙解を成じて、阿羅漢果に達したのである。而して那伽犀那が眞諦を證得するや否や、諸天は讚美稱歎し、大地は震動し、梵天は拍手し、天からは栴檀の粉抹と、曼陀羅の華とを雨降らした。

偖て其の頃ヒマラヤ山中のラッキタタラに於ける無數の阿羅漢達は、那伽犀那に會はんがため、彼の許に一人の使者を遣はされた。而して那伽犀那は使者の言葉を聞き、無憂園より雲隱れして、彼等阿羅漢達の前に現はれた。そこで彼等は那伽犀那に向つて、

『那伽犀那よ、彌蘭陀王は難かしい問題をもちかけ、又は議論をふきかけて、敎團の比丘等を惱殺するのを道樂にして居る。で、貴衲は彼處に行いて、王を說き伏せて下さいませんか』と云つた。

すると那伽犀那は、

『尊宿方よ、單に一彌蘭陀王のみならず、印度全國の諸王等をして、我に來り、發問對論せしめなさい。私は彼等の難問を駁破し、且つ辯明いたしませう。で、貴衲方は毫も畏怖する所なく、奢揭羅

城に御出なさい』と答へた。

＊　＊　＊　＊　＊

爾の時、アーユパーラ尊者は（六二）サンケーヤの菴に棲んで居られた。而して彌蘭陀王は其の廷臣等に向ひ、「ああ實に美しい快い夜だ。沙門・婆羅門何人でもよいが、誰か朕の訪問を容れて、朕と議論を上下し、朕の疑惑を芟除し得るものはあるまいか」と問はれた。

すると五百の希臘人等は、「陛下よ、三藏經、及び一切の聖教に精通せる御方で、アーユパーラ長老と云ふのが、サンケーヤの菴に住んで居られます。陛下は、彼處に御出になり、陛下の疑問を御提出あそばしたら宜しうございませう」と答へた。

此に於て王は、「よろしい。それでは早速、その長老の許に使を遣はして、朕が訪問する旨を通告させよ」と命せられた。

そこで宮廷の占星家が、アーユパーラ尊者の許に使者を遣はして、彌蘭陀王の訪問し給ふべき旨を申しいるれば、尊者は快く王の來訪を諾された。

かくて彌蘭陀王は、五百の廷臣を隨へ、宮廷の馬車に乗り、アーユパーラ尊者の住所なる、サンケーヤの菴を訪づれて、互に慇懃に初對面の挨拶を交換して、恭しく一面に坐し、徐ろに口を開いて曰はく、

【六二】サンケーヤ Saṅkheyya.

『アーユパーラ尊者よ、貴衲等教團の團員が、世を捨てて出家なさるのは何のためですか。また貴衲等の最高善とは何ですか。』

ア『王よ、我等が世を捨てて出家するのは、正義と寂靜との中に、安住せんがためであります。』

王『では、尊者よ、在俗の人の中にも、是の如き生活を營むものがありますか。』

ア『王よ、在俗の人の中にも、是の如き生活を營むものがあります。世尊がベナレスの鹿野苑に於いて、法輪を轉じ給うた時、一百八千萬の梵天と、其他無數の諸天等とは、眞諦を體得しましたが、彼等は皆悉く在俗の人人で、其うち一人も世を捨てた出家者は居ませんでした。而してまた世尊が(六二)大集經・(六三)大吉祥經・(六四)寂靜心經・(六五)說諭羅睺羅經を說き給うた時、眞諦を體得した諸天の數は、とても數へきれぬほどありましたが、彼等も亦た皆悉く在俗の人人で、其のうち一人も世を捨てて出家したものはありませんでした。』

王『では尊者よ、貴衲等の出家は全く無用無益ではありませんか。乃ち佛家の沙門等が、世を捨てて出家し、(六六)十三の誓行を修して、自ら禁制に服從するのは、一に宿世に於いて行へる罪業の果報でな

【六二】Mahāsamaya-sutta.
【六三】Mahāmaṅgala-sutta.
【六四】Samacittapariyāya-sutta.
【六五】Rāhulavāda-sutta.
【六六】誓行(Dhūta 又は Dhuta)は、頭陀・杜多又は洮汰など音譯し、修治・斗藪・抖擻・搖振・棄除などと漢譯してあるが、要するに僧侶の衣服・飮食・住處に關して、貪欲を去り修行を策進する十三の法を頭陀の行と云ふのである。

ければなりませぬ。また其の食事を了へるまで、一の座席から離れることの能きない比丘等は、恐らくは前生に於て、他人の食物を奪ひ取つた盜賊だつたのでせう。則ち一の座席に於てのみ食事せねばならぬ如な羽目に陷つたのは、彼等が〔前生で〕他の食物を奪ひ取つた罪業の報でせう。で、彼等には何等の戒もなく、何等の苦行もなく、何等の(九七)梵行もありますまい。また、尊者アーユパーラよ、雲天井の下に露臥する比丘等は、恐らくは是れ前生に於いて、村民を劫掠した盜賊だつたのでせう。乃ち彼等が今生に於いて、家を有つことを許されず、家庭のない生活をせねばならぬのは、〔前生に於いて〕他人の家庭を亡ぼした罪業の果報でせう。で、彼等には何等の戒もなく、何等の苦行もなく、何等の梵行もありますまい。また尊者アーユパーラよ、坐睡のみで横臥を許されない比丘等は、恐くは前生に於て、旅人を捕へ、彼等を縛して其處に坐せしめた、追ひ剝ぎ漢だつたに相違ありませぬ。で、彼等が寐るに寐臺を有たず、一生涯、坐睡するのは、彼の追ひ剝ぎ劫盜を働いた罪業の果報でせう。されば彼等には、何等の戒もなく、何等の苦行もなく、何等の梵行もありますまい。』

彌蘭陀王が、是の如く告げたのに、アーユパーラ尊者は、默して一語の返答も發せられなかつた。すると五百の希臘人等は、王に向つて、「大王よ、此の長老は博學な御方でございますが、頗る遠慮がちなのであります。長老が一言の應答もなさらないのは、全くこれがためでございます」と言つた。

【九七】梵行（Brahmacariya）。

然るに彌蘭陀王は、長老の沈默せるを見、手を拍つて、「弘い印度は全く空虚である。そは實に稃のやうなものである。印度には朕と議論を上下して、朕の疑問に解答し得る沙門・婆羅門は一人も居ない」と絶叫された。

されど彌蘭陀王は、左右を見廻はし、希臘人等が、如何にも無畏自若たる態度なるを見て、「多分、この他に、まだ自分と議論を上下し得る、博學な比丘が居るのだらう。然らざれば彼等が、斯くも自ら恃む所あるが如き、態度をなし得る筈はない」と思惟して、希臘人等に向ひ、「こらこら、まだ他に朕と議論を上下し、朕の疑問に解答し得る博學な比丘が居るのか」と問はれた。

偖て、其の時、那伽犀那尊者は、沙門の一隊を隨へて、村落・町及び市中を行乞して、奢揭羅城下に到著された。尊者は僧團の首長・弟子衆の一隊の頭梁・一宗の敎師であり、令名四方に聞え、民人尊崇の的となつて居られた。彼は博學・賢明・怜悧・聰慧であり、頗る智慮才幹に富み、雄辯宏辭・沈著にして勇氣あり、傳說に精通し、三藏に通達し、また吠陀の敎學に熟達した人であつた。師はまた精透なる知見を有し、傳燈の師主であり、奧妙の敎義を說明する無礙の見識を有つて居られた。また師は佛陀の(六八)九分敎を完全に心讀して、佛語の眞精神と文字とを巧みに辯別し、且つ「人の問に對して」立どころに卽答するの能力を有し、博言妙辭にして、「天下一人のよく」彼と齊しからんとするも能はず、彼に優らんと

【六八】九分敎とは、經・應頌・記說・諷誦・自說・如是語・本生・希法・獲明を云ふ。

するも能はず、彼の問に答へ、彼に反對し、彼を辯破することの能きるものはなかつた。尊者は沈著なること大海の深淵の如く、泰然たること須彌山王の如く、邪惡に勝ち、闇黑を驅逐して、光明を投げ、雄辯にして他宗教徒の惱殺者たり、外道の信者の摧破者であつた。また師は大いに（六九）四衆と王者と及び其の高官等との閒に推賞尊敬せられ、僧團の團員としての（七〇）須要品は、四方より山の如く布施せられ、且つ物質的の供養にも增して、精神的の尊崇を受けて居られた。若し他の師を訪ねて、法を聽かんとするものあれば、師は勝者卽ち佛陀の御言葉たる九分敎の寶を開示して、彼等に正義の道を誨し、彼等のために高く眞理の炬火をかかげ、彼等のために眞理の聖柱を建て、彼等のために眞理の犧牲を頌揚された。師はまた彼等のために法幢を建て、旌旗を振り、法螺を吹き、法鼓を打ち鳴らされた。而して師の獅子吼し給ふや、恰も雷音の如く、「人をして畏縮せしむる底の力があつたが、」而もそれと同時に親切にして、豐かに慈悲の雨を降らし、智慧の光を輝かし、涅槃の甘露水を注ぎ、以て渴せる世界を滿足せしめられた。

時に那伽犀那尊者は、數多の比丘等と共に、サンケーヤの菴に棲んで居られた。是の故に、

『博學にして宏辭、聰明にして熟練、妙辯にして多識、よく三藏に通じ、五部の聖敎、幷に四部の

【六九】四衆とは、男僧卽ち比丘と、女僧卽ち比丘尼と、男信者卽ち優婆塞と、女信者卽ち優婆夷とを云ふ。而して原典には、此等一一の名辭を列ねてあるが、今は煩を避けて四衆と譯して置く。

【七〇】飮食・衣服・醫藥・臥具これを僧侶の須要品と云ふ。

聖語に熟達せる比丘等は、那伽犀那を仰いで、其の首長指導者とせり。
那伽犀那は、甚深の智慧を有し、多智聰明にして、善く道の正邪を辯じ、自ら安穩無上の涅槃に達したりき。
師は、聰明にして眞理の支持者たる比丘等に圍遶せられて、町より町へ往き、「遂に」舍揭羅府に到り、今や、人人の中にありて、山中の獅子の如く、サンケーヤの森に棲めり。』

と言つてある。

而して(七一)提婆滿智耶は、彌蘭陀王に向ひ、「大王よ、暫し待ち給へ、暫し待ち給へ。那伽犀那と云ふ博學聰明にして才幹あり、沈著にして勇氣あり、宏辭にして傳說に精通し、法の精神と文字とを會得し、また「人の問ふあれば必らず」立どころに卽答し、諸の葛藤を截斷し、且つ十分に「敵者の」辯難を摧破し得る一長老が居ます。師は今、サンケーヤの菴に棲んで居られますから、陛下は彼處に詣りて、彼に其の疑問を提出あそばしませ。彼は必らず、陛下と議論を上下し、陛下の疑惑を一掃することが能きませう」と言つた。

時に彌蘭陀王は、不意に那伽犀那といふ名を聞き(七二)恐懼憂慮の情にうたれて、總身、寒毛卓立された。が、彼は提婆滿智耶に向ひ、「眞個に然うか」と問はれた。そこで提婆滿智耶は、「大王よ、那伽

【七一】Devamantiya.
【七二】蓋し、那伽犀那とは、龍(Nāga)+軍(Sena)と云ふ勇猛な意義ある名前であるからだらう。

犀那比丘は、(七三)帝釋天とでも、(七四)閻魔天とでも、(七五)ヴルナとでも、(七六)クヹーラとでも、(七七)プラジャーパティとでも、(七八)スヤーマとでも、若くは(七九)サンツシタ等の世界の守護神とでも、或は人類の造主たる(八〇)大梵天とすらも、議論を上下することが能きます。況んや單なる人閒とに於てをやです」と答へた。

此に於いて王は、提婆滿智耶に向ひ、「汝は其の那伽犀那和尙の許に使者を遣はして、朕が訪問の旨を傳へてくれまいか」と言はれた。で、提婆滿智耶は、直に使を遣はして、尊者の諾否を伺はせたら、尊者は來訪承諾の旨を返事された。斯くて王は五百の希臘人を隨へ、一人の大力なる供人と共に、王者の馬車に乘つて、那伽犀那の棲める、サンケーヤの菴に向はれたのである。

時に那伽犀那尊者は、僧團の無數の比丘等と共に、菴の前面の空處に坐つて居られた。彌蘭陀王は、遙に其群集を望見して、提婆滿智耶に向ひ、「彼の大勢の人人は誰の供人ですか」と問はれた。そこで提婆滿智耶は、「彼等はみな那伽犀那尊者の隨徒です」と答へた。

彌蘭陀王は、其光景を一瞥するや否や、恐懼憂慮の情にうたれて、寒毛卓立された。が、而も彼は、恰も犀に圍まれたる象の如く、(八一)迦樓羅に圍まれたる蛇の如く、(八二)王蛇に圍まれたる豺の如く、水牛に

【七三】帝釋天 (Indra)。
【七四】閻魔天 (Yama)。
【七五】Varuna.
【七六】Kuvera.
【七七】Prajāpati.
【七八】Suyama.
【七九】Santusita.
【八〇】Brahma.
【八一】迦樓羅 (Garuda) は、印度の神話にて蛇を食ふ鳥と稱せらる。

圍まれたる熊の如く、蛇に憑けられたる蛙の如く、豹に圍まれたる鹿の如く、蛇咒ひ人の手中にある蛇の如く、猫に飜弄せらるる鼠の如く、道士に咒はるる惡魔の如く、(八二)ラーフに捉へらるる月の如く、籠の中に生捕られたる蛇の如く、籠の中の鳥の如く、網の中の魚の如く、野獸に化かされて、密林の中に途を失へる人の如く、(八三)エーッサヴナに逆つて罪を犯せる夜叉の如く、命終の時に臨める天人の如く、困惱恐懼憂慮苦悶、交ゝ到るにも拘らず、尙且つ人前をつくろひ、屈辱をさけねばならぬと思ひ、勇氣を振り起して、提婆滿智耶に向ひ、「汝は何れが那伽犀那なるかを、朕に指示する必要はない。朕は汝の指助を受けずに彼を見分けやう」と言はれた。そこで提婆滿智耶は、「何うぞ然うあそばしませ」と答へた。

偖て教團の團員中、那伽犀那尊者よりも、(八四)法臘の上なる半數の比丘等は、尊者の前に坐り、法臘の下なる半數の比丘等は、尊者の後に坐つて居た。而して彌蘭陀王は、比丘等の群集せる、前列・中列及び後列を限なく見廻はして、那伽犀那尊者が、無畏沈毅なる獅子獸王の如く、毫も怖畏戰慄の狀なく、落ちつきはらつて、群僧の眞中に坐せるのを看出された。而して王は其風采を見るや否や、彼が卽ち那伽犀那尊者なることを知り、それを提婆滿智耶に指摘された。すると提婆滿智耶は、「然うです、大王よ、あれが那伽犀那尊者です。陛下は善くも聖者を御認知になりました」と言つた。

【八二】 Rahu.

【八三】 Vessavana は食人鬼卽ち夜叉の王である。

【八四】 法臘とは、出家して具足戒を受けた後の年數を云ふ。

此に於て王は、何人の指摘もうけずに、那伽犀那尊者を認知し得たことを喜ばれたが、尊者を一見するや否や、王は神經興奮して、恐懼戰慄の感を催された。是れ左の偈ある所以である。

『彌蘭陀王は、善行によりて賦せられ、最上の克己を調熟せる那伽犀那を見て、此の言を作せり。

「朕は多くの辯者を訪ひ、幾度か彼等と會話せり。而も未だ曾て一度も、今日、朕が心緒を威壓せるが如く、是の如き希有なる、怕しき恐懼を感得せることなし。

今や敗亡は朕が運命にして、勝利は那伽犀那のものならざる可らず。朕が心緒は、かくも亂れたれば」と。』

巻の第二　彌蘭陀王問品

第一章　法相問答

さて彌蘭陀王は、那伽犀那尊者の住所に詣き、懇切慇懃に挨拶して、恭しく（一）一面に坐せらるれば、那伽犀那尊者も、叮嚀に會釋應答された。そこで王も初めて安堵の思をなして、大いに喜ばれたのである。

斯くて王は（二）開口一番、『尊者よ、如何して貴衲は、世に知られ給ひますか。してまた尊者の（三）御名前は何と申しますか』と問うた。

〔此に於て那伽犀那は、〕『大王よ、衲は那伽犀那と云ふ名前で世に知られ、又衲の信仰上の雲兄水弟等も、衲を呼ぶに其の名を以てして居ます。然しながら大王よ、縱令、衲の兩親が、那伽犀那・首羅犀那・維羅犀那又は師波犀那等の名前を衲に命けては居ますが、そは單に世人が認むる一の名辭、即ち一の呼稱に過ぎないのです。（四）何せなれば永久不變の我なるものが、此の名前の中に含まれて居るのではないからであります。』と答へた。

【一】一面に坐すとは、賓主兩者の座席に一定の間隔あるを意味す。

【二】那先比丘經七百七十紙裏上段左より六行以下を參照。（卍藏第貳拾六套第九册）

【三】王は既に那伽犀那の名前を知つて居ながら、尙ほ且つ知らばくれて其の名を問ふ。蓋し甚深の意味あることを讀破せねばならぬ。禪家の問答にも、之に類する公案が澤山ある。

【四】尊者は、いま佛教の三原理の一なる「諸法無我」の教理を說かるるのである。

すると彌蘭陀王は、希臘人等及び其の側に居る證人に向ひ『那伽犀那は「其の名前の中に永久不變の我なるものが含まれて居るのではない」と云はれるが、〔我儕は〕いま彼の立言を承認することが能きるか、何うか。』と、耳語しつつ、更に那伽犀那に向つて、

『尊者よ、若し永久不變の我なるものがないとすれば、誰が貴衲の教團の團員に、法衣だの食物だの、宿房だの醫藥だのを布施するのですか。また人が布施を行ふ時、誰が施物を享受するのですか。誰が（五）正義の生活を營むのですか。誰が專ら沈思冥想に耽るのですか。誰が阿羅漢果たる涅槃、即ち最勝道の目的を達するのですか。誰が生物を殺すのですか。誰が他人の物を盜むのですか。誰が邪婬を行ずるのですか。誰が虚言を吐くのですか。誰が酒類を飲むのですか。現世に於てすら、苦果を招く、五惡の何れかを行ふものは誰ですか。若し、〔眞に〕無我ならば、德行もなく、不德行もなく、善惡の行爲者もなく、〔又〕その惹起者もなく、善惡行の結果もありますまい。尊者よ、此に貴衲を殺せる人ありと假定せんに、若し我儕が其場合、兇手はないと思はねばならぬならば、貴衲の教團には、眞の教師も先生も居ないこととなり、隨つて貴衲の教誡は空虚なものと成つて了ひます。貴衲は、教團に於ける貴衲の雲兄水弟等が、貴衲を呼ぶに「那伽犀那の名を以てする習だ」と仰つしやいました。然らば其那伽犀那なるものは、果して何者ですか、貴衲は頭髮を以て那伽犀那だとなさいますか。』

【五】 Kosilaṁ rakkhati 直譯すれば「戒を護持するものは誰ですか」となる。

尊『大王よ、衲は頭髪を那伽犀那だとは申しませぬ。』

王『然らば身體に生えてる毛が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ。』

王『では、爪・齒・皮膚・肉・筋・骨・髓・腎臟・心臟・肝臟・腹・脾・肺・大腸・下腸・胃・糞・膽汁・痰・膿汁・血液・汗・脂肪・涙・漿液・唾液・粘液・關節を滑かにする油・尿・腦、此等の何れかが那伽犀那ですか、或は此等の一切が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、大王よ、然うでもありませぬ。』

王『では（六）形體が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、大王よ。』

王『然らば（七）感覺が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、大王よ。』

王『では（八）想念が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、大王よ。』

王『然らば（九）性格構成の要素が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、大王よ。』

【六】Rūpa 漢譯には、色といふ。

【七】Vedanā 漢譯には、受といふ。

【八】Saññā 漢譯には、想といふ。

【九】Saṅkhāra 漢譯には、行といふ。

王『では意識が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、さうでもありませぬ。』

王『然らば此等の諸要素卽ち形體・感覺・想念・性格構成の要素及び意識の結合が那伽犀那ですか。』

尊『いいえ、大王よ。』

王『それでは〔此等の五要素卽ち〕形體・感覺・想念・性格構成の要素及び意識の外に、那伽犀那となすべき何者かがあるのですか。』

尊『いいえ、大王よ。』

王『然らば私は那伽犀那なるものを認ることは能きませぬ。那伽犀那とは單に空虛な音聲に過ぎないこととなります。が、いま我儕が、我儕の面前に見て居る那伽犀那は、果して何者ですか。尊者の御言葉は虛僞であり、不眞實であると云つていいでせうか。』

那伽犀那尊者は、此に於て彌蘭陀王に告げて言はく、

『大王よ、陛下は門地が高いから華奢に育つて居らつしやる。若し陛下が此の乾き切つた日に、熱い礫だらけの地を踏み、徒歩で此處に御出でしたら、陛下は、〔屹度〕御足を損はれたでせう。然して陛下の肉體は苦痛を感じ、心は惱亂せられて、肉體的苦痛なるものの意味を體驗し給うたでせう。が、いま陛下は如何して此處に御出になりましたか。車でですか、徒歩でですか。』

王『尊者よ、私は徒歩でなく、馬車で參りました。』
尊『大王よ、若し陛下が馬車で御出になりましたなら、其の馬車とは、如何なものであるかを、衲に聞かして下さい。彼の棒の部分を指して車と云ふのですか。』
王『いいえ、然うではありませぬ。』
尊『では軸の部分を車と云ふのですか。』
王『いいえ、決して然うでもありませぬ。』
尊『では輪が車ですか。』
王『いいえ、尊者よ。』
尊『然らば骨組が車ですか。』
王『いいえ、尊者よ。』
尊『では綱が車ですか。』
王『いいえ、尊者よ。』
尊『然らば軛が車ですか。』
王『いいえ、尊者よ。』
尊『では車輪の輻が車ですか。』

王『いいえ、尊者よ。』

尊『然らば刺棍が車ですか。』

王『いいえ、さうでもありませぬ。』

尊『では大王よ、此等の輪・骨組・綱・軛・輻・刺棍の結合を車と云ふのですか。』

王『いいえ、尊者よ。』

尊『然らば大王よ、此等の輪・骨組・綱・軛・輻・刺棍の外に、車と稱すべき何ものかがあるのですか。』

王『いいえ、尊者よ。』

尊『然らば衲は車なる物を見出せませぬ、車とは單に空虛な音聲に過ぎないと申して可いでせう。さすれば大王が乘つて御出になつた車なるものは、一體何物ですか。陛下の御言葉は虛僞であり又不眞實ではありませんか。何せなれば車と云はるべきものは何にもないからです。陛下は印度全土を統治する大王でいらせられる。斯くも尊き御身分でいらせられながら、虛妄を吐かれたと言はれては、怖しくはありませんか。』

　それから那伽犀那は希臘人及びその側に居た者に向ひ『彌蘭陀王は、車で此處に來たと仰つしやつた。されど王は「車とは何ですか」と問はれて、自ら斷言したことの說明が能きなかつた。然るを此の場合、彼に隨喜することが能きやうか』と言つた。

五百人の希臘人等は、那伽犀那の言を聴いて、拍手喝采し、王に向ひ『陛下よ、若し陛下が能くし給ふならば、何うぞ此の〔難關〕を切り抜け遊ばしませ』と言つた。

此に於て彌蘭陀王は、那伽犀那に答へて曰く、

王『尊者よ、私は決して虚妄はつきませぬ。軸だの棒だの、輪だの骨組だの、綱だの軛だの、輻だの刺棍だの、此等一切のものがあるから、世人が一般に認むる名辭、卽ち車と云ふ呼稱をつけたのです。』

尊『然うです、陛下は車の意味を、善くお摑みになりました。今それ陛下が、納にお問ひ遊ばした事件も亦この車の場合と同じで、人體の中に於ける三十二種の有機的物質と、五の構成的要素とを以て成り立て居るから、私は那伽犀那と云ふ呼稱で、世に認められて居るのであります。蓋し大王よ、そは婆地羅比丘尼が世尊の御前で、

「種種なる支體の共在によりて、車てふ語の用ひらるるが如く、構成的諸要素の共在によりて、我曹は生類てふものを認むるなり。」と道破して居るからであります。』

王『奇なるかな、那伽犀那尊者よ。妙なるかな、那伽犀那尊者よ。いとも難しい問題を提げて、貴納を煩はしましたら、貴納は實に善く解答されました。若し佛陀が此處に在し給はば、必らずや貴納の答話を印可し、稱讚あそばすでせう。善く御解答なさいました、那伽犀那尊者よ。實に善く御解答なさいました。』

＊　＊　＊　＊　＊

王『貴衲は世壽お幾つですか、那伽犀那尊者よ。』

尊『陛下よ、衲は七つでございます。』

王『然し何う言ふ理由で、貴衲は七つになると、仰つしやることが能きますか。その七つなるものは貴衲ですか、又は七つなるものは數ですか。』

さて其瞬間に、諸ろの高貴の裝飾を施せる、華美なる王の姿が、其影を大地に投げて、更に盥の中の水に映つた。此の時、那伽犀那は王に問うて曰く、

『大王よ、いま陛下の姿が大地の影を投げ、又水に映りました。さすれば陛下が王様ですか、反影が王様ですか、いかがです。』

王『尊者よ、私が王です。而して影は私が居るから在るのです。』

尊『大王よ、丁度その如く、年の數が七つです。私は七つではありませぬ。然し、大王よ、衲が居るから、七つと云ふ數が在るのです。丁度、影が陛下のであると同じ意味で、その數は私のです。』

王『奇なる哉、那伽犀那尊者よ。妙なるかな、那伽犀那尊者よ。いとも難しい問題でしたが、善くも貴衲は御解答なさいました。』

＊　＊　＊　＊　＊

王『尊者よ、貴衲は尚も私と議論なさいますか。』

尊『陛下よ〔一〇〕若し陛下が學者的態度を持せられるなら、議論しても宜しいですが、王者的態度を持せられるなら、議論は眞平御免蒙ります。』

〔一〇〕那先比丘經七百七十紙裏・下段左より三行以下參照。(卍藏第貳拾六套第九册)

王『では、學者的の議論とは、如何なのですか。』

尊『學者は互に一つ一つの事件を捕へて議論し、議論が終結して明解せられ、〔兩者の内の〕孰れかの誤謬が判明すれば、彼は直に其の過誤を承認する。而して一方が上がれば他方は下がる、然かも彼等は決して怒りませぬ。大王よ、是の如きは、是れ學者の議論であります。』

王『では、王者的の議論とは、如何なのですか。』

尊『陛下よ、王者は或る問題を論議するに當り、自ら其の意見を開陳して、若し彼の意見に反對するものがあれば、王者は「あの奴を斯く斯く然か然かの刑に處せよ」と言つて、直に反對者を罰しやうとする、これ則ち王者的の議論であります。』

王『よろしい。では、私は王者的の議論でなく、學者的の議論をいたしませう。尊者よ、貴衲は貴衲の雲兄水弟又は雛僧或は世俗の弟子、若くは從僕と語るやうな積りで、遠慮なくお話し下さい。』

尊『かしこまりました。』

王『尊者よ、私は貴衲に一つ問ひたいことがあります。』

尊『陛下、何うぞお問ひなさい。』

王『尊者よ、(二)私は〔既に〕問ひました。』

尊『衲は已に答へました。』

王『貴衲は何とお答へになりましたか。』

尊『では、陛下は如何なことに、說き及ぼしましたか。』

此に於て彌蘭陀王は「此の僧は大學者である。彼は自分と十分論議することが能きる。自分は彼に問ひたいことが澤山あるが、都ての問題を尋ねきらないうちに日が暮れるだらう。だから寧ろ明日宮廷で論議する方がよからう」と思つた。

で、王は提婆滿智耶に向ひ、「其方から那伽犀那尊者に、王との議論は、明日宮廷で再開したいと御相談しておいで」と云ひ、那伽犀那の菴を辭し、馬に騎つて、「那伽犀那、那伽犀那」と獨語しつつ、もと來た路を還られた。

それから提婆滿智耶が、那伽犀那尊者に、王の言葉を傳へたら、尊者は快く承諾された。

で、提婆滿智耶と阿難多迦耶と滿狗羅と薩婆陳那〔の四人〕は、翌朝早く彌蘭陀王に伺候して、「陛下よ、那伽犀那尊者は、本日お出を願ふのでございますか。」と言つた。

王『然うだとも、是非お出を願ふのだ。』

【二】那先比丘經七百七十一紙表上段右より六行以下參照。(卍藏第貳拾六套第九册)

提『雲水は（二）幾人だけお伴れを願ひませうか。』

王『幾人でも宜しい。そは尊者におまかせするが可い。』

此時、薩婆陳那が『では、十人だけお伴れを願つたら可いでせう』と云へば、王は前言を繰り返しつつ、『準備は皆よく整へて居る。だから尊者の思召にまかせて、幾人でも伴れて來ていただけと云ふのに、薩婆陳那は、「十人だけお伴れを願ひませう」と云ふ。彼は、朕がそれ程多勢の僧に、供養する準備が能きまいとでも思つて居るのか。』と言はれた。

すると、薩婆陳那は恐縮した。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

それから提婆滿智耶・阿難多迦耶及び滿狗羅は、那伽犀那尊者の許に往き、王の言葉を傳へた。すると尊者は直に自ら午前の法衣を著け、手に應量器を持つて、總勢の雲水と共に奢掲羅城に向はれた。そして阿難多迦耶は、那伽犀那尊者の側に侍して歩きながら、

『尊者よ、（三）私が那伽犀那と呼びかけます時、其の那伽犀那は何者ですか。』

尊『汝は那伽犀那は、何者だと思ふかね。』

阿『心靈、卽ち入つたり出たりする內的の呼吸、それが那伽犀那だと思ひます。』

【二】那先比丘經七百七十一紙表上段左より六行以下を參照せよ。

【三】那先比丘經七百七十紙表下段右より三行以下を參照せよ。

尊『然しながら若し出た息氣が這入らなくなり、這入つた息氣が出なくなつても、人間は生きて居れるだらうか。』

阿『勿論生きて居れませぬ、尊者よ。』

尊『それでは、彼の喇叭手が喇叭を吹けば、彼等が吹き出した息氣は、元の通り、彼等に還つて來るのかね。』

阿『いいえ、尊者よ、それは決して還つて參りませぬ。』

尊『では、彼の吹笛者が笛又は號角を吹けば、彼等の息氣は、復た彼等に戻つて來るのかね。』

阿『いいえ、尊者よ。』

尊『それでは、何故に彼等は死なぬだらうか。』

阿『私は、とても是の如き、辯論家と議論することは能きませぬ。尊者よ、何うぞ、そは如何いふ理由ですか教へて下さい。』

尊『呼吸の中に心靈があるのではない。出息入息は、單に身體を構成する、要素的勢力に過ぎないものである。』

それから尊者は、阿難多迦耶をして、教團支持者の一人たることを自認せしめ得るだけの理論を、論藏から引き出して、話して聞かせられた。

＊　＊　＊　＊　＊

（一四）斯くて那伽犀那尊者は王の所に往き、設けの席につかれた。すると王は、尊者及び多くの雲水衆が喰べられるだけの硬軟の食物を供養し、又尊者には一揃ひの三衣を、雲水衆には各一領の袈裟を呈せられた。それから王は尊者に向ひ、「貴衲は何うぞ、十名だけの雲水衆と共に此席に御留りを願ひ、他は皆お還へし下さい」と言つた。

而して王は、尊者が食事を濟まされるのを見計らつて、下座にくだり、尊者の側に坐つて、彼に告げて言ふやう、

王『我儕は何を議論しませうか。』

尊『我儕は眞の道に達せなければなりませぬ。だから、我儕は眞の道に就て議論しませう。』

王『（一五）貴衲等の出家の目的は何ですか。又貴衲等の標的たる最上善とは如何なるものですか。』

尊『何ですと、〔出家の目的ですか、〕我儕の出家の目的は、世の苦痛を絶滅し、且更に苦惱の起らないやうにするためです。して又、我儕の最上善とは、娑婆世界に執著せず、完全なる解脱を得ることであります。』

王『尊者よ、では敎團の團員は、皆是の如く高尚な理由のために、敎團に入つたのですか。』

【一四】那先比丘經七百七十一紙表下段左より八行以下を參照せよ。

【一五】那先比丘經七百七十一紙裏上段右より初行以下を參照せよ。

尊『陛下よ、然うばかりとは言へませぬ。或る者は〔勿論〕此の高尚な理由のために出家したのです。が、或は治者たる諸王の暴政を畏れ、それに堪へ兼ねて世を捨て、或は掠奪を怖れて教團の人となり、或は負債に惱み、或は糊口のために出家したものもありませう。』

王『では尊者は如何な目的で、教團にお這入りになりましたか。』

尊『衲は幼少の時教團に這入りましたから、其の終局の目的は知りませんでした。が、佛教の沙門等は皆聰明な學者ばかりですから、衲に教へて呉れるだらうと思ひました。而して衲は彼等から教はり、今や出家の理由も利益も善く知り、且つ會得して居ます。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(一六) 王問うて曰はく、

『尊者よ、何人でも、死後復た生れ返りますか。』

尊『或者は生れ返りますが、或者は生れ返りませぬ。』

王『それは何う云ふ人人ですか。』

尊『罪障あるものは生れ返り、罪障なく淸淨なるものは生れ返りませぬ。』

王『尊者は生れ返りなさいますか。』

【一六】那先比丘經七百七十一紙裏上段右より九行以下を參照せよ。

尊『若し衲が死する時、衲の心の中に、生に執著して死すれば、生れ返りませうが、然らざれば生れ返りませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『尊者よ、再生を脱るるものは、それを遁れんとする（一七）作意作用によるのですか。』

尊『陛下よ、作意と智慧と、及び他の諸の善事によるのです。』

王『然し（一八）作意と智慧とは殆んど同じことではありませんか。』

尊『いいえ、異ひますとも。作意は一〔の心的作用〕で、智慧は他〔の心的作用〕です。作意は、羊にも、山羊にも、牡牛にも、水牛にも、駱駝にも、驢馬にもありますが、智慧は彼等にはありませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

【一七】作意とは、心を警覺せしめ、心を引て、其境卽ち對象に趣かしむる心的作用と、又曾て經驗せる境を憶持するの心的作用とにて、或は憶念とも譯す。

【一八】那先比丘經七百七十一紙裏上段十二行以下參照。

『作意の特徴は何でありますか、また智慧のそれは何でありますか。』

尊『作意の特徴は理解することであり、智慧のそれは截斷することです。』

王『では如何して理解は作意の特徴であり、截斷は智慧の特徴ですか、例を以て御示し下さい。』

尊『陛下は麥刈人を御承知ですか。』

王『存じて居ますとも。』

尊『彼等は如何して麥を刈りますか。』

王『彼等は左の手に一束の麥を握り、右の手に鎌を持つて麥を刈るのです。』

尊『陛下よ、觀行の士も丁度是の如く、其の作意を以て心〔の猿〕を捉へ、智慧を以て其の瑕玼を截斷するのです。これ理解が作意の特徴たり、截斷が智慧の特徴たる所以であります。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

〔一九〕王問うて曰はく、

『貴納は「他の諸ろの善事によりて」と言はれましたが、其の事にお說き及びになりましたか。』

尊『陛下よ、「善事とは」〔二〇〕持戒と信心と精進と念と定とであります。』

【一九】那先比丘經七百七十一紙裏上段左より四行以下參照。

【二〇】漢譯には「誠信・孝順・精進・念善・一心・智慧これを善事となす」とある。

王『持戒の特徴は何ですか。』

尊『其の特徴は一切の善事の根基たることであります。五の根力即ち信・進・念・定・慧と、阿羅漢たる七種の條件即ち念・擇・進・喜・輕安・定・捨と、道と、念の齊整と、四正勤と、四念處と、四神足と、四禪と、八等至と、四三昧と、八想定とは、持戒を其の根基とするのであります。

陛下よ、確乎たる根柢の上に立たんとするものには、此等の諸善の條件を備へなくてはならぬのであります。』

王『例を擧げてお示し下さい。』

尊『陛下よ、都ての動植物が發生し成長し成熟するには、大地を其の據り所とするが如く、五力等〔の諸善〕を行ひ、發展を期する觀行の士は、徳の根柢として戒を持ちます。』

王『更に例を擧げてお示し下さい。』

尊『陛下よ、身體の努力を要する都ての職業は、畢竟するに大地を據り所とするが如く、五力等〔の諸善〕の發展を期する觀行の士は、徳の根柢として戒を持ちます。』

王『もつと、いい例を擧げて御說明下さい。』

尊『陛下よ、人が城郭を建立せんとするに當り、其設計者は先づ基址を開拓し、樹の株だの、刺だらけの叢だのを取り除けて、地を平かにし、市街だの、四ツ角だの、十字街だの、市場などを目論で

から、城郭を建つるが如く、五力等〔の諸善〕の發展を期する觀行の士は、德の基礎として戒を持つのであります。』

王『いま一つ、例を擧げて御示し下さいませんか。』

尊『陛下よ、彼綱渡りをなす輕業師が、其妙技を演ぜんとするや、先づ地面を掘りかへし、砂石だの、陶器の破片だのを取り除けて、其地を滑かにし、軟かな地面の上で手妻を行ふが如く、五力等の發展を期する觀行の士は、德の基礎として戒を持ちます。ですから、世尊は左の偈を說き給ひました。』

「人は戒に住立して、心と智とを修練することを得。勇猛精進の比丘は、是の如くにして〔迷を除き人生の〕纏縛を解くべし。

戒蘊卽ち最勝の波羅提木叉たる此の依處こそは、有情にとりて大地の如きものなれ。これ善業增長の根本にして、また實に一切勝者の敎の入門なり。」

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『那伽犀那尊者よ、信の特徵は何でありますか。』

尊『陛下よ、そは寂靜と欣求とであります。』

王『然らば寂靜は如何して信の特徵でありますか。』
尊『陛下よ、心の中に信が起れば、そは貪瞋痴慢疑の五種の煩惱を摧破します。而して心の惱煩を遠離して清澄寂靜になり、擾亂しなくなります。』
王『例を擧げて御示し下さい。』
尊『陛下よ、(三)國君が(三)四軍を率ゐて進軍の途上小河を渡りました。而して其時、象や騎兵が河水を攪き濁しましたから、馬車や弓兵等は、濁水の爲に汚れ穢され泥だらけになりました。然して主君は彼岸に渡つて其從者に向ひ「こら、朕は清澄な水を飲みたいから水を持つて來い」と命ぜられた。さて其國君は、水を澄ます寶珠を所持つて居られたと假定せんに、從者等は王命に隨ひ主君の要求を充さんとて、其寶珠を水中に投入しました。すると、泥土は直に沈澱し、貝殼まじりの小砂や、水草の小片なども見えなくなり、水は清淨透明になつたので、王の飲料に供することが能きました。
陛下よ、水は心、侍從の者は觀行の士、泥土や、砂だらけの塵や、水草の小片は煩惱で、水を淨化する寶珠は信であります。』
王『欣求は如何して信の特徵ですか。』
尊『觀行の士は他の人が如何して心の無礙自由を得たかを見れば、自ら踊躍して(三)最勝道の初地二地三地の果或は阿羅漢果を得んと欣求します。

【三】那先比丘經七七一紙裏下段三行以下を參照せよ。
【三】四軍とは、象兵・馬兵・車兵・歩兵を云ふ。
【三】最勝道の初地二地三地の

而して彼自ら未だ達せざる所に達せんとし、未だ知らざるものを經驗せんとし、或は未だ實現せざる所を實現せんと欣求して專心に工夫します。此故に欣求は信の特徴であります。』

王『例を擧げて御說明下さい。』

尊『陛下よ、(二四)譬へば或る山の上に大降雨があつたと假定せんに、雨水は高い所から流れ落ちて、先づ丘上の罅隙や、空所や、溝などを滿たし、それから溪流に注ぐでせう。而して其の爲に河水は氾濫して、奔流となるでせう。さて其時、一群の人が來つたと假定せんに、彼等は河の廣さも水の深さも知らないものですから、徒らに畏怖し躊躇して水際に立つて居ました。然るに又他の一人が其處に通りかかつたと假定せんに、彼は自己の體力も能力も善く知つて居るものですから、確乎と用意し、一氣に濁流に飛び込んで、彼岸に上陸することが能きました。かくて群集も亦た、彼が彼岸に安著せるを見、彼を眞似て〔一氣に飛び込んで〕、其の河を渡るでせう。〔上求菩提の〕觀行の士が高いものを見て、それに跳びかかり、〔一念の〕信によりて向上せんと欣求するのも、亦た彼の河を渡れる人のやうなものです。ですから、陛下よ、世尊は雜阿含經の中に、偈を以てお說き遊ばしました。』

「(二五)人は信心によりて〔人生の〕暴流を渡り、精勤によりて人生の〔苦〕海を越え、精進によりて一

結果とは、出家卽ち沙門の精神的向上の道程に四階級ある中の初の三階級たる預流果と一來果と不還果とである。

【二四】那先比丘經七七一紙裏下段右より十一行以下を參照せよ。

【二五】此の偈は諸經要集（スッタニパータ）一〇の四にも出づ。

切の苦惱を鎭め、智慧によりて純淨となる。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

（二六）王問うて曰はく、

『尊者よ、精進の特徴は何ですか。』

尊『陛下よ、精進の特徴は支持者たることです。諸の善事は、〔精進によりて〕支持せられるから、破綻しないのです。』

【二六】那先比丘經七七二紙表左より六行以下を參照せよ。

王『例を擧げて御說明下さい。』

尊『若し家が傾けば、人は他の棒を以て、其支柱としますから、家はそれに支へられて、破壞しないですむでせう。陛下よ、精進の特徴は、〔人を〕支持すること、恰も支柱のやうなものであります。諸の善事はこれに支へられるから、破綻を來さないのです。』

王『更に例を擧げてお示し下さい。』

尊『陛下よ、小軍が大軍から攻擊せらるる時は、小軍の王は能るだけ聯結を固くし、更に援軍を增遣すれば、却て大敵を破ることの能きるやうに、精進は其の特徴として、〔他の諸善を〕支持するから、一切の善事は破綻しないのです。故に世尊は、

「おお比丘衆よ、精進の聖弟子は、惡を斥けて善を長養し、邪を棄てて正を增長す。斯くて彼は自らを清淨にするなり。」

と敎へ給ひました。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(二七)王問うて曰はく、

『尊者よ、念の特徴は何ですか。』

尊『陛下よ、「念の特徴は」追憶することと、保持することとであります。』

王『然らば、追憶は如何して念の特徴となりますか。』

尊『陛下よ、人の心に念が起れば、彼は「これ四種の念處である。これ四種の正勤である。これ四種の如意足である。これ「道德上の」五根である。これ五種の心的勢力である。これ阿羅漢道の七覺支である。これ八種の聖道である。これ寂靜であり、智見であり、智慧であり、解脱である。」と獨語しつつ、善惡・正邪・輕重・明暗等、及びこれに類するものを追憶するのです。斯くて觀行の士は好ましき諸德を追求し、好ましからざるものを斥け、行ふべきことを長養し、行ふ可らざることを排斥する。これ追憶が念の特徴たる理由であります。』

【二七】那先比丘經七七二紙表上段右より二行以下參照。

王『例を擧げて御說明を願ひます。』

尊『そは一國の大王の守藏者が、「陛下の戰鬪用の象は是れだけあり、陛下の騎兵は是れだけあり、陛下の車兵はこれこれ、陛下の步兵はこれこれ、金高はこれこれ、黃金其の他の財寶はこれこれありますから、陛下は善く御記憶遊ばせ」と言つて、其の主君の光榮を敎へ誨すやうなものであります。』

王『然らば保持することは、如何して念の特徵でありますか。』

尊『陛下よ、人の心の中に念が起れば、彼は獨り、「これこれは善事であるが、これこれは惡である。これこれは要用の事であるが、これこれは不用なものである」と云ひつつ、善事と惡事との範疇を探索いたします。斯くして、觀行の士は惡を斥け善を保持する。これ保持することが、念の特徵たる理由であります。』

王『例を擧げてお示し下さい。』

尊『そは國君の親任せらるる顧問が、「此等の事は王樣にとりて惡く、此等の事は善い。又此等の事は有要で、此等の事は不用である。」と言つて、王に善惡を敎ふれば、王は漸次に惡を息めて善を保持するやうになります。念も亦た是の如く、保持することを以て、其の特徵とするのです。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

（二八）王問うて曰はく、

『尊者よ、定の特徴は何ですか。』

尊『陛下よ、〔定は〕嚮導者であります。一切の善事は定を其首領として、彼に隨ひ、彼によりて導びかれます。而して諸の善事は定の山腹に於ける多くの阪をなすのであります。』

王『例を擧げて御説明を願ひます。』

尊『陛下よ、家の屋根の桷は皆屋根の頂上に向つて傾斜をなし、皆頂上の一點に集まり、而して頂上は都ての桷の頂邊と認められます。定の習慣と他の諸善事との關係も亦是の如くであります。』

王『いま一つ例を擧げて説明して下さい。』

尊『陛下よ、それは四軍を率ゐて、戰場に赴く國王の如なものであります。卽ち全軍の象兵・騎兵・車兵・歩兵は、彼を首將として、彼に隨ひ、彼に導びかれる。而して彼等は、山にすれば、多くの阪路で、王はその頂上です。だから彼等は彼の周圍に整列します。此故に世尊は「比丘衆よ、汝等自ら定の習慣を養へ。定を修習し確立するものは、事物の眞相を知ることを得」と敎へ給ひました。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

【二八】那先比丘經七七二紙表下段左より九行以下を參照せよ。

【二九】那先比丘經七七二紙表下段左より二行以下を參照せよ。

(二九)王問うて曰はく、
『尊者よ、智慧の特徴は何ですか。』
尊『陛下よ、衲は既に智慧の特徴は「截斷する」にあることを陛下に話しました。が「照破すること」も亦智慧の特徴であります。』
王『然らば、照破は如何いふ理由で、智慧の特徴ですか。』
尊『陛下よ、心の中に智慧が起れば、無明の闇黑を追ひ拂つて、智識の光を生起せしめ、睿智の光明を輝かしめ、而して聖諦を明白ならしめます。斯くて專心に精進する觀行の士は、明かなる智慧を以て〔萬物の〕無常なることと、〔生物の〕苦惱あることと、個人的の我の存在しないことと〔の道理〕を覺ります。』
王『實例を擧げてお示し下さい。』
尊『陛下よ、智慧は人が闇黑の家の内に、他を導びくランプの如なものです。家の内にランプを持つて行けば、闇黑は追ひ拂はれて、直に明るくなり、其處にある事物がハツキリと見えます。人の智慧も亦只今說明しましたやうに、斯の如き効能があります。』
王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

（三〇）王問うて曰はく、

『尊者よ、是の如き種種の善法は同一の結果をもたらしますか。』

尊『然うです、陛下よ、彼等は煩惱を絶滅する點に於いて、同一の結果をもたらします。』

王『それは如何いふ理由ですか、實例を擧げてお示し下さい。』

尊『彼等は軍隊の諸分科卽ち象兵・騎兵・車兵・歩兵等のやうなものです。此等諸兵は要するに敵軍に打ち勝つて捷利を得るのが〔唯〕一の目的でせう。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

【三〇】那先比丘經七七二紙裏上段右より三行以下を參照せよ。

第二章　法相問答

(一)王問うて曰はく、
『尊者よ、(二)生れたものは何日までも同じでせうか。それとも異つたものになるでせうか。』
尊『〔全然〕同じものでもなければ、〔又全然〕異つたものにもなりませぬ。』
王『實例を擧げてお示し下さい。』
尊『陛下よ、陛下は曾て赤ん坊であり、纖弱いものであり、搖籃の中に臥て居られた幼兒だつたでせう。が、其の時の陛下と、いま成人なすつた陛下と同じですか。』
王『小兒の時と、今の私とは異ひます。』
尊『若し陛下が其小兒でなかつたならば、陛下には母もなければ父もなく、亦先生もないことになります。又陛下は學問や禮儀作法も教はらなければ、智慧も啓發されなかつたでせう。陛下よ、第一期に於ける胎兒の母と、第二期第三期第四期に於ける胎兒の母とは異つて居ますか、如何ですか。赤ん坊の母と、成人したものの母とは異ひますか、學校時代の少年の母と、學校卒業後の同人の母とは異ひますか。同じ人が罪を犯した時と、手や足を切られて、刑に處せられた時とは異ひますか。』

【一】那先比丘經七七二紙裏上段右より九行以下を參照せよ。
【二】那先比丘經には、人心は善惡の道に趣き身を持續す。故神の行いて生ずるか、更に他神を貿へ行いて生ずるか云云とある。

王『いいえ、異ひませぬ。が、貴衲は此を何う御說明になりますか。』

尊『纖弱い赤ん坊であり、搖籃の中に臥て居た時の衲も、成人した今の衲も、同じ衲だと言はねばなりませぬ。何せなれば〔今日まで經過した〕都ての狀態は、赤ん坊であつた時の、衲の中に含まれて居るからであります。』

王『實例を以て御說明下さい。』

尊『陛下よ、若し人が一のランプに火をつくれば、其のランプは終夜燃ゆるでせうか。』

王『然うです、それは燃えませうとも。』

尊『では、其の夜の第一更に燃ゆる焰と、第二更のそれとは同じですか。』

王『いいえ、それは異ひます。』

尊『では、第二更に燃ゆる焰と、第三更のそれとは同じですか。』

王『いいえ、異ひます。』

尊『では、第一更に燃えたランプと、第二更第三更第四更に燃えたランプとは、各異ふのですか。』

王『いいえ、光は終夜、同じランプから發するのです。』

尊『陛下よ、人や物の存續する狀態も丁度その通りで、一の狀態が顯はるれば、他の狀態は〔過去へ〕落謝します。で、新陳代謝は殆んど同時です。是の如く人は同じでもなければ、異ひもしないものと

して、自家意識の最後の狀態まで續くのです。』

王『いま一つ外の實例を以てお示し下さい。』

尊『そは牛乳のやうなものです。牛乳は牝牛から搾り取られてから暫く經つと、先づ變じて凝乳となり、次に凝乳から牛酪となり、牛酪から醍醐味となります。今それ牛乳は、凝乳又は牛酪、或は醍醐味と同一物だと云つて可いでせうか。』

王『それは可けませぬ。が、然し、凝乳等は牛乳から出來たものです。』

尊『陛下よ、人や物の存續する狀態も丁度その通りで、一の狀態が現るれば、他の狀態は〔過去へ〕落謝します。で、新陳代謝は殆んど同時です。是の如く、人は同じでもなければ、異ひもしないものとして、自家意識の最後の狀態まで續くのであります。』

王『いかにも…………………尊者よ。』

*　*　*　*　*

(三) 王問うて曰はく、

『尊者よ、再生しない人は、其の事を覺知して居ませうか。』

尊『覺知して居ますとも。』

王『でも、何うして彼は其の事を知り得ませうか。』

【三】 那先比丘經七七二紙裏、下段、右より十行以下を參照せよ。

尊『再生の近因も悉く絶滅するからです。』

王『實例を擧げてお示し下さい。』

尊『陛下よ、若し一人の農夫が耕し蒔いて、〔獲た穀物を以て〕其倉庫を滿たし、それから或る時期の間、耕しもせず蒔きもしないで、唯初め倉庫に蓄へて置いた穀物で生活し、或はそれを他の物品と交換し、又は彼が必要と思つた丈のもので暮したら、此農夫は、其倉庫の〔何日までも〕、充滿して居ないことを覺知するでせうか。』

王『然うです、彼はそれを覺知して居なければなりませぬ。』

尊『でも、如何して知るでせうか。』

王『彼は其の倉庫を滿たすことの、近因も遠因も無くなつたことを知るからです。』

尊『陛下よ、陛下がお訊ねの人間も丁度その通りです。彼は再生を招く一切の原因を絶滅して居ますから、それに對する責任を遁れたことを自識して居るのです。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(四)王問うて曰はく、

『尊者よ、(五)智あるものには、領解も亦あるでせうか。』

【四】那先比丘經七七二紙裏、下段、左より三行以下を參照

尊『然うです、陛下よ。』
王『では、此の兩者は同一ですか。』
尊『然うです。』
王『さすれば人は智——その貴衲が領解と同じだと仰つしやる——が有つても、尙ほ且つ心に惑ふことがあるでせうか、それとも無いでせうか。』
尊『事柄によつては無いし、事柄によつては有ります。』
王『では、如何な事が、彼の心を惑はすでせうか。』
尊『彼は未だ學ばぬ所の學問や、未だ見た事のない國のこと、或は未だ聞いたことのない名前や、名辭について心を惑はすでせう。』
王『では、如何いふ場合に、彼は惑ひますまいか。』
尊『彼は萬物の無常、生物の苦、及び無我の〔道理を知る所の〕知見によりて、達觀されたものに就いては其の心を惑はしませぬ。』
王『では、其等の場合に、彼の迷想は何處に行くのでせうか。』
尊『一たび智が起れば、其の瞬間に迷想は消え失せます。』
王『實例を示して下さい。』

せよ。
【五】智（Ñāṇaṁ）は、英語の Knowledge に當り、領解（Paññā）は英語の Intellect, Understanding に當る。古來この語は五種不飜の一として、單に般若と音譯してある。

尊『人が闇黒の部屋にランプを點けて往けば、闇黒は消え失せて明るくなるやうなものです。』

王『尊者よ、いま一の領解は何處に行くのですか。』

尊『推理作用の智慧が、作さねばならぬことを成し遂げた時は、推理作用は仕事がなくなります。が、それによりて得た智識、卽ち萬物の變遷、生物の苦及び無我の智識は、決して消え失せませぬ。』

王『尊者よ、貴衲が先刻仰つしやつたことにつき、實例を擧げて御說明下さい。』

尊『そは人が夜閒に手紙を出さんと欲し、書記を呼び、ランプを點けて、手紙を書き、書き了へてからランプを消しても、書いた手紙は殘るやうなものです。是の如く、推理作用は止んでも、萬物の無常・生物の苦及び無我の智識は消え失せませぬ。』

王『更に實例を以て御說明下さい。』

尊『東部地方の農家では、不意の火災を防がんが爲に、各戶の裏手に水を一ぱい入れた五個の水壺を配置する習慣があります。さて、其家に火がついたと假定せんに、家人は直に五個の水壺の水を、家に注ぎかけたので、火はすつかり消えて了ひました。其場合に農家の人人は、尙且つ水壺を用ひやうと思ふでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、水壺は旣に其の用をなして了ひましたから、最早其の必要はありませぬ。』

尊『五個の水壺は、道德上の五根、卽ち(六)信根(七)進根(八)念根(九)定根(一〇)慧根であります。農夫は勇猛

【六】信根 (Saddhindriya)。
【七】進根 (Viriyindriya)。
【八】念根 (Satindriya)。
【九】定根 (Samādhindriya)。
【一〇】慧根 (Paññindriya)。

に精進する觀行の士で、火は卽ち罪障です。火が五個の壺に於ける水によりてのみ消さるるが如く、罪障は道德上の五根によりて滅され、一たび滅さるれば復た起らないのであります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『それは醫士が藥草の根から出來た、五種の藥料を携へて病家を訪づれ、それを挽いて粉にして病人に服せしめ、其の結果彼の病氣を全癒させたやうなものです。醫士は病人が快くなつても、尙ほ且つ藥を服させやうと思ふでせうか。』

王『いいえ、藥の用事は旣に濟みましたから、最早その必要はありませぬ。』

尊『陛下よ、いまも亦た是の如く、道德上の五力によりて罪障を滅せば、推理作用は止んでも、智識が殘るのであります。』

王『尙は更に實例を擧げて下さい。』

尊『それは戰爭の上手な武士が、五本の槍を携へて、其敵に打ち勝たんとて、戰場に行き、槍を投げて敵を破つて了つた。斯くて彼は最早槍を投ぐる必要がないやうなものであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、再生しないと決つた人も、尙ほ且つ何等かの苦惱を感じませうか。』

尊『彼は或る事には苦惱を感じますが、或る事には感じませぬ。』

王『其の或る事とは、如何なことですか。』

尊『彼は肉體上の苦痛は感じますが、精神上の苦痛は感じませぬ。』

王『それは如何いふ理由ですか。』

尊『何せなれば、彼にはまだ、肉體上の苦痛の原因は、近因も遠因も在りますから、其の結果を受けねばなりませぬ。然るに彼には、既に精神上の苦惱の原因は、近因も遠因もありませんから、其を感じないのです。此の故に世尊は

「彼は一種の苦痛、卽ち肉體上の苦痛を感受すれども、精神上のそれは感受せず。」

と敎へ給ひました。』

王『尊者よ、それでは、何せ彼は死なないのですか。』

尊『陛下よ、阿羅漢は諂曲の心もなければ、憤怒の情をも懷きませぬ。彼は未熟の果實を無理に振り落さずに、唯成熟の時節を待ちます。此故に、陛下よ、舍利弗長老は、

「(二)我は死をも歡ばず、我は生をも歡ばず。務を終れる奴僕の如く、時の到るを待つのみ。我は死をも欣はず、我は生をも欣はず。端心正念にして、時の到るを待つのみ。」

【二】此偈は殆んど長老偈の一〇〇三と一〇〇二との前後を逆にしたやうなものである。

と道破して居ます。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『(三)快感は善ですか、惡ですか、又は無記ですか。』

尊『そは善でもあり、惡でもあり、或は無記でもあり得ます。』

王『されど、尊者よ、若し善事は苦しくなく、苦しいものは善くないならば、苦しいことと同時に、善事は起り得ないでせう。』

尊『陛下よ、いかが思召しますか、人あり片手に鐵の熱球を持ち、他の手に氷雪の塊を持たば、熱球と雪の塊は、兩者共に、其の人を痛めませうか。』

王『然うです、兩者共に、彼を痛めるでせう。』

尊『それでは、兩者共に熱いのですか。』

王『いいえ、然うでありませぬ。』

尊『では、兩者共に冷たいのですか。』

王『いいえ、然うでもありませぬ。』

【三】快感の原語 Sukhā vedanā は、古來樂受と漢譯してある。

尊『さすれば陛下の見解は、誤つて居ることを御認めにならねばなりますまい。若しも熱が〔人を〕痛め、而も兩者共に熱い譯ではないとすれば、苦は熱より來ることは能きませぬ。もし又寒が〔人を〕痛め、而も兩者共に寒い譯ではないとすれば、苦は寒より來ることは能きないでせう。然らば、陛下よ、兩者共に熱くもなく寒くもないから、陛下を痛めるのですか。或は一は熱く他は寒いから、苦は熱からも來なければ、寒からも來ないのですか。』

王『私は、とても貴衲と議論するだけの力がありませぬ。尊者よ、何うぞ、其理由を敎へて下さい。』

此に於て那伽犀那長老は、此の問題を納得させるために、論藏から下の文を引證して、彌蘭陀王を說得された。

「世には(三)世間的生活に關する六種の快樂と、(四)出世間的生活に關する六種の快樂と、世間的生活に關する六種の苦惱と、出世間的生活に關する六種の苦惱と、世間的生活に關する六種の非樂非苦の無記と、出世間的生活に關する六種の非樂非苦の無記と、即ち六六三十六種の感覺がある。此等の三十六種は現在に於けるが如く、過去にも、未來にも存在するから、感覺の數は總計百八種となるのである。」

王『善哉、尊者よ。』

【三】世間的生活とは、俗人の處世を云ふ。

【四】出世間的生活とは、出家人の處世を云ふ。

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、再生するものは何ですか。』

尊『(一五)名色が再生します。』

王『では、此の名色が再生するのですか。』

尊『いいえ、大王よ、此の名色は再生いたしませぬ。が、此の名色によりて、善惡の業を作し、其の業によりて他の名色が再生するのです。』

王『尊者よ、若し然らば〔再生の〕新しい名色は、其古い惡業から脱することが能きはしますまいか。』

尊『然うです、若し再生しなければ脱れませうが、再生するから、惡業より脱るることは能きないのであります。』

王『實例を以てお示し下さい。』

尊『陛下よ、或る人が他人の檬果を盜みました。そこで檬果の所有者は、盜者を捕へて、罪科に處すべく、王の面前に連れて參りました。すると、其泥棒は「陛下よ、私は此男の檬果は盜みませぬ。私が取りました檬果は、此男が地に蒔いた檬果とは異ひます。ですから、私は刑罰に處せらるる理由はありませぬ」と申立てたと假定せば、如何です、彼は有罪でせうか。』

【一五】 名色(Nāma-rūpa)。

王『勿論です、尊者よ、彼は當然、罰せられねばなりませぬ。』

尊『それは如何いふ理由ですか。』

王『何せなれば縱令盜人は何と申立てませうとも、彼が盜んだ檬果は、所有者が初め蒔いた檬果から實のつたものであるからです。』

尊『陛下よ、此の名色によりて爲さるる善惡の業から、他の名色が再生するのも、亦た丁度其の通りです。だから人は、其作業「の果報」を受けない譯には參りませぬ。』

王『更に實例を擧げてお示し下さい。』

尊『米や砂糖の盜人の場合も檬果を盜んだ場合と同じです。或は人が寒い時分に火を焚いてあたり、自ら暖まつたものだから、まだ燃えてる火を、其儘うつちやらかして、其處を立ち去つた。然るに其火が他人の畑に燃え移りました。そこで畑の主は、火を燃いた奴を捕へ、罪科に處すべく王の前に連れて參りました。所が、其奴は、「陛下よ、此人の畑に火をつけたのは、私ではありませぬ。私が燃やして置いた火と、此人の畑を燒いた火とは異ひます。ですから、私には罪はありませぬ」と申立てたと假定せば、如何です、其の奴は有罪でせうか。』

王『勿論です、尊者よ。』

尊『然し、それは如何いふ理由ですか。』

王『何せなれば縦令其奴は何と申立ませうとも、〔畑を燒いた〕後の火は、〔其奴が焚いて置いた〕前の火より起つた結果であるから、有罪となるのです。』

尊『陛下よ、此の名色によりて作された善惡の業から、他の名色が再生するのも、丁度その通りです。ですから、後者は前者の業報から、脫るることは能きませぬ。』

王『更に實例を以てお示し下さい。』

尊『陛下よ、或人がランプを持つて屋根に上り、其處で御飯を喰べ、煌煌と燃えてるランプを、草屋根の下に置いて居ました。然るに其火が屋根に燃え移り、家を燒き、段段延燒して、全村が燒土と化しました。そこで、村民等は彼を捕へて「此野郎、貴樣は何だつて我が村に火をつけあがつたんだい」と責め附けました。所が、其男は「僕は君等の村に火をつけた覺はない。僕が御飯を喰べる時、點けて居たランプの火は、君等の村を燒いた火とは異ふ」と答へた。若し彼等が是の如く論爭しつつ、法律の裁判を仰ぐべく、陛下の前に參りましたら、陛下は其場合、孰の申立に御贊同なさいますか。』

王『村民の方に贊同します。』

尊『如何いふ理由で。』

王『尊者よ、其奴が何と申立ませうとも、全村を燒いた火は、其奴の點けて居た、ランプの火より起つて居るからです。』

尊『陛下よ、死と共に終を告ぐる名色と、再生の名色と異ふのも、丁度その通りです。第二は第一の結果ですから、惡業〔の果報〕を、脫する譯には參りませぬ。』

王『更に實例を擧げてお示し下さい。』

尊『陛下よ、人あり、一少女を撰んで婚約をなし、結納金を呈供して別れて居ました。所が、其女は次第に成長して、年頃の娘となつたので、他の男が結納を與へて、其女と結婚しました。然るに最初の男が還つて來て「貴樣は何故私の妻と結婚したか」と詰りました。所が、第二の男は「僕が結婚して連れて來たのは、君の妻ではない。君が撰んで結納を與へた少女と、僕が撰んで結納を與へて、結婚した年頃の娘とは異ふのだ」と答へました。陛下よ、若し彼等が是の如く論爭しつつ、法律上の裁判を仰ぐべく、陛下の前に參りましたら、陛下は其場合、孰れに御味方なさいますか。』

王『第一の男に味方します。』

尊『如何いふ理由で。』

王『何せなれば縱令第二の男が、何と申立てませうとも、成長した娘は、少女から由來したものであるからです。』

尊『陛下よ、死と共に終を告ぐる名色と、再生の名色と異ひますのも、丁度その通りです。で、第二は第一の結果ですから、惡業の〔果報を〕脫るることは能きませぬ。』

王『更に實例を以てお示し下さい。』

尊『陛下よ、或る人が牧者から一ぱいの牛乳を購ひ、「明日これを取りに參りませう」と言つて、牛乳を預けて仕事に行つて了ひました。所が、其牛乳は翌日になつたら凝乳となつて居ました。然るに其人が翌日取りに來たので、牧者は凝乳を渡しました。すると其人は「僕が君から購うたのは、凝乳ではなく牛乳であつたから、牛乳を渡して貰ひたい」と言ひました。そこで牧者は「それは私の罪ではありませぬ。貴君の牛乳が凝乳と變つたのです。」と答へました。陛下よ、もし彼等が是の如く論爭しつつ、陛下の前に來り、法律の裁判を仰ぐと假定せば、陛下は其場合、孰に御味方なさいますか。』

王『牧者の方に味方します。』

尊『如何いふ理由で。』

王『何せなれば縱令その買ひ主が、何と申立ませうとも、其の凝乳は、牛乳から變生したものに相違ないからです。』

尊『陛下よ、死と共に終を告ぐる名色と、再生の名色と異ふのも、亦恰も是の如きものであります。が、一は他の結果であるから、惡業の「果報」を脫るる譯には參りませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『那伽犀那尊者よ、貴衲は再生なさいませうか。』

尊『陛下よ、何んで、同じ問題を二度、お問ひになる必要がありますか。衲は旣に「若し衲が死する時、衲の心に執著を懷いて死すれば再生するでせうが、若し然らざれば再生しない」と答へたではありませんか。』

王『實例を擧げてお說明下さい。』

尊『陛下よ、人あり、陛下に臣事して、陛下のお氣に召し、陛下から一の官職に任命せられました。而して彼は其御蔭で、何一つ不自由なく暮して居ながら、陛下から何にも賜はらないと公言したと假定せば、其の人の言行は正しいでせうか。』

王『いいえ、決して正しくありませぬ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、再び同じ問題を訊ねて何の要に立ちますか。衲は旣に「衲が死する時、衲の心に執著があれば再生するが、執著がなければ再生しない」と答へたではありませんか。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『貴衲は只今、名色に就てお話しでしたが、名とは何を意味し、色とは何を意味するのですか。』
尊『麤大なる物質は何物でも色であつて、精微なる心的の諸法は名であります。』
王『尊者よ、名と色とが、別別に再生しないのは、如何いふ理由ですか。』
尊『陛下よ、此の二者は互に結び合つて居て、〔常に〕一緒に生れ出づるからです。』
王『實例を以てお示し下さい。』
尊『陛下よ、一羽の牝鷄では、一對になることは能きませぬ。又卵とその殼とは、別別に發生するものではありませぬ。此二者は一體をなすもので、互に密接に相賴り合つて居ます。〔名と色とも〕丁度その如く、若し名がなければ色はありませぬ。名は密接に色に賴りて存するので、二者は〔常に〕一緒に生ずるのです。これ則ち無始の昔から、兩者の性質であります。』
王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、
『尊者よ、貴衲は無始の昔からと言はれましたが、「時間」なる言葉は如何いふ意味ですか。』
尊『陛下よ、時間に過去時と現在時と未來時とがあります。』
王『では、世に「時間」と云ふ如きものが存在するのですか。』

尊『存在する「時間」もあるし、存在しない「時間」もあります。』

王『存在する「時間」とは如何なもので、存在しない「時間」とは如何なものですか。』

尊『陛下よ、世には代謝絶滅、又は轉變等の意味で、過去のものとなつた行、卽ち衆生の性格を構成する要素があります。が、これには「時間」はありませぬ。又人には、今現に効力を顯はしつつある所の心的狀態、又は効力を生ずる可能力を含める心的狀態、及び再生を誘導する可能力を含める心的狀態があります。此等には、「時間」がありますが、死して將來再生しないものには、「時間」はありませぬ。又全く解脫したもの、卽ち現世に於て、涅槃を實現したものにも、將來「時間」はありませぬ。何ぜなれば彼等は絶對自由の身となつて居るからであります。』

王『善哉、尊者よ。』

第三章　法相問答

王問うて曰はく、

『尊者よ、過去時の根本は何ですか、又現在時及び未來時の根本は何ですか。』

尊『それは無明です。無明より行を生じ、行より識を生じ、識より名色を生じ、名色より六入を生じ、六入より觸を生じ、觸より受を生じ、受より愛を生じ、愛より取を生じ、取より有を生じ、有より生を生じ、生より老死・憂愁・悲痛・苦惱及び絕望等を生ずるのです。是の如く有らゆる時間の、過去に於ける初發の起點は、明かでありませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

*　*　*　*　*

王問うて曰はく、

『貴衲は「時間」の初發の起點は、明かでないと言はれましたが、其の實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、人あり一個の小さな種子を蒔いたと假定せんに、それが芽を吹き、次第に成長して、果實を生ずるまでに成熟しました。次に其人が、復其實を蒔いたら、以前と同じやうに〔芽を吹き、次第に生長し〕成熟するでせう。さて、陛下よ、是の連續に於て、何處かに際限がありませうか。』

王『尊者よ、確に際限はありませぬ。』
尊『陛下よ、丁度その如く、「全時間」の過去に於ける初發の起點は明らかでありませぬ。』
王『實例を擧げて御示し下さい。』
尊『牝鷄は卵を生みます、其の卵から牝鷄が生れ、其の牝鷄から復た卵が生れます。此の連續に於て際限がありますか。』
王『いいえ、ありませぬ。』
尊『陛下よ、丁度その如く、「全時間」の過去に於ける初發の起點は明りませぬ。』
王『いま一つ實例を擧げて下さい。』
此に於て尊者は地面に圓を畫いて王に向ひ、
『これに何等かの際限がありますか』と問はれた。
王『いいえ、際限はありませぬ。』
尊『然うです、此の故に世尊が「眼と色とから眼識が起り、此の三つが揃ふ時、觸が起り、觸から受、卽ち感覺が起り、感覺から渇愛が起り、渇愛から業が起り、業から復た眼が生れる。」と說き給うたのは、此の圓のやうなものです。今それ此の連續に於いて、何等かの際限がありますか。』
王『いいえ、ありませぬ。』

それから那伽犀那は他の感官、卽ち耳・鼻・舌・身・意の一一について同じやうに、圓を畫がき、同樣の問題を提出して、前と同じ答を得、結論を下して曰はく、

『陛下よ、丁度その如く、過去に於ける、「全時間」の初發の起點は明りませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『尊者よ、貴衲は初發の起點は、明らぬと言はれますが、其初發の起點とは、何を意味しますか。』

尊『陛下よ、時が過ぎた計りのものは、何であらうとも、其ものの初發の起點であります。』

王『では、貴衲が「明らぬ」と言はれる時の初發の起點は、萬般の事物に就てですか、卽ち何も彼も初發の起點は、知り得られないのですか。』

尊『そはものによりけりで、一部分は明りますが、一部分は明りませぬ。』

王『明るものは何で、明らぬものは何ですか。』

尊『陛下よ、往古は何も彼も形態や樣子が不明でした。で、そは我儕にとりては、無いのと同じです。然ういふものの、初發の起點は明りませぬ。が、初め無かつたものが出來、出來るや否や復た消え失せる。斯る事物の一番初めは明ります。』

王『されど尊者よ、若し無かつたものが出來、出來るや否や消え失せるならば、そは兩端を截斷せられ、結局滅ぼされて了ふことになりはしませんか。』

尊『いいえ、陛下よ、縱令そは兩端を截斷せられても、兩端は復た發育することが能きるではありますまいか。』

王『然うですね、それは能きませう。然し、そは私の疑問ではありませぬ。が、そは截り去られた點から、復た發育することが能きるのでせうか。』

尊『然うですとも。』

王『實例を以て敎へて下さい。』

此に於て尊者は、木と種子との比喩を反復し、而して衆生の構成的要素たる蘊は多くの種子なることを話された。すると王は滿足せる旨を表白された。

* * * * *

王問うて曰はく、

『〔世に〕何等か所生の行、(一)卽ち有情生存の可能力がありますか。』

尊『ありますとも。』

王『それは如何いふものですか。』

【一】此處には何か言葉が拔けて居るらしいと、英譯者も云つて居るが、何うも然うらしい。

尊『眼と色との存する所には、眼識があり、眼識の存する所には、眼觸があります。而して眼觸の存する所には、受卽ち感覺、受の存する所には渴愛、渴愛の存する所には、取卽ち慾望充足の念、取の存する所には有、有の存する所には生、生の存する所には、老死・憂愁・悲歎・苦痛・悲哀・絕望等が起ります。卽ち一切の苦惱は是の如くにして生じます。〔若し又〕眼なく色なき所には眼識はなく、眼識なき所には、眼觸なく、觸なき所には、受なく、受なき所には、渴愛なく、渴愛なき所には、取なく、取なき所には、有なく、有なき所には、生がありませぬ。而して生なければ、老もなく、死もなく、憂愁もなく、悲歎もなく、苦痛もなく、悲哀もなく、絕望もなく、一切の苦惱は、是の如くにして終を告ぐるのであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『世に次第順序を追へる「生成の狀態」なくして生ずる、何等かの行がありますか。』

尊『いいえ、世の事物には、皆次第順序を追へる「生成の狀態」があります。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、陛下の坐し給へる此の家は、〔次第順序を追はずに〕、突然出來たものですか、如何です。』

王『いいえ、尊者よ、勿論然うではありませぬ。家の各部は生成の狀態を追うて居ます。此等の梁は山中に生じ、此の土は大地より來り、而して數多の男女の骨折りの結果、この家が出來たのです。』

尊『陛下よ、丁度その如く、世に次第順序を追へる「生成の狀態」なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、進化の過程があるのです。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『一切の草木は、先づ地に其種子を蒔き、發生し、成長し、成熟して、花を咲き實を結びます。草木は決して次第順序の成生の狀態なしに、生ずるものでありませぬ。彼等が今のやうな狀態となるには、進化の過程があるのです。陛下よ、丁度その如く、世に次第順序を追へる生成の狀態なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、必ず進化の過程があります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『それは陶工が地から粘土を掘り出して、作らうと思ふ種種の形の壺を作る如なものです。壺は次第順序を追はないで、出來るものではありませぬ。そは壺が今の如な形となるには、變化の手續を經て居るのです。陛下よ、丁度その如く、世に次第順序の「生成の狀態」なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、必ず進化の過程があります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、若し琵琶に金屬の鼻柱もなく、皮もなく、空な所もなく、枠もなく、頸もなく、絲もなく、彎曲もなく、而して人の丹精もなくして、音聲を發するでせうか。』

王『いいえ、發しませぬ。』

尊『では、此等のものが揃つて居ても、音聲を發しないでせうか。』

王『それは發しますとも。』

尊『陛下よ、丁度その如く、世に順序次第の「生成の狀態」なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、必ず進化の過程があります。』

王『尙ほ實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、若し仕掛け附の火箸もなく、捩ぢ込む棒もなく、捩ぢ込む棒につける綱もなく、脈石もなく、火絨になる焦れた襤褸もなく、また人の丹精もないのに、磨耗によりて火が起り得ませうか。』

王『いいえ、起り得ませぬ。』

尊『では、此等の條件が揃つて居ても、火は生せないでせうか。』

王『それは生じますとも。』

尊『陛下よ、丁度その如く、世に順序次第の「生成の狀態」なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、必ず進化の過程があります。』

王『いま一つ實例をお擧げ下さい。』

尊『陛下よ、若し焦げる硝子もなく、太陽もなく、熱もなく、火絨になる乾いた牛糞もないのに、火が起り得ませうか。』

王『いいえ、それは起り得ませぬ。』

尊『では、此等のものが揃つて居て、火を打てば、火が出來ませうか。』

王『それは出來ませうとも。』

尊『陛下よ、丁度その如く、世に順序次第の「生成の狀態」なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、必ず進化の過程があります。』

王『今一つ別の實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、鏡もなく、光もなく、其の前に顏もないのに、肖像が映りませうか。』

王『いいえ、映りませぬ。』

尊『では、此等のものがあれば、反映がありませうね。』

王『それはありませうとも。』

尊『陛下よ、丁度その如く、世に次第順序の「生成の狀態」なしに生ずる行はありませぬ。行が生ずるには、必ず進化の過程があるのです。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『尊者よ、世に靈魂なるものが在りますか。』

尊『陛下よ、その靈魂とは何のことですか。』

王『そは眼を以て色を見、耳を以て聲を聞き、舌を以て味を嘗め、鼻を以て臭を嗅ぎ、身を以て觸を感じ、意を以て物を辨別する、生の本原をいふのです。例せば我儕は此宮中に坐しながら、我儕が見んと欲せば、東西南北の何れの窓の外でも、見ることが出來るやうなものです。』

尊『陛下よ、五窓のことをお話し致しますから、心を留めてお聞き下さい。若し内部にある生命の泉なるものが、陛下の仰せの通りに、眼によりて色を見ますならば、そはそが欲する所の窓を撰び、眼によるのみならず、他の五官の何れによりても、亦色を見ることが能きはしますまいか。而してそれと同樣に他の五官の何れによりても、音聲を聞き、味を嘗め、臭を嗅ぎ、觸を感じ、事物を識別することが能きはしますまいか。』

王『いいえ、それは能きませぬ。』

尊『さすれば此等の能力は、互に何等の辨別もなく、聯合して居るのではありませぬ。卽ち後なる感

覺は前なる感官に依り、前なる感官は後なる感覺に依るので、決して何等の辨別もなく聯合して居るのではありませぬ。さて我儕は此處に四方を開放して、十分に日の光のある王宮に坐つて居ます。而して我儕がその頭をさし伸せば、明かに種種の事物を見ることが能きます。が、生命の泉も亦た眼の窓を打ち開けば、同じ樣に見ることが能きますか。耳の窓も打ち開けば、同じ樣にすることが能きますか。啻に聞くことの能きるばかりでなく、色を見、味を嘗め、臭を嗅ぎ、觸を感じ、事物を識別することが能きませうか。又その他の各の窓も同じやうにすることが能きますか。』

王『いいえ、それは能きませぬ。』

尊『さすれば此等の能力は、何等の辨別もなしに、互に聯合して居るのではありませぬ。陛下よ、今(二)陳那は外に出で往き、門口に立て居ると假定せんに、陛下は彼が然うして居ることを認知なさいますか。』

王『はい、私は知ることが能きませう。』

尊『では、若し其の同じ陳那が還つて來て、陛下の前に立ちましたら、陛下は彼が然うして居ることを認知なさいますか。』

王『はい、知りませう。』

尊『陛下よ、生の本原は、若し舌の上に香氣あるものが置かるれば、其の酸味なるか、鹹味なるか、辛

【二】 陳那 (Dinna)。

味なるか、澁味なるか、又は甘味なるかを識別することが能きますか。』
王『はい、それは能きませう。』
尊『では、其の香氣が胃に這入つていつた時も、此等の事を識別することが能きますか。』
王『それは能きませぬ。』
尊『さすれば此等の能力は、互に何等の辨別もなくして、聯合して居るのではありませぬ。陛下よ、人あり、蜂蜜を入れた一百の器をもたらし、それを水漕に注ぎ、而して口を固く閉めた人を、其水漕に投げ込んだと假定せんに、彼は其中に入れられたので、甘かつたか、甘くなかつたかを、知ることが能きませうか。』
王『尊者よ、それは能きませぬ。』
尊『如何いふ理由で。』
王『何せなれば蜂蜜は、彼の口に這入らないからです。』
尊『では、陛下よ、此等の能力は、互に何等の辨別もなしに、聯合して居るのでありませぬ。』
王『私は貴衲のやうな論客と議論することは能きませぬ。何うぞ如何いふ理由だか教へて下さい。』
此に於いて尊者は下の法義を論藏から引證して王を說服された。
『陛下よ、視覺が起るのは眼と色とによるのです。其の他の事柄、卽ち觸も受も、想念も、思想

も、命根も、作意も各その先在者と同時に起るのです。同類の原因結果の連鎖は、一つ一つの他の五官が働く時に起るのです。此の故に靈魂といふやうなものはありませぬ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、
『眼識が起れば意識は必らず起りますか。』
尊『然うです、陛下よ。前者の生ずる所には、必らず後者が起ります。』
王『では、此の二者の內、孰れが先に起りますか。』
尊『眼識が先に起り、次に意識が起ります。』
王『では、眼識は恰も「僕が起つたら、君起り給へ」と言ふやうな風に、意識に對して、命令しながら起るのですか。或は意識は恰も「君先づ起り給へ、僕は後から起るから」と言ふやうな風に、眼識に對して約束するのですか。』
尊『然うではありませぬ、陛下よ。二者の間には申合はありませぬ。』
王『では、眼識の起る所に、必らず意識が起るのは、如何いふ理由ですか。』
尊『そは二者の間に傾斜があり、窓があり、慣習があり、聯合があるからです。』
王『そは如何いふ理由ですか。何うぞ實例を擧げて、傾斜があるから、眼識が起れば、意識が起る理

由を教へて下さい。』

韋『陛下よ、如何思し召しますか、雨が降れば、其の水は何處へ往くでせうか。』

王『そは地面の低い方に流れます。』

韋『若し復た更に雨が降れば、その水は何處へ往くでせうか。』

王『そは最初の水と同じ方に向つて流れます。』

韋『では、最初の水は、「僕が先に往くから、君後に隨いて來玉へ」と言ふ風に、第二の水に對して命令するのでせうか。或は第二の水は、「何處へなりと君往き給へ、僕は後から隨いて行くから」と言ふ風に、第一の水に對して約束するのですか。』

王『決して然うではありませぬ。尊者よ。此の兩者の閒には申合はないのです。そは銘銘に地面の低い方に流れ往くのです。』

韋『陛下よ、丁度その如く、自然の傾向として、眼識が起れば意識が起るのです。で、眼識が意識に對して「僕が起る所に、君起り給へ」と命令するのでもなければ、又意識が眼識に對して「君が起る所に、僕は必らず起らう」と約束する譯でもありませぬ。彼等の閒に何等の申合があるのでもなく、自然天然の傾向として、然うなるのです。』

王『窓があるから、眼識が起れば、意識が起る理由を、實例をもつてお示し下さい。』

尊『陛下よ、或る國王が、其の國境に唯一の通交口ある城廓を有し、頗る堅固に防備して居ると假定せんに、若し人が其の城下から外國へ往かんとせば、如何して出て往きませうか。』

王『彼は勿論通交口から出て往くのです。』

尊『では、若し他の人が出て往かんとせば、彼は如何して出て往きませうか。』

王『第一の人と同じ通交口からです。』

尊『では、第一の人は第二の人に對して、「君も僕が出て往く、同じ道から出て來たまへ」と語るのでせうか。又は第二の人が第一の人に對して、「君の出て行く道を、僕も出て行きませう」と語るのでせうか。』

王『然うではありませぬ、尊者よ。彼等の閒に、話し合があつた譯ではありませぬ。彼等は門口があるから、其の路を出て往くのです。』

尊『陛下よ、眼識と意識との關係も、丁度是の如きものであります。』

王『慣習の故に、眼識が起れば、意識が起る理由を、實例を以て敎へて下さい。』

尊『陛下よ、一の馬車が前に往けば、第二の馬車は何の路を取つて往くでせうか。』

王『第一の馬車と同じ路を取ります。』

尊『では、第一の馬車が第二の馬車に對して、「僕が往つた後に隨いて來給へ」と語るのでせうか。或

は第二のが第一のに對して「僕は君の後に隨いて往きます」と語るのでせうか。』
王『いいえ、尊者よ、彼等の間に話合があるのではありませぬ。第二は慣習の爲めの故に、第一に隨いて往くのです。』
尊『眼識と意識との關係も、亦た丁度その通りです。』
王『聯合の故に眼識が起れば、意識が起る理由の實例をお示し下さい。』
尊『陛下よ、初心の者は、指の關節を用ひて、物を數ふることに於ても、極めて簡短なる算術を以て、穀物收穫の豫想高を見積ることに於いても、又は書道に於いても、極めて拙劣であります。が、或る時期の間、注意と練習とを重ぬれば熟練家となります。丁度その如く、眼識が起れば「觀念の」聯合によりて、意識も亦起るのです。』

　それから尊者は同じ問題の應答に於いて、耳識・鼻識・舌識・身識が起れば、同樣に意識が起ること、即ち一は必らず他に伴へども、其の起るや何等の申合もなく、自然の原因によるものなることを宣說された。

王『尊者よ、意識のある所には、常に感覺がありますか。』
尊『然うです、意識の起る處には、必らず(三)觸も、感覺も(四)想も(五)思も(六)尋も(七)伺もあります。』

【三】觸(Phassa)とは、根即ち感官と、境即ち對象と、意識との和合より生じ、心をして境に觸れしむる作用である。
【四】想(Saññā)は、取像の義である。

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『尊者よ、觸の特徴は何ですか。』

尊『陛下よ、それは觸知することです。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、二疋の牡羊が頭を以て、互に相撞き合ふ時の如なものです。眼は二者中の一にして、色卽ち對象は、其の相手、而して觸は二者の接觸にあたります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『一對の鐃鉢を鏘鏘相觸れしむる時のやうなものです。一は眼にして、他は其の對象、而して二者の接合は觸にあたります。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『尊者よ、感覺の特徴は何ですか。』

【五】思(Cetanā)とは、精神の中に心をして或る事を造作せしむる一の力を云ふ。

【六】尋(Vitakka)とは、精神活動の麤雜なる尋求作用・辨了作用・推度作用・構畫作用・分別作用を云ふ。故に古來この尋を「境に於いて心・心所をして麤に轉ぜしむるを相と爲す」と解釋してある。

【七】伺(Vicāra)は、精神活動の細密なる吟味作用である。故に古來この伺を「境に於いて心・心所をして細に轉ぜしむるを相と爲す」と解釋してある。以上の佛教哲學の術語の解釋は、專ら北方佛教徒の說明に據つたのであるが、南方佛教徒の說明は、少しく趣を異にして居るやうだ。この事は以下、王の問に對する尊者の答を見れば明る。

韋『陛下よ、經驗し享受することです。』

王『實例を擧げて下さい。』

韋『人あり、國王に臣事し、王の御意に適うて、官職を得、彼はその任命によりて、何一つ不自由なく暮らし、五官の快樂を享受することが能きるので、「私はもと王に臣事し、王の御意に適うたから、今この職を得た。私が是の如く榮華の心持を、經驗し得るのは其爲である」と考ふるやうなものです。又善事をなして、死後、幸福榮華なる天國に再生し、何一つ不自由なく暮し、五官の快樂を享受して「私は以前に善事をなしたに相違ない、私が今是の如き、榮華の氣持を經驗し得るのは其の爲である」と考ふる如なものです。陛下よ、是の如く、事物を經驗し享受するのが、感覺の特徴であります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、想の特徴は何ですか。』

韋『陛下よ、そは認知することです。何を認知するかとならば、そは青・黄・赤・白等を認知します。』

王『實例を擧げて下さい。』

韋『陛下よ、王の守藏人が、藏に入つて、王の所藏物を見、其の色は、斯く斯く然か然かなりと、認知

するやうなものです。陛下よ、是の如く、想の特徴は、認知することであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、思の特徴は何ですか。』

尊『そは思料することと、及び用意することとです。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、人あり毒を準備して自らも之を飮み、他にも之を飮ましめ、自ら苦惱を受け、他をも苦痛に惱ましむる如なものです。又同じく人あり、故意に惡事を考へて、死後地獄に墮ちて、苦難の狀態に再生し、彼が勸告に隨つて惡事をなせる者も、同じ果報を受ける如なものです。陛下よ、又人あり、醍醐味・牛酪・油・蜜・糖蜜等を調合し準備して、自らも之を飮み、他にも之を飮ましめ、自らも快味を嘗め、他をも然かせしむる如なものです。これと同樣に人あり、自ら故意に善事を働かば、死後天國に生れて樂しき生活を營むことが能き、彼の勸告に隨へるものも、亦同じ果報を受るでせう。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、
『尊者よ、識の特徴は何ですか。』
尊『陛下よ、そは分別することです。』
王『實例を擧げて下さい。』
尊『例せば、そは市中の十字街頭に坐せる市街の番衛が、東西南北から、來る人を見ることの能きるやうなものです。陛下よ、これと同様に、識は、眼を以て見る色、耳を以て聞く聲、鼻を以て嗅ぐ香、舌を以て嘗むる味、身を以て觸るるもの、意を以て認知するものの性質などを知るのです。陛下よ、斯く分別することが、識の特徴であります。』
王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、
『尊者よ、尋の特徴は何ですか。』
尊『そは(八)推斷決定することです。』
王『實例を擧げて下さい。』
尊『陛下よ、そは大工が、上手に木作りした、材木の接目を合せる如なもの

【八】原語の Apparalakkhana を Hinati-Kumbure は Pihitana〔窓を閉め切る〕、佛音論師は Abhiniropana〔善く決定するの義〕と解して居る。要するに何れも大同小異の解釋である。

です。是の如く、推斷し決定するのが、尋の特徴であります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、伺の特徴は何ですか。』

尊『それは(九)幾度も幾度も吟味し修正することです。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、それは人が銅器を作るに當り、型に入れて打ち鍛へ、再三再四、音を立てしめ、次第に型の通りに作り上げる如なものです。型に嵌めるのは尋に當り、再三再四、音を立てて打ち鍛へ、型の通りに作り上げるのは、伺に當ります。陛下よ、是の如く、再三再四、打ち鍛ふのが、伺の特徴です。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、貴衲が一一例を擧げられた、此等の諸法が一緒に活動する時、一を此方に向はしめ、他を彼方に向はしめて、「これが觸、これが受、これが想、これが思、これが識、これが尋、これが伺」と

【九】原語の Anumaj janalakkhaṇa は、直譯すれば「再三再四、磨いて磨いて、磨き上げるの相」と云ふほどの義である。

言ふことの能きるやうに、彼等の閒を明瞭に區別することが能きますか。』
王『實例を擧げて下さい。』
尊『陛下よ、宮中の料理人が、糖蜜又は醬汁を作るに當り、其中に凝乳だの、鹽だの、生姜だの、馬芹の種子だの、胡椒だの、及び其他の藥味を入れたと假定し、且つ陛下が彼に向つて、「朕のために凝乳・鹽・生姜・馬芹の種子、胡椒及び其他、汝が此の醬汁の中に入れた物の、香味を擇り出せ」と命じ給うたとすれば、一緒に混ぜられた、此等の香味を別別に分離し、「酸味は此處に、鹹味は彼處に、辛味は此處に、澁味は彼處に、甘味は此處にあります」と言ふ風に、一一擇り分けることが能きませうか。』
王『いいえ、それは不可能です。一一の香味を、其が特殊の符牒で、ハッキリ分けて差出すことは、とても能きませぬ。』
尊『陛下よ、我儕が今まで、論議して居ました諸法も、丁度その通りであります。』
王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

尊者問うて曰く、
『陛下よ、鹽は眼で識ることが能きますか。』

王『それは能きます、尊者よ。』
尊『陛下よ、そは御再考を要します。』
王『では、舌で識ることが能きると言ふのですか。』
尊『然うです、それで可いのです。』
王『では、尊者よ、何な鹽でも、舌だけで、識別することが能きますか。』
尊『然うです、何な鹽でも能きます。』
王『では、尊者よ、牡牛は何故に其を荷物にして運搬しますか。彼が齎さねばならぬものは鹽だけで、それ以外のものは必要ないではありませんか。』
尊『鹽を運搬することは能きます。されど此等の(一〇)諸法が一緒に混ざつて鹽といふ特殊の物を生じたのです。例せば鹽は重い。が、鹽の重さを量ることが能きますか、陛下よ。』
王『能きますとも、尊者よ。』
尊『いいえ、陛下よ、陛下が量り給ふのは鹽そのものではありませぬ。そは重量です。』
王『尊者、貴衲は實に議論に巧みです。』

【一〇】單に「鹹味」のみならず、「色の白い」と云ふことだの、其の他種種の條件を混ずるから、茲に諸法と云つてある。

巻の第三　彌蘭陀王問品

第四章　斷惑問答

王問うて曰はく、

『尊者よ、五處、卽ち眼・耳・鼻・舌・身は、數多の業によりて生ぜらるるのですか、又は單一の業によりて生ぜらるるのですか。』

尊『そは諸の業によりて生ぜられ、決して單一の業によるのではありませぬ。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、若し私が一の畑に五種の種子を蒔きましたら、此等の種種の種子から生えるものは、樣樣の種類のものでせうか。如何でせう。』

王『樣樣のですとも。』

尊『五處の發生に關することも、丁度その如くであります。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊

(一)王問うて言はく、

『尊者よ、何ぜ一切の人人は等しくないのですか。卽ち或者は短命、或者は長命、或者は病身、或者は健全、或者は醜く、或者は美しく、或者は無力、或者は有力、或者は貧乏、或者は富貴、或者は生れ下賤に、或者は生れ高貴に、或者は愚、或者は賢ですか。』

尊『何ぜ一切の果物は等しくないのですか。卽ち或者は酸く、或者は鹹からく、或者は辛く、或者は澁く、或者は甘いのですか。』

王『尊者よ、何ぜなれば彼等は、異つた種子から生じたからだと、私は思ひます。』

尊『陛下よ、陛下のお訊ねの「人間の」相異も、亦是の如くに、說明せねばなりませぬ。で、佛陀は、「おお、婆羅門よ、衆生には各各彼等自らの業がある。彼等は業の相續人である。彼等は業の種姓に屬するのである。彼等は業と親類である。彼等には彼等を保護する君長として、彼等自らの業がある。彼等が位置の高下等を區別するものは業である。」と宣說し給ひました。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

【一】那先比丘經七七三紙、表上段、右より二行以下を參照せよ。

【二】那先比丘經七七三紙表、上段、左より三行以下を參照せよ。

(二)王問うて言はく、

『尊者よ、貴衲は嘗て私に、貴衲等の出家なすつたのは、苦惱を絶滅し、苦惱が起り得ないやうにするためだと仰でしたね。』

尊『はい、然う申しました。』

王『では、出家は前生の努力によりて、成し遂げられるのですか。又は現世に生れた後の努力によるのですか。』

尊『努力とは、まだ之から爲ねばならぬ事業に從事するの謂ひで、以前の努力とは爲ねばならなかつた事を完了した意味であります。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、陛下が飲料水を得んとて、井戸、又は人工的の池を掘りに著手なさいますのは、渇を覺え給ふ時ですか、如何です。』

王『いいえ、決して然うではありませぬ、尊者よ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、努力とは、まだ之から爲ねばならぬ、事業に從事するの謂ひで、以前の努力とは、爲ねばならなかつたことを、完了した意味であります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、陛下が食物を得んとの目的で、田を耕し、種子を蒔き、收穫を取り入れる事業に著手なさいますのは、餓を感じ給ふ時ですか、如何です。』

王『いいえ、決して然うではありませぬ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、努力とは、まだ之から爲ねばならぬ事業に從事するの謂ひで、以前の努力とは、爲ねばならなかつた事業を、完成した謂ひなのであります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、〔敵國が〕いま陛下に對して開戰の準備を整へて居るのに、陛下はこれから塹壕を掘り、壘を作り、望樓を建て、城塞を築き、糧食を聚める事業に著手なさいますか。それから陛下は、象の御し方や、騎馬の術や、車及び弓の用法や、又は劍術の教授をお始めになりますか、如何です。』

王『いいえ、決して什麼ことは致しませぬ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、努力とは、まだ之から爲ねばならぬ事業に從事するの謂ひで、以前の努力とは、爲ねばならなかつた事業を、完成した謂ひなのです。何ぜなれば、そは世尊が、

「(三)賢者をして、迅かにそが福利なりと信ずる事を遂行せしめよ。
賢者をして、決して彼の馭者の思なく、須らく精勤努力せしめよ。
馭者の坦坦たる大道を捨てて凸凹たる道に踏入り、心憂慮するが如く、

【三】漢譯には此の經文は「人は當に先づ自ら念じて善を作すべし。後に於いて善を作すも益なし。大道を棄てて邪道

懦夫は、法を棄てて非法に隨ひ、死の門に到る時、零落せる賭博者の如く、心憂慮するなり。」

と宣說し給うたからであります。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊

(四)王問うて曰はく、

『尊者よ、貴衲等は「地獄の火は普通の火よりも勢が烈しい。普通の火の中に投せらるれば、小な石でも、終日燃えても、燃え盡されないが、地獄の竈に投せらるれば、寢室の如な大な岩でも、忽ち燃え盡される」と言はれる。が、私は之を信ずることが能きませぬ。また貴衲等は「再生する衆生は何者でも、よし彼等は地獄に於て、十萬年の久しき間燃えても、猶ほ亡くなるものでない」と言はれるが、これも亦私には信ぜられませぬ。』

尊者答へて曰はく、

『陛下よ、牝の鮫・鰐・龜・孔雀・鳩などは、石や小砂利のやうな、堅い物を喰べないでせうか、如何でせう。』

王『然うです、彼等は喰べます。』

に就くこと莫れ。愚人に倣うて善を棄て惡を作すこと勿れ。後坐して啼哭するも人を益するなし。中正を棄捐して不正に就かば、死に臨む時、乃ち悔ゆるのみ」となつて居る。〔那先比丘經七七三紙表下段右より四行以下を見よ〕

【四】　那先比丘經七七三紙、表下段、右より八行以下を參照せよ。

韋『それでは此等の堅いものは、彼等の胃部、又は腹部に這入れば、破壞されるでせうか。』
王『然うです、彼等は破壞されます。』
韋『では、同じ動物の腹の中に這入る胎兒も、亦破壞されますか。』
王『いいえ、決して破壞されませぬ。』
韋『それは如何いふ理由ですか。』
王『尊者よ、それは業の力によりて、破滅を脱れるものと、私は思ひます。』
韋『陛下よ、衆生が、數千年の久しき間、地獄で燃やされて、破滅しないのも、丁度その如く、業の力によるのです。若し彼等にして某處に再生したら、其處で成長し、其處で死にます。此の故に、陛下よ、世尊は「人は惡業が盡きるまでは死なない」と教誡し給うた。』
王『更に實例を擧げて下さい。』
韋『陛下よ、彼の獅子や、虎や、豹や、犬は、堅い骨や、肉などを喰べませんか、如何です。』
王『喰べますとも。』
韋『では、此等の堅いものは、彼等の胃部又は腹部に這入れば、破壞されますか。』
王『然うです、破壞されます。』
韋『では、同じ動物の腹の中に這入れる胎兒も、亦破壞されますか。』

王『いいえ、決して破壞されませぬ。』

尊『そは如何いふ理由でせうか。』

王『尊者よ、彼等は業の力によりて、破壞を脱れるものだと、私は思ひます。』

尊『陛下よ、地獄に於ける衆生が、縱令數千年の久しきに亙り、燃えに燃えて、破壞されないのも、丁度その如く、業の力によるのです。若し彼等が某處に再生せば、其處で生長し、其處で死にます。此故に陛下よ、世尊は「人は惡業の盡くるまでは死なない」と敎へ給うた。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(五) 王問うて曰はく、

『尊者よ、貴衲の弟子達は「大地は水によりて支へられ、水は風によりて支へられ、風は空氣によりて支へらる」と申されますが、こは私には信せられませぬ。』

尊者は此に於て一個の機械仕掛の水瓶に、水を入れたのを、王に示して、

『此の水の、風によりて支へらるるが如く、彼の水も、亦た空氣によりて支へらるるのです。』

と言つて王を説服された。

【五】那先比丘經七七三紙裏、上段、右より九行以下を參照せよ。

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(六)王問うて曰はく、

『滅は涅槃ですか。』

尊『さうです、陛下よ。』

王『それは如何いふ理由ですか。』

尊『陛下よ、愚人は皆感覺、及び感覺の對象に於て、歡樂に耽けり、其の中に歡喜を欣求し、其に愛著します。斯くて彼等は「人慾の」洪水によりて推し流され、生・老・死・悲惱・憂愁・苦痛・悲泣・絕望を脫することが能きませぬ。卽ち一言にして云へば、彼等は苦を脫することが能きないのです。されど陛下よ、聖人の弟子たる賢者は「感覺の」歡樂に耽りもしなければ、或は其を欣求し、又は其に愛著もいたしませぬ。斯くて彼には渴愛がありませぬ。渴愛がないから取がなく、取がないから有がなく、有がないから生がなく、生がないから老・死・悲惱・憂愁・苦痛・悲泣及び絕望がありませぬ。是の如く、滅は一切の苦の騷擾・攪亂を滅盡します。これ滅を以て涅槃となす所以であります。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

【六】那先比丘經七七三紙裏、上段、右より十一行以下を參照せよ。

(七)王問うて曰はく、

『尊者よ、人は誰でも涅槃が得られますか。』

尊『いいえ、誰でも得ると云ふ譯には參りませぬ。陛下よ、承認せねばならぬ(八)事を承認し、領知せねばならぬ事を領知し、捨離せねばならぬ事を捨離し、實行せねばならぬ事を實行し、實現せねばならぬ事を實現し、(九)端正に世に處するものが、涅槃を得るのです。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * *

(10)王問うて曰はく、

『尊者よ、涅槃を得ない人でも、涅槃が如何に安樂な狀態なるかを知ることが能きますか。』

尊『然うです、知ることが能きます。』

王『だが、涅槃を得ないで、如何して其を知ることが能きますか。』

尊『陛下よ、手足を截斷せられないでも、手足を截斷されたものの、如何に悲痛な境遇なるかを、知ることが能きませうか、如何でせう。』

王『然うです、それは能きます、尊者よ。』

【七】那先比丘經七七三紙、裏上段左より四行以下を參照せよ。

【八】●事の原語は Dhamma である。

【九】Yo sammā paṭipanno は直譯すれば「正しく歩むもの」となる。

【10】那先比丘經七七三紙、裏上段左より初行以下を參照せよ。

尊『でも、彼等は如何して其を知るのですか。』
王『彼等は、手足を截斷された人の、悲痛の聲を聞いて、其を知るのです。』
尊『涅槃を得ないものも、丁度その如く、涅槃を得た人から、福音を聞いて、涅槃が如何に安樂な狀態であるかを知るのです。』
王『善哉、尊者よ。』

第五章　斷惑問答

(一)王問うて曰はく、
『尊者よ、貴衲は佛陀に相見なさいましたか。』
尊『いいえ。』
王『では、貴衲の御師匠様は、佛陀に相見なさいましたか。』
尊『いいえ。』
王『それでは、尊者よ、佛陀は存在し給はないのですね。』
尊『ですが、陛下よ、陛下は雪山中にある(二)ウーハー河を御覽になりましたか。』
王『いいえ。』
尊『では、陛下の御父君は、それを御覽になりましたか。』
王『いいえ。』
尊『それでは、陛下よ、そんな河は、彼處に無いのですね。』
王『たとひ私も私の父も、其を見ないでも、河は彼處にあります。』
尊『陛下よ、佛陀も、亦た是の如く、縱令衲も衲の師匠も、世尊に相見しませんでも、斯の如き人が

【一】那先比丘經七七三紙、裏下段右より七行以下を參照せよ。
【二】ウーハーナディー Ūhanadi.

在し給うたことは事實です。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(三)王問うて曰はく、

『尊者よ、佛陀は無上尊でありますか。』

尊『然うです、佛陀に比ぶべき者はありませぬ。』

王『でも、貴衲は見たこともなくて、如何して佛陀の無上尊なることをお知りですか。』

尊『陛下よ、未だ曾て大海を見たことのないものでも「大海は甚深にして不可測である。五大河、即ちガンヂス・ヤムナ・アチラワティー・サラブー河及びマヒーは其に注ぐ。而も大海の水は尚ほ且つ増しもしなければ、減りもしない」ことを知るでせうか。』

王『然うです、彼等はそれを知るでせう。』

尊『陛下よ、丁度その如く、衲は既に過ぎ去つた「多くの」偉い弟子達のことを考ふる時、佛陀に比ぶべきものは、誰もないことを知るのです。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

【三】那先比丘經七七三紙、裏下段左より八行以下を參照せよ。

(四)王問うて曰はく、

『尊者よ、佛陀が如何に無比者であつたかを、他の者でも知ることが能きますか。』

尊『然うです、能きますとも。』

王『では、如何してそれが能きますか。』

尊『陛下よ、昔の昔、(五)帝須長老といふ文豪がありました。而して彼が遷化してから、多くの星霜を閲して居るのです。然るを人人は如何して彼を知ることが能きますか。』

王『彼が書き殘したものによりて、知ることが能きます。』

尊『陛下よ、丁度その如く、眞理の何たるかを知るものは、誰でも、世尊の如何なる御方なりしかを知ることが能きます。何せなれば眞理は、世尊によりて敎へられたからであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、貴衲は眞理を御覽になりましたか。』

尊『陛下よ、我儕佛弟子は、佛陀の照見の下に、佛陀の敎勅を奉じて、我儕の生活を營んで居ないのでせうか。』

【四】那先比丘經七七四紙、表右より初行以下を參照せよ。

【五】帝須（Tissa）。

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(六)王問うて曰はく、

『尊者よ、輪廻のない處に(七)再生があり得ませうか。』

尊『然うです、在り得ますとも。』

王『でも、何うして其が在り得ますか、實例を擧げて御示し下さい。』

尊『陛下よ、人あり、一の燈火から他の燈に、點火したと假定せんに、一は他から、或は他に轉移〔卽ち輪廻〕したと言へますか。』

王『いいえ、決して言へませぬ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、輪廻はなくとも、再生はあります。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、陛下は幼少の頃、陛下の先生から、若干の詩句をお學び遊ばしたことを追懷なさいますか。』

王『然うです、私は追懷します。』

尊『では、其の詩句は陛下の先生から、陛下へ轉移〔卽ち輪廻〕したのですか。』

王『いいえ、決して然うではありませぬ。』

【六】那先比丘經七七四紙、表上段右より九行以下を參照せよ。

【七】漢譯には「人死し已つて後、身は後世に隨つて生ぜざるか」との王問に對し「人死し已つて後、更に新身を受く、故に身は隨はず」との尊者の答を以て初まつて居る。

尊『陛下よ、丁度その如く、輪廻はなくとも、再生はあります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * *

(八)王問うて曰はく、

『尊者よ、(九)世に靈魂といふやうなものが在りますか。』

尊『陛下よ、第一義門から言へば、什麼なものは在りませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * *

王問うて曰はく、

『尊者よ、此の體から他の體へ、轉移する何者かが在りますか。』

尊『いいえ、什麼なものは在りませぬ。』

王『では、若し然うでしたら、〔衆生は〕其の惡業を脱することは能きますまい。』

尊『若し再生がなければ「然り」ですが、若し再生が在れば「否な」です。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、人あり、他の檬果を盜んだと假定せんに、盜人は當然、刑罰に處せられるでせうか。』

【八】那先比丘經七七四紙、表上段左より五行以下を參照せよ。

【九】同經は此の問答と次の問答とを一緒にしたやうな形になり「寧に智あること無しとなすや」を以て初まり「智あることなし」の答の次に直に檬果盜賊の譬を擧げてある。想ふに漢譯の所謂智とは、予が今ここに譯して靈魂と云へる原語 Vedagū の異譯と見る方が至當だらう。

王『然うですとも。』

尊『けれども、彼は、他が地に蒔いた檬果其物を、盜んだのではありませぬ。然るを彼が刑罰に處せられるのは、何うして當然でせうか。』

王『何せなれば、彼が盜んだ檬果は、他が地に植ゑたものの結果であるからです。』

尊『陛下よ、丁度その如く、此の名色が行つた善、或は惡の行爲、卽ちその業によりて、他の名色が再生するのです。是の故に〔人は〕、其の惡業〔の報〕を、脫るることは能きませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(10)王問うて曰はく、

『尊者よ、或る行爲が、一の名色によりて行はるれば、其の行爲は何うなるのですか。』

尊『陛下よ、影の體を離れざるが如く、行爲は其の人に隨ひます。』

王『(11)何人か「其の行爲は此處にあり、彼處にあり」と言つて、其の行爲を指摘することが能きますか。』

尊『いいえ。』

【10】那先比丘經七七四紙、表上段末行以下を參照せよ。

【11】漢譯には此の問答は別に引き離してある。〔那先比丘經七七四紙表下段右より三行以下を參照せよ〕

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、誰かまだ樹が產出しない果物を、「此處にあり、彼處にあり」と指摘することが能きませうか、如何でせう。』

王『いいえ、決して能きませぬ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、生命の繼續が截斷されない限りは、作さるる行爲を指摘することは能きませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(三)王問うて曰はく、

『尊者よ、將に再生せんとするものは、「彼が生れるだらう」といふことを知るでせうか。』

尊『然うです、陛下よ、彼は其を知ります。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、一農夫・一家主が、地に種子を蒔き、雨も程善く降つたと假定せんに、彼は「穀物が實のるだらう」といふことを知るでせうか。』

【三】那先比丘經七七四紙、表下段右より八行以下を參照せよ。

王『然うです、彼はそれを知るでせう。』

尊『陛下よ、丁度その如く、將に再生せんとするものは、「彼が生れるだらう」といふことを知るのです。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

（一三）王問うて曰はく、

『尊者よ、〔世に〕（一四）佛陀といふやうな人が在しましたか。』

尊『然うです、在しました。』

王『尊者よ、では、「彼は此處に在り、彼處に在り」と指摘され得ますか。』

尊『陛下よ、世尊は已に般涅槃して、還た他の個體を形成すべき何ものをも殘し給ひませんでした。で、「世尊は此處に住し、彼處に住す」と指摘することは能きませぬ。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、此處に炎炎たる火の大團塊ありと假定せんに、已に消え失せた火焰を、「此處にあり彼處にあり」と指摘することが能きませうか、如何でせう。』

王『いいえ、尊者よ、其の火焰は消え失せたのです、滅盡したのです。』

【一三】那先比丘經七七四紙、表下段左より九行以下を參照せよ。

【一四】漢譯には「寧に泥洹ありや無しや」、那先言く「寧に有り」を以て初まり、次に「那先よ、寧ろ能く我が佛の某處に在すことを指示せんや否や」云云の問答となつて居る。

尊『陛下よ、丁度その如く、世尊は已に般涅槃して、還た他の個體を形成すべき根本は、〔全然斷ち截つて、〕何ものをも殘し給ひませぬ。世尊は〔已に人間の〕最期を遂げ給ひましたから、「此處に在し、彼處に在す」と指摘することは能きないのです。然しながら、陛下よ、世尊の敎體は指摘することが能きます、何せなれば、敎理は世尊によりて說かれたからであります。』

王『善哉、尊者よ。』

第六章　斷惑問答

(一)王問うて曰はく、
『尊者よ、貴衲等出家の人にも、身體は至愛ですか。』
尊『いいえ、出家には、身體は至愛ではありませぬ。』
王『では、貴衲等は何故に身體を養ひ、且つ其に就いて注意を拂ひますか。』
尊『陛下よ、陛下は、戰場に出陣して、何日、如何なる處ででも、決して矢傷を負ひ給うたことはありませんか。』
王『然うですね、負傷したことはあります。』
尊『陛下よ、什麽な場合には、傷口に膏藥を貼つたり、油を塗つたりして、繃帶を施しませんですか。』
王『然うです、什麽いふ風に、色色な應急の手當を致します。』
尊『では、陛下は什麽なに大事に手當をなし、什麽なに深い注意を拂ひ給ふ程、その傷を愛し給ふのですか。』
王『いいえ、色色と手當を致しますけれども、私はその傷が可愛いのではありませぬ。手當を施して再び肉が出來ればいいのです。』

【一】那先比丘經七七四紙、表下段左より四行以下を參照せよ。

尊『陛下よ、出家の人の身體に於けるも、亦た丁度その如くです。彼等は身體に愛著するのでなく、人生の正義のために其を保持するのです。陛下よ、世尊は〔或時〕「身體は傷のやうなものだ」と教誨し給ひました。で、出家の人は、身體を見ること腫物の如く、其に愛著しないで保持するのです。何せなれば世尊が、

「身體は腫物の如く、濕冷なる皮膚を以て蔽はれ、不淨醜穢の汚物、其の九門より流出す。」

と宣說し給うたからであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(二)王問うて曰はく、

『尊者よ、佛陀は一切知者であり、又一切の事を豫知し給ひましたか。』

尊『然うです、世尊は一切知者たりしのみならず、一切の事を豫知し給ひました。』

王『では、佛陀が敎團の團員のために、機會の起る毎に、始終、戒律を制定し給うたのは、(三)如何いふ理由ですか。』

尊『陛下よ、世には、地上に在るだけの藥物を、知悉する醫者が居ませうか。』

【二】那先比丘經七七五紙、裏上段右より五行以下を參照せよ。

【三】若一切の事を豫知するならば、事件の起らぬ前から、戒律を制定して置いたらよかりさうなものですの意味である。

王『然うです、世には然ういふ人が居るでせう。』
尊『陛下よ、其の醫士は、病人の疾病が已に快癒した時、又は病氣をしない前に、煎藥を服ましむるでせうか。』
王『彼は、疾病の起つた時だけ、藥を服ませます。』
尊『陛下よ、世尊も亦た是の如く、縱令一切知者であり、一切の事を豫知し給ひましたけれども、其の時を得なければ、戒律を制定し給はなかつたのです。が、場合の必要に應じて、聖弟子達の生存中、犯してはならぬ淸規を立て給うたのであります。』
王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊

(四)王問うて曰はく、
『尊者よ、佛陀は、大聖人たる三十二の特相と、八十種の好形を具し、皮膚は黃金の如く金色にして、長さ六尺の後光を有し給うたといふことは、眞實でありますか。』
尊『然うです、陛下よ、世尊は、實に大聖人たる三十二の特相と、八十種の好形とを具し、皮膚は金色にして、長さ六尺の後光を有し給ひました。』

【四】那先比丘經七七四紙、裏上段右より八行以下を參照せよ。

王『では、佛陀の兩親も亦た然うでしたか。』
尊『いいえ、彼等は然うでありませんでした。』
王『然らば佛陀は生れながらにして、三十二相・八十種好を具し、皮膚は金色にして、六尺の後光を有し給うたと云はねばなりませぬ。所が、凡そ子たるものは、其母、若くは母方のものに似て居るか、或は其の父、若くは父方に似て居るか〔孰れか〕です。』
尊『陛下よ、世に一百の花瓣を有する蓮華といふやうなものがありますか。』
王『然うです、在ります。』
尊『では、蓮華は何處に生長しますか。』
王『蓮は泥中に生じ、水中に於いて立派に花を咲かせます。』
尊『では、蓮華の色香、又は味は、そが生長する所の池の泥土に似て居ますか。』
王『いいえ、決して然うではありませぬ。』
尊『では、其は水に似て居ますか。』
王『いいえ、然うでもありませぬ。』
尊『陛下よ、丁度その如く、縱令その父母は、上に述べた特相好形を有ちませんでしたけれども、世尊は其等を有し給ひました。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

（五）王問うて曰はく、

『尊者よ、佛陀は梵行者でありましたか。』

尊『然うです、世尊は梵行者でありました。』

王『尊者よ、では、佛陀は梵天の信者だつたといふことになりますね。』

尊『陛下よ、陛下は王象を御所有になりますか。』

王『有つて居ますとも。』

尊『では、其の象は蒼鷺の〔やうな〕わめき方を致しますか。』

王『致します。』

尊『では、彼は蒼鷺の臣下といふ譯ですか。』

王『いいえ、然うではありませぬ。』

尊『陛下よ、梵天には覺智(Buddhi)が有りませうか、有りますまいか、如何でせう。』

王『彼は覺智を有つて居ます。』

尊『では〔陛下の論旨に隨へば〕、渠は佛陀、卽ち覺者の信徒でなくてはなりますまい。』

【五】　那先比丘經七七四紙、裏上段左より二行以下を參照せよ。

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、

『(六)受具は善美ですか。』

尊『然うです、善美です。』

王『でも、(七)佛陀は受具なさいましたか、或は受具なさいませんでしたか。』

尊『陛下よ、世尊は菩提樹下に於いて正覺を成じ給ひました。それが則ち佛陀の受具であります。世尊は聖弟子衆のため、一生涯の遵則として、淸規を制定し給ひました。が、世尊に戒法を授けたものは誰もありませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * *

(八)王問うて曰はく、

『尊者よ、其の母の死に會うて泣く人の涙と、法を愛するが爲に泣く人の涙と、此等の二者中、孰の涙が藥になり、孰の涙が藥になりませんか。』

尊『陛下よ、前者の涙は貪・瞋・癡のために染汚せられ且つ熱いです。が、後者の涙は不染汚で且つ涼し

【六】受具(Upasampadā)とは、具足戒を受くるの意にて、一人前の僧となるを謂ふ。

【七】那先比丘經七七四紙、裏下段右より六行以下を參照せよ。

【八】那先比丘經七七四紙、裏下段右より九行以下を參照せよ。

いのです。で、清涼と寂靜とは藥になりますけれども、煩熱と妄情とは藥になりませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(九)王問うて曰はく、

『尊者よ、情慾ある人と、情慾を斷せる人との區別は何ですか。』

尊『陛下よ、一は渇愛のために征服せられ、他は渇愛のために征服されないのです。』

王『尊者よ、征服されるものと、征服されないものとの區別は何ですか。』

尊『一は足ることを知らず、他は足ることを知るのです。』

王『尊者よ、想ふに情慾ある人も、情慾無き人も、等しく美味いもの――そが硬くても柔でも――は喰はんと欲し、不味いものは欲しないやうです。』

尊『陛下よ、貪慾の人は「食物の」味と、味から起る貪慾とを享樂しますが、無慾の人は其の味のみを取つて、其より起る貪慾を樂みませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

【九】那先比丘經七七四紙、裏下段左より八行以下を參照せよ。

王問うて曰はく、
『尊者よ、智慧は何處に住むのですか。』
尊『何處にも住みませぬ、陛下よ。』
王『では、智慧といふやうなものは無いのですね。』
尊『陛下よ、風は何處に住むのですか。』
王『何處にも住みませぬ、尊者よ。』
尊『では、風といふやうなものは無いのですね。』
王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

王問うて曰はく、
『尊者よ、貴衲は輪廻といふことを仰つしやいますが、そは何ういふ意味ですか。』
尊『陛下よ、衆生は此處に生れて、此處に死し、此處に死して、復何處かに生れます。また彼處に生れて、彼處に死し、彼處に死して、還何處かに生れます。これが則ち輪廻の意味であります。』
王『實例を擧げて下さい。』
尊『そは、人が檬果を喰べて、其の種子を地に投棄する場合のやうなものです。乃ち其の種子から復た

檬果樹が生えて、實を結びます。斯くて檬果樹の相續は絶えませぬ。』
尊『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(一〇) 王問うて曰はく、
『尊者よ、人は如何して過ぎ去つたこと、又は久しい以前に爲たことを思ひ起しますか。』
尊『憶念によつてです。』
王『されど我儕が思ひ起すのは、憶念によるのでなく、心によるのではありませんか。』
尊『陛下よ、陛下は曾て或る事業をなし、それから忘れ給うたことを思ひ起しますか。』
王『はい、思ひ起します。』
尊『では、陛下は、其の時、心が無かつたのですか。』
王『いいえ、私の憶念が悪いのです。』
尊『それならば、陛下は、何故に、「我儕が思ひ起すのは、憶念によるのでなく、心によるのである」と仰つしやいますか。』
王『善哉、尊者よ。』

【一〇】 那先比丘經七七四紙、裏下段左より二行以下を參照せよ。

＊　＊　＊　＊　＊

【二】那先比丘經七七五紙、表上段右より三行以下を參照せよ。

（二）王問うて曰はく、

『尊者よ、憶念は恆に主觀的に起るのですか、又は外界の暗示から刺戟せられて起るのですか。』

尊『兩者ともにです。』

王『でも、要するに一切の憶念は、其の起りが主觀的であつて、人爲的でないではありませんか。』

尊『陛下よ、若し人爲的に教へられる憶念がないとすれば、工藝家は實習・熟練・稽古の必要もなく、先生も無用でせう。が、事實はこれに反して居ます。』

王『善哉、尊者よ。』

第七章　斷惑問答

(一)王問うて曰はく、

『尊者よ、記憶作用が起るには幾種の道がありますか。』

尊『陛下よ、それには十六の道があります。詳言せば、個人的經驗によりて……例せば、阿難陀尊者・(二)倶壽多羅信女、其の他この能力を有する人人が、彼等の前生のことを思ひ出し得たるが如き場合。外部からの援助によりて……例せば、生來健忘性の人に他人が絕えず思ひ起さしむる場合の如き。或る重大な事件の印象によりて……例せば、國王が其の戴冠式の日を記憶し、又は我儕が須陀洹果を得た日を記憶するが如き。歡樂の印象によりて……例せば、人が愉快を感じた事を記憶するが如き。不快の印象によりて……例せば、人が苦痛を受けた事を記憶するが如き。外見類似の標識によりて……例せば、父母兄弟姉妹の容貌に似た人を見て、父母兄弟姉妹を思ひ出し、又は駱駝や牡牛や馬を見て、彼等に似たものを思ひ出す場合の如き。外見相異の標識によりて……例せば、斯く斯く然かの色・聲・味・觸は、斯く斯く然か然かの物に屬することを記憶するが如き場合。言語の智識によりて……例せば、生來健忘性の人が、他から思ひ起さしめられて、自ら記憶する場合の如き。銘を打

【一】那先比丘經七七五紙、表上段右より十行以下を參照せよ。

【二】Khujjuttara.

つことによりて……例せば、燒印又は或種の印によりて牛を見覺ゆる場合の如き。追回の努力によりて……例せば、健忘性の人が再再「想ひ起せ、想ひ起せ」と、せがまれ强ひられて、想ひ起さしめられる場合の如き。計算によりて……例せば、人が書き方を練習して、斯く斯くの文字の後には、然か然かの文字がなくてはならぬと知る場合の如き。算術によりて……例せば、會計方が計算の智識によりて、大數量を勘定する場合の如き。暗誦によりて……例せば、經文の讀誦者が、暗記の熟練によりて、許多「の文句」を記憶するが如き。靜慮によりて……例せば、比丘が月日を經るにつれて、自らの無常な狀態を思ひ出すが如き。書籍に關して……例せば、諸王が「此處に其の書を持參せよ」と云ひ、曩日の規則を思ひ出し、且つ其の中から自分の記憶を喚起する場合の如き。入質によりて……例せば、預けて置いた品物を見て、預けた當時の狀態を思ひ起す場合の如き。(三)經驗によりて……例せば、人が見た色を記憶し、曾て聞いた聲を記憶し、曾て嗅いだ香を記憶し、曾て味つた味を記憶し、曾て觸れた觸を記憶し、曾て知識した法を記憶するが如き場合。大王よ、これ則ち記憶作用の起る十六種の道であります。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

【三】十六種の道を擧ぐべき筈なのに、事實は十七種を擧げてある。で、此の中の孰れか二種を集めて一種と見ねばなるまい。而して漢譯には此の第十七を缺いで居る。

(四)王問うて曰はく、
『尊者よ、貴衲等は「縱令人は百年の閒、不善の生活を營んでも、若し命終に臨んで、其の心に佛に歸依するの一念が起れば、〔其の功德によりて〕諸天の中に再生す」と云はれますが、朕は其を信ずることが能きませぬ。又貴衲等は「一息截斷の場合の一念によりて、人は地獄に再生す」と云はれますが、これも私には信ぜられませぬ。』
尊『陛下よ、極小さな石でも船なくて水上に浮ぶでせうか、如何でせう。』
王『いいえ、決して浮びませぬ。』
尊『ですが、百輛の石でも、船に積めば、水上に浮ぶではありませんか。』
王『然うです、よく浮びます。』
尊『今それ善行は船の如なものです。』
王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

(五)王問うて曰はく、
『尊者よ、貴衲等「出家の人」は、過去の苦惱を捨離せうと努めますか。』
尊『いいえ、努めませぬ。』

【四】那先比丘經七七五紙、裏上段左より八行以下を參照せよ。
【五】那先比丘經七七五紙、裏下段初行以下を參照せよ。

王『では、貴衲等が捨離せうと努めらるるのは未來の苦惱ですか。』
尊『いいえ。』
王『然らば、現在の苦惱ですか。』
尊『さうでもありませぬ。』
王『では、若し貴衲等の努めて捨離せんとせらるる苦惱が、過去にも、未來にも、現在にも無いとすれば、其の苦惱は何處にあるのですか。』
尊『陛下よ、陛下は何をお尋ね遊ばすのですか。此の苦惱を滅盡すれば、他に復何等の苦惱も起らないもの、これ則ち我儕が努めて捨離せんと欲する苦惱です。』
王『ですが、尊者よ、未來の苦惱といふ如なものが、今其處にありますか。』
尊『いいえ、衲は其を假想するのです。』
王『では、貴衲等は餘程お悧口な方方ですね。在りもしないものを、努めて捨離せんとせらるるのですから。』
尊『陛下よ、嘗て競敵の諸王が、陛下に對し、敵手として、又は反抗者として、蹶起したものがありましたか。』
王『在りましたとも。』

尊『想ふに其の時、陛下は塹壕を掘り、壘壁を急設し、望樓を建て、城を築き、又は軍糧の徴集に著手なさいましたでせうね。』

王『いいえ、其等のものは、前以て準備して居ました。』

尊『また、陛下は、其の時、親ら軍象の調御、騎馬・弓・劍術等の練習、或は軍用車の用法を御習ひになりましたか。』

王『いいえ、其等も前以て修習いたしました。』

尊『では、何のためにお習ひ遊ばしましたか。』

王『未來の危險を防遏せんがためです。』

尊『では、未來の危險といふ如なものが、いま其處に在りますか。』

王『いいえ、だが、朕は其を假想せねばなりませぬ。』

尊『では、陛下は餘程お悧口な方ですね、在りもしないものを防遏せんと、親ら苦勞あそばすのですから。』

王『更に實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、陛下は渇せられた場合に、飲料を得んとて、井を掘り、池を掘り、又は貯水地の新設に著手なさいましたか。』

王『いいえ、其等のものは、皆前以て準備して置くのです。』
尊『では、何のために……』
王『そは未來の渇を防がんがためです。』
尊『では、未來の渇といふ如なものが、いま其處に在りますか。』
王『いいえ、在りませぬ。』
尊『では、陛下は餘程お悧口な方ですね、在りもしない未來の渇を防がんとて、色色と御苦心なさるのですから。』
王『更に實例を擧げて下さい。』
此に於いて、尊者は、人が未來の飢饉を防遏するために、常に種種の方法を講ずる例を示された。
すると、王は「從來の」疑惑が解決されたとて大變に悦ばれた。

* * * * *

(六)王問うて曰はく、
『尊者よ、此處から、梵天の世界までの距離は、幾許ですか。』
尊『陛下よ、そは大變に遠うございます。若し彼處から王殿の如な、大きな岩が落ち來ると假定せば、一晝夜、八萬四千由旬の速度で落ち來ても、地上に達するには四ヶ月を要するのです。』

【六】那先比丘經七七五紙、裏下段右より十行以下參照。

王『然うですか。尊者よ、貴納等は「神通力を有し、心の自在を得たる比丘は、力の強い男が、其の曲げたる腕を伸ばし、又は伸ばした腕を曲げる如に、迅速に閻浮州から雲隱れして、梵天の世界に現はれることが能きる」と云はれますが、朕には此の事は信ぜられませぬ。如何して彼は數百由旬〔の距離〕を什麼に速く飛ぶことが能きませうぞ。』

尊『陛下よ、陛下は何國でお生れになりましたか。』

王『(七)アラサンダといふ島があります、其處が私の生國です。』

尊『此處からアラサンダまでの距離は幾許ですか。』

王『約二百由旬です。』

尊『陛下は嘗て彼處で爲すつた仕事を、只今思ひ出せますか。』

王『思ひ出せますとも。』

尊『陛下よ、陛下は約三百里〔の距離〕を、什麼に速く旅びなさいました。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(八)王問うて曰はく、

『尊者よ、人あり、此處に死して、梵天の世界に再生すと假定し、又た他に人あり、此處に死して、

【七】Alasanda は印度河の島に建設せられたる Alexandria のこと。

【八】那先比丘經七七五紙、裏下段左より二行以下を參照せよ。

（九）迦濕彌羅國に再生すと假定せば、二人の中、孰れが先に到達するでせうか。』

韋『兩者とも同時に到達します。』

王『實例を擧げて下さい。』

韋『陛下よ、陛下は何町でお生れになりましたか。』

王『朕は（一〇）カラシといふ村で生れました。』

韋『此處からカラシまでの距離は幾許で、又迦濕彌羅までの距離は幾許ありますか。』

王『此處からカラシまでは、約二百由旬で、迦濕彌羅までは、十二由旬あります。』

韋『いま陛下はカラシのことをお考へ遊ばせ。』

王『は、考へました。』

韋『それでは、迦濕彌羅のことをお考へ遊ばせ。』

王『は、考へました。』

韋『では、陛下は〔一地方中の〕孰れが速くお考へになりました。』

王『孰れも同時間内に考へました。』

韋『陛下よ、丁度その如く、梵天の世界に再生するには、迦濕彌羅國に再生するよりも、長時間を要するものではありませぬ。陛下よ、飛んで居た二羽の鳥が、同時刻に、一羽は高い樹の上に下り、他の

【九】Kashmir.
【一〇】Kalasi.

一羽は小さな灌木の上に下りたと假定せば、二羽中の孰れの影が、速く地に落ちるのでせうか。』

王『兩者の影は、一緒に地上に落ちます。』

尊『陛下よ、陛下の御尋ねの事も、丁度その如くであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(一)王問うて曰はく、

『尊者よ、(二)智慧の成分には幾種ありますか。』

尊『七種あります、大王よ。』

王『それでは人は幾種の智慧で覺れますか。』

尊『人は、一種の智慧、卽ち(三)「眞理を研究する智慧の成分」によりて、覺れます。』

王『では、何せ智慧に七種ありますか。』

尊『陛下よ、鞘に納め、手にも取らない刀で、陛下が截りたいと思召すものが截れますか。』

王『いいえ、決して截れませぬ。』

尊『陛下よ、丁度その如く、眞理を研究する智慧の成分を除き、他の智慧では、何にも理解することが

【一】那先比丘經七七六紙、表上段右より八行以下を參照せよ。

【二】智慧の成分(Bojjhaṅga)は古來これを覺支と譯してある。

【三】眞理を研究する智慧の成分(Dhamma-vicaya-sambojjhaṅga)は古來これを擇法覺支と譯してある。

能きませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(一四)王問うて曰はく、

『尊者よ、人は善業を作して、福を得るのが大きいですか、又は不善業を作して、殃を得るのが大きいですか。』

尊『善業を修して福を得る方が大きいです。』

王『そは何う云ふ理由ですか。』

尊『陛下よ、不善をなすものは、悔恨を感じ、自ら其の罪業を作せることを認めます。此故に惡は幸福を増す所以ではありませぬ。然るに善をなす人は、心に悔恨を感じませぬ。悔恨を感じませんから、その心に欣然たる情が湧き出でます。欣然たる情が湧き出ですから、歡喜法悅いたします。歡喜法悅いたしますから、其の四肢五體が平安であります。身體が平安ですから、其の心に滿足の喜びを味ひます。其の心に滿足の喜びを味ひますから、安心立命が能きます。(一五)安心立命しますから、事物の眞相を知ることが能きます。此故に善行は幸福を增長するのです。例せば人あり、其の手足を截斷せられて居ても、若し彼が僅か一握りの蓮華を世尊に獻せば、九十一劫の閒困難に陷らないさうです。

【一四】那先比丘經七七六紙、表上段左より五行以下を參照せよ。

【一五】Samāhito は「確固なる、安靜なる」等の意味あるが故に、茲には極めて自由に意譯して「安心立命」とせり。

陛下よ、これ衲が善行はより大にして、不善は小なりと云ふ所以であります。』
王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

（一六）王問うて曰はく、
『尊者よ、意識的に罪業を造るものと、無意識的に罪業を作るものと、其の孰れの罪が、より大きいですか。』
尊『陛下よ、無意識的に罪業を作る者の罪が、より大きいです。』
王『然らば、尊者よ、我儕は無意識的に惡業を作れる我儕の家族又は我が宮廷の人人を二重に罰せねばなりますまい。』
尊『されど、陛下よ、陛下は如何お思召しますか。此處に人あり、白熱せる金屬を意識的に攫めるものと、無意識的に攫めるものと、其の孰れの火傷が、大きいでせうか。』
王『識らずに攫んだ者の火傷が大きいです。』
尊『人の罪業を作せるも亦た是の如く、無意識的に作せる罪業は大きく、意識的になせる罪業は小さうございます。』
王『善哉、尊者よ。』

【一六】那先比丘經七七六紙、表下段右より四行以下を參照せよ。

(一七) 王問うて曰はく、

『尊者よ、世には此の身このまゝ、北倶盧州、又は梵天の世界、或は四大州の何れかに、行き得るものが在りますか。』

尊『はい、什麼な人が居ます。』

王『でも、如何して行けますか。』

尊『陛下よ、陛下は嘗て一呎或は二呎、大地を飛び越し遊ばしたことを、思ひ出しになりますか。』

王『はい、朕は十二呎飛べます。』

尊『でも、如何してお飛びになりますか。』

王『若し朕の心に、彼處まで飛び越さうといふ觀念を定むれば、其の決心の瞬間に、朕の身體が輕くなるやうに思はれます。』

尊『陛下よ、神通力を有し、心の自在を得たる比丘も、亦是の如く、彼は機會に遭遇して決心すれば、精神の力で空中を飛ぶことが能きるのであります。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

【一七】 那先比丘經七七六紙、表下段左より九行以下を參照せよ。

（一八）王問うて曰はく、

『尊者よ、貴納等は「世に長さ百由旬の骨がある」と云はれますが、世には樹木ですら、長さ百由旬のものは在りませぬ。然れば何うして什麼に長い骨が在り得ませうぞ。』

尊『陛下よ、陛下は、嘗て海中には、長さ五百由旬の魚が居るといふことを、お聞き及びになりませんでしたか。』

王『それは聞きました。』

尊『では、長さ百由旬の骨が在り得る譯ではありませんか。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊

（一九）王問うて曰はく、

『尊者よ、貴納等は「出呼入吸を制することが能きる」と云はれますが、眞實に能きますか。』

尊『はい、それは能きますとも。』

王『でも、如何して能きますか。』

尊『陛下よ、陛下は、嘗て人が鼾かくのを、お聞き遊ばしたことがありますか。』

王『はい、あります。』

【一八】那先比丘經七七六紙、表下段左より三行以下を參照せよ。

【一九】那先比丘經七七六紙、裏上段初行以下を參照せよ。

尊『では、若し彼が身體を曲ぐれば、其の鼾聲が、止みは致しませんでしたか。』
王『然うです、止みました。』
尊『若し〔斯の如く〕身體も、行爲も、心意も、又は智慧も、何等の訓練を爲ない人が、單に身體を曲げただけで、鼾聲を止めますならば、此等の點に於て十分に訓練もあり、尚ほ第四禪の位置に到達せるものが、奈何で呼吸を制し得ないことがありませうぞ。』
王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

（三〇）王問うて曰はく、
『尊者よ、世に海といふ言葉がありますが、何故に水を海と稱へますか。』
尊『陛下よ、何故なれば其處には水があるだけ鹹があり、鹹があるだけ水があるから、（三一）海と稱するのです。』
王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

（三二）王問うて曰はく、
『尊者よ、海水は何故に同一味即ち鹹味ですか。』

【三〇】那先比丘經七七六紙、裏上段右より八行以下を參照せよ。
【三一】此の答は海の巴利語 Sa-mudda を「等しい水の狀態」即ち Sama 等＋ud (aka) 水と見たものらしい。
【三二】那先比丘經七七六紙上段右より十行以下を參照せよ。

尊『何故なれば其の中の水が、大層永い間經つて居ますから、同一の鹹味となつたのです。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

王問うて曰はく、

『尊者よ、極微な物でも分解することが能きますか。』

尊『はい、能きます。』

王『では、尊者よ、萬物の中で、極微なものは何ですか。』

尊『陛下よ、最も極微精妙なるものは眞理ですが、精微が諸法の眞相といふ譯ではありませぬ。微妙とか或は麁大とかは、物の形容に過ぎないのです。然し、智慧で分解し得らるるものは、何でも分解されます。而して智慧を分解し得るものは、何にもありませぬ。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

（三三）王問うて曰はく、

『尊者よ、生物に於ける（三四）識覺と（三五）智慧と（三六）靈魂との三者は、（三七）文字も（三八）本質も各異ひますか、又は本質は同じで、文字のみ異ふのですか。』

【三三】　那先比丘經七七六紙、裏上段左より五行以下參照。
【三四】　Viññāṇa.（ヰンナーナ）
【三五】　Paññā.（パンナー）
【三六】　Jīva.（ジーヷ）
【三七】　By. ñjana.（ビヤンジヤナ）
【三八】　Dhamma.（ダムマ）

尊『陛下よ、識覺の特徴は認識すること、智慧の特徴は識別することであります。而して生物には靈魂といふやうなものはありませぬ。』

王『でも、若し生物に靈魂といふやうなものがなければ、眼を以て形を見、耳を以て聲を聞き、鼻を以て香を嗅ぎ、舌を以て味を嘗め、身を以て觸を感じ、意を以て法を知るものは何ですか。』

尊『若し生物に身體と別異なる靈魂があつて見聞覺知するならば、眼の門を打ち毀し〔卽ち眼の玉を引き拔い〕たら、門口が廣くなり、其處から頭を出して、以前よりも善く見得るでせう。又耳を打ち毀したら〔耳の門口が廣くなり、其處から頭を出して〕以前よりも善く聞き得、舌を引き拔いたら、以前よりも善く味ひ得、鼻を切り落したら、以前よりも善く嗅ぎ得、或は身を毀したら、以前よりも善く觸を感じ得るでせうか。』

王『いいえ、然ういふ理由には參りませぬ。』

尊『然らば身體の中に、靈魂といふものの、在り得やう筈がないではありませんか。』

王『善哉、尊者よ。』

* * * * *

(二九) 尊者曰はく、

『陛下よ、世尊の爲し給ひしことに、一の難しい事があります。』

【二九】 那先比丘經七七六紙、裏下段右より三行以下參照。

王『それは如何いふ事ですか。』

尊『そは一の感官に依る諸の心的狀態、卽ち觸覺は是の如し、感覺は是の如し、想念は是の如し、識は是の如し、心は是の如しと、明確に決めることです。』

王『實例を擧げて下さい。』

尊『陛下よ、人あり、大海に踏み込み、其の手に棕櫚の葉を以て海水を掬し、舌を以て其の味を嘗むるものありと假定せんに、彼は「こは恒河の水、こはヤムナ河の水、こはアチラワティー河の水、こはサラブー河の水、若くはマヒー河の水」といふ風に、識別することが能きませうか。』

王『それはとても能きませぬ、尊者よ。』

尊『陛下よ、今それ何れか一の感官運動に伴うて起る心的狀態を識別せんは、それよりも更に一層難しうございます。』

王『善哉、尊者よ。』

＊　＊　＊　＊　＊

（三〇）尊者問うて曰はく、

『陛下よ、陛下は今何時だか御存じですか。』

王『存じて居ますとも……いま夜の初更が過ぎて、中更になつて居ます。』

【三〇】那先比丘經七七六紙、裏下段左より八行以下を參照せよ。

で、炬火を點火させました。また四旒の旗を掲げ、且つ御使用の品を藏から出して、貴衲に差し上げるやうに命じました。』

朝臣曰はく、

『陛下よ、此の比丘は大變に偉い學者で御座います。』

王『然うぢや、此の比丘は非常に偉い和尙ぢや。若し世の先生なるものが渠の如く、生徒なるものが朕の如なものばかりだつたら、眞理の闡明に、然う長い日閒手閒は取るまい。』

それから大王は彼が提出した疑問に對して與へられた說明を喜び、價値二千兩の見事な刺繡の外套を那伽犀那尊者に著せて、『尊者、私は貴衲にこれから毎日八百日閒、御食事を供養するやう侍從のものに命じます。して又貴衲は此の宮廷にあるものを何なりと、戒律に觸れない範圍に於いて御撰び下さい、朕はそれを布施いたします』と言つた。すると尊者は『衲は生活に不自由はありませんから、何にも要りませぬ。』と答へて、其の布施を謝絶された。此に於いて王は言葉を續けて、『尊者よ、朕は貴衲が生活に不自由なさらないことは存じて居ます。が、貴衲は朕と貴衲自らとを保護して下さらねばなりませぬ。卽ち「貴衲は朕を發心させても、朕から何等の報酬にも預らなかつた」との世評を立てられる怖がありますから、貴衲自らを保護し、又「朕が貴衲から發心せしめられながら、何等の謝禮をも差上げなかつた」との世評を立てられる怖がありますから、「朕の微意を諒として布施を領

し」以て朕を保護して下さらねばなりませぬ。』と言つた。
すると尊者は『では陛下の御希望通りいたしませう』と答へられた。
次に王は『獸王獅子が檻の中に入れらるれば、縱令その檻は黃金で在つても、羨ましさうに其顏を外界に向けるやうに、朕も亦此の世に住んで居ても、心には貴衲等出家の人の高潔な生活を羨んで居ます。けれども尊者よ、若し朕が俗人の生活を止めて、出家いたしましたら、朕はとても長く生きることは能きまいと思ひます、朕には多數の敵がありますから』と言つた。
それから那伽犀那尊者は、彌蘭陀王によりて提出せられた疑問に解答して了つたので、座席を立ち宮廷を辭して、其の仙居に歸られた。

*　*　*　*　*

那伽犀那尊者の辭し去られた後で、彌蘭陀王は、間もなく、自ら提出した疑問は正しかつたか、又那伽犀那尊者の答解は、當を得て居たかを熟考された。而して自らの疑問も正しく、答解も當を得て居るとの結論に到達された。
那伽犀那尊者も、亦仙居に歸つてから、其の事を熟考して、疑問も宜く、答話も可かつたとの結論に到達された。
さて、那伽犀那は翌日早朝法衣を著け、應量器を手にして、宮殿に往き、設けの席に坐られた。す

ると彌蘭陀王は、那伽犀那尊者を禮して、恭しく其の側に坐り、尊者に向つて、
『尊者よ、朕は昨夜あれから、貴衲にお訊ねしたことを考へて、終夜眠りませんでした。朕は朕の疑問は正しかつたか、又貴衲の答解は當を得て居たかを沈思して、孰れも正しかつたとの結論を得ました。』と言つた。すると尊者も亦王に向ひ、
『陛下よ、衲は昨夜あれから、陛下のお訊ねに對して、答へたことを喜んで、夜を明かしました。而して私も亦我儕兩人の話したことを熟考して、疑問の提出も正しく、答案の提供も當を得て居たとの結論に到達しました。』
と答へた。
是の如く此の二大偉人は彼等が話し合つたことを互に喜び祝はれたのである。

卷の第四

第一章　矛盾問答

談論の大家にして、巧辯なる怜悧聰明の彌蘭陀王は、那伽犀那の能力を驗めさんと試みぬ。彼は那伽犀那の蔭護の下に住し、自己の無智の立證せらるるまで、再たび三たび問ひ問うて、つひに聖教の學者となれり。

彼は、終夜、獨り靜かに、九分教の考究にふけり、そこに解き難き矛盾と、羅網の存することを發見して、謂へらく、

「法王の教は多方面なり、或は解釋的なるあり、或は折にふれての談話あり、或は「もの」根本性質の道破あり。

後世「人人の」無智なるがため、勝者の說の矛盾に就て、「學徒の間に」、爭論起らん。

いでや、これより、那伽犀那を訪づれ、矛盾の問題を提出して、其の解決を仰ぎ、後世の疑惑を斷ちて、光明を投げ、眞理の道の道知るべにせん」と。

彌蘭陀王は、夜が明けて、太陽の東天に昇る時、沐浴一番、合掌し低頭して、心に過去現在未來の

諸佛を念じ、「予は八種の誓を遵守し、實行せんがため、これから七日の閒苦行を續けやう、而して吾が誓願の成就を待ちて、師の許に往き、疑問として、此等の矛盾を提出しやう」と獨語しつつ、八種の誓の遵守に著手した。斯くて彼は、平常の王服を拔ぎ、其の裝飾を脫し、身に黃色の法衣を著け、頭に出家の頭巾を冠り、行者の如な風體になつて、心に固く誓ひを立て、八種の誓願を遂行された。〔八種の誓願とは〕、(一)予は七日の閒、法律上の事件の裁判をすまい。(二)予は貪慾の情を懷くまい。(三)惡意を起すまい。(四)心を妄念に向けまい。(五)予は奴婢侍從等に對して柔和謙遜の態度を示さう。(六)予は都て身體上の動作を十分に注意し監守しやう。(七)又六の感官の動作をも監守しやう。(八)予は一切の衆生に對し、慈悲を以て吾が心を滿たさう」と言ふのである。彼は此の八個條の誓ひを立て、心を八個の德目の上に樹立し、七日の閒、外出を禁じ、第七日の夜も過ぎ、第八日目の日の出の頃、小食を喰べて、那伽犀那尊者の許に往いた。其の時、王の眼は俯向き勝ちで、物思ひに沈める色を示し、語調には節度あり、態度は柔和に、心は法喜禪悅の思で一ぱいになつて居た。彼は尊者の足を頂禮して、恭しく其の側に立ち、尊者に告げて曰はく、

『那伽犀那尊者よ、朕は貴衲にだけ打ち明けて、篤と御相談したいことがありますから、第三者を來させないやうにして頂きたいのです。で、八個條の何れの點から見ても、出家の人に相應はしい、空漠荒涼な土地、森の中の幽寂な場所で、朕の心の思も祕密も、剩さず隱さず打ち明けたいのです。

今や朕は、貴衲と一心專念に商量して居ますから、祕密の事を聽くに相應はしい境遇です。そして朕が申上げる事柄の意味は、實例を以て明かにされ得ます。尊者よ、寶を貯へる機會が來れば、其の寶を大地に信托するのが[最も]無難なるが如く、我儕は一心專念に商量して居るのですから、朕に祕事を信托しても間違はありませぬ』と。●

それから彼は、尊者と共に閑靜な處に往いて、更に語を續けて曰はく、

『尊者よ、商量せんと欲する人の、避けねばならぬ場所が、八ケ所あります。賢者は決して什麼な場所では商量いたしませぬ。若し爲れば、[商量の]事件は、虻蜂とらずの小田原評議に流れて了ひます。さて其の八種の場所とは、凸凹の土地と、人の怖れる不安定な場所と、風吹く所と、隱匿の場所と、神聖な所と、往還の大道と、危い竹橋の上と、公衆の沐浴場とであります』と。

尊『其等の場所は、商量するに、何の故障がありますか。』

王『凸凹の土地では、商量する事柄が急變したり、冗長になつたり、繁縟に流れたりして、畢竟何等の結論も得られなくなります。不安定な場所では、心が攪亂されます。心が攪亂さるれば、[條を追うて商量の]要點を會得することが能きませぬ。風吹く所では、聲が判然いたしませぬ。隱匿の場所には、立聽きする者が居ます。神聖な所では、心が周圍の莊嚴の氣にうたれて、商量する問題は轉せられて了ひます。往還の大道では、商量が輕躁になり、橋の上では、心が動搖して落ち附かず、公衆の

沐浴場では、商量が普通の會話になります。此の故に、

「高尚なる事を商量せんには、凸凹の土地と、不安定の所と、風吹く場所と、隱匿の地と、神殿と、往還の大道と、橋の上と、公衆の沐浴場と、此等八種の地を避けざる可からず」

と言つてあります。』

王『尊者よ、事件を熟談する場合に、商量を臺なしにする人が八種あります。其の八種とは、多慾に耽るもの、惡意に耽るもの、妄念に耽るもの、憍慢に耽るもの、貪婪飽くなき人、懶惰漢、一方向きの擔板漢、及び癡漢であります。』

尊『其等の人人には、如何いふ故障がありますか。』

王『第一者は其の多慾によりて、第二者は其の惡意によりて、第三者は其の妄念によりて、第四者は其の憍慢によりて、第五者は其の貪婪によりて、第六者は其の怠慢によりて、第七者は其の偏狹によりて、而して第八者は愚癡によりて、商量を腐敗せしめます。此の故に、

「多慾と、瞋恚と、迷惑せる人と、憍慢と貪婪と、懶惰なる人と、一方向きの擔板漢と、憐れな癡漢と、此等八種のものは、高尚なる議論の腐化者なり」

と言つてあります。』

王『那伽犀那尊者よ、凡そ熟議した祕密を漏し、其を心に祕藏しないものに、九種の人があります。其

の九種とは、或る慾に從つて其を漏す多慾の人と、或る惡意の爲に〔其を漏す〕瞋り易き人と、或る誤謬の下に〔其を漏す〕懶惰の人と、恐怖の爲に〔其を漏す〕怯懦な人と、何かを獲んが爲に〔其を漏す〕貪婪飽くなきの人と、薄志弱行の爲に〔其を漏す〕婦人と、飮むことの熱心な爲に〔其を漏す〕大酒漢と、〔身體に〕瑕疵あるが爲に〔其を漏す〕去勢の人と、及び氣の變り易きが爲に〔其を漏す〕小兒とであります。此の故に、

「多慾の人と、瞋恚の人と、迷惑の人と、卑怯漢と、貪婪漢と、婦女子と、大酒漢と、去勢の人と及び小兒と、此等九種のものは、氣變じ易く、心動搖し、且つ卑劣なり。若し彼等に祕事を話さば、そは直に公開の事となるなり」

と言つてあります。』

*　*　*　*　*

王『那伽犀那尊者よ、知見の進步し熟するに、八種の原因があります。其の八種とは、年を取ること、名聲を揚ぐること、幾度も問ひ討ぬること、先生と交際すること、自ら反省すること、賢者と會話すること、博愛の心を養ふこと、及び樂しき土地に住むことである。此の故に、

「名聲を揚げ、年を取り、幾度も討ね問ひ、先生の援助を仰ぎ、正念にして、賢者と會話し、愛の高き人と交はり、樂しき土地に住する。

此等九種［の原因］によりて、人は知見を清淨にし、此等［九種の原因］を有するものは、其の智慧増長するなり」

と言つてあります。』

＊　＊　＊　＊　＊

王『那伽犀那尊者よ、此の場所には大事を熟議するに、何の障礙もありませぬ。而して朕は大事を熟議せんと欲する人にとつて模範的の伴侶であります。朕は祕密を守り得ます。で、朕が生きてる間は、貴衲の祕密も守りませう。朕は只今叙述した八種の方法で、私の知見を成熟しました。貴衲が朕の如な生徒を得らるるのは、決して容易いことではありますまい。

さて教師は正しく己を持する生徒に對して、教師たる二十五の徳を充分に行はねばなりませぬ。然らば二十五徳とは何かとなれば、謂く、教師は恆に且つ間違ひなく、其の生徒を保護し、監視せねばならぬ。彼は生徒をして行ふべき事と、行ふ可らざる事とを知らしめねばなりませぬ。教師は生徒をして(一)事の輕重を知らしめねばなりませぬ。教師は生徒に睡眠と、健康保持法と及び喫してよい食物と、喫して惡い食物とに關して敎へねばなりませぬ。彼は又生徒に［食物の］區別と、布施として應量器の中に入れられたものの分配とを敎へねばなりませぬ。彼は「虞

【一】Pamattāppamattataṁ Jānitabbaṁ は直譯すれば、「怠慢しても可い事と、精勵すべき事とを知らしめねばならぬ」と云ふ義なれども、今は「事の輕重」と意譯して置く。

れるな、汝は［必ず］進歩することが能きやう」と言つて、生徒を策勵せねばならぬ。彼は生徒に向つて伴侶としてよい人と、及び往來してよい村幷に寺とを知らしめねばならぬ。彼は生徒と共に決して戲論を放縱にしてはならぬ。彼は若し生徒に缺過あるを見ば、其を寬恕せねばならぬ。彼は熱心でなくてはならぬ。彼は決して不公平に敎へてはならぬ。彼は事を祕密にし、又何事をも敎へずに隱匿してはならぬ。彼は其心に生徒を自らの子と見做し、「吾は學問の上で彼を產んだ」と思はねばならぬ。彼は「如何にせば生徒の退歩を防止し得べきか」と考へつつ、生徒の進歩に努力せねばならぬ。彼は「われ彼を偉くせん」と考へつつ、生徒をして研鑽の力强い人たらしむるやう決心せねばならぬ。彼は生徒を愛し、決して彼を見捨てはならぬ。彼は生徒のために爲さねばならぬことは、何事でも決して忽せにせず、若し生徒が處置を過つたら、能きるだけ善後策を講じて、力となつてやらねばならぬ。尊者よ、これ則ち敎師の二十五の善德であります。此故に何うぞ、此等の諸德に隨つて朕を遇して下さい。世尊の御言葉中には明かに矛盾があるので、朕は［其の］疑惑に壓せられて居ます。今後恐くは其の矛盾に就いて爭論が起るでせう。而も將來貴衲の如な知見ある導師に會ふことは難しからうと思ひます。［願くは］外道を制伏せんがため、此等の難關を明かにして下さい。』

此に於て長老は、王の所說に同意し、而して（二）在家の佛弟子になくてはならぬ十種の德を叙述して言はく、

【二】在家の佛弟子。優婆塞（Upāsaka）。

『大王よ、世に優婆塞の十德があります。即ち、僧衆と共に沙門の苦樂を享受すること。教法を其の主と仰ぐこと。能きるだけ布施して其を悦ぶこと。世尊の教法の衰頽を見ば、全力を盡して、其復興を計ること。正見を持すること。邪見を捨離し、欲情を興奮せしめず、一生涯、他の導師の許に走らざること。思想品行に於いて自らを警戒し保護すること。平和を愛し、平和を樂むこと。猜忌の心なく、不和の精神を以て、宗教の中に行かぬこと。佛法僧「の三寶」に歸依すること。大王よ、これ即ち在家の佛弟子の十種の美德でありまして、皆陛下の心の中に在るのです。此の故に世尊の教法の衰頽するを見て、其が「復興」繁榮を望まるるのは、陛下にとりて、適當であり、正當であり、且つ相應はしいことであります。』

佛陀に對する供養に就て

爾の時に彌蘭陀王は、師の足下に俯し、合掌低頭して曰はく、

『那伽犀那尊者よ、外道等は「若し佛陀が供養を受けらるるならば、渠は全く寂滅せりと言ふことは能きない。渠は世間の物を受用するのだから、何處かに生きて居て、まだ世間と結び附いて居なければならない。隨つて渠、即ち世間に縛著するものを供養するのは、無益であり、空虚である。若し又渠は全く寂滅して、世間の繋縛を脱し、一切の生存を離れて居るならば、斯るものを尊崇するのは無

用である。何せなれば絶對に解脫せるものは、供養を受納しない、受納しないものに對して、爲す行は空虛となり、無益となるからである」と言つて居ます。が、これは兩角ある兩刀論法です。これ未得道の者の、考へ得る範圍に屬する事件でなく、正に達人の考慮を煩はすべき問題であります。朕は今この込み入つた問題を、貴衲に提出しますから、異端者流の此の網を寸寸に引き裂かれよ。願くは、世尊の未來の子孫のために、外道の惑亂の謎を解き得る眼を與へられよ。』

尊『王よ、世尊は全く寂滅し給ひました。世尊は供養を受け給ひませぬ。世尊は菩提樹の下に於いてすら、供養の享受を拒絕し給ひました。況んや世尊は已に寂滅して、「三界受生の」根本を斷絕し給へるに於てをやです。何せなれば、大王よ、(三)法將たる舍利弗尊者が、

【三】Dhammasenāpati.（ダムマセーナーパティ）

「無等者は諸の天上・人間の禮拜する所となるも、供養禮拜に頓著し給はず、優遇を願ひ給はず、
また拒絕し給はず。
諸佛は過去に於いて是の如くなりき、未來に於いても亦是の如くならむ。」

と言つて居らるるからであります。』

王『那伽犀那尊者よ、父は其の子を讚め、子は其の父を譽めて可いでせう。が、そは敵手を慚愧せしめやうとの立場にあるのではなく、單に彼等が胸中の思を言ひ表はすに過ぎますまい。そこで何うぞ、

貴衲自らの教法を確立するため、且つは異端者流の「非難の」網を解かんがため、此の問題を十分に御説明下さい。』

尊『大王よ、世尊は寂滅し給ひましたから、何等の供養をも受け給ひませぬ。縦令如來は人天の供養を受納し給ひませんでも、若し諸天及び人間が、如來の舍利寶珠を安置せんが爲、殿堂を建立すれば、尚ほ佛陀の智慧の如意寶珠によりて、最上善に到達せるものに尊敬を拂ひ、以て三つの勝れたる狀態の何れかに達するのであります。王よ、炎炎たる大火が燃え、而して消えて了つたと假定せば、其の火は再び乾草、或は乾木の供給を受け容れるでせうか。』

王『尊者よ、其の火が燃えて居てすら、燃料を受け容れると言ふことは能きませぬ。まして其が消えて了ひ、燃えなくなつた無情物が、如何して燃料を受け容れ得ませうぞ。』

尊『では、其大火が燃え止み、而して消えて了つたら、世には火が奪はれて無くなつたでせうか。』

王『いいえ、決して然うではありませぬ。乾木は火の住處であり原素であります。で、火を要する者は何人でも、自らの力を出し、再び木片を旋轉して火を作り、而して其火で、火の要る仕事を爲るのです。』

尊『だから、「供養を受用しない者に對して、爲さるる動作は、空虛であり、無益である」といふ外道等の言は過つて居ます。大王よ、彼の赫赫たる大火が、炎の發する如に、世尊は十千世界に於ける、佛果の榮光の中に、光を放ち給ひます。而して又大王よ、其の火の原素が燃えて消え失せたやうに、世

尊も、亦十千世界に於ける榮光の中に光を放ちて、後有を受くべき根本を殘さざる涅槃界中に寂滅し給ひました。また大王よ、彼の火が消えて了へば、燃料の供給を受納せざるが如く、世尊も、亦世人の供養を受納し給ひませぬ。人は、火が消えて、既に燃ゆる力が無くなれば、自らの力を出し、木片を旋轉して火を起し、火の要る仕事を爲すが如く、縱令如來は既に寂滅して、人天の供養を受納し給ひませんが、而も尙彼等は、如來の舍利寶珠の爲に殿堂を築き、如來の智慧の如意寶珠によりて、最上善に到達せるものに對して尊敬を拂ひ、三つの勝れたる狀態の何れかに達し得るのです。此故に大王よ、如來に向つて爲さるる行は、縱令如來は寂滅して、其を受納し給ひませんでも、決して空虛無益ではありませぬ。

また此の事に關して、他の道理があります。大王よ、世に大風が吹き、それから間もなく、吹き止んだと假定せば、其の風は再び吹き起されることに同意するでせうか。』

王『吹き止んで過ぎ去つた風は、吹き起されやうと言ふ考もなければ、觀念もありませぬ。何せなれば、風といふ原素は、無意識的のものであるからです。』

尊『然らば、大王よ、風が止んで無くなつて了つても、尙ほ風と言ふ言葉は其に適用されませうか。』

王『いいえ、能きませぬ、尊者よ、然し風は團扇や (四)扇風機で起せます。而して暑さの爲めに困るものや、熱病のために苦しめる人は、精出して團

【四】扇風機と云つても、現今の電氣仕掛のそれでなく、印

度には、昔から、熱帶地特有のパンカと云ふ扇風機があつて、天井から吊り下げられてある。で、現今の電氣仕掛の扇風機も、印度では矢張りパンカと稱へて居る。

扇や扇風機で風を起し、以て暑さを和らげ、熱を鎭めることが能きます。』

章『では大王よ、彼の外道等の立言、〔即ち〕「受納しない者に對して、爲さるる供養は、空虛であり無益である」といふのは、其當を得て居ませぬ。大王よ、吹き起れる强風の如く、世尊は十千世界に對して、清涼・平和・芳香・微妙の慈悲の風を吹き起し給ひました。而して風の先づ吹き、次に吹き去れるが如く、清涼・平和・芳香・微妙の慈悲の風を吹き起し給へる世尊も、亦今や寂滅して、後有の根本を殘し給はないのであります。大王よ、人の暑さに困み、熱に惱めるが如く、人天も亦三毒の火の爲に困み惱んで居ます。而して團扇又は扇風機の風を生ずるが如く、如來の智慧の舍利寶珠も、亦三種の勝れたる狀態に達する方便であります。また暑さに困み熱に惱める人の、團扇又は扇風機を以て清風を起し、以て暑さを和らげ、熱を鎭めるが如く、假令、如來は已に寂滅して、供養を受納し給ひませんでも、諸天及び人閒は、如來の舍利及智慧寶珠を尊崇して、彼等の心中に善を起し、以て三毒の熱を和らげ、苦惱を鎭むることが能きます。此故に、大王よ、如來は既に寂滅して、何物をも受納し給ひませんでも、如來に向つてなせる行爲は、決して價値なく結果なきものではありませぬ。

此の事につき、尙ほ他の道理があります。大王よ、人が太鼓の聲を發せしめ、其の聲は既に消え去つたと假定せんに、其の聲は復た起されることに同意するでせうか。』

王『いいえ、決して……尊者よ。其聲は消え失せたのです。そは復た生起されやうとの考もなければ、觀念もありませぬ。太鼓の音は一度び發せしめられ、消え失せてから、全く斷絕して了うたのです。然れど、尊者よ、太鼓には音を發する力があります。で、人は誰でも、其音を發さしむる必要があれば、力を出して其を打ち、以て其の音を發せしむることが能きます。』

尊『大王よ、世尊も、丁度その如くです。世尊は、戒・定・慧・解脫・解脫知見に充滿せる、舍利寶珠の法と戒律と敎訓と敎師とを遺して、自らは後有を遺さず、涅槃界中に寂滅し給ひました。が、三種の到達を遂げ得る可能性は、世尊の寂滅のために、斷絕した譯ではありませぬ。生の苦惱のために壓迫せられたる衆生にして、若し成功到達を願望せば、如來の舍利寶珠と如來の敎義・戒律及び敎訓の力によりて、到達を期することが能きます。此故に、大王よ、如來に對する一切の所爲は、假令如來が寂滅して、其を受納し給ひませんでも、決して空虛でもなく、無結果でもありませぬ。大王よ、世尊は此未來の可能性を豫見して、「阿難陀よ、(五)汝等のうち、或は師主の說法は終りを告げぬ、我等は既に師主を失へりと思ふ者あらむ。されど、阿難陀よ、そは然にあらず。我もし逝かば我が汝等に敎へたる(六)眞理と、我が敎團のために制定したる(七)戒律とを以て、汝等の師主たらしめよ。」と宣說あそばしたのであります。されば、「如來は寂滅して何事をも受納されない。此の故に如來に對する所爲は、

【五】英譯大涅槃經四の一、(一一二頁)
【六】Dhamma.
【七】Vinaya.

皆空虚であり、無益である」との外道等の言は、不正なることが立證されるのであります。彼等の立言は不正・不實・虚僞・顚倒・邪曲の見にして、苦惱の原因となり、苦惱の結果を生み、墮獄沈淪の路を辿る案内者であります。

大王よ、此の事に就て、叉他の道理があります。大王よ、彼の大地は、其の上に諸の種子を蒔き附けられることに同意して居ませうか。』

王『いいえ、尊者よ。』

尊『では、大王よ、其等の種子は、大地の同意を得ずに、何うして根を張り、液汁あり、枝葉ある大木となり、花を咲き、實を結ぶことが能きますか。』

王『尊者よ、大地は同意は致しませんけれども、而も其は諸の種子の爲に、住處たる作用をつとめ、且つ彼等が發展の助縁となるのです。卽ち種子は、地面に蒔き附けられて生長し、大地の助を得て、枝葉あり、花あり、實ある大木となるのです。』

尊『では、大王よ、「受納しないものに對する所爲は、空虚であり、無益である」と言へる外道等は、彼等自らの言語によりて、打ち破られ、打ち負かされ、邪曲なることが立證されました。大王よ、如來・應供・正徧知も、亦た大地の如く、何ものをも受納し給ひませぬ。諸の種子が、大地の助を借りて、花を咲き、實を結ぶ、大木と成るが如く、假令如來は寂滅して、人の供養に應じ給ひませんけれども、

諸天及び人間は、如來の舍利寶珠と智慧とによりて、確固不拔の善根を植ゑ、(八)靜慮の幹を以て世の慈蔭となり、(九)正教の液汁を蓄へ、(一〇)正義の枝葉をのばし、(一一)解脫の花を咲かせ、(一二)沙門の實を結ぶ樹となるのです。此故に、大王よ、如來は寂滅して、世の供養に應じ給ひませんけれども、如來に對する所爲は、尙ほ價値もあり、結果もあるのであります。』

尊『此の事に就て更に他の道理を述べませう。大王よ、駱駝でも、水牛でも、驢馬でも、羊でも、牡牛でも、又は人間でも、其の身體の中に腸蟲の生ずることに同意して居ませうか。』

王『いいえ、決して同意しては居ませぬ、尊者よ。』

尊『では、彼等の同意を得ずに、何うして諸の腸蟲は發生し、而も其の子孫を繁殖させますか。』

王『それは業の力によるのです。』

尊『大王よ、如來、卽ち既に寂滅して世の供養に應じ給はざる御方に對する所爲の、價値あり結果あることも、亦た是の如く、如來の舍利寶珠と智慧の力によるのです。』

尊『此の事に就て更に他の道理を述べませう。大王よ、人は其の體中に、九十八種の病氣の起ることに同意しますか。』

王『いいえ、決して同意は致しませぬ、尊者よ。』

【八】サマーディッカンダ Samādhikkhandha.
【九】ダムマサーラ Dhammasāra.
【一〇】シーラサーカー Sīlasākhā.
【一一】ヴィムッティプッパ Vimuttipuppha.
【一二】サーマンナパラ Sāmaññaphala.

尊『では、病氣は如何して起りますか。』

王『そは彼が前生に於いてなせる（一二）不正の行爲によるのです。』

尊『されど、大王よ、若し前生に於いてなせる不正の行爲のために、現に此の世で苦を受けねばならぬならば、此の世又は以前に爲せる善惡の業にも、其結果がなくてはなりませぬ。此の故に、大王よ、縱令如來は寂滅して、其を受納し給ひませんでも、決して無價値無結果ではありませぬ。』

尊『此事に就て更に他の道理を述べませう。大王よ、陛下は曾て長老舍利弗に手をかけた夜叉（一三）難陀迦が、大地に呑却されたことを御聞き及びになりましたか。』

王『はい、聞きました。其は世に名高い話です。』

尊『では、舍利弗尊者は、難陀迦が大地のために呑却せられることに同意なさいましたか。』

王『尊者よ、假令、天上人間の世界は打ち滅ぼされ、日月は地に落ち、諸山の王たる須彌山は融消しましても、舍利弗長老は、衆生の苦惱を蒙むることに、同意なさる筈はありませぬ。何故なれば彼は已に瞋恚の情を根絶し、掃蕩して居られたからであります。斯の如く舍利弗は、瞋恚の根源を悉く洗却して居ましたから、縱令其生命を奪はんとする者に對しても、憤怒の焔を焚せなかつたでせう。』

尊『されど、大王よ、若し舍利弗が、「大地のために夜叉の呑却せらるることに」同意しなかつたならば、難陀迦が呑却されたのは、如何いふ理由でせうか。』

【一二】Duccarita.
【一三】Nandaka.

王『そは彼が惡業の力によるのです。』

尊『大王よ、若し然らば同意しないものに對する所爲と雖も、尙ほ且つ力あり、果實を結ぶのであります。而して若し惡業すら然りとせば、況して善業の力あり、果實を結ぶべきは、言を俟たざる所ではありますまいか。此の故に、大王よ、如來に對する所爲は、たとひ如來は寂滅して、其を受納し給ひませんでも、決して無價値無結果ではありませぬ。』

尊『大王よ、此の人生に於いて、大地から呑却されたものは幾人ですか。陛下は此の點に就て、御聞及び遊ばしたことがありますか。』

王『はい、聞きました。』

尊『ではお話し下さい。』

王『婆羅門の女（一五）沈茶と、釋迦種族の（一六）須波佛陀と、長老提婆達多と、夜叉の難陀迦と、婆羅門族の（一七）難陀と、此等五人の者は、大地から呑却されました。』

尊『して又、彼等は誰に害を加へましたか。』

王『世尊と其の弟子達とにです。』

尊『では、世尊も及び其の弟子達も、彼等が呑却せられたることに同意なさいましたか。』

王『いいえ、決して……』

【一五】Ciñcā.
【一六】Suppabuddha.
【一七】Nanda.

尊『此の故に、大王よ、如來に對する所爲は、假令如來が寂滅して、其を承認し給ひませんでも、決して無價値でもなく、無結果でもありませぬ。』

王『尊者那迦犀那よ、今や此の深遠なる問題は、貴衲によりて善く説明せられました。貴衲は奥義を明白にし、繫縛を解き、稠林を切り開いて平原となし、外道を征服し、邪見を訂されました。外道の門徒は貴衲に會ひ、其光を失つて闇黑になりました。貴衲は實に各敎各派の上首中の最上首であります。』

佛陀の一切智に就て

王『那伽犀那尊者よ、佛陀は一切智の御方でしたか。』

尊『然うです、佛陀は一切智の御方でした。されど其知見は、常に「意識的に」佛陀から離れなかつたと云ふ譯ではありませぬ。世尊の一切智力は、回向返照に依るのです。で、佛陀は返照し給へば、知らんと欲する事は、何事でも知り給ふことが能きました。』

王『では、尊者よ、若し佛陀は、調査研究によりて、一切智を得られたりとせば、全智者で在つたといふことは能きますまい。』

尊『大王よ、陛下は穀のままなる一百駄の米を有し給ひ、一駄の量を凡そ六石なりと假定せんに、世にその全體の米の幾粒あるかを、卽座に告げ得るものがありませうか。

人の心に七種の階級區別があります。大王よ、身體の訓練を怠り、行爲を愼まず、心を修養せず、また其の智慧を訓練せず、貪・瞋・癡[の三火の焰熾んに]、或は煩惱のために絆さるる人の思考力は、其運營が困難で、且つ其活動が鈍う御座います。蓋し其心意が訓練されてないからであります。其は恰も廣く生ひ茂りて、其の枝葉の互に錯綜せる、藪林の中を曳かれ行く巨大なる竹の、鈍く重苦しい運動のやうに、彼が心の運動も鈍く重苦しう御座います。何故なれば煩惱の錯雜混亂せるがためであります。これ則ち初地の心意[の狀態]です。

第二地[の心意]は、初地[のそれ]から區別せねばなりませぬ。大王よ、地獄の門が閉ぢられ、正見を得、教主の教義を分別する初學の聖者の思考力は、下三品の範圍のみでは、敏活に苦もなく活動することが能きます。されど、それ以上の範圍に於ては、心の生起が重苦しく且つ鈍う御座います。何ぜなれば彼等の心意は、下三品の範圍に於ては清淨ですが、上品に於て消滅さるべき煩惱が、尙ほ存するからであります。大王よ、それは三節位までは立派な幹で、それ以上は枝が互に錯綜混亂して居る巨大なる竹の如なもので、滑かな幹の部分は曳き出すのに容易いですが、それより上部は枝と枝とがこんがらかつて曳き出すに困ります。大王よ、これ則ち心の第二地であります。

第三地[の心意]は第二地[のそれ]から區別せねばなりませぬ。大王よ、斯陀含卽ち一來果の人には貪瞋癡[の三毒]が極めて減少し、下五品の範圍に於いては、彼等の思考力は鋭敏に活動し、苦もなく

働けます。が、それより上の範圍に於いては、心の生起が、重苦しく且つ鈍う御座います。蓋し彼等の心は、下五品の範圍に在りては、淸淨透明ですが、それより上になれば、滅さるべき煩惱が、彼等の心中に、尙ほ存するからであります。そは五節までは奇麗に滑かな幹で、それから上は、枝が互に交錯紛亂せる竹を〔切つて〕曳き出す如なものです。卽ち奇麗な枝のない幹の部分は、容易く曳きずり出せますが、枝と枝との交錯せる上の方は、曳き出すに仲仲容易でありませぬ。これ則ち第三地の心意〔の狀態〕であります。

第四地の心意〔の狀態〕は、第三地のそれから區別せねばなりませぬ。大王よ、下品の五種の結〔卽ち煩惱〕を、全く捨離せる不還果の人の思考力は、十階の處までは、容易く運動を起し、苦もなく活動しますが、それから上になれば、運動が重苦しくなり、活動が鈍う御座います。蓋し彼等の心意は十階の處までは、無垢淸淨でありますが、それから上の地に於ては、まだ滅びざる煩惱が、彼等の心中に存するからであります。そは十節までは奇麗な幹で、それから上は枝が互に交錯紛亂せる竹を〔切つて〕曳き出す如なものです。卽ち十節の處までは、容易く引きずり出せますが、枝の交錯せる上の方の部分は、曳き出すに仲仲容易でありませぬ。これ則ち第四地の心意〔の狀態〕であります。

第五地の心意〔の狀態〕は、第四地のそれから區別せねばなりませぬ。大王よ、阿羅漢果の人は諸漏已に盡き、諸垢已に洗除し、諸惑已に斷じ、生に住して所作已に辨じ、重擔を卸し、自利を逮得し、

〔後〕有の愛著を斷滅し、正智を得、聲聞地に於て、清めらるべき心意の狀態は悉く清めて居ます。彼等の心は、聲聞たる範圍に於ては、容易く運動を起し、苦もなく活動しますが、緣覺地に於ては、その運動が重苦しく、活動が鈍う御座います。蓋し彼等は聲聞たる範圍に於ては、〔實に〕無垢清淨でありますが、緣覺の範圍にありては、〔其心意が〕清淨透明でないからであります。そは恰も節節に生えた枝を悉く刈り去つた竹を曳き出す如なものです。卽ち滑らかですから、苦もなく曳きずり出せるし、又纏れた〔周圍の〕藪にからみ附きませぬ。これ則ち第五地の心意〔の狀態〕であります。

第六地の心意〔の狀態〕は、第五地のそれから區別せねばなりませぬ。大王よ、辟支佛果の人は、無師獨悟、犀屬の孤角の如に閑處に獨居し、其の心〔一切の〕垢を捨離して居ます。彼等の心は、彼等自らの領域內に於いては、容易く運動を起し、苦もなく活動します。が、それより上の一切智たる佛果の領域に於ては、運動が重苦しく、活動が鈍う御座います。蓋し彼等自らの領內に於いては、其心が無垢清淨でありますが、それから上の一切智なる佛陀の心的領域は廣大無邊であるからであります。大王よ、そは恰かも人が自分の所有地內の淺い小河ならば、夜でも晝でも、何等の怖畏する所なく、隨意に渡れますが、深く廣くして際涯なき、洋洋たる大海の邊に到りては、畏怖し躊躇して其處に佇立し、其を渡らんとする元氣が出ない如なものです。何故なれば〔屋敷附近の小河には〕慣れつこになつて居ますが、大海は廣大無邊ですから、渡るに容易でないからです。これ則ち第六地の心意〔の狀

態」であります。
第七地の心意「の狀態」は、第六地のそれから區別せねばなりませぬ。大王よ、自覺覺他覺行圓滿の佛陀は一切智を有し、十力を具し、四無所畏を有し、十八不共法を具し、無邊の勝者にして、無礙の智を有つて居給ひます。彼等の心は一切處に於て、容易く運動を起し、苦もなく働けます。大王よ、善く研ぎ、銹なく、銳利にして、眞直に、垢もなく、歪もせぬ投鎗が、强弩に置かれたと假定せられよ。若し强力な人が奇麗な亞麻布、或は綿布、若くは纖細な毛布に對して、其の投鎗を放たば、其の運動が澁滯し、又は其の切れ味が鈍拙でせうか。』

王『いいえ、決して然うではありませぬ、尊者よ。何故なれば織物は纖細ですし、投鎗は善く鍛へてありますし、射手は極めて强力であるからです。』

尊『大王よ、諸佛の心の迅速にして、苦もなく働をなすことも、丁度それと同じであります。何故なれば彼等の心意は、一切處に於いて、無垢清淨であるからです。これ則ち第七地の心意「の狀態」であります。

大王よ、此等七種の中、最後のもの、卽ち他の六種を超越せる、一切智たる諸佛の心は、其作用は清淨透明、性質は高尙にして、我儕「凡夫の」同類を超越して居ます。大王よ、世尊が二重の奇蹟を現はし給ひますのは、世尊の心意が清淨透明にして、其作用が迅速であるからであります。大王よ、

我儕はそれによりて、諸佛の心が如何に清淨透明にして、其作用の迅速なるかを知ることが能きます。而して其等の奇蹟には、說明され得る理由があるのではありませぬ。されば、大王よ、其等の奇蹟は、推度したり、考量したり、分析したり、區分したりすることは能きませぬ。何ぜなれば世尊の智は返照に屬し、而して渠が知らんと欲するものを、何でも知り給ふのは返照によるからです。されば世尊の一切智は、人が一方の手に持てるものを他方の手に移し、又は開いた口で聲を發し、或は已に口中にある食物を吞み込み、若くは閉ぢた眼を開き、開いた眼を閉ぢ、或は伸ばした腕を曲げ、曲げた腕を伸ばすよりも、もつと迅速に活動し、もつと樂に働けます。縱令諸佛は返照によりて、知らんと欲するものを知ると雖も、而も諸佛は返照し給はぬ時でも、一切智でないのではありませぬ。』

王『けれども、那伽犀那尊者よ、返照は「不明瞭なものを」探究せんが爲に行はるるのです。何うぞ此の問題を明らかにして、私を信服させて下さい。』

尊『大王よ、一人の長者あり、彼は金銀財寶の庫及び米麥等の穀類の藏を有し、醍醐味・油・牛酪・牛乳・酥・蜂蜜・砂糖・糖蜜などは、倉庫又は瓶或は壺等の器物中に貯へて居ました。而して優遇さるべき旅人が、饗應る積りで、其の富豪の家に到著しました。然るに出來合ひの食物は、既に喰ひ盡されて居たものですから、客人の爲に新に甕から米を出して、食事の用意に取りかかつたと假定せんに、其の富豪は、時間外の食物を有たなかつたがため、貧乏だ困窮だと言つて可いでせうか。』

王『いいえ、決して然うは言へませぬ、尊者よ。轉輪聖王の宮廷にでも、時間外には、出來合ひの食物の無いことがあります。況んや普通人の家に於いてをやです。』

尊『大王よ、如來の一切智も亦た是の如く、返照のみが必要で、返照遊ばせば、知らんと欲し給ふものは、何でも知り給ふことが能きます。大王よ、此處に澤山の果實のなつた樹があり、其の樹は果實の房の重味のため、彼處にも此處にも、其枝を垂れて居るが、その果實が一つも落ちて居ないと假定せば、其の場合、果實が落ちて居ないと言ふ理由で、其は不毛の樹だと言つて可いでせうか。』

王『いいえ、決して然うは言へませぬ、尊者よ。何故なれば人が其を喰べる前に、落ちて居ないでも、人は其を落して、喰べたいだけ喰べて可いからであります。』

尊『大王よ、如來の智慧も亦た是の如く、返照は必要ですが、返照さへ遊ばせば、知らんと欲し給ふものは、何でも知り給ふことが能きるのであります。』

王『では、尊者よ、如來は返照し給ふ瞬間に、何でも知り給ふことが能きますか。』

尊『然うです、大王よ。轉輪聖王が心に、輪寶を現はし出さんと欲するや否や、現はし出し得るが如く、如來の智慧も亦た直に返照に伴つて起ります。』

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は確かな理由を以て、佛陀の一切智を立證されました。私は佛陀の一切智者なることを信じます。』

提婆は何故に出家入道を許されたるか

王『那伽犀那尊者よ、誰が提婆に出家入道を許しましたか。』

尊『大王よ、(一八)婆地耶・(一九)阿奴留陀・(二〇)阿難陀・(二一)婆倶・(二二)欣毘羅・(二三)提婆達多の六人の貴公子と、及び理髪師の(二四)優婆離とは、釋尊が正覺を成じ給ひし時、釋尊の成道に隨喜して釋迦族を辭し、世尊に隨つて世を棄てました。そこで世尊は彼等に出家入道をお許し遊ばしたのです。』

王『けれども、出家入道の後、教團の中で分裂を起したものは、提婆達多ではありませんか。』

尊『然うです、俗人も比丘も修道中の學人も、沙彌も沙彌尼も教團の分裂を起すことは能きませぬ。それを敢てし得るものは、教團の中に共棲する受具以上の有能の比丘でなければなりませぬ。』

尊『分裂をなせる者は、如何なる業報を受けますか。』

尊『一劫の長きに亙りて、繼續する〔惡〕業報を受けねばなりませぬ。』

王『では、尊者よ、佛陀は提婆達多が入道の後、分裂を起し、而して一劫の間、地獄の苦を受くべきことを豫知し給ひましたか。』

〔一八〕Bhaddiya.
〔一九〕Anuruddha.
〔二〇〕Ānanda.
〔二一〕Bhagu.
〔二二〕Kimbila.
〔二三〕Devadatta.
〔二四〕Upāli.

尊『はい、世尊は其を知り給ひました。』

王『ですが、尊者よ、若し然うでしたら、「佛陀は一切衆生の苦を抜き、彼等に樂を與へ給ふ慈悲同情の念深き御方である」との言説は、虚僞でなければなりませぬ。若し然うでなく、卽ち提婆達多が入道の後、敎團の中に於て、分裂を起すべきを豫知し給ふことが能きなかつたとすれば、世尊は一切智であつたと言ふ譯には參りませぬ。これ今私が貴衲に提起する矛盾の疑問です。何うか此の縺れた絲束を解き、敵手の議論を破斥して貰ひたい。將來貴衲の如な有智の比丘に會ふのは難しからうと思ひますから、此處で一つ貴衲の力量をお示し下さい。』

尊『大王よ、世尊は慈悲同情の念に富み、一切智を有し給ひました。世尊が、提婆達多の〔惡〕業に〔惡〕業を積み累ね、數劫の長きに亙りて限りなく、地獄から地獄に墮ちて、如何に悲痛苦難な目に逢はなければならぬかを覺知し給ひましたのは、其〔廣大なる〕慈悲の念と、一切を知悉する智慧とを以て、提婆達多の將來の運命を、照見あそばした時であります。而して世尊は、提婆達多の無期の〔惡〕業報も、出家入道の爲の故に有期となり、彼が過去の〔惡〕業より生ずる苦難も、亦その爲めに輕減せらるべきであるが、若しも彼にして出家入道しなければ、永劫の間、苦趣沈淪の基たる〔惡〕業を積集するであらうといふことを知り給ひました。大王よ、世尊は之を知り給ひましたから、慈愍の餘り、提婆達多の出家入道をお許し遊ばしたのであります。』

王『では、那伽犀那尊者よ、佛陀は先づ人を負傷せしめて、それから其傷の上に油を塗り、先づ人を絕壁から投げ落して、それから救の手を垂れ、先づ人を殺して、それから彼に生命を與へんとし、先づ苦痛を與へて、然る後快樂を與へ給ふのですね。』

尊『大王よ、如來は衆生を負傷せしめ、彼等を投げ落し、彼等を殺し給ひますが、そは皆彼等自らの利益のためであります。例せば、大王よ、世の父母達が其子女等の爲を思ひ、彼等を呵責したり、又は毆り倒したりさへする如なものです。是の如く、世尊は、衆生の功德を增進し得る手段なら、何な手段でも採用して、彼等の幸福を補助し給ひます。大王よ、若し提婆達多が、出家入道いたしませんでしたら、彼は俗人として、患難苦惱の基たる、多くの〔惡〕業を積み重ね、數千百劫の永きに亙りて、地獄より地獄に沈み、患難より患難に陷り、絕え間なく苦痛を感受したでせう。世尊は之を知り之を憐んで、提婆達多に出家入道を許し給うたのであります。世尊は、提婆達多が世尊の敎によりて出家入道せば、其の苦惱を輕減せしめ得べしと考へ給ひ、慈愍の爲の故に、重苦を轉じて輕受せしむる手段を採用あそばしたのであります。

大王よ、財產あり、威德あり、名聲高く、家系貴き勢力家が、其の友人又は親戚のものの、朝廷から嚴罰に處せらるるを見て、自己の有する信用の力で、減刑せしめんと欲するが如く、世尊も亦、永劫の間、苦趣に沈淪すべき、提婆達多に出家入道を許すことによりて、且つは戒・定・慧・解脫の力あ

る堪能の性質によりて、彼が受くべき嚴苦を輕からしめ給ひました。
大王よ、例せば良醫の妙藥を以て、重病を輕からしむるが如く、平等の正智を具し給へる世尊も、亦た慈悲同情の力に富める教藥の妙力によりて、提婆達多の出家入道を許し、以て彼が受くべき嚴苦を輕からしめ給うたのであります。大王よ、世尊は、提婆達多の重苦を轉じて輕からしめ給うたがために、罪惡を犯した有罪者といふことが能きませうか。』
王『いいえ、決して然うは言へませぬ、尊者よ、世尊には微塵ほどの過失もありませぬ。』
尊『それでは、大王よ、陛下は、世尊が提婆達多の出家入道を許し給うた道理を、十分に了解し、承認なさらねばなりませぬ。
大王よ、此外まだ、世尊が提婆達多に出家入道をお許し遊ばした理由があります。大王よ、人人が盜賊を捕へ、急いで王の前に來り、「陛下、此奴は太い泥棒で御座います。何うぞ陛下が相當と思し召す刑罰に處していただきたい」と言上しました。すると、王は人人に向ひ、「其奴を城外の刑場に連れて行き、其首を切れ」と命じた。そこで人人は王の命に隨ひ、刑場の方に其の泥棒を連れて參りました。然るに豫て王に近侍する高位の人で、資產もあり、名望も高く、言として聽かれざるなき勢力家が、彼を一見して同情の念にうたれ、人人に向つて「おい貴樣等止せよ、其奴の首を切つてお前等に何の利益があるか。其奴の命は助けてやれ、而して唯手か足を切つて許して置け、我輩が大王の前

は善いやうにつくろふから」と言ひましたので、人人は此の勢力家の言の通りに致しましたと假定せんに、泥棒に同情した其の官人は、泥棒のために恩人でせうか。』

王『尊者よ、彼は泥棒の命を助けたのです。』

尊『されど其の官人は、泥棒が手か足を切られた時、苦痛を感じましたから、處置を誤つては居ますまいか。』

王『尊者よ、泥棒の蒙つた苦痛は自業自得です。で、彼の命を助けてやつた人には、何等の罪もありませぬ。』

尊『大王よ、世尊も丁度その如く、慈愍のあまり、彼を我が敎法の中に入れ、以て其の苦惱を輕減してやらうとの思し召しで、提婆達多に出家入道をお許し遊ばしたのであります。

大王よ、斯くて提婆達多の苦惱は輕減されました。何となれば提婆達多は命終の時に際して、

「我は生生世世、四向四果の最上者、天中の天、人天の導師として、一百の德相を具し給へる、佛陀に歸依し奉る。」

と言つて、來世の歸佛を誓つたからであります。

大王よ、若し陛下が、此劫波を六期にお分ちになりますれば、提婆達多が、敎團の中に於て分裂を起しましたのは、其第一期の終末でありました。それから彼は他の五期の間、地獄の中で苦しみ惱ん

だ後放釋されて、アッティサッラと稱する辟支佛となるのであります。』
王『那伽犀那尊者よ、如來が提婆達多に御惠み遊ばした賜物は實に偉大なものであります。』
尊『されど、大王よ、提婆達多は教團の中に分裂を起し、地獄の苦を感受しましたから、世尊の處置が誤つて居たのではありますまいか。』
王『いいえ、然うではありませぬ。そは提婆達多の自業自得です。彼が苦を輕減さして下さつた世尊には、何等の罪もありませぬ。』
尊『では、大王よ、陛下は、世尊が提婆達多に出家入道をお許し遊ばした理由を御承認なさいませ。大王よ、此の外更に、如來が提婆達多の出家入道をお許し遊ばした理由があります。此處に或人が負傷して血まみれになり、傷の中には其の傷を招いた兇器が、まだ遺つて居て、腐敗せる肉の臭氣は鼻をつき、絶えず變化する症候と、陽氣の變化と、風氣・短氣・痰氣の三の氣分の聯合によりて、苦痛は段段增して居る場合に、上手な外科醫が來て、炎症を鎭めんとの目的を以て、ざらざらする鋭く强い刺戟性の膏藥を貼つたので、炎症は去り、傷は痛まなくなつた。そこで醫士は、刺胳針を以て、其中に刺し込み、苛性的の藥品を以て其を燒き、燒灼してから、亞爾加里性の液を以て洗ひ、傷を乾燥せしむるため一種の藥を塗りました。かくて其病人は全治したと假定せば、大王よ、其外科醫は殘酷の心を以て、是の如く膏藥を貼り、刺胳針を刺し込み、苛性の棒を以て燒灼し、鹽水を以て洗滌した

のでせうか。』
王『尊者よ、いいえ決して然うではありませぬ。彼は其の心に親切の情を懷き、其の人の幸福のために、其等の手當を施したのであります。』
尊『でも、病人は其ため大變苦痛を感じましたから、醫士先生は苦痛を起さしめたと言ふ點から見て、處置を誤つた有罪者ではありますまいか。』
王『何で其麼ことが言へませうぞ。人の幸福のためを計り、親切を以て爲したことが、爭で處置が惡いと言へませうぞ。親切を込めて手當した醫士の行爲は、實に天の祥福を價します。』
尊『大王よ、世尊も亦た是の如く、慈悲同情を垂れ、其の苦惱を輕減せしめんがため、提婆達多の出家入道をお許し遊ばしたのであります。
大王よ、此の外更に、世尊が提婆達多の入道をお許し遊ばした理由があります。人あり、刺を刺したと假定せんに、他の人が來て、親切にも外の鋭き刺又は針を以て、刺のささつた局部を丸く切り裂き、其の間、大分血は流れ出たが、兎に角その刺は拔けた。大王よ、此の人は殘酷の心を以て、斯くしたのでせうか。』
王『いいえ、決して然うではありませぬ、尊者よ。彼は親切の心を以て、其の人の幸福のために手術を施したのです。若し彼が手術を施さなかつたならば、其の人は死んだかも知れませぬ。或は又死ぬや

うな苦痛を見たかも知れませぬ。』

尊『大王よ、如來も亦た是の如く、慈愍のあまり、提婆達多の苦を輕滅せんがために、彼が出家入道をお許し遊ばしたのです。若し如來が、提婆達多の入道をお許しになりませんでしたら、彼は數千百劫の閒、生を代へ身を代へて、地獄の苦を嘗めたでせう。』

王『然うです、尊者よ。如來は提婆達多が流に逆つて頭を向け、洪水のために押し流されつつあつたのを向き直さしめ給ひました。如來は密林の中に這入り込んで、途惑ひして居た提婆達多に、路を指示し給ひました。如來は斷崖絕壁から落ちつつあつた提婆達多に、確な足場をお與へになりました。如來は滅亡の淵に沈淪せんとして居た提婆達多に、平和を恢復せしめ給ひました。されど、尊者よ、此等の事柄に關する意味も道理も、貴衲のやうな碩德でなければ、誰も指示することは能きませぬ。』

吠三多羅の地震

王『那伽犀那尊者よ、世尊は、(三五)「比丘衆よ、大地震の遠近の原因に八種あり」と仰せられました。此は含蓄ある叙述であります。此の叙述は「都ての場合を盡して居ますから」補遺の餘地なく、註解を加ふることは能きませぬ。だから地震には第九の原因のある筈はありませぬ。若し「第九の原因が」ありましたら、世尊は必

【三五】巴利語大涅槃經第三卷一三、及び同經英譯四五頁に出づ。

らず其をお說き遊ばした筈です。而も世尊の其を說示し給はざりしは、［八種の外に］他の原因がないからでありませう。然るに我儕は「吠三多羅が大布施を行うた時、大地が七たび震動したといふことを聞き、［八種の外に］第九の原因の存すべきことを推知し得ます。尊者よ、若し地震の原因が八種に限ぎられて居ますなら、吠三多羅が大布施を行ふに當り、大地が七たび震動したといふのは虛妄でありませう。若し又それが事實とすれば、地震の原因に八種ありといふ敎說は間違でありませう。此の兩頭の疑問は極めて煩瑣であり、解明し難き、闇黑な深淵をなして居ます。貴衲の如き碩學でなければ、少智のものは何人も之を解決することは能きませぬ。』

尊『大王よ、世尊の敎說中に、陛下が今お述べ遊ばした如なことのあるのも事實ですし、又吠三多羅大王が大布施を營んだ時、大地が七たび震動したことも事實です。が、そは時候外れの孤立した出來事で、八種の普通的原因の中に含まれないから、普通的原因の一として、數へ給はなかつたのであります。大王よ、世間一般の雨と稱するものに、雨期の雨、冬期の雨、及びアーサーラ、并にサーヴナ兩月の雨と、三種あります。而して若しこれ以外に雨が降れば、時候外れの雨として、普通の雨といふ雨の中には、數へないやうなものです。大王よ、或はヒマラヤ山脈から流れ出る河は五百もありますが、而も恆河・ヤムナ・アチラヴティー・サラブー・マヒー・信度・サラスヴティー・エートラヴティー・ギータムサー及びチャンダバーガの十河だけを、河の數の中に算へ、他は流れに間斷があるので、河と云

ふものの中に算へられない如なものです。大王よ、或は叉王の下には、百二百の官吏が居ますが、彼等の中の六人、卽ち軍司令官・宰相・裁判長・大藏大臣・國王の日傘捧持者、及び國王の刀劍捧持者のみを國務官吏として勘定し、他は皆その數にいれないやうなものです。大王よ、此等の場合に於けるが如く、吠三多羅が大布施を行うた時、大地が七たび震動したのは、八種の普通的原因から區別すべき、孤立特殊の出來事ですから、八原因の中に算へないのであります。

大王よ、陛下は、勝者卽ち佛陀の敎に於いて誓願を起し、現世の樂を享くるものの名聲は、諸天の世界にまでも、達したことをお聞き及びですか。』

王『はい、聞きました。佛陀の敎に於いて誓願を起し、現在の樂を享け、其の名聲、諸天の世界にまでも達したものに、七の場合があります。』

尊『然ういふことをした人達は誰ですか。』

王『尊者よ、そは華蔓製造人の(二六)スマナと、婆羅門族の(二七)エーカ・サータカと、雇ひ人の(二八)プンナと、女皇(二九)マッリカーと(三〇)ゴーバーラの母なる女皇と、優婆夷(三一)スッピヤーと、奴隷女(三二)プンナーと、此等の七人者は、現世の樂を享くる誓願をなし、其の名聲、諸天の間にまでも達しました。』

尊『大王よ、陛下は、人身の儘にして、而も三十三の天堂に昇つた者のことをお聞き及びですか。』

【二六】スマナ Sumana.
【二七】エーカ サータカ Eka-sātaka.
【二八】プンナ Punna.
【二九】マッリカー Mallikā.
【三〇】ゴーバーラ Gopāla.
【三一】スッピヤー Suppiyā.
【三二】プンナー Punnā.

王『はい、聞きました。』

尊『其等の人達は誰ですか。』

王『音樂家（三三）グッティラと（三四）サーディーナ王と（三五）ニミ王と（三六）マンダーター王と、此の四人者は、昔この光榮ある難かしい行ひをして、人身のままで三十三の天堂に昇りました。』

尊『されど、大王よ、陛下は布施が行はれた時、現世又は過去世に於いて、一度二度又は三度、大地の震動したことをお聞き及びですか。』

王『いいえ、聞いたことはありませぬ。』

尊『大王よ、私も亦た是の如くです。たとひ私は傳說を會得し、佛法の研究と、聽聞と、暗誦と、聖弟子たる資格の獲得に專心し、且つ師の膝下に坐して學び、事を問ひ且つ疑問に答へんことを準備しましたけれど、吠三多羅大王の大布施を行へる場合の外、未だ曾て是の如きことを聞いたことはありませぬ。且つそれ迦葉佛と、釋迦牟尼佛との時代には、數千百年の間隔がありますが、而も其の間に、是の如き事件の起つたことは聞きませぬ。大王よ、大地を震動せしむるといふことは、通常の努力や奮鬪では能きませぬ。大地が搖ぎ、震ひ動かされるのは、正義の重さに威壓せられ、絕對清淨なる善行の重荷に堪へきれない場合であります。例せば馬車に過重の荷物を負はすれば、其の轂や輻が破げて、車軸が二つに折れるやうなものです。或は又大

【三三】グッティラ Guttila.
【三四】サーディーナ Sādhīna.
【三五】ニミ Nimi.
【三六】マンダーター Mandhātā.

空が、風のために追ひ捲られる嵐の雨で覆はれ、群がり集へる雨雲の重荷に堪へかね、旋風の襲撃に會うて、轟轟たる音を立て、叫び狂ふやうなものです。大王よ、大地も亦た是の如く、吠三多羅大王の大布施の、異常な重荷と、廣く行き亙れる功德力とを、支へきれずに搖ぎ出して、震ひ動いたのです。何故なれば吠三多羅大王の心は、貪にも住せず、瞋にも住せず、癡にも住せず、慢にも住せず、妄見にも住せず、煩惱にも住せず、揣摩臆測にも住せず、不滿不足にも住せず、唯布施にのみ住し、「何物かを要求するもの、及び未だ來らざる者をして、悉く來り且つ欲するものを取り、充足飽滿せしめやう」と考へつつ、限りなく布施し、以て其心を安んじて居たからであります。大王よ、彼は克己・寂靜・忍辱・自制・節慾・意志の自由・柔和・慈悲・眞實・清淨等の十種の狀態に、其の心を專注して居ました。大王よ、彼は全く動物的慾望の滿足を求むる心を捨離し、未來生活の愛著心を征服して、驀直に向上生活に向つて、前進せんことを努めて居ました。大王よ、彼は自分の爲に謀る念慮は、全く振り棄てて、專ら他の爲に謀つて居ました。彼の心は「如何にせば一切衆生を平和・健全・富貴・長命ならしめ得るか」といふ觀念にのみ專注されて居ました。大王よ、彼が一切の所有物を布施しましたのは、自分が榮華の身分に再生せんがためでもなく、財寶を得んがためでもなく、報賞を得んがためでもなく、他に媚び諂はんがためでもなく、自らの命を長からしめんがためでもなく、高貴の門地を得んがためでもなく、幸福を得んがためでもなく、權力を得んがためでもなく、名譽を得んがためでもなく、

子孫のために計らんがためでもなく、唯一切智智、及び一切智智の寶の爲に、是の如く無量無邊廣大の布施を行うたのであります。斯くて彼は一切智に到達して、下の頌を歌ひ出しました。

(三七)「予は、我が子(三八)チャーリも、我が女(三九)カンハーも、我が后、我が妻(四〇)マッディーも捨てて、ただ菩提のため[の他は、何事をも]思はざりき」と。

大王よ、吠三多羅大王は(四一)瞋恚の人に勝つに柔和を以てし、不善の人に勝つに善を以てし、吝嗇の徒に勝つに施與を以てし、虚言吐きに勝つに實語を以てし、一切の不善に勝つに正善を以てせられました。而して正法を追求し、正法を以て其目的とせる彼の大王が、布施を行ひました時、大地は其布施より結果せる、感應道交の大勢力のために震動せられて、大風が起りました。而して其の大風は、次第次第に吹きすさんで、上下左右に大地を振動せしめ、土壤に根づける大木はよろめき初め、雲の塊は大空に集合し、暴風沙塵を卷いて天日ために闇く、一陣の颶風吹き叫んで、天地も轉た騷然愕然たるものがありました。そして暴風颶風の狂ひ叫ぶにつれて、[天下の]諸水が次第に動き初め、怒濤岩礁に激して、水中の動物ために驚怖し、大波小浪一時に沸騰して、大海ために咆哮し、水煙天に漲つて泡沫沸騰し、大洋は其の玄底を盡して、水四方に迸り、怒濤狂波、澎湃として縱橫に暴れ廻つたのです。此に於て阿修羅・伽樓陀・夜叉・

【三七】若用藏、吠三多羅所行品第九の五十二頌參照。
【三八】Jāli.
【三九】Kaṇhā.
【四〇】Maddī.
【四一】法句經の第二百二十三頌と比較し見よ。

龍屬等は、皆怖れ驚いて戰慄し、「何だらう、何うしたのだらう、大海は上から下へひつくりかへされさうだ」と思ひつつ、怖は怖はながら、逃げ路を探しました。而して是の如く、〔天下の〕諸水が動搖し攪亂したものですから、大地も亦た震動し初め、山岳も大海も其のために鳴動し、大磐石の須彌山も亦た旋轉して、岩石の山顚は捩ぢこぢられました。而して大地の震撼のために、蛇・蝮蛇・猫・野狐・鹿及び鳥類は大いに悲痛し、無力の夜叉は泣き、有力の夜叉等は打ち欣んだのであります。

大王よ、大きな釜を竈の上に置き、それに一ぱい水を入れ、米粒を詰め込み、それから其の下に火を焚けば、先づ最初に釜が熱くなり、次に水が煮立つて沸騰し、次に米粒が熱を受けて、水の中を彼處此處に潜り歩き、數多の泡沫の玉が出來る如に、吠三多羅大王が、天下の人の、最も難しとする大布施を行つたものですから、下界の風は、其大布施の偉力に、震撼せられざるを得なくなり、大風が吹き叫んだものですから、〔天下の〕諸水が動搖し、〔天下の〕諸水が攪亂されたものですから、大地が震動したのです。卽ち風と水と大地とは、大布施の偉力に感應共鳴して、一致の歩調を取つて、天地を震撼させたのであります。陛下よ、吠三多羅大王のやうに、大布施を行うたものは、決して他にはありませぬ。

大王よ、價値ある數多の寶玉卽ち(四二)青玉(四三)大青玉(四四)如意寶珠(四五)瑠璃(四六)亞麻玉(四七)莉毬花玉(四八)マノーハラ玉(四九)日愛石(五〇)月愛石(五一)金剛石(五二)カ

【四二】Indanīla.（インダニーラ）
【四三】Mahānīla.（マハーニーラ）
【四四】Jotirasa.（ジョーチラサ）
【四五】Veḷuriya.（ヹールリヤ）
【四六】Ummāpuppha.（ウムマープッパ）

ッジョーパッカマカ（五三）黄玉（五四）ルビー（五五）マサーラ石等が、地中から掘り出されますが、寶玉中の王たるものは、其の光輝が餘他の寶石に勝れ、一由旬四方を照らします。陛下よ、吠三多羅大王の大布施は、丁度その寶玉の王の如く、地上に行はれたる、何の布施にも勝れ、且つ大きかつたのでありますから、布施中の王と認められて居るのです。而して其の大布施に感じて、大地は七たびも震動したのであります。』

王『那伽犀那尊者よ、そは諸佛の不可思議なる所であります。而して如來は菩薩時に於いてすら、溫和で、親切で、世に比し較ぶべきものなく、其の目的の高尙にして、又その努力の大なりしことは、最も不可思議であります。尊者よ、貴衲は菩薩の偉力を明かにし、最勝者の圓滿完全なることを、最も善く明かにされました。貴衲は如來が人天の世界に於いて、聖淨なる生活の實行を繼續し給ひしが故に、如何に最高最善なるかを示されました。那伽犀那尊者よ、貴衲は善く御說明になりました。最勝者の法門は〔貴衲によりて〕擧揚せられ、最勝者の萬德圓滿なることは〔貴衲によりて〕益その輝を增し、外道等の議論の難問は〔貴衲によりて〕解明せられ、外道の理論の瓶は粉微塵に打碎かれ、深玄幽妙の問題は〔貴衲によりて〕明快に解答せられ、〔教義上の〕藪林は〔貴衲に開拓せられて〕平野となり、最勝者の子等は、心中の願望を遂げました。於戲、諸學派の上首中の最上首

【四七】Sirisapuppha.（シリーサプッパ）
【四八】Manohara.（マノーハラ）
【四九】Suriyakanta.（スリヤカンタ）
【五〇】Candakanta.（チャンダカンタ）
【五一】Vajira.（ヴジラ）
【五二】Kajjopakkamaka.（カッジョーパッカマカ）
【五三】Pussarāga.（プッサラーガ）
【五四】Lohitanka.（ローヒタンカ）
【五五】Masāraggalla.（マサーラッガラ）

よ。善哉、御說御道理です、朕は貴衲の御說通りに信受いたします。』

（五六）尸毘王

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は「尸毘王は、人の請を容れて、彼に其の兩眼を與へ、盲目となられた時、新しい眼が、天から王に與へられた」と言はれますが、此の說明は、拙いと思ひます。で、其說者は、非難攻擊の矢面に立たねばなりますまい。何せなれば經文の中に「原因の全く滅却せられて、既に何等の原因も、何等の實體も殘されずんば、天眼は決して生せず」と說いてあるからであります。で、若し尸毘王が、眞個に其兩眼を施與して了つたとすれば、彼が新らしい眼を得たとの記述は、虛僞でなければなりませぬ。若しまた彼に天眼が生じたとすれば、其眼を施與して了つたとの記述は、虛妄でなければなりませぬ。これ亦兩頭論の矛盾で、亂麻を解くよりも難かしく、箭よりも一層銳く、稠林よりも一層縺れた問題であります。いま朕は此の問題を貴衲に提出いたしますから、貴衲は外道の非難に對して、天晴れ辯解の聖業を成就せんとの誓願をお立てなさい。』

尊『大王よ、尸毘王は、「眞個に」其兩眼を施與して了ひました。ですから其點に就ては、秋毫の疑ひも挾み給ふな。また王が肉眼を施與した代りに、天眼を得たのも事實ですから、陛下は此點に就いて

【五六】 尸毘(Sivi)王。

も、疑ひを挾んではなりませぬ。』

王『ですが、尊者よ、天眼は、其原因が全く破滅せられ、何等の原因も、何等の實體もないのに、生ずることが能きますか。』

尊『それは勿論能きませぬ、大王よ。』

王『では、尊者よ、眼の原因は全く破滅せられ、何等の原因も、何等の實體も殘されないのに、如何なる理由で天眼が出來たのですか、今その理由を聞かせて頂きませう。』

尊『大王よ、世に眞理と言ふやうなものがありますか。して又その眞理を信ずる人の誓言によつて、眞理の作業が爲し果されますか。』

王『尊者よ、眞理は確に在ります。而して其の眞理の信者によつて、雨が降らされたり、火が消されたり、毒の効驗が除き去られたり、其の他彼等が爲さんと欲する樣樣の事が成し遂げられます。』

尊『大王よ、此の事件も丁度それと同じであります。尸毘王に天眼が出來たのは、〔全く〕眞理の力によるのであります。他に何等の原因もないのに、天眼が出來たと云ふのは、〔實に〕眞理の力によるのであります。何せなれば此の場合に於いては、眞理それ自らが、天眼出生の原因であるからであります。大王よ、法術の達人あり、「大雨を降らしめよ」との呪文を唱へたるに、其の呪文吟誦〔の力〕によつて、大雨沛然として來つたと假定せば、此の場合、雨を降らし得る原因が、大空の中に積集せられて

居たのでせうか。』
王『いいえ、尊者よ、呪文それ自らが降雨の原因です。』
尊『大王よ、尸毘王の天眼を得た場合の原因も、亦た丁度その通りです。別に普通の原因があつたのではなく、眞理それ自らが、天眼を出來すに、十分の原因理由であつたのであります。大王よ、法術の達人あり、「いま大風をして、怒り狂へる猛火を吹き消さしめよ」との呪文を唱へたるに、火は瞬く閒に吹き消されて了つたと假定せば、此の場合、別に猛火を吹き消さしむるに足る、何等かの原因があつたのでせうか。』
王『いいえ、尊者よ、呪文それ自らが其の原因です。』
尊『大王よ、今それ尸毘王の場合に於いても、丁度それと同じく、別に普通の原因があつたのでなく、眞理の力それ自らが十分なる原因であつたのであります。大王よ、ある法術の達人が呪文を唱へて、「此の惡性の毒をして、病を癒やす大藥たらしめよ」と言ひたるに、その毒が瞬く閒に變じて藥となつたと假定せば、此の場合、何等かの原因が貯へられて居て、毒が變じて藥となつたのでせうか。』
王『いいえ、尊者よ、決して然うではありませぬ。呪文それ自らが、惡性の毒を藥に變せしむる原因であつたのであります。』
尊『大王よ、尸毘王の場合も、丁度それと同じく、別に普通の原因があつた譯ではなく、眞理それ自ら

が、彼の眼を再生せしむるに足る、十分の原因であつたのであります。』

尊『大王よ、四聖諦に通達するにも、他の原因があるのではありませぬ。四聖諦に通達するのは、矢張り眞理の實行によるのであります。

大王よ、支那の國に一人の王樣がありました。彼は大海を誘惑せんと欲して、四ケ月に亙り、嚴肅に眞實の動作を實行し、それから獅子に引かせた寶穀に乘つて、一由旬の間、海の中に入りました。すると寶穀の前面に、大浪が轉がりかへり、彼が其處を去つた時も、復その場所を掩ひました。が、大洋は、總ての人天の普通の體力を合せて、回轉せしむることが能きませうか。』

王『いいえ、尊者よ、小さな溜池の水すら回すことは能きませぬのに、何うして大海の水を回らすことが能きませうぞ。』

尊『では、大王よ、是によつて眞理の力をお學びなさい。世に眞理の力の達し得ない所はありませぬ。

大王よ、聖主、阿育大王は、一日、華子城の市中に於て、大洪水のために、河一ぱいに溢れ汎濫する恆河――長さ五百由旬、廣さ一由旬――の大流を觀望する都鄙の民衆や、國務大臣を初め、大小の官吏等の群集の中に立つて居られました。而して彼は其の有司のものに向ひ、「誰か此の恆河の大流を逆流せしめ得るものがあるか」と問はれました。すると有司のもの共は、「陛下よ、そは到底不可能のことで御座います」と答へました。

然るに其の河畔に集へる群集の中に、瀕圖摩帝と云ふ一人の娼婦が居て、人人が阿育大王の質問せる所を、口口に相傳へるのを聽き、「茲に妾が居る。妾は華子城の市中で、肉體を賣つて生活する、最も賤しい家業に從事する娼婦である。が、今大王をして、妾の如な賤しいものですら、行ひ得る眞理の作業の偉力を觀せしめよ」と獨語しつつ、眞理の作業を行つた。すると恆河の大流は、群集の面前で、瞬く間に、猛り狂つて逆流しました。

時に阿育大王は、恆河の大流の渦を卷いて、怒濤を揚ぐる轟然たる音を聞き、大いに怪み驚いて、有司に向ひ、「これ、これ、如何したのぢや、大恆河が逆流して居るぢやないか」と問はれたものですから、有司等は、事の起つた次第を逐一言上致しました。すると大王は、大に感動して、直に自ら娼婦の處に往き、

「世人は其方が眞理の作業を行つて、恆河を逆流せしめたと言つて居るが、それは眞實か。」

娼「はい、左樣で御座ります、陛下よ。」

王「如何して其方に、其麼な力が在るのか。又其方の言葉を、意のままに受取るものは誰であるか。して又、其方の如な賤しいものが、此の大河を逆流せしめ得るのは、何の力によるのか。」

娼「陛下よ、妾が恆河の大流を逆流せしめましたのは、眞理の力によるので御座います。」

王「でも、其方の如く、不義淫蕩にして罪深く、破倫沒德な行ひをなし、莫迦漢を生捕つて生活するも

のに、如何して眞理の力が在り得るのか。」

娼「陛下よ、陛下の仰せ給ふことは、全く眞實で御座います。妾は仰せの通り、畜生同然の身分で御座います。が、妾のやうなものですら、人天の世界をひつくりかへし得る程に、眞理の作業の力は偉大で御座います。」

王「では眞理の作業の力とは甚麼なものか、朕の前で其を話して見よ。」

娼「陛下よ、妾は妾にお金を下さる方は、何方でありませうとも、卽ち刹帝利族の人でも、婆羅門族の方でも、毘舍族の人でも、首陀族のものでも、皆齊しく尊敬いたします。妾は縱令刹帝利族の高貴な御方に會ひましても、又は首陀族の奴隷に會ひましても、妾の愛情を二三にして、一を尊び、他を賤むと云ふやうな事は致しませぬ。妾は妾を買つて下さる御方に對しては、齊しく奉仕し、同一にもてなし、決して一方に媚を呈し、他方を嫌忌するが如きことは致しませぬ。陛下よ、此の心を持することが、恆河を逆流せしむる底の力ある、眞理の作業の根本で御座います。」と。

大王よ、是の如く眞理に固守するものの、享受し得ないものは何にも御座いませぬ。されば、彼の尸毘王が、彼に乞へるものに對して其の眼を施與し、而して天より眼を受領しましたのは、全く此の眞理の作業によるのです。ですが、彼の經文に「肉眼を破滅し、其因及び其が由つて立つ根柢を取り去れば、天眼は生起しない」とありますのは、單に沈思冥想より生起する眼、卽ち智見を云ふのです。

陛下よ、經文の意味は是の如くに取らねばなりませぬ。』

王『善哉、那伽犀那尊者よ、貴衲は朕が提出した疑問を實に善く解決されました。貴衲は朕が貴衲等の誤謬を訂さうと企てた點をば、實に善く說破されました。貴衲は十分に外道を征服なさいました。私は貴衲のお言葉の通り信認いたします。』

正法の存續に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、「されど阿難陀よ、(五七)正法は五百歲の間のみ、世に住すべし」と宣ひ、又入滅し給ふ時に當り、(五八)須跋陀比丘の問に對して、(五九)「されど若し善く比丘衆の、〔我が敎法の中に於いて〕、純淨の生活を營まんには、世間は阿羅漢の剝奪者たらざるべし」と宣ひました。而して後者は絕對的の宣說であり、全體的の宣說であり、說明を許さない宣說であります。で、若し第一の御言葉が眞實だとすれば、第二の御言葉は虛僞となり、第二の御言葉を眞實だとすれば、第一の御言葉は虛僞となります。これ又兩頭にかかる疑問でありまして、藪林よりも一層入り亂れ、强力の人よりも一層力强く、縺れた絲よりも一層縺れて居ます。朕は今これを貴衲に提出致しますから、何うぞ、大海の巨獸の如き、貴衲の智力の廣大なることをお示し下さい。』

【五七】小品 (Cullavagga) 一〇の一の六。英譯「毘奈耶原典」第三卷、三二五頁に出づ。
【五八】Subhadda.
【五九】巴利語大涅槃經第五卷六二。同經英譯一〇八頁に出づ。

尊『大王よ、陛下が、いま引用された御言葉は、兩者とも世尊の御言葉に相違ありませぬ。が、其御言葉は、兩者ともに、精神も文字も異ふのであります。卽ち一は教法存續の期間に關しての御言葉で、他は宗教的生活の實行に關する御言葉であります。此の兩者の閒には、天と地との如く、極樂と地獄との如く、善と惡との如く、苦と樂との如き、廣大なる相違があります。が、いま衲は陛下の御尋を無益に終らざらしめんが爲に、根本的の關係に於いて、此の事柄を說明いたしませう。

大王よ、世尊が、「正法の世に住すること五百歲ならん」と仰せられましたのは、正法存續の殘餘を制限し、其の瓦解の時を明示し給うたのであります。何となれば世尊は「阿難陀よ、若し教團中に、婦人の出家、卽ち比丘尼の入道を許さなかつたならば、正法は世に住すること一千年ならんも、今や〔比丘尼を許せしが故に、〕正法の住時は五百歲ならん」と宣ひましたからであります。然も大王よ、世尊の斯く宣ひしは、正法の消失滅盡を豫言し、又は大悟の上に非難〔の矢〕をお投げ遊ばしたのでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して然うではありませぬ。』

尊『然うです。そは傷害の起る告知であり、殘餘のものの極限の告示でありました。例へば收入の減少した人が「私はこれこれ殘つて居る」と公に宣言し、剩つた高を確かむるやうなものです。世尊も亦た「阿難陀よ、正法の世に住すること五百歲ならん」と宣ひつつ、損傷されたものを公言し、殘れる

ものを公布して、人天の閒に知らしめ給うたのであります。卽ち是の如く宣言して、其の教法の極限を定め給うたのであります。されど須跋陀に對して「されど若し能く比丘衆の、『我が教法の中に於いて』純淨の生活を營まんには、世閒は阿羅漢の剝奪者たらざるべし」と宣ひましたのは、宗教の成立する所以を御說破あそばしたのであります。陛下は說法された事柄と、事物の極限とを混亂して居らつしやるやうです。で、若し陛下が、二つの事柄の眞の關係を知らんと思召さば、衲は其をお話しいたしませう。十分に御傾聽あそばせ、眞面目に私の申上る事を御注意あそばせ。

大王よ、此處に一の貯水池あり、新鮮清涼な水が、その池一ぱいに充ち滿ちて居るが、其の大さに限りあり、其の周圍には堤防が築いてあると假定します。而して池の水は少しも減つて居ないのに、若し沛然たる大雨が降り續きましたら、如何でせう、池中の水量は減るでせうか、或は又無くなるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して減りもしなければ、無くなりもいたしませぬ。』

尊『ですが、そは如何いふ理由ですか、大王よ。』

王『そは打ち續いて雨が降つたからです。』

尊『大王よ、勝者の敎たる最上妙法の貯水池も亦た是の如く、無垢の生活と持戒と德行との新鮮清涼なる水を以て充ち滿され、且つ天中の最高天に至るまで、有ゆる限界に溢らされ、且つ佛子といふ雨が、

絶え間なく其の貯水池に降り込み、加ふるに純淨の生活と持戒と德行との、新鮮淸涼なる雨を以てせば、正法の貯水池は永へに持續され、世間は阿羅漢の剝奪者となることはありませぬ。これ世尊が、「されど、須跋陀よ、若し能く比丘衆の、〔我が教法の中に於いて〕無垢純淨なる生活を營まんには、世間は阿羅漢の剝奪者たらざるべし」と宣うたお言葉の意味であります。大王よ、炎炎と燃えて居る竈に、絶えず乾いた牛糞、薪、又は乾いた木の葉を加へ供給すと假定せば、其の火は消え失せるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して消えないのみならず、寧ろ猛烈な炎を發し、一層著しく燃えるでせう。』

尊『大王よ、勝者の教法も亦た是の如く、純淨無垢の生活と持戒と道德の實行とによつて十千世界を照破し輝します。若しまた大王よ、それに加ふるに佛子等自らの（六〇）五神足と、絶え間なき勇猛精進とを以てし、正行の完成を期して絶對に一切の邪惡を避け、人生の正義、卽ち戒律を守りましたならば、其の時こそ勝者の教法は、年の廻ると共に、益根強く成長し、世間は決して阿羅漢の剝奪者とはなりますまい。大王よ、これ世尊が「されど、須跋陀よ、若し能く比丘衆の、〔我が教法の中に於いて〕純淨無垢の生活を持續するあらば、世間は決して阿羅漢の剝奪者たらざるべし」と宣說し給うた所以であります。

【六〇】普通の佛教聖典には、四神足を擧ぐ、五神足とは未だ曾て本經以外に見たことがない。

大王よ、人あり、純良柔軟なる赤き磨粉を以て、旣に業に善く拭磨せられた、無垢清淨なる鏡を磨かんには、その鏡面は塵や埃や垢で曇らされるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して曇らされませぬ。寧ろ其は以前よりも更に無垢清淨なものとなります。』

尊『大王よ、本來無垢清淨にして、罪障の塵埃に染まざる勝者の敎法も、亦是の如くであります。若し佛子が罪障を振り拂ひ、其を根絕し、純淨の生活と、及び持戒修德の實行より起り來れる功德とを以て、〔佛法の〕鏡を磨かば、佛法は永へに繁昌し、世間は阿羅漢の剝奪者とはなりますまい。大王よ、これ世尊が「されど須跋陀よ、若し能く比丘衆の、我が敎法の中に於いて、純淨無垢の生活を營むあらば、世尊は阿羅漢の剝奪者たらざるべし」と宣ひし所以であります。何となれば、大王よ、世尊の敎では、行爲が其の根柢であり、行爲が其の心髓であり、行爲にして衰へなければ、そは永へに繁昌するからであります。』

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は正法の衰亡と言はれますが、其の衰亡とは何を意味するのですか。』

尊『大王よ、敎法の衰亡に三あります。卽ち智的會得力完成の衰亡と、如法なる行爲の衰亡と、外形の衰亡とであります。大王よ、若し智的會得力が亡くなれば、正行を修する人でも、明瞭な理解が能きなくなり、若し如法の行爲が亡くなれば、聖弟子等の規律の宣傳が杜絕して、單に宗敎の外形のみが遺り、外形の形式が衰亡すれば、傳說の繼承が斷絕します。大王よ、これ卽ち正法衰亡の三種の狀

態であります。』

王『那伽犀那尊者よ、貴納は此の難かしい疑問をば、實に善く平易く明るやうに解釋なさいました。貴納は快刀を以て亂痲を斷ち、外道等の議論を粉碎して、彼等の邪義を立證なさいました。於戲、貴納は實に諸學派の上首中の最上首であります。』

佛陀の無垢清淨に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は佛陀卽ち覺者と成り給うた時、其の心中の一切の罪障を燒き盡し給ひましたか、それとも未だ其の心中に、何等かの罪障が殘つて居ましたか。』

尊『大王よ、世尊は一切の罪障を燒き盡して、何にも殘し給ひませぬ。』

王『けれども、尊者よ、如來は肉體を損傷し給うたではありませんか。』

尊『然うです、大王よ、（六一）王舍城に於いて、石の破片で其の御足を傷け、（六二）また一時は痢病に罹り給ひ、（六三）また一時は身體の氣分を損ねて、（六四）耆婆迦を召させ給ひ、また一時は、風邪に罹り、隨侍の長老に熱湯を乞ひ給ひました。』

王『でも、尊者よ、若し如來が佛陀卽ち覺者と成り、其の心中に於ける、一切の罪障を滅除し給うたと

【六一】小品（Cullavagga）第七卷三の九に出づ。
【六二】巴利語大涅槃經第四卷二一に出づ。
【六三】大品（Mahāvagga）第八卷一に出づ。
【六四】Jīvaka は當時の名醫。

すれば、他の記述、卽ち石の破片で其の御足を傷け、又は痢病に罹り給うたなどと云ふことは誤謬でなければなりませぬ。けれども若し其等の事件が事實であるならば、一切の罪障を滅除し給うたとは言へませぬ。何せなれば業がなければ苦痛はない筈であるからです。然り、一切罪障の根源は業であり、業あるがために苦痛は起るのです。いま朕は此の兩頭にかかる疑問を貴衲に提出いたしますから、何うぞ之を解決して下さい。』

尊『いいえ、大王よ、一切の苦痛が、業を根本とするのではありませぬ。苦痛が起るには、八つの原因があり、多くの衆生は其の爲に苦痛を受けるのです。八つの原因とは、風氣の多過ぎること、膽汁の多過ぎること、痰氣の多過ぎること、此等の氣分の聯合すること、陽氣の變化、〔四大の〕不調和なること、外界の作用と、業とです。此等八種の中の一を因として苦痛が起り、其の爲に多くの衆生は苦しむのです。是故に衆生を苦しむるものは業である、此の他に何等苦痛の原因はないと主張するものがありますならば、其の命題は間違つて居ます。』

王『けれども、尊者よ、他の七種の苦痛は皆業を其の根本として居ます。何せなれば其は業によりて生起せられるからであります。』

尊『大王よ、若し一切の病氣が、眞に業から惹起せられるならば、種種の病氣には、それぞれ相應の特徴もなく、隨つて甲病と乙病とは辨別することは能きますまい。彼の風氣の起るのは、寒さによるか、

熱さによるか、飢によるか、渇によるか、食ひ過ぎによるか、餘り長く立ち續けたことによるか、過勞によるか、餘り速く歩いたことによるか、醫者の取扱によるか、業の結果なるか、此等十種の中の何れかによるのです。而も此等十種の内の九種は、前生の業でもなく、また未來の業でもなく、全く當人の現在に於ける事實です。是故に一切の苦痛は業によると云ふのは、正當ではありませぬ。

大王よ、膽汁氣が起るのは、寒さによるか、熱さによるか、若くは不正の食物によるか、此等三者の中の何れかによるのです。また痰氣が起るのは、寒さによるか、熱さによるか、若くは飲食物によるのです。若し此等三種の中の何れかが起り、或は混交すれば、其に應じて特殊の苦痛が起るのです。して又世には陽氣の變化より起る苦痛もあれば、〔四大の〕不調より起る苦痛もあり、外部の作用より起る苦痛もあります。或はまた活動の結果として業が起り、其の活動から起る苦痛もあります。其故に業の結果として起るものは、他の原因から起るものよりも、遙かに少ないのです。で、無智の人が、一切の苦痛は業の結果として起ると言ふのは、餘り走り過ぎた言ひ分です。何人と雖も、(六五)佛陀の智見がなくては業の活動範圍を決めることは能きませぬ。

さて大王よ、岩石の破片が、世尊の御足を傷けました時、それに伴つて

【六五】吾人は尊者の此の言を讀んで、起信論に於ける「無明熏習に依つて起す所の識――不思議業相――とは、凡夫の能く知るところに非ず。亦た二乘の智慧の覺する所にあらず。謂く菩薩に依るに、初の正信より發心觀察し、若し法身を證すれば少分の知を得、乃至菩薩究竟地も盡く知ること能はず。唯、佛のみ窮了す」と云へる文に想到せざるを得ない。

苦痛が起りましたのは、私が上に擧げました八種の原因の中、只外部からの作用によるだけで、決して其の他の原因によつて起つたのではありませぬ。何せなれば提婆達多は、千百生の間、生れ代り死に代り、如來に對して憎惡の念を懷いて居たからであります。卽ち彼が大きな岩石を捕へ、如來の頭の上に落しかけやうと思つて、其を押し落したのは、彼が憎惡の念によるのです。然るに其の岩石と他の岩石とが一緒に衝き當つて、如來の身邊に達する前に其を遮り、衝突の勢で破片が出來て、世尊の御足の上に落ちかかつて、出血を見るに到つたのであります。然らば此の苦痛は、世尊自らの作業の結果によるか、又は他のものの作爲によるか、二つに一つでなくてはなりませぬ。何せなれば此の二種の原因を外にしては、是の如き苦痛の起らう筈がないからであります。譬へば若し種子を蒔いて發芽しないとすれば、そは土地が惡いか、種子が惡いか、二つに一つでなければならず。又食物を喰べて消化しなければ、腸胃に故障があるか、食物が惡かつたか、二つに一つでなければならぬやうなものであります。

然るに世尊には、決して其作業の結果としての苦痛もなく、又その「四大」不調のために起つた苦痛もありませんでした。而も世尊は、他の六種の原因より起る苦痛を受け給ひました。が、其苦痛が基となつて、世尊の生命を奪ふことは能きなかつたのであります。大王よ、四大の和合よりなる我等の身體には、善惡若くは快不快の感覺が起つて參ります。大王よ、一の土塊を空中に投げ、而して其が

再び地上に落ちかかつて來たと假定せんに、そは大地が以前に營んだ、何等かの業の結果でせうか。』

王『いいえ、尊者よ、大地は決して善惡業の結果を經驗し得る道理はありませぬ。土塊が再び地上に落ちて來たのは、作業とは全く無關係で、現在の原因によるのであります。』

尊『然うです、大王よ、「今の例で言へば」如來は大地に當ります。而して土塊が地上に落ちかかつて參りましたのは、大地の作業とは何の關係もないやうに、如來の御足の上に、岩石の破片が落ちて參りましたのは、如來の行爲とは何の關係もありませぬ。

大王よ、人は大地を掘つたり、耕したり致しますが、そは大地が以前に營んだ業の結果でせうか。』

王『いいえ、決して然うではありませぬ。』

尊『大王よ、世尊の御足に、岩石の破片が落ちかかつて參りましたのも、丁度それと同じです。而して又世尊が痢病にお罹り遊ばしたのも、亦これと同じく、決して過去の行爲の結果ではなく、三種の氣色の聯合から起つたのです。是の如く、如來の肉體上の疾病は、何も皆其原因が、如來の行爲にあるのでなく、六種の原因の何れかによるのです。何ぜなれば天中の天たる世尊は、雜阿含の（六六）モーリヤ・シーヴカ經の中に、下の如く宣說し給うたからでありさす。「シーヴカよ、世に膽汁性から起る若干の苦痛がある。汝は其等を確知しなければならぬ。何ぜなれば其は世間に於ける普通の智識で、知らるべき事件であるからである。だが、シーヴカ

【六六】Moliya-Sivaka.

よ、世に沙門・婆羅門あり、人間の經驗する苦・樂・無記の感覺は、何れも皆當人の過去の行爲に因ると言ふ見解を持し、其の說を主張するが、彼等は確實性を飛び越え、〔人間の〕智識を超過して居るのである。そこで我は彼等の見解を呼んで不正であると言ふのぢや。また彼の痰氣より起る苦痛も、風氣より起る苦痛も、此等の結合より起る苦痛も、陽氣の變化より起る苦痛も、〔四大の〕不調和より起る苦痛も、外部の作用より起る苦痛も、若くは作業の結果として起る苦痛も亦た、丁度その通りである。汝は此等の場合に於ける、苦痛の何なるかを、確實に知らなければならぬ。何せなれば其は世間普通の智識で知らるる事件であるからである。だが、シーヴカよ、世に沙門、婆羅門あり、人間の經驗する苦・樂・無記の感覺は、何れも皆當人の過去の行爲に因ると言ふ見解を持し、其の說を主張するが、彼等は確實性を飛び越え、〔人間〕普通の智識を超過して居るのである。だから、我は彼等の見解を呼んで、不正であると言ふのぢや」と。

此の故に大王よ、一切の苦痛を以て、作業の結果だとする理由には參りませぬ。で、陛下は、世尊が覺者となり給ひし時、その心中に於ける一切の罪障を、燒き盡し給うたことを御承認あそばさねばなりませぬ。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

默想の利益に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は「世尊は、菩提樹の下に端坐し給ひし時、如來として作すべきことは皆已に作し了はり給うた」と言はれる。尊者よ、若し世尊が菩提樹下に於て、所作已に辦じ給うたとすれば、世尊には、もはや作し給ふべきことは何にもありますまい。又已に作し了り給うた上に、更に添加し給ふべきことは何にもありますまい。然るに又他方には「世尊は〔成道の後〕直に三ケ月の間、沈思冥想に耽り給うた」と說くものがあります。若し第一の說述が眞實だとすれば、第二の說述は虛僞となり、第二を正とすれば、第一は不正でなければなりませぬ。已に其の作すべきことを悉く作し了つたものには、何等沈思冥想の必要はありますまい。〔換言せば〕物事を考へねばならない人には、まだ何か作すべきことが殘つて居るのです。藥は病人にこそ必要ですが、健康者には必要でありませぬ。食物は飢ゑたるものにこそ必要ですが、已に飢を滿したものには必要ではありませぬ。これ亦た貴衲の解決を仰ぐべき兩頭にかかつた疑問であります。』

尊『大王よ、世尊の菩提樹下に於いて、已に所作を辦じ給うたことも、〔其の後〕冥想に耽り給うたことも、二ともに事實です。大王よ、默想には數多の功德があります。默想によつて一切智を逮達せる諸の如來は、默想の善功德を憶念して、默想を實行し給ひました。大王よ、恰も國王から高官に親任さ

れたものが、其の善功德と、其によつて享受した光榮とを憶念して、絕えず其王に隨侍し奉仕するが如く、默想して一切智を逮得せる諸の如來は、默想の善功德を憶念して、默想を勤め給ふのであります。また、大王よ、恰も怖るべき病氣に罹つて苦み惱み、藥を服用して快癒したものが、其の善功德を憶念して、再び三たび同じ藥を服用するが如く、默想によりて一切智を逮得せる諸の如來は、默想の善功德を憶念して、默想を行じ給ふのであります。尙ほ又、大王よ、諸の如來の、熱心に行じ給へる默想には、二十八種の善功德があります。その二十八種とは、默想は默想する人を保護すること、壽命を增長すること、精力を賦與すること、過を防ぐこと、惡名を脫却せしむること、令名を與ふること、心の不滿足を亡ぼすこと、滿足を以て充たしむること、一切の怖畏を去らしむること、自信を與ふること、惰怠の念を亡ぼすこと、精進の念を起さしむること、貪を離れしむること、瞋を離れしむること、癡を離れしむること、慢心を根絕せしむること、一切の疑念を去らしむること、人の心を平和安樂ならしむること、人の心を柔和ならしむること、人をして法喜禪悅せしむること、人をして勇敢ならしむること、人をして多くの利益を獲しむること、人をして尊貴ならしむること、人をして心に歡喜の念を充たしむること、人をして心に大歡喜の念を充たしむること、有爲法の無常なることを知らしむること、人をして再生の根本を斷ち切らしむること、人をして出家沙門の一切の利益を得せしむること、これ卽ち諸の如來の、熱心に行じ給へる默想の二十八種の善功德であります。され

ど、大王よ、諸の如來の、熱心以て默想を勸め、其の心の對象の上に專注し給ふ所以のものは、八解脫の福樂と、絕對平安なる涅槃の欣悅とを享受せんがためであります。

尙ほまた、大王よ、諸の如來の默想に熱中し給ふには、四つの理由があります。四つの理由とは、諸の如來は、安樂に住せんが爲めに默想に熱中し、諸の如來は、無垢の功德を增長せんが爲めに默想に熱中し、諸の如來は、一切の聖道の爲めに默想に熱中し、諸の如來は、一切の諸佛の讚美し、頌歌し、讚歎し、賞讚し給ふ所とならんが爲めに默想に熱中せられます。大王よ、これ卽ち諸の如來の默想に熱中し給へる四つの理由であります。是の故に、大王よ、諸の如來の默想に熱中し給へるは、何か作すべきことの遺り居るが爲でもなく、又已に作し給ひしことに何かを添加せんが爲でもありませぬ。そは唯默想の功德の、如何に多樣なるかを知覺し給ふがためであります。』

尊『善哉、那伽犀那尊者よ、朕は貴衲の御說を信受いたします。』

三ケ月の制限に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時「阿難陀よ、如來は四神足を逮得し、之を十分に實現し、增大し、積み重ねて、其の最高の處に昇り、而してまた心的向上の方便として、且つは「衆生」敎化の基礎として、活用することの能きるほど、善くそれに通達し給ふのである。是の故に、阿難陀よ、如來は一劫波の

間、又は經過せざるべからざる一劫波の殘餘の間、生き存らへ給ふであらう」と仰せられました。然るに又、世尊は一時(六七)「これより三ヶ月の後、如來は寂滅すべし」と宣ひました。若し第一の宣說が眞實とすれば、三ヶ月の後と制限し給うたのは虛僞となり、若し又第二の宣言が眞實とすれば、第一の宣說は虛僞となります。何せなれば如來は理由なしに、徒らに大言し給ふことなく、亦た佛陀は人を惑はす底の言をなし給ふ筈もなく、常に眞實を告げ、誠實に言語し給ふからであります。これ亦た深玄微妙にして、說明し難き、兩頭にかかる疑問であります。朕は今これを貴衲に提議しますから、何うぞ外道等の網を寸寸に引き裂き、異端の議論を粉微塵に打ち碎いて、孰れか一方にお片附け下さい。』

尊『大王よ、世尊は「阿難陀よ、如來は四神足に通達し云云」とも仰せ給ひ、亦た「如來は三ヶ月の後寂滅すべし」とも宣ひました。然しながら、大王よ、此の場合の所謂劫波とは、人間の生命の持續期間を意味するのです。大王よ、世尊は自らの力量を稱揚し給ふのではなく、神足の力を稱揚し給ふのであります。例へば或る王が風の如に、迅速に走る駿馬を所有すと假定せんに、彼は其の迅速力を稱揚せんがために、朝臣や、都鄙の人人や、雇人や、軍人や、婆羅門や、剎帝利族や、官吏等の面前に於いて、「若し朕が此の駿馬をして走らしめやうと想へば、此の馬は一瞬間にして海岸まで往復することが能きる」と言ふやうなものです。大王よ、縱令其王は公衆の面前に於て、駿馬の速力を試さうと

【六七】巴利語大涅槃經第三卷の六〇、及び同經英譯五七・五八頁に出づ。

は致しませんでしたけれども、而も其の馬は快速力を有し、實際に瞬く閒に、海側まで往くことが能きたのです。大王よ、世尊も亦た是の如く、人閒・天人及び三明六通に達せる人人の中に坐して、「阿難陀よ、如來は四神足を逮得し、十分に之を實現し、增大し、積み重ねて、其の最上點に昇り、其を以て心的向上の方便となし、又〔衆生〕敎化の基本として活用し得るほど、善く其に通達し給ふ。是の故に、阿難陀よ、如來は一劫波の閒、若くは經過せざる可らざる劫波の殘餘の閒、生き存らへ給ふであらう」と宣うたのであります。して又、大王よ、如來は、其時期の閒、生き存らへ得る力を有し給ひました。が、如來は群集の中では、其神通力を示現し給はなかつたのであります。大王よ、世尊は未來生活の欲望を脫し、又その欲望を何の用にも立たぬものとして斥け給ひました。何せなれば、大王よ、世尊は「比丘衆よ、糞尿の極めて小量すら、惡醜を發するが如く、吾は未來生活の最小時限、即ち一彈指の閒すら、其の美なることを認めない」と宣うたからであります。大王よ、是の如く未來生活の一切の事情境遇を觀じて、糞尿視し給ふ世尊にして、單に神足の力のための故に、未來生活に愛著する欲望を宿し給ふでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して然うではありませぬ。』

尊『然らば、大王よ、世尊が、是の如く大言し給うたのは、神通力の稱揚でなければなりませぬ。』

王『善哉、那伽犀那尊者よ、朕は貴衲の御說の通り信受いたします。』

禁戒の革除に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時「比丘衆よ、我は神通力を以て法を說けり。神通力を以てするにあらずんば、決して之を說かず」と宣ひました。而して又他方には戒律の清規に就て「阿難陀よ、(一)我が滅後、若し敎團の此を願ふあらば、劣小瑣末の禁戒は革除するも可なり」と宣ひました。されば世尊が「我が滅後革除するも可なり」と許し給へる、其等劣小瑣末の禁戒は、過つて說かれたのですか、若くは無智にして制定されたのですか、それとも正當の理由なくして制定されたのですか。若し第一の敎勅が眞實だとすれば、第二の敎勅は虛僞となり、第二の敎勅を眞實とすれば、第一のそれは虛僞となります。これ亦た微妙精細奧妙深玄にして解說し難き、兩頭論法上の疑問であります。で、朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は須く之を解決せなければなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊は一時「我は神通力を以て法を說く云云」と宣ひ、また一時は戒律の清規に就て「阿難陀よ、我が滅後、若し敎團の此を願ふあらば、劣小瑣末の禁戒は革除するも可なり」と宣ひました

【一】巴利語大涅槃經第六卷の三、及び同經英譯一一二頁に出づ。

のは事實であります。されど第二の場合に於ける教勅は、比丘衆を試さんがためなのです。卽ち若し彼等に解禁を許さば、彼等は佛の滅後、劣小瑣末の清規を廢弛するだらうか。それとも亦た何處までも遵奉するだらうかを試さんがためなのであります。例へば、大王よ、そは轉輪聖王が、其の王子等に對して「子等よ、此の大國は四方海邊に達す。我等の力を以て意の儘に支持せんことは容易の業にあらず。是の故に我が崩去の後、汝等は邊境の蠻地を放棄するを可とす」と云ふやうなものです。大王よ、斯く言ひ渡された王子等は、果して父王の死後、既に彼等の權内にある外蠻地方を放棄するでせうか。』

王『いゝえ、尊者よ、王者と言ふものは仲仲慾の深いものです。王子等は、權力の貪慾にひかされて、寧ろ彼等が有する國土の大さの二倍三倍にすべく、他の國土を征服せんとこそ考へませうが、決して已に所有せる地方を放棄するやうな考は起しますまい。』

王『大王よ、如來も亦た是の如く「阿難陀よ、我が滅後、若し教團の願ふあらば、劣小瑣末の禁戒は、之を革除するも可なり」と仰せられましたのは、比丘衆を試さんが爲であります。されど、大王よ、佛子等は護法の情強く、苦惱を脱せんとの念盛んなるがため、寧ろ二百五十の大戒を遵守こそすれ、故あつて制定された禁戒を放棄するやうなことはありませぬ。』

王『那伽犀那尊者よ、世尊が「劣小瑣末の禁戒」と宣ひしがために、其の弟子達は、何れが劣小の禁戒

なるか、將たまた何れが瑣末の禁戒なるかに迷ひ且つ疑ひ、それが議論の種となり、躊躇逡巡、遂に實行されなくなるかも知れませんね。』

尊『大王よ、(二)行爲の上の小さな過失、これが小禁戒で、(三)言語の上の小さな過失、これが瑣末な禁戒であります。ですから、此等の二を一緒にして、劣小瑣末の禁戒と言ふのです。大王よ、昔の大長老達も、此の點に就ては疑を挾んで居ました。(四)また聖典結集の際にも、此點に就ては滿場一致でなかつたのです。而して世尊も亦た此の問題の起るべきを豫見し給うたのであります。』

王『於戲、尊者よ、勝者の御言葉の中で曖昧であり、且つ大分長い閒、密かに仕舞ひ込んであつた此の點は、今日、世間公衆の前に打開せられ、誰にでも解るやうに明かにされました。』

祕密の教に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、「阿難陀よ、(五)如來の教法の中には、何等の祕密なし」と宣ひました。然るに(六)世尊は一時、摩阿蘭伽女の子なる一長老の所問に對して、何とも御答へ遊ばしませんでした。尊者よ、此の問題は、二の內の孰れか一に歸せねばなりますまい。

【二】Dukkaṭaṃ.
【三】Dubbhāsitaṃ.
【四】阿難陀が此等の術語の定義を佛陀に尋ねなかつたことが王舍城に於ける聖典結集の際、阿難陀の責任問題となり、遂に彼が一過失に數へられたのである。〔小品第十一卷一の一〇〕
【五】巴利語大涅槃經第二卷三二に出づ。
【六】中阿含卷五六・五下分結經第四〔卍藏第十三套第一・二八九紙表〕に出づ。

即ち世尊は無智なために、御答へ遊ばすことが能きなかつたのか、若くは何ものかを祕密にせんがため、御答へ遊ばさなかつたのか、二つに一つでせう。若し第一の叙述が眞實だとすれば、無智のためであつたと言はねばならず、若し又知つて居ながら、而も御答へ遊ばさなかつたとすれば、第一の叙述は虚僞でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかつた疑問であります。で、朕は今これを貴衲に提出しますから、貴衲は其を解決せねばなりませぬ。』

『大王よ、世尊は一時、「阿難陀よ、如來の教法には、何等の祕密なし」と宣ひ、又一時、摩阿蘭伽の子の所問に對して、御答へ遊ばしませんでした。然し其は如來の無智なるが爲でもなく、又何物かを隠さんとの思召しからでもありませぬ。大王よ、疑問を解明するに四種の方法があります。其の四種とは、謂く、(七)直接にして最後の説明を與へらるべき問題と、(八)詳細に分別解説して答へらるべき問題と、(九)反問を以て答へらるべき問題と、(一〇)默を以て答へらるべき問題とであります。大王よ、何にをか直接にして最後の説明を與へらるべき問題かとならば、「色は無常なるか」、「受は無常なるか」、「想は無常なるか」、「行は無常なるか」、「識は無常なるか」等の如き問題であります。

何にをか分別解説を以て答へらるべき問題かとならば、「尙ほまた色は無常なるか」、「尙ほまた受は

【七】巴 Ekaṁsabyākaraṇiya-pañha. 梵 Ekāṁsavyākaraṇam. 一向記。

【八】巴 Vibhajjabyākaraṇiya-pañha. 梵 Vibhajyavyākaraṇam. 分別記。

【九】巴 Paṭipucchākaraṇiya-pañha. 梵 Paripṛcchavyākaraṇam. 反詰記。

【一〇】巴 Ṭhapaṇiya pañha. 梵 Sthāpaṇiyavyākaraṇam. 捨置記。

無常なるか」、「尙ほまた想は無常なるか」、「尙ほまた行は無常なるか」、「尙ほまた識は無常なるか」等の如き問題であります。

何にをか反問を以て答へらるべき問題かとならば、「請ひ問ふ、眼は一切の事物を知覺し得るか」と云ふが如きであります。

何にをか默して答へらるべき問題かとならば、「宇宙は永久なりや」、「宇宙は永久にあらざるか」、「宇宙に終ありや」、「宇宙に終なきや」、「宇宙は無終にして同時に有終なりや」、「宇宙は無終にもあらず、同時に有終にもあらざるか」、「心靈と身體とは同一なるか」、「心靈は身體と別なるか」、「如來は滅後存在し給ふや」、「如來は滅後存在し給はざるや」、「如來は滅後存在し給ふにもあらず、同時に存在し給はざるにもあらざるか」等の如き疑問であります。

大王よ、世尊が、摩阿蘭伽女の子なる、一長老の所問に對して、答へ給はざりしは、置答せらるべき疑問であつたからであります。では、何故に或る種の疑問に對しては、置答せられねばならぬかとならば、そは答へる理由もなければ、意味もなさないからです。蓋し如來は理由もなく、意味もないのに、「徒らに」聲を發し給ふことはないからであります。』

王『善哉、尊者よ、私は貴衲のお說通りに信受いたします。』

死に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「一切の人は(一)責罰を恐れ、(二)一切の人は死を怖る。」

と仰せられました。然るに復た一時は、

「阿羅漢は(三)一切の怖畏を超過す。」

と宣ひました。尊者、如何でせう、阿羅漢は責罰の怖畏によりて戰慄するでせうか。又かの地獄の中に居る衆生は、燒かれ、煮られ、焦がされ、苦しめられながら、尚ほ且つ炎炎と燃え上る火坑の、[思ひ出すだに]ぞつとする苦難の場所から、逃れ出づる死をも怖れるでせうか。尊者よ、若しも世尊が、眞に「一切の人は責罰を怖れ、一切の人は死を怖る」と仰せ給へりとせば、「阿羅漢は一切の怖畏を超過す。」との御言葉は虛僞でなければなりませぬ。されど若しも世尊が「阿羅漢は一切の怖畏を超過す。」と仰せ給へりとせば、「一切の人は責罰を恐れ、一切の人は死を怖る。」との御言葉は、虛僞でなければなりませぬ。いま朕は此の兩頭にかかる疑問を提出しますから、貴衲は之に解決を與へて下さらねばなりませぬ。』

【一】Daṇḍa は直譯すれば刀杖の義なれども、今は刀杖もて截り且つ打たるるの意より、責罰と譯して置く。

【二】此の句は巴利語法句經の第一二九頌に出づ。

【三】此の文は何經に出づるか分らないが、巴利語法句經の第三十九頌「心に貪染なく、心に迷惑なく、善惡の思を棄て、覺りたる人には怖畏あることなし」の意と解して可い。

答『大王よ、世尊が、「一切の人は責罰を恐れ、一切の人は死を怖る」と仰せられましたのは、阿羅漢に就てではありませぬ。阿羅漢は此の場合には除外例であります。何せなれば阿羅漢は、全く怖畏の原因を掃蕩して居るからです。大王よ、世尊が、「一切の人は責罰を恐れ、一切の人は死を怖る」と仰せられましたのは、未だ煩惱を斷せず、自我の妄念に昏惑せられ、苦樂の[海]中に浮きつ沈みつして居る、衆生に就ての御言葉であります。大王よ、阿羅漢は六道輪廻の有ゆる條件を截斷し、(一四)四生の因を滅盡し、(一五)再生の源を斷じ、生の家屋の桷材を破壞し、生の家屋を根本より破毀し、一切の行の根柢を拔き去り、善不善を遠離し、無明を壞滅し、識の種子及び一切の煩惱を燒き盡し、一切の世間の法を征伏して居るのであります。是故に阿羅漢は、如何なる怖畏によつても、戰慄せしめられることはありませぬ。

大王よ、或る國王が、忠實にして令聞あり信用ある四人の大臣を有し、彼等を親任して、高き地位に處らしめられました。而して其國王は、ある緊急事件の發生せるため、此等の大臣に命じて、國内の民衆に對し、勅令を發布せしめ、「卿等諸大臣は、此危急の秋に際して、萬民の課税を納附せしめ、時局必須の要務を爲せ」と仰せ出されたと假定せば、此の場合、大臣等の心中に、課税納附の心配があり、そのため身震するやうなことがあるでせうか。』

【一四】四生とは、胎生と濕生と卵生と化生とである。

【一五】巴利語法句經第一五四頌「屋工よ、汝いま看破せられたり、[我は]再び家を構ふることあらじ。汝の椽材は悉く破られ、汝の棟梁は[全く]毀たれ、滅に至れる心は、諸愛の滅盡に達せり」と同じ意義である。

王『いいえ、尊者よ、決して其麼なことはありませぬ。』
尊『そは如何いふ理由でせう。』
王『彼等は國王から高官に親任せられ、課稅は毫も彼等に影響する所なく、彼等は課稅を超越して居ます。何せなれば彼の國王が「萬民をして課稅を納附せしめよ」との勅令を下したのは、彼等以外の人民に對してであるからです。』
尊『大王よ、世尊が、「一切の人は責罰を恐れ、一切の人は死を怖る」と仰せ給ひしも、亦恰もそのやうなものであります。卽ち〔四大臣が課稅を超越して居るやうに、〕阿羅漢も亦一切の恐怖を超脫して居るのであります。』
王『されど、那迦犀那尊者よ、「一切の」と云ふ言葉は含蓄的でありますから、其の言葉を用ふる時は、誰でも漏さず剩さずと云ふ意味になります。で、此の點を確立するために、更に他の理由をお示し下さい。』
尊『大王よ、或る村の村長が、傳令使に向ひ、「こら、傳令使、村民のこらず、直に此處に集まるやうに布令て來い」と命じました。其處で傳令使は村長の命に隨ひ、村の中央に立つて、「村の民衆は、皆直に村長樣の處に集りなさい」と、三たび叫びました。すると村民等は急いで來合したので、「村長殿、村民は皆集まりましたから、何の御用か仰せ附け給へ」と告知したと假定せんに、村長は村民の

こらす、出頭せよとの召喚令を發しましたのに、命に應じて集まつた者は、村民全體でなく、其の村の戶主ばかりでありました。然も村長は、村民の數はこれこれと知つて居て、戶主の出頭を以て滿足しました。然るに女子や、奴隷の男女や、雇人や、百姓や、病人や、其の他牛馬犬羊等の類は、出頭しないものが澤山ありましたが、彼等は皆その勘定の中に入れてないのです。卽ち「村民は皆集れ」と命令された場合の、「皆」は戶主を意味するのであります。大王よ、一切の人は死を怖るといへる場合も、丁度その如く、「一切の」といふ言葉の中には、阿羅漢は勘定に入れてないのであります。何せなれば阿羅漢には、已に恐怖の原因となるべきものが、何にもないからであります。

大王よ、世には非含蓄を意味する非含蓄的の言ひ表はし方と、含蓄を意味する非含蓄的の言ひ表はし方と、非含蓄を意味する含蓄的の言ひ表はし方と、含蓄を意味する含蓄的の言ひ表はし方があります。で、場合場合に應じて、其の意味を受領せねばなりませぬ。

大王よ、また意義を確める上に五種の方法があります。一には信受によること、二には味によること、三には敎師の傳統によること、四には志向によること、五には理由の充實によることであります。大王よ、信受とは、「經文の中に見らるる通りの意義」といふことを意味し、味とは、「他の經文に隨つて」といふことを意味し、敎師の傳統とは、「彼等が主張するもの」といふことを意味し、志向とは、「彼等が思へるもの」と言ふことを意味し、理由の充實とは、「此等の四が皆結合せる」ことを意味す

るのであります。』

王『善く解りました、尊者よ。私は貴衲の御言葉の通り、「一切の人は責罰を恐れ、一切の人は死を怖る」と言ふ場合には、阿羅漢以外のものを指し、阿羅漢は除外例なることを信受いたします。だが、那伽犀那尊者よ、地獄に於ける諸の衆生、卽ち痛烈刻薄の苦に悶えるもの、四肢五體みな焚焦の苦を受けるもの、口に憐愍を訴へて、泣き歎き悲むもの、堪へ難き殘忍なる痛苦の下に、征伏せられるもの、避難所なく保護者なく救助者なきもの、無量の苦惱になやめるもの、最惡最下の境遇に沈み、更に苦痛を忍ばねばならぬ運命のもの、殘忍刻薄なる熱火に燒かれるもの、悲痛と恐怖との爲に、叫喚呻吟の聲を發するもの、火焰の華蔓を以て六方を圍み、取り卷かれるもの、四方一百由旬の閒、火の池をもて圍まれるもの、是等の憐れな不幸なものも、死を怖れるでせうか。』

尊『然うです、怖れますとも。』

王『けれども、尊者よ、地獄は或る一定の苦痛ある場處ではありませんか。若し果して然りとせば、其の中の衆生は、何故に其苦痛を脫がれ得る死を怖れませうか、彼等は地獄を好むのでせうか。』

尊『いいえ、大王よ、彼等は決して地獄を好むのではありませぬ。彼等は地獄から脫れんと熱望して居ます。彼等が怖れるのは死の力であります。』

王『尊者よ、地獄から脫れんことを熱望するものが、再生を怖れると言ふことは、朕には信ぜられませ

ぬ。尊者よ、彼等は其の熱望する境界の風光を樂見せねばなりませぬ。尊者よ、更に例を擧げて朕を信服させて下さい。』

尊『大王よ、死は眞理を達觀しないものの恐るる境界であります。人は其に就て心痛し、且つ大變に其を怖れて居ます。大王よ、人が黒蛇・象・獅子・虎・豹・熊・鬣狗・野育ちの水牛・短角牛・火・水・刺・杙・弓矢等を怖れるのは、皆死が怖いからでせう。大王よ、これ死の尊嚴なる根本性質であります。罪障を脱却しない一切の衆生は、此の死と云ふ王者の前には、恐怖し戰慄いたします。此の意味に於て、地獄の苦を脱れんと熱望する衆生でも、死を恐怖するのであります。

大王よ、人あり、身體一面に腫物が出來て、苦痛に惱まされ、危險を脱せんがため、醫師と外科醫を招きました。で、外科醫は招に應じて其の家に到り、病氣を治療すべく、それぞれの準備に取りかかりました。卽ち刃針を磨ぎ、燒灼して用ひんがために棒を火中に投じ、鹽の洗劑に混合せんがために、何物かを砥石の上で搗いて居たと假定し給へ。扨て其の病人は、鋭利な刃針で截られ、燒灼せる棒で燒かれ、身に沁みわたるやうな洗劑を用ひられるのを怖はがるでせうか。』

王『はい、彼は怖はがるでせう。』

尊『大王よ、彼の病人が、疾病を快癒せうと望みながら、治療の苦痛を恐れ怖はがるやうに、地獄の中の衆生も、亦地獄から脱れやうと望みながら、尚ほ且つ死を恐れて怖はがるのであります。

大王よ、人あり、君主に對して、不敬罪を犯し、鎖で縛られ、獄屋に投ぜられんとする時、切りに放釋を願ひ、君主も亦た彼を放釋せんとて、使者を遣はし、彼を召されたと假定せんに、彼は此を知り乍ら、尚ほ且つ王に拜謁することを、恐れ怖はがるでせうか。』

王『然うです、尊者よ、彼は戰慄しませう。』

尊『若し果して然りとせば、地獄に於ける衆生も、亦た地獄を脫れんと熱望しながら、尚ほ且つ死を怖れ、戰慄するのです。』

王『尊者よ、何うぞ、朕の貴說に同意せしめ得るやうに、今一つ實例を擧げて下さい。』

尊『大王よ、人あり、怕るべき毒蛇に嚙まれ、毒のために七轉八倒して居ました。然るに他の一人が驗き目ある呪文を唱へつつ、其の毒蛇をして、毒を吸ひ戾さしめんがため、嚙まれた人に强ひて近づけんとすと假定せんに、其の人は毒を除かんがためと知りながら、尚ほ且つ毒蛇を恐れ、怖はがりは致しますまいか。』

王『然うです、尊者よ、彼は怖はがります。』

尊『大王よ、地獄の中に於ける衆生も、亦た丁度その如く、死は一切の衆生の好まざる所であります。此の故に彼等は、地獄の苦を脫れんと望みながら、尚ほ且つ死を怖れ戰くのであります。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

防護式に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「空中にありても海中にありても、〔人里遠き〕山閒の窟中に隱れても、

大千世界のその中に、死の羂より脫れ得る場所はあらじ。」

と御說き遊ばしました。然るに世尊は、また他方に於いて、防護式の修法、即ちラタナ・スッタ、カンダ・パリッター、モーラ・パリッター、ダッヂャガ防護、アーターナーティヤ防護、アングリ・マーラ防護の修法を宣傳あそばしました。那伽犀那尊者よ、若しも人が、天に昇つても大海の中に行いても、若くは高き宮殿の頂上に昇つても、或は山中の洞窟・石室・阪・罅隙、及び穴の中に隱れても、死の羂から脫れることが能きなければ、防護式は〔全く〕無用であります。ですが、若しまた防護式を修して死を脫れる方法がありましたら、前の頌文の御說法は閒違つて居ます。これ亦た兩頭にかかる論法で、亂麻よりも解き難い問題です。いま朕は此の問題を提出しますから、貴衲はこれを解決して下さらねばなりませぬ。』

章『大王よ、世尊は一時、

「空中にありても海中にありても、〔人里遠き〕山閒の窟中に隱れても、

大千世界のその中に、死の羂より脫れ得る場所はあらじ。」

と御說き遊ばしましたが、亦た彼の防護式を修することをも是認あそばしました。さりながら、彼の防護式は、まだ存ふべき壽命のある人や、青年のものや、業障を阻止すべきものの爲にのみ、修せらるべき方法であります。此の故に既に存ふべき命數のない人の壽命は、頃刻の間と雖も、人爲的に之を延ばし得る修法もなければ、儀式もありませぬ。大王よ、そは恰も定命の期限がきれて、全く其の生氣を失ひ、何等の汁氣もなく、凋れ果てて枯死した丸太に、陛下が數千壺の水をおかけになりましても、二度と再び清新の氣を吹きかへしもしなければ、若芽若葉を生じもしないやうなものであります。今それ世には、定命の期限の切れた人の、壽命を延ばす藥もなければ、防護の術もなく、亦た何等の儀式もなければ、何等の人爲的修法もありませぬ。大王よ、是の如き人に對しては、一切の藥も〔全く〕無用です。が、彼の防護式なるものは、まだ存ふべき定命のある人や、青年、又は業障を阻止すべき人人に對しての保護であり、援助であります。卽ち世尊が防護式を採用あそばしましたのは、是の如き場合のみであります。大王よ、例へば農家の人が、穀物のまだ若い時、雲のやうに色の薄闇く、まだ生氣に富める間は、〔絕えず〕其に水を與へて成長させますが、其が成熟し、枯死して收納しても宜い時になれば、灌漑を止むる如く、人も亦定命の期限のきれた人の場合には、防護式など修する必要はありませぬ。されど未だ存ふべき壽命に富めるものや、青年に對しては、幾度も防護式の

藥を服さしめねばなりませぬ。すると彼等は其のお蔭で利益を得るでせう。』

王『ですが、尊者よ、若し人が、決して死ぬ氣遣もなく、存ふべき壽命に富んで居るならば、その如な人に對して、藥を與へ、或は防護式を修するのは、〔全く〕無用同然でせう。』

尊『大王よ、陛下は、嘗て或る病人が、藥を以て蘇へせられた場合を、御覽あそばしたことがありますか。』

王『はい、數百遍となく見ました。』

尊『では、大王よ、陛下が防護式と、藥の無効とに就て仰せられしことは、〔全く〕誤謬でなければなりませぬ。』

王『尊者よ、朕は醫士が病人に藥を服ませ、又は外部から膏藥を貼用せしが爲に、病勢の輕減されたのを見ました。』

尊『大王よ、〔二六〕パリタムを反覆して、讀誦する人の聲を聞くに、其の舌は乾き、其心臟の鼓動は衰へ、而して其の咽喉は嗄れて居るやうでありますが、其を反覆して讀誦しますので、一切の病氣は鎭まり、一切の災禍は退散いたします。大王よ、陛下は嘗て毒蛇に嚙まれた人が、呪符を受けて、其の蛇に毒を吸ひ戻させ、又は解毒劑で消毒し、若くは洗劑で其の局部を洗ふのを、御覽あそばしたことがありますか。』

【二六】パリタムは防護式の呪文のこと。

王『はい、そは現に世人の間に知れ亙つて居る普通の習慣です。』

尊『大王よ、それでは防護式も藥も、等しく無益だとの陛下の仰せは誤謬であります。大王よ、人の爲に防護經を唱ふれば、嚙まんとして居た蛇は、人を嚙まずに却つて其の顎を閉ぢ、また棍棒を振りかざして、人を打たんとした强盜も、棍棒を投げ捨てて却つて親切に其人を遇し、人に向つて突進して來た狂象も、急に立ち留まり、大浪の寄せ來るが如き猛火も消え去り、人の食べた大毒も、變じて無害食物となり、人を殺さんとする刺客も、奴隷のやうになつて彼に侍し、陷つた羂も、其の人を捕へないでせう。』

尊『大王よ、陛下は嘗て或る獵師が、七百年の長きに亙つて、防護式を受けた孔雀を網せんとして失敗せしが、網することを罷めた其の日、却つて彼を捕へたといふことを御聞き及びになりましたか。』

王『はい、聞きました。そは全世界に知れ亙つた名高い事柄です。』

尊『では、大王よ、陛下が、防護式も藥も、等しく無益だと仰せられましたのは、誤でなければなりませぬ。大王よ、陛下は嘗て（一七）陀那婆なる者が、其妻を保護せんがため、箱に入れて彼女を呑み込み、胃袋の中に入れて持ち運んで居た。然るに（一八）ギダャーダラは陀那婆の口から這入り込んで、其妻と戯れて居た。すると陀那婆が其れを覺り、其箱を吐き出して、それを開けるや否や、ギダャーダラは、己が欲するままに、何處かへ脫れ去つて了つ

【一七】Dānava.
【一八】Vidyādhara.

た、と云ふ話を御聞き遊ばしましたか。』
王『はい、聞きました。それは世に知れ亙つた名高い話です。』
尊『大王よ、ギダャーダラが捕虜から脱れたのは、防護式の力によるのでありますまいか。』
王『然うです、尊者よ、それは防護式のお蔭でありました。』
尊『では、大王よ、防護式には力が籠つて居なければなりませぬ。大王よ、陛下は嘗て他のギダャーダラが、ベナレス國王の婦人部屋に匍入り込み、其の王妃と不義な交をなして生捕にせられたが、其の瞬間に忽ち姿をくらまし、「何處へか」去つて了つた、といふ話を御聞き及びになりましたか。』
王『はい、其の話は聞きました。』
尊『では、大王よ、彼が生捕られて、姿をくらまし、脱れましたのは、防護式の力によるのではありますまいか。』
王『然うです、尊者よ。』
尊『然らば、大王よ、防護式の中には、「一種不可思議の」力が籠つて居なければなりませぬ。』
王『那伽犀那尊者よ、其の防護式は誰でも保護するのですか。』
尊『或る者は保護しますが、或る者は保護いたしませぬ。』
王『では、其の式は、何日もかも、有用ではないのですか。』

尊『大王よ、食物は一切の人を生かしますか。』

王『いいえ、そは或る者を生かしますが、或る者は生かしませぬ。』

尊『でも、そは如何いふ理由ですか。』

王『尊者よ、同じ食物でも、餘り多く食ひ過す者は、虎疫にかかつて死にます。』

尊『然らば、大王よ、食物は一切の人を生かすと云ふ譯ではありませんね。』

王『尊者よ、食物の人命を奪ふに、二つの原因があります。即ち、一は其を放縱に食ひ過すためと、二には消化力の弱いためとであります。而して、尊者よ、生命の親なる食物でも、身持が惡るければ、却つて「生命を奪ふ」毒となります。』

尊『大王よ、防護式も亦た丁度かくの如く、或る者は保護しますが、或る者は保護いたしませぬ。而して、大王よ、防護式が保護しないのに三つの原因、即ち業の障碍と、煩惱の障碍と、不信心の障碍とがあります。大王よ、有情を保護する彼の防護式が、其の保護力を失ひますのは、有情自らの行爲によるのであります。大王よ、妊娠せる世の母親が、大事に胎兒を愛育し、生れ出づれば、不淨物や垢や鼻液に穢がされないやうに、清淨に其子を保育し、最上の高價な香料を塗り、若し他のものが其子を侮辱したり、打擲したりすれば、母親は彼等を捕へ、非常に興奮して、其地方の君主に訴へ出でるやうなものです。が、若し其子が惡戯であつたり、又は「遊びに出て」遲くなつたりすれば、杖か、棒

か、手で、其の子を打ち責譴します。而も、大王よ、其場合に母親は、其子を捕へて、地方の君主に訴へ出でるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、彼女は決して訴へ出でませぬ。』

尊『されど、大王よ、そは如何いふ理由でせうか。』

王『尊者よ、そは己の子が惡いからです。』

尊『大王よ、防護も亦た是の如く、有情を保護いたしますが、若し彼等が惡るければ、反對の結果を將ち來します。』

王『善哉、尊者よ。此の問題は、尊者によりて解決せられ、藪林は〔切り開かれて〕平野となり、闇黒は〔其の幕が除かれて〕明るくなり、異端者流の網は解き放されました。於戲、各學派の上首中の最上首よ。』

惡魔に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、「如來は出家の人に必要なもの、即ち飲食・衣服・醫藥・臥具等は、常に信者の布施で事缺き給うたことはなかつた」と云ひ、又「如來は五沙羅樹と稱する婆羅門村に入り托鉢して、何にも布施にあづかり給はなかつた」と云はれる。が、若し第一の言説を眞實とせば、第二

の言說は虛僞であり、第二の言說を眞實とせば、第一の言說は虛僞であります。これ亦た兩頭にかかつて、解き難く非常に六ケしい疑問であります。で、今朕は此の問題を提出しますから、貴衲は之を解いて下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、「如來は飮食・衣服・醫藥・臥具等の須要物に事缺き給ふことなし」と言ひ、又「如來は五沙羅樹と稱する婆羅門村に入り托鉢して、何にも貰ひ給はざりき」と云ふも、兩者とも眞實であります。が、如來が何にも貰ひ出し給はなかつたのは惡魔の仕業であります。』

王『では、尊者よ、世尊が其の日に到るまで無量劫の間、積み累ね給ひし善根功德は如何なつたのですか。また今生れたばかりの惡魔が、〔世尊の〕積功累德の勢力に打ち勝ち得たのは、如何いふ理由ですか。尊者よ、此の場合には、不善は善よりも力が强く、惡魔の力は、佛陀のそれよりも强くなくてはならぬと云ふことと、樹の根は其の頂上よりも重く、罪人は功德を積める人よりも、力が强くなくてはならぬと云ふことと、二者の中、その孰れか一の非難を甘受せなければなりませぬ。』

尊『大王よ、これだけでは善と惡と、其の力は孰れが强いか、又は佛陀と惡魔と、其の力は孰れが强いかを立證することは能きませぬ。此の事に關しては、もつと遺漏なき理由がありさうなものです。大王よ、人あり、轉輪聖王に獻上せんとて、蜂蜜又は蜂房、若くは其種の或るものを持參せしに、王宮の門衞が、彼に向つて、「今は王に拜謁すべき時刻でない。だからお前は王から處罰を受けない内に、

能るだけ疾く其を持ち戻るがよい」と申しました。そこで、其男は怖れ戰いて、其獻上品を取り上げ、大急ぎで持ち歸つたと假定せんに、此の場合、轉輪聖王は、單に時間外れに獻上品を持參したと云ふ事實のため、門衞のものよりも力が弱いと言へませうか。また王は、もう是れから決して獻上品を受け取り給はないでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、そは門衞のものの意地惡るなために、獻上品の持參者を追ひ戻したのです。で、他の門からならば、それに數百千倍する高價なものでも持ち込み得られたでせう。』

尊『大王よ、世尊の場合も、丁度その如く、惡魔が五沙羅樹村に於ける婆羅門や、戶主を抱き込んで居ましたのは、彼が猜忌心によるのです。で、他の數百千の諸天は、佛陀の所に詣でて、滋養分に富める美味の食物を佛陀に獻じ、佛陀の體力を增進し給ふべきを念じつつ、恭しく合掌低頭して佛陀の側に立つて居たのであります。』

王『那伽犀那尊者よ、それは然うかも知れませぬ。世尊は容易く出家人の四種の須要物を得て、其に事缺き給ふことはありませんでした。世の至上者たる如來は、人天の請に應じて、一切の須要物を享受し給ひました。然るに世尊に奉るべき食物の供給を、中止せしめんとの惡魔の量見は、苦もなく貫徹されました。尊者よ、これ朕の疑惑の解除せられざる所以であります。朕は今尚ほ此の問題の解決に苦しみ惑うて居ます。朕の心は、彼の陋劣卑賤にして罪深き惡魔輩が、如何して如來・應供・正等覺・

人天の世界に於ける最上中の最上者・光榮ある善根功德の寶の所有者・無等等者・無雙者・無比者に對する供養を遮り得たかに就て惑はざるを得ませぬ。』

尊『大王よ、供養に四種の遮事があります。卽ち一には特殊の人の爲に當てゝない供養に對する遮事、二には誰かの爲に特に設けられる供養に對する遮事、三には已に準備の出來て居る供養に對する遮事、四には供養を受くるものに對する遮事であります。大王よ、特殊の人の爲に當てゝない供養に對する遮事とは、特殊の受者に上げやうと思つたのでもなく、又特殊の受者を見てから用意したのでもなく、たゞ誰にでも上げやうと思つて用意してある供養物に對して、何者かが其を遮ることを云ふのです。例せば人が折角供養せんとして居るのに對して、側から「其を彼に供養して何になるか」と言つて遮るやうなものです。誰かの爲に特に設けらるゝ供養に對する遮事とは、或る特殊の人に布施しやうと思つて設けて居る供養をば、何者かが横合からおせつかいを入れて妨碍することです。已に準備の出來て居る供養に對する遮事とは、已にそれぞれの準備が整つては居るが、まだ受納されない供養に對して、何者かが横合から邪魔することです。供養を受くるものに對する遮事とは、已に與へられたる供養の享受を邪魔することです。大王よ、之を四種の遮事と申します。

さて彼の惡魔が五沙羅樹村に於ける婆羅門及戶主を抱き込んで居ました時、その場合に出來て居た食物は、特に世尊の爲に用意が出來て居たのでもなく、世尊に奉つらうと思つて準備してあつたので

もなく、隨つて世尊の所有でもなかつたのであります。で、まだ到著はしないが、誰か來るだらうと思つて、供養の準備を整へてあつた譯でも何でもない遮事なのです。卽ち特に世尊に對してのみ行はれた遮事ではなく、其の日彼の村に往つたものは、誰でも供養に預ることが能きなかつたのです。大王よ、世尊に上げやうと思へる布施に對し、又は世尊の爲に已に出來て居る供養に對し、若くは已に世尊に上げられた布施に對して、人天の世界に於いて、若くは惡魔、若くは梵天、若くは婆羅門、若くは出家の、一人の能く之を遮り得るものあるを知りませぬ。若し此の場合に、何者かが嫉妬心にかられて、何等かの遮事を行はんとしましたならば、其の者の頭は裂けて數百千の斷片となるでせう。大王よ、如來には、何人も、何等の障害をも加へ得ない四種の德があります。四種の德とは、世尊に上げやうと思へる布施、又は世尊の爲に準備せる施物に妨碍の能きないこと、如來の體より發する長さ一尋の後光に對して障害の能きないこと、如來の正徧智の、智慧の寶に對して障害の能きないこと、如來の生命に對して障害の能きないこと、之れ卽ち如來の四德であります。大王よ、此等の一切の德は、一味にして、瑕疵なく、動かず、他の爲に攻擊せられず、他の事情のために變せらるることの能きないものであります。大王よ、彼の惡魔は、五沙羅樹村の婆羅門、及び戶主を抱き込んだ時、見えない所に潛伏して待つて居ました。そは恰も强盜が國外の見えない地方に潛伏して、天下の公道を取り圍んで居るやうなものであります。されど若し國王が彼等を見附て捕へましたら如何でせう。

彼等强盜共は果して安全でせうか。』

王『いいえ、尊者よ、王は斧を以て彼等を切り殺し、寸寸に裂いて了ふでせう。』

尊『大王よ、見えない所に隠れて居た惡魔も、亦丁度その通りです。また人の妻たる婦が、人目を忍んで情人と潛伏する如なものです。大王よ、若し其の夫が、彼女の奸計を見附けたら、如何でせう。彼女は果して安全でせうか。』

王『いいえ、尊者よ、夫は彼女を截り殺すか、負傷せしむるか、監禁するか、又は奴隷の位置に引き下げるでせう。』

尊『大王よ、惡魔が五沙羅樹村の婆羅門、及び戸主を抱き込んで、見えない所に潛伏して居たのも、丁度それと同じことです。若し彼が、世尊に上げやうと思へる布施、世尊の爲に準備の出來て居る供養、若くは世尊の所有し給ふものに對して、何等かの障害を加へましたら、彼の頭は寸寸に引き裂かれたでせう。』

王『善哉、那伽犀那尊者よ、彼の惡魔は、强盜の如に、五沙羅樹村の婆羅門、及び戸主を抱き込んで、見えない所に潛伏して居たのです。若し彼の惡魔が、世尊に上げやうと思へる布施、世尊の爲めに出來て居る供養物に對して、干渉したり、或は其の幾分を取らうなどと致しましたら、彼の頭は寸寸に引き裂かれ、彼の身體の組織は、一握の稃のやうに、消散せしめられるでせう。善く解りました。

尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

無意識の罪に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、「生物の命を奪ふものは、縦令それと知らずに爲ても、非常な重罪を犯したことになる」と言はれますが、然も、世尊は一時、律の中に「知らずに爲た者には罪はない」と仰せられてあります。で、若しも「生物の命を奪ふものは、縦令それと知らずに爲ても、非常な重罪を犯したことになる」と云ふ說が眞實でしたら、「知らずにした者には罪はない」との世尊の仰せは虚僞でなければならず、若しまた「知らずに爲た者には罪はない」との仰せが正しいとすれば、「縦令知らずに爲ても、生物の命を奪ふものは、重罪に處せられねばならぬ」と云ふ說は間違ひでなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題でありまして、解決し折伏することは能きませぬ。で、いま朕は貴衲に之を提出しますから、何うぞ之を解決して下さい。』

尊『大王よ、「生物の命を奪ふものは、縦令それを知らずに爲ても、非常な重罪を犯したことになる」と言ふのも、亦た「知らずに爲たものには罪はない」と言ふのも、兩方共に世尊の敎勅であります。が、此の二敎勅には、異なる意義を含んで居ます。卽ち一は想解脫〔の人〕によりて行はれる罪で、他は非想解脫〔の人〕によりて行はれる罪であります。大王よ、世尊が「知らずに行つた者には罪はない」

と仰せられましたのは、此の二者中の前者に關してであります。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

佛と其の教徒に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、「阿難陀よ、如來は自ら比丘衆を導びかねばならぬとも考へねば、また教團は如來を憑にして居るとも考へない」と宣ひ、然るに一時、彌勒の性德を說くに當り、「我は今數千の比丘衆の指導者たるが如く、〔將來も亦た〕數千の比丘衆の指導者となるだらう」と仰せられました。で、若し前說が眞實だとすれば、後說は虛僞となりますし、若し又後說が眞實だとすれば、前說は虛僞となります。これ亦た兩頭にかかる問題です。で、朕は貴衲に提出しますから、貴衲は之を解決せねばなりませぬ。』

尊『大王よ、前說も後說も兩方共に如來の御言葉であります。然し陛下が御提出になりました問題の中、一の章句の意味は含蓄的でありますが、他の章句の意味は含蓄的ではありませぬ。大王よ、如來が教徒を探し求め給ふのでなく、教徒等が如來を追ひ求むるのであります。大王よ、「此は私である」とか、「此は私のものである」とか申しますのは、單に世俗の見解でありまして、それは決して第一義諦ではありませぬ。大王よ、執著は如來の排斥し給へる氣分でありまして、如來は執著を斥け、「此

は私のものである」と言ふやうな迷妄を遠離し、專ら他を救助せんがために生存し給ふのであります。大王よ、大地が世界の有情を扶持し、彼等の庇護となり、彼等の依憑所となり、而も「諸の有情は我に屬す」との想なく、彼等を追ひ求めざるが如く、如來も亦た一切衆生の扶持者であり、庇護者でありますが、而も「此等は我に屬す」との想念もなく、彼等を追ひ求め給ふやうなことはありませぬ。大王よ、大なる雨雲は能く雨を降らし、〔地上の〕草木人畜等に營養を寄與し、且つ其の種族を維持し、而して其等の生物は其の活計を雨に托しますが、雨それ自らには「此等は我がものである」との想念もなく、追ひ求めんとする考もなきが如く、如來も亦た一切の衆生に善法を知らしめ、善法の中に彼等を支持し、而して一切の衆生は如來の中に生きて居るのでありますが、而も如來には「此等は我がものである」との想念もなく、追ひ求めんとする考もありませぬ。如何して是の如くなるかとならば、如來は一切の自利的欲望を遠離し給ふからであります。』

王『善哉、尊者よ、貴衲は種種の例を擧げて、善く此問題を解決あそばしました。藪林は截り開かれ、闇黑の幕は取り除かれて明るくなり、敵手の反論は打ち碎かれ、而して佛子等の眼は漸くにして覺まさせられました。』

教團の分裂に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は「如來は、決して其教徒を分裂せしめ給ふことなし」と言ひ、又「提婆達多は一擧に五百の比丘を誘つて分裂した」と言はれます。で、若し前説が眞實だとすれば、後説は虛僞でなければならず、若し後説が眞實だとすれば、前説は閒違ひでなければなりませぬ。これ亦た兩頭論法上の疑問で、深奧難解の問題であり、亂麻よりも解き難く、人は爲に〔眼を〕蔽ひ塞がれ、隱され、閉ぢられ、包まれて居ます。此の故に外道等の論議に對する時と同樣に、貴衲の妙力を示して貰ひたいのです。』

尊『大王よ、前説も後説も、兩方ともに眞實であります。が、後説の場合は破和合者の力によるのです。大王よ、破和合の者あれば、母は其の子から分離せられ、子は其の母から分離せられ、父は子と分れ、子は父と離れ、兄弟は姉妹と分れ、姉妹は兄弟と離れ、友は友より分離せしめられます。また彼の諸種の材木もて接ぎ合はされた船は、激浪のために破壞せられ、生產力に富み、液汁に富める樹木も、暴風のために吹き倒され、最上品質の黃金も、青銅のために分割せられます。けれども如來の教徒の閒を分裂せしめんことは、賢者の志向でもなく、諸佛の意志でもなく、又「佛陀は、教徒を分裂せしめざる可し」との言を學べる學者の望む所でもありませぬ。而して其には特殊の意味があるのです。大王よ、衲の知る限りに於ては、如來御自身で何事かを爲し給ひしため、又は何ものかを取り給ひしため、若くは不親切なる言葉遣ひのため、或は不正の行のため、又は不義の行のため、若くは

一切の行爲のために、如來の敎徒が分裂せしめられたと言ふことは、未だ嘗て聞かざる所であります。此の意味に於て、如來の敎徒は不可分裂的であります。陛下よ、佛陀の九分敎中に、一菩薩の能く如來の敎徒を分裂せしめた例が御座いますか。』

王『いいえ、尊者よ、其麼な例は未だ嘗て見たこともなく、聞いたこともありませぬ。尊者よ、御説御道理です。朕は貴衲の御説の通り信受いたします。』

第三章　矛盾問答

法の優劣なることに就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、「(一)婆說他よ、法は、此の世に於いて我曹が現に見るもの、及び將來起るべきものの中で、最上第一である」と宣ひました。然るに貴衲等の言によれば、「最勝道卽ち須陀洹に入りて、苦界に再生すべき可能性を脫却し、智見を〔開發〕獲得し、敎理を智識せる優婆塞も、尙ほ且つ敎團の團員卽ち比丘――縱令その比丘は雛僧であらうとも、又は受具以前のものでも――に對して敬意を拂ふ表象として、其の座席より立ち、禮拜し恭敬せねばならぬ」とあります。尊者よ、若し世尊の敎勅が眞實であるならば、貴衲等の言說は虛僞でなければなりませぬ。されど、若し貴衲等の言說が眞實だとすれば、佛陀の敎勅は間違ひでなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる疑問であります。で、朕は此の問題を提出しますから、貴衲は之に解決を下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊の敎勅も、我等の言說も、兩方ともに間違ひではありませぬ。が、それには下の如き理由があるのです。大王よ、沙門の沙門たる資格を形成するに、二十の人格的特性と、二種の外形的

【一】Vāsettha.

表象があります、沙門は此等の特性と表象とを具備すると云ふ理由で、禮拜せられ、恭敬せられ、尊敬せられる價値があるのです。然らば其の二十の特性及び二種の外形的表象とは何かとならば、謂く、最善の自制・最上の克己・正業・行履の寂靜・言行の洗練・感覺〔的欲望〕の征服・忍耐・同情・獨居の實行・幽寂を愛すること・靜慮・持戒の堅固なること・不正の行に就ての慚愧及怖畏・精進・誠實・聖典を讀誦すること・〔經律に關して不明の點を賢者に〕質問すること・戒法及び其の他の清規を喜び守ること・世俗の事柄に對する執著の念を遠離すること・持戒を完成すること・及び壞色の衣を著すること・頭髮を剃ることであります。

大王よ、教團の團員、卽ち比丘は此等の事柄を實行して、生活せねばなりませぬ。沙門は此等の一をも缺かず、都て完全圓滿に實行し、以て無學地たる阿羅漢の位地に到達するのであります。而して彼は一切の國土の最高の方に向つて進み行くのです。これ彼の優勝の道卽ち須陀洹に入りたる優婆塞が、比丘に對し敬意を拂ふ表象として、其の座席より立ち、縱令その僧が未だ受具して居ないでも、禮拜恭敬する所以であります。〔換言せば〕比丘は阿羅漢の伴侶であるから尊崇するのです。〔尙ほ之を言へば〕比丘は一切の煩惱を滅ぼせる阿羅漢の伴侶であるから、煩惱の巷に彷徨せないから、聖流に入れる優婆塞も、尙ほ且つ未受具のものに對してすら、敬意を表し尊崇恭敬するのであります。比丘は最尊の教團に入れるのに、自らは斯る最尊の狀態に達して居ないから、聖流に入れる優婆塞も、尙

ほ且つ未受具のものに對してでも、敬意を表し尊崇恭敬するのであります。比丘は波羅提木叉の讀誦に耳傾くることを知れるのに、優婆塞自らは之を知ることが能きないから、聖流に入れる須陀洹も、尚ほ且つ比丘に對して敬意を表するのであります。また比丘は教團の中に人を導き入れ、勝者の教を弘めるのに、優婆塞自らは其を爲すことが能きないから、比丘を恭敬するのです。比丘は沙門たる法衣を纏ひ、佛陀の志を行ひ果すのに、優婆塞自らは其等の境遇から懸け離れて居るから、比丘を尊崇するのです。比丘は鬚髮を剃除し灌頂を受けて、何等の裝飾品をも身につけず、ただ正義の香料を以て身に塗るのに、優婆塞自らは高價なる寶石や、眞珠等の裝飾に浮身をやつして居るから、比丘を禮拜し恭敬するのであります。

大王よ、比丘に沙門たるべき二十の特性と、二種の外形的表象の存するばかりでなく、其等を完了し、他を教訓するのに、彼自らは聖教宣傳の事に與り得ないから、未受具の比丘に對してすら、敬意を表し、尊崇するのが當然だと思つて居るのです。大王よ、譬へば一婆羅門を家庭の教師と仰ぎ、彼より智識を修得し、刹帝利族の本務を習へる王子が、國王の位に卽ける後と雖も、自らの教師であり、家庭に於ける聖教の宣教使であつたと云ふ考を失はず、[常に]彼に對して敬意を表し、尊崇するやうなものであります。優婆塞も亦た是の如く、比丘に對しては、縦令未受具のものであつても、尊崇恭敬するのが當然であります。

大王よ、尙は又、陛下は、此の事實によつて、比丘衆たる狀態の偉大なることと、及び無比の光榮あることとを御承認あそばすでせう。で、大王よ、若しも聖流に入れるもの、卽ち須陀洹の人が阿羅漢果を證得するならば、彼は其の日に般涅槃するか、又は比丘たる狀態となるか、二つに一つでなくてはなりませぬ。大王よ、出家者の狀態は實に不動であり、光榮であり、最も高尙であります。』

王『尊者よ、此の煩瑣な問題は、貴衲の大智大力によりて、十分に解明されました。貴衲の如き賢哲でなければ、何人と雖も、此を解決することは能きますまい。』

說法の害に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、「如來は一切の衆生から害を遠ざけ、彼等を利益し給ふ」と言はれますが、而も一時は又、「如來が炎炎燃え昇る、火の喩に基いて說法し給うた時、六十名の比丘衆が口から熱血を吐いた」とも言はれます。で、是の如き如來の說法は、［明かに］比丘衆の害となり、決して利益する所はありませぬ。是の故に若し「如來は一切の衆生から害を遠ざけ、彼等を利益し給ふ」と云ふことが眞實だとすれば、「如來が炎炎燃え昇る、火の喩に基いて說法し給うた時、六十名の比丘衆が其の口から熱血を吐いた」と云ふのは虛僞でなければなりませぬ。若しまた第二の所說が眞實だとすれば、第一の所說は虛僞でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる疑問でありますから、

朕は貴衲に提出します。で、貴衲は此を解決せねばなりませぬ。彼の六十名の比丘衆が熱血を吐いたのは、

尊『大王よ、二つの所說は兩方とも閒違ではありませぬ。如來の干與し給ふ所でなく、彼等自ら招く所であります。』

王『では、尊者よ、若し如來が說法し給はないでも、彼等は熱血を吐いたでせうか。』

尊『いいえ、彼等が如來の說き給ふ所を閒違つて領知した時、彼等の心の中に火が燃えて居たので、口から熱血を吐いたのです。』

王『されば、尊者よ、そは如來の所作から起つた事と申さねばなりますまい。卽ち彼等を亡ぼした主要原因は、如來であつたと申さねばなりませぬ。尊者よ、一疋の蛇が蟻の穴に匍匐して居ました。然るに人あり土の入要なために、其の蟻穴を破毀して、土を運び去つたと假定せんに、蛇は其の人のために蟻穴の入口を密閉せられ、空氣が無くなつたので遂に死んで了ひました。尊者よ、彼の蛇は此の人の所作によつて殺されたのではありますまいか。』

尊『然うです、大王よ。』

王『尊者よ、六十名の比丘が、熱血を吐いた場合も、亦た是の如く、如來は彼等の破滅の主要原因であります。』

尊『大王よ、如來は阿諛して御說法あそばしましたのでもなく、又惡意を以て御說法あそばしたのでも

ありませぬ。卽ち如來は全く阿諛の情や惡意の感を遠離して、御說法あそばしましたのです。是の故に如來の說法を正しく領知したものは菩提を得、聞違つて領知したものは墮落したのであります。大王よ、人が檬果樹や、閻浮樹、又は摩頭樹を搖れば、液汁に富み、しつかりと固著して居る果實は、毫も妨害を受けないで、其まま生つて居ますが、莖が腐り、固著して居ない果實は、地に落つるが如く、如來の說法を聞く者も、亦た其麼ものです。また、大王よ、農夫は小麥を成長せしめんとて、畑を耕すに當り、數千本の雜草を切り殺します。また人は砂糖を得んとて、數多の小さな砂糖稈を、磨き臼に入れて、磨き碎いて了ひます。如來も亦た是の如く、人に菩提の收穫を得せしめんとて、阿諛の情もなく、惡意の考もなく、說法あそばします。然るに如來の說法を正しく領知するものは菩提を得、聞違つて領知するものは墮落するのであります。』

王『然らば、尊者よ、彼の比丘衆は、如來の說法のための故に、墮獄した譯ではないですか。』

尊『大王よ、大工は材木を地上に寐かして置き、如何もしないで、其を眞直にし、役立つやうにすることが能きますか。』

王『いいえ、尊者よ、それは能きませぬ。彼もし其の材木を眞直にし、役立てやうと思はば、其の屈曲を除かねばなりませぬ。』

尊『大王よ、如來も丁度その通りです。唯單に弟子等を監視あそばすだけでは、眼を開かうとして居る

ものの、眼を開かしめ給ふことは能きませぬ。如來は如來の御言葉を邪に領知するものを取り除いてから、救はれやうとして居るもの等を救ひ給ふのです。大王よ、惡意の漢等が墮ちるのは、彼等自らの所作行爲に因ること、恰も芭蕉や、竹や、女性の閑生が、彼等自ら其生を與へてやつたものから、滅ぼされるやうなものです。大王よ、また彼の劫賊等が、その眼を抉り出され、杙に刺され、處刑臺に連れ行かれるのは、彼等自らの所行に因るのです。惡意の漢も亦た是の如く、彼等自らの所作に因つて滅ぼされ、勝者の教訓から落ちこぼれるのであります。

六十名の比丘衆の場合も、丁度その通りで、彼等は如來、或は其他の人の所作に因つて、落ちこぼれたのではなく、全く彼等自らの所作に依つて落ちぶれたのであります。大王よ、人あり、一切の人人に、〔不死の藥と謂はれる〕醍醐味を與へたと假定せんに、彼等は其を喰べて健康體となり、肉體上の一切の病氣を撃退して、長命を保つことが能きました。が、其の中ただ一人だけは、消化不良のため、其を喰べて死にました。大王よ、此の場合に於いて、醍醐味を與へた人は、傷害の罪を負はされるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、其の人は無罪です。』

尊『大王よ、十千世界の人天に、醍醐の法味を與へ給ふ如來も、亦た丁度その通りです。即ち善く其を行ひ得る衆生は、醍醐の法味に因つて賢者たらしめられ、然らざるものは滅び落ちるのであります。

で、大王よ、食物は一切衆生の生命を保持しますが、或るものは其を食べて虎列剌に罹つて死にます。
で、大王よ、餓ゑたる人に食物を與ふるものは、何等かの罪に問はれるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、其の人には何の罪もありませぬ。』

尊『大王よ、十千世界の人天に、「不死の藥と謂はれる」醍醐の法味を與へ給ふ如來も、亦た丁度その通りです。卽ち善く其を行ひ得る衆生は、醍醐の法味に因つて賢者となり、然らざるものは滅び落ちるのであります。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

愚漢に就て

王『那伽犀那尊者よ、法將たる舍利弗長老は、「如來の說法の態度は無垢清淨にして完全圓滿である。如來の說法には何等の缺點過失もなく、何人も知らない事にまで注意を怠り給はない」と言つて居ります。然るに他方に於いて、如來は彼の(二)迦蘭陀族の(三)須陳那長老が罪を犯せる場合、初めて(四)波羅夷罪の宣告を下すに當り、粗暴な言葉を扱ひ、彼を呼んで「馬鹿野郞」と仰せられました。長老須提那は、是の如く呼ばれて、其の師を怖れ戰き、痛み悔いて、聖道を了解することが能きなかつ

【二】Kalanda.
【三】Sudinna.
【四】Pārājika は教團の團員が團外に放逐せらるべき極罪を云ふ。

たとあります。尊者よ、若し舍利弗の言が眞實だとすれば、如來が迦蘭陀子、須陳那を呼んで「馬鹿野郎」と仰せられしことは虚僞でなければなりませぬ。これ又兩頭にかかる問題ですから、朕は之を提出して、貴衲の解決を願ふのであります。』

尊『大王よ、長老舍利弗が言つたことも眞實であり、又如來が須陳那に波羅夷罪の宣告を下し給ふ場合に「馬鹿野郎」と仰せられしことも眞實であります。然しながら世尊が須陳那を「馬鹿野郎」とお呼び遊ばしたのは、世尊の性質の粗暴なためではありませぬ。そは單に彼〔が行爲〕の眞相を指摘あそばしたまでで、決して彼に害を加へやうといふ所存ではなかつたのであります。然らば眞相の指摘とは何を意味するかとならば、大王よ、若し人あり、今生此の世で四諦を覺ることが能きなければ、其の者の人間たる狀態は〔畢竟〕無益であります。が、若し彼が〔それと〕異つたことを行へば、彼は異つたものになります。是の故に世尊は彼等を呼んで「馬鹿野郎」と仰つしやつたのです。卽ち如來は迦蘭陀族の須陳那に對して眞實の言を仰つしやつたので、決して事實相違の言を仰つしやつたのではありませぬ。』

王『けれども、尊者よ、縱令人は他を罵詈するに當り、眞實のことを言つても、尙ほ且つ我曹は數錢の科料に處します。何せなれば其の言は縱令眞實であつても、平和を破る底の言葉を以て人を罵詈したかぎりは、罪を犯したこととなるからであります。』

尊『大王よ、陛下は曾て人が罪人を拜み、彼に敬意を表せんがため、其の席を立ち、お世辭を言ひ、若くは恭敬するのを御覽になりましたか。』

王『いいえ、尊者よ、見たことはありませぬ。加之、若し人が罪を犯し、其の罪は如何なことであらうとも、眞に非難刑罰を償するならば、人は彼を斬首に處し、又は彼を苛責し、或は繩もて縛り、若くは死刑に處し、或は其の資產を取り上げてしまひます。』

尊『では、大王よ、世尊は當然行はるべきことを行ひ給ひましたか、如何でせう。』

王『尊者よ、世尊は正に行はるべきことを、最も適當に行ひ給ひました。而して、尊者よ、人天の世界のものが、此を聞かば、其の心溫和になり、罪に落ちることを怖れ、罪人を一見してすら、怖れ戰きませう。況んや惡行の人と交はるが如きことあらば、尙ほ更であります。』

尊『大王よ、醫者は氣分が惡くなり、全身の結構が亂れ、疾病が充ち滿てるものに對し、藥として美味いものを與へるでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、醫者は疾病を癒さんがために、身を刺すやうな强い苦い藥を與へます。』

尊『大王よ、如來も亦た是の如く、一切の罪障の疾病を根絕せしめんがために訓誡を與へられます。而して如來の御言葉は、縱令嚴烈であつても、人を柔らげ、彼等を溫和にすることが能きます。

大王よ、熱湯は、何物でも、柔らげられ得るものを柔軟ならしめます。如來の御言葉も、亦た是の

如く、そは縱令嚴烈でありましても、子に對する父の言葉のやうに、利益に充ち、慈悲に滿ちて居ます。大王よ、惡臭の煎汁、或は厭やな藥を服めば、人の身體の病氣を滅却せしめることが能きます。如來の御言葉も、亦た是の如く、そは縱令嚴烈でありましても、利益を將ち來し、慈悲に充ち滿ちて居ます。また、大王よ、綿の球は人の上に落ちかかつても、傷を負はしめませぬ。如來の御言葉も、亦た是の如く、縱令そは嚴烈でありましても、人を害するやうなことはありませぬ。』

王『善哉、尊者よ、貴衲は多くの例を擧げて、此の問題を明かにされました。如何にも御道理です。那伽犀那尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

樹話に就て

王『那伽犀那尊者よ、如來は一時、

「婆羅門よ、此の野生のパラーサ樹は非情物なり。能動的にして、智識あり、生命充實せる汝の、言語を聞き分け得るものにあらず。如何ぞ汝は此の無意識物と語らんとはする。」

と仰せられました。然るに他方に於ては又、

「かくて白楊樹は、バーラドヷーヂャよ、我も亦た話すことを得、故に我に耳傾けよと答へぬ。」

と宣ひました。若し、尊者よ、樹が非情であるならば、白楊樹がバーラドヷーヂャに話したといふことは、虚僞でなければなりませぬ。が、若し彼の白楊樹の話したことが眞實だとすれば、樹が無情だと言ふことは、閒違でなければなりませぬ。これ又兩頭にかかれる問題です。朕は今この問題を貴衲に提出しますから、貴衲は之を解決して下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊は、「樹は無情である」とも宣ひ、又「白楊樹がバーラドヷーヂャと話した」とも仰せられました。が、「此の白楊樹が、もの言つた」と仰せられしは、世閒普通の言葉遣によるのです。卽ち無情なる樹は、話すことは能きませんが、此に所謂樹とは、其中に棲める森林の女神の名稱として用ひられたのです。是の如く樹がものいふと言へるは、世に知れ渡つた語法であります。

大王よ、穀物を積める車を穀物車と呼びます。が、其の車は穀物で造つてあるのではありませぬ。世人は、其の車に穀物を積み込めるが故に、其を穀物車といふ言葉を用ひるのです。大王よ、人が酸乳を攪き混ぜる時は、普通には酪を攪き混ぜると申します。また大王よ、人が世の中に存在しない何事かを作しつつあるとき、其の仕事のまだなされないのに、普通には恰も其の仕事が成し了へられたかのやうに話します。如來も亦た是の如く、法を說きたまふに當りては、世閒普通に用ひられる語法を以てしたまひます。』

王『善哉、尊者よ、如何にも御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

佛陀の最後の疾病に就て

王「那伽犀那尊者よ、聖典結集に參與した長老等は、

「是の如く我は聞けり、(五)佛陀は鍛冶屋のチュンダの供養を受け給ひし時、急に苦痛を感じ、死因となれる怕しき病氣に罹り給へり。」

と云つて居ます。然るに世尊は其の後、

「阿難陀よ、(六)「成道の時と入滅の時と」此等兩度の施食は、同等なり。同等の果を結び、同等の異熟果を將ち來し、他の場合の施食よりも、一層大なる果を結び、一層大なる異熟果を將ち來さむ。」

と仰せられました。

さて、那伽犀那尊者よ、若し世尊がチュンダの供養を受けて、急病に罹り、死因となる程の激しい苦痛を感じ給うたとすれば、世尊の阿難陀に告げ給ひしことは虛僞でなければなりませぬ。が、若し又世尊の阿難陀に告げ給ひしことが眞實だとすれば、長老の叙述は虛僞でなければなりませぬ。尊者よ、變じて毒となり、疾病の原因となり、如來の生命を奪ひ、生存の時期を短縮せしむるほどの食物の供養が、如何して大妙果を將ち來すことが能きますか。尊者よ、之を說明して異端者流の攻擊に備

【五】巴利語大涅槃經第四卷二十三を見よ。

【六】巴利語大涅槃經第四卷五十七頁を見よ。

へられよ。世人は、世尊が貪慾の情にかられ、食ひ過して、痢病に罹り給ひしものと思ひ、此の問題に就て迷ひ惑うて居ます。』

尊『大王よ、長老の叙述も事實ですし、世尊が「自ら無上正覺を成ずる時と、無餘涅槃に入る時とに受ける兩度の供養は、〔其の功德が〕同等の果を結び、他の何れの場合の供養よりも、一層大なる果を結び、一層大なる異熟果を將ち來さむ」との仰せも亦事實です。何故なれば其の供養は功德に富み、利益に富んで居るからであります。大王よ、諸天は「如來が最後の食物を取り給ふ」と考へて、喜悅の聲を擧げ、而して其の(七)茸に神力の滋養分を傳授しました。而して其の食物は善く料理せられ、香氣もよく、あつさりした消化し易いものでした。で、世尊が病氣にお罹りになりましたのは、其肉體の非常に衰弱遊ばして居らしたのと、存ふべき一期の壽命を存へ盡し給ひしがためであります。而して丁度その時病を發して、ますます危篤の容體とおなり遊ばしましたのは、恰も火が燃えて居るのに、若し新に燃料を加ふれば、ますます激しく燃ゆるが如く、又は河が平日の通りに流れて居るのに、大雨が降れば、大いに水勢を增して激流となるが如く、或は人が澤山食物を喰ぶれば、腹のまはりが、平常よりも大きくなるやうなものです。是の故に、大王よ、世尊が入滅遊ばしましたのは、チユンダが供養した食物のためではありませんから、陛下は罪を食物に被せてはなりませぬ。』

【七】原語 Sūkara-maddava の意味に於ては、學者間に種種の異說あれども、そは普通の讀者に用なきことと信ずるから、省略して置く。

王『されど、尊者よ、彼の兩度の食物には、何せ其麼に特殊の功德があるのですか。』

尊『そは佛陀が其を喰べて、尊貴なる境界に到達あそばしたからであります。』

王『尊者よ、貴衲は如何なる境界の實現によりて、兩度の食物に是の如き特殊の功德があると仰しやるのですか。』

尊『大王よ、（八）九次第定を順逆に通過して、到達した境界に就て話して居ます。』

王『尊者よ、如來が、最上無上の境界に到達あそばしましたのは、それ等の兩日に於いてですか。』

尊『然うです、大王よ。』

王『尊者よ、そは實に希有であり、未曾有であります。我が世尊に獻上せる布施のうち、此等兩度の供養に比ぶべきものはありませぬ。尊者よ、そは實に希有であり、未曾有であります。彼の九次第定に到達せることが、無上の光榮なるが如く、〔兩度の〕布施は、其の光榮によつて、他の場合の布施よりも、より大なる果を結び、より大なる利益となるのであります。善哉、尊者よ、御說御道理です。朕は貴衲の御說の通り信受いたします。』

【八】九次第定とは、（一）初禪次第定、（二）二禪次第定、（三）三禪次第定、（四）四禪次第定、（五）空處次第定、（六）識處次第定、（七）無所有處次第定、（八）非想非非想次第定、（九）滅受想次第定の九種の禪定を、他心を雜へず次第に一定より他定に進み入る法である。

王『那伽犀那尊者よ、如來は一時、

「おお(九)阿難陀よ、如來の遺身舍利を供養禮拜して、汝等自ら〔の修業を〕妨ぐるなかれ。」

と仰せられ、他方に於いては、

「恭敬せらるべき價値ある人の遺身舍利を禮拜供養せよ、
汝等此を行せば、此の世より天國に往くことを得む。」

と宣ひました。尊者よ、若し此の第一の敎勅が眞實だとすれば、第二の說敎は間違でなければなりませぬ。若し又第二の敎勅が眞實だとすれば、第一の說敎は間違でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる論法です。で、朕は今この問題を貴衲に提出いたしますから、貴衲は之を解決して下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、前說も後說も、兩方共に眞實です。が、此の第一は一切の人に對してではなく、佛子等に對する敎誡であります。蓋し佛子等の勤行は、遺身舍利を禮拜し供養するにあるのでなく、寧ろ一切諸法の眞性質を捕捉し、一心に正念を持ち、念發趣の法則に隨つて思惟し、思惟の諸の對象の眞髓を攫み、煩惱〔の犬〕と戰ひ、專ら善を奉行するにあるのです。これ佛子等の應に作さねばならぬ勤行で、

【九】巴利語大涅槃經第五卷二十四を見よ。

遺身舍利の供養崇拜は、他の人天にまかすべき仕事であります。
大王よ、象・馬・車・弓・劍・文書・及び手印の認め方などを學び、武士族の口傳・戰爭の仕方・戰場に於ける兵卒の率ゐ方などを習ふのは、天下の王子等の應に勤むべき業務であり、耕作や商賣は、他の毘舍族首陀族の應に勤むべき業務であるが如く、一切諸物の眞性質を摑み、一心に正念を持ち、念發趣の法則に隨つて思惟し、思惟の諸の對象の眞髓を捕へ、煩惱〔の犬〕と戰ひ、專ら善を行ずるのは、佛子等の應に作すべき勤行であり、遺身舍利の供養崇拜は、他の人天の作すべき仕事であります。また大王よ、梨俱吠陀・耶柔吠陀・差磨吠陀・阿他婆吠陀を學び、性相學・傳話・神話・名辭學・楷書・語原論・詩・文法・品詞論・占星學・緣起の〔吉凶の〕說明・夢・標識・六種の吠陀分・日月の蝕・彗星の飛翔より推論せらるべき豫言・雷鳴・遊星の會合・流星の隕つること・地震・火事・天地に現はれる前兆・數學・邪正疑決學・犬鹿鼠より推論せらるべき前兆の說明・流動體の混せ合せ方・及び諸鳥の鳴き聲などに關する智識の養成は、婆羅門の童子の應に作すべき業務であり、耕作・商賣・家畜の心配をすることは、他の毘舍族及び首陀族の業務なるが如く、一切諸物の眞性を摑み、一心に正念を持ち、念發起の法則に隨つて思惟し、思想の諸の對象の眞髓を捕へ、煩惱と戰ひ、專ら善を奉行するのは、佛子等の應に作すべき勤行であり、遺身舍利の供養崇拜は、他の人天の作すべき行事であります。是故に、大王よ、世尊が、
「おお阿難陀よ、如來の遺身舍利を供養禮拜して、汝等自ら〔の修養を〕妨ぐる勿れ。」

と仰せられましたのは、斯く斯く然か然かの事は、汝等の作すべき仕事でないから爲るな、斯く斯く然か然かの事は、汝等の應に作すべき業務だから作せと仰せられたのであります。大王よ、若し世尊が是の如く仰せ給はずば、比丘衆は衣鉢を取つて、彼等自ら佛陀の禮拜供養に從事したでせう。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です、私は御說の通りに信受いたします。』

岩石の破片に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は一方に於いては、

「世尊の步行し給ふ時は、無情の大地が、其の深い場所を埋めて、嶮岨な處を平かにした。」

と言ひ、又他方に於いては、

「岩石の破片が如來の御足を擦過した。」

と言はれる。が、其の破片が如來の御足に落ちかかつて來た時、何故に其の破片は如來の御足をよけなかつたでせうか。若し無情の大地が、深い場所を埋めて、嶮岨な所を平にした事が眞實だとすれば、岩石の破片が、如來の御足を傷けたといふことは虛僞でなければなりませぬ。若し又岩石の破片が如來の御足を傷けたといふ事が眞實だとすれば、無情の大地が深い場所を埋めて、嶮岨な所を平にしたといふことは虛僞でなければなりませぬ。これ復た兩頭にかかる論法であります。で、朕は此の問題

を貴衲に提出しますから、貴衲は之を解決して下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、兩說ともに眞實です。が、彼の岩石の破片は、それ自ら落ち來つたのではなく、それは提婆達多の所作によつて落されたのであります。大王よ、提婆達多は、生れ代り死に代り、數千百生の閒、世尊に對して怨恨を結んで居ました。で、彼は其の怨恨の情によつて、大きな岩石をひつ摑み、佛陀の頭上に落しかけやうと思つて、其を推し下したのです。然るに〔途中から〕二個の他の岩石が一緒に轉げ出して、如來の身邊に到達しないうちに其を遮ぎり、其の岩石と岩石との衝突のため、破片が出來て、如來の方向に飛んで、其の御足を傷けたのです。』

王『けれども、尊者よ、二個の岩石が、彼の大きな岩石の塊を遮ぎり得たやうに、破片も亦た遮ぎられさうなものですね。』

尊『大王よ、水や、牛乳や、生酥や、蜂蜜や、醍醐味や、油や、魚の咖喱汁や、肉汁を掌中に取れば、指と指との閒から漏れ出で滴りこぼれるが如く、遮ぎられたものも亦た辷り出したり、脫出したりするのであります。また陛下の御手に彼の纖細な塵のやうな砂粒を、御握り遊ばしたと假定せんに、其の砂粒は指と指との閒から漏れ出ます。また次に、大王よ、陛下の手にし、口に入れんとせらるる米粒ですら、時に或は〔指の閒から〕脫出することがあります。』

王『尊者よ、それは然うかも知れませぬ。朕は岩石が遮ぎつたことを承認します。が、其の破片も亦た

大地が佛陀になせるが如く、少なくとも佛陀に對して敬意を表さねばならぬ筈です。』

尊『大王よ、世には〔聖人に〕敬意を表さない十二種の人があります。卽ちその十二種とは、貪欲の念に住する貪欲漢と、瞋恚の念に住する憤怒漢と、愚癡の念に住する愚鈍漢と、高慢の念に住する自慢漢と、〔道理の〕辨別力なき惡人と、馴致性を缺ける頑冥漢と、卑劣の念に住する卑劣漢と、虛榮心に富めるお喋り漢と、慘酷性に富める惡漢と、苦難に沈める難澁者と、貪婪飽くこと知らぬ賭博漢と、利を得んがために忙殺せられるものとであります。然れど彼の破片は、岩石と岩とが衝突したはずみに出來て、世尊の方向に落ち、其の御足を打つたのです。そは恰も纖細な砂が、風のために吹きまくられて、其機勢に、何れの方面にでも飛び散るやうなものです。大王よ、若し彼の破片が、岩石から分離しなかつたならば、其も亦た一緒に突き合つて遮ぎられたでせう。が、其が地上にも定著せず空中にも止まらず、衝突した機勢に落ちて、世尊の御足を傷けたのは、恰も乾いた木の葉が旋風のために吹き廻されて、何處へともなく落ち行く如なものです。而して如來の御足を打つた破片の眞の原因は、彼の忘恩の惡漢たる提婆達多の悲しむべき所行によるのです。』

王『善哉、尊者よ、御説御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

沙門に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、
「人は諸漏を滅盡して沙門となる。」
と仰せ給ひ、又一時は、
「世人は四種の性質を有する人を沙門となす。」
と仰せ給ひました。而して其の四種の性質とは、忍辱と、節食と、出家と及び離著とである。然るに此の四性質は、未だ煩惱を斷せず、諸漏を滅盡しないでも、等しく具つて居るものがあります。で、若しも「人は諸漏を滅盡して沙門となる」との教勅が眞實だとすれば、「世人は四種の性質を具する人を沙門とする」との教説は虛僞でなければならぬ。若し又第二の所說が眞實だとすれば、第一の所說は虛僞でなければなりませぬ。これ又兩頭にかかる論法であります。で、朕は此の問題を貴衲に提出しますから、貴衲は之に解決を下して吳れねばなりませぬ。』
尊『大王よ、二者ともに世尊の御言葉たることは事實です。が、前者は總括的の說明で、後者は斯く斯く然か然かの人人の特性に就ての說明であります。加之、煩惱を制伏し、以て圓滿完全になれる都ての人人のうちで、若し陛下が精確に彼等を順序づけられるならば、諸漏を滅盡した沙門を第一番に置かるべきは當然でせう。大王よ、そは恰も水上及び陸地に生せる諸花のうちでは、二重咲きの素馨が主要なるものと認められ、都ての穀物のうちでは、米が主要なるものと認められるやうなものです。

卽ち他の花も花たるに於いて異はありませんが、人の最も愛好する順序から、二重咲きの素馨を第一番に置き、他の穀物も穀物たるに於いて違はなく、何れも吾曹の身體を支へる食料として、有要なものではありますが、若し彼等に順序づくれば、米が第一番に置かれませう。是の如く、大王よ、煩惱を制伏して圓滿になれる人人のうちでも、諸漏を滅盡した沙門が第一位に置かれるのであります。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

佛陀の欣喜雀躍に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「おお比丘衆よ、(10)若し人あり、我、若くは我が法、或は我が教團を讚美すとも、汝等決して其のために歡喜欣悅に陷る可らず。」

と仰せ給ひました。然るに一時、佛陀は婆羅門族の(11)犀曬から讚美せられて、歡喜欣悅し、得意滿滿として、自己の善功德を譽め、

「おお犀曬よ、(12)我は王者なり、最上無上の法王なり。〔われ〕法によりて輪を轉ず、〔何人も〕轉じ得ざる輪を〔轉ず〕。」

と仰せられました。で、若し第一の所說が眞實だとすれば、第二の所說は虛僞であり、第二を眞實だ

【10】長阿含經卷第十四、梵動經に曰く、「比丘、若稱譽佛及法衆僧者、汝等於中亦不足以爲歡喜慶幸、所以者何、若汝等生歡喜心、卽爲陷溺、是故汝等不應生喜」(卍藏第十三套第八、七十一紙表上段)

【11】Sela.

【12】巴利諸經要集第三犀曬經第七の七頌に出づ。

とすれば、第一は虚僞でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題ですから、朕は貴衲に提出して、之れが解決を乞ふのであります。』

尊『大王よ、陛下の引用された經文は、兩方とも世尊の御言葉に相違ありませぬ。が、世尊は其の教法の眞實實際の自性と、根本的の特徴とを表示せんがために、

「おお比丘衆よ、若し人あり、我、若くは我が教法、或は我が教團を讃美すとも、汝等決して其のために、歡喜欣悅に陷る可らず。」

と誡め給うたのであります。而して世尊が婆羅門族の犀曬から讃美せられて、

「おお犀曬よ、我は王者なり、最上無上の法王なり。われ法によりて輪を轉ず、〔何人も〕轉じ得ざる輪を〔轉ず〕。」

と仰せ給うたのは、決して利益を得んがためでもなく、名聲を揚げんがためでもなく、偏頗の精神のためでもなく、また多くの人を其の教徒たらしめんとする慾張りの志のためでもありませぬ。そは三百の青年婆羅門等をして、眞理の正智を得せしめんとの、慈悲・博愛・利他の赤心より湧き出でた御言葉であります。』

王『善哉、尊者よ、實に御說御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「何者にも害を加ふるなく、世に處して慈悲同情〔の念〕に住せよ。」

と仰せられ、また一時は、

「責罰すべきものは責罰し、寵愛すべきものは寵愛せよ。」

と仰せられました。さて、那伽犀那尊者よ、責罰とは、手を截り足を斷ち、鞭撻・縲絏・拷問の苦痛を見せしめ、或は死刑に處し、又は位階を貶下することなどを意味するのです。此の故に是の如きの御言葉は、世尊に相應はしからず、世尊が是の如き御言葉を用ひ給ふ筈はありませぬ。で、若し「何者にも害を加ふるなかれ」との仰せが眞實だとすれば、「責罰すべきは責罰し、寵愛すべきは寵愛せよ」との仰せは虛僞でなければなりませぬ。若し又第二の仰せが眞實だとすれば、第一の仰せは虛僞でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題です。で、いま朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は之に解決を下さねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下の引用し給うた文句は、兩方ともに世尊の御教訓に相違ありませぬ。先づ彼の「何者にも害を加ふるなく、世に處して慈悲同情〔の念〕に住せよ」との仰せは、一切の諸佛の嘉納し稱讚し給

ふ所であります。して又この句は佛法の教誡の一であり、開示の一であります。蓋し諸惡を作さぬことは、佛法の特色の一となつて居るからです。即ち彼の教勅は、此の特色と相應して居るのであります。されど「責罰すべきは責罰し、寵愛すべきは寵愛せよ」との仰せは、言葉の用ひ方が特殊なることを知らねばなりませぬ。大王よ、高慢な心は制伏せられねばなりませぬ。執著の心は教化改善せられねばなりませぬ。不善の心は制伏し、善なる心は培養し、放逸の念は制伏し、綿密精確の念は培養せられねばなりませぬ。また彼の邪見に囚はれたるものは制伏し、正見に達せるものは培養し、不聖なるは制伏し、聖なるは培養し、不義者は制伏し、義者は培養せられねばなりませぬ。』

王『さはれ、尊者よ、いま貴衲は朕の領分に戻つて來られた。朕が問うた問の意義は最早解りました。が、尊者よ、自らを處罰すべき人が、如何にして盜賊を處罰することが能きませうか。』

尊『大王よ、かれ若し懲戒に相當せば、彼を懲戒し、罰金に相當せば、罰金に處し、追放を價せば、追放に處し、死刑に相當せば、死刑に處せしめられよ。』

王『では、尊者よ、泥棒の死刑は、佛陀の教義の一部と成つて居るのですか。』

尊『いいえ、決して然うではありませぬ、大王よ。』

王『然らば如來は何故に泥棒を教化して善に導びけと敎へ給うたのですか。』

尊『大王よ、人が殺されるのは、諸の如來の允許によりて殺されるのではなく、自ら作る業によりて殺

されるのです。大王よ、法の教が示されたにもかかはらず、聰明なるものは、街路を歩ける無辜の人を捕へて殺すことが能きませうか。』

王『いいえ、尊者よ、それは決して能きませぬ。』

尊『そは何ぜでせう。』

王『何ぜなれば彼は無辜の人だからです。』

尊『大王よ、人の殺されるは、如來の御言葉によつて殺されるのではなく、彼自らの行爲によつて殺されるのです。然るに何等かの過失が教師にあると云へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、さうは言へませぬ。』

尊『大王よ、今や陛下は、如來の教は公明正大なる教法なることをお認めになりましたね。』

王『善哉、尊者よ、いかにも御説御道理です。朕は貴衲の御説の通りに信受いたします。』

長老の罷免に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

(三)「我は[心に]忿怒をも懷かず、頑冥[の情]をも有せず。」

【三】諸經要集第一、陀尼耶經第二の第二頌に出づ。

と仰せ給ひました。然るに一時、世尊は其の教團の團員たる、長老舍利弗及び目犍連の二人を、教團

から罷免し給ひました。尊者よ、如來は怒つて、此二人者を破門あそばしたのですか、又は喜んで破門あそばしたのですか。何うぞ其の理由を説明して下さい。尊者よ、若し如來が怒つて、彼等を罷免あそばしたとすれば、如來は未だ十分に怒の情を制伏して居らつしやらないこととなります。若し又喜んで彼等を罷免あそばしたとすれば、如來の無智のために、理由もないのに斯く遊ばしたこととなります。これ亦た兩頭論法上の問題ですから、貴衲の解答を煩はさねばなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊は、「我は〔心に〕忿怒をも懷かず、頑冥〔の情〕をも有せず」と仰せられ、又その弟子を罷免あそばしました。然し、そは決して怒つて彼等を破門あそばした譯ではありませぬ。大王よ、人あり、樹の根か、杙か、石か、壺の破片か、凸凹の地かに躓いて、大地の上に顚倒つたと假定せんに、大地は怒つて彼を顚倒せしめたと言はれませうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して然うは言へませぬ。大地は何人に對しても、忿怒の情もなければ、喜悅の情も有ちませぬ。大地は全く惡意、又は阿諛の情を遠離して居ます。で、彼が躓いて顚倒りましたのは、一に其の不注意疎忽のいたす所であります。』

尊『大王よ、諸の如來も亦た是の如く、何人に對しても、忿怒の情をも含み給はず、高慢の念をも懷き給ひませぬ。諸の如來・阿羅漢・佛陀は、何人に對しても、惡意も阿諛も懷き給ひませぬ。で、彼の弟子等が破門されましたのは、彼等自らの所行の爲であります。大王よ、大海は屍體と共棲いたしませ

ぬ。若し大海の中に屍體あれば、迅速にそれを陸上に打ち上げます。が、大王よ、大海は怒つて、其の屍體を打ち上げるのでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して然うではありませぬ。大海は何者に對しても怒りもしなければ、何者に對しても喜びもいたしませぬ。大海は何者かを喜ばしめんがために欣求もせねば、又何者かを害しやうといふ考もありませぬ。』

尊『大王よ、諸の如來も亦た是の如く、何人に對しても、忿怒の情をも懷き給はず、何人に對しても、喜悅の情をも起し給ひませぬ。諸の如來・應供・正等覺は、何人かの好意を求め、或は何人かを害せんとするの情を遠離し給ひます。で、彼の弟子達が破門されたのは、全く彼等の所行のためでありました。大王よ、そは恰も人が大地に躓いて顚倒せるが如く、彼等は最勝者の敎法に躓いて破門になつたのです。復次に、大王よ、屍體が大海から投げ出された如に、彼等は最勝者の聖敎に躓いて破門されたのです。加之、如來が其の弟子達を破門あそばしましたのは、彼等の善功德・利益・幸福・淨化のため、且つは彼等をして生老病死〔の苦界〕を解脫せしめんがためでありました。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

第四章　矛盾問答

目犍連の謀殺者に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「おお比丘衆よ、(一)我教團の諸の弟子中、神通力を有することは、目犍連を第一となす。」

と仰せられてあります。然るに「目犍連は、一時〔外道から〕棍棒で擲られて、頭蓋は破潰し、骨は粉微塵に打ち碎かれ、筋肉は一緒に壓し潰ぶされて、死んで了つた」と言はれます。

さて、尊者よ、若し長老大目犍連が、實に神通力の蘊奥に達して居たとすれば、彼が「棍棒で擲り殺された」といふことは眞實ではありますまい。若し又「棍棒で擲り殺された」といふことが眞實だとすれば、「神通力を有すること第一なり」といふのは虚僞でせう。何となれば苟も人天の大導師として世に立ち、神通力を有すといふ以上は、謀殺者の豫防の能きない理由はないからです。これ亦た兩頭論法上の問題ですから、之を貴衲に提出して、其の解決を願ひます。』

尊『大王よ、世尊が「我が教團の諸弟子中、神通力を有することは、大目犍連を第一となす」と仰せ給

【一】增一阿含經卷第一弟子品第四に曰く、「神足輕擧、飛到十方、所謂大目犍連比丘是。」

うたのは眞實です。されど彼は決して棍棒で擲られた爲に、死んだのではありませぬ。彼が死するには、それよりも更に大なる、業の力に支配せられて居たのであります。』

王『されど、尊者よ、神通力の範圍も、業の異熟果も、不可思議なもので、二ながら共に神通力を有する彼に屬し居るからには、不可思議のものは不可思議のものによつて、阻止せられることが能きないのでせうか。即ち彼の果物を得んと欲する者が、林檎を以て林檎を打ち落し、檬果を以て檬果を打ち落す如に、不可思議なものは不可思議なものを以て、抑制せられることが能きる譯ではありませんか。』

尊『大王よ、不可思議なものの中でも、一は他に勝つて摩訶不思議であり、他よりも一層強力なものがあります。例せば世の諸の王者は、王者たる點に於いては等しいのでありますが、其の等しく王者たる彼等の中にも、一の王者は餘他の王者を制伏して、己の命令指揮の下に置くのであります。今も亦た是の如く、不可思議なるものの中でも、業の力が最も強いのです。即ち業の力は精確に餘他の不可思議なものを制伏し、彼等を其の指令の下に置くのです。で、業が其の遁れ難き偉力を、人間の上に振ふ場合には、餘他の勢力は何の役にも立ちませぬ。大王よ、そは恰も人が國家の法律に反して、罪を犯した場合の如なものであります。即ち其の場合には、彼の父母も、兄弟姉妹も、知己友人も、彼を保護し、救ひ出すこと能はず、彼は王の宣告する命令權力の下に、唯唯として服從せねばなりませぬ。これ抑も何に因つて然るかとならば、そは彼が自ら犯した罪惡に因るといふ外はありますまい。

餘他一切の勢力を壓伏する底の、業の異熟果を生む力も亦た是の如く、そが遁る可らざる偉力を人間の上に振ふに當つては、餘他の勢力は何の役にも立たず、其指揮の下に蟄伏するの外はありませぬ。更に例を擧ぐれば、そは山火事のやうなもので、數千の水壺も鎭火の用に立たず、火勢は餘他の勢力を壓倒して、却て其の制遏の下に居らしめます。これ抑も何に因つて然るかとならば、そは其の火熱の猖獗なるがためでせう。餘他一切の勢力を壓倒し去つて、其の指揮の下に屈服せしむる底の、業の異熟果を生む力も亦た是の如く、そが遁る可らざる偉力を人間の上に振ふに當つては、餘他の勢力は何の役にも立ちませぬ。大王よ、彼の長老大目犍連が、棍棒にて擲り殺されて、獨特の神通力を施すこと能はざりしは、一に彼が業の占有する所となつて居た時であつたからであります。』

王『善哉、尊者よ、いかにも御說御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

祕密の教に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「諸の如來の宣說したまへる法と律とは、(三)其を開けば光を放ち、隱せば光を放たず。」

と仰せ給ひました。然るに他方に於いては、波羅提木叉の一部と律藏の全部とは、

【三】巴利語增一阿含經卷第三の一二四に出づ。

保有してあります。是の故に、尊者よ、若し貴衲等が最勝者の教に随つて、至真正大信實なることを行はば、律藏は開放されたものとなつて光を放つでせう。何となれば其の中に含める一切の教訓、即ち倫理的德行に關する修學克己及び規律などは、悉く眞理の骨髓であり、法の暖皮肉であり、解脱の本質であるからです。されど若し世尊が眞に「諸の如來の宣說したまへる法と律とは、開けば光を放ち、隱せば光を放たず」と仰せたまうたとすれば、波羅提木叉の一部と律藏の全部とは、包み藏して祕密に保有されねばならぬと言ふのは虛僞でなければなりませぬ。而して若し其が眞實だとすれば、世尊の宣說は虛僞でなければなりませぬ。これ亦た兩頭論法上の問題ですから、朕は之を貴衲に提出して、其の解決を願ふのであります。』

尊『大王よ、世尊は「諸の如來の宣說したまへる法と律とは、開けば光を放ち、隱せば光を放たず」と仰せられました。而して他方に於いては、波羅提木叉の一部と律藏の全部とは、包み藏して祕密に保有されて居ます。されど後者は決して一切の人に關する場合ではありませぬ。彼等は或る種の社會にのみ限つて祕藏されて居るのです。而して波羅提木叉の部分は、一に過去の諸の如來の傳說的慣習により、二に法の尊嚴を維持せんがため、三に教團の團員、即ち比丘の位置の尊嚴を維持せんがため、此の三種の理由を根據として、或る社會にのみ限つて祕藏されるのであります。

大王よ、波羅提木叉の一部が、教團の團員中にのみ示され、餘他の社會を除外するのは、過去の諸

の如來の閒に於ける普遍的の慣習であります。そは恰も刹帝利族の祕傳的儀式が、武士族の閒にのみ傳承せられ、其れや此れやは武士族の社會にこそ普通一般の傳說であるが、餘他のものには全く祕密であるやうなものであります。波羅提木叉の一部も亦た是の如く、敎團の團員の閒にのみ示され、餘他のものには全く祕密にするのは、過去の諸の如來の普遍的慣習であります。

復次に、大王よ、世には力士・輕業師・手品師・俳優・舞踏者・毘舍闍・日月崇拜・吉祥天崇拜・迦哩崇拜・濕婆崇拜・ヴス天崇拜・聖天崇拜・其の他種種の階級及び社會があり、此等各社會の祕密は、其の宗旨、その社會の人にのみ傳へられて、他の宗旨社會の人には全く祕密にされて居ます。今それ波羅提木叉の一部も亦是の如く、敎團の團員の前にのみ示され、餘他の人人に祕して置くのが、過去の諸の如來の閒に於ける普遍的慣習であります。これ波羅提木叉の一部が、過去の諸の如來の慣習に隨ひ、或る範圍を限つて祕藏せられる所以であります。

では、第二の理由たる、波羅提木叉が、法の尊嚴のために、其の範圍を限つて祕藏せらるるのは、抑も如何なる理由であるか。謂く、大王よ、法は尊むべく、重んずべきものであります。で、此の法の奧義に通達した人は、

「眞實至高の此の法をして、其に熟達せざるものの手に陷らしむるなかれ。そは彼等の爲に却て輕賤せられ、無慚無愧に取り扱はれ、以て競技の種子に用ひられ、

の此法をして、惡漢の手に委せしむるなかれ。蓋し彼等は有ゆる點に於いて、彼等が能ふだけ、
惡し樣に取り扱ふを以てなり。」

と、斯ういふ風に、他を訓誨することが能きます。大王よ、是の如く、波羅提木叉の一部は、法の尊嚴のために、或る範圍を限つて、祕藏されるのであります。若し然うでなければ、そは恰も至善至高至美至珍の赤旃檀が、「最下賤の闡提族の都府なる」サヷラに將來せらるれば、賤しめられ輕んぜられ、無慚無愧に取り扱はれ、取つて以て競技の種子とせられ、缺點を見出されるやうなものであります。

では、第三の理由たる、波羅提木叉が、敎團の團員、卽ち比丘の位置の尊嚴を維持せんがため、或る範圍を限つて祕藏せられるのは、抑も如何なる理由であるか。謂く、大王よ、比丘の境界は、重量や尺度や價値を以て、量ることの能きないほど、榮譽なものであります。何人と雖も其價値をつけることも、重さを量ることも、尺度を料ることも能きませぬ。而して波羅提木叉の一部は、僧たる位地を占むるものをして、世間普通の人人と水平線に墮ちざらしめんがために、比丘衆の前にのみ行はれるのです。大王よ、世間の至上無價の物は、被服でも、絨氈でも、象でも、戰馬でも、軍車でも、金でも、銀でも、寶珠でも、婦人でも、その他最上の飲物でも、皆悉く王の領分に屬するが如く、如來の聖敎中にある學・行・德・克己等の至上無比の修養の方法は、皆悉く敎團の領分に屬するのです。是れ波羅提木叉の一部が、敎團のみに祕藏される所以であります。』

王『善哉、尊者よ、いかにも御説御道理です。朕は貴衲の御説の通りに信受致します。』

二種の嘘に就て

王『大德、那伽犀那よ、世尊は一時、

「嘘をつくことは、(三)極めて重大なる罪惡である。」

と仰せ給ひ、又一時は、

「嘘をついて小罪を犯せる比丘は、〔敎團の〕團員の前で、自白懺悔せねばならぬ。」

と宣ひました。さて、大德、那伽犀那よ、甲の嘘をつけば、敎團を擯斥破門せられ、乙の嘘をつけば、唯單に他人の前で自白懺悔して、罪が償はれるのは、果して如何なる理由ですか。また何に因つて此の二者の區別を立てますか。若し第一の判決が正當だとすれば、第二は誤判であり、第二を正當だとすれば、第一は謬決でなければなりませぬ。是れ亦た兩頭論法上の問題です。朕は今これを貴衲に提出しますから、貴衲は此を解決して吳れねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下の質疑は、兩方とも正しいです。が、嘘は、其の事件に隨つて、輕い罪ともなれば重い罪ともなります。大王よ、例へば人あり、手を以て他人を打つた場合には、陛下は彼を如何な罪科に處せられますか。』

【三】 極罪 (Pārājiko) の中には敎團より破門さるることをも含んで居る。

王『若し打たれた方が見逃さなかつた場合は、打つた男を四錢か五錢の科料に處して、赦免してやる方が宜いでせう。』

尊『けれども、大王よ、若し其の打たれたものは、陛下自らだつた場合は、陛下は彼を如何な罪科に處せられますか。』

王『大德よ、その場合、朕は彼が兩手を截り、兩脚を斷ち、筍の皮を剝くやうに、生きながら彼が皮を剝き、彼が財產を沒收し、彼の家族は父方母方、兩方とも、七代の後まで死刑に處します。』

尊『されど、大王よ、同一の手で人を打ち、一の場合には僅か四錢か五錢の科料に處せられ、他の場合には、其麼に恐ろしい刑罰に處せられるのは、果して如何いふ理由ですか、又この二者の區別は、何に因つて立てますか。』

王『大德よ、それは打たれた人が異ふからであります。』

尊『大王よ、噓も亦た是の如く、事件〔の如何〕によつて、罪が輕くもなれば、重くもなります。』

王『善哉、大德よ、御說御道理です。朕は貴衲のお說の通りに信受致します。』

菩薩の考慮に就て

王『大德、那伽犀那よ、世尊は Dhammatatā-dhamma-pariyāya の中に、

「凡そ菩薩の母たり父たる人は、各各宿世より定まれり。亦た菩薩の撰ぶべき菩提樹も、その二弟子たるべき首なる比丘も、其の令息たるべき少年も、其の近侍者たるべき僧も、皆悉く宿世より定まれり。」

と仰せ給ひました。然るに他方に於いては、

「菩薩は、未だ兜率天に於る天人たりし時、八大考慮をなし給へり。卽ち〔彼が人間として再生するに適當なる〕時に就て考慮し、〔彼が生を享くべき〕大陸に就て考慮し、〔生るべき〕國土に就て考慮し、〔其の屬すべき〕家系に就て考慮し、〔彼が托胎すべき〕母に就て考慮し、〔彼が托胎の〕時に就て考慮し、〔出生すべき〕月に就て考慮し、〔何日〕出家すべきかに就て考慮す。」

と宣說し給ひました。さて、大德、那伽犀那よ、智識が熟さない間は、理解は伴はない筈ですが、そが頂點に達すれば、既に事件に就て商量考究する必要はありますまい。何せなれば全知の心で會得されないものは何物もないからです。然らば菩薩は何故に「何時生れやうか」と、己の生るべき時に關して考慮し給ふのですか。また彼は何故に「我は何の家系に生れやうか」と、己の生るべき家系に就て考慮し給ふのですか。若し、大德よ、何人が菩薩の父母たるべきかが既に定つて居るならば、「菩薩が其家系に就て考慮し給うた」といふのは虛僞でなければなりませぬ。されど若し其が眞實だとすれば、「菩薩の父母たる人は定まれり」といふのは虛僞でなければなりませぬ。是れ亦た兩頭論法上の

問題です。で、朕は此を貴衲に提出しますから、貴衲は之を解決して呉れねばなりませぬ。』

尊『大王よ、菩薩の父母たるべき人は定つて居ました。又菩薩は何の家系に生れやうかと考慮し給ひました。然らば菩薩は何故に家系を吟味し給ひしかとなれば、彼の父母は武士族たるべきか、婆羅門族たるべきかに就て吟味し給うたのであります。大王よ、彼は八事に就て、其の未來を吟味し給うたのであります。大王よ、商人は品物を買はない前に吟味し、象は未だ踏まない前に、其の鼻の先で、歩かんとする路を試驗し、馬車屋は未だ渡らない前に、流〔の深淺〕を試し、水先案內者は、船を善く案內せんがために、曾て彼が到著したことのない海濱を試驗し、醫士は病氣を診察する前に、先づ其の病人の年齡〔など〕を訊問し、旅行者は未だ乘らない前に、先づ其の竹橋の堅固なるや否やを吟味し、比丘は食事を始むるまでに、幾時間あるかを見て樂み待つが如く、諸の菩薩も亦た生る前に、武士族の家庭に生れやうか、婆羅門族のそれに生れやうかと吟味し給ふのであります。大王よ、これ菩薩が未來に關して吟味せねばならぬ八の場合であります。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

自殺に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「比丘衆よ、比丘は決して自殺す可らず。若し自殺するものあらば、如法に處分せらるべきなり。」
と宣ひました。然るに他方に於て、貴衲等は、
「世尊が弟子等のために説きたまへることは、其の主題が何であつても、種種の比喩を擧げて、生・老・病・死の斷滅を期せしめんがためである。而して生・老・病・死を征服せるものには、何人たるを問はず、常に尊重讚歎の榮譽を負はしめたまうた。」
と言はれる。で、若し、世尊が自殺を禁じたまうたとすれば、貴衲等の言はれることは誤謬であり、若し又貴衲等の言が眞實だとすれば、自殺の禁令は誤謬でなければなりませぬ。これ亦兩頭に掛る問題です。で、朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は之に解決を與へねばなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊が自殺を禁じ給うたことも眞實であり、我儕が言ふことも眞理であります。世尊が自殺を禁じ給ひしにも、亦た生・老・病・死の斷滅すべく、我儕を鼓舞あそばしたにも、共に理由があるのであります。』

王『尊者よ、其の理由とは甚麼ことですか。』

尊『大王よ、有徳の善人は、藥の如く、煩惱の毒に對して、消毒の力があります。彼は、水の如く、煩惱の塵穢を放下せしめます。彼は、摩尼寶珠の如く、人に眞理の體現を成就せしめます。彼は、船の如く、人をして「貪瞋癡慢の」四の流より、遙か彼方の「理想の」濱邊に運載します。彼は、商主の如く、

人をして生死の沙漠を跋渉せしめます。彼は、大雨雲の如く、人の心を滿足喜悦せしめます。彼は、教師の如く、人をして諸善を學修せしめます。彼は、善導者の如く、人に平和の路を指示します。大王よ、世尊が「比丘衆よ、比丘は決して自殺す可らず。若し自殺する者あらば、如法に處分せらるべきなり」と宣ひしは、是の如く、數多の德あり、種種の德あり、無量の德ある、有德の人をして、善事の大寶礦、一切衆生の利益を廢棄せざらしめんがためであります。卽ち世尊は大慈大悲のための故に、是の如き敎勅を垂れ給ひました。是れ卽ち世尊が自殺を禁じたまうた所以であります。大王よ、雄辯第一の長老・[四]拘摩羅・迦葉波が他界の[五]パーヤーシ・ラージャンナに向つて說明する時、「淨行の沙門・婆羅門は、生存すればするほど、多くの人人の利益幸福と、人天の善利・福樂のために働くのである」と言しました。

また世尊が、生老死病の斷滅を、我儕に奬勵あそばしました理由は何であるかとならば、大王よ、生は苦であり、老・病・死も亦た苦であります。憂悲苦惱は苦であり、絕望も苦であります。怨み憎むものに會ふことは苦であり、愛するものに別離れること、卽ち父母兄弟姉妹妻子親戚の死を見るのは苦であります。家族の凋落は苦であり、病患に惱み、財產の損失、善事及び智見を失ふのも亦た苦であります。暴君を畏怖するのは苦であり、盜賊・敵・飢饉・火事・洪水・海嘯・地震・鰐等の虞あるのも亦た

【四】增一阿含經卷第一、弟子品第四に曰く、「能雜種論、暢悅心識、所謂拘摩羅迦葉比丘是」(卍藏第十三套ノ二、八紙表上段)

【五】Pāyāsirājañña.（パーヤシラージャンナ）

苦であります。自他に執著して非難を受くるは苦であり、刑罰・災害の虞あるも亦た苦であります。人寄りの席上で臆病より起る懼ゝ苦であり、生計に就て心配し、或は死を預知するのも亦た苦であります。また鞭や杖や或は竿を以て擲られ、手を切られ、足を斷たれ、手足を截らるるは苦であり、耳をそがれ、鼻をそがれ、耳鼻をそがれるのも苦であります。煮え立つ粥の中に入れられ、磨ける貝殼の如く、滑かになるまで、砂利石を以て頭皮を磨らるるは苦であり、鐵の針を以て口を開け、其の中に油を注ぎ込んで點火せられ、或は全身若くは兩腕を油布で包まれ、火をつけて生ける松明にせらるるは苦であり、蛇の皮を剝ぐが如く、頸から臀まで皮をむかれ、頸から下は斑痕の衣を著たるが如く鞭打れるのも苦であります。斑點ある羚羊の如く、膝と肘とを一緒に縛ばり、鐵の鍋の上に蹋つて火をつけられ、或は鐵の鉤にかけらるるは苦であり、小刀を以て全身を小錢大に切られ、然る後それを鹽漬、または苛性水に漬られるのも苦であります。鐵の閂を以て、耳の根から突き通して引きずられ、棍棒を以て擲られて、骨は碎け、身は打ち藁の如くに、くたくたに爲さるるも苦であり、煮え立つ油を灌がれ、犬に喰はされ、生きながら刺し殺され、或は首を刎ねらるるも亦た苦であります。

大王よ、娑婆世界に輪廻する苦痛は、是の如く千萬無量であります。大王よ、彼の大雪山の上に降れる雨が流れ落ち、岩や小石や砂利の閒を通り、又木や枝や木の株に遮ぎられて、或時は渦巻となり、或時は急流となり、恆河の流に沿うて其の路を取るが如く、娑婆世界に輪廻する苦も亦た千態萬狀で

あります。されば輪廻の繼續する限は苦であり、輪廻を斷ずれば樂であります。大王よ、世尊は娑婆世界の輪廻の苦と、其の斷滅の利とを指摘して、吾曹に人生の最終目的を實現して、生・老・病・死を超越せよと奬勵あそばしました。大王よ、これ世尊が吾曹に〔生を斷せよと〕奬勵あそばせし所以であります。』

王『善哉、尊者よ、貴衲は實に善く此の込入つた問題を御解決になりました。貴衲の述べられた理由は實に御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

慈悲の心情に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「おお比丘衆よ、慈悲により、心解脫により、專修により、通達により、增大により、進修により、實行により、蓄積によりて、十一の利益を期待せよ。十一とは、謂く、平和に眠ること、平和に醒むること、惡夢を見ざること、人に愛せらるること、非人より愛せらるること、天の保護を得ること、火も毒も刀も何等の害を加へざること、迅速容易に定に入ること、容貌の平靜なること、死に會うて怖れざること、最上の境界に進むまで妨害されざること、梵天の世界に生るること、之れなり。」

と宣ひました。然るに貴衲等は、

「王子の(六)沙摩が一切衆生に對する慈悲心の修養中、群鹿を伴うて森林の中を逍遙せる時、(七)ピリヤッカ王の放てる毒矢に射られて、氣絶し打ち倒れた。」

と言はれる。さて、尊者よ、私が前に擧げた世尊の御言葉が眞實だとすれば、貴衲等の所說は誤謬でなければなりませぬ。されど若し王子の沙摩の話が事實だとすれば、一切衆生に對する慈悲心の修養をなせるものには、火も毒も刀も何等の害を加へないとの御言葉は虛僞となります。これ又兩頭論法上の、極めて細き解き難い込み入つた問題であります。で、今朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は此の解き難い問題を解決して、後世の佛子等のために光をお投げなさい。』

尊『大王よ、世尊は、「慈悲により、心解脫により云云」と宣ひました。而して王子の沙摩は、衆生に對する慈悲心の修養中、群鹿を伴れて逍遙する時、ピリヤッカ王の放てる毒矢に中つて、氣絶し打ち倒れたことも事實であります。然しそれには理由があるのです。その理由とは、陛下が引用された經文、卽ち慈悲心を修養する者には、火も毒も刀も害を加へないといふ德は、慈悲心を修養する人に附著して居る德ではなく、彼が心に呼び起して、實際に現はせる慈悲そのものの德であります。然るに彼の王子沙摩は、水壺を顚覆した途端に、慈悲の心情を不在にして居ました。大王よ、人が眞に慈悲心を實現した瞬間には、火も毒も刀も彼を害することは能きませぬ。されど此等の德は、自然に個人

【六】サーマ Sāma.
【七】ピリヤッカ Piliyakkha.

に具つて居るのではなく、其心中に呼び起して、實際に現はせる慈悲の內に存するのであります。

大王よ、人あり、雲隱れすることの能きる、超自然力の根本を手にすと假定せんに、そが實際に彼の手中にある間は、普通の人は彼を見ることは能きませぬ。されば其の德は彼の人にあるのでなく、超自然力そのものに存するのでせう。大王よ、慈悲の德も亦た是の如く、人が心に呼び起して、實際に現はせる慈悲心そのものの內に存するのです。

また人が堅固なる大洞窟の中に入れば、縱令いかなる大雨が降つても、彼を濕すことは能きないでせう。されば其の德は人に存するのではなく、洞窟の中に存するのです。今も亦た是の如く、火も毒も刀も害を加ふることの能きない德は、人が心に呼び起して、實際に現はせる慈悲心そのものの中に存するのです。』

王『大德、那伽犀那よ、そは實に希有であります。尊者よ、そは實に未曾有であります。實にや慈悲心が現前すれば、一切の惡を除く力が有ります。』

尊『然うです、大王よ、慈悲の實行は、善人たると不善人たるとを問はず、心に諸の善德を生じます。此の慈悲を實行せば、意識的繫縛の中にある一切の衆生に對して、大利益があります。是の故に精進して修養せねばなりませぬ。』

提婆達多に就て

王『那伽犀那尊者よ、善を行ふものにも、不善を行ふものにも、結果は同一ですか、又は何等かの違がありますか。』

尊『大王よ、善と不善との結果は違ひます。善行には善果があつて、人を天國に導き、不善行には惡果があつて、人を地獄に導きます。』

王『けれども、那伽犀那尊者よ、「提婆達多は全くの惡漢で、心に惡性が充滿し、菩薩は全く純淨で、心に善性が充ち滿ちて居た」と貴衲等は言はれる。が、提婆達多は生生世世の間には、其の名稱に於ても弟子の數に於ても、菩薩と同等なりしのみならず、時としては寧ろ菩薩よりも優つて居たではありませんか。

尊者よ、提婆達多が、(八)婆羅門達多の(九)プローヒタ、卽ちベナレス城の王たりし時、菩薩は一旃陀羅で、魔法の呪文を暗誦し、其の呪文を唱へて季節以外に檬果を生らせました。これ菩薩が生家と名稱とに於いて、提婆達多に劣れる一の場合であります。

復た次に、提婆達多が大威力ある王となり、有ゆる肉的快樂を放縱にして居ました時、菩薩は王の

【八】Brahmadatta.
【九】Purohita.

乘用の象として、一切の莊飾を施して居りました。而して王は其優美艶麗なる歩態を見せしめ、且此象を殺さんと欲して、象の御者に向ひ、「御者よ、此の象は宜く訓練されて居ないから、彼に「空行」と稱する藝を演ぜしめよ」と言ひつけました。此場合に於ても、亦た菩薩は單に無智なる動物であつて、提婆達多に劣つて居ます。

復た次に、提婆達多が、簸穀を喰べて生活する人となりました時、菩薩は「大地」と稱する猿でありました。此處にも吾曹は、動物と人との相異を見ます。卽ち菩薩が提婆達多に劣つて居ます。

復た次に、提婆達多は(一〇)ネーサーダ族の(一一)ソーヌッタラと稱する獵士となり、象の如に強い體力を有つて居ました時、菩薩は「六牙」と稱する象王でありました。而して此の生に於いて、獵士は其の象を殺しました。此の場合にも亦た提婆達多が優つて居ます。

復た次に、提婆達多が、棲むに家なく、森林中に漂泊する人となりました時、菩薩は吠陀の讃頌を知る一羽の鷓鴣でした。而して此生に於いて、森人は其鳥を殺して了ひました。是の如く、此場合に於いても亦た提婆達多の生は、菩薩のそれに優れて居ます。

復た次に、提婆達多が其名を(一二)カラーブと云ひ、ベナレス城の王となりました時、菩薩は動物の愛護を説く一苦行者でありました。然るに王は——自ら獵を好めることとて——此の苦行者を憎み、

【一〇】ネーサーダ Nesāda.
【一一】ソーヌッタラ Sonuttara.
【一二】カラーブ Kalābu.

竹の若芽をもぐが如く、彼の手足を截斷して了ひました。此の生に於いても亦た提婆達多は、其生家及び名稱ともに、菩薩に優れて居ます。

復た次に、提婆達多が一人の樵夫となつた時、菩薩は（一三）ナンディヤと云ふ猿の王でありました。而して此の生に於いても亦た樵夫は、此の猿及び其の母と弟とを殺しました。此の場合に於いても提婆達多は、其の生の上から見て、菩薩に優れて居ます。

復た次に、提婆達多が（一四）カーラムビヤと稱する裸體の苦行者となつた時、菩薩は「黃者」と稱する蛇王でありました。で、此の場合に於ても亦た提婆達多は、生の上から見て、菩薩に優れて居ます。

復た次に、提婆達多が長髮蓬蓬たる一狡猾の苦行者であつた時、菩薩は「大工」と言ふ有名な豚でありました。卽ち此の場合に於いても亦た提婆達多は、其の生の上より見て、菩薩に優れて居ます。

復た次に、提婆達多は其の名を（一五）スラバリチャラと云ひ、人間の頭の高さの空中を飛行することの能きる（一六）チェータ族の王であつた時、菩薩は（一七）迦毘羅と云へる一婆羅門に過ぎませんでした。此の場合に於いても亦た提婆達多は、生家名稱ともに、菩薩に優れて居ます。

復た次に、提婆達多が（一八）サーマと云ふ人となつた時、菩薩は（一九）ル

【一三】ナンディヤ Nandiya.
【一四】カーラムビヤ Kārambhiya.
【一五】スラ パリチャラ Sura Paricara.
【一六】チエータ Ceta.
【一七】カピラ Kapila.
【一八】サーマ Sāma.
【一九】ルル Ruru.

した。卽ち此の場合に於いても亦た提婆達多は、生家の上より見て菩薩に優れて居ます。
復た次に、提婆達多が、林中を放浪する獵士となつた時、菩薩は男姓の象でありました。而して此の獵士は、七たび象の牙を折つて取り去りました。此の場合に於ても亦た提婆達多は、其生家の上より見て、菩薩に優れて居ます。
復た次に、提婆達多は、世界を征服せんと欲する野狐となり、印度全國の王が彼の制令の下に服された時、菩薩は（二〇）ギヅラと云ふ一賢者でありました。卽ち此の場合に於ても、亦提婆達多は、其の榮譽の點より見て、菩薩に優れて居ます。
復た次に、提婆達多が象となつて、支那の若い鷓鴣を亡ぼした時、菩薩も亦た群象の長たる象でありました。されば此の場合に於いて、彼等の位置は同等であります。
復た次に、提婆達多が、「非法」と名くる夜叉となつた時、菩薩は「法」と名くる夜叉でありました。卽ち此の場合、彼等は同等であります。
復た次に、提婆達多が、五百の家族の首長たる水夫となつた時、菩薩も亦た五百の家族の首長たる水夫でありました、卽ち此の場合、彼等は同等であります。
復た次に、提婆達多が、五百の馬車の主・商隊の長となつた時、菩薩も亦た五百の馬車の主・商隊の長でありました。卽ち此の場合、彼等の位置は同等であります。

【二〇】 Vidhura.

復た次に、提婆達多が、(三一)サーカと云へる鹿の王となつた時、菩薩も亦た名を(三二)ニグローダと云ふ鹿の王でありました。卽ち此の場合、彼等の位置は同等であります。

復た次に、提婆達多が、サーカと云へる軍司令長官となつた時、菩薩も亦たニグローダと云ふ王でありました。卽ち此の場合、彼等の位置は同等であります。

復た次に、提婆達多が、(三三)カンダハーラと云ふ一婆羅門となつた時、菩薩も亦た(三四)チャンダと云ふ一王子でありました。で、此の場合は、カンダハーラの方が優れて居ます。

復た次に、提婆達多が婆羅門達多と云へる王となつた時、菩薩は彼の王子で(三五)マハー・パヅマと名けられて居ました。而して此の場合に、王は曾て劫賊等が七たび投げ墮された絶壁から、其の子を投げ墮しました。父は其の子の上に位するのですから、此の場合も亦た提婆達多の方が、菩薩よりも優れて居ました。

さて今生に於いて、彼等は共に釋迦族に生れ、而して菩薩は世の指導者・一切智者たる佛陀となり、提婆達多は、天中の天たる、佛陀の建立にかかる教團の人たらんが爲に出家して、神通力を體得し、自ら佛陀たらんとの慾望を起しました。さて、大德・那伽犀那よ、以上私が叙述致しましたことは、皆眞實であり、正當であり、精確ではありませぬか。」

【三一】Sākha.
【三二】Nigrodha.
【三三】Khandahāla.
【三四】Canda.
【三五】Mahāpaduma.

尊『大王よ、いま、陛下の述べ給ひしことは、皆悉く其の通りでありまして、決して間違つては居ませぬ。』

王『では、大德・那伽犀那よ、若し黑と白とが、同種類であるならば、善と不善とは、同等の結果を生むことになります。』

尊『否な、大王よ、善と不善とは決して同一結果を生むものではありませぬ。提婆達多は、誰からでも皆反對されて居ました。然るに菩薩に對しては、一人の能く敵對する者はありませんでした。而して提婆達多が、菩薩に對して起した敵意は、生生の閒に成熟して、其結果を齎らしたのです。大王よ、提婆達多が、生生世世の閒、是の如く繁榮を享受しましたのは、彼が世界の首長となつた時、貧人を保護し、人民の爲に橋梁を架し、法廷を設け、安息所を建立し、沙門・婆羅門・貧人・窮人・旅客に對して布施を行つた結果であります。大王よ、誰か布施・克己・自制及び布薩の行持をなさずして、是の如き繁榮に達すと言ひ得ませうか。

大王よ、陛下は、「提婆達多も菩薩も、生生世世に亙つて、相互に相伴つて居た」と言はれますが、それは數百千萬の生を重ねた末に出會つたのみならず、無量劫の閒、不斷に一緒になつて居たのです。何となれば大王よ、陛下は、世尊が曾て半盲の龜の場合と、人類の到達の場合とを示し給ひました比較の智識によつても、此事件を了ねばならぬからです。而して是の如く菩薩と一緒になつたのは、單

に提婆達多ばかりではありませぬ。長老舍利弗も亦數千生の閒、菩薩の父となり、祖父となり、伯父となり、兄弟となり、子息となり、從兄弟となり、朋友となつたのです。而して菩薩も亦長老舍利弗の祖父となり、伯父となり、兄弟となり、子息となり、從兄弟となり、朋友となり給ひました。

大王よ、實にや一切の衆生は、種種樣樣の生物の形相を取つて、輪廻の流の中に浮沈昇降しつつ、幾度となく、或時は氣に入つた仲閒となつて出會ひ、或時は氣に入らぬものとなつて出會ふこと、恰も河の中を回轉する水の、或時は清淨となり、或時は不清淨となり、或時は美しく、或時は醜くなつて、幾度となく出會ふやうなものであります。

大王よ、天人としての提婆達多は、彼自ら不義を行ひしのみならず、他をも亦た不義の生活に導き入れましたから、彼は無量劫の長きに亙つて、地獄の中で燒かれたのです。然るに天としての菩薩は、彼自ら正義を行ひしのみならず、他をも亦た正義の生活に入らしめたのですから、無量劫の長きに亙つて、天の樂を享受致しました。大王よ、提婆達多は、此の世に於て、佛陀に害を加へやうと企み、また敎團の分裂を來さしめましたから、大地のために呑却されましたが、一切の諸法を知り盡せる如來は、後有に導く一切の要素を斷滅し、以て絕對自由の境界を打ち建て給ひました。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「一切の婦人は、機會と祕密と宜い戀人とさへあれば、縱令不具者とでも、不義を行ふだらう。」

と仰せられました。然るに他方に於いては、

「(三六)マホーサダの妻、(三七)アマラー女は、夫が旅立して、獨り村落に取り殘され、其の夫を國王の如く思ひ、空閨を守つて居る間に、千の貨幣を以て誘惑されたけれども、不義を行ふことを拒んだ。」

と言つてあります。さて若し第一の所說が正しいとすれば、第二の說話は嘘となり、第二の說話を事實とすれば、第一の所說は嘘となります。これ亦た兩頭にかかる問題ですから、朕は貴衲に提出して、其の解決を願ふのです。』

尊『大王よ、陛下の引用された、マホーサダの妻アマラー女の行爲に關する說話は事實であります。されど千の貨幣を受け取る爲に不義をせなかつたか、若くは縱令彼女は機會もあり、發覺する恐なき事も確なるに、好きな戀人と不義をしなかつたかが問題です。扨てその事件を考察するに、アマラー女には、此の二問題の孰れも確でありませんでした。世人の非難を恐れて、彼女は機會を摑み得なかつ

【三六】マホーサダ Mahosadha.

【三七】アマラー Amarā. 此の說あるが故に、不義を行ふものは女子のみで、男子は行はないと言ふ意味にとつてはいけない。

たやうに思はれます。又來世に於ける、地獄の苦痛を恐れたが爲めに、彼女に適當な機會がなかつたのです。何となれば彼女は不義をなすことの結果が、如何に嚴酷なるかを知つて居つたからであります。又彼女は己の愛人を失ふことを欲せず、其の良人を非常に尊敬し、且つ善事を尊重し、卑賤の生活を蔑み、且つその生活上の習慣を破ることを好みませんでしたから、彼女は不義をなさなかつたのです。即ち是等の理由によつて、機會が彼女に適當しなかつたやうに思はれます。尙ほ又た彼女は世閒に祕密の暴露せられざることの、確でなかつたがために、不義をなすことを拒んだのです。何となれば彼女は、その祕密の暴露を世人の閒には防ぎ得ても、彼女自らの精神に、それを祕すことは能きなかつたからです。縱令また、彼女の精神にそれを祕し得ても、他心通を有する沙門にそれを祕すことが能きなかつたからです。縱令沙門にそれを祕すことが能きても、人の心を讀破する諸天にそれを祕すことは能きなかつたからです。縱令諸天にそれを祕し得ても、彼女の罪惡に關する智識より、それを脫せしむることが能きなかつたからです。縱令彼女は、其事に付いて無智であつたにせよ、不正に關する法則の前には、それを祕すことが能きなかつたからです。是の如き種種なる理由のために、彼女は不義を爲すことを愼みました。何となれば彼女は、祕密の暴露せられざることに付て、確でなかつたからであります。

尙ほ又た彼女は適當の戀人を見出さなかつたがために、不義を行ふことを拒んだのです。彼女の良

人マホーサダは賢者にして、二十八の徳を備へて居ました。その二十八の徳とは、謂く、彼は勇敢でありました。彼は謙遜にして不義をなすことを恥ぢ、寛容の徳に富み、その生活如何にも至正でありました。彼は誠實であり、身口意の三業清淨にして、瞋恚を離れ、自慢せず、猜疑の情なく、精進の念に富み、一切の善事を勵み、世人の間に人望がありました。彼は寛大であり、友情に富み、その性質謙遜にして、一切の詐僞の念を離れ、狡猾の情を去り、智見に富み、令聞高き人でありました。彼は多くの智識を有し、彼に依屬する者の善事を探し、世人より異口同音に讃美せられて居ました。又彼の財産は多大にして、彼の名聲は甚だ偉大なるものがありました。

大王よ、これ則ちマホーサダが有せし二十八の徳であります。彼女が不義をなさなかつたのは、その良人に等しき、若くはそれ以上の相當な戀人がなかつたからであります。』

王『善哉、尊者よ、御說眞に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

阿羅漢の無怖畏に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「諸の阿羅漢は一切の怖畏と戰慄とを捨離す。」

と仰せられました。而るに他方にありては、世尊は王舍城に於て殺人象(二八)ダナ・パーラカの爲に壓し

【二八】 Dhana-pālaka.

つけられ給ふを見て、彼等五百の阿羅漢等は、長老阿難陀を除き、皆悉く佛陀を捨て逃走しました。さて、尊者よ、是等の阿羅漢達は恐怖の爲に逃走したのですか。若くは世尊自ら働いて、その危險を脱したまふだらうと考へて逃げ去つたのですか。或は彼等に如來が最上無比の力を示したまふのを見んことを望んで逃走したのですか。那伽犀那尊者よ、若し、世尊が、阿羅漢は一切の怖畏を脱すと仰せられし事が眞實であるならば、後説は虚僞でなければなりませぬ。若し後説が眞實であるならば、阿羅漢は一切の怖畏と戰慄とを脱すといふのは虚僞でなければなりませぬ。尊者よ、これ又た兩頭にかかる問題でありますから、今貴衲に提出して、そが解決をお願ひいたします。』

尊『大王よ、世尊は、阿羅漢は一切の怖畏及び戰慄を捨離すと宣説し給ひました。而して阿難陀一人を除き、五百の阿羅漢達が王舍城に於いて、世尊が象のために襲はれたまうた時、逃走したことも事實であります。されど、そは恐怖のためでもなく、又世尊を亡ぼさしめやうといふ考へがあつたからでもありませぬ。何せなれば阿羅漢は一切の怖畏并に戰慄の原因を亡ぼして居るからであります。卽ち彼等は全く怖畏戰慄を脱して居るのであります。大王よ、大地は人が其を掘り、其を傷づけ、若くは大海の重を支へ、山嶽の高きを支へることを恐れますか。』

王『いいえ、尊者よ。』

尊『何故でせうか。』

王『何となれば大地には恐怖、若くは戰慄を生ずる所の原因がないからであります。』

尊『大王よ、阿羅漢も亦た是の如く、何等の恐怖戰慄の原因を有ちませぬ。大王よ、山巓は裂かれ、破られ、落され、若くは火を以て燒かれるのを恐れますか。』

王『いいえ、恐れませぬ。』

尊『何故恐れますまいか。』

王『何故なれば山には怖畏戰慄の原因がないからであります。』

尊『大王よ、阿羅漢も亦た是の如く、縱令全世界に於ける種種樣樣の形相をなせる一切の生物が、一時に彼を恐れしめんがために、阿羅漢を攻擊しましても、而も彼等は阿羅漢の心を動かし變ずることは能きませぬ。何となれば阿羅漢には恐怖の原因も緣も全く無いからであります。大王よ、五百の阿羅漢達の心には「今日は人閒中の最善者、勝者中の勇士が、名高い王舍城に入りたまふ時、象が道に突進して來るだらうけれども、世尊の特殊の侍者たる比丘が、天中の天たる世尊を捨て去らないのは確である。若し吾等が逃げ去らなければ、阿難陀の親切を現はさしむることも能きず、又象が實際に如來の身邊に近づきもしないだらう、だから我我は撤退せなければならない。かくて大多數の人は、煩惱の繫縛を脫して解脫を體得し、且つ阿難陀の親切を表はさしむることが能きやう」と考へて居たのであります。是の如く阿羅漢等が諸方に撤退しましたのは、其等の利益を實際に起らしめ、實現せし

めんがためでありました。』

王『尊者よ、貴衲は善くこの問題を解決なさいました。眞に御說の通りです。阿羅漢は怖れもしなければ、戰きも致しませぬ。けれども彼等が諸方に撤退しましたのは、其の前知せる利益を現はさんがためでありました。』

一切知者の心を轉動せしむることに就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、如來は一切知者であると言はれます。然るに他方に於ては、舍利弗・目犍連によりて率ゐられたる敎團の團員に、世尊が退團を命じ給うた時、(二九)カーツマー及び(三〇)ブラフマー・(三一)サバニパチの釋迦族等が、種實と犢との比喩を以て、世尊に退團命令の撤回を乞ひ、其赦免を得、世尊をして正當の見地に立ちて、其事を見せしめました。さて、尊者よ、世尊が彼等の勸說により、彼等の言を嘉納し、新らしき見地に立ちて、此事件を見給うたとすれば、此等二つの喩は世尊に知られなかつたのでありますか。若し世尊が未だ其を知りたまはなかつたとすれば、彼は一切知者ではありませぬ。若し世尊が其を知りながら、尙且つ比丘等を退團せしめたまうたとすれば、茲に世尊の不親切が現は

【二九】カーツマー Kātumā.
【三〇】ブラフマー Brahmā.
【三一】サバニパティ Sabanipati.

しく之を解決せねばなりませぬ。』
尊『大王よ、如來は一切知者でありました。而して彼の二つの比喩を嘉納し、彼等の勸說によりて、退團せしめたる比丘等を許し、而して新らしき見地に立ちて、其事件を御覽になりました。何となれば大王よ、如來は聖典の主であります。かの二つの喩は如來の先に自ら說き給うた所であります。大王よ、そは宛も人の妻たるものが、良人自らに屬する事柄を以て、彼女の良夫を宥め、喜ばしめて、其許を得るやうなものであります。又そは王の理髮人が、王自らに屬する黃金の櫛を以て、王の頭を飾りながら、王を宥め、喜ばしむるやうなものであります。又そは侍者たる沙彌が、その師の食物の給仕をする時、師自ら托鉢して、乞ひ求め來れる食物を以て、彼を宥め、彼を喜ばしめ、而してその嘉納を得るやうなものであります。』

王『善哉、尊者よ、御說眞に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

第五章　矛盾問答

住所に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「親交には怖畏起り、(一)家庭〔の生活〕には塵穢生ず。家なく交なき〔境界〕こそ、實に聖者の見なれ。」

と宣ひました。然るに他方に於いては、

「是故に智者をして、彼自らの福利のために、心地よき住家を建てて、其處に博學の人を棲ましめよ。」

との教勅を垂れ給ひました。

さて、尊者よ、若し第一の經文が、眞に如來の教なりとせば、第二の教勅は過謬でなければなりませぬ。が、若し如來が眞に「心地よき住家を建てて、其處に學者を棲ましめよ」と仰せ給へりとせば、第一の經文は過謬でなければなりませぬ。これ亦兩頭にかかる問題です。で、朕は今これを貴衲に提出しますから、貴衲は是を解決せねばなりませぬ。』

【一】此の偈は諸經要集・牟尼經第十二の第一頌である。

尊『大王よ、陛下の引用あそばした經文は、兩方とも如來の御言葉であります。而して前者は出家の人に相應はしく、適當にして、正當なる事柄と、且つ出家人の當に學ぶべき生活の態度と、彼が當に歩むべき路と、修すべき行とに關する、正味の說敎であり、一切を包含せる說敎であり、他のものを以て其を補ふ餘地のない御言葉であり、註釋を加ふべき隙のない御言葉であります。何となれば、大王よ、森に居る鹿が、林中を徘徊して、其の好める處に於いて眠り、家もなく、住所もなきが如く、出家の人も亦た、

「親交には怖畏起り、家庭の生活には塵穢生ず。」

と云ふ量見で居なければならぬからであります。

然るに世尊が、「心地よい所に住家を建てて、其處に博學の人を棲ましめよ」と仰せ給うたのは、單に下の二件に就てであります。その二件とは何であるか。謂く、寺院を建立し布施することは、一切諸佛の讃歎し、隨喜し、尊重し、賞讃し給ふ所で、是の如き布施を行ふ人は、生・老・死を解脫することが能きる。これ住所を布施することの第一の利益であります。若しまた寺があれば、比丘尼等は、其處を一定の集合場所としますから、訪問せんと欲する人は、容易く彼等を見附出して、用件を打すことが能きます。が、若し彼等に一定の住家がなければ、彼等を訪問することは、却却容易でありませぬ。これ寺院を建立し布施することの第二の利益であります。されば世尊が、「心地よい住家を建て

て、其處に博學の人を棲ましめよ」と仰せ宣ひましたのは、此の二の事件に就てであります。是の故に佛子が家庭生活を憧憬する譯でありませぬ。』

尊『善哉、尊者よ、御説洵に御道理です。朕は貴衲の御説通りに信受いたします。』

節食に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「起て、放逸なる勿れ、胃は須らく自ら制すべし。」

と仰せ給ひ、また一時は、

「優陀夷よ、吾は應量器の縁まで一ぱいに、又はそれ以上すら食べたことが幾日もある。」(三)

と仰せ給ひました。さて、尊者よ、若し第一の教勅が眞實だとすれば、第二の叙述は虚僞でなければなりませぬ。が、若し第二の叙述が眞實だとすれば、第一の教勅は過誤でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題です。で、朕は之を貴衲に提出しますから、何うぞ之を解決して下さい。』

尊『大王よ、陛下の引用あそばせし經文は、兩方ともに世尊の御言葉に相違ありませぬ。されど第一の章句は物の自性に關しての叙述、一切を包含する叙述、

【三】長阿含第五十七卷箭毛經を見よ。（卍藏第十三套第一・二九一紙）

施すの餘地なき叙述、事實を基本とせる眞實のものに就ての叙述、訂さるべき過誤を含まぬ叙述、豫言者・聖人・教師・阿羅漢・辟支佛・勝者・一切智・如來・應供・正等覺者の宣べ給へる教勅であります。大王よ、胃に就て自制力なき者は、生物を滅ぼし〔即ち殺生をなし〕、與へられざる物を取り〔即ち偸盗をなし〕、貞操を亂し〔即ち邪婬を行ひ〕、嘘をつき〔即ち妄語をなし〕、酒精類を飲み〔即ち飲酒し〕、父母を殺し、阿羅漢を殺し、教團の分裂を謀り、惡意を以て如來を傷けんと豫考するでせう。大王よ、彼の提婆達多は、胃に就ての自制力なかりし爲め、教團の分裂を謀り、一劫の長きに亙つて、苦しまねばならぬ業を積み重ねたではありませんか。大王よ、世尊は此の事や、其他これに類する種種の事を思ひ起して、

「起て、放逸なる勿れ、胃は須らく自ら制すべし。」

と宣うたのであります。若し夫れ胃に就て自制力ある者は、四聖諦の明かなる智見を得、四沙門果を實現し、四無礙解、八等至及び六神通に通達し、且出家的生活を構成する一切の要素を滿足するのであります。大王よ、羽毛の生えたての鸚鵡は、胃に關する自制力によつて、三十三天の高きに昇り、彼に隨侍せしむべく、天中の王たる帝釋を連れ降つたではありませんか。世尊は此の事や、其他これに類する種種の事を思ひ起して、

「起て、放逸なる勿れ、胃は須らく自ら制すべし。」

と仰せ給うたのであります。されど、大王よ、世尊か「吾は應量器の縁まで一ぱいに、又はそれ以上すら喰べたことが幾日もある。」と宣ひしは、其仕事を完了し、爲さねばならぬことを爲し終へたもの、其前に置かれた目的を達したもの、一切の障礙に打ち勝つたもの、〔他に依らず、〕自己に依つてのみ智識を得たる、如來自らに就ての御言葉です。大王よ、吐劑や下劑や灌腸を施された病人には、强壯劑を與へて體力を恢復せしむるが如く、惡意の充ち滿てる人や、四聖諦の道理を體認し得ない人は、先づ節食の實行を採用せねばなりませぬ。大王よ、大なる光を放つ金剛石や、清冽な水や、自然に清淨なるものには、磨をかけたり、拭ひ清めたり、又は淨化したりする必要のないやうに、爲すべきことを爲し了へた人、佛陀たる境界に内存する一切のことを、完全圓滿に逮達せる如來には、自制の必要はないのであります。』

王『善哉、尊者よ、御説洵に御道理です。朕は貴衲のお説の通りに信受いたします。』

バックラの優越性に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「比丘等よ、我はこれ一心に自己犧牲に熱中し、常に其の手を清淨にする婆羅門である。而して今我が有する此の身は最後のものである。我は最上無上の藥劑師であり、醫師である。

と宣ひ、又ある時は、

「比丘等よ、（三）我が諸の弟子の中で、肉體の健康なる點に於ては、（四）婆拘羅がその上首である。」

と仰せられました。さて、尊者よ、世尊が幾度も肉體の疾病に罹り給ひしことは、人のよく知る所であります。で、若し如來が最上無上の御方であるならば、婆拘羅の肉體上の健康に關する叙述は過誤でなければなりませぬ。が、若し長老婆拘羅が、眞に佛の弟子中で、健康者の上首を占めて居たとすれば、朕が引用した第一の叙述は過誤でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題です。いま朕は之を提出しますから、貴衲は之に解決を下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下の引用し給うた經文は兩方とも正確です。然し世尊が婆拘羅に就て仰せ給ひしことは、佛陀の聖教を暗誦し、其を研究し、傳說を傳ふる、諸の弟子達に就ての御說であります。

何ぜなれば、大王よ、世尊の弟子中には、從晝至夜、歩行しながら冥想して暮らす、佇立靜慮者があつたからであります。が、世尊は從晝至夜、單に歩行しながら冥想し給ひしのみならず、坐臥にも亦冥想してお暮し遊ばしました。是の如く、大王よ、佇立冥想者といふ特殊の點に於ては、弟子の或者の方が世尊に優れて居ました。また、大王よ、世尊の弟子中には、其命を支ふるに、一日一食の外、

【三】増一阿含卷第三・弟子品に曰く、「我聲聞中第一比丘、壽命極長不中天、所謂婆拘羅比丘是」。（卍藏第十三套第二冊八紙表上段）

【四】Bakkula.

何にも喰べない一食者が居ました。然るに世尊は、一日に二度、若くは三度すら食事し給ふ御習慣でした。是の如く、大王よ、一食者といふ特殊の點に於ては、弟子の方が世尊よりも優れて居ました。大王よ、是の如く世尊の弟子達の中には、種種なる特別の點に於て、世尊よりも優れて居たものが數多ありました。されど、大王よ、世尊は、戒・定・慧・解脫・解脫智見、及び佛陀たる人の範圍内に屬する一切の點に於いて、遙かに弟子達よりも優れたまうたのであります。是の故に、大王よ、

「比丘等よ、我は一心に自己犧牲に熱中し、常に其手を淨くする婆羅門である。いま我が有する身體は最後のものである、我は最上無上の藥劑師であり、醫師である。」

と仰せ給うたのであります。

また、大王よ、ある者は家柄が善く、ある者は資財に富み、ある者は智慧に富み、ある者は教育が優れ、ある者は勇氣に富み、ある者は怜悧であるかも知れませぬ。が、王は此等一切を凌駕して、最上なりと定められて居ます。大王よ、世尊も亦た是の如く、一切衆生の中で、最高第一最善の御方であります。而して彼の婆拘羅が肉體の健康でありましたのは、彼が〔前生に於いて養うた〕大志のためであります。何せなれば、大王よ、(五)阿農摩達尸佛が、疾病に苦しみ、胃中の風のために苦しみ給うた時、又かの(六)毘婆尸佛、及び六萬八千の聖弟子達が、疾病のために苦しみ、

【五】アノーマダッシー Anoma-dassī.
【六】ヴィパッシー Vipassi.

與へて彼等の病を癒し、而して〔今生に於いて〕斯る健康體を受け得たのであります。これ、

「比丘等よ、我が諸の弟子中に於いて、肉體の健康な點では、婆拘羅が其の首長である。」

と仰せ給うた所以であります。されど、大王よ、如來が疾病のために苦しみ給ふとも、或は苦しみ給はずとも、又は特殊の誓願を立てて、其を遵奉し給ふとも、或は遵奉し給はずとも、世に世尊と等しきものはありませぬ。そは、大王よ、天中の天たる世尊が、雜阿含の中に、

「比丘等よ、〔世に〕無足・二足・四足・多足・有體・無體・有想・無想・非有想・非無想〔等〕の衆生が居る。が、〔其等の中で〕如來は一切の上首・應供・正等正覺と認めらる。」

と宣うたからであります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通り信受いたします。』

佛陀の教誨の創造力に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「比丘等よ、如來・應供・正等正覺は、知られざりし道の發見者である。」

と宣ひ、然るに他方に於いては、

「比丘等よ、我は過去の諸佛の歩み給ひし所に隨つて、古昔の道を覩、往古の路を觀た。」

と宣ひました。で、若し、那伽犀那尊者よ、如來は知られざりし道の發見者であるならば、過去の諸佛の歩み給ひし所に隨つて、昔の道を覩、往古の路を見たとの御言葉は、間違でなければなりませぬ。が、若しまた如來の見給へる道は、往古の道であるならば、知られざりし道の發見者であるとの叙述は過誤でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題です。で、朕は今これを貴納に提出しますから、貴納は之に解決を下さねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下が今引用された經文は、何れも間違ではありませぬ。大王よ、過去の諸如來は消え失せ給うて、「天下一人の」教師なく、隨つて其の道も亦た消え失せました。而して其の道は、是の如く破損し、崩潰し、荒廢し、閉塞されて、通れなくなり、全く見る影もなくなつて居ました。然るに如來は正偏智を得て、慧眼もて、過去の諸佛の歩み給ひし道を看破し給ひました。是故に世尊は、

「比丘等よ、我は過去の諸佛の歩み給ひし所に隨つて、古昔の道を覩、往昔の路を覩た。」

と仰せ給ひました。卽ち其道は、過去の諸如來の御隱れになり、「天下一人の」教師なかりしがため、破損し、崩潰し、荒廢し、閉塞されて、見えなくなつて居ましたけれども、今や如來は復た其の道を通れるやうに遊ばしたのであります。是の故に、

「比丘等よ、如來・應供・正等正覺は、知られざりし道の發見者である。」

大王よ、一人の轉輪聖王の崩去のため、摩尼寶珠が山巓の罅裂に隱されて了つたが、他の轉輪聖王が其位に卽いたので、摩尼寶珠は〔復た〕顯はれたと假定せば、陛下は、其の摩尼寶珠は、渠によつて造られたと仰せられますか。』

王『いいえ、尊者よ、寶珠は原始の狀態と毫も異はありますまい。が、其は渠によつて新生命を受け〔て世に顯はれ〕たのです。』

尊『大王よ、世尊も亦た是の如く、慧眼によつて正偏智を得たまひ、過去の諸如來の步み給へる道――縱令そは〔天下一人の〕敎師なかりしがため、破損し、崩潰し、荒廢し、閉塞されて、見えなくなつて居ましたけれども――の生命を回復し、原始の狀態の最尊最貴なる九聖道として、再び通れるやうになし給ひました。是の故に、

「比丘等よ、如來・應供・正等正覺者は、知られざりし道の發見者である。」

と宣うたのであります。

大王よ、世の母たるものが、已に其の胎中に在つた兒を產んで、而も其の兒に生を與へたと言ふが如く、如來も亦た慧眼もて正偏智を得、已に世に存せし道――縱令そは破損し、崩潰し、荒廢し、閉塞されて、見えなくなつて居たにせよ――を復た通れるやうになし給うたのであります。

大王よ、世人は人が一たび失つた物を見出せば、「彼は其の物を再現せしめた」といふ句を用ひま

す。また人が藪を切り開いて、土地の一部を開拓すれば、世人は「それは彼の土地である」と云ふ句を用ひます。が、其の土地は彼が造り出した譯ではありませぬ。大王よ、如來も亦た是の如く、慧眼もて正徧智を得、而して彼の破損し、崩潰し、荒廢し、閉塞し、通れなくなり、見えなくなつた道の生命を回復し、再び通れるやうに遊ばしたのであります。是の故に世尊は、

「比丘等よ、如來・應供・正等正覺者は、知られざりし道の發見者である。」

と宣うたのであります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です、朕は御說の通りに信受いたします。』

佛陀の親切に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「我は已に前生に於いて人たりし時、衆生に害を加へざる底の習慣を〔養ひ〕得たり。」

と宣說し、他方に於いては、

「渠は(七)樓摩差・迦葉波といふ仙人なりし時、數百の生物を殺戮して、大供犧、即ち勝利の飲み物を供げぬ。」

【七】Lomasa Kassapa.

さて、那伽犀那尊者よ、若し彼の「前生に於いて人たりし時、衆生に害を加へないやうな習慣を「養ひ」得た」との佛陀の宣說が眞實だとすれば、「樓摩差・伽葉波として、數百の生物を殺戮した」との叙述は嘘でなければなりませぬ。が、若し彼の「樓摩差・迦葉波として、數百の生物を殺した」ことが眞實だとすれば、「前生に於いて人たりし時、衆生に害を加へないやうな習慣を「養ひ」得た」との宣說は嘘でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題であります。で、朕は今これを貴衲に提出しますから、貴衲は之に解決を與へねばなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊は、「我は已に前生に於いて人たりし時、衆生に害を加へざる底の習慣を「養ひ」得たり」と宣說したまひました。而して樓摩差・迦葉波仙は、數百の生物を殺戮して、大供犧卽ち勝利の飮物を供げました。されど渠は其の時全く愛慾のために無我無中になり、自分の爲て居ることを意識して居なかつたのであります。』

王『尊者よ、世に生物を殺す八種の人が居ます。愛慾の念の强いものは愛慾のために生物を殺し、殘忍なるものは瞋恚のために生物を殺し、愚癡なるものは愚癡の爲に生物を殺し、高慢なるものは慢心のために生物を殺し、貪婪にして飽くことを知らざるものは貪慾のために生物を殺し、貧窮人は生計のために生物を殺し、莫迦者は戯れに生物を殺し、王者は刑罰のために人を殺す。尊者よ、これ卽ち生物を殺す八種の人であります。然れば、尊者よ、菩薩が生物の殺戮を敢てし給うたのは、其の自然の

性情に隨つて敢行せられたに相違ありますまい。』

尊『いいえ、大王よ、殺戮を行ふことは、菩薩にとりて決して自然ではありませぬ。若し菩薩が自然の性情によつて、大供犧を行はれたものとせば、渠は決して、

「おお差伊波よ、我は慚愧のために、大洋をもて衣裝とせる全世界をも、又それを飾れる海をも山をも、得むことを欣はざるなり。」

といふ頌を誦出し遊ばさなかつたでせう。大王よ、菩薩は斯く言ひながら、尚且つ(八)月の顏姫を一見して、愛著のために無我無中になり、自ら制する力を失ひました。卽ち渠は其の心、困惱攪亂し、其の思想、混雜散亂し、迷ひ惑うて周章狼狽して居た時、殺した動物の首から生血の滴る大供犧、卽ち勝利の飲物を供げたのであります。

【八】チャンダヴァティー Candavatī

大王よ、狂人は、其の感覺を失へば、猛火炎炎たる爐の中に踏み込み、怒れる毒蛇を手づから握り、狂象に乘り、渺茫として對岸の見わけもつかぬ大流に投入し、不潔極まる池や、泥濘だらけの地をも踏み、荊棘だらけの藪にも突き入り、斷巖絕壁から墜落し、汚物を食つて生を保ち、赤裸裸で市中に飛び出し、其の他種種の不體裁不行儀なことをいたします。菩薩も亦た是の如く、皇女・月の顏姫を一見して、無我無中になつた其の時だけは、數百の生物を殺して供犧を營み給ひました。

大王よ、無我無中で爲た惡行は、此の世ですら大罪とは認められて居りませぬ。況んや其が未來に

將來すべき結果は推して知るべきであります。大王よ、ある狂人が死刑に處せられる程の大罪を犯したと假定せんに、陛下は彼を如何な刑に處せられますか。』

王『狂人に對する處刑ですか、朕は有司のものに彼を擲らせて放免します。これ狂人に對する處刑のすべてです。』

尊『されば、大王よ、狂人の罪に關しては、處すべき刑がないのですね。卽ち狂人の行爲には罪がなく、彼の所行は赦免すべきものですね。大王よ、樓摩差・迦葉波仙も亦た是の如く、渠は皇女・月の顔姫を一見するや、愛著のために無我無中になつて自制力を失つたのです。而して渠は其の心、困惱攪亂し、其の思想、混雜散亂し、迷ひ惑うて周章狼狽した時、動物を殺して首から生血の滴る大供犧、卽ち勝利の飲物を供げたのです。されど渠の心が自然の狀態に復して、沈著になつた時、再び世を逃れて出家し、五種の神通力を得て、梵天の世界に再生いたしました。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

佛陀の嘲笑に就て

王『那伽犀那尊者よ、六牙の象王たる世尊は、

「渠は、彼を殺さんと探し求め、其の鼻、彼に達せる時、彼が出家の表章たる壞色の衣「に身を包

める」を見き。

時に彼は、大なる苦痛を覺えつつも、阿羅漢の著る法衣もて、身を包める者には害を加ふべからず、須らく神聖に且つ善意を以て保護せざる可らずとの念を起しき。」

と宣説せられました、然るに他方に於いては、

（九）「渠は（一〇）ジョーティパーラといへる、若き婆羅門なりし時、坊主、（一一）味噌摺り坊主と、卑くも亦た苦が苦がしき言葉もて、迦葉波世尊・應供・正等正覺者を罵詈譏謗せり。」

と謂はれて居ます。さて、尊者よ、菩薩は一の動物であつた時すら、壞色の衣「を著た人」を恭敬されました。されば渠がジョーティパーラといふ一婆羅門として、當時の世尊を謗り罵つたとの叙述は、嘘でなければなりませぬ。されど若し一婆羅門としての渠が、世尊を謗り罵つたといふ叙述が眞實だとすれば、六牙の象王であつた時の宣説は、虚僞でなければなりませぬ。若し菩薩が動物であつた時すら、殘忍酷薄の苦痛を忍びつつ、尚且つ壞色の衣を著た獵師を恭敬し給うたならば、爭で智識の熟した思慮ある人間でありながら、迦葉波世尊・應供・正等正覺者・十力の所有者・世間の導師・尊貴中の最尊貴者・身の周圍に後光を有する人・ベナレス織の最上最高最纖なる布を壞色に染めて著たる人に對して、恭敬を表さな

【九】中阿含卷第十二・鞞婆陵耆經を見よ。
【一〇】Jotipāla（ジョーティパーラ）は、漢譯に優多羅童子となつて居る。
【一一】原語 Sainañjaka は「賤しい道士」の義、玆に「味噌摺り坊主」とせるは、極めて自由な意譯である。

いで居ませうぞ。これ亦た實に兩頭にかかる問題です。で、朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は之に解決を與へねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下の引用し給うた經文は、世尊の御言葉に相違ありませぬ。而して迦葉波世尊・應供・正等正覺者が、彼の若い婆羅門のジョーティパーラから「坊主、味噌摺り坊主」といへる、卑くも亦た苦が苦がしい言葉で、謗られ罵られたことも眞實です。が、そは職として彼を圍繞する生家の家庭に由つたのであります。何ぜなれば ジョーティパーラは無信仰の家に生れ、無信仰な人の後裔であつたからであります。即ち渠の母も父も、姉妹も兄弟も奴婢も奴僕も、雇ひ人も、寄食者も、皆悉く梵天信者であり、梵天崇拜者であり、且つ婆羅門は人間の中で、最高最上の光榮ある位置を占むる者といふ觀念を懷いて居ましたから、出家せる他階級のものを誹り罵つたのです。で、(三)彼ジョーティパーラは陶工の(四)ガティーカーラから、世尊を訪問すべく招待された時、「あんな坊主、賤しい味噌摺り坊主を訪問して何になるか」と答へたのであります。

大王よ、甜液も毒と混ずれば酸味となり、冷たい水も火の側に置けば熱くなるが如く、彼の青年婆羅門・ジョーティパーラも亦た、無信心の家庭に生れて、無道な人人の中に育ちましたから、周圍の人

【三】中阿含卷第十二・鞞婆陵耆經に曰く、「優多羅、汝可共我往詣迦葉如來無所著等正覺供養禮事、於是優多羅童子答曰、難提波羅、我不欲見禿頭沙門、禿沙門不應得道、道難得故」(卍藏第十二套第九册六十四紙裏下段)

【四】ガティーカーラ Ghaṭīkāra.

人の行儀に染み化せられて、如來を謗り罵つたのです。大王よ、炎炎たる猛火は、縦令そが燃ゆる眞最中でも、若し水をかくれば、忽ち消されて〔一四〕ニッグンディ果のやうな黒い燃屑となつて了ひます。ジョーティパーラも亦た是の如く、渠はもと善根功徳を積み、清淨なる信念に富み、智慧の光明も偉大でありましたが、無信仰の家に生れ、無道な人人の中に育ちましたから、渠は恰も盲目〔同様のもの〕となり、如來を謗り罵つたのです。〔一五〕されど渠が佛陀の處に詣き、佛陀の徳を知つてからは、〔態度一變して〕恰も佛陀の奴僕の如くなり、世を辭し出家して、勝者の教團に入り、五神通と八等至の力を得、梵天の世界に再生いたしました。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御説の通りに信受いたします。』

佛陀の孤立無援に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「陶工・ガティーカーラの家は、三个月間、雨洒しなりしも、毫も雨漏らざりき。」

と宣ひ、然るに他方に於いては、

〔一六〕「迦葉波如來の廬に雨降れり。」

〔一四〕Nigundi.

〔一五〕少年婆羅門の歸佛入道の因縁は、中阿含卷第十二・鞞婆陵耆經（卍藏第十二套第九冊六十五紙表上段）に出づ、研究者は就て看よ。

〔一六〕此の二の引用文も、下に記する譯も共に中阿含卷第十二・鞞婆陵耆經（卍藏第十二套第九冊六十六紙裏上段乃至下段）に出づ。

と仰せられてあります。さて、尊者よ、善根功德を增長せる如來の菴に雨が降つたのは如何いふ理由ですか。世人は如來には雨を防ぐ位の御力があると思つて居ます。尊者よ、若し陶工・ガティーカーラの家が雨洒しにして置て、雨に濕れなかつたとすれば、如來の菴が雨に濕れたとの言は眞實とは思はれませぬ。若し如來の菴が雨に濕れたとすれば、陶工の家が雨に濕れなかつたといふのは嘘でなければなりませぬ。これ亦た兩頭にかかる問題です。で、朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は之に解決を下さねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下の引用あそばした經文は兩方とも眞實です。陶工・ガティーカーラは、有德の人で、美しい性格をもち、深く善根を植ゑ、年老いた盲目の母と父とに孝養して居ました。而して彼が不在の時、人民等は彼の許も得ないで、其の家から葺草を運び來り、如來の菴の屋根を葺きました。然るに彼は其の葺草を取り去られながら、毫も心に動ぜず、怒らず、却つて無限の喜悅を湛へて「世間の主なる世尊は、我を信認し給へよかし」と念じました。彼は其のために現世にまでも、善果を將來するに足る功德を得たのであります。

大王よ、如來は〔雨降るが如き〕一時の不便のために、心を擾したまふやうなことはありませぬ。大王よ、諸山の王たる須彌山が、無量の大風の攻擊を受けても、動ぜず搖がざるが如く、また諸大河の本家たる大海が、無量の大河の水を容れても、毫も溢れ零すことなく、亦た毫も攪き亂されることな

きが如く、如來も亦た一時の不便のために、心を動搖せしめ給ふやうなことはありませぬ。

大王よ、如來の菴に雨が降るとは多數の人民の考から起つたことです。何せなれば諸の如來が其の需要のものを自ら供給せず――供給すれば自ら供給が能きるけれども――遠慮し給ふ場合が二つあるからです。其の二の場合とは何であるか。㈠人と天とは、佛陀の供養に應じ給ふ底の分あるを見て、其の需要のものを供給し、以て惡道輪轉を免がれ、㈡〔若し諸の如來が自らの需要品を自ら供給し給へば〕他は之を見て、「諸の如來は奇蹟的の所作で生計を立てる」との非難の聲を發せんことを怖れ給ふ。〔これ諸の如來が自要自給を遠慮し給ふ二の場合であります。〕大王よ、若し帝釋が自ら其の菴を〔雨に濕さず〕乾して置れたら、また梵天すら斯くせられたら、そは〔彼等の〕過失であり、〔世間の〕非難攻擊を受くる基となつたでせう。何せなれば世人は之を見て「諸佛は其の妙工によつて、世間を愚弄し、我が物顏に振舞はる」と言ふかも知れないからです。これ斯の如きの所作は、爲ない方が宜かつただらうと言ふ所以であります。大王よ、諸の如來は、何等の利益をも求め給ひませぬ。蓋し渠等が、全く世の非難を受け給はないのは、秋毫、求むる所がないからです。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

如來・婆羅門・王の意義に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「比丘等よ、我は獻身的の一婆羅門である。」

と宣說し給ひ、又ある時は、

「犀羅よ、我はこれ王である。」

と宣ひました。尊者よ、若し世尊は婆羅門であつたとすれば、「我は王である」との宣言は、虛僞でなければなりませぬ。されど若しまた世尊が王であつたならば、「我は婆羅門である」との宣言は虛僞でなければなりませぬ。卽ち世尊は刹帝利族であつたか、又は婆羅門族であつたか、二者中の孰かでなければなりませぬ。何ぜなれば渠は同時に二種族の人たることは能きない譯であるからです。これ亦た兩頭にかかる問題ですから。朕は今之を提出致して、貴衲の解決を仰ぐのであります。』

尊『大王よ、陛下が引用あそばした世尊の宣言は、兩方とも眞實です。如來が婆羅門たると同時に王たり給ひしことには、然るべき理由があります。』

王『では、尊者よ、何うぞ其の理由を聞せて下さい。』

尊『大王よ、如來は一切の惡・不善の法を制伏し、捨離し、黜斥し、驅逐し、根絕し、滅盡し、鎭定し、遠離し、止息し給ひました。これ如來が婆羅門と呼ばれ給ふ一の理由であります。大王よ、婆羅門とは一切の疑惑煩惱等を超越した人を意味します。然るに如來は一切の煩惱疑惑等を超越し給ひますか

ら婆羅門と呼ばれ給ふのです。大王よ、婆羅門とは一切の有爲轉變の狀態を逃れた人、一切の垢穢闇昧を離れた人、自律獨存の人を意味します。而して如來は有爲轉變の狀態を遠離し、一切の垢穢を去り、自立獨存し給ひますから、婆羅門と呼ばれ給ふのです。大王よ、婆羅門とは最高最善至上無上の心の狀態を養ふ人を意味します。而して如來は至上無上の意を實現し給ひましたから、婆羅門と呼ばれ給ふのであります。大王よ、婆羅門とは聖典の學習・教授・施物の受領・克己・自制の方法・及び義務の遂行に關する古來の傳說を繼承し、實行する人を意味します。而して如來は此等の事件に關して、諸の勝者の命ずる、古來の法則上の傳說を繼承實行し給ひましたから、婆羅門と呼ばれ給ふのであります。大王よ、婆羅門とは禪定の最上安樂を享受する人を意味します。而して如來は之を享受し給ひますから、婆羅門と呼ばれ給ふのであります。大王よ、婆羅門とは一切衆生の歩むべき道の歴程進路を知る人を意味します。而して如來は之を知り給ふが故に婆羅門と呼ばれ給ふのであります。大王よ、世尊の父母も、兄弟も、姉妹も、友人も親戚も、教師も將た又天人も世尊に婆羅門てふ名稱を與へたのではありませぬ。世尊に佛陀てふ名前のあるのは、解脫あそばした爲であります。卽ち彼の菩提樹の下で、魔軍を退治あそばした瞬間から、一切の惡不善の性を制伏して、正徧智を體得あそばしました。而して婆羅門といふ呼稱が、世尊に適用せられますのは、一に世尊が此智見を獲得し、悟を開

王『如來が王と呼ばれ給ふのは、如何いふ理由ですか。』

章『大王よ、王とは一切の普通人の上に位し、彼に慇懃なるものを喜ばしめ、彼に反對するものを悲ましめ、大なる名聲光榮の表象として、高く聖王の日傘をかかぐる人を意味するのです。而して其の日傘は、清淨無垢の純白なもので、丈夫な堅い木の柄と數百の骨で出來て居ます。大王よ、世尊も亦た是の如く、邪教を信ずる魔軍を悲ましめ、正道を信ずる人天の心に法悅を滿たしめ、其の大なる名聲光榮の表象として、十千世界の上に、高く如來聖王の日傘をかかげ給ひます。而して其の日傘は、清淨無垢の純白な解脫と、無上の智慧より案出された數百の骨と、長い閒慘風悲雨の經驗を經たる、丈夫な強い柄とで出來て居ます。これ亦た如來が王と呼ばれ給ふ理由であります。大王よ、王は彼の面前に來り、彼に親近する多くの人人から尊敬せられます。が、世尊も亦た其の面前に來り、渠に親近する人閒天上等のものから、恭敬禮拜せられ給ひます。これ亦た如來が王と稱せらるる所以です。大王よ、王者は氣に入つた忠良な臣があれば、心から喜んで、其の臣に恩賜を下し、彼をして何んな高價な賜でも選び取らしむる底の人です。然るに世尊も亦た、人の言語・思想・行動の熱誠なるを見て、御氣に召したものがあれば、彼に恩賜を下して彼の心を滿悅せしめ、一切の物質的の賜よりも遙かに高價な賜——一切の苦の解脫——を選び取らしめ給ひます。これ亦た如來が王者と呼ばれ給ふ一の理由であります。大王よ、王者は王命に背くものを責めたり、罰したり、死刑に處したり致します。然

るに教團の清規として制定せらるる世尊の教勅に背き、無慚無愧にして、不平を鳴らす徒輩は、賤められ、輕んぜられ、非難せられて、勝者の宗教から擯斥されます。これ亦た如來が王者と呼ばれ給ふ一の理由であります。大王よ、王者は往古以來の諸の聖王より繼承傳統する法令に隨つて法律規則を宣布し、自ら如法に其規則を遵守し、以て人民の親愛する所、世間の囑望する所となり、其「行ふ所の」正義の力によつて、地上に幾代久しき王朝を打ち建てるものを意味します。然るに如來も亦た古來の諸佛の傳承し給へる教令に隨つて、法律規則を宣布し、自ら正義を行つて世間の導師となり、人天の信頼し愛好する所となり、正義の力によつて、地上に幾千代朽ちせぬ宗教を打ち建て給ひます。これ亦た如來が王者と呼ばれ給ふ一の理由であります。

大王よ、如來が何故に婆羅門又は王者と呼ばれ給ふかの理由は、比丘中の最大有力家が、一劫の長きに亙つて、算へても數へきれない程澤山あります。されば此の上更に細かく説くのは、寧ろ徒勞でありませう。で、陛下は、衲の上に申上げた所を諒察承認あそばさねばなりませぬ。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御説の通りに信受いたします。』

諸佛に對する布施に就て

王『那伽犀那尊者は、

「婆羅門よ、我は偈を唱へ〔て得た〕るものを食ふ可らず。婆羅門よ、これは諦觀者の法にあらず。
諸佛は偈を唱へ〔て得た〕るものを斥け給ふ。婆羅門よ、法の存せん限り、これ諸佛の道なり。」

と宣說し給ひ、然るに他方に於いて世尊は、法を敎へ法を說くに當り、所謂「次第說」には、先づ第一に布施の說敎をなし、第二に戒を說き給ふのが慣例になつて居ます。是の故に人天が、全世界の主たる世尊の說法を拜聽するに當つては、先づ施物を用意して詣り、之を呈上すれば、弟子等が其の施物を受納いたされます。さて、尊者よ、若し「我は偈を唱へ〔て得た〕るものは食ふ可らず。」といふのが世尊の眞說であるならば、世尊が說法するに當り、布施のことを第一に置き給うたといふのは、誤謬でなければなりませぬ。が、若し布施の事を力說し給ふのが正しいとすれば、「偈を唱へ〔て得た〕るものは、食ふ可らず」との宣說は過誤でなければなりませぬ。何せなれば、若し供養に應ずる底の資格あるものが、俗人等に對して布施の善功德を讃歎すれば、彼等は其を聽いて大に喜び、幾度も幾度も、布施を行はんと欲するでせう。而して其の布施を受用するものは、實に偈を唱へた爲に與へられた施物を受用することとなるからであります。これ亦た兩頭にかかる問題ですから、私は之を貴納に提出します。で、貴納は何うぞ之に解決を下さねばなりませぬ。』

尊『大王よ、世尊は一時、陛下が引用された通りの偈文を說き、また其の「次第說」の最初に、布施の說

をなし給ふのが慣例であつたことも事實であります。されど布施の說を最初にして、先づ聞衆の心を其方に向はしめ、次に正義の履行を激勵するのは、諸の如來の慣習となつて居ます。大王よ、こは恰も大人が小兒等に對して、先づ「玩具の犂」や、「インペイ」や、「風車」や、「玩具の物差」や、「馬車」や、「弓及び矢」などの玩具を與へて、それから彼等各各の仕事を指定するやうなものであります。又かの醫師が其の病人の精力を增さしめ、體力を和らげんがため、四五日の閒、油を飲ましめ、然る後、下劑を與へる如なものであります。大王よ、施主等は是の如くにして其心を和らげ、愛情に富める人となり、布施の船筏の幇助により、また布施の助道によつて、輪廻の大海を渡るのです。されば佛陀には此のために表業上の罪はありませぬ。』

王『尊者よ、貴衲は今「表業」と言はれましたが、其の「表業」とは何のことですか。』

尊『大王よ、表業には二種あります。一は身表業で、二は語表業であります。而して身表業にも語表業にも、有罪と無罪との二方面があります。然らば有罪の身表業とは何であるか。謂く、比丘あり、行乞に出でて一家庭に行き、非所に立つたと假定せば、そは有罪の身表業であります。眞の比丘は、是の如き布施は決して受用致しませぬ。而して斯る行を敢てせるものは、世尊の宗教に於いては、賤しめられ、見下され、非難せられ、尊ばれず、敬はれず、「如法の僧として」認められませぬ。彼は敎團生活の誓約を破つ

非所に立ち、斯くせば家族の者が、自分を見附てくれるだらうといふ量見で、家中を熟望凝視し、孔雀の如に其頸を伸したと假定せば、これ亦た有罪の身表業であります。眞の比丘は決して是の如くにして得たる布施は受用致しませぬ。而して斯る行を敢てせるものは、佛陀の教團に在つては、賤しめられ、輕んぜられ、教團の誓約を破れるものとして、一定の罪に處せられます。また次に、大王よ、比丘あり、行乞するに當つて、顎や、眉毛や、指を以て合圖をなすと假定せば、是亦た有罪の身表業です。眞の比丘は斯くして乞うた布施は受用致しませぬ。而して斯る行を敢てするものは、如來の教團にありては、賤しめられ、輕んぜられ、非難せられ、「如法の僧として」認められませぬ。然らば無罪の身表業とは何んなことであるか。謂く、比丘あり、行乞に出でて、端心正念、安靜にして、自らの所作と自覺し、是所に立ち、施與せんと欲する人人の居る所に立ち、施與を好まざる人人の居る所を避けたならば、これ無罪の身表業であります。眞の比丘は、是の如くにして乞うた布施を受用致します。而して是の如くにして乞ふものは、聖者の教團に於いて、大いに尊敬せられ、重んぜられ、狡猾の念なき態度を持する人、清淨無垢の生活をなす人と認められるのであります。何せなれば、天中の天たる世尊が、

「眞の智者は乞ひ求むることをなさず、そは聖者の賤しむ所なればなり。
聖者は布施のために立つ、彼等は是の如くして乞を行ずるのみ。」

と宣說し給うたからであります。

然らば有罪の語表業とは何んなことであるか。謂く、大王よ、若し比丘あり、比丘の需要品卽ち衣・鉢・寢具・及び藥物等を得んと欲して諷言せば、これ卽ち有罪の語表業であります。眞の比丘は斯くして得たる物は受用致しませぬ。而して此種の人は、聖者の教團に在りては、賤しめられ、見下られ、非難せられ、尊ばれず、敬はれず、教團の誓約を破れるものと認められます。復次に、大王よ、比丘あり、若し他が聞いて居るのに、「私は斯く斯く然か然かの物を欲しい」と言ひ、他は之を聞いた爲に其の品を布施したとせば、これ亦た有罪の語表業であります。眞の比丘は斯くして得られたものは決して受用致しませぬ。而して斯る行を敢てせる者は、聖者の教團に在りては、賤しめられ、見下られ、非難せられ、教團の誓約を破れるものと認められます。復次に、大王よ、比丘あり、其の說を敷演するに當り、「人は斯く斯く然か然かの物を比丘に施すべし」と云つた爲に、他が之を聞いて、其の店より指摘された品を持ち來つて施與したりとせば、これ亦た有罪の語表業であります。眞の比丘は斯くして得られたものは、決して受用いたしませぬ。而して斯る行を敢てせるものは、聖者の教團に在つては、賤しめられ、見下られ、非難せられ、生活の法に關する誓約を破れるものと認められます。何となれば、大王よ、長老舍利弗は、日沒後、夜になつてから病氣にかかり、長老目犍連から、君の病に善く利く藥は何かと問はれて、沈默を破り、而して其沈默を破つた爲に藥を得ました。が、舍利弗

は、「此の藥は沈默を破つた爲に得られた。私は教團の誓約を破りたくない」と獨語して、藥を拒み、其を受用しなかつたではありませぬか。是の故にこれ亦た有罪の語表業であります。眞の比丘は、斯くして得られたものは、決して受用いたしませぬ。而して若し斯る行を敢てせるものは、聖者の教團に在つては、賤しめられ、見下られ、非難せられ、生活上の誓の破壞者と認められます。

然らば無罪の語表業とは何んなことであるか。謂く、大王よ、比丘あり、何か品物が入要の場合には、之を其の親戚か家族か、又は（一七）自恣の時期に招待された家の人に、「私は藥［又は何何］が欲しい」と告ぐれば、これ無罪の語表業です。眞の比丘は、是の如くにして乞うたものを受用し、斯る行に出でたものは、聖者の宗教に於いて、讃歎せられ、尊重せられ、敬重せられ、無垢な生活をなせるものの中に算へられ、如來・應供・正徧智の讃美する所となります。大王よ、如來は、彼の婆羅門・（一八）耕田婆羅墮婆闍が、紛糾錯綜せる問題の解釋を以て、如來を試さんがため、如來を引落さんがため、如來をして自ら過失を承認せしめ、罪に陷れんがために、進呈した施物を受納し給ひませんでした。是の故に如來は其の施物を拒んで、其を食べ給はなかつたのです。』

王『尊者よ、如來の應量器の中の食物中に、天人が天から「生命の液汁」を注入するのは、如來の食事し給ふときは、每に何日でもでしたか、又は牡豕の肉と牛乳で煮いた粥と、此の二種の食事の時だ

【一七】 自恣とは、印度の雨期に於ける安居が明けて、銘銘に比丘としての自由の行動をとる時を云ふ。

【一八】 Kasi-Bharadvaja.（カーシーバーラドヴージャ）

けですか。』

尊『そは恰も王者の食事に際し、宮廷の料理人がソースを取つて、王の食べ給へる食物の各片毎に、其をかけて上げるやうな風に、如來の食事し給ふ時は、何日でも天人が近侍して、如來の摘み上げ給ふ食物の各片毎に「生命の液汁」を注ぎかけました。で、如來がエーランヂャに在して、乾麥で作つた菓子を食べ給ふ時、諸の天人が、「生命の液汁」を以て、如來の御側にあつて菓子を濕ほしました。大王よ、如來の法體は是の如くにして補養されたものであります。』

王『尊者よ、是の如く常に熱心に如來の法體の御世話を申上げた、其等の天人は、實に大に好運でありました。善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

佛陀の疑に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、

「如來は、數多の人類の濟度のために、無數劫の閒、數百千劫の長きに亙りて、次第に無上の一切智を圓成し給うた。」

と言ひ、他方に於いては、又、

「如來は一切智を逮得し給ふや否や、法の宣說を止めて、其心に寂靜の安住を欲し給うた。

と言はれる。されば、尊者よ、そは恰も多くの時日を費して、戰爭せんとの目的を以て、弓術を習うた弓手、または弓手の弟子が、いざ大戰爭が突發したといふ日になつて、退却するやうなものです。如來も亦た是の如く、數多の人類の濟度のために、無數劫の間、數百千劫の長きに亙つて、次第に一切智を成熟し、「いざ本願成就して、」一切智を圓成したといふ其の日になつて、說法度生を止め給ひました。又多くの時日を費して角力術を練習した力士が、いざ角力ふといふ日になつてから、角力せずに退却するやうなものです。如來も亦た是の如く、數多の人類の濟度のために、無數劫の間、數百千劫の長きに亙つて、次第に一切智を成熟し、「いざ本願成就して、」一切智を圓成したといふ日になつて、說法度生を止め給ひました。

さて、尊者よ、是の如く、如來の退隱し給うたのは、何か怖れる所あつての退却ですか、又は說法の能きないためですか、それとも衰弱のためですか、或は全く一切智を體得して居られなかつたがためですか。何うぞ其の理由を述べて、私の疑惑を取り去つて下さい。何せなれば、若し其麼に永い間かかつて、人類の救濟のため、一切智を圓成し給うたとすれば、說法度生に從事することを躊躇し給うたとの叙述は、過誤でなければならぬからです。されど若し說法度生に從事することを躊躇し給うたといふ叙述が眞實だとすれば、一切智を圓成し給うたといふ叙述は、過誤でなければなりませぬ。これ亦た兩頭論法上の解き難い、甚深な疑問であります。で、今これを貴衲に提出しますから、貴衲

は之に解決を與へて下さらねばなりませぬ。』

尊『大王よ、陛下の引用せられた叙述は、兩方とも正しいです。が、如來の心に說法度生を止めて、寂靜の思惟休養を欲し給うたのは、一に其の教義の如何に幽玄奥妙にして、會得し難く、了解すること難きか、如何に微妙深遠にして、徹底すること難きかと、二に其の慾望を充足するに、如何ほど信心な衆生が居るか、又いかに固く（一九）小我主義の邪見に定著して居るかとを見破し給うたからです。斯くて世尊は、「われ先づ何人を教化しやうか。又いかにせば彼を教化し得やうか」と考へ、其の心を衆生本具の洞察力の觀念に向け給ひました。大王よ、上手な醫師が、複雜な病氣のために、苦しめる病人を診察して、「如何なる治療法を施さうか、何の藥を與へたら、此の疾病が癒るだらうか」と考慮するが如く、如來も亦た諸の人民が、罪業より起る種種樣樣な疾病のため苦しめられて居るのと、其の教義が如何にも幽玄奥妙であり、如何にも微妙深遠にして、會得し了解すること難きを見、「我は先づ誰を教化しやうか。又いかにせば彼等を教益し得るだらうか」と冥想し、其の心を衆生本具の洞察力の觀念に向け給うたのであります。

大王よ、卽位式を擧げたる君主が、彼に奉仕して生計を立つる哨兵・近臣の從者・商人・兵士・使臣・大臣・及び武士族等のことを想ひ起すとき、「如何にせば、朕は彼等を

【一九】原語 Sakkâya diṭṭhi は、古來これを身見と譯してある。要するに此の小さな五體を不變の自我なりと執著する見解を云ふ。

ねばならぬやうに、如來も亦た、其の教義の如何にも幽玄奧妙微妙深遠にして、會得し了解すること難く、其の慾望を充足するに、如何ほど信心な衆生が居るか、又いかに固く小我主義の邪見に定著して居るかを想ひ起して、「我は先づ誰を敎化しやうか、如何にせば彼を敎益し得やうか」と考へ、其の心を衆生本具の洞察力に向け給うたのであります。

而して說法し給へと梵天より要求せらるるは、實に諸の如來に傳承相續された必然の運命です。その理由は何であるか。謂く、其等の時代に於ける一切の人人は、苦行者も、僧侶も、雲水的の教師も、婆羅門も、皆悉く梵天の崇拜者、梵天の畏敬者で、彼等は一に梵天に賴り縋つて居たのです。大王よ、是の如く勢力あり威力あり、是の如く名高く、名聲遠近に聞え、是の如く位高く偉大なるものが、自ら佛法に心を向くれば、人間天上の全世界も、亦た悉く佛法に歸依し信仰するに定つて居ます。此に於いてか如來は梵天の請を容れて、說法し給うたのであります。大王よ、一國の君主または大臣が敬意を表し、崇拜恭敬するものに對しては、一切の人民も、亦た上の爲す所に隨ひ、恭敬し崇拜して敬意を表するやうになります。大王よ、今も亦た是の如く、梵天が如來に對して敬意を表すれば、人間天上の全世界の人人も、亦た如來に對して恭敬崇拜するでせう。何せなれば世間は悉く如來に敬意を表する梵天の崇拜者であるからであります。大王よ、これ梵天が如來に向つて說法教訓し給へと請ひ、如來も亦た其の請を容れて說法し給うた所以であります。』

王『善哉、尊者よ、紛糾錯綜せる問題は、今や善く解決せられました。貴衲は、實に善く說明なさいました。朕は御說の通り信受いたします。』

第六章　矛盾問答

佛陀の教師に關する矛盾の說述に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「我には師なく、(一)世に我と等しきものなく、天上天下、我に勝れたるものあることなし。」

と宣說したまひ、然るに他方に於いては、

「比丘等よ、(二)阿邏羅・迦藍摩は、私の先生であり、私は其の門下生であつた時、私と彼と同等の位置におき、大いに私を尊重恭敬した。」

と仰せ給ひました。

さて、尊者よ、若し「我には師なく、世に我と等しきものなく云云」との宣說が、眞實だとすれば「阿邏羅・迦藍摩は私の先生であつた云云」との叙述は虛僞でなければなりませぬ。が、若しまた第二の叙述が眞實だとすれば、第一のそれは虛僞でなければなりませぬ。これ亦兩頭にかかる問題です。朕は之を貴衲に提出しますから、貴衲は之が解決を下さねばなりませぬ。』

【一】中阿含經卷第五十六・羅摩經に曰く、「自覺誰稱師、無等無有勝、自覺無上覺、如來天人師。」（卍藏第十三套第一冊二八八紙表）

【二】Ālāra Kālāma.（アーラーラ　カーラーマ）

尊『大王よ、「我には師なく、世に我と等しきものなし云云」との叙述も、亦「阿邏羅・迦藍摩は私の先生であつた云云」との叙述も、共に世尊の宣説し給ふ所に相違ありませぬ。然し阿邏羅・迦藍摩は私の先生だつたとの宣説は、世尊が、佛知見を開發して、正覺者たる位置に達し給ふ前、卽ちまだ菩薩で居たまうた時の事實を述べ給うたのです。大王よ、世尊の菩薩時代には、〔阿邏羅・迦藍摩のみならず〕五回の先生がありました。卽ち世尊は、佛知見を開發して、佛位に達し給ふ已前には、其等の先生の教授の下に、種種の場所で、菩薩時代を過し給うたのであります。然らば、其の五回の先生は誰誰であつたか。

菩薩の降誕し給ふや、羅摩・陀闍・絡伽那・滿智・耶那・須耶摩・須菩闍及び須達多の八人の婆羅門が、菩薩の人相を見て、其の將來の光榮を告げ、愼重に保育せらるべきを指摘しました。此の八婆羅門は卽ち菩薩の最初の先生でありました。

復た次に、大王よ、薩婆密多はウヂッチャ地方に於ける、門地の高い婆羅門の子孫で、博言學者と文典學者とを兼ね、六種の吠陀に精通して居ました。で、菩薩の父、首圖檀那王は、使を遣はして、黃金の瓶から獻上の水を注ぎ出し、其の子を彼の薰陶の下に委ねました。これ卽ち菩薩の第二の先生でありました。

復た次に、大王よ、菩薩は天人の物語る音聲を聞いて心を動かし、其の瞬間に出家苦行の道に就き

ました。此の天人は卽ち菩薩の第三の先生であります。

復た次に、大王よ、阿邏羅・迦藍摩は、菩薩の第四の先生でした。復た次に、大王よ、羅摩の孫鬱陀迦は、菩薩の第五の先生でした。

大王よ、これ世尊が佛知見を體得し、佛位に達し給ふ以前、卽ち菩薩時代に於ける五回の先生です。が、彼等は皆世間の智識の先生であつたのです。而して、大王よ、最上無上の教及び一切智を體得する點に於いては、如來を教へ得たものは一人もありませぬ。如來は實に〔此の意味に於て〕他の教師先生の力をからず、獨立獨歩で、智慧を得たまひました。これ如來が、

「我には師なく、世に我と等しきものなく、天上天下、我に勝れたるものあることなし。」

と喝破したまうた所以であります。』

王『善哉、尊者よ、朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

一時に一佛の出現と限る理由に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「一世界に同時に二人の應供・正徧智〔卽ち佛陀〕の出世し給ふことは、不可能のことであり、因由なき事件である。是の如きことは到底許されない事柄である。」

と宣說したまひました。されど、尊者よ、一切の如來の說法し給ふや、常に三十七の菩提分法を說き、一切の如來の演說し給ふや、等しく四聖諦を說き、一切の如來の敎諭を垂れ給ふや、等しく三學を敎へ、一切の如來の敎益を施し給ふや、等しく精進の實行を說き給ひます。若し、那伽犀那尊者よ、一切の如來の說法が一であり、渠等の演說が同一であり、渠等の敎諭が同であり、渠等の敎益が一であるならば、何故に二の如來は同時に出現し給はないのですか。既に此の世は一佛の出世によりてすら、光明赫奕たるものがある。若し第二の佛陀の出現し給ふあらば、此の世は二佛の光明によつて、更に赫奕たる照耀の度を增すでせう。また世を敎ふるに當り、二佛が敎へ給はば、〔一佛よりも〕容易く敎へられ、世を導くにも、二如來の導き給ふあらば、〔一如來よりも〕容易く導かれるでせう。尊者よ、何うぞ、朕に此の理由を敎へて、朕の疑惑を取り去つて下さい。』

尊『大王よ、此の十千世界は、一佛の支持し給ふ世界です。換言せば此の十千世界は、ただ一如來の德だけしか持ち耐ふることは能きませぬ。で、若し第二の如來の出現し給ふあらば、世界は震撼し、動搖し、彼處此處に屈み、解體し、分散し、溶解して、全く滅亡して了ふでせう。大王よ、そは一人の客しか乘せられない船のやうなものです。乃ち一人の客が乘つて居れば、其の船は整然として、能く其の人の重量に耐へます。が、若し第一の人と年齡も、階級も、力も、大さも、身體の肥り具合も、

王『いいえ、尊者よ、彼の船は決して載せ運ぶことは能きませぬ。船は必ずや震撼し、動搖し、彼方此方に屈みます。加之、船は部分部分に分解し、解體し、破損し、全く破壞されて、波の中に沈んで了ふでせう。』

尊『大王よ、若し第二の如來の出現し給ふあらば、此の世界も亦た恰も是の如くであります。大王よ、人あり、思ふ存分に食物を喰べ、即ち咽喉につかへるほど美味い食物を喰べました。換言せば山海の珍味の饗應を受けて、棒のやうに堅くなり、屈むことも能きず、頻りに睡を催すまで滿腹飽食しながら、更に復た前のやうに喰べやうとしたと假定せば、此の人は果して安全でせうか。』

王『いいえ、尊者よ、若し彼が其の上に喰べたら、死ぬより外に仕方はありますまい。』

尊『大王よ、其の人が第二の饗應を喰べ得ざるが如く、――否なそれよりも一層――此の世は第二の如來を支持することは能きませぬ。』

王『されど、尊者よ、此の大地は、何故に功德の重すぎるため、震撼するのですか。』

尊『大王よ、此處に貴重な寶を一ぱいに積載した二臺の馬車があり、而して人が甲の馬車の積荷を、乙の馬車に積み重ねたと假定せんに、其乙馬車は二臺分の荷物を載せて運ぶことが能きませうか。』

王『いいえ、尊者よ、それは能きませぬ。〔若し〕二臺分の荷物を一臺に積んだら、其の車の轂は裂け、輻は破れ、骨組は部分部分に解體し、車軸は二つに折れるでせう。』

尊『されば、大王よ、其の馬車は、荷物の重きに過ぎるため、部分部分に解體するでせうか。』

王『然うです、解體します。』

尊『大王よ、此の大地が、善根功德の重過ぎるため、震撼するのも、丁度その如くです。大王よ、此理由は諸佛の力量を解明する引證にもなります。尙ほ又、同時に二佛の出現の能きない適確な理由を擧げませう。大王よ、若し二佛同時に出現し給はば、其教徒信者等の間に「汝等の佛陀」又は「我等の佛陀」といふ、爭論が起り、恰も二人の敵同士の有力な大臣の子分等の間に黨派が起るやうに、彼等の間が二黨派に分裂されるでせう。大王よ、これ二佛同時に出現し給はざる他の理由であります。

大王よ、更に又二佛同時に出現し給はざる理由を擧げませう。若し二佛同時に出現し給はば、「佛陀は首長なり」と云へる經文も虛僞となり、「佛陀は最勝なり」と云へる經文も虛僞となり、「佛陀は最善なり」と云へる經文も虛僞となるでせう。而して又、「佛陀は最上なり、最勝なり、最高なり、無比なり、無雙なり、無敵なり、對手なく、競爭者なし」等の經文は、皆悉く虛僞となります。これ亦た實に二佛同時に出現し給はざる理由なることを承認あそばされたい。

されど、大王よ、此の外、十千世界に「一時に」一佛のみ出現し給ふのは、覺者・世尊の自然の特性であります。そは一切智・覺者の德が大きいからであります。尙ほ又、世の偉大なるものは、何でも

ります。虚空は偉大です、故にそは唯一であります。〔諸天の王なる〕帝釋は偉大です。故に渠も亦た唯一であります。惡魔即ち死の神は偉大です、故に彼は唯一であります。大梵天は偉大です、故に渠も亦單一であります。如來・應供・正徧智は絶大であります。故に渠は唯一です。此等の孰かが一つ生起すれば、世には其の第二を容れる餘地がありませぬ。此の故に、大王よ、唯一の如來・應供・正徧智は、此の世に同時に二人以上出現し給ふことは能きませぬ。』

王『尊者よ、貴衲は實に善く示例引證して、此の難しい問題を御解釋になりました。無智のものでも、貴衲の說明を聽かば滿足するでせう。況んや朕のやうに大智ある者に於てをやです。善哉、尊者よ、いかにも御說御道理です。私は御說の通りに信受いたします。』

何故に佛陀よりも僧衆に布施すべきか

王『那伽犀那尊者よ、世尊は、其の叔母、(三)喬多彌家の摩訶波闍波提が、雨期用の反物を如來に布施せんとせる時、彼女に向つて、

「喬多彌よ、其は僧衆に供養せよ。若し僧衆に布施せば、便ち僧衆にも我にも、等しく恭敬を表することとなるなり。」

と宣ひました。されど、尊者よ、如來の叔母が自ら梳り、自ら壓搾し、自ら打ち展し、自ら斷ち、自

【三】中阿含卷第四十七瞿曇彌經に曰く、「瞿曇彌持新金縷黃色衣往詣佛所、稽首佛足却住一面白曰、世尊、此新金縷黃色衣、我自爲世尊作、慈愍我故願垂納受、世尊告曰、瞿曇彌、持此衣施比丘衆、施比丘衆巳、便供養我亦供養大衆。」(卍藏第十三套第一册二四三紙裏下段)

ら織れる雨期用の反物を、如來に布施せんとせる時、「其は僧衆に施與せよ」と宣うたとすれば、如來は僧寶よりも、供に應ずる底の資格が一層優れて居たまうたとは云へませぬ。また〔僧寶よりも〕一層尊重し恭敬せらるべきでもありますまい。若し、尊者よ、如來は、眞に僧衆よりも位置が高く大きく優れて居たまふならば、渠自らに布施せられた方が一層功德が大きいことを承知して居たまうたでせう。隨つて僧衆に布施せよとは仰つしやらなかつたでせう。が、尊者よ、如來は自ら布施に預るだけの道に居らず、是の如き布施を受くる理由を認められなかつたから、貴衲等は、如來が其の叔母に向つて、そは寧ろ僧衆に施與せよと仰つしやつたことを承認されるでせう。』

尊『大王よ、如來が其の叔母に向つて、「其は僧衆に施與せよ」と指圖あそばせしことは事實です。されど、そは如來自らに拂はれる恭敬に、功德の良果がない爲でもなく、供に應ずる底の資格が缺けて居たまうた爲めでもなく、唯、慈悲同情のあまり、「斯くせば、我が世を去りて後、將來、僧衆を尊重恭敬するならん」と思念して前の如く宣まひ、また僧衆の有する德を稱讚して、「喬多彌よ、其は僧衆に施與せよ。若しそれを僧衆に布施せば、便ち僧衆にも我にも、等しく恭敬を拂ふこととなるなり」と仰せられたのです。大王よ、父がまだ生きてる間に、宰相・兵士・使節・哨兵・護衛兵、及び廷臣等の集の眞中で、或は王樣の面前に於てすら、「若し此處で斯樣して置けば、其の子が將來、世の尊敬す

切のあまり、「斯くて僧衆は、將來、我が滅度してから、世の恭敬尊重する所となるだらう」と思念し、僧衆の眞に有する德を讃美して、「喬多彌よ、其は僧衆に施與せよ。若し僧衆に布施せば、便ち僧衆にも亦た我にも、等しく恭敬尊重を拂ふこととなるなり」と仰せ給うたのであります。又、大王よ、單に雨期用の上著の布施に預つたからとて、そは決して僧衆が如來よりも偉く、且つ優れてるといふ理由にはなりませぬ。大王よ、世の父母は、其の子等に香油を塗つてやり、摩でたり、水を浴させたり、按摩したりして、種種に心配して居るといふことの爲に、子等は其の兩親よりも偉く且つ優れて居るといふ理由になりますか。』

王『いいえ、尊者よ、決して其麼な理由はありませぬ。兩親は子供等が好まうが、好むまいが、お構ひなく、自らの思ふがままに子等を取扱ひ、或は香油を塗つてやつたり、或は按摩してやつたり、又は水を浴せたりするのです。』

尊『大王よ、如來と僧衆と「の關係」も亦た是の如く、單に喬多彌の布施を受けたからとて、僧衆が如來よりも偉く且つ優れて居るといふ理由にはなりませぬ。如來は僧衆が、好かうが好くまいが、「其麼ことはお構ひなく」其の上著は、僧衆に布施しなさいと叔母に告げ給うたのです。

大王よ、ある人が王に獻上品を捧呈しました。然るに王はそれを誰か外のもの、例せば兵士か、使節か、將軍か、僧侶かに下賜せられたと假定せんに、彼等は、唯單に王から下賜品があつたといふ事

實のために、王よりも偉く且つ優れて居ると言はれませうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して其麼な理由はありませぬ。其のものは、王から報酬を受け、王から生計の資を得、而して王は彼を其の局に任命し、彼に賜品を下さるのです。』

尊『大王よ、如來と僧衆と〔の關係〕も亦た是の如く、僧衆のものは、唯單に布施を受けたといふ事實のために、如來よりも偉く且つ優れて居るとは言へませぬ。僧衆のものは恰も如來の召使の如く、如來によつて生活の資を得るのです。而して如來は彼等を其位置におき、彼等に布施を下し給ふのです。尚ほ又、大王よ、如來は、「僧衆には、供に應ずる底の分がある。で、此は我が所有であるけれども、僧衆のものに與へやう」と思念して、上著を僧衆に施し給うたのです。何せなれば、大王よ、如來は自ら布施を受けずに、寧ろ世の供養に應ずる底の分あるものに與へやうと思召したのです。是の故に、大王よ、天中の天たる人、即ち如來は、少欲知足のものを讚歎し給ふ時、(四)中阿含の求法經の中に、

「彼「少欲知足の者」は、我が比丘衆中の首位となり、最も能く供養と讚歎とに應ずる底の分あり」

と宣說したまひました。

して又、大王よ、三界には如來よりも、より多く供に應ずる底の分あるものなく、如來よりも偉く

【四】卍藏第十二套第十冊一二一紙表下段。

天人(五)摩那婆・伽彌迦は、人天の集會の中で、世尊の面前に立ち、

「王舍城の諸山中、(六)毗布羅山は、其の首位なりと認められ、雪山山脈の中にては白山、天體の中にては太陽こそ、其の首位を占むれと認められ、諸水の中にては大海、星宿の中にては月、人間天上の諸世界の中にては、佛陀こそ第一位を占むれと認めらる。」

と(七)雜阿含經の中に言つてあります。而して、大王よ、天人摩那婆の此の偈は、惡く歌はれずして善く歌はれ、惡く話されずして善く話され、世尊の稱讚し給ふ所となりました。斯くて法將・舍利弗は、

「世に眞の教は唯一つある。歸依處は唯一つある。我等は魔軍を摧き我等を〔輪廻の大海より〕渡し給ふ唯一の佛陀を合掌恭敬するのである。」

と說破して居ます。而して又、世尊自らも亦た、

「比丘等よ、(八)多數の人の善利のため、幸福のために、世に生れたるもの、人天の利益・幸福・安樂のため、慈悲憐愍のための故に、世に生れたるものは、唯だ一人のみなり。而してその唯だ一人とは何人なりやとならば、謂く、如來應供正偏智卽ち是れなり。」

と宣ひました。』

【五】Mānava Gāmika.

【六】Vipula.

【七】巴利雜阿含三の二の十を見よ。

【八】巴利增一阿含一の十三の一に出づ。漢譯增一阿含卷第三阿須倫品第八に曰く、「爾時世尊告諸比丘、若有一人、出現世、多饒益人、安隱衆生、愍世群萌、欲使天人獲其福祐、云何爲人、所謂多薩阿竭阿羅訶三耶三佛。」(卍藏第十三套第二册十紙裏上段)

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。朕は貴納の御說の通りに信受いたします。』

俗人と出家とは孰が幸福なりや

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、

「比丘等よ、我は俗人たると出家の人たるとを問はず、〔佛知見を開き、正行を行じて〕正等位に到達せるものを讚歎す。比丘等よ、俗人たると出家の人たるとを問はず、正等位に達せるものは、世に存する一切の困難に打ち勝ち、阿羅漢果の妙境にすら入ることを得べし。」

と宣說したまひました。さて、那伽犀那尊者よ、若しも身に白衣を著け、情慾を放縱にし、妻子の繫累ある家庭に棲ひ、常にベナレス〔產〕の栴檀や、花冠や、香水や、軟膏などを用ひ、金銀を受納し、黃金珠玉を鏤ばめたる頭巾を冠れる俗人が、正等位に到達して、阿羅漢果の妙境にすら入ることが能きるとせば、若しまた頭を剃つて壞色の衣を著、他の布施によりて生活し、四つの道德を完全に滿足し、自ら一百五十の戒法を遵守し、其の外、(九)十三誓行の一をも缺かざる出家の人が、正等位に到達し、阿羅漢の妙境にすら入ることが能きるならば、俗人と出家人とには何の區別がありますか。尙ほ又、貴納等の誓行には何の効果も見えず、貴納達の出家は無益であり、

【九】十三の誓行とは、比丘の守るべき十三の頭陀を云ふ。

若しも斯くして安樂に寂樂の狀態に到達することが能きるならば、貴衲等が自ら苦難を積み累ねらるるのは、何の役に立ちますか。』

尊『大王よ、世尊は、「比丘等よ、我は俗人たると、出家の人たるとを問はず、正等位に達せる人を讃歎す云云」と宣ひました。而して、大王よ、洵に其の通りに相違ありませぬ。即ち正等位に達したものは勝利を得たのです。大王よ、若し出家の人が、自ら出家人たることを知るがために、正等位に達することを怠りましたならば、出家の結果たる阿羅漢果を去ること遠して遠しです。況んや若し俗人の尙ほ未だ、世閒の習慣に繫縛される人にして、怠慢するに於いてをやです。されど、大王よ、俗人たると、出家の人たるとを問はず、無上の知見を開き、人生の至上行爲に逮達せるものは、阿羅漢果の妙境にすら入ることが能きませう。されど、大王よ、沙門果の主たり長たるものは、出家の人です。出家的生活には、多くの善利・種種の善利・無量の善利があり、人の算へきれないほど數多の利益があります。大王よ、人は「斯く斯くなり、然か然かなり」と謂つて、如意寶珠の價値を定め能はざるが如く、出家的生活にも亦た、多くの善利・種種の善利・無量の善利があつて、人は到底その利益を算へることは能きませぬ。大王よ、人は「海には、幾ら幾らの波がある」と謂つて、大海の波の數を算へることは能きても、出家的生活の功德利益を算へ盡すことは能きませぬ。大王よ、出家の人は、爲さねばならぬことは何事でも、一刻も遲疑せず、卽時に成し遂げて了ひます。何せなれば出家の人は、

少欲知足で、心〔常に〕樂み、世を離れ、俗交を辭して、勇猛に精進し、家庭もなく、住宅もなく、德行を成就して一點の疑念なき行履を爲し、身を修むることに熟練して居るからです。換言せば彼の前に何事でも爲すべきことが横はれば、彼は一刻も遲疑せず、卽時に其を成し遂ぐること、恰も陛下の投鎗が純正の金屬で、一點の汚點もなく、滑かで、光輝あり、眞直なるの故を以て、迅速に飛翔するやうなものであります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

苦行に就て

王『那伽犀那尊者よ、菩薩の苦行し給ふ時は、何人も其の努力に及ぶものなく、何人も斯る力を有するものなく、何人も是の如く魔〔軍〕に對して戰を挑むものなく、何人も是の如く魔軍を擊退するものなく、何人も是の如く食物を禁斷するものなく、亦た何人も是の如く嚴肅なる生を送るものはありませんでした。が、それでも菩薩は、是の如き努力に滿足することが能きず、

「我この苛酷なる苦行に依ってすら、聖智慧を啓發し、人力の及ばざる、特殊の能力を體得することは能はず、此の外、更に眞智に達する道はあらざるべきか。」

切智を體得し給ひました。然るに世尊は其の弟子等を敎ふるや、

「汝等［自ら］精勤して、（一〇）心を諸佛の敎に傾注せよ、而して魔軍を摧くこと、剛力の象の蘆の家を摧くが如くせよ。」

と謂つて、［自ら放棄した］苦行を奬勵あそばしました。さて、那伽犀那尊者よ、如來が自ら厭ひ、放棄せる所を以て、其の弟子を訓へ導き給ふのは如何いふ理由ですか。』

『大王よ、そは其時も今も尚ほ唯一の道です。卽ち菩薩は、其の道に依つて、佛果を圓成し給ひました。大王よ、菩薩は非常なる精進をなしつつ、竟には全然斷食し、其のため却て心の衰弱を來し、そのため一切智を體得することが能きませんでした。で、少量の摶食を受用しつつ、久しからずして一切智に體達あそばしましたのは、全く其の道に依つたのです。而して此道は諸の如來の一切智を體得し給へる唯一の道であります。大王よ、食物の一切衆生を支持するが如く、又、一切衆生は食物に依て安全に生命を持續するが如く、一切の如來は此の道に依つて、一切智を體得し給ひます。大王よ、如來が、其の時直に佛果を圓成し給はざりしは、其の罪、努力にあるのでもなく、力にあるのでもなく、惡魔に對して敢然戰鬪を挑み給ひしにあるのでもありませぬ。が、罪は一に食物を用ひ給はざりしことにあるのです。而も道それ自らは、常に使はれるのを待ち構へて居ます。大王よ、大急ぎで道を步き、餘り急いだ爲に足を傷めて、動けなくなり、路傍に横臥すと假定せんに、其の罪、大地にあ

【一〇】巴利語長老偈第二五六頌に出づ。

るでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、決して然うではありませぬ。大地は常に歩かれるのを待つて居ます。何で大地に罪がありませうぞ。罪は其の人自身が餘りに急いだ爲です。』

尊『大王よ、如來が其の時直に佛果を圓成し給はなかつたのも、其の罪、努力にあるのでもなく、力にあるのでもなく、惡魔に對して、敢然として戰を挑まれたことにあるのでもありませぬ。唯その罪は、食物を用ひ給はなかつたことにあるのです。而して道それ自らは、常に人の用ひるのを待ち構へて居ます。大王よ、人の衣服を著て、決して其を洗はないやうなものです。此の場合、罪は水にあるのでなく、水は常に使はれるのを待ち構へて居ますから、垢づいた罪は其人自らにあるのです。大王よ、是れ如來が、弟子達を訓ふるに當つて、此の道を導き給ふ所以です。何となれば、大王よ、其の道は常に準備成り、常に無垢であるからであります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

還俗者に就て

王『那伽犀那尊者よ、如來の敎は眞精・卓絕・最善・最良・至高・清淨・無垢・純正・無瑕であります。で、

果を體得するまで敎化されてから、入團を許さるべきでありませう。何せなれば若し此等の未だ煩惱ある人が、是の如く清淨なる宗教に入ることを許さるれば、彼等は宗教を捨てて、元の通りの下賤な狀態に逆戻りし、彼等の逆戻の爲に、世人をして「彼等が棄て去つた、沙門喬多摩の宗教は、無益であるに相違ない」と云ふ考を起さしむるからです。これ私が上の如く道破する所以であります。』

尊『大王よ、其處に清淨透明な冷水の充ち滿てる浴場があり、而して泥まみれになつて穢れた人が其處に來り、浴しないで、元の通り穢れたまま、逆戻りしたと假定せんに、世人は、此の事件を見て、其の人を非難するでせうか、又は浴場を非難するでせうか。』

王『尊者よ、世人は、「此奴は浴場に往つて、元の通り穢れたまま還つて來あがつた。浴場自らは、何うして浴しないものを綺麗にすることが能きやう、浴場に何の咎があらうぞ」と云つて、其の人を非難するでせう。』

尊『大王よ、如來も亦是の如く、解脫の淨水を充たせる浴池、卽ち妙法の浴場を建設し給ひました。で、各自罪過の垢のために、穢れて居ることを自覺する聰明の士は、誰でも此の浴場に浴して、其の罪過の垢を洗ひ去ることが能きます。が、若し人あり、妙法の浴池に詣りながら、浴しないで、元の通り穢れたまま逆戻りし、復た下賤の狀態に返つて來ましたら、世人は、「此の男は、勝者の法に隨つて、折角宗教に入りながら、安心の處を見出しきれずに、復た元の木阿彌で逆戻りして來た。勝者の

宗教も、其の教を遵守して、生活を齊整しないものは、何うして清めることが能きやう。されば宗教そのものに何の咎があらうぞ」と云つて、彼を非難するでせう。

大王よ、人あり、怕るべき病氣に罹り、診斷が上手で、有効的確の療法を知れる醫士を訪ひながら、竟に診斷を受けずに、元の儘の病體で、逆戻りしたと假定せんに、世人は、其の病人を非難するでせうか、又は醫者を非難するでせうか。』

王『尊者よ、世人は、「なんぼ上手なお醫者さんでも、治療を受けない人を、何うして快癒させることが能きやう。されば醫士に何の咎があらうぞ」と云つて、其の病人を非難するでせう。』

尊『大王よ、如來も亦た是の如く、「罪過の病氣のために苦しめる一切の有情に、此の不死の藥を服せて、彼等の病氣を癒してやらう」と考へ、罪過の一切の病氣を全く鎮め得る不死の藥を、其の宗教の寶筺の中に藏し給ひます。で、人若し其不死の藥を服ないで、心の内に煩惱の病を包んだまま戻り來り、下賤の狀態に逆戻りしたならば、世人は、「此の男は、勝者の宗教に這入りながら、安心の所を見出さずに、復た元の木阿彌に落ちぶれた。なんぼ勝者の宗教でも、其の教に隨つて身を修めず、生活を齊整しないものを、何うして平癒させることが能きやう。で、宗教そのものに何の罪があらうぞ」と云つて、其の男を非難するでせう。

も預らずに、飢ゑたまゝ還り去つたと假定せんに、世人は其の飢人を非難するでせうか、又は慈善の供養を非難するでせうか。』

王『尊者よ、世人は、「此の野郎は、飢餓に苦しんで居ながら、慈善の供養が此奴のために準備されてあるのに、何にも喰べずに、飢ゑた儘逆戻りして來あがつた。なんぼ御馳走でも、喰べない奴の口に、何うして這入つて來ませう。されば食物そのものに何の咎がありませうぞ」と云つて、其の男を非難するでせう。』

尊『大王よ、如來も亦た是の如く、「心中の罪過のために苦しみ、其の心は渴愛のために死人のやうになつて居る一切の有情をして、此の食物を喰べしめ、何等かの形に於いて、何等かの世界に於ける、未來生活の戀慕を鎭めてやらう」と思召して、其の宗敎の寶筐の中に、萬物の無常を實現する、至高・最善・吉祥・微妙なる不死の食物の、非常に美味なるものを藏し給ひます。然るに人もし其の食物を喰べず、元の通りに渴愛に制せられつつ還り來り、下賤の狀態に逆戻りせば、世人は、「此の男は勝者の敎に隨つて、宗敎の道に這入りながら、其の中に安心の處を見出さずに、復た元の木阿彌に還つて來た。何んぼ勝者の宗敎でも、其の敎ふる所に隨つて「身を修め」、其の生活を齊整しないものは、淸めることが能きない。されば、宗敎に何の罪咎があらうぞ」と云つて、其の男を非難しませう。

大王よ、若し如來が、俗人をして、聖道の初級に於いて訓練してからのみ、敎團に入ることを許し

給ふとせば、世を捨離したる出家は、既に煩惱の除滅と心意の淨化とに何等の効力なきものと謂はれ、隨つて出家は何等の用なきものとなりませう。之を物に譬ふれば、此處に數百人の勞力によつて掘られた浴池を有する人あり、彼は公衆に宣言して、「何人も穢れたものは、此の浴池に入つてはならない。唯塵や穢を洗ひ去つた者、卽ち清潔にして垢なき者のみ、此の浴池に這入ることを得」と云ふやうなものです。さて、大王よ、其の浴場は、已に清潔になり、無垢なるものに取つて、何等かの必要がありませうか。』

王『いいえ、尊者よ、それは確に不必要です。彼等は浴場に往いて、求めらるべき利益は、已に何處かで得て居ます。されば彼等に取つて、爭で浴場の必要がありませうぞ。』

尊『大王よ、今も亦た是の如く、若し如來が、已に聖道の初級に入つた俗人のみ、敎團に入ることを許し給ふとせば、彼等は已に敎團に這入つて、求め得らるべき利益を得て居るのです。されば、彼等に取つて、爭で出家する必要がありませうぞ。

大王よ、一人の醫士あり、彼は古聖の眞の門人で、昔の傳說と讚頌とを記憶し、診斷の上手な實際家、有効にして永久なる治療の方法に熟達し、有ゆる病氣を癒すことの能きる藥を採集して居ました。が、彼は世人に向つて、「諸君よ、身に疾病あるものは、私を訪問して下さるな。健康で丈夫な人だけ私を訪問して下さい」と宣言したと假定せ

强健にして、常に煕煕として歡べるものが、何か其の醫士に乞うて得たいものがありませうか。』

王『いいえ、尊者よ、彼等は已に强健ですから、醫士に請ひ求むる所はありますまい。されば、なんぼ名醫でも、彼等に取つては何の必要もありませぬ。』

尊『大王よ、如來も亦た其の通りです。若し如來が、已に聖道の初級に入つた俗人だけ、我が教團に入ることを許すと命じ給はば、其等の人人は、已に如來の教の中で、求めらるべき利益を、已に何處かで得て居るのです。されば出家生活は、彼等に取つて何の役にも立ちませぬ。

大王よ、人あり、牛乳で煮いた御飯を數百皿用意して、其の附近の人人に對ひ、「諸君、飢ゑたものは何人と雖も、此の慈善の饗饌に應じてはなりませぬ。美味い物を喰べて、充足し飽滿して身心爽かなる人、盛饌を饗はれて、氣持の愉快なる人のみ來つて、此の饗饌に應ぜられたい」と宣言せりとせば、大王よ、已に美味い物を喰べて、充足し、飽滿し、身心の爽なる人、盛饌の饗にあづかつて氣持の愉快なる人、是の如き人人は此の慈善の饗應から、何かの利益を得るでせうか。』

王『いいえ、尊者よ、何にも利益は得られませぬ。彼等は其の饗應にあづかつて得らるる利益を、已に何處かで得て居ます。されば如何な盛饌でも、彼等に取つては何の役にも立ちませぬ。』

尊『大王よ、如來も亦た其の通りです。若し如來が、我が教團には、已に聖道の初級に入つた人のみ入ることを許すと命じ給はば、彼等は已に何處かで法益を得て居るのですから、改めて教團に入る必

要はありませぬ。されば「なんぼ功德に富める」出家的生活でも、彼等に取つて、何の利益がありませうぞ。

加之、大王よ、一たび出家して、下賤の位地に還るものは、勝者の宗教の不可測なる五の妙德を反證することになります。五の妙德とは何であるか。謂く、彼等は「教團に入つて到達する」其の位地が何れほど光榮であるかを反證し、其の位地が如何に清淨なるかを反證し、罪あるものが其處に棲むことの如何に不可能なるかを反證し、其の位地に到達體現することの如何に難事なるかを反證し、其の中に於いて遵奉すべき禁戒の如何に過多なるかを反證することであります。

然らば彼等は如何にして其の位地の大光榮を反證するかとならば、大王よ、例せば、恰も生家の門地賤しく、卓越せる點もなく、智慧も足らざる貧乏人が、大なる王國の所有者となつたやうなものです。卽ち彼は久しからずして王國を滅ぼされ、其の光榮を奪はれるでせう。何ぜなれば其の位地が彼に取つては餘りに偉大に過ぎ、彼は其の權威を支持することが能きないからです。大王よ、「今それ教團に入つたものが、還俗する場合も亦た」是の如く、何等卓越した點もなく、功德もなく、智慧も足らぬものが、勝者の宗教に隨つて、世間を辭し出家入道しても、彼は到底最上至高の出家の位地を保つ能はず、自ら其の光榮を滅ぼし、墮落し、剝奪されて、下賤の位地に還ります。蓋し彼等は、勝者の教義により生起する境界の性質が、餘りに卓絕して居るので、其の主義を「貫徹し」遂げ果すことが

能きないからです。大王よ、かくて彼等は「僧伽たる」其の位地の、如何に光榮なるかを反證するのであります。

次に彼等は如何にして其の位地の清淨無垢なることを反證するかとならば、大王よ、そは水のやうなものです。卽ち水が蓮葉の上に落つれば、それに固著しないで、直に滑り落ち、離散し消え失せ、見えなくなります。蓋しそは蓮葉の清淨無垢なるがためであります。大王よ、今も亦是の如く、譎詐で、狡猾で、奸佞で、不實で、不法な意見を持するものが、勝者の宗教に入團を許されれば、彼は久しからずして、清淨にして無垢、透明にして無瑕なる、最高至上の宗教の中に立場を見出し兼ね、それに固著する能はず、其の宗教より消え失せ、離散し、墮落して、下賤の位地に還ります。蓋しそは勝者の宗教が、餘りに清淨無垢なるがためであります。大王よ、斯くて彼等は、出家の位地の如何に清淨無垢なるかを反證いたします。

復た次に如何にして罪ある彼等は、勝者の宗教中に、善人と共に棲むことの不可能なるを反證するかとならば、大王よ、そは大海が、其の中に死屍の棲住を容さないやうなものです。卽ち死屍を海中に投ずれば、直に濱邊の乾いた陸地に打ち上げて了ひます。何せなれば大海は諸の偉大なる動物の住家であるからです。大王よ、今も亦た是の如く、罪深き者、莫迦な奴、窮迫せるもの、不潔なる人、及び惡黨の類が、勝者の宗教に入團を許されれば、彼等は久しからずして、阿羅漢の清淨無垢なる棲

家たる、勝者の宗教を放棄して、下賤の狀態に逆戻りします。そは蓋し惡黨の類は、勝者の宗教に棲むことが能きないからであります。大王よ、斯くて彼等罪深きものは、勝者の教團の中に、善人と共に住するの不可能なることを反證致します。

次に彼等は如何にして其の位地を手に入れることの難事なるかを反證するかとならば、大王よ、そは恰も拙劣で、未熟で、無智で、上達の能力なき弓手には、「髮毛割き」といふやうな高尚なる弓術上の技藝が能きず、狙を失し、的を外すやうなものです。何せなればそは馬の毛が極めて細微なるがためであります。大王よ、今も亦是の如く、白癡漢・低腦兒・魯鈍漢・陰鬱漢・遲鈍漢などが、勝者の敎に隨つて、世間を辭し出家入道しましても、彼等は四聖諦の微妙なる要點を捕捉する能はず、[常に]その要點を失し、或は橫道に外れて、元の木阿彌の下賤な位置に還ります。蓋しそは四聖諦の微妙なる點に徹底することが六ケしいからでせう。斯くて彼等は、勝者の教團の團員たる地位を手に入れて體現することの、如何に難事なるかを反證するのであります。

次に彼等は如何にして、勝者の教團に於いて遵守すべき禁戒の過多なることを反證するかとならば、大王よ、そは人が大戰爭の酣なる場處に往き、敵の軍勢四方を取り卷き、武裝せる大兵の群り來るを見て、戰場を拔け出で逃げ還るやうなものです。何せなれば彼は猛烈なる戰闘の眞中に在つては、

癡・瞋恚の念に富めるもの・恒心なきもの・卑劣漢・低腦兒などの類が、勝者の主義の下に、世間を辭して出家入道しましても、彼等は數多の禁戒を持つこと能はず、[久しからずして教團より]拔け出でて逃げ還り、元の木阿彌の下賤な位地に逆戻りします。蓋しそは勝者の宗教に在りては、非常に澤山の禁戒を遵奉せねばならぬからです。大王よ、斯くて彼等は遵守すべき禁戒の、如何に夥多なるかを反證するのであります。

大王よ、花咲く灌木中の最善のもの、卽ち二重咲きの素馨には、蟲のために刺された花もあり、一寸一寸に食ひ截られた嫩莖もあり、又往往にして倒れるのもあります。が、彼等が倒れたからとて、素馨の灌木が面目を失した譯ではありませぬ。何せなれば殘れる花は、四方に馥郁たる芳香を送るからであります。大王よ、勝者の教法の下に、世を辭して出家入道せる者の中には、素馨の花が蟲に刺されて、其色香を損じ、又は發育すること能はざるが如く、下賤の位地に逆戻りする者もあります。が、彼等の逆戻りのために、勝者の宗教を侮辱してはいけませぬ。何となれば宗教の中に殘れる團員は、正しき行履の馥郁たる芳香を放ちて、人天の世界に徧滿せしむるからであります。

大王よ、健全な赤色を帶べる稻の中には、(一)カルムバカと稱する一種の稻が生え、往往にして凋衰します。が、其のカルムバカ稻の凋衰のために、赤色の稻が面目を失したとは云へませぬ。何となれば殘れる稻の實は王の食物となるからです。大王

【一】Karumbhaka.

よ、勝者の教法の下に、世を辭して出家入道せるものの中にも、赤色の稻の中に於けるカルムパカ稻の、發育せず、成長せざるが如く、往往にして下賤の位地に逆戾りするものがあります。が、彼等の逆戾りのために、勝者の宗教を侮辱してはいけませぬ。何となれば決然として教團の中に殘れる比丘等は、阿羅漢果にまでも向上することが能きるからであります。

大王よ、如意寶珠の一面は雅殺であるかも知れませぬ。が、一面の雅殺なために、如意寶珠が面目を失して居るとは言へますまい。何となれば寶珠の中に存する純潔性は、人を喜悦滿足せしむるからであります。大王よ、勝者の宗教の下に、世を辭して出家入道しながら、復た元の下賤の位地に逆戾りする者は、教團中に於ける雅殺な奴であり、落第生なのです。が、彼等の逆戾りのために、勝者の宗教を侮辱してはいけませぬ。何となれば決然として教團中に殘つて居る團員等は、人天の心に法喜禪悅を生ぜしむる原因となるからであります。

大王よ、最も清淨純潔なる赤栴檀ですから、或る部分は朽ち腐れて、芳香を失ふことがあります。が、其ために赤栴檀の面目を失したと云ふ譯にはまゐりませぬ。何せなれば朽ちずに殘つた部分は、其馥郁たる芳香を發散して、四方に撒き散らすからであります。大王よ、勝者の教法の下に、世を辭して出家入道しながら、復た元の下賤の位地に還るものは、赤栴檀の朽ち腐れた部分の如く、宗敎の

ぬ。何となれば決然として教團中に殘れる團員等は、彼等が正しき行履の赤栴檀香もて、人天の世界に徧滿せしむるからであります。』

王『善哉、尊者よ、貴衲は、一つ一つ適當なる實例を擧げ、一つ一つ正しき類推を以て、最も巧みに勝者の宗教の無瑕なることを明かにし、誹謗を遠離することを示し、背教の徒輩ですら、其の教法の如何に卓絶せるかを反證する旨を明かにされました。』

阿羅漢は何故に肉體を制するの力なきか

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、

「阿羅漢の受ける苦が一つある、そは肉體的の苦で、精神的の苦ではない。」

と言はれる。が、尊者よ、阿羅漢は肉體に依止して心意を保持して居ます。然るに彼は肉體を制する力なく、〔肉體を統御する〕主權なく、〔肉體を制する〕支配權もないのですか。』

尊『はい、大王よ、渠等には其の力がありませぬ。』

王『でも、尊者よ、渠は心意を保持しながら、身體の主權を握り、支配權を取り、身體を制するの力がないとは受取れませぬ。尊者よ、鳥ですら、其の棲む所の巢の主君であり、首長であり、支配者ではありませんか。』

尊『大王よ、生を代へ身を代へても、肉體に固有する十種の性質があります。其の十種の性質とは何であるかとならば、謂く、寒と熱と、飢と渇と、排泄と疲勞と、睡眠と年老ると、病氣と死とであります。而して此等の點に於いて、阿羅漢には、主權もなく、支配權もなく、制裁力もありませぬ。』

王『尊者よ、阿羅漢は何故に其の肉體を制する力なきか、何故に己の肉體を支配し得ざるか、今その理由を承はりませう。』

尊『大王よ、そは陸地に依止するものは、何でも其に依つて歩き、其に依つて棲み、其に依つて職業を辨ずるやうなものです。大王よ、彼等に其依止所たる大地を制する力があり、支配權がありますか。』

王『いいえ、ありませぬ。』

尊『大王よ、阿羅漢も亦た是の如く、肉體に依止して心意を保持します。而かも彼の主權は、肉體を制する力もなく、權威もありませぬ。』

王『尊者よ、普通の人間は、何故に肉體精神ともに苦を感受しますか。』

尊『大王よ、彼は其の心を訓練して居ないから、心身の苦を感受するのです。大王よ、牡牛が飢餓のために戰慄して居る時は、草又は纏繞植物の、弱い脆い小さな綱で縛することが能きます。が、若し彼が興奮した時は、綱を曳きずりながら逃げるでせう。大王よ、人も亦た是の如く、心の修養訓練のな

地上に匍匐するほど心が興奮します。而して彼は是の如く、其の心の無訓練なるがために、戰慄し、喚叫し、怕るべき呻吟の聲すら發します。大王よ、これ普通の人間が、身心ともに、苦痛を蒙むる所以であります。』

王『では、尊者よ、阿羅漢は、何故に一種の苦痛、卽ち肉體上の苦痛のみを受け、精神上の苦痛は受けないのですか。』

尊『大王よ、阿羅漢の心は、訓練せられ、善く訓練せられ、調御せられ、善く調御せられ、從順にして、善く其の言ふことを聽きます。彼は苦痛を感受するや、決然として無常の觀念に住し、其の心を三昧の柱に縛ばり附けて引き締めます。而して縱令彼の肉體は、苦痛に惱んで七顚八倒しても、三昧の柱に縛ばり附けられた其の心は、嚴乎として動かず、震へず、牢乎として迷ひ狂ひませぬ。これ阿羅漢が身苦の一種のみを感受して、心苦を感受せざる所以であります。』

王『那伽犀那尊者よ、肉體が震へるのに、精神が震へないといふのは實に希有な事です。何うぞ私に其の理由を聞せて下さい。』

尊『大王よ、此處に根幹・莖葉ともに丈夫な大木があると假定せんに、其の枝が風のために吹き動さるる時は、其の幹も亦た動きませうか。』

王『いいえ、決して動きませせぬ。』

尊『大王よ、阿羅漢の心は、其の大木の幹のやうなものであります。』

王『希有なる哉、尊者よ、未曾有なる哉、尊者よ。朕は未だ曾て一切時に於いて、是の如く明かに燃ゆる法燈を見たことはありませぬ。』

俗人の罪に就て

王『那伽犀那尊者よ、波羅夷罪を犯した俗人が、其の後出家入道して教團の人となり、而して彼自らも俗人であつた時、極罪を犯したといふことを自覺せず、他も亦た「汝は俗人であつた時、斯く斯く然か然かの極罪を犯した」と言つて告げ知らせもしなかつたと假定せられよ。今もし彼が阿羅漢果に逮達せんと熱中せば、聖道に入つて成功する程に、眞理の體得が能きませうか。』

尊『いいえ、大王よ、それは能きませぬ。』

王『何せ能きますまいか、尊者よ。』

尊『大王よ、眞理を體得する原因となるべき筈のものが、彼には盡き果てて亡いのです。是の故に彼には眞理の體得が能きませぬ。』

王『尊者よ、貴衲等は、「人が己の罪を自覺すれば、悔恨の情が起り、悔恨の情が起れば、心の罣礙と

す、随つて悔恨の情も起らず、心は寂靜であるものに、眞理の體得が能きますまいか。此の問題は二個の矛盾せる叙述ですから、尊者よ、何うぞ御熟考の上、解決して下さい。』

尊『大王よ、撰擇した種物を、善く耕し、善く灌漑せる肥沃の土地に、上手に蒔いたら、成熟して實のるでせうか。』

王『實のりますとも。』

尊『然らば其の同じ種子を岩の上に蒔いても生えるでせうか。』

王『勿論生えませぬ。』

尊『では、同じ種子を土地に蒔けば生え、岩の上に蒔けば生えないのは、何ういふ理由ですか。』

王『尊者よ、岩には其を生やすだけの因由がありませぬ。種子は因由なしには、生えることが能きないのです。』

尊『大王よ、今も亦た是の如く、彼には、眞理の體得を將來ずべき筈の因由が根絶されて居ます。眞理の體得は、因由なしには出來ませぬ。』

王『尊者よ、他の實例を擧げて下さい。』

尊『大王よ、杖・土塊・棒・棍棒などは、地上に於けるが如く、空中に其の依止處を見出せますか。』

王『いいえ、尊者よ、其麼ことは能きませぬ。』

尊『されど、大王よ、彼等は空中に依止すること能はずして、何して地上に依止することが能きますか。』
王『尊者よ、そは彼の空中には、彼等が固著すべき因由がないからです。而して彼等は、因由なしには、依止することは能きませぬ。』
尊『大王よ、今も亦た是の如く、彼の人の罪過によつて眞理體得の因由が、芟除されて了つて居ます。で、因由なしには眞理の體得は能きませぬ。大王よ、彼の火は、陸上に於けると同樣に、水中に於いても燃えませうか。』
王『いいえ、燃えませぬ。』
尊『何せ燃えますまいか。』
王『尊者よ、水中には、火の燃える因緣が存しないからです。而して火は、因緣なしには燃えるものではありませぬ。』
尊『大王よ、今も亦た是の如く、彼の人には、眞理の體得に必要とする因由が、其罪過のために滅びて亡くなつて了つたのです。而して其の因由が、滅ぼされて亡くなつて居るのに、眞理の體得のあり得やう筈はありませぬ。』
王『尊者よ、今一度この問題に就て御考へ下さい。朕は未だ其を了解して居りませぬ。人が其の罪を自

を擧げて朕を說服して下さい。』

尊『大王よ、若し人が喰べたと云ふことを知らずに、[二] ハラーハラ毒を喰べても、其の生命を奪ひ去られるでせうか。』

王『それは奪ひ去られますとも。』

尊『大王よ、自ら罪を犯したことを自覺しないで居て、そが眞理體得の障礙となることも、亦た是の如くであります。大王よ、火は、人が自覺しないで、其の中を步く人でも燒きませうか。』

王『それは燒きますとも。』

尊『大王よ、いま陛下の御提出あそばした問題の場合も、亦た丁度その通りです。大王よ、毒蛇は、人が知らない內に嚙んでも、其人を殺しませうか。』

王『それは殺しますとも。』

尊『大王よ、いま陛下の御提出あそばした問題の場合も、亦た丁度その通りです。大王よ、彼の[三] カリンガ國王なる沙門[四] コーランナが、轉輪聖王の七寶に圍繞せられ、王象に騎つて、其親屬を訪問する時、菩提樹の邊を通過し得なかつたといふのは、眞實ではありませんか。これ罪を犯せるものは、縱令自ら其を知らずに居ても、決して眞理の智識を起すこと能はざる所以であります。』

王『那伽犀那尊者よ、これ洵に勝者の語でなければなりませぬ。罪過を見出すのは無益である、これ貴

【二】 Halāhala.
【三】 Kaliṅga.
【四】 Kolañña.

衲の說明の意味でなければなりませぬ。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

有罪の出家に就て

王『那伽犀那尊者よ、有罪の俗人と有罪の出家との區別・相異は何ですか。彼等は兩方とも、等しき境界に再生し、等しき異熟果を受くるのですか。或は兩者の間に、何等かの相異がありますか。』

尊『大王よ、有罪の俗人より區別すべき、有罪の沙門の德が十種あります。又その外、十種の方法によつて沙門は彼に與へらるべき布施を淨化いたします。

有罪の俗人より區別すべき、有罪の沙門の十種の德とは何であるかとならば、謂く、大王よ、有罪の沙門は、佛陀を敬禮し、法を敬禮し、僧伽を敬禮し、梵行を修するものを敬禮し、聖典の讀誦と質問とに精進し、多く聞くこと〔卽ち硏究〕に熱心し、集會に行くに儀容を調へ、非難を怖れて、言語動作を愼しみ、其の心を〔向上發展の〕努力に置き、比丘と仲間になることであります。大王よ、縱令彼は罪を犯しても愼みて生活します。大王よ、例せば、結婚せる婦女が、極祕密に或は內密にのみ道を破るが如く、有罪の沙門も亦た愼んで非行を行じます。これ卽ち有罪の俗人より區別すべき、有罪の沙門に屬する十種の德であります。

著て其を淨化し、古の聖者が用ゐた、出家の特相を眞似て其を淨化し、多勢の比丘の中の一員たることに於いて淨化し、佛法僧に歸依することに於いて淨化し、〔阿羅漢果に向つて〕向上努力するに適せる、閑靜の地に棲むことに於いて淨化し、勝者の敎寶を遵守することに於いて淨化し、最上の法を說くことに於いて淨化し、眞理の島に再生することを、最後の運命とすることに於いて淨化し、佛陀は一切衆生中の第一位を占め給ふといふ、正直なる信仰を有することに於いて淨化し、齋日を善く守ることに於いて淨化す、これ則ち彼に惠まれたる布施を淨化する、十種の道であります。

大王よ、有罪の沙門は、全く墮落してすら、尙は且つ施主の布施を淨めます。例せば、水は縱令濁つて居ても、軟泥・泥・汚穢・及び塵垢を洗ひ去るが如く、又水は熱くなつて居ても、或は煮立つて居ても、炎炎たる火を消し止めるが如く、或は食物は、縱令穢くとも、飢ゑたる者の衰弱を鎭むるが如きものであります。何となれば、大王よ、世尊は彼の中阿含經の布施品の中に、

「有德の人の、善行には大果の伴ふべきを心に信じ、如法にして利したるものを、無德の人に布施すれば、斯る布施は、常に施者によつて淨めらる。」(一五)

と宣說したまうてあるからです。』

王『於戲、希有なる哉、尊者よ、於戲、未曾有なる哉、大德よ。朕は唯だ單に普通の疑問を貴衲に尋ね

【一五】巻第四十七・瞿曇彌經第九に曰く、「精進施不精進、如法得歡喜心、信有業及果報、此施因施主淨。」（卍藏第十三套第一冊二四四紙表上段）

ましたのに、貴衲は、理由と實例とを擧げて之を說明し、聽者をして、恰も〔涅槃の〕美味なる神酒を飮むが如き、心地を感せしめられました。そは恰も料理人若くは料理人見習のものが、普通の肉豆蔻を取つて、其に種種の材料をあしらひ、王の食事を準備するが如く、尊者よ、貴衲は、朕が唯だ單に普通の疑問をお尋ねしましたのに、理由及び實例を以て其を說明し、聽者をして、涅槃の美味なる神酒を飮むが如く、法味に飽滿さしめられました。』

水中の靈に就て

王『那伽犀那尊者よ、水は火を以て煮らるれば、颺颺として沸沸たる多くの音を發てます。されば、尊者よ、水は生きて居て、戯れに叫ぶのでせうか、それとも煮られる苦痛に堪へかねて、泣き出すのでせうか。』

尊『大王よ、水は生きては居りませぬ。水には靈魂もなければ、情もありませぬ。そが颺颺として沸沸たる音を發てるのは、炎火で熱せられるからであります。』

王『尊者よ、世に「水は生きて居る」といふ根據の上に立ち、冷水を用ゐることを拒み、水を暖めて、種種の食物を微温にして喰べる外道が居ます。而して此等の輩は、「釋子沙門は一の官能ある生物を害

し雪寃せねばなりませぬ。』

尊『大王よ、水は生きては居ませぬ。水には靈魂もなければ、情もありませぬ。そが颺颺として沸沸たる音を發てるのは、炎火で熱せられるからであります。そは滅いるやうな烈しい熱風の襲撃に會はないうちの、池・沼・湖・貯水池・罅隙・裂罅・又は地上の穴の中にある水と同じであります。大王よ、此等の場合に於ける水は、颺颺として沸沸たる音を發てますか。』

王『いいえ、發てませぬ。』

尊『されど若し生きて居るならば、其等の水も亦た音を發てさうなものです。是の故に、大王よ、水には靈もなければ、情もありませぬ。而して颺颺として沸沸たる音を發てるのは、炎火に熱せられるからです。大王よ、此事に就ては又た他の理由があります。大王よ、若し水と米粒とを一緒に鍋に入れて蓋をなし、竈にかけなかつたら、それでも音を發てませうか。』

王『いいえ、發てませぬ、尊者よ。そは動かずに、靜にして居ます。』

尊『されど、大王よ、若し、陛下が、水の入つた鍋を竈の上に置いて點火さるれば、それでも水は動かずに、靜にして居ますか。』

王『いいえ、尊者よ、さうすれば水は動き出し、激動して攪亂され、浪を起して、急に釜の中を上下し、沸沸として「泡の王を」轉がし、更に水泡の花冠を出來します。』

尊『では、大王よ、何故に普通の狀態に於ける水は、動かずに、じつとして居ませうか。』

王『一體、水〔の本性〕は、動かないものですが、熱火の力強き刺激に會うて、泡を立て且つ沸沸たる音を發てるのです。』

尊『されば、大王よ、水には靈もなく情もなく、唯火の强熱に會うて、音を發てるものなることが解りませう。大王よ、此の事に就ては尙ほ他の理由があります。各家庭には、口のついた水甕があり、其の中に水が入れて、口を閉めきつてあるでせう。』

王『然うです、尊者よ。』

尊『では、大王よ、其の水は攪亂され、煮え立ち、動搖し、波を起し、瓶の中を上下し、四方に跳ねまはり、泡を立てて〔玉のやうに〕轉がりますか。』

王『いいえ、其の水は、普通の狀態を保ち、靜にじつとして居ます。』

尊『ですが、大王よ、陛下は、此の事は、大海の水に就ても、眞實だといふことをお聞き及びですか。又それは大いに吼え唸つて、濱邊に打ち寄せ、玉と碎けて飛び起つといふことをお聞き及びですか。』

王『はい、承はりました。加之、朕は、大海の水が、天に向つて、百尺も二百尺も、高く飛び起つのを見ました。』

且つ吼えるでせうか。』
王『尊者よ、大海の水の動き且つ吼えるのは、風の襲擊の力によるのです。が、水壺の中の水の、動きもせず、音も立てないのは、其を震搖するものがないからです。』
尊『煮え立つ水の發てる音も亦た同樣に、强熱の火に會ふからです。大王よ、人は乾いた牛皮を以て、太鼓の口の乾いたのを蓋ひますまいか。』
王『蓋ひますとも、尊者よ。』
尊『では、大王よ、太鼓に何等かの靈があり、又は何等かの情がありますか。』
王『いいえ、ありませぬ。』
尊『では、其の太鼓は、何うして音を出しますか。』
王『そは男なり女なりが、力をいれて磕くからです。』
尊『大王よ、太鼓の音を出すが如く、水は火熱に會ふがために、音を發てます。是の故に、大王よ、陛下は水には靈もなく情もなく、火熱によつて音を發さしめられることが、お解りにならねばなりませぬ。
大王よ、衲は更に陛下に質問して、此の迷惑を十分に打ち碎かねばなりませぬ。大王よ、何んな種類の鍋に入れても、水は熱すれば、音を發てますか、又は或る種の鍋に限りますか。』

王『尊者よ、そは或る種の鍋に限ります。』

尊『然らば、大王よ、陛下は始めの立場を棄てて、今や「水には靈もなければ情もない」といふ衲の立場にお發ちになつて居られます。何となれば「水に靈がある」との立言は、何んな鍋に入れてでも熱しさへすれば、音を發てるといふ場合にのみ正しいからです。水には、恰も生けるが如く、話の能きるものと、話も能きず、生きても居ないものと、二種類ある譯ではありますまい。若し一切の水が生きて居るならば、起水つた大象が鼻で吸ひ込み、塔のやうに高い體に注ぎかける水も、又は口から飲んで直に胃の腑に送る水も、共に象の齒と齒との閒に平たく壓し潰されるとき音を發てるでせう。また彼の百尺もある大船が、數百の貨物を滿載して、海面を走れば水を壓し潰しますから、其時の水も音を發てるでせう。或は身長百由旬もある大鯨は、大海の中に棲み、其の底に沈み、水を飲んで生きて居ますから、不斷に口から水を飲み、且つ噴出せねばなりませぬ。然るに其の水も亦た彼等の鰓と鰓との閒、又は胃の腑の中で、壓し潰されますから、音を發てるでせう。が、是の如き巨大なものから、軋つたり、壓し潰されたりして、苛められても、水は音を發てませぬ。是の故に、大王よ、陛下は「水には靈もなければ、情もない」ことをお了りあそばさねばなりませぬ。』

王『善哉、尊者よ。朕が貴衲に提出しました此の面倒な問題は、的確なる辨別力を以て「見事に」解決

相當の價格・評價・賞讚を受くるが如く、稀代の眞珠の、眞珠商人の手に落ちたるが如く、綺麗な反物の、呉服屋の手に落ちたるが如く、又は赤栴檀の、香具商の手に落ちたるが如く、いま貴衲に提出しました面倒な問題は、相當的確の解説によつて〔見事に〕解決せられました。』

第七章　矛盾問答

障礙に就て

王『那伽犀那尊者よ、世尊は一時、「比丘等よ、(一)妄見を離れたる狀態に心を專にし、且つ之を歡び樂んで生活せよ。」と宣說し給ひました。が、其妄見を離れたる狀態とは何をいふのですか。』

尊『大王よ、須陀洹果は妄見を離れたる狀態です。斯陀含果も阿那含果も、阿羅漢果も妄見を離れたる狀態です。』

王『尊者よ、若し須陀洹果も妄見を離れたる狀態であり、乃至阿羅漢果も妄見のない狀態であるならば、何故に比丘等は、(二)經・應頌・記說・諷頌・自說・如是語・本生・希法・及び獲明等を諷誦し、且つ其等に就て質問を發しますか。何故に彼等は(三)新しき事業・布施及び供養に就て、彼等自らを煩はしますか。』

【一】原語 Papañca は、單に妄見の義のみならず、人の精神的向上を遲滯せしめ、障礙する心的狀態を意味する語である。

【二】經乃至獲明までを小乘の九分敎と云ふ。大乘敎にては此の外に三種を加へて十二分敎と云つて居る。

【三】新らしき事業 (Navakamma) とは、精舍の建立營繕などを言ふ。

施及び供養に就て彼等自らを煩はしますのは、妄見を遠離せる狀態に到達せんがための事業であります。何せなれば、大王よ、天性純潔にして、心に過去の善業によつて遺されたる印象を有する比丘等は、皆悉く一刹那の閒に、妄見を遠離せる狀態〔卽ち阿羅漢〕となることが能きますが、過去の惡業によつて、其の心闇昧なるものは、上述の如き方法によつてのみ、妄見のない狀態〔卽ち阿羅漢〕となることが能きるからであります。

大王よ、或る人は、自ら田地を耕し種を蒔き發育させ、何等の壁や墻も設けずに、自ら精出して收穫することが能きますが、或る他の人は、蒔いたものを發育させんがために、山に往いて木を切り、枝を截り來り、墻を設けてのみ、收穫することが能きます。大王よ、之と同樣に、天性純潔にして、心に過去の善業によつて遺されたる印象を有するものは、恰も墻を設けず收穫することの能きる人のやうに、一刹那の閒に、阿羅漢となることが能きます。然るに其の心、過去の惡業のために闇昧なるものは、恰も墻を作つてから收穫することの能きる人のやうに、上述の方法に依つてのみ、阿羅漢となることが能きます。大王よ、そは高い檬果樹の頂上に一房の果實があるやうなものです。乃ち神通力を有するものは、「苦もなく」其の果實を獲ることが能きますが、神通力のないものは、先づ木を切り葛を切つて梯子を造り、其を架けて木に登り、漸く果實を獲ることが能きます。今それ、大王よ、天性純潔にして、心に過去の善業によつて遺されたる印象を有する者は、恰も神通力を有する人が、

〔苦もなく〕果實を獲るが如く、一刹那の閒に、阿羅漢となることが能きます。が、其の心、過去の惡業のために闇昧なるものは、恰も木を切り葛を斷つて梯子を造り、其を架けて木に登り、漸く果實を獲る人の如く、上述の方法によつてのみ、阿羅漢となることが能きるのであります。

大王よ、天性事業に機敏なるものは、一人で主君の所に行き、直に其の爲さんと欲する事業を決斷しますが、金は有つても、事業に明敏でないものは、其の金で人を雇ひ、雇人の援助によつてのみ事業が能きます。卽ち後者は事業の爲に、〔適當な〕雇人を探し求めねばなりませぬ。今それ、大王よ、天性純潔にして、心に過去の善業によつて遺されたる印象を有するものは、恰も事業に明敏なる人が、己一人で事業を成すが如く、一念一刹那の閒に、六神通を得ることが能きます。然るに其の心、過去の惡業の爲に闇昧なるものは、恰も他人の力をかりて、彼が事業の所期の目的を達するが如く、上述の方法によつてのみ、沙門の目的を實現することが能きます。

大王よ、〔經文の〕讀誦は大いに善いことであります。發問・新しき事業・布施・供養も、亦た大いに善いことであります。此等は各各比丘の所爲たる、精神的目的に取りて大いに善いことであります。大王よ、大臣・兵士・使節・哨兵・護衞兵・從者等の中、其何れかが、王にとりて特に忠勤であり、有用であるかも知れませんが、王が何等かの事業を作さるる時は、彼等は皆王の援助となるでせう。今も丁

よ、若し一切の人が、天性純潔になれば、教師によつて爲さるべきことは何にもありませぬ。が、然し門弟たることの必要なる間は、一人で所期の目的を達することは能きませぬ。大王よ、長老・舍利弗のやうな人ですら——縱令彼は、無數の年月を費して、深く善根を植ゑた爲に、智慧第一の位置に達して居ましたけれども——門弟として教諭訓誡を受けなければ、阿羅漢果を實現することは能きませんでした。是の故に、大王よ、〔聖經を〕聞くことも必要ですし、又それを諷誦することも、或はそれに就て質問することも極めて必要な事柄であります。是の故に經文の聽聞・諷誦・質問等に耽けるものは、竟にそれによつて障礙を遠離し、阿羅漢果に到達するのであります。』

王『善哉、尊者よ、貴衲は、朕をして善く此の面倒な問題を了解せしめられました。御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

俗人の阿羅漢に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、

「俗人にして阿羅漢果に到達せるものは、何人と雖も、皆その日に出家して教團の人となるか、又は般涅槃卽ち寂滅するか、此等二條件中の一つのみが彼に取つて可能である。何せなれば彼は其の日以上を〔俗人のままで〕過ぎ行くことは能きないからだ。」

と言はれる。さて那伽犀那尊者よ、彼もし、其の日、戒師と親教師と衣鉢とを得ることが能きなければ、彼は阿羅漢であるから、自身一人で出家入道するでせうか、或は其の日以上に生き存ふるでせうか、それとも不意に他の阿羅漢が神通力によつて現はれて、彼を出家入道せしむるでせうか、又は其の日寂滅するでせうか。』

尊『大王よ、彼は阿羅漢であるからとて、彼自ら一人で出家入道することは能きませぬ。何せなれば誰でも自分一人で出家入道するものは、竊盜罪に陷るからであります。また彼は其の日以上に生き存ふることは能きませぬ。また他の阿羅漢が出現しやうが、出現せまいが、彼は其の日を限り寂滅せねばなりませぬ。』

王『では、那伽犀那尊者よ、たとひ甚麼方法で到達しても、阿羅漢果の神聖な地位は失はれますねえ。何せなれば生の破滅は、其の中に含まれて居るからです。』

尊『大王よ、缺點のあるのは俗人たるものの境界です。而して阿羅漢果に到達した俗人は、其の境界に缺點あり、且つ境遇それ自らの弱點のために、到達の其の日、出家入道、教團の人となるか、或は寂滅せねばなりませぬ。大王よ、こは阿羅漢果の罪ではなく、俗人の境界に缺點があり、十分に強健でないからであります。

が、それが消化しなければ、胃の腑は[食物の強度と]平均せず、體内の熱が低くなり、且つ弱い人の生命を奪ひ去ります。

大王よ、俗人も亦た是の如く、若し阿羅漢果に到達した時、當人の健康狀態が、それに適應せず平均しなければ、其の事情境遇の弱點のために、彼は其の日直に出家入道して敎團の人となるか、或は寂滅しなければなりません。

大王よ、それは又かの微小なる草の葉のやうなものです。微小なる草の葉は、重い岩を其の上に置けば、極めて軟弱ですから[直に]壓し潰ぶされ亡くなつて了ひます。俗人も亦是の如く、阿羅漢果を成じた時、其の人の事情境遇が、阿羅漢果を支持するに適しないから、其の日直に出家入道して敎團の人となるか、又は寂滅しなければなりません。

また次に、大王よ、それは貧乏で弱くて、生れが下賤で、能力の劣小な人のやうなものです。彼もし宏大なる王國を領するに到らば、到底その品位威嚴を保つことは能きないでせう。俗人も亦た是の如く、若し阿羅漢果を成せば、彼の事情境遇は、[到底]それを支持することは能きませぬ。これ彼が阿羅漢果を成じた當日、出家入道して敎團の人となるか、或は寂滅しなければならぬ理由であります。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。私は御說の通りに信受いたします。』

阿羅漢の缺點に就て

王『那伽犀那尊者よ、阿羅漢にも正念の混亂がありますか。』

尊『大王よ、阿羅漢は、正念の混亂を遠離して居ます。彼等には決して正念の混亂はありませぬ。』

王『されど、尊者よ、阿羅漢は罪に陷ることがありますか。』

尊『はい、あります。』

王『如何なる點に於いてですか。』

尊『菴室の構造の點に於いて、〔異性と〕情交する點に於いて、非時を正時なりと考ふる點に於いて、〔檀越の〕招待を受けて居ながら應招を忘れる時、殘物に非ざる新調物を殘物として受納する點に於いて、彼は罪に陷ります。』

王『されど、尊者よ、貴衲等は、

「罪を犯すものは、不注意か、知らざるか、二者中の孰かによる。」

と言はれる。然らば、阿羅漢が罪を犯すのは、不注意の致す所ですか。』

尊『いいえ、大王よ、決して然うではありませぬ。』

る場合でなければなりませぬ。』

尊『阿羅漢は決して正念を混亂することは能きませぬ。が、それでも尚ほ且つ罪に陷ります。』

王『では其の理由を聞かせて下さい、それは一體何ういふ理由ですか。』

尊『大王よ、世には、世間普通の道德法を破るのと、教團の戒律を破るのと、二種の煩惱があります。世間普通の道德法を破るとは何であるかとならば、十惡業が則ちそれであります。また教團の戒律を破るとは如何なることであるかとならば、世俗の人には不是でなくとも、沙門に取つては不是であり、相應しからざる事をいふのです。其の事は、世尊が、沙門の終身背く可らざる戒法として制定し給ひました。大王よ、非時の食は、世俗の人には不正ではありませんが、勝者の教團の比丘には不正であります。大王よ、木を截り灌木を害するのは、世俗の人の眼には罪ではありませんが、比丘衆に取つては不正であります、水中にて戲れるのは、世俗の人には罪ではありませんが、比丘衆は戲れてはなりませぬ。是に類する多くの事は、世俗の人には不正ではありませんが、勝者の教團の比丘に取りては可けませぬ。これ則ち戒律の破棄であります。さて、大王よ、阿羅漢は、世間普通の道德法を犯して、罪を造ることはありませんが、教團の戒律を犯して、自覺せずに罪に陷ることがあります。萬事を知悉するといふことは阿羅漢の領分でもなく、又た其の力の及ぶ所でもありませぬ。かくて彼は或る男子や女子の、個人の名前、又は其の姓を知らないことがあります。また彼は地上の道路を知らな

いこともあります。されど阿羅漢は皆誰でも、解脫に關することは知つて居ませう。又かの六神通を賦與された阿羅漢は、其の勢力範圍だけのことは知つて居ませう。而かも、大王よ、一切の事を知るのは、一切智たる如來のみであります。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。私は御說の通りに信受いたします。』

世に在らざるものありや

王『那伽犀那尊者よ、〔我等には〕諸佛も見られます。辟支佛も見られます。如來の弟子衆も見られます。轉輪聖王も見られます。一國の王者も見られます。天人も人閒も見られます。其の他、富者も、貧者も、幸福な人も、不幸な人も見られます。我等は女子になつた男子、男子になつた女子をも見ます。世には善惡の業もあり、善惡業の果報を經驗するものもあります。我等は、卵生のもの、濕生のもの、胎生のもの、化生のものあるを見ます。又われ等は無足動物・兩足動物・四足動物・多足動物あるを見ます。我等は、夜叉・羅刹・鳩陀茶・阿修羅・檀那婆・乾闥婆・餓鬼・毘舍闍・緊那羅・摩睺羅伽・龍・須般那・幻師・及び妖術者等を見ます。世には象・馬・牛・水牛・駱駝・驢馬・山羊・羊・鹿・豚・獅子・虎・豹・熊・狼・鬣狗・犬・野狐・及び諸種の鳥等も居ます。また世には金・銀・眞珠・金剛石・硨磲・岩石・珊瑚・ルビ

り、綿あり、麻あり、羊毛もあります。又米もあれば籾もあり、麥もあれば稷もあり〔四〕クドルーサ粒もあれば豆もあり、小麥もあれば油種子及び野豌豆もあります。又木の根・汁・心・皮・葉・花及び實等より採りたる香料もあれば、其他種種のものより作つた香料もあります。吾等は草・葛類・灌木・樹木・藥草・森・河・山・海・魚・龜等は、皆世に在ることを知つて居ます。尊者よ、世の中に何か無いものがありますか、何うぞ其を承りたいです。』

尊『大王よ、世に此等三種のものはありませぬ。何をか三種と謂ふかとならば、謂く、〔一〕意識的なるにせよ、無意識的なるにせよ、老死を免れるものは世に在りませぬ。〔二〕諸行の中に、無常ならざるものはありませぬ。〔三〕第一義の意味に於いて、〔五〕有情所得〔の常住生〕なるものはありませぬ。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通り信受致します。』

【四】Kudrūsa.

【五】Sattūpaladdhi は、有情得有情想などと直譯すべき語であるが、これにては意義が通じ悪い。で、今は假に有情所得の常住性といふ意譯を施し置き、諸先覺の叱正を仰ぐのである。

無爲法に就て

王『那伽犀那尊者よ、世には業生のものもあり、原因生のものもあり、季節生のものもあります。尊者よ、世に業生でもなく、原因生でもなく、季節生でもないものがありますか。』

尊『大王よ、世には、業生でもなく、原因生でもなく、季節生でもないものが二あります。其の二とは

何であるかとならば、謂く、虚空と涅槃とであります。大王よ、此の二は實に業生でもなく、原因生でもなく、季節生でもありませぬ。』

王『尊者よ、世尊の御語を傷づけては可けませぬ。また知らないで疑問に應答しても可けませぬ。』

尊『大王よ、陛下は衲に對して、「世尊の御語を傷づくるなかれ、知らずして質問に應答するなかれ」と仰せられますが、衲の申上げたことを如何いふ意味と思召しますか。』

王『尊者よ、「虚空は、業生でもなく、原因生でもなく、季節生でもない」といふのは尤な道理です。が、涅槃を實現する方法に就ては、世尊が、數百の理由を擧げて、弟子達のために宣説あそばしたではありませんか。然るに貴衲は、「涅槃は原因によつて生ずるものでない」と言はれますね。』

尊『大王よ、世尊は、勿論、吾等のために、數百の理由を擧げて、涅槃を實現する道に這入ることを教へ給ひました。が、決して涅槃を生んだと言はれ得る原因に就て、教へ給うたことはありませぬ。』

王『尊者よ、我等は、貴衲が「世に涅槃を實現する原因はあるが、涅槃を生じ得る原因はない」と言はるるから、闇黒より一層大なる闇黒に、藪林より一層稠密なる藪林に、稠林より一層深い稠林に這入つたのです。若し尊者よ、世に涅槃を實現する原因があるならば、我等は涅槃の起る原因の存することを豫想せねばなりませぬ。そは恰も子には父があるから、其の父には、又その父があるといふこと

と云ふことを豫想せねばならぬやうに。又そは恰も植物には、種子があるから、其の種子は、又その種子から生じたものであるといふことを豫想せねばならぬやうに。若し涅槃を實現する原因があるならば、その從つて起れる原因の存することを豫想せねばなりませぬ。尊者よ、そは恰も若し我等が樹木又は纏繞植物の頂上を見たならば、我等は其の樹木又は纏繞植物に中心の部分、及び根のあることを斷定せねばならぬやうに、若し涅槃を實現する原因があるならば、涅槃の從つて起れる原因の存すべきことを推定せねばなりませぬ。』

尊『大王よ、涅槃は生み出され得るものではありませぬ。是の故に其が從つて起れる原因はないと宣言したのであります。』

王『では、尊者よ、何うぞ朕に其の理由を聞せて下さい。卽ち朕をして、「何故に、涅槃を實現する原因はあるか、涅槃それ自らの從つて起れる原因はないか」といふ道理を承認せしむるために、議論を以て朕を說き伏せて下さい。』

尊『大王よ、では、衲が其の理由を述べますから、心を專にして耳を欹だて、諦かに聽き給へ。大王よ、人は普通の力があれば、此處から諸山の王なる大雪山に登ることが能きませうか。』

王『はい、それは能きます、尊者よ。』

尊『では、人は普通の力があれば、大雪山を此處に將ち來すことが能きませうか。』

王『それは能きませぬ、尊者よ。』

尊『是の故に、大王よ、涅槃を實現する原因はあると言へますが、其の從つて起れる原因があるとは言へませぬ。大王よ、人は、其の普通の力で、船に乘つて大海を渡り、遙か向の濱邊に漕ぎ行くことが能きませうか。』

王『能きますとも、尊者よ。』

尊『されど、大王よ、人は、普通の力を以て、大海の遙か向の濱邊を、此處に將ち來すことが能きませうか。』

王『それは能きませぬ、尊者よ。』

尊『是の故に、大王よ、涅槃を實現する原因はあると言へますが、其の從つて起れる原因があるとは言へませぬ。何となれば涅槃は、諸の性質の結合によつて生じたものではないからです。』

王『尊者よ、そは如何いふ理由ですか。』

尊『大王よ、涅槃は複合的のものではありませぬ。卽ち涅槃を作つたものは何にもありませぬ。大王よ、涅槃に就ては、生出されたとも、生出されないとも、生出され得るとも言ふことは能きませぬ。

眼識で見られるとも、耳識で聞かれるとも、鼻識で嗅がれるとも、舌識で味はれるとも、身識で觸れられるとも言ふことは能きませぬ。』

王『されど、尊者よ、若し涅槃は、生出されたものでもなく、生出されないものでもなく、生出され得るものでもなく、過去のものでもなく、未來のものでもなく、將た又現在のものでもなく、眼識を以つて見られるものでもなく、耳識を以つて聽かれるものでもなく、舌識を以つて味はれるものでもなく、身識を以つて觸れられるものでもないならば、貴衲は、「世に涅槃と云ふやうなものはない、涅槃は非實在の法である」といふことを御示しになるだけではありませんか。』

尊『大王よ、涅槃は實在です。而してそは意識によつて覺知することが能きます。で、彼の聖弟子達は、清淨無垢・美妙・正直なる、無漏の心意を以て、涅槃を見られました。』

王『然らば、尊者よ、涅槃とは何ういふものですか。是の如き涅槃は比喩を以て說明され得ると思ひます。尊者よ、「涅槃は實在である」と云ふ事實が、どれ程、比喩によつて說明され得るかを論證して、朕を說き服せて下さい。』

尊『大王よ、〔世に〕風といふ如なものがありますか。』

王『勿論あります。』

尊『然らば、大王よ、何うぞ其の色及び其の形は何麽ものか、薄いか厚いか、短いか長いかを衲にお

示し下さい。』

王『されど、尊者よ、風は〔眼で〕見ることも能きず、手で摑んだり、絞つたりすることも能きませぬ。が、それでも風は實に存在します。』

尊『大王よ、若し陛下が衲に其の風をお示しになることが能きなければ、〔世に〕其麼ものは在り得ないでせう。』

王『されど、尊者よ、朕は風の存することを知つて居ます。假令私が貴衲に其を示すことは能きないにしても、朕は風の實在なることを信じます。』

尊『大王よ、衲も亦た是の如く、涅槃の色や形を陛下にお示しすることは能きませんが、涅槃の實在なることは確です。』

王『善哉、尊者よ、御説御道理です。朕は御説の通りに信受いたします。』

所生の法に就て

王『那伽犀那尊者よ、何が業生であり、因縁生であり、季節生でありますか。また業生でもなく、因縁生でもなく、季節生でもないものは何ですか。』

及び風、此等は皆悉く季節生です。而して虚空と涅槃の二は、非業生・非因縁生・非季節生です。大王よ、涅槃は、業生といふことも能きず、因縁生といふことも能きず、季節生といふことも能きませぬ。又それは生ぜられたものとも、生ぜられないものとも、生ぜられ得るものとも、過去のものとも、未來のものとも、將た又現在のものとも云ふことは能きませぬ。更に又それは眼識・耳識・鼻識・舌識・身識によつて、覺知されるものとも云ふことは能きませぬ。が、その涅槃は意識によつて見ることが能きます。「是の故に如來の」聖弟子は、清淨無垢にして、美妙正直なる無漏の心意を以て、涅槃を見ることが能きたのであります。』

王『尊者よ、此の愉快なる問題は善く吟味せられ、疑を晴して、確實にせられました。朕の疑惑は、貴衲に商量するや否や、善く芟除せられました。於戲、一切學派の上首中の最上首よ。』

夜叉に就て

王『那伽犀那尊者よ、世に夜叉と云ふやうなものが居りますか。』

尊『居りますとも。』

王『では、尊者よ、彼等は「何日か」其の夜叉たる狀態を脫離いたしますか。』

尊『はい、脫離いたします。』

王『されど、尊者よ、若し果して然りとせば、夜叉の死體を見たものもなく、死體の臭氣を嗅いだものもないのは、［一體］如何いふ理由ですか。』

尊『大王よ、夜叉の死體はあります、而して彼等の死屍から臭氣も發します。彼の惡夜叉の死體は、蠕蟲の形となつて顯はれ、甲蟲の形となつて顯はれ、蟻の形となつて顯はれ、蛾の形となつて顯はれ、蛇の形となつて顯はれ、蠍の形となつて顯はれ、百足の形となつて顯はれ、鳥の形となつて顯はれ、猛獸の形となつて顯はれて居ます。』

王『尊者よ、貴衲の如き賢者でなければ、誰か、此の疑問を解決し得ませうぞ。』

戒律制定の方法に就て

王『那伽犀那尊者よ、那羅陀・檀滿多梨・菴義拉薩・迦毘羅・乾陀羅祇蹉摩・阿都羅・及び弗婆迦闍耶那等は、往昔、醫師の先生でありました。而して此等の諸先生は、疾病の、生起・原因・性質・進展・治癒・治療・及び取扱、卽ち醫書を構成する事柄をば、一も看過することなく、十分に善く知つて居ました。而して彼等は機會を外さず、斯く斯く然か然かの身體には、斯く斯く然か然かの疾病の起るだらうといふことも十分に知つて居ました。然も彼等は一人として一切智者でありませんでした。さて、尊者

よ、如來は、一切智者であるから、佛知見を以て、將來起るべき事件を豫知し給うたでせう。果して

然らば、個個の事件の起つた場合、卽ち已に世間に知れ渡つて騷がしくなり、已に過失が擴がつて大きくなり、既に世人が怒つてから、其の折り其の折りに、戒律を制定する代りに、何故に斯く斯く然か然かの場合には、斯く斯く然か然かの戒律が必要であると云ふことを、前以て決定し、一切の戒律を一時に制定し給ひませんでしたか。』

尊『大王よ、如來は、將來、百五十ケ條の戒律は、皆悉く制定せねばならぬだらうといふことを、十分承知し給ひました。然しながら、大王よ、如來は、若し自分が一時に、百五十ケ條の戒法を制定したら、世人は、「這麼に澤山の戒律を遵らねばならぬか。沙門・喬多摩の教法に隨つて、宗教に入らんは如何に難かしきことよ」と謂つて、心に怖畏を懷くだらう、或は又教團に入らんと欲するものも、入團を見合せるだらう。彼等は我が言を信じまい、而して信念の缺乏のために、苦難の境界に再生するだらう。是の故に事件の起る度每に、卽ち過失が人に知られてから、說法を以て其を解明し、以て一一の戒律を制定しようと考へ給うたのであります。』

王『於戲希有なる哉、尊者よ、未曾有なる哉、尊者よ、如來は實に偉大なる御方であります。大德・那伽犀那よ、御說洵に御道理です。如來は實に善く之を豫知し給ひました。が、若し世人が其麼に澤山の戒律を遵らねばならぬと聞きましたら、畏れ驚いて、一人も勝者の宗教に入るものはなかつたでせう。朕は貴衲の御說の通りに信受いたします。』

太陽の熱に就て

王『那伽犀那尊者よ、太陽は常恆に猛烈に燃えますか、或は其の熱の減退する時がありますか。』

尊『大王よ、太陽は常恆に猛烈に燃え、決して其の熱の減退することはありませぬ。』

王『されど、尊者よ、若し果して然りとせば、太陽の熱が時に或は猛烈であり、時に或は然らざるは、如何いふ理由ですか。』

尊『大王よ、〔世に〕四の妨碍があつて、太陽を遮ぎり、其の熱を減ずるのです。其の所謂四の妨碍とは、雲と、霧と、烟と、蝕とであります。太陽は、此等四の妨碍の何れかによつて遮ぎられる時、其の熱を減ぜられます。』

王『於戯希有なる哉、尊者よ、未曾有なる哉、大德よ。偉大なる光榮を賦與せられたる太陽にすら、妨碍が起ります、況んや他の〔弱小なる〕衆生に於いてをやです。尊者よ、貴衲の如き賢者でなければ、是の如き說明を下すことは能きませぬ。』

季節に就て

王『那伽犀那尊者よ、太陽の熱は、夏よりも冬に於いて、一層嚴烈なるは何故ですか。』

尊『大王よ、夏季には、雲の中に塵埃が起り、空中に於る塵埃が風のために攪き亂され、天に於ける雲が倍加し、非常の勢を以て疾風が吹きます。而して此等のものが群集堆積して、太陽の光を遮ぎるから、夏季に於いては其の熱が減退するのです。然るに、大王よ、冬季に於ては、大地は下に靜かに、雨は上に貯藏せられ、塵埃は鎭まり、花粉は空中を徐かに徘徊し、空には一點の雲もなく、下には微風が颯颯と吹きます。で、此等「太陽の光を遮るもの」は、皆悉く屏息して、太陽の光輝は明かになり、一切の障碍がありませんから、其の熱が增大するのです。大王よ、これ則ち太陽の熱が夏季に於いてよりも、冬季に於いて一層嚴烈なる理由であります。

是の故に、大王よ、太陽は其を遮ぎる妨碍物の無い時は、嚴しく照り輝き、雨其他の妨害物のある時は、嚴しく照り輝くことが能きないのです。』

王『善哉、尊者よ、御說御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

第八章　矛盾問答

(一)吠三多羅王の布施に就て

王『那伽犀那尊者よ、一切の菩薩は、彼等の妻子を布施しますか。それとも、吠三多羅王のみが妻子を布施したのですか。』

尊『大王よ、吠三多羅王ばかりでなく、諸の菩薩は皆その妻子を布施します。』

王『然らば、尊者よ、彼等は彼等自ら滿足して、妻子を布施しますか。』

尊『大王よ、妻は隨喜者でしたが、子供等は、年齢が行かないので、嘆き悲みました。若し彼等が十分に「布施の理由を」了解しましたら、彼等も亦た贊成したでせう。』

王『尊者よ、菩薩が敢て婆羅門の奴僕として、最愛の子供等を布施し給うたのは、實に辛い事であります。而して第二の行爲、卽ち荒繩を以て、まだうら若き最愛の子供等を縛ばり、それから彼等の手は葛を以て黒痣の出來るやうに縛ばられ、婆羅門に曳きずられ行くのを傍觀して居給うたのは、更に

【一】吠舍族種(Vessa)の中にて Antara に生れたから Vessa+antara と名けたのである。

辛い事であります。次に第三の行爲、即ち其子が自ら繩を解いて、彼の跡を追ひかけて來た時、彼は復た繩を以て其の子を縛り、復び〔婆羅門に〕施しましたのは、更に一層辛い事であります。次に第四の行爲、即ち其子供等が泣いて「お父さま、此鬼が私共を喰ひに連れ去ります」と叫ぶのを聞き、「怖はがりなさるな」と言つて、彼等を慰めたのは、〔第三の行爲よりも〕更に一層辛い事であります。次に第五の行爲、即ち王子(二)闍梨が泣きながら、父の足下に打ち倒れ、「お父さま、〔我が妹〕(三)カンハーギナーだけは許して下さい、私が彼の鬼と一緒に參ります、私は彼に喰べられませう」と言つて嘆願した時、それすら許諾することの能きなかつたのは、〔第四よりも〕更に一層辛い事であります。又次に尊者よ、第六の行爲、即ち其子闍梨が悲嘆の涙にくれて、「お父さま、卿は石の如な心をお持ちですか。悲慘の運命の我等が、晝尙ほ闇き化物屋敷の如な、藪の中に鬼に連れられて往くのに見返りもなさらない」と言ふのを聞き、憐愍の情に動かされず、毅然として居たのは、〔第五よりも〕一層更に辛い事であります。而も此の第七の行爲、即ち彼の子供等が、歩一歩、名狀す可らざる悲慘の運命に連れられ行くのに、袖手傍觀して其心を傷めず、泰然として居たのは、〔第六よりも〕更に一層辛い事であります。人は他を苦しめて、自ら功德を得んと求め、果して何の得る所がありませうか、彼は寧ろ彼自らを布施すべきではありますまいか。』

尊『大王よ、菩薩の名聲が、十千世界に通り、廣く人天の間に響き渡り、諸天の讚歎する所となつたことと、阿修羅・伽樓羅・那伽・夜叉等が次第に菩薩の光榮を傳へて、今日の我等の集會に到來し、此處に

【二】Jāli.
【三】Kaṇhaginā.

坐して其の施與の缺點を誹謗し咎責し、それが善いか惡いかを討議しつつあるのは、菩薩が彼れほど困難なことを爲されたからであります。されど、大王よ、其高い名聲は、聰明悧發、細心明哲なる諸菩薩の十德を顯彰して居ます。十德とは何であるかとならば、(一)貪慾を遠離すること、(二)執著を離ること、(三)獻身的なること、(四)世事を捨離すること、(五)復び下賤の境遇に逆轉せざること、(六)精緻なること、(七)偉大なること、(八)不可思議なること、(九)未曾有なること、(十)佛境界の無比なることであります。大王よ、布施の名聲が、菩薩の大德を顯彰したのは、此の點に就てであります。』

王『尊者よ、他の苦痛を齎らす方法を以って、布施を行ふやうな人が、果して善樂の果報を受け、天上に轉生するでせうか。』

尊『然うです、大王よ。』

王『尊者よ、何うぞ其の理由を聞かせて下さい。』

尊『大王よ、此處に一人の有德にして、性質の尊高なる痲痺患者、若くは蹇、又は病氣に罹れる沙門、或は婆羅門が居ます。然るに功德を積まんと願へる人が居て、沙門を馬車に乘せ、彼が行かんと欲する場所に連れて往つたと假定せんに、其の人は、此のために善樂の果報を受け、天上道に轉生することが能きませうか。』

陸の乘物、水上にありては水上の乘物、天上に於ては、諸天の乘物、地上にありては人の乘物を得、生生世世の間、それに相應し、それに適應するもの、彼がために生じ、相當の善樂、また彼がために起り、善道より善道を經歷し、其の行爲の功力によりて、神通の乘物に乘り、以て願ふ所の目的、卽ち涅槃の都に到達するでせう。』

尊『されば大王よ、他の苦を齎らす底の方法にて、布施を行へる人が、善樂の果報を受け、天上道に轉生するのですね。卽ち牛車に苦を見せて、自ら是の如きの善樂に到達するのですね。

大王よ、此の事に就て今一の理由をお聞き遊ばせ。大王よ、或る君主が正當の稅金を人民から取り立て、而して一の命令を發して、其の金を以て布施を惠んだと假定せんに、其の君主は、布施を行つた爲に、善樂の果報を受けるでせうか、又その布施は、彼をして天上「の安樂」世界に轉生せしむるでせうか。』

王『然うですとも、尊者よ。君主は、其のために、數百千の功德を受けるでせう。而して彼は王中の王となり、諸天中の最上天となり、梵天中の最高梵となり、沙門中の最上沙門となり、婆羅門中の至上婆羅門となり、阿羅漢中の最上阿羅漢となるでせう。』

尊『されば、大王よ、他の苦を齎らす底の方法によりて惠まれた布施が、善樂の果報を生み、天上「の安樂」世界へ導く手引となるのですね。「換言せば」君主は、人民を困しめて得た稅金を、布施として

惠んで、是の如き非常なる名聲と光榮とを享受するのですね。』

王『されど、尊者よ、吠三多羅王によつて惠まれたものは、法外の布施でした。即ち彼は其の妻を他人に惠み、最愛の子供等を、婆羅門の奴僕として惠みました。〔是の如き〕法外の布施は、世の賢者の非難し、叱責する所であります。例へば、尊者よ、過重の荷物を積めば、車の軸は折れ、船は沈没するやうなものです。又喰ひ過ぎた人には、食物は不必要であり、雨が降り過せば、却て作物を敗滅せしめ、餘り惠み過せば破産の基となり、餘り暑さが過れば熱病の本となり、貪慾が過れば狂氣となり、瞋恚が過れば罪人となり、愚昧に過ぎて罪に陷り、吝貪に過ぎて盜賊の手に取られ、不必要の恐怖のために滅ぼされ、餘り流れ込み過れば河が溢れ、風が強過れば雷が墮ち、火勢が餘りに强ければ粥が煮え過ぎ、餘りに漂泊する人は長命が能きないやうなものです。是の如く、尊者よ、法外の布施は、世の賢者の非難し叱責する所であります。而して吠三多羅王の布施は、法外ですから、其より善報を豫期することは能きませぬ。』

尊『大王よ、非常に布施することは世の賢者の讃歎し、稱讃し、賞揚する所であります。凡そ自ら惠に遇ふが如く、何物でも布施として惠むものは、非常の慈善家として、世に名聲を博します。大王よ、人が非常の功德によりて天樹の根本を捕ふれば、其の瞬間に、腕一本の間隔を以て立てる人すら彼を見ること能はざるが如く、又先天的に非常の力を有する藥草が、全く苦痛を除き、疾病を癒すが如く、

また火の非常なる熱のために燃え、而して水の非常なる寒冷のために其の火を消すが如く、また彼の蓮華の非常に潔白なるがため、水にも泥にも穢されざるが如く、また彼の寶石の本來有する非常なる功力によつて、願望を滿足せしむるが如く、又彼の金剛石の非常に鋭利なるがため、石や眞珠及び水晶すら貫き透すが如く、また彼の大地の非常に大なるがため、人・蛇・野獸・鳥・水・岩・山及び樹木等を支持するが如く、又かの大海の非常に廣大なるがため、決して一ぱいに溢れざるが如く、須彌山の非常に重きがため、嚴乎として動かざるが如く、空閒の非常に廣きがため、無限なるが如く、太陽の非常に赫奕たるがため、闇黑の驅逐せらるるが如く、獅子の素性の偉大なるがため、怖畏を遠離せるが如く、力士の力の偉大なるがため、容易くその敵手を倒すが如く、王の非常なる善功德によりて、世を統治するが如く、比丘の德戒の非常に優越せるがため、龍・夜叉・人・魔等の尊重恭敬を受くるが如く、佛陀の至上無上なるがため、比ぶべきものなきが如く、是の如く非常なる布施は、世の賢者の讚美し、稱讚し、賞揚する所となり、恰も其の惠に己自ら遇へるが如く、布施を行へば、天下に尊き慈善家たるの名聲を博します。大王よ、彼の吠三多羅王は、十千世界を通じて、讚美せられ、賞揚せられ、稱讚せられ、崇められ、名聲を博して居ます。而して彼は其の非常なる布施のために、今や諸天中の最上天、卽ち佛陀となられたのであります。

さて、大王よ、世に供養に應ずる底の資格ある者があるのに、何か布施として、差控へらるべきも

の、與ふ可らざるものがありますか。』

王『尊者よ、世に布施として不可ないものが十種あります。其の十種とは謂く、(一)酒を布施すること、(二)女を布施すること、(三)水牛を布施すること、(四)暗示的の繪畫を布施すること、(五)武器を布施すること、(六)毒を布施すること、(七)鎖を布施すること、(八)家禽を布施すること、(九)豚を布施すること、(十)不正なる度量器を布施することとであります。尊者よ、此等は皆悉く世人の布施として惡むことを不可とする所であります。而して若し此等の布施を行ふものは、惡道に轉生沈淪せねばなりませぬ。』

尊『大王よ、衲は嘉納されない布施の種類をお尋ねしたのではありませぬ。衲は、若し供養に應ずる底の資格ある人が出席して居る場合に、布施を惠まずに、差控へねばならぬものがありますかと御尋ねしたのであります。』

王『いいえ、尊者よ、其麼ものはありませぬ。信念が人の心に起れば、或者は供養に應ずる資格ある人に食物を與へ、或者は寢具を布施し、或者は織物を布施し、或者は住所を布施し、或者は敷物及び衣を布施し、或者は下婢下男を布施し、或者は田畑又は邸宅を布施し、或者は二足動物又は四足動物を布施し、或者は百千の金を布施し、或者は王國を布施し、或者は自らの生命をすら布施します。』

尊『されば、大王よ、若し或者が彼等の生命すら布施するならば、陛下は、何故に施主者中の王なる吠

三多羅が其の妻子を[illegible]

に、其の子を質に入れ、若しくは賣ることを許される一般の常習、卽ち公認せられた慣習があるではありませんか。』

王『然うです、それはあります。』

尊『大王よ、彼の吠三多羅が、一切智者の智見を得なんだことを苦にし惱んで、精神的財寶の代りに、其の妻子を入質し賣却したのは、此の理由によるのであります。それ故に彼は他の人が惠んだものを惠み、他の人が爲したことを爲したのであります。然るに、大王よ、陛下は何故に是の如く嚴しく、施主中の王なる吠三多羅を攻擊あそばしますか。』

王『尊者よ、朕は彼が布施したことを非難するのではありませぬ。ただ彼が乞士から其の子女を乞はれた時、彼等を布施する代りに、寧ろ彼自らを布施しなかつたかを責むるのであります。』

尊『大王よ、彼もし其の妻子を施與せよと乞はれた時、彼自らを惠まば、不正の行を爲したこととなりませう。何となれば乞はれるものは、何でも惠まれねばならぬからであります。大王よ、人あり、水を齎らせと賴んだと假定せんに、若し何人かが食物を齎らしましたら、其の人は彼が要求したことを爲てやつたと云へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、さうは言へませぬ。人は初め齎らしくれと賴まれたものを與へてやつてこそ、彼が要求したことを爲てやつたと言へます。』

答『大王よ、婆羅門が、吠三多羅王に其の妻子を貰ひたいと要求した時、彼は卽ち其妻子を與へたのです。で、大王よ、若し婆羅門が、吠三多羅の身體を貰ひたいと要求したら、彼は卽ち其身體を犧牲にして、「自我の愛著の爲に」戰慄したり、汚されたりする如なことはなく、「敢然として」彼自らの身體を施與し喜捨しただらうと思ひます。大王よ、人あり、吠三多羅王の所に來り、「汝、我が奴僕たれ」と言つたら、彼は卽ち其身を施與し喜捨して、決して苦痛を感せなかつただらうと思ひます。

大王よ、恰も料理されたる肉塊の、多くの人に分配されるが如く、又は樹の果實の、數多の鳥の群によりて分配せらるるが如く、吠三多羅王の身は、數多のものに分配さる可きでありました。何故なれば彼は、「我は是の如き行によつて、佛の境界に到達し得るのだ」と獨語したからであります。大王よ、喩へば人の財なくして財を欲しがり、財を求め步くに、凸凹の道・槍の道・棒の道をも行き、水路陸路を通つて商賣をなし、身も、口も、意も、揃つて富の獲得に專注するが如く、佛位の寶財を渴仰し、一切智の知見を體現せんと熱望せる施主の王、吠三多羅は誰でも乞ふものがあれば、財産でも、穀物でも、奴婢でも、奴僕でも、乘用の動物でも、車でも、「何でも彼でも」彼が有するものは、妻でも子でも或は彼自らでも、皆悉く施與して正等正覺を欣求したのであります。大王よ、大臣が印章を欲しがり、印章のためには、家でも、資産でも、穀物でも、金でも銀でも、何でも彼でも犧牲にし

り、〔場合によつては〕其の生命すらも、他に施與して、正等正覺を欣求したのであります。

尚ほ、大王よ、施主者中の王、吠三多羅は、「予が婆羅門に奉仕せねばならぬことは、彼が予に乞ひ求むるものを、几帳面に彼に與ふることである」と考へました。是の故に彼は其の妻子を婆羅門に與へたのです。大王よ、彼が妻子を婆羅門に與へたのは、彼等を嫌つたからでもなく、また彼等を見ざらんと欲したからでもなく、また彼等を邪魔物だと考へたからでもなく、また彼等を支へ得ないと考へたからでもなく、また彼に取つて不愉快なものを除去せんと欲したからでもありませぬ。誰彼が渇仰する一切智の寶物、卽ち一切智者の知見を體得せんが爲の故に、彼の宏大無邊なる布施、卽ち彼自らの如く親む、最大至愛の妻子を施與したのであります。是の故に世尊は、(四)若用藏の中に、

「われ兩兒の憎きにあらず、妃マッディーの憎きにあらず、ただ佛の境界は我が切愛する所、故に我が愛するものを與へしのみ。」

と宣ひました。大王よ、爾の時、吠三多羅王は、其の妻子を施與して、草の菴に入り、其處に端坐しました。而して妻子を思ふ愛のために惱まされて、强烈なる悲憂が起り、心は熱し、呼吸は逼つて、鼻孔より出入しきれず、口から呼吸するやうになり、又その目から血の淚が玉をなして迸りました。大王よ、彼の吠三多羅王が、其の妻子を婆羅門に施與し、其の實行を破るまいと云ふ決心には、是の如き悲痛が伴つたのです。されど、大王よ、彼が斯くまでして、妻子を婆羅門に施與したには、二の

【四】巴利語若用藏一の九の五三頌に出づ。

理由があります。其の二の理由とは、一には、布施の實行を遮られまいと云ふことと、二には、其の子は彼と共に草の根や木の實を食つて生活せしめんよりも、婆羅門に與へたら、其新主人によつて、却つて苦行的生活を免れしめ得べしと考へたからであります。何となれば、大王よ、吠三多羅王は、何人も我が兒等を、奴僕として支へることは能きまい。彼等の祖父が、彼等を救ひ出すだらう。さすれば彼等は、必らずや復た自分に戻つて來るに相違ないと云ふことを知つて居たからです。これ彼が其の子を婆羅門に施與した二の理由であります。

尚ほまた、大王よ、吠三多羅王は、「此の婆羅門は、疲勞し、老衰し、耄碌し、衰弱し、［健康すでに］害はれて、杖に凭りすがつて居る。彼が此の世をお暇するのも最早遠いことではあるまい。彼の功德は僅少である。彼は到底我が兒を奴僕として支ふることは能きまい」といふことを知つて居ました。大王よ、普通の人の力で、月又は太陽の如く、偉大にして有力なるものを、籠か箱かの中に入れて、其の光を奪ひ、皿として彼等を用ひることが能きませうか。』

王『いいえ、勿論それは能きませぬ。』

尊『大王よ、世間に取りて、其の威光の赫赫たること日月の如き吠三多羅王の兒等を、奴僕として使役することの能きるものは、何人もありませぬ。

大王よ、吠三多羅王の

由があります。大王よ、轉輪聖王の、厚さ四尺、周圍は車輪の轂の如く、光輝あり且つ美しく、八面ともに善く磨かれたる摩尼寶珠は、何人も其を布に包んで籠の中に入れ、而して鋏を研ぐ磨石として使用することは能きますまい。大王よ、世には何人も、轉輪聖王の摩尼寶珠の如き、吠三多羅王の兒等を奴僕として使役し得るものはありませぬ。

大王よ、何人も吠三多羅王の兒等を奴僕として、使役し能はざることに就ては、尚ほそれ以上の理由があります。大王よ、高さ八尺、長さも胴の周も九尺、柔和純白にして美しく、且つ其の身體の三箇處に、起水の表章を示して居る象王、ウポーサタは、何人も小皿または扇を以て、其を蓋ふこと能はず、或は犢の如く、其を牛小屋に入るること能はざるが如く、吠三多羅王の兒等も亦た、天下一人の能く彼等を奴僕として使役し得るものはありませぬ。

大王よ、何人も吠三多羅王の兒等を、奴僕として使役し能はざることに就ては、まだそれ以上の理由があります。大王よ、大海は、其の長さも幅も深さも量りきれないほど廣大です。而して其を渡ることも、其の深さを測ることも不可能です。そこで何人も其を閉ぢ塞ぎ、又は一の渡し場のやうに使用することは能きませぬ。今それ、世間から大海の如きものと評價されて居る吠三多羅王の兒等を奴僕として使役することは何人にも能きない事業であります。

大王よ、何人も吠三多羅王の兒等を、奴僕として使役し能はざることに就ては、尚ほそれ以上の理

由があります。諸山の王、大雪山は、高さ五由旬、周圍三千由旬にして、八の連山と、四千の峰あり、五百の河の源泉にして、大動物の群居する所となり、數多の香料の產出地にして、數百の魔法草に富み、[地球の]中心に雲の如く聳えて居ます。今それ、大王よ、世間から諸山の王、大雪山の如きものとして評價せられて居る吠三多羅王の兒等を、奴僕として使役し得るものは何人もありませぬ。

大王よ、此の事に就ては、更に又それ以上の理由があります。山の頂上に燃ゆる大花火は、夜間の闇黑の場合に、遠方から見られます。今それ吠三多羅王は、人間の中に於いて、是の如く有名です。されば何人も斯く著名な人の兒等を、奴僕として使役することが能きるものはありませぬ。

猶ほ大雪山中に於ける那伽樹の花咲く時、軟風颯颯と吹き初むれば、花の香氣は、十乃至十二由旬[の廣さ]に浮動するが如く、吠三多羅王の名聲も亦た廣く世間に響き渡り、彼が馥郁たる正義の芳香は、諸天・阿修羅・伽樓羅・乾闥婆・夜叉・羅刹・摩睺羅伽・緊那羅・因陀羅等の住處を通過して、最高の阿迦尼吒天に到るまで、數千由旬[の廣さ]に浮動します。是の故に何人も、彼の兒等を奴僕として使役し得るものはありませぬ。

而して、大王よ、王子闍梨殿下は、其の父吠三多羅王によつて、「可愛の子よ、卿の祖父が、婆羅門に財寶を與へて、卿を身請せんとする時、彼をして一千オンスの黃金を以て卿を買ひ戾さしめよ。而

象と、一百の馬と、一百の牛と、一百の水牛と、及び一百オンスの黃金とを以て、彼女を買ひ戻さしめよ。可愛の子よ、若し卿の祖父が、何にも拂はず、命令または力まかせに婆羅門の手から、卿等を引き離して連れ去らうとしたら、卿は祖父の言に聽從せず、婆羅門の臣下として住りなさい」と敎へられて居ました。之れ則ち彼が其の子を送り出さんとする時の敎訓であります。而して王子闍梨殿下は其の敎に隨つて往き、其の祖父に乞はれた時、

「お祖父さま、お父さまが、黃金一千オンスの價あるものとして、此の婆羅門に私を與へました。而してまた象一百頭の價あるものとして、〔我が妹〕カンハーヂナーを與へました」と告げました。』

王『尊者よ、此の困難なる問題は善く解決せられ、異端の網は一寸一寸に引き裂かれました。貴納は敵手の論議を征服し、貴納自らの敎義を明かにし、〔經文の〕文字を善く說明し、且つ其の精神を見事に發揮なさいました。』

苦行に就て

王『那伽犀那尊者よ、一切の菩薩は、みな苦行時代を經たまひましたか、又は喬多摩のみ、菩薩として苦行時代を經たまひましたか。』

尊『大王よ、一切の菩薩が、みな苦行時代を經たまうたのではなく、喬多摩のみ、菩薩として苦行時代を經たまひました。』

王『尊者よ、若し然らば一の菩薩と他の菩薩とに、相異がないと云ふのは、正當ではありませぬ。』

尊『大王よ、一菩薩と他菩薩とには四種の相異があります。其の四種とは謂く、〔菩薩等の生れ給へる〕家庭の相異と、時代の相異と、壽命の相異と、形量の相異とです。大王よ、此等四種の點に於て、一菩薩と他菩薩とに相異があります。が、然し、諸佛の間には何等の相異もありませぬ。卽ち諸佛は、色に於いても、戒に於いても、正定に於いても、智慧の力に於いても、解脱に於いても、解脱知見に於いても、四無畏に於いても、如來の十力に於いても、六の特殊の智慧に於いても、佛陀の十四の智慧に於いても、佛陀の十八不共法に於いても、何等の相異もありませぬ。何となれば、諸佛は、佛陀の特性を具有し給ふ點に於いて、皆悉く同一平等であるからです。』

王『されど、尊者よ、若し然らば喬多摩菩薩のみが、苦行あそばしたのは、如何いふ理由ですか。』

尊『大王よ、喬多摩菩薩は、未だ智識の熟せざる時、世を辭し〔て出家し〕たまひました。で、彼が苦行を爲されたのは、未熟の智識を成熟せしめんがためでありました。』

王『それでは、尊者よ、喬多摩は智慧成熟せず、菩提成熟せざるに、何故に世を辭せられたのですか。彼は何故に先づ其の智慧を成熟せしめ、圓熟の智慧を以て、出家しなかつたのですか。』

章『大王よ、菩薩は、その殿中に於ける婦人等の、揃ひも揃つて、不規律無作法な有樣をなせるを見て、それから嫌氣を催し、心中に嫌忌不滿足の念が起つたのです、而して渠が其を見て心に不滿足の念の充ち滿てる時、魔に隨侍せる天人が、今や彼の不滿足の心を驅り立つべき時だと思ひ、空中に顯はれて、「尊大人よ、尊大人よ、卿、憂惱する勿れ。これより第七日に於いて、一千の輻と、完全無缺なる輪鐵と、轂とを有する天の輪寶、卿に現はるべし。而して又地上を歩き、空中を飛行する寶物も、皆揃つて、卿に來投すべし。かくて卿の口より發する命令の言語は、四大洲と、及び二千の附屬島とを動すべけん。而して卿は、千人以上の子息と、敵の軍隊を打ち破る底の大力量ある英雄とを持ち、此等の子息は、七寶の主なる卿を圍繞して、世を統治せん」と申しました。されど此等の語は、恰も長い日に熱して、十分に白熱せる鐵の棒が、彼の耳の穴に入れるが如く、菩薩の耳に響いたのです。而して彼が生來既に感ぜる悲歎の心は、天の言辭によつて、一層心痛怖畏の情緒を增したのです。そは恰も炎炎と燃えて居る爐に、更に其に新しい薪を投ずれば、層一層猛烈に燃ゆるが如く、又かの自然に濕氣ある大地の、既に草木より滴る水によつて卑濕の地となつて居るのに、若し沛然たる大雨が降れば、更に一層、泥濘の地となるが如く、菩薩も亦た既に[世の]悲痛を感じて居られたのに、天人の言辭によつて、一層心痛怖畏の情緒を增し給ひました。』

王『されど、尊者よ、若し天の輪寶が、第七日に、菩薩に現はれたならば、渠は其のために、自己の目

的より逆轉したでせうか、いかがでせう。』

尊『大王よ、輪寶は、第七日に、菩薩に現はれませんでした。何せなれば、そは彼の天人が菩薩を誘惑せんがために告げた「一時の」嘘言だつたからです。縱令それが出現したにせよ、菩薩は決して「其の目的を」抛擲したまふやうなことはありませぬ。何となれば、大王よ、菩薩は、無常・苦・無我の道理を確乎と捕捉し、且つ生存に戀著するの情を撲滅して居たまうたからであります。大王よ、水は無熱惱池より恆河に流れ、恆河より大洋に注ぎ、大洋より龍宮の口に流れ込みます。が、其の水は復た龍宮の口から大洋に、大洋から恆河に、恆河から無熱惱地に逆流しますか。』

王『いいえ、決して其麼ことはありませぬ。』

尊『大王よ、菩薩も亦是の如く、最後の生の爲に、過去無量劫の閒、功を積み德を累ねて、今や最後の生に到達し、佛陀の智慧を圓成して、六年の閒に、覺者・一切智者・世界に於ける無上者となり給ひました。然るに、大王よ、佛陀が、輪寶の爲の故に、復び逆轉し給ふやうなことがありませうか。』

王『いいえ、尊者よ、然ういふことはありますまい。』

尊『大王よ、縱令大地は、其の諸峰及び諸連山と共に顚覆することありとも、然も菩薩は一切智を逮得しないで、逆轉し給ふやうなことはありませぬ。また縱令恆河の水が逆に流るることありとも、而も菩薩は一切智を逮得しない內に、逆轉し給ふやうなことはありませぬ。縱令大海の水は、牛の足跡

に於ける水の如く、乾き盡くることありとするも、而も菩薩は正等覺に遠達しないで、逆轉し給ふやうなことはありませぬ。縱令諸山の王たる須彌山は、數百千の斷片に分散することありとするも、而も菩薩は正等覺に遠達しないで、逆轉し給ふやうなことはありませぬ。縱令日月は諸星と共に、土塊の如く地上に落つることありとも、而も菩薩は正等覺に遠達しないで、逆轉し給ふやうなことはありませぬ。縱令、廣き天の敷物の如く捲かるることありとも、而も菩薩は正等覺に遠達しないで、逆轉し給ふやうなことはありませぬ。何故なれば渠は一切の繫縛を遠離し給うたからであります。』

王『尊者よ、世に幾何の繫縛がありますか。』

尊『大王よ、世に人を縛して出家せしめず、且つ人を逆轉せしむる十種の繫縛があります。其の十種の繫縛とは何であるか。大王よ、母は往往にして繫縛です、而して父も妻も子供も、親戚も、朋友も、富も、安樂な收入も、酋長たることも、及び五欲も、世間に於ける繫縛です。大王よ、此等は世間普通の繫縛にして、人はそのために縛せられて、世を辭せず、又逆轉せしめられます。而も菩薩は此等の繫縛を全く破却し給ひました。是故に、大王よ、菩薩の逆轉し給ふことは決してありませぬ。』

王『尊者よ、若し菩薩の心に嫌厭の情起り、智未だ熟せず、覺未だ熟せざる時、天の語によりて出離を志求せらるとせば、今まで爲された苦行に何の功がありますか。智を熟するに至らしめたのは、一に喫飯「の功」に因るではありませんか。』

尊『大王よ、世間から輕んぜられ、賤められ、恥辱なりと考へられ、見下られ、譴責せられ、罵られ、愛されない者が十種あります。其十種とは何であるか。謂く、夫なき婦人、力なき者、朋友なき者、多食漢、不名譽の家庭に住する者、罪人の友たる者、財産を蕩盡したる者、行爲の賤しき者、職業なき者、目的なき者、これ則ち世間から賤められ、輕んぜられ、侮辱せられ、見下られ、譴責せられ、罵られ、愛されない十種の人人であります。大王よ、菩薩が、「我は、職業なく、目的なきものとして、人天の閒に非難を招かざるべし。我は行業の主・行業の師・行業の主權を握るものとして精進勇猛なるべし」と云ふ觀念を起し給うたのは、此等「十種の」事柄を憶ひ起されたからであります。大王よ、菩薩は、其智慧を成熟せしむる時、此精神を以て苦行を行ひ給うたのであります。』

王『尊者よ、菩薩は苦行に從事し給ひつつ自ら「烈しき苦行は、普通の人の力を超越する智見——即ち尊く且つ正當なる智慧——より生ずる、特殊の能力を實現する方法ではない。菩提を成ずるの道は、まだ他にあるだらうか」と獨語し給ひました。されば其の時、菩薩は、「菩提を成ずる」道に就て、其の心を困惱せられ給うたでせうか。』

尊『大王よ、「世に」人心を弱め、心をして諸漏を盡さんとの正定三昧に住する能はざらしむるものが、二十五種あります。其の二十五法とは何であるかとならば、謂く、瞋恚・怨恨・僞善・自負・猜忌・貪婪・

び不滿足、これ則ち人心を弱め、諸漏を盡さんとの正定三昧を鈍からしむる二十五の法であります。大王よ、此等二十五法のうち、菩薩の身體を襲うたのは、飢と渴との二法でした。身體既に襲はれましたから、心も隨つて捕へられ、正しく諸漏の滅盡に專心なることが能きなかつたのであります。

さて、大王よ、菩薩は、過去無量劫の閒、生を代へ身を代へて、四聖諦の了解に從事し給ひました。されば四聖諦の了解を生ずる渠が最後の生たる今生この世で、〔佛果圓成の〕道に關して、心に何等かの困惱のあり得やう筈はありませぬ。是故に菩薩の心には、「佛陀の智慧に逮達する何等か他の方法がありはしまいか」など云ふ考は毛頭起りませんでした。大王よ、菩薩は、それ以前既に生後僅かに一ヶ月にして、其の父、釋迦が耕作に從事して居ました時、閻浮樹の冷しい木蔭の精舍に置かれ、結跏趺坐して永へに一切の世慾を斷じ、一切の不善法を遠離して、有尋・有伺・離生喜樂の狀態、卽ち初禪に入り、次に二禪・三禪・四禪に入り給ひました。』

王『善哉、尊者よ、朕は御說の通りに信受いたします。菩薩が苦行あそばしましたのは、其の智慧の成熟せられるまでのことでありました。』

善は惡よりも强し

王『那伽犀那尊者よ、善と惡とは、孰がより强いですか。』

尊『大王よ、善は強く、惡は強くありませぬ。』

王『朕は「善は惡よりも強い」といふことは信じ得ませぬ。何せなれば此の世には、生物を殺す人・與へられざるものを取る人・情慾のために不善を行ずる人・嘘をつく人・全村に於いて劫賊を行ふ人・路賊・騙見・詐僞を行ふ人が居ります。而して此等の人人は、其の犯した罪に隨つて、或は其の手を切られ、或は足、或は手足、或は耳、或は鼻、或は耳と鼻とを切られ、或は粥鍋に入れて煮られ、或は蛇の如く皮剝がれ、或は手を炬火にせられ、或は煮沸せる油を注ぎかけられ、或は犬に喰はされ、或は生きながら杙もて刺し殺され、或は劍を以て頭を刎ねられます。而して彼等の或者は一夜罪を犯して、其の夜の内に果報を受け、或者は夜の閒に罪を犯して、翌日其の果報を受け、或は一日罪を犯して、其の日の内に罪せられ、或者は晝の閒に罪を犯して、夜分に罪せられ、或者は二日も三日も經つてから罪せられます。が、彼等は皆現見の世界に在りては、不公平な果報を受くるのです。尊者よ、一人二人三人四人五人乃至百人千人の比丘の爲に、食物を準備し供養したる人が、現在この世で、「其の果報として」富・名聲・又は幸福を享樂したものがありますか、「一人もありますまい。」また正義の生活をなし、或は齋日の行持を遵守せる人にして、此の世で、其の果報を受けたものがありますか。』

尊『大王よ、布施を行ひ、戒法を持ち、齋日の行持を遵守して、人閒的身體の儘ですら、諸天の都の光榮を得たものが四人あります。』

王『尊者よ、それは誰誰ですか。』

尊『そは(五)滿陀多王と、(六)尼彌王と、(七)沙提那王と、音樂家(八)倶智那の四人者です。』

王『尊者よ、此は我等の實見する能はざる、數千年前の出來事です。で、若し能きる事なら、世尊の時代に起つた、若干の實例を擧げて下さい。』

尊『大王よ、今この時代に在りては、奴僕紛那迦は、長老・舍利弗に、一食の供養を營んで、即日、出納掛の顯職を得、而して今や彼は紛那迦出納掛として、世の中に知られて居ます。又かの(九)喬波羅の母后は、貧窮な一農夫の女なりしが、其頭髮を三十二錢に賣り、其を以て、長老(一〇)摩訶迦多延那、及び彼が七人の仲間に一食の供養をなして、即日(一一)優提那王の第一妃となりました。又かの優婆夷(一二)須畢耶は、病僧の爲に、彼女の股の肉を割き取り、肉湯を立てて入れました。而も翌日は其股の傷が閉塞し皮膚も出來ました。又かの皇后(一三)摩梨迦は、前夜の粥を世尊に施與して、即日(一四)喬薩羅王の第一皇后となりました。又かの華鬘製造人(一五)須末那は、世尊に八束の素馨の花を獻上して、即日大いに繁盛の身となりました。又かの婆羅門(一六)翳迦蹉多は、世尊に衣を施與したのみで、即日、大臣の一椅子を得ました。大王よ、此等は皆その世に生存中に、富又は光榮を享受した人人であります。』

【五】Mandhātā.
【六】Nimi.
【七】Sādhīna.
【八】Guttila.
【九】Gopāla.
【一〇】Mahā Kaccāyana.
【一一】Udena.
【一二】Suppiyā.
【一三】Mallikā.
【一四】Kosala.
【一五】Sumana.
【一六】Eka sāṭaka.

王『では、尊者よ、貴衲は、探し求めて、此の六個の場合のみを見出したのですか。』

尊『然うです、大王よ。』

王『では、尊者よ、惡の方が善よりも強く、善は惡よりも弱わいのです。何せなれば、朕は一日の中に、生き乍ら殺されて其の罪を贖ふものが、十人もあるのを見たからです。而して〔探したら〕三十人でも四十人でも乃至百人でも千人でもあるでせう。然かのみならず、尊者よ、曾て難陀王宮に奉仕せる軍人に、跋陀羅蹉羅と云ふものが居て、彼は戰陀羅笈多王に對して、戰爭を挑みました。而して其の戰爭には八十の首なき死體があつた。蓋し彼等は其處に大燔祭の催されし時、首なき死體が立ち、亂心して、戰場を躍り廻はつた。而して其の人達は皆その惡業の果報により殺戮されて了つたと云ふからであります。是の故に尊者よ、私は「惡の方が善よりも强い」と云ふのです。而して、尊者よ、貴衲は〔喬多摩佛陀の時より已來〕一切の布施の中で、喬薩羅王の行へる布施に雙ぶべきものはないといふことを御聞き及びですか。』

尊『はい、聞きました、大王よ。』

王『されど、尊者よ、彼の喬薩羅王は、是の如き無比の大布施を營んで、現世に於いて、〔其の善功德の結果として〕富か、光榮か、又は幸福かを受けられましたか。』

王『だから、尊者よ、其の場合に於いては、確に惡の方が善よりも强いのです。』

章『大王よ、惡は其の卑賤下劣のために、迅速に消え去ります。が、善は其の尊高偉大なるがため、消え失せるには長い時閒を要します。此の事は、隱喩を以て、今一層吟味し〔明かにし〕ませう。大王よ、西方の國に於ける（一七）クムダバンディカーと云ふ一種の穀類は、そが迅速に成熟して、一ヶ月の中に收穫されるので、（一八）マーサルといふ名を得て居ますが、米はそが成熟するまでは五ヶ月乃至六ヶ月を要します。で、大王よ、クムダバンディカーと米との相異・區別は何ですか。』

王『尊者よ、一は劣等の植物で、他は高等植物です。米は王の食卓に上り、クムダバンディカーは奴婢奴隷等の食物となるのです。』

章『大王よ、善と惡との場合も亦た是の如く、惡は其の卑賤下劣のために迅速に消え去り、善は其の尊高偉大なるがため、消え失せるまでには長い時閒を要します。』

王『されど、尊者よ、世人は最も迅速に其の目的に達するものを、最も有力なものと思つて居ます。是の故に惡は善よりも一層强いものでなければなりませぬ。尊者よ、戰場にては、最も迅速に其の腋下に敵の首を取り、或は彼等を捕虜にして、主君の前に曳きずり來ることの能きる强力漢が、世閒から最も優れた英勇豪傑と見らるるが如く、又かの投槍を迅速に拔き取つて、傷口を癒やすことの能きる

【一七】Kumudabhaṇḍikā.
【一八】Māsalu.

外科醫を、世は最も上手な醫者と思ふが如く、或は大速力を以て勘定し、非常に迅速に其の結果を示すことの能きる計算人を、最も上手な計算者と思ふが如く、又かの最も速く敵手を倒し、彼をして仰向きに平伏せしむることの能きる力士を、最も有力の勇士と思ふが如く、是の如く、尊者よ、善惡二者の中、最も迅速に其の結果を將來するものを、世人は、より有力なものと思つて居ます。』

尊『大王よ、善惡兩者の果報は、次の生に於いて明かにされるのです。が、惡は其の罪のために、今生この世で直に明かにされます。古昔の刹帝利族即ち統治者は、「生物を殺したものは、何人でも罰に處し、與へられざるものを取つたもの、邪婬を行うたもの、嘘をついたもの、村人を殺せるもの、路賊をなせるもの、詐僞騙見を行うた者は罰せらるべし」といふ法令を制定しました。而して幾度も取り調べた結果に隨つて、判決を下し、それぞれの刑を申し渡しました。されど、大王よ、世に布施を惠んだもの、戒法を守つたもの、齋日の行持をなせるもの等には、富を與へ、名譽を與ふべしと云ふ法令を制定したものがありますか。而して又彼等を取り調べて、恰も泥棒を笞うち或は縛ばるが如く、それぞれ相應に富を與へ名譽を與へますか。』

王『いいえ、其麼ことは致しませぬ。』

尊『されば、大王よ、若し然ういふ風にしたら、善も亦た此の世で、明かにせらるるでせう。が、統治

者は、決して施與者に就て是の如き取り調べもせず、彼等に富や名譽を與ふることも致さないから、此の世では明かにならないのです。而して、大王よ、これ善は次の世で、より多くの果報を受けるのに、惡は此の世で明かにせられる理由であります。是の故に善が惡よりも遙に强大有力なることは、業報の將來する破滅によつて明ります。』

王『善哉、尊者よ、貴衲の如き賢哲によつてのみ、此の困難な問題は解決されるのです。尊者よ、貴衲は朕が世間的意義に於いて提出した問題を、出世間的意義によつて明かになさいました。』

死人の供養に就て

王『那伽犀那尊者よ、諸の施主は其布施を惠む時、「此の布施が、これこれの御利益があるやうに」と言つて、特に其祖先に獻納致します。さて其死人は、此の布施から、何等かの御利益を得ますか。』

尊『大王よ、或者は利益を得ますが、或者は得ませぬ。』

王『では、尊者よ、誰が利益を得、誰が利益を得ないのですか。』

尊『大王よ、地獄に轉生せるものは「利益を」得ませぬ。また天上に再生せるものと、嘔吐物を喰べて生活する餓鬼・飢ゑ且つ渇せる餓鬼・渇のために痩せ衰へてる餓鬼、此の三種の餓鬼は「利益を」得ませぬ。が、他の布施によつて生活するものと、憶念を有するものとは「利益を」得ます。』

王『然らば、尊者よ、彼等が利益を得なければ、施主の惠む布施は、無駄になり無結果に了りますね。』

尊『いいえ、大王よ、それは無駄でもなく、無結果でもなく、施主自ら其の利益となるのです。』

王『では、尊者よ、實例を擧げて、朕を說き伏せられよ。』

尊『大王よ、人あり、魚・肉・酒・飯・菓子等を準備し携へて、其親戚の家庭を訪問したと假定せんに、若し先方が其進物を受納しなかつたならば、其進物は全く無駄なもので、無結果になりませうか。』

王『いいえ、尊者よ、進物は其の所持者に還ります。』

尊『大王よ、施主も亦た是の如く、彼等自ら其の利益を蒙ります。大王よ、人あり、一の奧の院に這入つたと假定せんに、若し其の正面に出口がなければ、如何にして彼は出て來ませうか。』

王『もと這入つた口から出て來ます。』

尊『大王よ、施主も亦た是の如く、彼等自ら利益を得ます。』

王『尊者よ、では、それは然うとして置きませう。御說御道理ですから、朕は御說の通り信受いたします。我曹は貴衲の議論に盾つきは致しませぬ。が、尊者よ、若し施主の惠む布施が、死人の或者を利益し、且つ彼等は布施の結果を收めますならば、生物を殺し、血を飲む底の殘酷な心を有する人が、殺人罪を犯し、或は他をして戰慄せしむべき〔惡〕行をなして、「我が此の行爲の結果をして、死せる祖先に受け取らしめよ」と言つて、死人に獻納しましたら、其の結果は彼等に感應するでせうか。』

王『されど、尊者よ、善業の結果は彼等に感應し、惡業のそれは感應しないのは、如何なる理由、如何なる道理ですか。』

尊『大王よ、こは實に問はるべき問題ではありませぬ。大王よ、答を得やうと云ふお考ならば、這麼莫迦な問題は提起し給ふな。陛下は、この次は、空間は何故に無限であるか、恆河は何故に逆に流れないか、人や鳥は何故に兩足で、動物は何故に四足であるかとでも御問ひ遊ばす所存でせう。』

王『尊者よ、朕は問題を提起して、貴衲を困らせ、不快な感を起させやうといふ所存ではありませぬ、唯疑惑を芟除せんがためにお尋ねするのです。尊者よ、世には左手利きの人や、斜視眼の人が居ります。朕が此の問題を提起したのは、「此等の不幸な奴等は、何故に善化する機會を持ち得まいか」と考へたからのことです。』

尊『大王よ、惡業は、其を行はず、又は承諾しない人に、分配され得るものではありませぬ。人は水道によつて、長い距離から、水を運ぶことが能きます。が、彼等は同樣の方法によつて、堅い岩の大きな山を移すことが能きませうか。』

王『いいえ、勿論それは能きませぬ。』

尊『大王よ、今それ業の場合も亦是の如く、善業の分配は能きますが、惡業の分配は能きませぬ。人は油を注いでランプに點火しますが、同じランプに、水を注いで點火することが能きませうか。』

王『いいえ、勿論できませぬ。』
尊『大王よ、今それ業の場合も亦た是の如く、善業の分配は能きますが、惡業のそれは能きませぬ。大王よ、農夫は、其の穀物を成熟せしめんがため、貯水池から水を引くことは能きますが、彼は同樣の目的のために、海から水を引くことが能きませうか。』
王『いいえ、勿論できませぬ。』
尊『是の如く、大王よ、善業の分配は能きますが、惡業の分配は能きませぬ。』
王『されど、尊者よ、そは何故なるか、道理を以て朕を說き伏せて下さい。朕は盲目でもなく、不注意でもありませんから、拜聽すれば、會得することが能きます。』
尊『大王よ、惡は劣小ですが、善は優大であります。劣小なる惡は行爲者のみに影響し、優大なる善は人間天上の全世界を覆ひます。』
王『尊者よ、比喩を以て、〔此の理を〕明かにして下さい。』
尊『大王よ、微少なる一滴の水が、大地に滴つたと假定せんに、其の水は十由旬乃至十二由旬の廣さに流れるでせうか。』
王『勿論流れませぬ。其の水は、滴つた地面の一點を濕ほすだけです。』

王『そはほんの一滴の水であるからであります。』

尊『大王よ、惡も亦た是の如く、極めて微小なるものです。而して其は微小なるの故を以て、行爲者のみに影響し、他に分配することは能きませぬ。されど、大王よ、若し大きな雨雲が起り、地球の表面を滿足せしむるだけの雨を降らしたら、その水は凡ての方面を覆ふでせうか。』

王『勿論さうです、尊者よ。大雷雨は窪地・沼・池・溝・裂罅・罅隙・湖・貯水池・井戸又は蓮池などを滿します。而して其の水は十由旬も十二由旬もの廣さを覆ふでせう。』

尊『されど、大王よ、そは如何いふ理由ですか。』

王『そは雨が大きいからです。』

尊『大王よ、善も亦た是の如く大きいです。而して其の大量なるの故を以て、善は人天の間に分配され得るのであります。』

王『尊者よ、惡は何故に是の如く劣小であり、善は何故に是の如く優大ですか。』

尊『大王よ、此の世に於いて、布施を惠み、正義の生活をなし、齋日の業を爲し、喜び、正に悅び、樂み、欣び、幸福なるものは、法喜禪悅の情を以て、其の心を滿たし、其の善は愈愈益益豐になるのです。例せば、大王よ、一方には清水湧き出で、他方には其の水流れ出づる、清澄透明の水ある池のやうなものです。卽ち一方から流れ出づれば、他方から湧き出すのですから、決して涸渇することはあ

りませぬ。善も亦た是の如く愈愈益益豐になるのです。大王よ、若し人あり、一百年の間でも、彼が行ふ所の善の功德を他人に讓り渡さんとするものは、彼が讓り渡せば讓り渡すほど、其の善は成長し、而して彼が讓り渡さんと欲する人に其の善功德を分配することが能きます。大王よ、これ〔善惡二者のうちで〕何故に善が〔惡よりも〕より大きいかといふ理由であります。

大王よ、惡を爲すものは、〔其の心〕悔恨の情を以て滿されます。而して心に悔恨の情あるものは、〔其の爲せる所の惡の想より〕脫するを得ず、無理に仰むいて、顚覆し、〔心に〕平安なく、憂へ悲み、〔煩惱の焔を〕燃やし、希望を拋擲し、〔元氣を〕消耗し、神氣沮喪より救はるる能はず、宛然憂愁のために捕へられたやうなものです。大王よ、大きな洲あり、枯渇せる河床に落ちた一滴の水は、瞬時も溜つて居らず、直ちに其の落ちた地點に於いて呑み盡さるるが如く、惡を作せる人も亦た悔恨の情に征服せられ、心に悔恨の情滿ち充つるが故に、己が爲せる所の惡の想より脫するを得ず、無理に仰むいて顚覆し、〔心に〕平安なく、憂へ惱み、〔胸に煩惱の焔を〕燃やし、希望を失ひ、〔元氣を〕消耗して、神氣の沮喪より救はるる能はず、宛然、憂愁のために呑み盡されたやうになるのです。大王よ、これ惡の劣小なる所以であります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

夢に就て

王『那伽犀那尊者よ、此の世に於ける男子も女子も、善き夢、また惡き夢、曾て見たものに關する夢、曾て見たこともないものに關する夢、曾て自ら爲た事に關する夢、曾て自ら爲たことのないものに關する夢、目前にある近い事に關する夢、遠隔の地にあるものに關する夢、種種の形、樣樣の色の夢などを見ます。一體、人が夢と稱するものの正體は何であり、夢を見るものは何人ですか。』

尊『大王よ、夢といふものは心意の徑路に近づき來る暗示です。而して〔下記〕六種の人が夢を見ます。卽ち(一)風氣の氣分の人は夢を見、(二)膽汁質の人は夢を見、(三)痰性の人は夢を見、(四)天人の感化によりて夢を見、(五)彼自らの習慣の感化によつて夢を見、(六)前兆の狀態に於いて夢を見ます。大王よ、是等のうち、前兆の狀態に於いて見る夢は眞實で、他は皆虛妄であります。』

王『尊者よ、前兆の狀態に於いて夢を見るとは、一體何をいふのですか。卽ち、その前兆を探すため、彼自らの心を派遣し送り出すのですか。又は其の人の心の徑路に隨つて、前兆自らが現はれ來るのですか。或は何人かが彼に其の事を話すのですか。』

尊『大王よ、彼自らの心が、前兆を探し歩くのでもなく、何人かが彼に其事を話すのでもなく、前兆それ自らが、心の徑路に隨つて現はれ來るのです。大王よ、そは恰も鏡の如なものです。卽ち鏡は映象

を探し求めるため、何處かへ行くのでもなく、又は何人かが其映象を持參して、鏡の前に來るのでもなく、反射される物體それ自らが、何處からか其鏡の反射力の及ぶ地位まで近づき來るのです。』

王『尊者よ、では、夢を見る同じ心意が、「斯く斯く然か然かの吉祥なる、若くは怖るべき結果を將來するだらう」といふことを知るのですか。』

尊『いいえ、大王よ、其の同じ心意が知るのではありませぬ。〔夢に〕前兆が現はれた後で、其の夢を見た人が、之を他人に話します。すると、其を聞いたものが、夢の意味を說明するのです。』

王『では、尊者よ、今朕のために比喩を擧げて、其を說明して下さい。』

尊『大王よ、そは人の身體の上に生起つて、彼が利けるか、損するか、名譽を得るか、不名譽を買ふか、讃められるか、謗られるか、樂なるか苦なるかを表示する、丘疹(腫物)又は皮膚の噴き出物のやうなものです。大王よ、其の場合に於いて、彼の丘疹は、「我等は斯く斯く然か然かの出來事を將ち來すのだ」といふことを知つて、〔人の體上に〕現はれ來るのですか。』

王『いいえ、尊者よ、決して然うではありませぬ。が、其の腫物の出來た場處に關しては、占相家が、其を觀察して、「斯く斯く然か然かの結果になるだらう」といふ判斷を下すのです。』

尊『大王よ、それと同樣に、夢を見た同じ心意が、「斯く斯く然か然かの安全なる、若くは怖るべき結

話せば、他人が其の意味を「判斷し」說明するのです。』
王『では、尊者よ、人が夢見る時は、覺めて居るのですか、眠つて居るのですか。』
尊『大王よ、醒めて居るのでもなく、眠つて居るのでもありませぬ。人の睡眠が輕くなり、而も未だ十分に意識的にならない時、卽ち其の「睡眠と覺醒との」中間に於いて夢を見るのです。大王よ、人が熟睡する時は、彼の心は其の本家鄕に還つたのです。是の如くにして閉ぢ込められた心は働きませぬ。而して活動を阻まれた心は善惡を知らず、善惡を知らないものは夢を見ることは能きませぬ。是の故に夢を見るのは、其の心が働いて居る時です。大王よ、朦朧・闇黑にして、「一點の」光明なければ、縱令最も善く磨かれた鏡にすら、影は寫らないやうに、人の熟睡して其の心が本家鄕に還り、「全く」閉め鎖ざされた場合には、「何等の」活動も致しませぬ。而して活動しない心は、善惡を知らず、善惡を知らざるものは、夢を見ることはありませぬ。何ぜなれば、人が夢を見るのは、其の心の働いて居る時であるからであります。大王よ、身體を鏡とし、闇黑を睡眠とし、光明を心として御覽なさい。復た、大王よ、太陽の光輝は、霧に鎖さるれば、見られざるが如く、又その光線は縱令あつても、霧を透して光を投ぐること能はざるが如く、又その光線は、光明なき「闇黑の」處にては、其の作用を現はさざるが如く、人も亦た熟睡して、彼の心が、其の本家鄕に還り、活動作用を休止すれば、「何等の」活動もありませぬ。而して働かない心は善惡を知らず、善惡を知らざるものは、夢見ることはあ

りませぬ。何せなれば人が夢を見るのは、其の心の活動して居る時であるからです。大王よ、身體を太陽とし、霧の覆障を睡眠とし、光線を心として御覽あそばせ。

大王よ、縱令身體は在つても、二種の事情境遇の下には、心が働かなくなります。卽ち人の熟睡して、彼の心がその本家鄕に還つた時と、人が恍惚たる狀態に墮した時とです。大王よ、覺醒せる人の心は興奮され、開放せられ、透明であり、自由であり、隨つて是の人の心には、〔夢に見る〕前兆は起りませぬ。大王よ、開け放しで、明らさまで、包み隱しなき人は隱匿所に避くることなきが如く、天的の意志は、覺醒せる人には顯はれませぬ。是の故に覺醒せる人は夢を見ませぬ。復た大王よ、生活の方法も惡く、行爲も惡き比丘、及び罪あり、橫柄で、邪で、不精勵なる人の友たる比丘には、菩提に達する性質を見出すことの能きないやうに、覺醒せる人には天的の志向は顯はれませぬ。是の故に覺醒せる人は夢を見ないのであります。』

王『尊者よ、睡眠には、初・中・終がありますか。』

尊『あります、大王よ。』

王『では、尊者よ、孰が初、孰が中、孰が終ですか。』

尊『大王よ、身體が力なく、鈍く、不活潑になつて、壓迫されるやうな、蔽ひ包まれるやうな心地のする、これ睡眠の初です。輕き猿眠りの場合には、未だ人は其取留りのな[illegible]

睡眠の中です。次に心が其れ自らの本家郷に入つた時、これ即ち睡眠の終です。大王よ、人が夢見るのは、睡眠の中、即ち猿眠りの狀態にある時です。大王よ、人が信念を確立し、菩提に於いて動搖せず、思想を〔一點に〕集注して自ら制し、〔生存〕競爭の音沙汰なき深山に沈み、靈妙な問題の解決に沒頭すれば、彼は極めて寂靜平安にして、其の問題の意義に通ずることを得るが如く、人は集注力あり、睡眠にも落ちず、而も昏昏として猿眠の狀態にある時、夢を夢見るのです。是の故に、大王よ、〔生存〕競爭の音沙汰は、覺醒狀態に當り、幽靜なる山は、猿眠りに當るのです。而して人は、〔生存〕競爭の音沙汰を避けて、熟睡に落ちず、中間の狀態にある時、靈妙なる問題の意義に通達するが如く、覺醒せる人が、睡に落ちず、而も昏昏として猿眠の狀態にある時夢を見るのであります。』

王『善哉、尊者よ、朕は御說の通りに信受いたします。』

非時の死に就て

王『那伽犀那尊者よ、衆生の死するのは、皆悉く時至つて死するのですか、また或者は〔時至らざるに〕非時の死を遂ぐるのですか。』

尊『大王よ、世には時至つて死する者もあり、〔時至らざるに〕非時の死を遂ぐる者もあります。』

王『然らば、尊者よ、彼等の中で誰が時至つて死し、彼等の中で誰が非時の死を遂ぐるのですか。』

尊『大王よ、陛下は、曾て檬果樹・閻浮樹、若くは他の實の生る樹の果實の中には、成熟してから落ちるのと、成熟しないで落ちるのとあるのを御覽になつたことがありますか。』

王『はい、あります。』

尊『では、大王よ、其等の落ちる果實は、皆悉く時至つて落ちますか、それとも、或者は「時至らざるに」非時に落ちますか。』

王『尊者よ、其の落つるや、善く成熟して落つる果實は、時至つて落ちるのであります。が、蟲に惱まされた爲に落ち、長い棒で打たれた爲に落ち、風によつて吹き落さるるが爲に落ち、若しくは腐つた爲に落ちる果實は、皆すべて「時至らざるに」非時に落つるのです。』

尊『大王よ、人も亦た是の如く、年老いた結果として死するのは、時至つての死であります。が、他に又「自らなせる惡業の」怕るべき業報の結果として死するものもあり、法外に旅行して死するものもあり、法外に働き過ぎて死するものもあります。』

王『尊者よ、業のために死するもの、或は旅行のために死するもの、或は働き過ぎた爲に死するもの、或は年老いて死するもの、彼等は皆時が來て死ぬのです。而して胎中にて死するものすら、其の定命ですから、時が來て死ぬのです。又かの產室に在つて死するものも、若くは「生後」一ケ月にして死す

時が來て死するものと言はねばなりませぬ。是の故に、尊者よ、世に〔時至らずして〕非時の死を遂ぐるものはありませぬ、そは死するものは皆定命で死するからであります。』

尊『大王よ、世には、まだ定命を有つて居ながら、非時の死を遂ぐるものが七種あります。其の七種とは何であるか。謂く、(一)食物を得ることが能きないで、内部が消耗し飢餓にせまられる人。(二)水を得ることが能きず、心臓が乾燥し盡して渇する人。(三)蛇に嚙まれて、激しい毒のために元氣が消耗し、快癒することの能きない人。(四)自ら毒を飲んで、其全肢體が燃えて居るのに、藥を得ることの能きない人。(五)炎炎と燃ゆる火中に墮ちて居ながら、消火の方法を講ずることの能きない人。(六)水に墮ちて、確乎した立ち場所を見出すことの能きない人。(七)投槍のために負傷して、恙あるのに外科醫を呼ぶことの能きない人。此等七種の人は、まだ定命を有つて居ながら、非時の死を遂ぐるのです。是の故に衲は此等七種の人人の死を、非時の死なりと宣言いたします。大王よ、八種〔の原因〕によつて、人は死にます。即ち人は、(一)風氣の氣分の過多により、(二)膽汁の過多により、(三)痰氣の過多により、(四)是等三種の不幸なる氣分の結合により、(五)陽氣の變化により、(六)保護の不平均により、(七)醫士の治療により、(八)業の異熟果によつて死ぬのです。而して、大王よ、此等八種の〔原因の〕中、業の異熟果によつての死のみは、〔所謂〕時が來て死ぬので、他〔の七種〕は、皆非時の死であります。何となれば、

「飢餓と渇と毒と、〔毒蛇に〕嚙まれると、火と水と、殺されるとによりて、人は非時の死を致す、

風氣と膽汁氣と痰氣と、是等三の結合と、熱と不平均と治療とによりて、人は非時の死を致す」と宣說されてあるからです。また、大王よ、前生に於て行つた惡業の異熟果によつて、死ぬものもあります。而して其等のうち、他人を餓ゑさせたものは何人でも、數百千年の間、自ら飢餓・飢饉・疲勞憔悴・心の衰弱・枯渇・消耗・熱・及び身體內部の火によつて苦しめられてから、老若を問はず、彼自らも亦飢餓のために死にます。而して其死も亦彼に取つては、正當の時至つての死であります。

また、渴のために、他人を死なしめたものは、何人でも、數百千年の長きに亙りて、渴し、瘦せ細り、及び苦難のために憔悴せる餓鬼となつてから、老若を問はず、彼自らも亦た渴のために死にます。而して此の死も亦た彼に取つては、當然の時至つての死であります。

また他人を蛇に嚙ませて死せしめたものは、何人でも、生を代へ身を代へて、數百千年の長きに亙りて絕えず王蛇若くは黑蛇のために嚙まれてから、老若を問はず、彼自らも亦た終に蛇のために嚙み殺されます。而して此の死も亦た彼に取つては、當然の時至つての死であります。

また、毒を以て他人を死なしめたものは、何人でも、數百千年の長きに亙り、肢體を燒かれ、身を破られ、及び死屍より發出する臭氣に苦しめられてから、老若を問はず、彼自らも亦た毒を以て殺されます。而して此の死も亦た彼に取つては、當然の時至つての死であります。

と燃ゆる木炭の一の塊から、他の木炭の塊に〔移され〕、肢體は燒き且苛責せられてから、老若を問はず、彼自らも亦燒き殺されます。而して此死も亦彼に取つては、當然の時至つての死であります。

また他人を溺死せしめたものは何人でも、數百千年の長きに亙り、不具者・零落漢・破壞されたもの・肢體の弱きもの、心に心痛の絶えないものとして苦しまされてから、老若を問はず、亦た溺死せしめられるのです。而して此の死も亦た彼に取つては、當然の時至つての死であります。

また劍を以て他人を斬り殺したものは何人でも、數百千年の長きに亙り、截斷・負傷・喘氣・憔悴の苦に遭はされ、若くは武器を以て滅ぼされ、老若を問はず、自らも亦た劍を以て斬り殺されるのです。而して此の死も亦た彼に取つては、當然の時至つての死であります。』

王『尊者よ、貴衲が御說きなさいました非時の死に就て、其の理由を聞かせて下さい。』

尊『大王よ、炎炎たる大火の上に、乾草・棒・枝及び木の葉などを積み重ぬれば、其の火は食物を消耗して、燃料の盡きるまで、決して消えないでせう。是の如き火は、何等の災殃もなく、不慮の事變もなく、消ゆべき時が來て消えたものと言へます。大王よ、人も亦た是の如く、數千日の間〔この世に〕生き存らへて、年を老り、何等の災殃もなく、不慮の厄にも遭はず、竟に老死したとすれば、此の人は〔所謂〕時が來て死んだものと言へます。されど、大王よ、若し其の炎炎たる大火の上に、乾草・棒・枝及び木の葉などの積み重ねられた時、一天俄にかき曇り、沛然として大雨を注ぎかけて、其の火を消

して了つたなら、そは消ゆべき時が來て消えたものと言へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、然うは言へませぬ。』

尊『されば、大王よ、第二の火と第一の火とは、其性質上、何等か異なる所がありはしませんか。』

王『尊者よ、第二の火は、雨の襲撃を蒙り、時至らずして消えて了つたのです。』

尊『大王よ、人も亦た是の如く、或る疾病の襲來する所となり、——卽ち或は風氣の過多のため、或は膽汁の過多のため、或は痰氣の過多のため、或は此等三種の氣分の結合のため、若くは陽氣の變化のため、又は保護の不平均のため、或は治療法の〔不完全な〕ため、或は饑、或は渴、或は火、或は水、また或は劍のために——非時の死を遂げます。大王よ、これ〔世に〕非時の死といふものの存する所以であります。

また、大王よ、そは大きな暴風雨の雲が、天の一方に起つて、大雨を降して、溪谷を充たし、平原に滿たしむるやうなものです。而して其の雲は、何等の障碍もなく、不慮の事變もなく、〔十分に〕雨を降したと言へませう。大王よ、人も亦是の如く、若し長い閒生存して、年を老り、何等の災殃もなく、不慮の厄にも遭はず、竟に老死したとすれば、此の人は〔所謂〕時が來て死んだものと言へます。然るに若し大豪雨の雲が、天の一方に起つて居ても、風のために吹き散らされたら、其の雲は、時至

王『いいえ、尊者よ、然うは言へませぬ。』

尊『されば、大王よ、第二の雲と第一の雲とは、其の性質上、何處に異つた所がありますか。』

王『尊者よ、第二の雲は、旋風の襲擊を受けて、時至らずして消え散つて了つたのです。』

尊『大王よ、或る種の疾病の襲來する所となり、時至らずして死する者も、亦た丁度そのやうなものです。卽ち或は風氣の過多のため、或は膽汁の過多のため、或は痰氣の過多のため、或は此等三者の氣分の結合のため、或は陽氣の變化のため、或は保護の不平均のため、或は治療法の〔不備の〕ため、或は飢、或は渴、或は火、或は水、若くは劍のために死にます。大王よ、これ卽ち〔世に〕非時の死ありと言ふ所以であります。

復た、大王よ、猛烈なる毒蛇の、赫怒して人を嚙み、何等の障碍もなく、不慮の事變も起らず、毒を以て其の人を殺したやうなものです。で、此の毒は、何等の障碍もなく、不慮の事變も起らず、其の目的を達したと言へませう。大王よ、人もし長命して、其の閒に何等の災殃もなく、不慮の厄にも遭はず、竟に老死を遂げたとすれば、其の人も亦た是の如く、彼は何等の災殃にも遭はず、又不慮の厄にも遭はず、彼が命の最終點に達し、時至つて死んだものと言へます。然るに若し蛇まじなひが居て、嚙まれて苦んで居る人に藥を與へた爲に、毒を消すことが能きたとすれば、其の毒は時が來て取り去られたものと言へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、然うは言へませぬ。』

尊『されば、大王よ、第二の毒と第一の毒とは、其の性質上、何處に異つた所がありますか。』

王『尊者よ、第二の毒は藥が廻はつた爲に、未だ其目的を達せないで、驅逐されて了つたのです。』

尊『大王よ、或る種の疾病の襲來する所となり、未だ時至らざるに、死するものも亦た丁度其麼ものです。卽ち或は風氣の過多のため、或は膽汁の過多のため、或は痰氣の過多のため、或は是等三者の結合のため、或は陽氣の變化のため、或は保護の不平均のため、或は治療法の〔不備の〕ため、或は飢、或は渴、或は火、或は水、若くは劍のために死ぬものがあります。大王よ、これ〔世に〕非時の死ありといふ所以であります。

復た、大王よ、そは弓手の放つた箭のやうなものです。若し其の箭が、自然に通るべき路を通つて、的まで達したとすれば、其の箭は何等の故障にも妨害にも遭はず、其の的に達したと言へます。大王よ、長命して、其の閒に何等の災殃もなく、不慮の厄にも遭はず、老死を遂ぐる人も亦た丁度その樣なものです。然るに若し弓手が箭を放つた刹那に、何人かが其を掌握したとすれば、其の箭は、射られた目的の路を通つて、的に達したと言へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、然うは言へませぬ。』

王『尊者よ、第二の箭は中間の捕獲者の爲に、箭の進路を阻止されたのです。』

尊『大王よ、或る種の疾病の襲來する所となり、時至らざるに非時の死を遂ぐるものも亦た丁度そのやうなものです。即ち或は風氣の過多のため、或は膽汁の過多のため、或は痰氣の過多のため、若くは是等三者の結合のため、或は陽氣の變化のため、或は保護の不平均のため、或は治療法の「不備の」ため、或は飢、或は渴、或は火、或は水、若くは劍のために死ぬものがあります。大王よ、これ「世に」非時の死ありと言ふ所以であります。

復た、大王よ、そは恰も人が眞鍮製の器を打ち鳴らすやうなものです。即ち其の器は人に打たれた爲に音響を發します。而して其の音響は、そが自然の性質として、通るべき路を通つて、最終の點まで響きます。大王よ、此の場合、其の音響は、何等の故障もなく、何等の妨害もなく、其の目的地に達したと言へませう。大王よ、人が長命して、其間何等の災殃もなく、また不慮の厄にも遭はず、老死を遂ぐるのも亦た丁度その樣なものです。即ち彼は何等の故障もなく、又何等の障害もなく、「所謂」死に時が來て死んだと言へます。然るに若し人が眞鍮製の器を打ち鳴らして、音響を發せしむるや否や、或者が來て、まだ其の音響が遠方に達せないうちに、其の器に觸つたとすれば、彼が觸つた爲に音響は止むでせう。大王よ、此の場合、音響は、そが自然の性質として、通るべき路を通つて、最後の地點まで達したと言へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、然うは言へませぬ。』

尊『されど、大王よ、第二の音響と第一の音響とは、其の性質上、何處に異つた所がありますか。』

王『尊者よ、第二の音響は、觸つて邪魔された爲に、其の音聲を壓止されたのです。』

尊『或種の疾病の襲來する所となり、時未だ至らざるに、非時の死を遂ぐるものも亦た丁度その樣なものです。卽ち或は風氣の過多のため、或は膽汁の過多のため、或は痰氣の過多のため、或は是等三者の結合のため、又は陽氣の變化のため、或は保護の不平均のため、或は治療法の[不備の]ため、或は飢、或は渴、或は火、或は水、又或は劍のために死ぬものがあります。大王よ、これ卽ち[世に]不時の死ありと言ふ所以であります。

復た、大王よ、そは穀物の種子が、畑に善く生えて、多量の雨が降り注いだ爲に、善く實のり、收穫期まで安全に長らへたやうなものです。而して其穀物は、何等の故障もなく、何等の障害もなく、そが當然來るべき時期まで到達したと言へませう。大王よ、人が長命して、其間何等の災殃もなく、不慮の厄にも遭はず、老死を遂ぐるのも亦た是の如く、當然の死に時が來て死んだと言へます。されど若し其の穀物が、畑に善く生えてから、水の不足のために枯死したとすれば、そは當然來るべき時期まで到達したと言へませうか。』

王『いいえ、尊者よ、然うは言へませぬ。』

尊『大王よ、或る種の疾病の襲來する所となり、時未だ至らざるに非時の死を遂ぐるものも、亦た恰度その如くです。卽ち或は風氣の過多なるがため、或は膽汁の過多なるがため、或は痰氣の過多なるがため、若くは是等三者の結合のため、或は陽氣の變化のため、或は保護の不平均のため、或は治療法の〔不備の〕ため、或は飢、或は渴、或は火、或は水、若くは劍のために死するものは、皆これ非時の死です。大王よ、これ〔世に〕非時の死ありと云ふ所以であります。

大王よ、陛下は、曾て若い穀類の〔折角〕穗を出したのに、蟲が出來て、根本から食ひ倒したことを御聞及になりましたか。』

王『はい、尊者よ、我等は其麼いふものを聞きもし、又見も致しました。』

尊『では、大王よ、其の穀物は時が來て枯れたのですか、又は時がまだ來ないのに枯れたのですか。』

王『尊者よ、そは未だ時が來ないのに枯れたのです。何ぜなれば若し蟲が其を食はなければ、そは收穫期まで長らへたに相違ないからであります。』

尊『然らば、大王よ、そは中間に起つた災害のために亡くなつたのですか、卽ち若し害を受けなければ、そは收穫期まで長らへたのですか。』

王『然うです、尊者よ。』

尊『大王よ、或種の疾病、卽ち或は風氣の過多、或は膽汁の過多、或は痰氣の過多、或は是等三者の結

或は水、或は火、或は渇、或は飢、或は治療〔の不備〕、或は保護の不公平、或は陽氣の變化、或は合、或は劍等の襲撃する所となつて、死するものも亦た恰も是の如きものであります。大王よ、これ〔世に〕非時の死ありと云ふ所以であります。

大王よ、陛下は、曾て、作物が生長して、穀粒の重さのために俯向き、穂が正に出來て居るのに、霰が降つて、其を臺なしにしたと云ふことを、御聞及になつたことがありますか。』

王『尊者よ、我等は然う云ふことを聞きもし、又見も致しました。』

尊『では、大王よ、陛下は、其の作物は當然の時期に枯れたと仰つしやいますか、又は時期外れと仰つしやいますか。』

王『尊者よ、そは時期外れです。何せなれば若し霰が降らなければ、其の作物は收穫期まで長らへたに相違ないからです。』

尊『然らば、大王よ、其の作物は、中途に起つた災害のために亡くなつたので、若し被害がなければ、收穫期まで長らへたのでせう。』

王『然うです、尊者よ。』

尊『大王よ、或る種の疾病、卽ち或は風氣の過多、或は膽汁の過多、或は痰氣の過多、或は是等三者の

若くは劍等の襲來する所となり、非時の死を遂ぐるものも、亦た恰も是の如きものであります。大王よ、これ[世に]非時の死ありと云ふ所以であります。』

王『於戲、希有なる哉、尊者よ、未曾有なる哉、尊者よ。貴衲は道理と比喩とを以て、人は如何して非時の死を遂ぐるかを實に善く御說明になりました。貴衲は世に非時の死と云ふものの存することを、洵に善く明瞭・平明・的確になさいました。尊者よ、無頭腦漢でも、頭の惱亂せる者でも、貴衲の比喩の何れかによつて「世には非時の死がある」と云ふ結論に到達しませう。況んや才能あるものに於てをやです。朕は既に貴衲の列擧された第一の比喩で、非時の死の存することを說服させられました。然るに尙ほそれ以上の御說明を聽くことが能きましたのは望外の幸でした。』

墳墓に於ける奇蹟に就て

王『那伽犀那尊者よ、すべて般涅槃した人の墳墓には奇蹟がありますか。』

尊『大王よ、或者にはありますが、或者にはありませぬ。』

王『では、尊者よ、何れの人にあり、何れの人にないのですか。』

尊『大王よ、般涅槃した人の墳墓の上に、奇蹟の顯はれるのは、三種の人人の固き決心によるのです。三種の人とは誰誰であるか。謂く、一には生きながら阿羅漢となり、人天[の衆生]を憐んで「我が墳

墓に、斯く斯く然か然かの奇蹟を現はさう」と云ふ決心をなせる人です。是の如く阿羅漢の決心によつて、般涅槃したものの墳墓には奇蹟が現はれます。

大王よ、二に般涅槃したものの墳墓に奇蹟の現はれるのは、天人が人を憐れんで、「願はくは、此の奇蹟によつて、常に地上に正法を建立住持せしめ、且つ人をして、信仰あらしめ、善根を増長せしめよかし」と思惟する場合です。是の如く、天人の決心によつて、般涅槃せるものの墳墓には奇蹟が現はれます。

大王よ、三に般涅槃したものの墳墓に奇蹟が現はるるのは、信念あり、清淨にして、學識あり、智慧あり、智見ある女子、又は男子が、「願はくは斯く斯く然か然かの奇蹟が現はれよかし」と念じつつ、一心に香・華鬘・衣等を執持し服事する場合です。是の如く人類の決心によつて、般涅槃するものの墳墓には奇蹟が現はれます。

大王よ、これ卽ち固き決心によつて、般涅槃せるものの墳墓に、奇蹟を現はす三種の場合であります。若し大王よ、此等三者中の一にだも、是の如き決心がなければ、諸漏を斷盡し、六神通に達し、己利を逮得せる人の墳墓には奇蹟は起りませぬ。大王よ、若し斯る奇蹟がなければ、人は彼が見た所の純淨の行爲を回想し、而して心に「佛子は實に全く般涅槃した」との歸結を推斷するでせう。』

王『那伽犀那尊者よ、正しく其の身を修むるものは、皆悉く眞理の智見を體得しますか、又は彼等の或者は體得いたしませんか。』

尊『大王よ、或者は體得いたしますが、或者は體得いたしませぬ。』

王『では、尊者よ、何者が體得し、何者が體得しないのですか。』

尊『大王よ、動物として生れるものは、縱令正しく其の身を修めても、眞理の智見を體得することは能きませぬ。又餓鬼の世界に生れるもの、邪見を執持するもの、詐僞的の人、父母及び阿羅漢を殺したもの、教團の分裂を計つたもの、佛身の血を出したもの、教團に在つて竊盗を行つたもの、邪惡に變じたもの、教團の姉妹を毀つたもの、十三ヶ條の悲しむべき罪の中の一を犯して有罪となり、未だ復歸しないもの、去勢された人、兩性具有のもの、七歳以下の人類の子たるもの、彼等は縱令正しく其の身を修めても、眞理の智見を體得することは能きませぬ。大王よ、是等十六種のものは、縱令正しく其の身を修めても、眞理の智見に到達することは能きませぬ。』

王『尊者よ、貴衲が眞理の智見を體得する上の妨害として擇び出された一より十五までは、可能性があつても無くても構ひませんが、七歳以下の兒童は、縱令正しく其の身を修めて居ても、智見を體得す

ることが能きないのは如何いふ理由ですか。これ尙ほ一個の問題です。何となれば兒童には貪もなく、瞋恚もなく、愚癡もなく、慢心もなく、邪見もなく、不滿足もなく、慾張つた考もないことが承認されるではありませんか。我等が幼兒と稱するものは、煩惱によつて染汚せられないから、阿羅漢果の體得にすら適當して居ます。いかに況んや一日で分る四聖諦に徹底する資格をやです。』

尊『大王よ、幼兒が假令正しく其の身を修めても、眞理の智見を體得することの能きない理由は下の通りであります。大王よ、若し七歲以下の幼兒が、慾情を刺激するものに就て慾情を感じ得、邪惡に導くものに就て邪惡になり、愚弄する事件に於て愚弄され、溺らすものに溺らされ、邪見を了解し得、滿足と不滿足とを區別し得、善と惡とを覺智し得るならば、眞理の智見を體得することが能きるかも知れませぬ。が、七歲以下の幼兒の心は、無力であり、貧弱であり、下賤であり、弱小であり、劣小であり、鈍いのであります。然るに第一義諦たる涅槃の根本原理は、重要であり、重く且つ廣大であり、無邊なのです。是の故に、大王よ、是の如く心の不完全なる幼兒は、是の如く廣大なる觀念を了得することが能きませぬ。

大王よ、例せばそは諸山の王たる須彌山のやうなものです。即ち須彌山は、尊重・重大・無邊・廣大であります。然るを尋常一樣の力量勢力を以て、其の山を根本から拔き去ることが能きませうか。』

尊『何せ能きませんか。』

王『尊者よ、人は弱く、諸山の王たる須彌山は、廣大であるからです。』

尊『幼兒の心と、涅槃との關係も亦た恰も是の如くであります。卽ち幼兒の心は、無力・貧弱・卑賤・劣小・朦朧・遲鈍ですが、第一義諦たる涅槃の根本原理は、尊重・重大・無邊・廣大であります。

復た、大王よ、そは長く、廣く、無邊、廣大なる大地のやうなものです。然るを僅少なる一滴の水で大地を濕ほし、それを泥濘にすることが能きませうか。』

王『勿論できませぬ、尊者よ。』

尊『何せ能きますまいか、大王よ。』

王『一滴の水は微少であるのに、大地は廣大であるからです。』

尊『大王よ、幼兒の心と涅槃との關係も亦た恰も是の如きものです。卽ち幼兒の心は、無力・貧弱・卑賤・劣小・朦朧にして、且つ遲鈍でありますが、第一義諦たる涅槃の原理は、長く、廣く、無邊、廣大ですから、透底及びもつきませぬ。

復た、大王よ、此處に、弱く、力なく、小さく、微なる、朦朧たる火ありと假定せんに、是の如き微小な火で、人間天上の全世界の闇黑を破つて、光明ならしむることが能きませうか。』

王『尊者よ、其麼ことは透底できませぬ。』

尊『何ぜ能きますまいか。』

王『其の火は朦朧であり、全世界は廣大であるからです。』

尊『大王よ、七歳以下の幼兒の心は、無力・劣弱・卑賤・劣小・朦朧たるのみならず、無明の深い深い闇黒によつて蔽はれて居ます。是の故に智慧の光を輝かすことは能きませぬ。大王よ、これ七歳以下の幼兒は、縱令正しく其の身を修めても、眞理の智見を體得することの能きない理由であります。

復た次に、大王よ、身體の極めて小さい(九)サーラカと云ふ蟲が、長さ九尺・幅三尺・胴の廻り十尺・高さ七尺あり、三ケ處に起水の記號を顯はして居る象王を見て、其の象の寢所に到り、彼を呑み盡さんと目論見て、象を曳きずり初めたと假定せんに、サーラカは其の象を呑み盡すことが能きませうか。』

王『其麼ことは透底できませぬ。』

尊『何ぜ能きますまいか。』

王『サーラカの身體は、極めて微小であるのに、象王の身體は、極めて宏大であるからです。』

尊『大王よ、七歳以下の幼兒の心も、丁度その如く、無力・劣弱・卑賤・劣小・朦朧・遲鈍であるのに、涅槃の根本原理は廣大であり、無邊であります。されば彼の無力・劣弱・卑賤・劣小・朦朧・遲鈍なる心を

【九】サーラカ Sālaka.

以ては、是の如く廣大無邊なる、涅槃の根本原理に逮達し徹底することは能きませぬ。大王よ、これ七歳以下の幼兒は、縱令正しく其の身を修めても、到底、眞理の智見を體得することの能きない理由であります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

（三〇）涅槃の苦に就て

王『那伽犀那尊者よ、涅槃は全く樂ですか、それとも其の一部分は苦ですか。』

尊『大王よ、涅槃は、全く樂であつて、其の中には秋毫も苦は混つて居りませぬ。』

王『尊者よ、我等は、涅槃の全く純樂なる旨を信ずることは能きませぬ。尊者よ、我等は此の點に於いて、「涅槃は苦を混じて居る」と主張せねばなりませぬ。何ぜなれば、尊者よ、涅槃を欣求するものは、身心兩者の努力勤勉を要するやうに思はれるからであります。卽ち行・住・坐・臥・及び食を愼み、睡眠を抑へ、感官を制し、富も穀類も、彼等の愛する親戚朋友をも辭さねばなりませぬ。されど世に處し、幸福にして喜ばしく且悅樂なるものは、縱逸に五官の快樂に耽ります。卽ち彼等は常に彼等が最も愛好する、種種の愉快なる色を以て其の眼を怡ばしめ、常に彼等が最も愛好する、樣樣の愉快な音聲、例せば躁宴及び歌などを以て其の耳を怡ばしめ、常に彼等が最も愛好する、種種の愉快なる香、例せば花・果實・葉・

【三〇】涅槃（Nirvāṇa）は、佛教徒の終局の目的とする理想の境である。

皮・根・液汁などを以て其の鼻を怡ばしめ、常に彼等が最も愛好する、種種の美味、例せば堅い御飯・柔かい御飯・舍利別・酒・飲料などを以て其の舌を怡ばしめ、常に彼等が最も愛樂する、種種の愉快なる觸感、例せば柔軟・細緻・精妙なるものに觸れて其の觸覺を怡ばしめ、常に彼等が最も愛樂する、淨穢・善惡等の種種樣樣なる知覺、または觀念を以て其の心を怡ばしめます。然るに貴衲等は、眼・耳・鼻・舌・身・意の發展を制止し、滅ぼし、虐め、訶み、邪魔にし、抑制される。是の故に貴衲等の身體も苦しみ、心も苦しむのです。而して貴衲等の身體が苦しめらるれば、貴衲等は肉體上の不快と苦痛とを感じ、貴衲等の心が苦しめらるれば、貴衲等は精神上の不快と苦痛とを感ぜられる。これ彼の苦行者、(三)マーガンディヤですら、世尊の缺點を看破して、「沙門・喬多摩は、增進發展の破壞者である」と道破した所以ではありませんか。』

尊『大王よ、涅槃には苦はありませぬ、そは全く純樂です。大王よ、陛下は「涅槃は難儀だ」と主張されますが、「其の難儀」は涅槃ではありませぬ。そは涅槃を實現するまでの豫備的階段であり、涅槃を欣求するものの歷程なのです。で、涅槃それ自らは、全く純樂であり、淨樂であつて、決して苦痛難儀を混へたものではありませぬ。大王よ、［世に］諸の王等の享受する、「主權の樂」といふやうなものがありますか。』

【三】マーガンディヤ Māgandiya.

尊『では、大王よ、其の「主權の樂」の中には、苦痛は混つて居ませんか。』

王『混つて居ませぬ。』

尊『然らば、大王よ、諸の王等は、何故に其の國境地方に背反者が起つた時、其の地方の人民を復び本の通りに服從せしめんがため、己の故郷を辭し、大臣・首長・軍人・護衛兵等を隨へ、野山を越えて進軍し、或る時は蚊蚋に苦しめられ、或る時は熱風に虐められつつ、猛烈なる戰爭に從事して、生命をすら擲つほどの苦痛に惱まされますか。』

王『尊者よ、そは王者の「主權の樂」と稱するものでありませぬ。そは其の「主權の樂」を追求する豫備的の階段です。諸の王等が「主權の樂」を享受するのは、是の如き難儀を經て、主權を追求した後のことです。で、尊者よ、「主權の樂」それ自らには、苦痛や難儀は混つて居りませぬ。何せなれば「主權の樂」と苦痛とは、全く別異の事柄であるからです。』

尊『大王よ、涅槃も亦た是の如く、全く純樂であつて、決して苦痛を混へては居りませぬ。涅槃を欣求するものが、其の身や心を苦しめるのは事實です。卽ち彼等の行・住・坐・臥・及び食を愼み、其の感官を制服し、其の身や生命を棄ててかかります。されど彼等が純樂の涅槃を享受するのは、是の如く辛苦して、涅槃を欣求した後のことです。そは恰も王者たるものが、其の敵者を征伏してから、「主權の樂」を享受するやうなものであります。是の如く、大王よ、涅槃は全く純樂にして、毫も苦痛を混

へて居りませぬ。何せなれば涅槃と苦痛とは、全く別異の事柄であるからです。
大王よ、涅槃の純樂にして、苦を混ぜざることに就て、更にこれ以上の説明をいたしませう。大王よ、諸の教師等には、彼等が「それぞれの」順路熟練を經て體得した「智識の樂」といふやうなものがありませうか。』

王『はい、あります、尊者よ。』

尊『では、大王よ、「智識の樂」には、苦を混へて居ますか。』

王『いいえ、混へて居ませぬ。』

尊『然らば、大王よ、諸の教師等が「まだ學生の時は」、其先生の面前に平伏し、又は立ち、水を汲み、部屋を掃き、楊枝及び洗水を準備し、殘飯を喰うて生活し、先生の足を洗つたり、頭を按摩したり、己の意志を抑へ、他の意志に隨つて行動し、寝るにも安かならず、不味ものを喰べて暮しますが、斯くて彼等に何の利益があり、何の樂がありますか。』

王『尊者よ、それは「智識の樂」ではありませぬ。それは「智識の樂」を追求するものの準備の階級です。彼等が「智識の樂」を享受するのは、辛苦艱難を忍んで師に事へ、智識を追求した後のことです。是の如く、尊者よ、「智識の樂」には、全く苦痛を混へて居りませぬ。何せなれば「智識の樂」と苦痛と

尊『大王よ、涅槃も亦た是の如く、全く純樂にして、毫も苦痛を混へて居りませぬ。涅槃を欣求するものが、彼等の身心を苦しむるのは事實です。卽ち行・住・坐・臥・食物等を愼み、睡眠を抑へ、感官を制し、身を捨て、生命を棄て〔涅槃の欣求に〕努力します。が、教師等が「智識の樂」を享受するやうに、彼等が純樂なる涅槃を享受するのは、是の如く辛苦して、涅槃を欣求した後のことです。何せなれば涅槃と苦痛とは、全く別異の事柄であるからです。』

王『善哉、尊者よ、朕は御說の通りに信受いたします。』

涅槃の形相に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等が常に談ぜらるる涅槃なるものは、比喩や說明や推理や論證によつて、其の(三二)色・其の相・其の壽及び其の量を明かにすることが能きますか。』

尊『大王よ、涅槃には何にも比類すべきものがありませんから、比喩や說明や推理や論證によつて、其の色・其の相・其の壽及び其の量を明かにすることは能きませぬ。』

王『ですが、尊者よ、涅槃は(三三)現實存在の法なるからには、比喩か說明か推理か論證によつて、其の

【三二】色とは Rūpa の譯語なるが故に、普通の色の義に解してはならぬ。佛教にては色を物質の義に解し、或は靑赤黃白の顯色と長短方圓等の形色の義に解す。

【三三】法とは Dhamma の譯語にて、單に法と云ふ意味のみにあらず。物、事、又はものがら・ことがらの義を有す。故に現實存在の法とは、現に實在するものと言ふほどの意味である。

色、其の相、其の壽及び其の量を明かにすることの能きない理由はありますまい。何うぞ此のことに就て、何等かの解明を與へて下さい。』

尊『かしこまりました。大王よ、世に大海と言ふやうなものが在りますか。』

王『はい、大海は在ります。』

尊『では、大王よ、人あり、陛下に向つて、「大海に幾量の水があり、幾個の動物が其の中に棲んで居ますか」と問ねたと假定せば、陛下は、彼の所問に對して何とお答へになりますか。』

王『尊者よ、朕は斯る問題に對しては、「其方が朕に問へることは、問ふべき事柄ではない。誰しも其麼な問を發してはならぬ、そは默つて棄て置かるべき問題である。博物學者は、決して大海を調査したことはない。隨つて何人と雖も、海の水を量ることも能きなければ、其の中に棲む動物の數を算ふることも能きない」と答へます。』

尊『されど、大王よ、陛下は現實存在の法たる大海に關して、何故に其麼な答をなさいますか。陛下は寧ろ彼に對して、「大海には、これこれ量の水があり、其の中には、これこれ個の動物が棲んで居る」と、お答へ遊ばすべきではありませんか。』

王『尊者よ、そは能きない相談です。此問題「の解決」は、人間の力の及ぶべき範圍ではありませぬ。』

なるかを、人に告げ知らすことの能きないと同様に、涅槃も亦た現實存在の法ではありますが、如何なる方法を以てするも、其の色、其の相、其の壽及び其の量を、陛下にお話することは能きませぬ。よしんば神通力を有する心自在の者が居て、大海の水を量り、又は其の中に棲む動物の數を算ふることが能きると致しましても、其の神通力を有する者でも、涅槃の色、その相、その壽、及び其の量を說明することは能きまぬ。

大王よ、現實存在の法たる涅槃の色、その相、その壽及びその量は、比喩を以ても、說明を以ても、推理を以ても、論證を以ても、了解の能きないことに就て、更に他の方面から說明いたしませう。大王よ、諸天の中に「無色身」と名くる天が在りますか。』

王『はい、在るといふことを聞きました。』

尊『では、大王よ、陛下は、比喩か、說明か、推理か、論證かによつて、無色身天の色、その相、その壽、及び其の量を明かにすることが能きますか。』

王『いいえ、それは能きませぬ。尊者よ。』

尊『では、大王よ、無色身天といふものは無いのですね。』

王『尊者よ、無色身天は在ります。が、その色、その相、その壽、及びその量は、比喩を以ても、說明を以ても、推理を以ても、將た又た論證を以ても、明かにすることが能きないのです。』

尊『大王よ、無色身天は、現實存在の衆生なりといへども、而もその色、その相、その壽、及びその量を明すことの能きないやうに、涅槃も亦た現實存在の法ではありますが、比喩・說明・推理・及び論證によつて、その色、その相、その壽、及び其の量を明かにすることは能きませぬ。』

王『尊者よ、朕は涅槃の純樂にして、比喩・說明・推理・及び論證を以てするも、その色、その相、その壽、及び其の量等を明かにすることの能きない理由は承認いたします。が、他の物に固有なるもので、涅槃の性質を言ひ表はし、隱喩を以て、それを明かにし得るものが在りはしますまいか。』

尊『大王よ、涅槃の形相に關して說明され得るものは絕無ですが、其の性質に關してならば、說明し得るものが無いでもありませぬ。』

王『あな嬉し、尊者よ、早速お話し下さい。朕はそれで涅槃の特性の一點だけなりとも明かにすることが能きませう。尊者よ、貴衲の清涼・甘美なる言葉の微風を以て、朕の心の熱を鎭めて下さい。』

尊『大王よ、涅槃は、蓮華の一性質と、水の二性質と、藥の三性質と、大洋の四性質と、食物の五性質と、虛空の十性質と、如意寶珠の三性質と、赤栴檀の三性質と、醍醐の泡の三性質と、山の頂上の五性質とがあります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、蓮華の一性質とは何ですか。』

これ涅槃の有する、蓮華の一性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、水の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、水の冷かにして熱を鎮むるが如く、涅槃も亦た一切の煩惱より起る熱を鎮めます。これ涅槃の有する、水の第一性質であります。次に大王よ、水の能く、飲料の缺乏のため、其を渇望し切望して困惱せられる人或は動物の渇を鎮むる如く、涅槃も亦た貪慾を熱望し、未來の生活を切望し、世間的の繁昌を渇望するものの渇を鎮めます。これ涅槃の有する、水の第二性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、藥の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、藥は、毒のために苦まされる者の避難所たるが如く、涅槃も亦煩惱の毒のために苦まされるものの避難所となります。これ涅槃の有する、藥の第一性質であります。次に、大王よ、藥の疾病を根絶せしむるが如く、涅槃も亦た憂惱を根絶せしめます。これ涅槃の有する、藥の第二性質であります。復た次に、大王よ、藥は長生の神食なるが如く、涅槃も亦た不死長生の妙藥です。これ涅槃の有する、藥の第三性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、大海の四性質とは何ですか。』

尊『大王よ、大海の屍を留めざるが如く、涅槃も亦た一切の煩惱の死體を容れませぬ。これ涅槃の有する、大海の第一性質であります。復た次に、大王よ、大海の廣大無邊にして、其に流入する一切の河

を容れて、尙ほ且つ餘裕綽綽たるが如く、涅槃も亦た其處に入り來る一切の衆生を容れて、尙且餘裕綽綽であります。これ涅槃の有する、大海の第二性質であります。復た次に、大王よ、大海は偉大なる動物の住處たるが如く、涅槃も亦た一切煩惱の垢を斷じ、力を得て、能く己の主となる偉人、卽ち阿羅漢の住家であります。これ涅槃の有する、大海の第三性質です。復た次に、大王よ、大海は悉くこれ花にして、恰も水波の蕩搖より生ずる、千態萬狀の美はしき漪漣の花もて滿たされるが如く、涅槃も亦た清淨の智慧及び解脫の千姿萬容の美はしき花もて滿たされます。これ涅槃の有する、第四性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、食物の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、食物の能く一切有情の生命を支持するが如く、涅槃も亦之を實現すれば、「衆生の」生命の支持者です。何せなればそは老と死とを滅盡するからであります。これ涅槃に固有なる食物の第一性質です。復た次に、大王よ、食物の能く一切衆生の力を增進するが如く、涅槃も亦之を實現すれば、衆生の神力を增します。これ涅槃に固有なる食物の第二性質であります。復次に、大王よ、食物の能く一切衆生の美の淵源となるが如く、涅槃も亦た之を實現すれば、一切の衆生に神聖の美を賦與します。これ涅槃に固有なる食物の第三性質であります。復次に、大王よ、食物の能く一切衆生の苦惱を

に固有なる食物の第四性質であります。復次に、大王よ、食物の能く一切衆生に存する、飢餓の弱點を征服するが如く、涅槃も亦たこれを實現すれば、一切衆生に存する、飢餓及び有ゆる苦痛の弱點を征服します。これ涅槃に固有なる食物の第四の性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、虚空の十性質とは何ですか。』

尊『大王よ、虚空の不生・不老・不死・不去にして・後有なく・打ち勝たれ難く・盗み取られ難く・何物にも依止する所なく・鳥その裡に飛べども何等の障碍なく・且つ無限なるが如く、涅槃も亦た不生・不老・不死・不去にして・後有なく・打ち勝たれ難く・盗み取られ難く・何物にも著する所なく・聖者その裡に活動するに何等の障碍なく・且つ無限です。これ涅槃に固有なる虚空の十性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、如意寶珠の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、如意寶珠の、「人の」慾望を滿たすが如く、涅槃も亦た人の慾望を滿たします。これ涅槃に固有なる如意寶珠の第一性質であります。復た次に、大王よ、如意寶珠の喜樂を生ずるが如く、涅槃も亦た喜樂を生じます。これ涅槃に固有なる如意寶珠の第二性質であります。復た次に、大王よ、如意寶珠の光瑩赫灼たるが如く、涅槃にも亦た光瑩赫灼たるものがあります。これ涅槃に固有なる如意寶珠の第三性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、赤栴檀の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、赤栴檀の得ること難きが如く、涅槃も亦た容易に得ることは能きませぬ。これ涅槃に固有なる赤栴檀の第一性質であります。復た次に、大王よ、赤栴檀の芳香無比なるが如く、涅槃も亦た芳香無雙であります。これ涅槃に固有なる赤栴檀の第二性質であります。復た次に、大王よ、赤栴檀の善人によつて稱讃せらるるが如く、涅槃も亦た善人によつて稱讃せられます。これ涅槃に固有なる赤栴檀の第三性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、醍醐の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、醍醐の美なる色香を有するが如く、涅槃も亦た美しい徳の色光を有つて居ます。これ涅槃に固有なる醍醐の第一性質であります。復た次に、大王よ、醍醐の芳香を有するが如く、涅槃も亦た戒徳の馥郁たる芳香を有つて居ます。これ涅槃に固有なる醍醐の第二性質であります。復た次に、大王よ、醍醐の美味を有するが如く、涅槃も亦た美味を有つて居ます。これ涅槃に固有なる醍醐の第三性質であります。』

王『尊者よ、涅槃の有する、山頂の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、山頂の崇高なるが如く、涅槃も亦た極めて崇高であります。これ涅槃に固有なる山頂の第一性質であります。復た次に、大王よ、山頂の動せざるが如く、涅槃も亦た決して動じませぬ。これ涅槃に固有なる山頂の第二の性質であります。復た次に、大王よ、山頂の攀ぢ難きが如く、涅槃も亦

た一切の煩惱の攀ち難しとする所です。これ涅槃に固有なる山頂の第三性質であります。復次に、大王よ、山頂には、一切の植物の生長すること難きが如く、涅槃にも亦た一切の煩惱をして生長せしむることは能きませぬ。これ涅槃に固有なる山頂の第四性質であります。復た次に、大王よ、山頂の喜怒を遠離するが如く、涅槃も亦た喜怒を遠離して居ます。これ涅槃に固有なる、山頂の第五性質であります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

涅槃の時に就て

王『那伽犀那尊者よ、貴衲等は、

「涅槃は過去でもなく、未來でもなく、現在でもなく、生でもなく、不生でもなく、又生じ得べきものでもない。」

と言はれるが、此の場合に於いて、正しく其の生活を調御し、涅槃を實現するものは、已生の或ものを實現するのですか、又は彼自ら初めて其を生じて、然る後に實現するのですか。』

尊『大王よ、正しく其の身を修めて、涅槃を實現するものは、已生の或ものを實現するのでもなく、又彼自ら其を生じて、然るのち實現するのでもありませぬ。が、然も彼自ら其の身を修めて、實現する

所の涅槃界は、實に存在して居ます。』

王『尊者よ、此の問題の解釋を曖昧にしては可けませぬ。貴衲は此を公明正大に解釋せられよ。熱心に精進して、貴衲が教はつただけ、皆悉く此の問題に傾注せられよ。人は此の問題のために、迷宮にさまよひ、困惱に沈み、途方に暮れて居ます。尊者よ、何うぞ人の心に刺さつた、此の罪障の箭を拔き去つて下さい。』

尊『大王よ、平和・安樂・妙好の涅槃界は〔確に〕現存します。而してそは正しく其の身を修め、勝者の教に隨つて諸行の觀念を捕捉し、彼自らの智慧によつて實現するのです。卽ちそは恰も世の學生が、其の先生の教訓に隨ひ、彼自らの智慧を以て、一の技藝に熟達するやうなものです。

又もし陛下が、「涅槃は如何にして知り得られるか」との御尋ねならば、そは無苦・無難・幸福・寂靜・安樂・喜悅・妙好・淨潔・清涼によつて得られます。

大王よ、乾燥した棒の數多の束を積み重ねて、炎炎として燃ゆる爐の中で燒かれつつある人が、自ら發奮策勵して、其の爐を脱け出で、而して清涼の地に避くれば、大なる安樂を實感するでせう。今それ正しく其の身を修むるものも亦た恰も是の如く、彼が細心の注意によつて、三火の炎熱の全く消滅せる、涅槃の至高至樂を實現するでせう。大王よ、〔此の場合〕爐は三火、火中に投ぜる人は自ら其

の身を修むる人、清涼の地は涅槃と見るべきであります。

復た次に、大王よ、蛇・犬、及び人間の死體、幷に糞、或は廢物を以て充ち滿てる陷井に落ちたる人が、自ら死屍の頭髮の縺れ合つた中に居ることを發見し、大いに努力策勵して、其處を逃れ出で、死體のない場所に往つたとすれば、彼は非常の快樂を實感するでせう。今それ自ら其の身を修むる人も亦是の如く、彼自らの細心なる注意によつて、一切煩惱の死屍を遠離する、涅槃の至上なる安樂を實現するでせう。大王よ、死屍は五欲の樂、死屍の中に落ちた人は、自ら其の身を修むる人、死屍なき場所は涅槃と見るべきであります。

復た次に、大王よ、劍を手にせる數多の敵者の中に落ち、怖れ駭れて戰慄し、心、擾動惱亂する人が、自ら發憤努力して其の場を拔け出で、堅牢安全の避難所に逃げ込めば、彼は大なる安樂を實感するでせう。今それ自ら其の身を修むるものも亦た是の如く、彼が細心の注意によつて、怖畏驚駭を遠離する、涅槃の至上なる安樂を實現するでせう。大王よ、〔此の場合、〕怖畏は生老病死のために幾度となく生起する心痛、戰慄せる人は自ら其の身を修むる人、避難所は涅槃と見るべきであります。

復た次に、大王よ、汚物・泥穢・泥濘もて穢された不潔な場處に落ち込める人が、自ら發憤努力して其處を逃れ出で、清淨無垢の場所に避くれば、彼は大なる快樂を實感するでせう。今それ自ら其身を修むるものも亦た是の如く、細心の注意によつて、一切の煩惱の汚穢泥濘を遠離せる、涅槃の至上なる安樂を實現するでせう。大王よ、〔此の場合、〕泥濘は收入・名聞・稱讚と見るべく、泥濘に落ちた人

は自ら其の身を修むる人、清淨無垢の場所は涅槃と見るべきであります。

大王よ、若し、陛下が、自ら其の身を修むるものは、如何にして涅槃を實現するかと問ひ給はば、彼は「諸行の發展に關して眞理を捕捉します。而して諸行の發展を捕捉するとき、彼は其處に生あり、老あり、病あり、死あるを認知します。が、初・中・終に於て、「永久の滿足として」捕捉するの價値ある、何物をも見ないのです」と答へます。大王よ、例せば、一塊の鐵を著い日に「終日」熱し、而して此を白熱にし、赤熱にすれば、人は其の鐵塊の、初・中・終の何れの部分にも、握るに適する點を見出すことの能きないやうなものです。大王よ、自ら其の身を修めて、萬有の發展に關する眞理を捕捉する人も亦た是の如く、世に生あり、老あり、病あり、死あるを見ます。が、其處に幸福あり、安樂あるを見ず、また其の初・中・終の何れの部分にも、「永久の滿足として」捕捉するの價値ある、何物をも見出さないのであります。

而して彼は永久の滿足として信頼するに足る何物をも見出さない時、心に不滿足の念を生じ、身は熱のために占有せられ、避難所もなく、保護もなく、希望もなく、竟に轉生輪廻のため疲れ果てて了ふのです。そは恰も炎炎赫赫たる猛火の爐中に落ちた人が、避くべき道もなく、避難所もなく、竟に絕望して、火のために焦げ盡されるやうなものであります。今それ、大王よ、「世に」永久の滿足として信頼するに足る何物をも見出さず、[illegible]

轉生輪廻のために疲れ果てさせられるのであります。

是の如く彼は無常なる人生の不安を見て、其の心に、「果てしなき此の生は、全く火に燒け且つ燃えて居る。そは苦惱多くして、希望[の光明]は絶えて居る。若し人が無生の狀態に達し得れば、其處のみは平和であり、妙好である。而して其處は此等一切の行を絶し、此等一切の瑕疵を脫し、煩惱を滅盡し、貪慾を捨離し、[絶對]平和の涅槃である」といふ考を起します。此を以て彼の心は、其の無生の狀態に前進して、「我は竟に避難所を得た」といふ思をなし、其處に滿足し、禪喜法悅するのであります。大王よ、險を冒して異國を旅し、路を失つたものが、漸くにして家鄕に通ずる路を得て、藪林を脫し、其の路に沿うて進み、「我は竟に路を見出した」とて安堵の思をなし、喜悅し、滿足するやうなものです。今それ無常なる人生の不安を看破するものも亦た是の如く、心に、「果しなき此の生は、全く火に燒け且つ燃えて居る。そは苦惱多くして、希望[の光明]は絶えて居る。若し人が無生の狀態に達し得れば、其處のみは平和であり、妙好である。而して其處こそは此等一切の行を絶し、此等一切の瑕疵を脫し、一切の煩惱を滅盡し、貪慾を捨離したる、[絶對]平和の涅槃である」といふ考を起します。此を以て彼の心は其の無生の狀態に前進して、「われ竟に避難所を見出せり」との思をなし、滿足し且つ禪喜法悅するのであります。而して彼は其の道に沿ひ、力をこめて精進し、其を探し出し、彼自ら十分にそれに慣れ、正定の境界を確立し、[一切衆生に對して]慈悲同情の念に住し、更

に幾たびとなく、其心を養ひ、竟に無常を超過して、眞實至高の結果を得るのです。大王よ、自ら其の身を修むる者が、此狀態を得るに到れば、これ卽ち涅槃を實現したのであります。』

王『善哉、尊者よ、御說洵に御道理です。朕は御說の通りに信受いたします。』

涅槃の場所に就て

王『那伽犀那尊者よ、涅槃の安置せられる場所は、東方に在りますか、若くは南方、或は西方、又は北方に在るのですか。それとも或は上方に在るのですか、又は下方にあるのですか。然らざれば地平線上にありますか。』

尊『大王よ、涅槃の安置せられる場所は、東でもなく、西でもなく、南でもなく、北でもなく、上でもなく、下でもなく、また地平線上でもありませぬ。』

王『されど、尊者よ、若し果して然りとせば、〔世には〕涅槃もなければ、其を實現する者もなく、隨つて其が實現は〔全く〕虛僞であります。いま朕は〔少しく〕此の理を說明いたしませう。尊者よ、地上には農作物の生長する畑があり、芳香を出す花があり、花を咲かしむる灌木があり、果實を熟さしむる樹木があり、寶珠を發掘し得る鑛山があります。此の故に、是等の中の何かを欲しい人は、其處に往

つて其を得ることが能きるのです。尊者よ、涅槃も亦た是の如く、若し眞に存在するものでしたら、
人は涅槃の生産される所が、何處かに在ることを豫想せねばなりませぬ。されど貴術は其の場所が無いと言はれるから、「涅槃もなければ、其を實現するものもない。隨つて其を實現すると云ふは、全く虚僞である」と説破するのであります。』

僧『大王よ、涅槃の安置せられる場所はありませぬ。されど涅槃は實に存在致します。而して自ら其の身を修むるものは、細心の注意によつて、涅槃を實現することが能きるのであります。そは恰も火のやうなものです。卽ち火は何處にも貯藏されて居る譯ではありませんが、人もし二の木を摩擦すれば、火は自ら出て來ます。大王よ、涅槃も亦た是の如く、安置せられる場所はありませんが、其は確に實在して居ます。而して自ら正しく其の身を修むるものは、細心の注意によつて、涅槃を實現することが能きるのであります。

復た次に、大王よ、〔世に〕王者の七寶、卽ち輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・主藏寶・及び顧問寶があります。此等の寶は一定の場所に貯藏せられる譯ではありませぬ。が、王者が自ら其の身を正しく修むれば、七寶は自ら獨り手に出來るのです。大王よ、涅槃も亦た是の如く、縱令その安置せられる場所はなくとも、存在することは確です。而して自ら正しく其の身を修むるものは、細心の注意を以て、涅槃を實現することが能きます。』

王『尊者よ、〔世に〕涅槃の安置される場所がないことは承認致しませう。されど、人が立脚して正しく

其の身を修め、以て涅槃を實現する場所は、何處かにあるでせう。』

尊『然うです、大王よ、然ういふ場所ならあります。』

王『尊者よ、其の場所は如何いふ所ですか。』

尊『大王よ、持戒卽ち正義の生活は實に其場所であります。何となれば人もし生活の基礎を持戒の上に置き、念を攝して、正しく其の身を修むれば、〔其の身は〕シシア或は希臘にあらうとも、支那若くは韃靼にあらうとも、アレキサンドリア又はニクムバにあらうとも、ベナレス又は喬薩羅にあらうとも、迦濕彌羅または犍陀羅にあらうとも、或は山顚若くは梵天の世界にあらうとも、何人と雖も、涅槃を實現することが能きるからであります。大王よ、例せば眼を有するものは、何處に居ても、卽ちシシア若くは希臘に居ても、支那または韃靼に居ても、アレキサンドリア若くはニクムバに居ても、ベナレス又は喬薩羅に居ても、迦濕彌羅または犍陀羅に居ても、山顚或は梵天の世界に居ても、渺茫たる天空をも見れば、彼に面する地平線をも見るやうなものであります。大王よ、人も亦是の如く、正しく其の身を修めて念を攝するものは、何人と雖も、また何處に居ても、卽ちシシア若くは希臘に居ても、支那または韃靼に居ても、アレキサンドリア若くはニクムバに居ても、ベナレスまたは喬薩羅に居ても、迦濕彌羅または犍陀羅に居ても、山顚または梵天の世界に居ても、涅槃の實現に逮達するの

王『善哉、尊者よ、貴衲は涅槃に就て朕を敎へ下さいました。また涅槃の實現に就て敎へ下さいました。貴衲は戒の德を說示し、至高の成就卽ち八解脫を說き、眞理の幡を高揚し、眞理の眼を建立し、至高の目的を有するものの採れる方法は、決して無益でもなく、また無効でもないことを明示せられました。尊者よ、朕は御說の通りに信受いたします。』

巻の第五

推理問答

爾の時に、彌蘭陀王は、那伽犀那尊者の住所に往き、尊者の前に跪づき、却いて一面に坐を占められた。而して彼は坐を占め已るや、知らんと欲し、聞かんと欲し、記憶せんと欲し、智慧の光を生ぜしめんと欲し、其の無明を摧破せんがため、自ら策勵精進し、端心正念にして、尊者に向ひ、問うて言はく、

王『尊者よ、貴衲は、曾て、佛陀に拜謁あそばしたことがありますか。』

尊『いいえ、ありませぬ。』

王『では、尊者よ、貴衲の戒師様は、佛陀に拜謁あそばしたことがありますか。』

尊『いいえ、ありませぬ。』

王『尊者よ、貴衲も未だ曾て佛陀に拜謁なすつたことがなく、貴衲の戒師様も拜謁あそばしたことはないと言はれる。然らば、尊者よ、佛陀は「世に」存在し給はなかつたのですね。佛陀の「世に」存在し

給うた證據はないではありませんか。』

尊『では、大王よ、陛下の御生れになりました、刹帝利種族の祖先たる、往古の刹帝利種族等は、「世に」存在したのですか。』

王『居ましたとも、尊者よ、何で其の事が疑はれませうぞ。』

尊『では、大王よ、陛下は、曾て彼等にお會ひ遊ばしたことがありますか。』

王『いいえ、會うたことはありませぬ。』

尊『では、陛下を敎訓した人人、卽ち家庭の敎師僧、軍隊の將校、法律の制定者、及び大臣等は、曾て往古の刹帝利族に會ひましたか。』

王『いいえ、會つたことはありませぬ。』

尊『では、大王よ、若し陛下もお會ひにならず、陛下の先生等も會つたことがないとすれば、往古の刹帝利は何處に居ますか。往古の刹帝利が居たといふ、明かな證據はないではありませんか。』

王『されど、尊者よ、彼等が用ゐた王者の徽章、卽ち純白の日傘・王冠・上靴・犛牛の尾ある團扇・劍・及び無價の玉座が、今尙ほ、嚴として存在します。で、我等は此等によつて、往古の刹帝利等が存在したことを知り且つ信じます。』

尊『大王よ、我等も亦是の如く、世尊の存在し給うたことを知り且つ信じます。何となれば我等には世尊の存在し給うたことを知り且つ信ずる理由があるからです。その理由は何であるかとならば、謂

く、世尊・智慧・智見・應供・正等正覺によって用ゐられた、王者の徽章、卽ち（一）四念處（二）四正勤（三）四神足（四）五根（五）五力（六）七覺支及び（七）八聖道が、今尙ほ嚴として存します。而して人間天上の全世界の者は、此等によつて、世尊の存在し給うたことを知り且つ信ずるのです。大王よ、此の理由により、此の論據により、此の論證により、此の推論によつて、世尊の存在し給うたことが知り得られます。［故に言はく］

「一切の繋縛を離れ、一切の煩惱を斷じて多數の人類を「生死の」苦界より、「涅槃の彼岸へ」濟度せる、人類中の最上者の在せしことは、推論によつてのみ知り得らる」と。』

王『尊者よ、何うぞ比喩を擧げて、之を解釋し

【一】四念處（Cattāro satipat-thānā）とは、一に「身は不淨と觀じ」、二に「受は是れ苦なりと觀じ」、三に「心は無常と觀じ」、四は「法は無我と觀ずる」を云ふ。

【二】四正勤（Cattāro samma-ppadhānā）とは、一に「未生の惡は生ぜざらしめ」、二に「已生の惡は滅せしめ」、三に「未生の善は生ぜしめ」、四に「已生の善は增長せしむる」を云ふ。

【三】四神足（Cattāro iddhipā-dā）とは、欲と念と進と慧とを云ふ。而して欲は希向慕樂して四念處の境を莊嚴するの義、念は心を四念の境に專注して、正念に住するの意、進は專ら四念處の理を觀じて間雜なからしむるの義、慧は四

せしめざるの意である。

【四】五根（Pañca indriyāni）とは、信と進と念と定と慧とを云ふ。而して信は四諦の理を信じて無漏の根力禪定解脫三昧等を生ずるを云ひ、進は諸法を信ずるが故に倍策精進するを云ひ、念は正助の道を念じて邪妄を入らしめざるを云ひ、定は心を攝して正道及び助道の善法の中に在りて散亂せしめざるを云ひ、慧は前に例して知ることが能きる。

【五】五力（Pañca balāni）の名目は前の五根と同じである が、心的向上の路を辿る上に於いて、能く諸の障碍を排し、五根の作用を增長せしむるが爲に此の力を必要とするのである。

【六】七覺支（Satta bojjhaṅgā）

答『大王よ、譬へばそは市街の設計者のやうなものであります。即ち彼は城府を建てんと欲するや、先づ第一に坂なく、峽谷なく、凸凹もなく、岩もなく、攻擊の危險もなく、何等の缺點なき土地を探すでせう。而して彼は其の土地を平坦にして、木の切り株や、杭を十分に取り除き、それから適當の區劃に測量して、其處に立派な規律整然たる城府を建て、周らすに塹壕、壘壁を以てし、又その城には堅牢な門、望樓、銃眼を造り、市街には、恰好な辻廣場・公開場・接合點・四辻・清潔なる公道・軒並みよき店頭・公園・花壇・湖水・蓮池・井戸等の設備も十分に出來、諸天を祀る寺院は市街の莊嚴となり、何等一の缺點もなき城府が出來上つた。斯く榮華の城府が出來上つた時、其の設計者は、何處へか往つて了ひました。然るに時の進むにつれて、其の城府は繁昌になつて、平和・幸福・愉快な飮食店や・有ゆる種類階級の人人の集合地となりました。それから武士族・婆羅門族・毘舍族・首陀族・騎象・騎馬・または車上の軍人・步兵・弓兵・劍客・官吏・勇士・英雄・鹿の皮を冠つて戰ふ人・職業的力士の群・料理人・カレー製造人・理髮屋・入浴

定と捨とを云ふ。蓋し定慧が調はないから、此の七覺を用ゐて均調するの義、覺支とは菩提を得るための修行項と云ふほどの意である。而して念とは身心を靜かにし靜慮靜思する作用、擇とは善惡・染淨・勝劣等を分別して、不善を捨てて善に就く作用、進とは前の分別撰擇せる善法を進んで實行する作用、喜とは如法に修行して其の步を進むれば、茲に進德喜悅の情起る作用、輕安とは喜悅の情が更に增長して安心の境に入るの作用、定とは身心の平和を得てより更に進んで定心禪定の修行に入るの境界、捨とは靜止禪定の心の更に進一步して、苦樂を超越したる安樂の境界を云ふのである。

【七】八正道とは正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。

の侍者・鍛冶・花師・金銀鉛錫銅鐵眞鍮等の職人・寶石商・使者・陶器屋・鹽製造人・製革匠・車製造人・象牙彫刻者・繩製造人・櫛製造人・紡績職人・籠製造人・弓製造人・弓絲製造人・箭製造人・畫工・染料製造人・染屋・織工・裁縫師・試金者・吳服太物商・香料商・草刈り人・木伐り人・雇ひ人・森の中の花・果實・及び木の根などを集める人・飯の呼び賣り子・菓子賣り子・魚賣り子・屠夫・酒賣り子・俳優・舞ひ子・輕業師・手品師・本職の詩人・力士・死體の燒き手・腐つた花の投棄人・野蠻人・森の中の野人・女郎・破落戶者・跳び子・暴慢漢の奴隷女等・及び諸地方諸國から來た人人——卽ちシシヤ・バクトリア・支那・ギラータより來た人・ウッヂェーニ人・バールカッチャ人・ベナレス人・コーサラ人・邊境地方の人・摩揭陀・サーケータ・スラッタ及び西方より來た人・コーツムバラ・マヅラ・アレキサンドリア・迦濕彌羅・犍陀羅より來た人等、すべて此等の人人は此の城下の住人となりました。而して彼等は此の規律整然として缺點なく、完全にして愉快な、此の新らしい城府を見て、「此の城府は餘程練達な設計者が建てたに相違ない」といふことを知るでせう。

大王よ、世尊・無等・無等等・無對・無比・不可稱・不可數・不可量・無量德・德成就・無邊智・無邊光・無邊精進・無邊力も亦た是の如く、佛力を成就し給うた時、惡魔及び其の有ゆる軍勢を擊退し、異論の邪網を寸寸に破り裂き、無明を脫落し、智慧を生ぜしめ、法火を高揚し、其をして佛果に達せしめ、難攻

不拔の法城を建立し給ひました。而して大王よ、世尊の此の法城は、持戒即ち正義の生活を以て其壘

壁とし、慚愧を以て塹壕となし、智慧を以て其の城門の上の銃眼となし、精進を以て望樓となし、信念を以て其の礎柱となし、念を以て門に於ける番人となし、般若を以て高臺となし、經を以て其の市場となし、論を以て其の四辻となし、律を以て其の法廷となし、念處を以て其の本町として居ます。而して又、大王よ、其の市街には花市場・果實市場・解毒劑市場・藥市場・神食・寶珠市場・及び一切の商品市場等があります。』

王『尊者よ、世尊・佛陀の花市場とは何ですか。』

尊『大王よ、世尊・智慧・智見・應供・正等正覺によつて敎へられたる觀想の若干の主題があります。卽ち(八)無常觀(九)無我觀(一〇)不淨觀(一一)苦想(一二)捨離〔煩惱〕想(一三)遠離貪欲想(一四)滅想(一五)一切世間不滿想(一六)一切行無常想(一七)脹想(一八)靑瘀想(一九)屍想(二〇)壞想(二一)啄噉想(二二)離散想(二三)敗壞想(二四)血塗想(二五)膿想(二六)骨想(二七)慈想(二八)悲想(二九)喜想(三〇)捨想(三一)死想等。大王よ、此等は世尊の敎へ給へる觀念冥想の主題であります。

而して老死を解脫せんと欲するものは、誰でも此等の中の何れか一を觀念冥想の對象として取り、其の觀念冥想によつて、貪・瞋・癡・慢及び邪見を遠離し、依て以て生死の海を渡り、情慾の急流を堰き止め、三垢を淸め、

【八】アニツチヤサンナー Aniccasaññā.
【九】アナツタサンナー Anattasaññā.
【一〇】アスバサンナー Asubhasaññā.
【一一】アーディーナヴサンナー Ādīnavasaññā.
【一二】パハーナサンナー Pahānasaññā.
【一三】ヰラーガサンナー Virāgasaññā.
【一四】ニローダサンナー Nirodhasaññā
【一五】サツバローケー アナビラタサンナー Sabbaloke anabhiratasaññā.
【一六】サツバサンカーレー アニツチヤサンナー Sabbasankhāresu aniccasaññā.
【一七】アーナーパーナサチイ ウツヅマータカサンナー Ānāpānasati uddhumātakasaññā.
【一八】ヰニーラカサンナー Vinīlakasaññā.
【一九】ヰプツバカサンナー Vipubbakasaññā.

一切の煩惱を斷じて、無垢・無濁・清淨・純白・不老・不死・無畏・寂靜・安樂の涅槃の城に入り、阿羅漢果を得て、其心を自由にするのです。大王よ、これを世尊の花市場と名けます。』

「業の代金を以つて彼の市場に往き、汝が思想の對象となるべきものを買へ、而して自ら解脫し、自ら自由なれ。」

王『尊者よ、世尊、佛陀の薰香市場とは何ですか。』

登『大王よ、世尊は戒德の範疇を說き給ひました。而して其正義の香水を灌がれたる佛子等は、戒德の薰香を以て、人天の世界を薰ゆらし、風上にも風下にも、〔東西南北の〕各方を、不斷に薰ゆらします。其の戒德の範疇とは何であるか。謂く、歸依戒と・五戒と・八戒と・十戒と・波羅提木叉を構成する五重の自制戒とです。大王よ、これ世尊の薰香市場と稱せられるものであります。何となれば、天中の天たる世尊が、

(三二)「華香は風に逆らつて薰ずる能はず、栴檀も、麝香も、灌木も亦然り。唯それ善人の妙香のみは、風に逆らつて行き、善士は諸方を薰ず。

【二〇】Vicchiddakasaññā.（ヰツチツダカサンナー）
【二一】Vikkhāyitakasaññā.（ヰツカーイタカサンナー）
【二二】Vikkhittakasaññā.（ヰツキツタカサンナー）
【二三】Hatavikkhittakasaññā.（ハタヰツキツタカサンナー）
【二四】Lohitakasaññā.（ローヒタカサンナー）
【二五】Puḷavakasaññā.（プラヴカサンナー）
【二六】Aṭṭhikasaññā.（アツテイカサンナー）
【二七】Mettāsaññā.（メーツターサンナー）
【二八】Karuṇāsaññā.（カルナーサンナー）
【二九】Muditāsaññā.（ムヂイターサンナー）
【三〇】Upekkhāsaññā.（ウペーツカーサンナー）
【三一】Maraṇānussati.（マラナーヌツサテイ）
【三二】以下三頌とも巴利語法句經第五十四、五十五、五十六頌に出づ。
【三三】增一阿含經地主品第二十三に曰く、「木蜜及栴檀。優之鉢及香。亦諸種種香。戒香最爲勝。」「此香雖爲妙。及諸檀香蜜。戒香諸爲妙。十方悉聞之。」（卍藏第十三套第二册五

は最上なれ。（五六）
麝香及び栴檀は、芳香の量少なし、されど戒德の妙香は、諸天の中に匂ふこと第一なり。」
と仰せ給うたからであります。』
王『尊者よ、世尊、佛陀の果實市場とは何ですか。』
尊『大王よ、世尊は若干の果を敎へ給ひました。卽ち須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・空果等至・無相果等至・無願果等至〔等〕であります。此等の中の何れか一を欲するものは、業を以て其代價となし、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若くは阿那含果、若くは阿羅漢果、若くは空果等至、若くは無相果等至、若くは無願果等至を買ふのです。大王よ、檬果の生つた、檬果樹を有する人は、買ひ手の來るまでは、其の果實を擲き落しませんが、買ひ手が來れば、其の代價を取つて、「此處にお出なさい、此の樹は、常に果實が生つて居ますから、貴下は未熟なのでも、凋れたのでも、毛のあるのでも、酸味のあるのでも、或は熟したのでも、貴君の欲するものをお取りなさい」と言ひます。そこで買ひ手は、拂つた代價に應じ、自ら最も宜しとするもの、卽ち未熟なのがよければ未熟なのを、凋れたのがよければ凋れたのを、毛のあるのがよければ毛のあるのを、熟したのがよければ熟したのを取ります。
大王よ、今も亦た是の如く、上述の何れかの果を欲するものは、誰でも、其の代價として業を支拂

ひ、彼が欲する所に隨つて、或は須陀洹果なり、乃至無願果等至なりを買ふのです。大王よ、これ卽ち世尊の果實市場と稱するものであります。』

「人は代價として其の業を與へ、以て不死の果實を買ふ。
此の不死の果實を買へるものは、幸福なり、安樂なり。」

王『尊者よ、世尊、佛陀の解毒劑市場とは何ですか。』

尊『大王よ、世尊は若干の解毒劑を敎へ給ひました。而して世尊は其の藥を以て、煩惱の毒から、人天の全世間を救ひ出し給ふのです。其の解毒劑とは何であるか。謂く、世尊の敎へ給ひし四聖諦、詳言せば、(一)苦諦と、(二)苦の原因たる集諦と、(三)苦の掃蕩せられたる滅諦と、(四)苦の掃蕩に引導する道諦とであります。而して至上の智見を欣求するものは、誰でも皆な此の四聖諦の敎義を聞き、後有を受けず、老を遠離し、死を遠離し、憂・悲・苦・惱・絶望を遠離します。大王よ、これ則ち世尊の解毒劑市場と稱するものであります。』

「一切世間の一切の藥品中、怕るべき毒の解劑となるもの、
此の法藥に過ぎたるはなし、比丘等よ、此を飲んで生活せよ。」

王『尊者よ、世尊・佛陀の藥市場とは何ですか。』

癒し給ひます。其の藥とは、四念處と、四正勤と、四如意足と、五根と、五力と、七覺支と、及び八聖道とであります。世尊は此等の藥を以て、邪見の人を治し、邪思惟の人を治し、邪語の人を治し、邪業の人を治し、邪命の人を治し、邪精進の人を治し、邪念の人を治し、邪定の人を治し給ひます。而して世尊は、貪を吐き出さしめ、瞋を吐き出さしめ、癡を吐き出さしめ、慢を吐き出さしめ、身見卽ち小我の見を吐き出さしめ、疑を吐き出さしめ、掉擧を吐き出さしめ、昏沈と睡眠とを吐き出さしめ、無慚無愧を吐き出さしめ、一切の煩惱を吐き出さしめ給ひます。大王よ、これ則ち世間の藥市場と稱せられるものであります。』

「世の種種の力ある、數多の藥品中、此の法藥に優るものは一もなし、
おお比丘衆よ、此を服め、服んで而して服みつつ生活せよ。
蓋し汝、此の法藥を服まば、老と死とを超過して、諸の煩惱を斷じ、
靜慮し、見得して、「一切の」繫縛を離るべければなり。」

王『尊者よ、世尊・佛陀の甘露市場とは何ですか。』

尊『大王よ、世尊は甘露を敎へ、恰も人人が、王の卽位式に當り、彼を灌頂するが如く、人間天上の全世界に、其の甘露を灌ぎかけ給ひました。而して人天は、甘露を灌ぎかけられて、後有を受けず、老・死・憂・悲・苦惱・及び絶望を遠離します。是の故に。天中の天たる世尊は、

「おお比丘衆よ、甘露を食ふものは、肉體を解脱する念を養ふ。」
と宣說したまひました。大王よ、これ則ち世尊の甘露市場と稱せられるものであります。』

「渠は人類の疾病に苦しめるを見て、甘露店を開業せり、
比丘等よ、往け、而して汝等の業を代價として、
彼の甘露の〔法〕食を買ひ、以て汝等自らを養へ。」

王『尊者よ、世尊・佛陀の寶珠市場とは何ですか。』

尊『大王よ、世尊は、或る寶珠を教へ給ひました。で、其の寶珠もて美裝せる佛子等は、光を放つて、人天の全世界を輝かし、上をも下をも照らし、地平線より、地平線に至るまで、其の威光を以て光被します。而して其寶珠と言ふのは、戒德の寶珠・正定の寶珠・智慧の寶珠・解脱の寶珠・解脱智見の寶珠・分別の寶珠・及び七覺支の寶珠であります。

大王よ、戒德の寶珠とは何であるかとならば、謂く、別解脱律儀・根律儀戒・命清淨戒・緣に關する戒・小戒・中戒・大戒・道戒・果戒であります。而して、大王よ、世の一切衆生は、人間も、天人も、惡魔も、梵天も、沙門も、婆羅門も、此戒德の寶珠を以て莊嚴せる人を渴仰願望して止みませぬ。また、大王よ、此戒德の寶珠を著けたる比丘は、寶珠の光もて上下四方を照らします。而して此寶珠の光は、

倒します、大王よ、是の如き戒德の寶珠が、世尊の寶珠市場において賣られるのです。これ則ち世尊の寶珠市場と稱せらるるものであります。

「佛陀の市場には、是の如き戒德の寶珠を賣り出せり。汝等宜しく業を以て代價となし、其の寶珠を買ひ、以て彼の光輝ある寶珠を身に著くべし。」

次に、大王よ、正定の寶珠とは何であるかとならば、謂く(三四)有尋有伺三昧と(三五)無尋伺喜三昧と(三六)無尋無伺三昧と(三七)空三昧と(三八)無相三昧と(三九)無願三昧とであります。而して、大王よ、比丘が此の正定の寶珠を身に著くれば、情慾の意、瞋恚の心、及び煩惱を根本とする高慢、掉擧・邪見・幷に疑等は、正定の寶珠に觸れて、彼の身より滑り落ち、分散し離散し、彼と共に住せず、彼に固著しないやうになります。大王よ、そは彼の水が、蓮華の葉に落つれば、其から滑り落ち、分散し、離散して、其の葉の上に止まらず、また其の葉に粘著しないやうなものです。比丘も亦た是の如く、正定の寶珠を身に著くれば、貪慾の意も、瞋恚の意も、殘忍の意も、及び煩惱を根本とする高慢・掉擧・邪見・幷に疑等も、正定の寶珠に觸るるや否や、皆悉く彼の身から滑り落ち、分散し、離散して、彼の身に止まらず、彼に粘著し得させぬ。何せなれば正定の習慣は、非常に淨潔であるからです。大王よ、これ則ち世尊の正定

【三四】サヸタッカ・サヸチャーロー・サマーディ Savitakka-savicāro-samādhi.
【三五】アヸタッカ・ヸチャーラマットー・サマーディ Avitakka-vicāramatto-samādhi.
【三六】アヸタッカ・アヸチャーロー・サマーディ Avitakka-avicāro-samādhi.
【三七】スンナトー・サマーディ Suññato-samādhi.
【三八】アニミットー・サマーディ Animitto-samādhi.
【三九】アパニヒトー・サマーディ Apanihito-samādhi.

寶珠と稱せらるるものであり、且つ此の寶珠は世尊の寶珠市場で賣られるのであります。

「正定の寶冠を冠れる眉毛の下には、決して惡想の起ることなく、

困惱狂亂せる心を驅逐す、汝等これを買ひ以て汝等の身に著けよ。」

次に、大王よ、世尊の智慧の寶珠とは何であるかとならば、謂く、聖弟子は其の智慧によりて、善なるもの、惡なるもの、呵責さるべきもの、呵責されざるもの、爲さるべきこと、爲さるべからざること、劣れるもの、優れたるもの、闇きもの、明きもの、明と暗との混交せるものの何なるかを、十分に知り得るのであります。而して又た彼は實に能く此の智慧の寶珠によりて、苦なるもの、苦の原因、苦の滅せる狀態、苦の滅せる狀態に達する道の何なるかを知るのです。大王よ、これ則ち世尊の智慧の寶珠と稱せらるるものであります。

「智慧の寶冠を冠れるものは、生有を持續することなかるべし、

彼は何れの世界にも再生を願はず、不死の涅槃に到達せん。」

次に、大王よ、世尊の解脫の寶珠は何であるかとならば、謂く、阿羅漢果を呼んで、解脫の寶珠といひ、阿羅漢果に到達せる比丘を呼んで、解脫の寶珠もて美裝せるものといふのです。大王よ、それは恰も人が眞珠・金剛石・黃金・珊瑚を連ねて珠數をなせる裝飾を著け、肢體にはアカル香・乳香・タリス・

花・蓮華・白のアラビヤ素馨花等より成る花冠を著くれば、花冠・芳香・寶石細工の美しい點に於いて、他の諸人を壓倒し、其の光彩の陸離たる實に人をして眩せしむるやうなものです。大王よ、阿羅漢果に到達せる人も亦た是の如く、彼は貪・瞋・癡の三毒を拔ぎ、心解脫の王冠をいただいて居ますから、下は未だ其の地位に達せない比丘は云ふも更なり、上は已に解脫せる比丘までも、赫赫たる光彩を以て照破し、彼等を壓倒するのです。何せなれば大王よ、諸の王冠中の王冠は一であり、而して其は心解脫の冠であるからです。これ則ち世尊の解脫の寶珠と稱せられるものであります。

「寶珠の冠を著けたる家長は、家人等の見上ぐる所となり、
心解脫の王冠を著けたる者は、人間天上の仰觀する所となる。」

次に、大王よ、世尊の解脫智見の寶珠とは何であるかとならば、謂く、(四〇)妙觀察智が世尊の解脫智見の寶珠です。聖弟子等は此智を以て、涅槃に通ずる道と、涅槃の果と、捨離せる煩惱と、尙斷ずべき煩惱の何なるかを知るのです。

「聖者等は、此の智によりて、彼等が已に通過せる道と未だ踐まざる道とを知る。
おお勝者の子等よ、汝等精進して、汝等自ら此の智慧の寶を得よ。」

次に、大王よ、世尊の無礙解の寶珠とは何であるかとならば、謂く、(四一)義無礙解と(四二)法無礙解と(四三)詞無礙解と(四四)辯無礙解とであります。大王よ、此四無礙解を以て、其身を飾れる比丘は、如何な

【四〇】パッチヤヹーカナナーナム Paccavekkhanañāṇam.
【四一】アッタパティサムビダー Atthapatisambhidā.
【四二】ダムマパティサムビダー Dhammapatisambhidā.
【四三】ニルッティパティサムビダー Niruttipatisambhidā.
【四四】パティバーナパティサムビダー Patibhānapatisambhidā.

る仲間の中に入つても、即ち或は武士族の中に入り、或は婆羅門族の中に入り、或は商人等の中に入り、或は首陀族の中に入つても、確信を以て入りますから、決して當惑することもなく、又羞しがることもありませぬ。即ち彼は臆することもなく、又怕るることもなく、或は興奮することもなく、又畏怖することもなく、群集の中に入るのであります。大王よ、譬へば武士の鎧を著て、戰陣に入るやうなものです。即ち彼は毫も怕るることもなく、「若し敵が遠くに離れて居れば、われ此の弓を以て彼等を射てやらう。若し彼等が此方に進んで來たら、われ此の投槍を以て討たう。若し彼等が更に近く進んで來たら、われ此の槍で突いてやらう。若し彼等が我が面前に來たら、われ此の刀を以て眞二つに截り裂いてやらう。若し彼等が更に接戰して來たら、われ此の短刀を引き拔いて、縱橫無盡に衝きまくつてやらう」といふ、堅い確信を以て戰陣に入るのであります。大王よ、比丘も亦た是の如く、四無礙解の寶珠を其の身に著て居れば、如何なる群集の中に入るにも、下の如き確信を懷いて入ることが能きます。即ち「若し何人かが、義無礙解に關して問題を提出したら、我は、意義を以て意義を說き、理由を以て理由を說き、原因を以て原因を說くことが能きる。斯くて予は彼が疑惑を解き、彼が困惱を芟除し、予が問題の解釋によつて彼を歡喜せしめやう。若し又た何人かが、法無礙解に就て予に問題を提出せば、予は眞理を以て眞理を說き、甘露を以て甘露を說き、無數を以て無數を說き、

以て離欲を說くことが能きる。斯くて予は彼が疑惑を芟除し、彼が困惱を一掃し、予の解釋によつて、彼をして歡喜を得せしめやう。若し又何人かが、詞無礙解に就て問題を提出せば、予は句を以て句を說き、語を以て語を說き、文字を以て文字を說き、連聲法を以て連聲法を說き、子音を以て子音を說き、母音を以て母音を說き、揚音を以て揚音を說き、精髓を以て精髓を說き、法則を以て法則を說き、語法を以て語法を說くことが能きる。斯くて予は彼が疑惑を晴らし、彼が困惱を一掃し、予の解釋によつて、彼をして歡喜を得せしめやう。若し又た何人かが、辯無礙解に就て問題を提出せば、予は頓智を以て頓智を說き、比喩を以て比喩を說き、特性を以て特性を說き、法味を以て法味を說くことが能きる。斯くて予は彼が疑惑を晴らし、彼が困惱を一掃し、予の解釋によつて、彼をして歡喜を得せしめやう」と。大王よ、これ則ち世尊の無礙解と稱せられるものであります。

「先づ此の無礙解の寶珠を買ひ、而して汝等の智慧と熟練とを以て煩惱を截斷せよ。
斯くて汝等は一切の痛苦と怖畏とを遠離し、以て天地の兩界を照らすことを得ん。」

次に、大王よ、世尊の七覺支の寶珠は何であるかとならば、謂く、念覺支と、擇法覺支と、精進覺支と、喜覺支と、輕安覺支と、定覺支と、捨覺支とであります。而して、大王よ、此の七覺支の寶珠を以て、其の身を莊嚴する比丘は、人天の全世界を輝かし、照破し、光被して、闇黑を驅逐し、光明を生ぜしめます。大王よ、これ則ち世尊の七覺支の寶珠と稱せられるものであります。

「此の覺支の王冠を著けたる者の前には、人間も天人も共に起ちて恭敬の意を表す。
汝は業を代價として、此の覺支の王冠を買ひ、而して之を冠れ。」』

王『尊者よ、世尊・佛陀の一切商品の市場とは何ですか。』

尊『大王よ、世尊の一切商品の市場とは、佛陀の九分教と、遺身舍利と、其を葬むる聖廟と、及び僧寶とであります。而して其處には、佛陀が、［未來の生に於いて］高貴の門地に生を受くること、富貴・長命・健康・美容・智慧・世間的榮譽・天上的榮譽・及び涅槃等の體得實現を［店頭に］陳列あそばしました。而して其等［數多の商品］の中の何れかを得んと欲するものは、其の代價として彼等の業を與へ、彼が欲するものを買ふのです。即ち或者は持戒を以て買ひ、或者は布薩日の行持を以て買ひ、是の如くにして、下は最小の業に至るまで、或は最大、或は最小、種種樣樣の［法の商品たる］福樂を買ふのであります。大王よ、それは恰も貿易商の店頭にある油・種實・豌豆・菽荳などは、小量の米・豌豆・菽荳などと交換し、又は小額の錢で、所要のものを買ふことが能きるやうなものであります。世尊の市場も亦た是の如く、何でも所要の品は、業といふ錢で買ふことが能きます。大王よ、これ則ち世尊の一切の商店の市場と稱せられるものであります。

「長命と、健康と、美容と、天上界に生ることと、高貴の家に生ることと、

人は大小の業を以て、「其の欲するものを」買ふことを得るなり。

比丘衆よ、來れ、而して汝の信根を代價となし、
以て汝等が欲する所の「法の」貨物を買ひ、且つ其を享樂せよ。」

大王よ、世尊の法の都に棲める住民は下に擧ぐる人人であります。即ち經師・律師・論師、法を說く人、本生譚を誦する人、長阿含を誦する人、中阿含を誦する人、雜阿含を誦する人、增一阿含を誦する人、クッダカ・ニカーヤを誦する人、戒法を持つ人、正定に住する人、智慧を有する人、七覺支の靜觀を喜ぶ人、智見を有する人、靜觀のために森林に往來する人、樹下に坐する人、雲天井の下に住ふ人、藁の堆積の上に寢る人、塚の近くに住ふ人、寢るに横臥せざる人、聖道に入れる人、即ち四果中の一若くは一以上を體得せる人、有學の人、四果を享樂する人、即ち或は須陀洹果、若くは斯陀含果、或は阿那含果、若くは阿羅漢果を享樂する人、三つの智見を有する人、即ち諸行無常・三界皆苦・諸法無我の智見を有する人、六神通の人、神通力の人、智慧の圓滿に到達した人、念處に熟達し、正勤に熟達し、如意足に熟達せる人、根と力とに熟達せる人、禪定に熟達せる人、解脫に熟達せる人、色無色より獨立せる、平和安樂の境界に達せる人等であります。然り、世尊の法の都は、竹及び蘆の林の如く、常に此等の阿羅漢が群居し、往來して居ます。故に曰はく、

「法の都に住むものは、貪慾を遠離する人、瞋恚を遠離する人、愚癡を遠離する人、

無漏の人、煩惱を捨離する人、渴愛もなく、貪愛もなき人なり。
法の都に住むものは、森林を家とする人、頭陀を行ずる人、
思慮深き人、粗衣を被る人、寂靜を樂む人、智ある人なり。
法の都に住むものは、臥處にありても常に坐して眠る人、
行住坐臥に靜慮する人、投棄せられたる衣を纏へる人等なり。
法の都に住むものは、三衣を纏ひ、寂靜にして、第四として皮を有する人、
一日一食して樂める人、賢き人等なり。
法の都に住むものは、誠實なる人、深慮ある人、少量を取りて貪婪の情なき智ある人、
布施を受くるも受けざるも滿足する人等なり。
法の都に住むものは、靜慮の人、靜慮を樂む人、安樂の心を持する勇士、
念力堅牢の人、涅槃を欣求する人等なり。
法の都に住むものは、道を行ずる人、果の上に立てる人、
或る果を體得するも尙有學の人、其目的を最上の目標に向ける人等なり。
法の都に住むものは、聖流に入れる人、穢垢を捨離して、

地上に今一たび生るべき人、更に再生せざるべき人、及び阿羅漢等なり。

念を攝する方法に熟達せる人、七覺支の靜觀を樂む人、智見に富める人、
法の言語を持つ人、此等は法の都に住む人なり。
如意足に熟達せる人、靜慮を樂む人、正勤に熱心なる人、此等は法の都に住む人なり。
六神通を圓成せるもの、四念處を樂めるもの、
空中に飛行する力あるもの、此等は法の都に住む人なり。
俯向き勝の人、言語を愼む人、感官の窓を善く護る人、己に克つ人、
最上無上の「佛」法によつて善く訓練されたるもの、此等は法の都に住む人なり。
三明を有するもの、六通を有するもの、神通を圓成せるもの、
智慧を圓成せるもの、此等は法の都に住む人なり」と。

復た次に、大王よ、無量の最上智慧の語を心に受持する比丘、執著を遠離せる比丘、不可量の功德あり、不可量の名聲あり、不可量の力あり、不可量の光榮ある比丘、法輪を轉ずる比丘、智慧の圓成に達せる比丘、是の如きは、世尊の法の都に於いて、法將と呼ばれます。

復た次に、大王よ、神通力を有する比丘、無礙を學せるもの、確信を有するもの、空中を飛行するもの、反對され得ざるもの、打ち勝たれざるもの、支持なくして行動するもの、大地を搖がすもの、水上に休息するもの、日月に觸れ得るもの、其の身を變化し、動かざる決心と、向上的精神に富める

もの、神通の圓成に達せるもの、是の如き比丘等は、世尊の法の都に於て、近臣と呼ばれます。

復た次に、大王よ、頭陀を行ずる比丘、少欲知足のもの、布施を求むる態度に關する規則の破棄者を憎むもの、摶食のために次第に歩くこと、蜂の花を追ふが如くするもの、［乞食し已って］閑靜なる森林に入り去る人、身體と生命とに就て心を平にする人、阿羅漢果に逮達せる人、頭陀行の功德に最上の價値を置くもの、是の如き比丘衆は、世尊の法の都に於て、裁判官と呼ばれます。

復た次に、大王よ、清淨潔白なる比丘、煩惱を滅盡して餘習なきもの、衆生の墮ち且つ昇ることを善く知るもの、天眼を圓成せるもの、是の如きの比丘等は、世尊の法の都に於いて、光明の施與者と呼ばれます。

復た次に、大王よ、多くの傳說を學べるもの、傳承されたるものを傳ふるもの、法を持つもの、律を持つもの、論を持つもの、文字の清音濁音・長音短音・輕音重音を巧に決定するもの、九分敎を暗記するもの、是の如きの比丘衆は、世尊の法の都に於いて、護法者と呼ばれます。

復た次に、大王よ、律に博學なる比丘、律を熟知するもの、罪過の因緣を巧に看破するもの、行爲の有罪無罪を決定することに巧なるもの、罪の輕重を巧に決定するもの、贖罪の可否を巧に決定するもの、罪の生起・承認・赦免・自白等の問題を巧に決定するもの、罪人の停權・回復・辯護に關する問題

と呼ばれます。

復た次に、大王よ、聖解脱の蓮華の花冠を眉の上に戴ける比丘、有ゆる境界のうち、最高最善、最上の境界に達せるもの、數多の人類を愛護し戀慕するもの、是の如き比丘は、世尊の法の都に於いて、「花賣り」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、四聖諦の了解に徹底せる比丘、及び彼等自らの眼を以て四聖諦を看破せる者、人を教ふることの巧みなるもの、沙門の四果に就て、疑惑を掃蕩し、超過せるもの、安樂の境界を體得せるもの、自己の得たる果實を、他の入道者に分與するもの、是の如き比丘は、世尊の法の都に於いて、「果實賣り」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、正義の勝妙なる芳香を以て灌頂せられ、種種樣樣の徳を賦與せられ、罪障と煩惱との惡臭を掃蕩することの能きる比丘衆、是の如き比丘は、世尊の法の都に於いて、「香賣り」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、法の中にありて歡喜し、愛語し、高遠精妙なる論と律との中にありて、無上の法悦を感じ、森林または樹下、若くは空閑の所にありて、法の妙液を飲み、身に於いても、口に於いても、意に於いても、恰も自ら法の妙液の中に投入せるが如くし、種種なる法の中に、巧に深遠の眞理を求めて之を看取し、且つ其を說き、少欲を談じ、知足を談じ、寂靜を談じ、遠離を談じ、精進を

談じ、正行を談じ、正定を談じ、智慧を談じ、解脱を談じ、解脱の確信より生ずる智見を談じ、而して其の談話の妙味を飲んで「修養の足らざる所を」補ふもの、是の如き比丘は、世尊の法の都に於て、「渇せる人、または飲客」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、夜の初更から深夜まで、眠らない慣習に耽るもの、從晝至夜、坐するにも、立つにも、歩くにも、常に正定に住するもの、觀念冥想の慣習に耽り、自らの利益のため、煩惱の鎮定に熱中するもの、是の如き比丘は、世尊の法の都に於いて、「監守人」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、意義にまれ、言詞にまれ、論説にまれ、解釋にまれ、理由にまれ、例證にまれ、佛陀の九分教を談話し、告げ語るもの、是の如き比丘は、世尊の法の都に於いて、「法の賣り子」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、法の寶の資産に富めるもの、傳說及び聖典の資産に富めるもの、符號と母音と子音とを會得するもの、而して其の智識を以て、之を諸方に暢達するもの、是の如き比丘は、世尊の法の都に於いて、「法の銀行家」と呼ばれます。

復た次に、大王よ、微妙の敎訓に徹底するもの、實行さるべき靜慮の對象の、解釋と分類とを會得するもの、訓練修學の一切の微妙なる點に於て、完全圓滿なるもの、是の如き比丘は、世尊の法の都

大王よ、世尊の法の都は、是の如く善く設計せられ、是の如く善く築造せられ、是の如く善く指定せられ、是の如く善く設備せられ、是の如く善く建立せられ、是の如く善く警衛せられ、是の如く善く保護せられ、是の如く敵者の襲擊に對して、難攻不拔の防備をしてあります。大王よ、陛下は、此の理由、此の因緣、此の說明、此の推論によつて、世尊が曾て〔世に〕存在せしことを知らねばなりませぬ。

「人は善く設計されたる都府を見て、推理によつて、其の設立者の、如何に偉大なりしかを知るが如く、世尊の卓絕せる法の都を見て、推理によつて、渠が存在せしことを知る。

人は波を見て、推理によつて、世界を圍める大海の、偉力と廣大とを判斷するが如く、廣大なる人天の世界に、寄せては返へす正法の波を見て、煩惱を滅盡し、一切の悲惱を鎭め、其の門徒をして、再生の渦卷より脫れしめ給へる佛陀の、如何に偉大に、如何に卓絕し給ひしかを、類推察知せざるべからず。

人は雲表に聳ゆる高塔の頂上を以て、大雪山の高さの如何に驚くべきものなるかを類推判察するが如く、佛陀の法山の、一切の煩惱妄想を寄せつけず、狂ひ叫べる情慾の疾風にも動せず、巍然として、高く寂靜平和の雲表に聳ゆるを見て、其の力量の如何に偉大に、如何に卓絕せるかを類推判察するを得ん。

人は、象王の足跡を見て、如何に彼の形量の偉大なりしかを推知判察するが如く、人人の踏み來し路の上に、人中の象たる佛陀・賢哲の印し給へる足跡を見て、如何に佛陀の偉大にましませしかを推知すべし。

人は、一切の生類の戰慄し慴伏するを見て、獸王の咆哮せるものなることを知るが如く、他派の教師等の恐懼畏縮して、跳躍逃避するを見て、法王の獅子吼の如何に莊嚴なりしかを察知するなり。

人は、大地の善く、灌漑せられ、草「木」の欣欣乎として生ひ繁れるを見て、歡喜の大雨降り濕ほせりと言ふが如く、一切衆生の欣び樂み平和なるを見て、彼等の心を鎭めたる法雨の、如何に妙なりしかを推知せざる可らず。

人は、大地の濕ひ、泥濘となり、沼澤となれるを見て、大いに雨降りしことを推知するが如く、煩惱の泥濘のために眩まさるる衆生の、法流によつて洗ひ去られ、正法の大海に托せられ、人閒も天人も皆等しく、或者は此處に、或者は彼處に、甘露の波に全身を浸し潔めらるるを見て、法雲の如何に大なるかを推知するなり。

人人の旅するに當り、彼等を喜ばしむる、妙なる芳香の、到る處に充ち滿てるを感じて、今や確

して、曾て無上の佛陀の住し給ひしことを推知するなり。」

大王よ、是の如き百千の理由、百千の論證、百千の説明、百千の比喩を以て、我等は佛陀の偉大なりしことを顯示することが能きます。大王よ、そは恰も悧潑な華鬘製造人が、有ゆる種種の一束の花を以て、其の師匠より習つた通りに、又は彼自らの個性をも加味して、種種の變化ある美しい華鬘を造るやうなものです。卽ち佛陀は無量無邊の功德ある、種種なる花の一束であり、私は勝者の教會にあつて、其等の花を絲に通す華鬘製造人です。而して先師の「敎へ給へる」道に隨ひ、且つ私自らの智慧を用ひ、無量の比喩を擧げ、類推によつて、佛陀の偉力を顯示することが能きます。』

王『尊者よ、是の如く比喩を擧げ、類推によつて、佛陀の偉力を顯示せんことは、何人も難しとする所であります。私は、此の問題に對する、貴衲の十分にして種種なる説明を拜聽して、滿足喜悅の至に堪へませぬ。』

卷の第六

頭陀行に就て

王は、比丘衆の世間を遠離して、寂莫たる森林に於いて、頭陀の行を守れるを見、而して又家庭生活をなせる俗人等も、尙且聖道の美味なる果實を食ふを見、此の兩者に就いて深き疑問を起しぬ。

「若し俗人と雖も亦た眞理を實現せば、頭陀の行を守るは、確に無益の業ならざる可らず。いでやわれ、之より、三藏に通曉し、常に敵者の論難を折伏する善智識に是を問ひ、我が疑問を解決せむ」と。

爾の時に、彌蘭陀王は那伽犀那尊者を其の住處に訪づれ、そして彼の前に頭を下げ、却いて一面に座を占められた。坐し已つて彼は、那伽犀那尊者に向つて謂く、

『那伽犀那尊者よ、世には家庭の生活を營み、五欲の樂を縱にしつつ、妻子の繫累に縛せられ、ベナレス產の栴檀香を用ひ、華鬘・香水・香粉を用ひ、或は金銀を受用し、又は金剛石・眞珠・黃金等を鏤め

りますか。』

尊『大王よ、世には百人のみならず、二百・三百・五百・六百人のみならず、千人のみならず、十萬人のみならず、千萬人のみならず、一億人のみならず、十億人のみならず、涅槃を實現したものがあります。卽ち明かに四聖諦を體得せる者は二十・三十・乃至百千を以て數へ盡せない程あります。で、衲は如何なる順序方法に依て、その證據を陛下に示しませうか。』

王『何うぞ、御隨意に說明して下さい。』

尊『はい、かしこまりました。大王よ、佛陀の九分教の中に於ける神聖の生活、頭陀の功德の實行、聖道の體得等に關する章句は、皆これに關係して居るのであります。大王よ、高處・低處・起伏せる處・燥地・濕地等の地方に降れる雨は、皆流れ流れて、大水を湛へる大海に於て一緒になります。今それ佛陀の九分教中に於ける神聖の生活、聖道の體得、幷に頭陀の功德の實行等に關する諸の章句は、雨水の大海に集注するが如く、この一點に集注されねばなりませぬ。而して私の經驗、私の智慧を以てする、此の道理の說明も、亦た此の一點に集注せねばなりませぬ。斯くて此の事件は充分に分析せられ、美を盡し、善を盡すことが能きませう。大王よ、彼の堪能なる書道の先生は、人の要求によりて、その書き方の熟達せる樣子を示すに當り、彼の經驗と智識とによりて、書法を說明し、以て書き方を補ひ、斯くて其書を完全にし、無缺にするでせう。衲も亦た是の如く、經驗と智慧とを以てする道理

の說明を此の一點に集中せねばなりませぬ。かくて此の事件は充分に分析せられ、善を盡し、美を盡すことが能きませう。

大王よ、(一)舍衞城內に、約五千萬の世尊の聖弟子・優婆塞・優婆夷が道を行じて居ました。が、其中三十五萬七千人は阿那含果を體得しました。又而して彼等は皆俗人にして敎團の團員卽ち比丘ではありませんでした。又かの(二)ガンダムバ樹の下に二重の奇蹟が起つた時、二億萬の衆生が四聖諦の了達に徹底しました。而して又た諭羅睺羅經の演說に於いても、大吉祥經の演說に於ても、(三)サマチッタ經の演說に於ても、(四)敗亡經の演說に於いても、(五)プラーベーダ經の演說に於ても、(六)カラハ・ギヴーダ經の演說に於いても、(七)小經の演說に於いても、(八)大經の演說に於いても、(九)ツヴタカ經の演說に於いても、舍利弗品經の演說に於いても、無數の天人等が眞理の智慧に徹底しました。

又王舍城に於いて、三十五萬の聖弟子・優婆塞・優婆夷等が道を行じて居ました。而して又彼の大象(10)ダナパーラを馴致する時は、九億萬の衆生

【一】サーヴッティ Sāvatthi.
【二】ガンダムバ Gaṇḍamba.
【三】サマチッタ Samacitta.
【四】巴利語諸經要集・蛇品第一・敗亡經第六。
【五】プラーベーダ Purābheda. 諸經要集・八八品第四プラーベーダ經第十。
【六】カラハ・ギヴーダ Kalaha-vivāda. 諸經要集八八品第四・鬪諍經第十一。
【七】諸經要集八八品第四・小經第十二。
【八】同前大經第十三。
【九】ツヴタカ Tuvaṭaka. 同前第十四。
【一〇】ダナパーラ Dhanapāla.
【一一】パーサーニカ Pāsāṇika.
【一二】パーラーヤナ Pārāyana.

五千萬の衆生(一三)インダサーラ洞窟にありては、八億萬の天人、鹿野苑に於ける初轉法輪の時は、一億八千萬の梵天及び無量の諸天、三十三天の(一四)パンヅ・カムバラ岩の上に於いて阿毗達磨を說かれる時は、八億萬の天人、幷に諸天の世界より降下して(一五)サンカッサ城の門口に集まれるもの、及び此世に奇蹟を現はせる三億萬の人天の佛弟子等が、四聖諦の智慧に徹底しました。而して復た迦毗羅衛城の釋迦族に向つて(一六)ニグローダ寺に於いて佛種姓經を說かれる時、大會經を說かれる時は、算數も及ばざる程の無量の諸天が佛法の智慧に徹底しました。又彼の華鬘製造人の須摩那の事件に關する集會の場合、(一七)伽羅波陳那の事に關する集會の場合、富豪阿難陀の事に關する集會の場合、裸形外道(一八)ジャムブカの事に關する集會の場合、(一九)マンヅーカ天の事に關する集會、(二〇)マッタ・クンダリ天の事に關する集會の場合、娼婦(二一)スラサーの事に關する集會の場合、(二二)シリマーの事に關する集會の場合、機織娘の事に關する集會の場合、(二三)スバッダーの事に關する集會の場合、(二四)サーケータ婆羅門の火葬を見物する場合、(二五)スーナーパランタの事に關する集會の場合、帝釋天の提出に係かる問題に關する集會の場合、雜文經に於ける(二六)ティロークッダ經の演說の場合、寶敎の演說の場合、此等の一つ一つの場合に於て、佛法の智慧

【一四】Paṇḍu Kambala.
【一五】Saṅkassa.
【一六】Nigrodha.
【一七】Garahadinna.
【一八】Jambuka. 長老偈二八三頌乃至二八六頌參照。
【一九】Maṇḍūka.
【二〇】Matta-kuṇḍali.
【二一】Sulasā.
【二二】Sirimā.
【二三】Subhaddā.
【二四】Sāketa.
【二五】Sūnāparanta.
【二六】Tirokuḍḍa Sutta.

に徹底せるものが八萬四千人ありました。大王よ、世尊が此の世に在して、三大地方十六箇國に止住したまうた間は、二三四五百・千・萬の人天等が、平和至高の涅槃を實現せしを見るのは、尋常普通の事でありました。而して彼等は皆天人、若くは俗人のみで、比丘ではありませんでした。大王よ、是の如く多數の諸天にして、而も尚五欲の樂に耽り、家庭生活を營める俗人でも、目の當り平和至高の涅槃の境界を實現致しました。』

王『那伽犀那尊者よ、若し是の如く、家庭の生活を營み、五欲の樂を縱にせる俗人にして、尚且つ涅槃を實現することが能きるならば、頭陀の行は何の役に立ちますか。若し是の如くんば、寧ろ彼の頭陀の行は、惡戯の行でなければなりませぬ。何となれば、尊者よ、若し疾病が藥を服まずに癒るならば、吐劑・下劑・及び其の他の藥を飲んで、體を弱めて、何の利益になりますか。若し人が拳固一つで、敵を征服することが能きるならば、劍・槍・投槍・弓・鋒・棍棒等の必要はないではありませんか。若し人が節だの、屈曲だの、穴だのを頼つて木に上ることが能き、或は木に生える瘤・蔦・及び枝などを頼つて、その木に上ることが能きるならば、長い強い梯を探す必要はないではありませんか。若し地べたに睡つて、四肢五體が安らかならば、奇麗な肌觸りのよい、柔かな臥床を尋ね求めて何になりますか。若し人が危險にして恐るべき沙漠を、一人で越すことが能きるならば、大商隊を組み、武裝し

必要はないではありませんか。若し人が自己の財産を以て、飲食家屋を準備し得るならば、如何ぞ他の爲めに奉仕し、甘言を以て主に媚び、彼方此方と走り廻つて、面倒を見ませうぞ。是の如く、尊者よ、若し家庭の生活を營み、五欲の樂を縱にする俗人が、平和の境界、最上善、卽ち涅槃を實現することが能きるならば、殊更に頭陀の行を營む必要はないではありませんか。』

『大王よ、頭陀の行には二十八の善德があります。諸佛は皆等しく其の德を願望し、其の德を欣求し給ひました。其の二十八德とは何であるか、謂く、生活の淸淨なること、平和極樂の果あること、罪垢なきこと、他を害せざること、怖畏なきこと、他を苦しめざること、專ら善を成長せしむること、身心を荒廢せしめざること、詐瞞なきこと、其れ自らにして一種の保護なること、願望を滿足すること、一切衆生から懷しがられること、善く己に克つこと、出家者に相應はしきこと、自立すること、解脫を得ること、貪慾を斷滅すること、瞋恚を斷滅すること、愚癡を斷滅すること、高慢を捨離すること、惡想を斷ずること、疑惑を捨離すること、怠惰の念を制すること、不滿足を捨離すること、忍耐すること、その功德の無量なること、その功德の無限なること、一切の苦惱の斷滅の道なること、是れ則ち頭陀行の二十八の善德であります。而して諸佛は皆等しく是を願望し、欣求し給ひました。

大王よ、この頭陀の行を充分になし遂ぐる者は、何人と雖も十八の善德を備ふることが能きます。十八の善德とは何であるか。謂く、其の行爲の淸淨なること、その道を完成すること、身業と口業と

を善く保護すること、心業の清淨なること。その精進の退廢せざること、一切の怖畏を鎭められること、個性の一切の煩惱を捨離すること、一切衆生に對して慈悲の念起り、瞋恚の念全く滅亡すること、食物を取るに三種の正見を以て其の身を養ふこと、諸の人より尊崇せらるること、食物を節すること、常に細心細慮なること、家の必要なきこと、快適の處あれば何の處と雖住ひ得ること、惡行を忌むこと、平和を樂しむこと、常に誠實なること、これ則ち完全に頭陀の行を行ずる者に自然に備はる十八の善德であります。

次に、大王よ、頭陀の行に固有なる十種の利益があります。卽ち信念あること、惡口を恥づること、勇氣あること、僞善を捨離すること、自ら己の主なること、變心せざること、學を好むこと、喜んで難行に趣くこと、罪を犯し得ざること、慈悲の念強きこと、これ則ち頭陀の行を行ずるものに固有なる十種の利益であります。

大王よ、家庭の生活を營み、五欲の樂に耽ける俗人にして、尙善く平和至高なる涅槃の境界を實現し得る所以の者は、皆彼等が宿世に於て、この十三の頭陀行を修行し、訓練し、以て其根柢を植ゑ、彼の行爲を清淨ならしめたからであります。卽ち是の如くにして、五欲の樂に耽る家庭生活の俗人と雖も、平和至高なる涅槃の境界を實現するのであります。大王よ、それは宛も堪能なる弓手が、正規の

方、指の曲げ方、足の置き方、矢の取り上げ方、絃の上に矢の付け方、弓の張り方、狙の定め方、例せば藁人形・チャナカ・草・藁・土等を以て造れる的を射らしむることを敎へ、それから王に奉仕する者として、彼等を紹介致します。茲に於て彼は、王から馬車・象・馬・金・穀物・下女・下男・妻及び土地を賞與せられます。是の如く、大王よ、凡ての俗人にして五欲の樂に耽り、家庭生活を營みながら、尙ほ善く平和至高なる涅槃の狀態を實現し得る所以のものは、皆彼等が宿世に於て、十三の頭陀行を實行し、彼等の行爲を淸淨にし、以て其の根柢を養つたからであります。

大王よ、宿世に於いて誓行を修せざる、單一の生には、決して阿羅漢果の實現はありませぬ。只勇猛精進し、熱心に正義を實行し、善智識の導びきによりてのみ、阿羅漢果の實現が能きます。大王よ、そは宛も醫者若くは外科醫が、始めて先生を取り、月謝を拂ひ、若くは年期奉公をなして、刃針を取ること、切開すること、突き刺すことを習ひ、又た傷を消毒し、其を乾かし、膏藥を貼り、吐劑及び下劑の盛り方を習ひ、及び灌腸を行ふことを習ひ、而して十分の練習を經て、其年期奉公をすまし、自ら其の業に熟達して、遂に病人を診察し、彼等を平癒せしめ得るやうなものであります。大王よ、家庭生活を營み、五欲の樂に耽ける俗人にして、尙善く平和至高なる、涅槃の狀態を實現するのは、皆彼等が宿世に於いて、十三の頭陀行の功德を營なみ、その行爲を淸淨にし、以て其の根柢を養つたからであります。

大王よ、頭陀行を守り、その功德によりて、淨化された人でなければ、眞理の體得は能きませぬ。一切の種子は水が無くては、成長することの能きないやうに、頭陀行を守り、その功德によりて淨化されたものでなければ、眞理の體得は能きませぬ。又功德多き行履を打せず、美しき行爲をなさざるものは、極樂に再生すること能はざるが如く、頭陀行の實行によりて、淨化されたものでなければ、眞理の體得は能きませぬ。頭陀行を守つて得られる結果は、淸淨ならんと欲するものに取りて、その地盤となること、恰も大地の如なものであります。頭陀行の功德は、淸淨ならんと欲する人に取りて、一切煩惱の垢を洗ひ去ること、宛も水の如なものであります。頭陀行の功德は、淸淨ならんと欲する人に取りて、一切煩惱の貪欲を燒き盡すこと、恰も火の如なものであります。頭陀行の功德は、宛も風の如く、淸淨ならんと欲する人の、一切煩惱の塵を吹き散らします。頭陀行の功德は、宛も藥の如く、淸淨ならんと欲する人の、煩惱の病を鎭めます。頭陀行の功德は、恰も不死の藥の如く、淸淨ならんと欲する人の煩惱の毒を消します。頭陀行の功德は、宛も開拓された土地の如く、淸淨ならんと欲する人にとりて、出家の功德の作物を成長せしめます。頭陀行の功德は宛も如意寶珠の如く、淸淨ならんと欲する人の、渴仰する高尚なる位置の到達を賦與します。頭陀行の功德は宛も船の如く、淸淨ならんと欲する人を、輪廻の大海から彼岸に乘せて行きます。頭陀行の功德は宛も避難所の如く、

く、清淨ならんと欲する人をして、罪惡の害を免れしめます。頭陀行の功徳は宛も父の如く、清淨ならんと欲する人を奮起せしめ、出家者の善功徳を増長せしめます。頭陀行の功徳は宛も朋友の如く、清淨ならんと欲する人をして、出家者の善功徳を追求する場合に失望せしめませぬ。頭陀行の功徳は宛も蓮華の如く、清淨ならんと欲する人をして煩惱の垢に染ましませぬ。頭陀行の功徳は宛も高價なる香料の如く、清淨ならんと欲する人の煩惱の惡臭を消します。頭陀行の功徳は宛も巍峩たる高山の如く、清淨ならんと欲する人をして、八風の襲撃より遁れしむる保護となります。頭陀行の功徳は、宛も虚空の如く、清淨ならんと欲する人をして、一切の障碍を脱せしめます。頭陀行の功徳は宛も河の流の如く、清淨ならんと欲する人の一切煩惱の垢を洗ひ去ります。頭陀行の功徳は宛も案内者の如く、清淨ならんと欲する人をして再生の沙漠を脱し、貪欲罪障の藪林を脱せしめて安全ならしめます。頭陀行の功徳は、宛も大商隊の如く、清淨ならんと欲する人をして、無畏にして平和至高なる涅槃の花の都に安全に連れ行きます。頭陀行の功徳は宛も楯の如く、清淨ならんと欲する人より、煩惱の棍棒・矢・及び劍の類を防ぎます。頭陀行の功徳は恰も日蔭の如く、清淨ならんと欲する人をして、貪瞋癡の三火の炎熱より遁れしめます。頭陀行の功徳は宛も月の如く、清淨ならんと欲する人によりて、渇仰せられ、翹望せられます。頭陀行の功徳は宛も太陽の如く、清淨ならんと欲する人の爲に、無明の暗黒を掃蕩します。頭陀行の功徳は宛も大海の如く、清淨ならんと欲する人に、出家者の功徳の法

藏を起さしめます。大王よ、頭陀行の功徳の廣大無邊にして、算數の能く及ぶ所にあらざることも、亦た大海のそれの如くであります。

大王よ、頭陀の行は、是の如く、清淨ならんと欲する人に對して、大なる任務をなし、苦惱を掃蕩し、不滿足を打ち消します。又それは怖畏・我見・及び心の閉塞を除去し、惡・悲惱・苦痛・貪欲・瞋恚・愚癡・高慢・邪見及び一切の煩惱を芟除し、而してそは名譽・利益・幸福を齎らし、安樂・慈愛・及び平和を將來し、非難を免れしめ、善果を得せしめ、算數の及ぶ能はざる、善根功徳の寶鑛となります。

大王よ、そは滋養を得んと欲する者の食物を求め、健康ならんと欲する者の藥を求め、援助を求むる者の友を求め、水を渡らんとする者の船を求め、芳香を欲する者の香水を求め、安全を求むる者の避難所を求め、教育を願ふ者の先生を求め、名聲を欲する者の王たらんことを求め、如意を求むる者の如意寶珠を求むるが如く、阿羅漢等は、出家者の有らゆる利益を得んがために、頭陀行の功徳を追求するのであります。

また、大王よ、水は種子の生長のためとなり、火は物を燒くためとなり、食物は力を與ふるためとなり、葛は物を縛ばるためとなり、劍はものを切るためとなり、水は渇を醫するためとなり、財寶は信用を寄與する爲めとなり、船は彼岸に渡るためとなり、藥は病を癒すためとなり、籠は安樂に旅行するためとなり、避難所は恐怖を鎭むるためとなり、王は保護のためとなり、楯・杖・棍棒・矢・投槍は

攻撃を防ぐためとなり、母は成育のためとなり、鏡は見るため、寶石は裝飾のため、衣服は著るため、梯は高きに昇るため、天秤は量るため、呪文は誦吟のため、武器は侮蔑を防ぐため、燈は暗を照らすため、微風は熱を鎭むるため、技術の智識は事業完成のため、藥物は生存保持のため、鑛山は寶石を出すため、寶珠は莊嚴のため、命令は違反を防ぐため、主權は領土の統轄のためとなります。

大王よ、頭陀の行の遵守より生ずる特性は、出家の種子を成長せしめ、煩惱の垢を燒き拂ひ、神通の力を與へ、克己の爲に自らを制し、一切の疑惑と不信とを斷ぜしめ、愛著の渇を鎭め、眞理の實現に關して信用を與へ、四河の彼岸に渡らしめ、煩惱の病を癒し、涅槃の樂を得せしめ、生・老・病・死・悲・苦・惱・及び失望より生ずる畏怖を鎭め、出家の諸の利益を保護し、不滿足と惡想とを防ぎ、出家者の善生活の教導となり、諸の人に對して平和・智見・道及び涅槃の說明となり、世間の賞讚と歎美との高價なる裝飾を得せしめ、一切の煩惱の窓を閉ぢ、出家の高山の頂に上らしめ、執拗・狡猾・及び他人に對する惡意を滅せしめ、實行すべき事と、實行すべからざる事との性質を區別せしめ、人の敵たる一切の煩惱を防ぎ、無明の暗を拂ひ、貪瞋癡の三火より生ずる熱を鎭め、平和微妙溫厚なる狀態の實現を完成せしめ、出家的生活の功德を保護し、七覺支の高價なる寶珠を生ぜしめ、念・精進・喜・寂靜等の出家者の莊嚴となり、平和より生ずる處の無疵・深遠・微妙なる幸福を破壞する者を防ぎ、出家及び阿羅漢の愛好する一切の德を主宰します。大王よ、頭陀行の遵守は、是の如く諸の德を體得せしめ

ます。その利益は、量ることも能きねば、其に比すべき物もなく、敵對すべきものもなく、超越するものもありませぬ。

大王よ、其の心に惡欲を有し、僞善貪欲にして、胃の腑の奴隷となり、物質的利益、幷に俗世の名譽、繁榮を求むるものは、皆悉く阿羅漢に相應しからざる所であります。又眞理の實現に到達せざる者は、その行持、教團の團員たるに相應しからず、價値なく、不穩當なる者であります。是の如き人は何れも皆二重の刑罰を招き、自ら有する善功德の損失を蒙ります。何となれば彼は此の世にありては、嫌忌せられ、輕蔑せられ、嘲弄せられ、絕交せられ、放逐せられ、未來に於ては、阿鼻地獄の大苦惱を受けねばならぬからであります。その阿鼻地獄は、深さ一百由旬にして、炎炎たる猛火を以て莊嚴せられて居ます。而して彼は一萬年の永きに亙りて、その地獄の中に昇降浮沈すること、宛然、煮え立つ海の中に投げ込まれたるが如くであります。而してその地獄を遁れ出づるや、僧侶の姿をなせる大餓鬼となり、その四肢五體は痩せ細りて、獰惡・深酷の狀を呈し、その頭は脹れ上り、飢と渴とに攻められ、奇怪殘忍の色を呈し、その耳は裂き取られ、その眼は常に目ばたきし、その四肢は苦痛に攻められ、その全身は狂想の餌となり、その胃の腑は微風の中に燃えつつ、猛火の如く熱くなり、口はあれども針よりも小さく、從つて其渴止む時なく、避くるに避難所なく、助くるに保護者なく、

慈悲・憐愍を請うて呻吟し、悲鳴をあげつつ、地上を泣き廻はらねばなりませぬ。

大王よ、王たるに適せず、相應しからざる、價値なき、卑賤の家に生れた者が、王者たる灌頂を受くれば、彼は其手を切られ、足を切られ、手足を切られ、耳を切られ、鼻を切られ、耳鼻を切られ、若くは粥鍋の中に入れられ、硨磲の如く剃髪せられ、ラーフ口に入れられ、火の華鬘を冠せられ、手を燈明にせられ、蛇の皮を剝ぐが如く皮を剝がれ、木の皮を著せられ、羚羊の如く斑點を付せられ、鹽水もて煮られ、藁の座の上に坐らせられ、若くは煮沸せる油を灌がれ、又は犬に喰はされ、其の他種種の刑罰を受けて、苦しまなければなりませぬ。何となれば彼は王者たるに適せず、相應せず、價値なき、卑賤の家に生れ、自ら稱して王となり、王者の位に卽き、其の權力の制限を超え、違反の罪を犯したからであります。大王よ、心に惡情を懷き、僞善貪欲にして、胃の腑の奴隷となり、物質的利益幷に俗世の名譽と光榮とを願ひ、阿羅漢たるに適せず、其行持、敎團の人たるに相應しからず、價値なく、不相應の行あるものが、頭陀の行を行せんと欲する場合も亦た是の如く、彼は二重の刑罰を招き、彼が心に有せる善功德を失して、苦を受けねばなりませぬ。何となれば此の世に於いては、輕蔑せられ、嘲弄せられ、非難せられ、排斥せられ、絕交せられ、拒絕せられ、未來に於いては、深さ百由旬にして、炎炎たる猛火を以て莊嚴せる大阿鼻地獄に墮ちて、一萬年の永きに亙り、其の中に昇降浮沈し、大苦惱を受けねばならぬこと、宛然、煮沸せる大海に投入せられて、游ぎ廻るが如くせなければならぬからであります。而して彼は其の阿鼻地獄を出でてのち、僧侶の外形をなせる大餓鬼

となり、其の四肢五體は痩せ細りて、深酷猛惡の狀を呈し、其の頭は脹れ上り、飢渴にせめられ、奇怪殘酷の形色を呈し、其の耳は全く引き裂かれ、その眼は常に目ばたきし、其の四肢は非常の苦痛を受け、全身狂想の餌となり、その胃は、微風に燃え上る竈の如く、燒熱せられ、而も其の口は針よりも小さく、渴は常に止む時無く、遁るるに避難所なく、助くるに保護者なく、慈悲憐愍を乞うて呻吟し、悲鳴し、叫喚して、大地を泣き廻らねばなりませぬ。

されど、大王よ、阿羅漢たるに適し、教團の團員たるに相應しき行をなし、比丘たる價値あり、比丘たるに適し、少欲知足にして、獨棲を樂み、俗交を好まず、精進勇猛にして決心固く、詐僞の念なく、狡猾の心を去り、畏怖の奴隷とならず、物質的利益、若くは世俗の名譽光榮を求めざる者が、發心して教團の人となり、老死を免れんと欲せば、是の如き人は、皆悉く信心堅固にして、頭陀の行を修し、二重の名譽を受くるに足ります。何となれば彼は人天のために愛せられ、渴仰せらるること、宛も素馨の花の如く、若くは渴者の水を望むが如く、又は毒を仰げる人に對する解毒劑の如く、急げる旅人に對する駿馬の馬車の如く、利益を得んと欲するものに對する、如意寶珠の如く、王位を得んとの野心あるものに對する、主權者の純白なる日傘の如く、神聖ならんことを求むる者に對する、阿羅漢果の到達の如くなるからであります。彼は實に四念處・四正勤・四如意足・六神通・五根・五力・七覺

を體得します。一言以て之を言へば、出家者たる一切の教は、彼自らのものとなり、灌頂せられたる王者の如く、純白清淨なる解脱の日傘が其の上を蔽ひます。

大王よ、門地高き、帝王の家に生れたる刹帝利の王者が、灌頂(卽位)の式を擧ぐるに當り、諸の市民、諸地方の人民・軍人・從者等の、彼に奉公し、隨侍するが如く、又帝王の三十八部の從者・舞踏者・輕業師・占卜者・式部官・沙門・婆羅門及び各派の信者等が、屢屢その宮廷に到り、而して彼自らは各地方の開港場・鑛山・都會・税官等の主權者となるが如く、阿羅漢たるに適し、教團の團員たるに相應しき行をなし、比丘たるに價値あり、比丘たるに適當し、少欲知足にして獨棲を樂しみ、俗交を好まず、精進勇猛にして決心固く。詐僞の念なく、狡猾の念なく、食欲の奴隷とならず、物質的利益、幷に世俗の名譽光榮を求めざる信念ある者が、眞に發心して老死を遁れんと欲し、教團の人となれば、是の如き人は、信心堅固にして、頭陀の行を修し、二重の名譽を受くるに足ります。何となれば彼は人天のために愛せられ、渴仰せらるること、沐浴し、灌頂せる人に對する、素馨の花の如く、飢者に對する美味の食物の如く、渴者に對する清涼透明の水の如く、毒を仰げる人に對する解毒劑の如く、急げる旅人に對する駿馬の馬車の如く、利益を渴望する人に對する、如意寶珠の如く、王位を得んとの野心あるものに對する、主權者の純白清淨なる日傘の如く、神聖を欣求するものに對する、阿羅漢果の到達の如くなるからであります。彼は善く四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道に

到達し、その心平和にして、智見あり、出家生活の四果を得、四無礙解・三明・六通を體得します。一言以て之を言へば、出家者の一切の教義は彼自らのものとなり、宛も灌頂せられたる王者の如く、純白清淨なる解脱の日傘が彼の上を蔽ひます。

大王よ、人が涅槃の大海に浴して淨化せらるれば、十三の功德行があります。彼は其處に於いて、宛も波の中に遊化するが如く、宗教の法悦に耽り、八等至を專にします。而して彼は天耳通・他心通・宿命通・天眼通・漏盡通の大神通を得ます。

十三の功德とは何であるか、謂く、(一)持糞掃衣(二)但持三衣(三)常乞食(四)次第乞食(五)但一坐食(六)鉢乞食(七)不重受食(八)十阿蘭若(九)樹下居(十)露所住(十一)屍林位(十二)隨處住(十三)常坐眠であります。大王よ、彼は宿世に於て、如法に其行履を打し、是等の十三の行を修し、實行し、遂行し、沙門的生活の一切の結果を獲得し、平和、安樂にして等至を得て居るのであります。

大王よ、開港場に於いて不斷に貨物を徵集し、以て富を集むる船の所有者は、太洋を渡って(二七)ヴンガ(二八)タッコーラ(二九)支那(三〇)ソーギーラ(三一)スラト(三二)アレキサンドリヤ(三三)コーローマンデール、若くは其他の場所に旅行することが能きます。大王よ、前生に於いて如法に其行履を打し、充分に十三

【二七】Vanga.
【二八】Takkola.
【二九】China.
【三〇】Sovira.
【三一】Surat.
【三二】Alexandria.
【三三】Koromandel.

至を得る人も、亦た是の如くであります。

大王よ、農夫が先づ田地の妨害たる雜草・荊棘・石等を除去し、それから耕やし、播き、灌漑し、墻を作り、見張し、收納し、搗き碎いて、多量の粉の所有者となり、貧窮にして乞食の如き難儀に陷れる人の、主人公となるが如く、前生に於て、如法に其の行履を打し、十三の頭陀行を修し、實行し、成就して、沙門的生活の一切の結果を獲得し、平和安樂にして、等至を得るものも、亦た其の通りであります。

大王よ、即位せる王の匪徒を統治し、獨立の主宰者たり、その欲する所を爲し、全國を服從せしむるが如く、宿世に於て十三の頭陀行を修し、實行し、勝者の宗教に於ける主となり、統治者となり、沙門の一切の德を得るに至る者も、亦た是の如くであります。

大王よ、長老(三四)優波犀那・盤巖多弗多は、この十三の頭陀行を充分に實行せしため、舍衛城に住する教團の團員等の締結せる協約の履行を怠りながら、其門徒と共に世尊を訪問して、閑處に退隱し、而して世尊の前に拜跪せる時、恭しく其の側に座を占めることが能きたではありませんか。而して世尊は、彼の從者等の、如何にも善く馴致されて居るのを見給ひし時、心に歡喜し稱讚して、慇懃の言葉をかけ、美しき音聲を以て、優波犀那に問ひ給はく、「優波犀那よ、汝に事へる此等の比丘の擧措は實に美しい。汝は如何して斯くまでに善く汝

【三四】Upasena Vangantaputta.

の徒弟を馴致せしか」と。

優波犀那は、正等覺の佛陀、天中の天によつて、是の如く尋ねられた時、世尊に其眞の理由を告げて曰く「世尊よ、私の教團に入らんと欲して來る者、若くは私の弟子たらんと欲する者に對しては、私は常に下の如く言ひ聞かせます。卽ち予は阿蘭若に住するものである。私の食物は乞食によりて之を得、又糞掃の衣を以て衣として居る。若し汝が私と同じやうに暮らすことが能きるならば、予は汝に教團の人となり、又弟子たることを許してやると。是くて若し彼が喜んで私の命を奉じ、從順に私の意見に從ひますならば、私は彼に教團に入ること、幷に私の弟子たる事を聽許します。が、若し然らざれば私は彼を教團にも入らしめず、私の弟子にも致しませぬ」と。大王よ、人は是の如くして、頭陀行を修して、勝者の宗教に於ける主となり、統治者となり、首長となり、而して平和、安樂にして等至を得るのであります。

大王よ、清淨なる蓮華の、其の始めより光澤あり、柔軟にして芳香を放ち、人に渴望せられ、愛せられ、賞められ、水若くは泥のために染汚せられず、小さな花瓣、雄蕊及び果皮を以て飾り、數多の蜂群の訪ふ所となり、清淨清涼なる流の子となるが如く、聖者の弟子も、亦た是の如く、宿世に於いて如法に其の行を辦じ、十三の頭陀行を修し、實行し、成就して、三十の最高の德を賦與せらる

るのであります。其三十の最上の功德とは何であるか。謂く、彼の心は慈愛に充ち、柔軟なること、一切の惡を殺し、滅ぼし、驅逐すること、剛慢自慢を捨離すること、その信念の不變堅固にして迷はされざること、心の休養を喜び、平和安樂にして等至を讃美し願ふこと、正義の生活の最上無比なる妙香を發散すること、人天のために親近せらるること、阿羅漢、聖者の爲に賞讃せらるること、人天の喜び賞むる所となること、覺者・聖哲・學者の賞讃し、歎美する所となること、現世來世の愛著によりて汚されざること、最微最小の罪に於いても危險を觀ずること、聖道の果實なる財寶、最上の到達を求むるものの財寶、卽ち最善の財寶に富むこと、沙門の四須要物の最善の供養に應ずること、家なくして最善の苦行、卽ち禪定の正念に住すること、全く煩惱の網を脫すること、未來生活の五種の狀態に於ける再生の可能性を破壞し滅盡すること、此の世に於ける向上生活の(三五)五種の障礙を滅盡すること、性格の不變なること、行爲の最上なること、沙門の四須要物に關する規則を犯さざること、再生を免るること、凡ての迷惑を超過すること、その心を完全なる解脫の境界に据ゑ置くこと、眞理を見得すること、一切の恐怖を遁るる安全の場所を得ること、七種の煩惱を根絕すること、大煩惱を破滅すること、平和安樂なる等至の狀態に入ること、沙門の一切の功德を有すること、これ則ち沙門を莊嚴する三十の最上の德行であります。

大王よ、長老舍利弗は、世界の主たる佛陀自らを除けば、十千世界に於ける最善の人ではありませんか。而して彼は無量の歲月に亙つて功德を積み、婆羅門の家に生れ、五欲の樂を捨離し、廣大の財

【三五】五種の障礙とは、貪・瞋・癡・慢・疑を云ふ。

寶を拋棄し、勝者の敎に從つて敎團の人となり、其の行、其の言葉及び思想を抑制するに、十三の頭陀行を以てし、現世に於て世尊に次ぐ最上の功德の人となり、ゴータマ世尊の敎に於て、法輪を轉ずる人となりました。是の故に、天中の天たる世尊が、雜阿含經の中に、

「比丘等よ、我は舍利弗の如く、善く我に次いで法輪を轉ずる者あるを知らず。比丘等よ、舍利弗は實に能く最上最善の法輪を轉ずる人なり。」

と宣說したまひました。』

王『善哉、那伽犀那尊者よ、佛陀の九分敎と、最上最善の行爲と、最上無比の世界に到達することと、此等は皆頭陀行の遵守の結果、得られる所の功德の中に包含せられて居ます。』

巻の第七

第一章　比喩問答

王『那伽犀那尊者よ、教團の團員が、阿羅漢果を實現するには、幾許の徳を有たなければなりませぬか。』

尊『大王よ、阿羅漢果に到達せんと欲する團員は、下の如き種種の徳を有たねばなりませぬ。』

一　驢馬の一性質
二　雄鷄の五性質
三　栗鼠の一性質
四　牝豹の一性質
五　牡豹の二性質
六　龜の五性質
七　竹の一性質
八　弓の一性質
九　烏の二性質
一〇　猿の二性質
一一　絲瓜の一性質
一二　蓮華の三性質
一三　種實の二性質
一四　沙羅樹の一性質
一五　船の三性質
一六　錨の二性質
一七　檣の一性質
一八　船師の三性質
一九　水夫の一性質
二〇　大海の五性質
二一　大地の五性質
二二　水の五性質
二三　火の五性質
二四　風の五性質
二五　巖石の五性質
二六　虚空の五性質
二七　月の五性質

二八　太陽の七性質
二九　帝釋天の三性質
三〇　轉輪聖王の四性質
三一　白蟻の一性質
三二　猫の二性質
三三　鼠の一性質
三四　蠍の一性質
三五　マングースの一性質
三六　老豺の三性質
三七　鹿の三性質
三八　牡牛の四性質
三九　猪の二性質
四〇　象の五性質
四一　獅子の一性質
四二　チャッカワーカ鳥の三性質
四三　ペーナーヒカー鳥の二性質
四四　家鳩の一性質
四五　梟の二性質
四六　鶴の一性質
四七　蝙蝠の二性質
四八　蛭の一性質
四九　毒蛇の三性質
五〇　岩蛇の一性質
五一　道蜘蛛の一性質
五二　幼兒の一性質
五三　陸龜の一性質
五四　山阪の五性質
五五　木の三性質
五六　雲の五性質
五七　寶珠の三性質
五八　獵師の四性質
五九　漁夫の二性質
六〇　大工の二性質
六一　水瓶の一性質
六二　鐵の二性質
六三　日傘の三性質
六四　稻田の三性質
六五　藥の二性質
六六　食物の三性質
六七　弓手の四性質
六八　王の四性質（以下缺本文）
六九　門番の二性質

七三 駿馬の二性質　七四 稅務官の二性質　七五 閾の二性質
七六 天秤の一性質　七七 劍の二性質　七八 魚の二性質
七九 借財者の一性質　八〇 病人の二性質　八一 死體の二性質
八二 河の二性質　八三 水中の一性質　八四 道の二性質
八五 收稅人の二性質　八六 泥棒の三性質　八七 鷹の一性質
八八 犬の一性質　八九 醫者の三性質　九〇 子持女の二性質
九一 犂牛の一性質　九二 牝鷄の二性質　九三 鳩の三性質
九四 一眼者の二性質　九五 農夫の三性質　九六 牝狼の一性質
九七 染屋の二性質　九八 匙の一性質　九九 借金談判者の一性質
一〇〇 集金者の一性質　一〇一 馭者の二性質　一〇二 村長の二性質
一〇三 裁縫師の一性質　一〇四 舵手の一性質　一〇五 蜂の二性質

驢馬

王『那伽犀那尊者よ、貴納は〔彼に〕無くてはならぬ驢馬の一性質があると言はれましたが、その一性質とは何ですか。』

章『大王よ、驢馬は、塵埃の堆積の上にでも、空地にでも、道路の四辻にでも、若くは村落の入口にでも、又は藁の堆積の上にでも、何處にでも横臥し得ますが、何處にも永く宿ることを許されませぬ。今それ、瑜伽の定を修する觀行の士も亦た是の如く、撒布された草の上にでも、木の葉の上にでも、荊棘の寢床の上にでも、若くは何にもない地上にでも、何處にでも、筵を擴げて休息することを許されますが、何處にありても不精をしてはなりませぬ。大王よ、これ則ち「彼に」無くてはならぬ、驢馬の一性質であります。何せなれば、天中の天たる世尊が、

「比丘衆よ、我が弟子等は稐を枕として眠り、誠實熱心にして、勇猛に修行す。」

と仰せ給ひ、法將たる長老、舍利弗も亦た、

「比丘等よ、若し結跏趺坐するに當り、其の膝の上に雨降らずば、
これ則ち熱心なる比丘の、安樂の住所とするに足る。」

と說破して居るからであります。』

雄鷄

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、「彼に」無くてはならぬ雄鷄の五性質があると言はれましたが、その五

性質とは何をいふのですか。』

尊『大王よ、雄鷄の時を違へず、時に行くが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、時を違へず、精舍の周圍の空地を掃き、其の日の飲み水を準備し、〔如法に〕衣を著け、沐浴をなし、精舍の前に禮拜し、先輩の比丘を訪ね、時到りて、禪室に入らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ、雄鷄の第一性質であります。

復た次に、大王よ、雄鷄の朝早く時を違へずに起きるが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、早朝時を違へずに起き出で、精舍の周圍の空地を掃き、其の日の飲み水を準備し、〔如法に〕衣を著け、精舍の前に禮拜し、禪室に入らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ、雄鷄の第二性質であります。

復た次に、大王よ、雄鷄の、食ふべき食物を探し啄むために、不斷に地面を爬き掘るが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、其の食を取るに當つては、常に自ら反省し、愼重に注意して、「我今この食を取るは、快樂を求めんが爲でもなく、興奮を得んが爲でもなく、肉體を美ならしめんが爲でもなく、容貌を優佳にせんが爲めでもなく、唯單に飢餓の苦痛を免れる手段として、我が身を保存し、生命を保持し、我が向上的生活に資せんが爲めに喰べるのである。斯くて我は已生の苦を掃蕩し、當生の苦を起らしめず、〔世の〕非難を遠離して安樂に暮さう」と念ぜねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ、雄鷄の第三性質であります。何せなれば、天中の天たる世尊が、

「彼は曠野に於ける子の肉の如く、又は車に油を塗るが如く、疲勞を感ずる時、
單に其の生命を保持せんがために、其の食物を取るのみ。」

と宣說し給うたからであります。

復た次に、大王よ、雄鷄は、縱令眼は有つて居ても、夜になれば盲目となるが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も、また假令盲目ではなくとも、恰も盲目の如でなければなりませぬ。卽ち彼は森林の中に在つても、又は毎日行乞のため歩く時にも、一切の好ましき色・聲・香・味・觸に對して、宛然、盲目の如く、聾の如く、啞の如く、此等の境を心意の對象たらしめ、特殊の細かな注意を拂つてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ、雄鷄の第四性質であります。何せなれば、長老・摩訶迦旃延那が、

「彼をして眼あるも盲目の如くならしめ、聽くとも聾の如くならしめ、
語り得るとも啞の如くならしめ、力はありとも無力なるが如くならしめよ。
而して福利生ずれば、死者の臥するが如く臥せしめよ。」

と說破して居るからであります。

復た次に、大王よ、雄鷄は、土塊や、杖や、棍棒を以て窘逐せられても、其の家を逃げ去らざるが

とも、若くは彼が日日の勤行の何事に從事して居やうとも、或は他を敎へ、又は自ら敎を受けて居やうとも、決して其の正念を失ひませぬ。何となれば、大王よ、正念は彼の住家であるからです。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ、雄鷄の第五性質であります。是の故に世尊も亦た、

「比丘衆よ、比丘の宿所は何なるか。又彼が昔からの王國は何なるか。謂く、そは則ち四念處なり。」

と宣說し給ひました。而して法將たる長老・舍利弗も亦た、

「象の自ら喰ふ食物の善惡を辨別し、而して彼が眠る時と雖も、自ら其鼻を護衛するが如く、精勵の佛子をして、勝者の敎勅を破らず、最上の福利たる正念を害せざらしめよ」

と道破して居ます。』

栗鼠

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は〔彼に〕無くてはならぬ栗鼠の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、栗鼠は、敵が來れば、先づ其尾の膨脹するまで、地面で打いてから、其の尾を棍棒として敵を驅逐します。瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、其の敵者たる煩惱が襲來すれば、念力

の棍棒の[十分に]膨脹するまで打ち鍛へ、其の棍棒を以て、煩惱を撃退せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ栗鼠の一性質であります。何せなれば長老(一)チュッラ・パンタカが、

「若し出家生活の功德の破壞者たる煩惱が、我等の上に落ち來らば、我等は念力の棍棒を以て二たび三たび、彼等を殺戮せざる可らず。」

と說破して居るからであります。』

牝豹

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は[彼に]無くてはならぬ牝豹の一性質があると言はれましたが、其一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、牝豹は一たび懷胎すれば、決して二度と牡豹の側に行きませぬ。瑜伽の定を修する觀行の士も亦、未來再生の懷胎と、死と、滅とを見、また輪廻及び惡趣に再生する恐怖と、其苦惱及び悲痛とを見て、復た後有を受けず、再生しまいと堅く決心せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ、牝豹の一性質であります。何となれば、天中の天たる世尊が(二)諸經要集と(三)駄尼耶喬波羅迦經とに、

【一】チュッラ・パンタカ Culla Panthaka.
【二】スッタニパータ Suttanipāta.
【三】ダニヤゴーパーラカ・スッタ Dhaniyagopālaka-sutta.

我は復た決して胎中に入らざるべし、天よ、汝若し喜ばば、雨を降らせよ。」

と宣說し給うたからであります。』

牡豹

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は〔彼に〕無くてはならぬ牡豹の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、牡豹が稠密に生ひ繁つた丈の高い叢の中や、藪の中や、若くは岩の中や、又は森の中の隱れ家に潛んで居て、鹿を捕へるやうに、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、若くは林野、若くは樹下、若くは山上、若くは洞窟、若くは巖窟、若くは墓地、若くは藪林、若くは空所の人里を離れて、強い風も吹かず、往き來もなく、極めて閑靜幽寂な所に棲ねばなりませぬ。何せなれば瑜伽の定を修し、且是の如く寂靜なる場所を住み家とする觀行の士は、迅速に六神通の體得者となるからであります。大王よ、これ則ち、彼に無くてはならぬ、牡豹の第一性質であります。何となれば聖典を結集せる長老等が、

「隱れ家に潛める牡豹の、鹿を捕ふるが如く、佛子も亦智見と誠實もて、
其身を武裝し、幽寂なる所に棲ひ、無上の果を得ざるべからず。」

と說いて居るからであります。

復た次に、大王よ、牡豹は自ら殺した獸を喰ふに當り、若しも其が左側に落つれば、縱令何であつても決して喰べませぬ。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、竹を施して得られたるもの、棕櫚の葉を施して得られたる物、花を施して得られたる物、果物を施して得られたる物、沐浴を施して得られたる物、土器を施して得られたる物、桐油灰を施して得られたる物、齒楊枝を施して得られたる物、諂諛によつて得られたる物、甘言もて俗人を籠絡して得られたる物、眞を壓し僞を暗示して得られたる物、他の子供を愛して得られたる物、彼が歩く時、家から家へ、使者を立てて得られたるもの、人を治療して得られたるもの、仲介人たる仕事をして得られたるもの、事業又は祭典の事に關する使者となつて得られたるもの、布施として受けた物品と交換して得られたるもの、一度布施された衣、または食物を賄賂として、人に返還して得られたるもの、幸運の方向、幸運の日、幸運の人相などを暗示して得られたる物、若くは佛陀の非とし給うた、一切の邪命的方法によつて得られたるものは決して喰べてはなりませぬ。そは恰も牡豹が其の左側に落ちたものは、如何な肉でも決して喰はないやうに、是の如くにして得られた食物は決して喰べてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に無くてはならぬ牡豹の第二性質であります。これ彼の法將たる長老舍利弗が、

されば我、縦令怖るべき饑餓の襲ふ所となり、胃の腑の出で去るが如き感ありとも、
また我が生命を犠牲にするも、生活の軌道を踏み外さざるべし。」
と高唱して居る所以であります。』

龜

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は〔彼に〕缺くべからざる龜の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、水中動物たる龜が、水中の住居を整ふるが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も、亦其の心をして、廣き世界の一切衆生に對して、慈悲同情の念を寄せねばなりませぬ。卽ち全く憎惡怨恨の情を捨離して、一切衆生の幸福のために、廣大無邊の慈悲を注がねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺くべからざる、龜の第一性質であります。

復た次に、大王よ、龜は水に泳ぐ時、其の頭を水上にあげますが、他から見らるれば、復び彼から見られざらんが爲に、直に水の底に潛り込みます。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、煩惱の性癖が現はるれば、復び其等の煩惱から見られない如に、正定の水の中に沈み、其の深底に潛らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺くべからざる、龜の第二性質であります。

復た次に、大王よ、龜の水より出でて、自己を日に晒すが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も、亦正定より出づれば、行住坐臥、煩惱に對して、正勤の中に其の意を晒さねばなりませぬ。大王よ、是則ち彼に缺く可からざる、龜の第三性質であります。

復た次に、大王よ、龜が地を掘り穴を作つて、獨り住する如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、浮世の利得・名聞・稱讚を棄てて、林野・森林・丘陵・洞窟・巖窟等の靜な空閑處に、獨住せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可からざる龜の第四性質であります。何となれば長老優波犀那が、

「比丘は〔人里を〕離れて音少なく、猛獸の出沒する所に獨棲し、
靜思せんがために、〔斯の如き〕坐臥を受用せよ。」

と言つて居るからであります。

復た次に、大王よ、龜は何人かが其の周圍に居るのを見れば、直に其の頭も四肢も、殼の中に引き込めて、自ら安全を計る如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、色・聲・香・味・觸の彼を刺激するあれば、常に感覺の六窓に於いて、自制の門を閉ぢ、自律の中に其の意を隱し、不斷に念と自覺とを繼續し、以て沙門果を擁護せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可からざる、龜の第五性質であります。何せなれば天中の天たる佛陀が、雜阿含の譬喩龜經の中に、

「龜の其の四肢を殻の中に引き込むが如く、比丘は其の意の念を納め、獨立獨行して、
何者をも害せず、何者の惡をも語らず獨り自ら圓寂安樂の境界を打出せざる可らず。」
と宣說し給うたからであります。』

竹

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は〔彼に〕缺く可らざる竹の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、竹は、何處ででも強風が吹けば、風の方向に隨つて曲り、決して我意を張りませぬ。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、佛の敎たる九分敎に隨つて其身を處し、如法に且つ萬事過失のないやうにして、沙門果の德を追求せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、竹の一性質であります。何せなれば長老・羅睺羅が、

「我は佛の敎たる九分敎に隨ひ、如法に正しく、
且つ玷なき行履を打して、惡趣に再生することを超過せり。」

と言つて居るからであります。』

弓

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は〔彼に〕缺く可らざる弓の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、善く上手に出來て、うまく平均のとれた弓の、端から端まで平等に曲り、棒の如く頑固に抵抗しないやうに、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、其の雲兄水弟、卽ち長老に對しても、年少のものに對しても、年長者に對しても、若くは自らと同等の位置の者に對しても、穩かに屈讓し、決して彼等に反抗してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる弓の一性質であります。何ぜなれば天中の天たる世尊が（四）ギヅラ・プンナカ・ジャータカの中に、

「賢者をして、弓の如くに曲り、蘆の如くに屈し、決して反抗せざらしめよ。
〔斯くて〕彼は諸王の本家鄕に棲む可けん。」

と宣說し給うたからであります。』

烏

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は〔彼に〕缺く可らざる烏の二性質があると言はれましたが、其の二性質と

【四】Vidhura Punnaka Jātaka.

尊『大王よ、烏の恐怖し憂慮して常に見張り警衛するが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦た恐懼し憂慮して、常に其の感官を統御し、念を攝めて、見張り且つ警衛せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる烏の第一性質であります。

復た次に、大王よ、烏は、己が見附出して得た食物は、如何なものでも、其の同僚に分配して喰べます。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦、是の如く、彼の如法にして受納せる、如法の食物は、縱令何であらうとも、彼が應量器一杯に充たないものですら、決して其の同僚に分配することを忘れてはなりませぬ。これ則ち彼に缺く可らざる、烏の第二性質であります。何せなれば、法將たる長老・舍利弗が、

「隱者的生活をなせる我に、布施せらるるものの、何たるにせよ、
予は諸人と共に其を分配し、而して後わが食事を爲す。」

と言つて居るからであります。』

猿

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、「彼に」缺くべからざる猿の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

偉『大王よ、猿は、大樹の枝葉の繁茂して蔽ひ被さり、空空寂寂として、避難の確かな場所に、其の住み家を占めます。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も、亦た是の如く、謙讓・溫順・方正にして、人格美しく、聖典に精通し、親愛し、尊重し、恭敬すべく、辯舌家で、溫厚で、說諭、薰陶、及び教育に巧に、人を奬勵し、激勵し、喜ばしむることの上手な教師の許に住まねばなりませぬ。卽ち彼は其の師として、是の如き友を撰ばねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、猿の第一性質であります。

復た次に、大王よ、猿が常に樹の上に徘徊し、立ち、坐り、且つ又眠るに當りても、其等の樹木の上で夜を明すが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、考へながら行住坐臥し、而して森の中に眠り、其處で念處の意義を考へ樂まねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、猿の第二性質であります。何となれば法將たる長老・舍利弗が、

「比丘の行・住・坐臥に照り輝けるは、森の中に於いてなり。
人里遠き僻趣に住むことは、諸佛の稱讚したまふ所なり。」

と說破して居るからであります。』

第二章　比喩問答

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる絲瓜の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

絲瓜

尊『大王よ、絲瓜は、草にでも、刺にでも、若くは葛の類にでも、其の卷鬚でからみつき、攀ぢ上つて成長します。今それ瑜伽の定を修し、阿羅漢果を逮達するまで、向上發展せんと欲する觀行の士も亦是の如く、其の心を業處の主題にからみ附けねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、絲瓜の一性質であります。何となれば法將たる長老・舍利弗が、

「絲瓜の、草又は刺、或は葛の類に、其の卷鬚を捲きつけて、攀ぢ登るが如く、阿羅漢果を得んと欲する佛子も亦た、無學果を成せんとの、觀念の上に捲きついて、攀ぢ上らざる可らず。」

と言つて居るからであります。』

蓮華

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる蓮華の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、蓮華は、縦令水の中に生じ、また水の中に育つても、水の爲めに染汚されない如に、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、彼が受領する扶助のため、或は彼が隨身たる弟子等のため、若くは名聞のため、又は名譽のため、又は恭敬せられんがため、若くは彼が享受する須要物のために、染汚されてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、蓮華の第一性質であります。

復た次に、大王よ、蓮華の、水の上に超然として存するが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、浮世の事物より、超然として暮さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、蓮華の第二性質であります。

復た次に、大王よ、蓮華の、極めて幽かなる微風に吹かれても、直に搖ぎ動くが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、極僅な煩惱のためにも、又は〔極めて小なる罪の中にも〕危險の存することを覺知して、克己節慾を實行せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、蓮華の第三性質であります。何せなれば、天中の天たる世尊が、

「彼は最小の罪の中にも、危險の存するを見て、自ら戒法を學び、又自ら訓練す。」

種實

王『那伽犀那尊者よ、貴納は、〔彼に〕缺く可らざる種實の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

大『大王よ、種實は、縱令極めて小さくとも、尙ほ且つ其を善い地に蒔き、天が適當に雨を降らせて呉るれば、饒多の果實を結ぶでせう。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、沙門果の豐富なる果實を獲んがためには、彼自ら其の生活を正しくし、身持を方正にせねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、種實の第一性質であります。

復た次に、大王よ、種實は、善く惡草雜草を取り除けた土地に植ゑらるれば早く成熟します。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、其の心を善く調御し、閑處に於て善く潔め、而して後念力の健剛なる最上の地面に其を投ずれば、早く成熟いたします。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる種實の第二性質であります。何となれば長老・阿難陀が、

「若し善く雜草を芟除せる地に種實を蒔かば、其の果實は豐富に、蒔主は歡喜せん。
今それ觀行の士も亦た是の如く、寂靜の所に於いて、
其の心純潔なれば、念力の地に於いて、迅速に成熟するなり。」

と言つて居るからであります。』

沙羅樹

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる沙羅樹の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、(一)沙羅樹の、能く百尺以上も深い地中に、生長するが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、獨居して、沙門の四果・四無礙解・六神通、及び出家に相應はしき、一切の德を完成せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、沙羅樹の一性質であります。何せなれば長老・羅睺羅が、「佛陀よ、沙羅と稱する樹は、深さ百尺の地下に發芽して、地中に生え、而して時至れば、一日の中に百尺の高さに突出す。我も亦此沙羅樹の如く、荒涼寂寞の中に於いて、善法を增長すべし。」と言つて居るからであります。』

【一】大智度論第十卷に曰く、「譬如有樹名爲好堅、是樹在地中百歲枝葉具足、一日出生高百丈云云。」と、蓋し好堅とは沙羅の意譯である。

船

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、「彼に」缺く可らざる船の三性質があると言はれましたが、其の三性質と
は何ですか。』

尊『大王よ、種種の木材を組合せて造らるる船の、能く數多の人を乘せ渡すが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、善行・正行・功德・及び本分の完成より生ずる、種種なる德を組み合せて、人天の世界を渡さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、船の第一性質であります。

復た次に、大王よ、船の能く雷の如き種種なる波の攻擊に堪へ、また廣大なる渦卷の攻擊にも堪ふるが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、種種なる煩惱の波の攻擊にも堪へ、また尊敬・輕蔑・扶助・名譽・讚美・稱歎・供養・優遇、及び他家族よりの誹謗非難等の、種種なる煩惱の波の攻擊に堪へねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、船の第二性質であります。

復た次に、大王よ、船は、無邊無限にして際涯なく、其の深底は動搖せず、轟轟たる音を出して吼え、且つ一切の種類の魚群・怪物・龍等を住はしむる大海を旅行します。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、其の心をして、四諦十二因緣等を透過し、旅行せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、船の第三性質であります。何せなれば、天中の天たる世尊が、最上無上の雜阿含の諦品の中に、

「比丘等よ、汝等思惟する時は、常に、此は苦なり、此は苦の原因なり、
此は苦の滅なり、此は苦の滅に導くの道なりと思惟せざる可らず。」

と宣說し給うたからであります。』

錨

王『那伽犀那尊者よ、貴納は、〔彼に〕缺くべからざる錨の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、錨は、寄せては返す大波小浪のために、攪き亂される大海原に於いてですら、船を定著せしめ、而して波のために、彼方にも此方にも、淩はれないやうに致します。今それ瑜伽の定を修する觀行の士も亦是の如く、貪慾・瞋恚・愚癡の波打つ、思想上の大競爭の中に居て、其の心を安定固著せしめ、其をして何れか一方に偏らしめてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、錨の第一性質であります。

復た次に、大王よ、錨は決して浮かずに沈んで居ます。而して深さ百尺の水中にありてすら、船をしつかりと動かない如に結び附けます。瑜伽の定を修する觀行の士も亦、是の如く、彼は扶持・名聲・名譽・尊敬・恭敬・供養・讚美を受領しても、其の扶持乃至讚美等の頂上に立つて、慢心を起さず、唯その身命を支持すれば足るとの觀念の上に、心を定著せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺

く可らざる、錨の第二性質であります。是の故に法將たる長老・舍利弗が、

「錨の海上に浮き上らず、波の下に沈めるが如く、
賞讃又は布施の爲に高く揚らず、自ら卑に處らざる可らず。」

と說破して居ます。』

檣

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、[彼に]缺く可らざる檣の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、檣の能く、繩と、帆桁操縱の綱と、帆とを支持するが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、常に正念と自覺とを有つて居らねばなりませぬ。卽ち進むにも、退くにも、觀るにも、探すにも、腕を伸ばすにも、背をかがめるにも、衣を著るにも、行乞するにも、喫茶喫飯、行住坐臥、寢ても覺めても、言語するにも、沈默するにも、決して其の正念と自覺とを忘失してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、檣の一性質であります。是の故に、天中の天たる世尊は、

(二)「比丘等よ、比丘は[常に]思慮深く、且つ自覺ある生活を營まざる
可らず、これ我が汝等に教誨する所なり。」

と宣說し給ひました。』

【二】此の文は、長阿含經遊行經に出づ。

船師

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる船師の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、船師の、從晝至夜、不斷の休みなく、精進努力して、其の船を航行せしむるが如く、瑜伽の定を修する觀行の士も亦、其心を調御するに當つては、從晝至夜、不斷の休みなく、精進努力し、周到綿密の注意を以て、其の心を調御せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、船師の第一性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、法句經の中に、

「精勤を樂とせよ、〔汝の〕心を防護せよ、〔苦界の〕患難より拔け出づること、泥中に陷れる强象の如くせよ。」(三)

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、船師の、海中の事は、善かれ惡かれ、皆悉く知れるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、善惡の區別、有罪無罪の區別、貴賤の區別、明暗の區別を知つて居らねばなりませぬ。

大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、船師の第二性質であります。

【三】此の偈は、巴利語法句經第三百二十七に出づ。

禪定を修する觀行の士も亦、煩惱妄想をして起らしめないやうに、其の心に克己の封印を押さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、船師の第三性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、最上の雜阿含經の中に、

「比丘等よ、慾念・害念・殺念、是の如きの惡不善の念を懷くこと勿れ。」

と宣說し給ひました。』

水夫

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる水夫の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、船の甲板に於ける水夫が、「予は雇はれて居る、而して此の船の甲板の上で、賃錢を得んが爲に働いて居る。私は此の船で働けばこそ衣食の資を得るのである。私は懶けてはならない、で、唯熱心に此船を航行せしめねばならぬ」と思ふやうに、禪定を修する觀行の士も亦、「予は(四)四原素の和合より成る身體に關して、十分の智識を得たから、不斷に休みなく、細心の思慮と念とを失ふまい。而して生・老・死・憂・悲・苦・惱・絕望を遠離して、寂靜平和の生を送るやうに精進努力し

【四】四原素とは、地と水と火と風との四つを云ふ。漢にはこの四原素のことを四大と譯してある。故に佛徒の間にては病氣のことを四大不調と呼ぶのである。

やう」と考へねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、水夫の一性質であります。是の故に法將たる長老・舍利弗は、

「再たび三たび、此の身の何たるかを理解し領會して、
其の本性を見破し、以て苦惱の絶滅を期せよ。」

と道破して居ます。』

大海

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる大海の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、大海の死屍と倶に共棲せざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、貪慾・瞋恚・愚癡・高慢・邪見・僞善・自慢・怨恨・吝嗇・詐僞・不信・欺瞞・不義・邪惡等の、煩惱の垢穢と倶に共棲してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大海の第一性質であります。

復た次に、大王よ、大海の、其の中に一切の有らゆる寶石類、卽ち眞珠・金剛石・猫眼石・螺・石英・珊瑚・水晶等を藏し、而も皆悉く其等を隱匿するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、道・果・〔四〕禪・

ませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大海の第二性質であります。

復た次に、大王よ、大海は偉大なる動物と倶に共棲するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、欲少なく、足ることを知り、言語清淨にして、煩惱の掃蕩を行ふもの、正行・謙讓・溫厚・篤實にして、恭敬すべく、尊嚴あり、善利を語るもの、自らの社會の過失を指摘して、自らの過失を責め、說諭・薫陶・教育に巧に、他を刺激し奬勵して、喜ばしむることの能きるもの等の、弟子仲間と倶に共棲せねばなりませぬ。換言せば、彼は是の如き人人を勝友として、梵行を修し、如法に棲はねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大海の第三性質であります。

復た次に、大王よ、大海は、恆河・ヤムナ・アチラワティー・サラブー・マヒー・及び他の百千の河、幷に天水等を受け容れますが、而も決して其の濱邊に汎濫せしめませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、扶持・名聲・稱讚・恭敬・禮拜及び名譽等のために、意識的に禁戒を破るやうなことがあつてはなりませぬ。否な彼自らの生命の爲にすら、禁戒を犯してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大海の第四性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、

「王よ、大海の靜止して動かず、且つ決して其の水を汎濫せしめざるが如く、我が弟子等も亦た彼等の爲に制定せられたる清規を踏み外す可らず。然り、彼等自らの生命のためなりと雖も、戒法を犯す可らず。」

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、大海の、恆河・ヤムナ・アチラワティー及びサラブー等の諸大河の水、幷に天から降る雨を受け容れても、［一ぱいに］溢れこぼれることなきが如く、禪定を修する觀行の士も亦、敎化を受け、質問應答し、他の法を說くを聞き、其を暗記し、吟味し、經律論の深義を聞き、形を分析し、正しい作文の法・接續詞及び文法的の構成法を學び、勝者の九分敎に耳を傾くるを以て、決して滿足してはなりませぬ。大王よ、これ則ち比丘に缺く可らざる、大海の第五性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、本生譚の中に、

「王者中の王者よ、火の能く草木を燒いて、決して滿足せざるが如く、
大海の百川を呑み盡して、尙ほ且つ汎濫せざるが如く、
此の智ある弟子等は、眞實の語を聞き、
決して飽滿することある可らず。」

と宣說し給ひました。』

第三章　比喩問答

大地

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、〔彼に〕缺く可らざる、大地の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、大地は其の上に好ましきものを撒布されても、好ましからぬものを撒布されても——例せば樟腦・沈香・素馨花・栴檀香・泊夫藍を撒布されても、若くは膽汁・痰・膿汁・血・汗・脂肪・唾液・粘液・關節を滑かにする流動體・小便・及び大便を撒布されても、毫も頓著することなく、全く同一の狀態を持します。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、扶持せられても、扶持を怠られても、又は名譽・不名譽・非難・稱讚・幸・不幸に會うても、毫も頓著せず、〔常に〕同一の態度を持續せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大地の第一性質であります。

復た次に、大王よ、大地には裝飾もなく、花冠もありませんが、それ自らの香で、一杯に充ち滿ちて居ます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、美服は著けませんが、彼が正義の生活の妙なる香で、其の周圍を取りまかねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大地の第二性質

であります。

復た次に、大王よ、大地の、堅くして孔もなく、閑隙もなく、厚く稠密にして、それ自らを各方面に擴げるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、虚隙なく、瑕疵なく、厚く綿密にして、破綻しない正義の生活をなして、各方面に、それ自らを擴張せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大地の第三性質であります。

復た次に、大王よ、大地の、村落・都會・市府・諸國・樹木・山嶽・川・池・湖・野獸・鳥・人・及び男女の群集を載せても、決して疲れざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、說諭・訓誡・薫陶・及び敎化を與へ、また人を奬勵し、刺激し、悅ばしめ、且つ法の說明をなして、毫も疲れてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大地の第四性質であります。

復た次に、大王よ、大地は諂諛も憤怒も遠離して居ます。今それ禪定を修する觀行の士も亦此の大地の如く、何人にも媚びず、又何人にも怒らず、解脫せる精神を相續せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大地の第五性質であります。是の故に優婆夷チュッラ・スバッダー女が、彼女自らの宗旨の出家を稱讚するとき、

「人の怒りて、斧もて其の腕を切り去るに會ふとも、

又は人の歡喜して妙香を灑ぐに會ふとも、一を惡まず、他を愛せず、
其の心は大地の如く、毫も顚著せざるもの、これぞ則ち我が沙門なる。」
と道破して居ます。』

水

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、水の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、水の「池または井中にありて」不搖不動であり、「其が普通の狀態に於いて」擾亂せられず、また本性清淨なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、僞善・愁訴・占相・詐欺を遠離し、其の性質清淨無垢にして、不動・不搖・不擾亂でなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、水の第一性質であります。

復た次に、大王よ、水の常に清涼なる性質を有するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、同情・慈悲の性質を有し、一切衆生に對して親切であり、一切衆生の善利を尋求し、一切衆生を憐愍せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、水の第二性質であります。

復た次に、大王よ、水の不淨物を清むるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、村落にありても、森にありても、其の他あらゆる處にありても、諍論を遠離し、また其の師・主・及び師の如き人に對する

罪過を遠離せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、水の第三性質であります。

復た次に、大王よ、水の一切の人に好まるるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、少欲知足にして、獨處に閑居し、常に世人の好愛する所とならねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、水の第四性質であります。

復た次に、大王よ、水の何人に對しても害を爲さざる如く、禪定を修する觀行の士も亦、身口意の三業を矜み、諍論・喧嘩・爭鬪・口論・若くは空虚の感情、又は立腹、或は不平などを起さしむる底の、何等の邪惡をも働いてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる水の第五性質であります。是の故に天中の天たる世尊は、カンハヂャータカの中に、

「おお衆生の主なる帝釋天よ、汝もし我に賜物を與へんとならば、何の時、何の處にても、何ものをも、我が身、我が心に害せざらしめよ。是れ賜物中の賜物として我が撰ぶ所なり。」

と宣說し給ひました。』

火

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、火の五性質があると言はれましたが、其の五性質と

は何ですか。』

尊『大王よ、火の、能く草を燒き、木を燒き、枝を燒き、葉を燒くが如く、禪定を修する觀行の士も亦、智慧の火を以て、好ましくとも、好ましからずとも、主觀的なるにせよ、客觀的なるにせよ、一切の煩惱を燒き盡さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、火の第一性質であります。

復た次に、大王よ、火には同情の念もなく、慈悲の心もなきが如く、禪定を修する觀行の士も亦、一切の煩惱に對して、同情の念、慈悲の心を顯はしてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、火の第二性質であります。

復た次に、大王よ、火の能く寒冷を滅ぼすが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其心に精進の猛火を燃やして、一切の煩惱を燒き滅さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、火の第三性質であります。

復た次に、大王よ、火の能く何人に對しても寵愛をも求めず、亦何人に對しても惡意をも有せず、一切のものを熱するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、何人かに媚び、又は何人かを惡んではなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、火の第四性質であります。

復た次に、大王よ、火の闇黑を驅逐するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、無明の闇黑を驅逐せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、火の第五性質であります。是故に、天中の天たる世尊は、其の子、羅睺羅に對する訓誡中、

「羅睺羅よ、汝自ら火の燃るが如く、正定三昧を實行し、それを以て未生の惡を生ぜざらしめ、
已生の惡を一掃し去れよ。」
と宣說し給ひました。』

風

王『那伽犀那尊者よ、貴納は、彼に缺く可らざる、風の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、風は森林及び花咲く並樹の中の空閒に滿ち亙ります。今それ禪定を修する觀行の士も亦、解脫の妙花を咲かする、正定の並樹の中に在つて法悅歡喜せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、風の第一性質であります。

復た次に、大王よ、風は、地上に生えたる一切の樹木を搖り動かし、又彼等を屈せしむるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、森林の中に退隱して、一切萬有の眞性質を吟味し、一切の煩惱を屈せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、風の第二性質であります。

復た次に、大王よ、風の能く空中を逍遙するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、超世閒的の法中

あります。
復た次に、大王よ、風の薫香を送るが如く、禪定を修する觀行の士も亦、常に彼自らの戒德の芳香を放たねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、風の第四性質であります。
復た次に、大王よ、風には家もなく、宿るべき家庭もありませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、家もなく、家庭もなく、俗交に惑溺することもなく、心を自由の鄕に遊ばしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、風の第五性質であります。是の故に、天中の天たる世尊は諸經要集の中に、

「俗交より怖畏生じ、家庭生活より塵穢生ず。家庭なく、俗交なき、是れ實に牟尼の見なり。」

と宣說し給ひました。』

巖石

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、巖石の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』
尊『大王よ、巖石の不動不搖なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦決して、色・聲・香・味・觸等の誘惑物の爲に動搖させられてはなりませぬ。又尊重若くは下賤、優遇若くは逆待、恭敬若くは侮辱、名譽

若くは不名譽、賞讚若くは非難、苦若くは樂、好ましきもの、又は好ましからざるもののために心を動かされず、巖石の如く、斷乎として不動でなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、巖石の第一性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、

「一塊の盤石の、(一)風に動かされざるが如く、賢者は、毀呰と稱譽とに動かさるることなし。」

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、巖石の堅固にして、外物を其中に交へざるが如く、禪定を修する觀行の士も、亦た斷乎として獨立し、決して何ものにも食ひ込む隙を與へてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、巖石の第二性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、

「在家にも混らず、(二)出家にも混らず、家なくして遊行し、
寡欲なるもの、我、此の人を婆羅門と云ふ。」

と宣說あそばされました。

復た次に、大王よ、巖石の上には、種子を蒔ても生えませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、其の心に一切の煩惱の種子を生ぜしむる隙を與へてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺

【一】巴利語法句經第八十一頌
【二】巴利語諸經要集第三・九の三五頌。

「我が心に諸の貪慾の念起る時は、自ら省察して、獨り彼等を撃退せん。
汝もし貪慾のために心を動かされ、罪を寄與するものの爲に心を動かされ、
愚癡の爲に情を惑はされなば、汝は寂靜なる森の中に退隱せよ。
そは諸の森は、淨潔の士の住處、仙人の寓居にして、煩惱の垢穢を遠離せる所なればなり。
汝は其の清淨の場所を汚さず、自ら其の身を森に委せよ。」

と道破して居ます。

復た次に、大王よ、巖石の超然として高く處るが如く、禪定を修する觀行の士も亦、智慧によつて高く處らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、巖石の第四性質であります。是の故に天中の天たる世尊が、

「智者の精勤を以て放逸を掃ふ時、彼は心に憂なく、智慧の樓閣に上りて、
憂ある衆生界を〔見ること〕、猶ほ山頂に立てる賢者の、地上の愚者を觀るが如し。」

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、巖石の、上げられもせず、下げられもしないやうに、禪定を修する觀行の士も亦、〔心〕揚がり、又は〔心〕沮喪してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、巖石の第五性質であります。是の故に優婆夷チュッラ・スバッダーが彼女自らの宗旨の出家を讚美する時、

「世人は得によりて〔心〕揚り、失によりて〔心〕憂ふ。
おお我が沙門等よ、〔冀はくは〕得失に於いて同一なれ。」
と説破しました。』

空閑

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、空閑の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、空閑は何處ででも、捕捉することは能きませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、如何なる處ででも、煩惱のために捕はれてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、空閑の第一性質であります。

　復た次に、大王よ、空閑は聖者・苦行者・諸天・及び群鳥の親しみ往來する所であります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、彼が心をして、「諸行は無常にして苦、諸法は無我である」との智慧を以て、其の心をして安樂に萬有の上に遊行せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、空閑の第二性質であります。

て諸趣再生の恐怖を知らしめ、決して其處に幸福を追求してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、空閒の第三性質であります。

復た次に、大王よ、空閒の無量無邊無限なるが如く、禪定を修する觀行の士の行ふ正義も、亦無邊であり、彼が智識も、亦た限量を超越して居らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる空閒の第四性質であります。

復た次に、大王よ、空閒は何ものにも縋り附かず、何ものにも絡み附かず、何ものにも依憑せず、何ものからでも停止せしめられるものではありませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、何者にも頼らず、何物にも縋らず、何物にも目を觸れず、家族の者からも、將た又その弟子からも邪魔されず、若くは優遇のため、又は住處のため、若くは宗教的生活の如何なる妨害のためにも、又は彼が要する必要品のためにも、或は如何なる種類の煩惱のためにも、邪魔されてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、空閒の第五性質であります。是の故に天中の天たる世尊は、其の子羅睺羅に對する教誨の中に、

「羅睺羅よ、空閒の何物にも又何處にも依立せざるが如く、汝も亦虚空の如き正定を習修せよ。
たとひ汝の心は烈しく動搖せらるるとも、決して快不快の感を起す可らず。」

と宣說し給ひました。』

月

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、月の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、前半月に於ける月の、益增大するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、善行・持戒・功德・義務の完成、聖典の智識、獨居の習慣、念處、感官の窓の警護・節食・徹夜等の行持を益增大せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、月の第一性質であります。

復た次に、大王よ、月は〔世界の〕偉大なる主なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、彼自らの意志に對して、偉大なる主人公でなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、月の第三性質であります。

復た次に、大王よ、月は夜間に遊行するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、閑處に逍遙せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺くべからざる、月の第二性質であります。

復た次に、大王よ、月が其館の上に旌旗を揚ぐるやうに、禪定を修する觀行の士も亦、彼の正義の旌旗を高く揭げねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、月の第四性質であります。

人の請待に會うて布施を受けねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、月の第五性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、無上の雜阿含經の中に、

「比丘等よ、汝等は、月の如く、俗人の家を訪へ。汝の動作をして、外面の威儀作法に於いても、また內面の精神に於いても等しからしめよ。汝は、俗人の面前を辭退するとき、常に初客の如くなれ。」

と宣說し給ひました。』

太陽

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、太陽の七性質があると言はれましたが、其の七性質とは何ですか。』

尊『大王よ、太陽は一切の水を蒸發せしむるが如く、禪定を修する觀行の士も亦剩さず漏さず、彼が心中の一切の煩惱を乾かし盡さしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、太陽の第一性質であります。

復た次に、大王よ、太陽の闇黑を驅逐するが如く、禪定を修する觀行の士も亦貪慾・瞋恚・愚癡・高慢・邪見・邪惡、幷に有ゆる不正義の闇黑を驅逐せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざ

る、太陽の第二性質であります。

復た次に、大王よ、太陽の常に運行するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、常に正念を相續せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、太陽の第三性質であります。

復た次に、大王よ、太陽の後光を有するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、正定の後光を有せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、太陽の第四性質であります。

復た次に、大王よ、太陽の不斷に民衆を暖むるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、善行・正義・功德・義務の完成・禪定・解脫・正定・等至・五力・七覺支・四念處・四如意足・四正勤等を以て、人天の世界を欣悅せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、太陽の第五性質であります。

復た次に、大王よ、太陽がラーフ、即ち日蝕の惡魔の畏怖を以て嚇かさるるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、惡生活の荒野に困惑し、惡趣に再生して惱殺せらるる衆生を見、又宿世に爲せる惡業の傷ましき結果の網に捕はれ、地獄に於いて刑罰、幷に煩惱の網に捕はるる衆生を見て、大なる憂慮と恐怖とを以て、其の心を威嚇せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、太陽の第六性質であります。

復た次に、大王よ、太陽の善事と惡事とを明かにするが如く、禪定を修する觀行の士も亦、五力・

七覺支・四念處・四正勤・四如意足・及び一切の世間出世間の法を明かにせねばなりませぬ。大王よ、こ

れ則ち彼に缺く可らざる、太陽の第七性質であります。是の故に長老(三)ヴンギーサは、

「太陽の、清淨なる物と不潔なる物、善なるものと惡なるものとを明かにするが如く、比丘も亦た其の心に聖典を保持しつつ、無明盲目の人人のために、聖道の福樂を明かにせざる可らず。」

と言つて居ます。』

【三】ヴンギーサ Vaṅgīsa.

帝釋天

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、帝釋天の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、帝釋天の圓滿なる福樂を享受するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、獨居隱棲の完全なる福樂を悦ばねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、帝釋天の第一性質であります。

復た次に、大王よ、帝釋天は其の周圍の諸天を見て、彼等のために愛寵を垂れ、彼等を歡喜欣悦せしめます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、其の心を無欲にし、不屈にし、寂靜にして、心中に法悦を生ぜしめ、自ら激勵し、自ら努力し、自ら精進せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、帝釋天の第二性質であります。

復た次に、大王よ、帝釋天の不滿足を感せざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、獨居隱棲に就て、心に不滿足の情の起る隙を與へてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、帝釋天の第三性質であります。是の故に長老・須菩提は、

「大勇士よ、われ卿の敎ふる所に隨つて世を辭せり。
　されば我は決して心に貪慾の念も、愛著の情も起さしめざるべし。」

と言つて居ます。』

轉輪聖王

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、轉輪聖王の四性質があると言はれましたが、其の四性質とは何ですか。』

尊『大王よ、轉輪聖王は(四)人望の四要素によつて、人民の忠愛を得ます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、敎團の雲兄水弟、敎團の首長、及び兩性の俗人の心を喜ばしめ樂ましめて、其の愛寵を受けねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、轉輪聖王の第一性質であります。

【四】人望の四要素とは、自由・溫柔・正義・公平を云ふ。

も亦た是の如く、其の心に貪慾・瞋恚・慘酷の念を起らしめてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、轉輪聖王の第二性質であります。是の故に、天中の天たる世尊は、

「疑念の滅を悦び、常に念覺ありて、不淨觀を修するもの、
彼は［其の］愛念を滅さん、彼は魔の縛を斷たん。」

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、轉輪聖王は、善惡を吟味しつつ、海岸の境に到るまで、全國を視察して旅行します。今それ禪定を修する觀行の士も、亦た是の如く、自ら爲せる身口意の業を日日反省吟味して、「如何にせば予は此等の三處に於て、非難なく此の日を過し得るだらうか」と考へねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、轉輪聖王の第三性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、無上の增一阿含經の中に、

「出家の人は、晝夜の迅速に經過す［るを見て］、
我は如何にして存するかと、日日省察吟味せざる可らず。」

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、轉輪聖王は、內外ともに、十分に防護の用意をして居ます。今これ禪定を修する觀行の士も亦、主觀客觀の一切の煩惱に對する警誡のために、正念を以て其の衞士とせねばなりま

せぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、轉輪聖王の第四性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、

「おお比丘等よ、聖弟子たるものは、正念を以て其の門衞となし、不善を捨離して善を増長し、有罪を捨離して無罪を増長し、自ら淸淨の生活を保護せよ。」

と宣說し給ひました。』

第四章 比喩問答

白蟻

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、白蟻の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、白蟻は己を蔽ふ屋根を造り、自らを蔽うてから、其の業務に從事します。今それ禪定を修する觀行の士も亦、戒德と克己とを屋根として、其の心を蔽ひ、托鉢遊行せねばなりませぬ。何せなれば彼は是の如くにして、一切の怖畏を超過することが能きるからであります。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、白蟻の一性質であります。是の故に長老、ウパセーナ・ワンガンプットラは、

「戒德・克己の屋根の下に、其の心を蔽ふ觀行の士は、
浮世の爲に汚されず、［一切の］怖畏を超脫す。」

と言つて居るのであります。』

猫

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、猫の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、猫の屢屢巖窟・洞穴、又は高閣の內にありて、鼠を捜すが如く、禪定を修する觀行の士も亦、若くは村落、若くは森林、若くは樹下、若くは空屋に行いて、不斷に熱心に、其の食物即ち正念を捜さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、猫の第一性質であります。

復た次に、大王よ、猫の其の食物を捜すに當りて、蹲るが如く、禪定を修する觀行の士も亦、五蘊の起源、及び其の斷滅を思惟し、「色は是の如し、色の起源は是の如し、其の斷滅は是の如し、受は是の如し、受の起源は是の如し、受の斷滅は是の如し、想は是の如し、想の起源は是の如し、想の斷滅は是の如し、行は是の如し、行の起源は是の如し、行の斷滅は是の如し、識は是の如し、識の起源は是の如し、識の斷滅は是の如し」と云ふことを考へねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、猫の第二性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、

「遠き未來に再生を求むる勿れ、汝が天に生れたりとて何の利益かある、
此の世、此の狀態にて、汝自ら勝者たれ。」

と宣說し給ひました。』

鼠

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、鼠の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、鼠の［左右を顧視し］前後に逍遙して、常に食物を嗅ぎ捜すが如く、禪定を修する觀行の士も亦、彼處此處に逍遙して、思慮深くあらねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる鼠の一性質であります。何となれば長老・ウバセーナ・バンガンタプッタは、

「智見ある人よ、常に敏捷にして平和なれ、而して智慧を萬法の首頭として尊重し、
一切の所要品の懸念を遠離して自ら住持せよ。」

と道破して居るからであります。』

蠍

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、蠍の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、蠍は尾を武器とし、その逍遙するや、尾を眞直に立てて歩きます。今それ禪定を修する觀

行の士も亦、智識を以て武器となし、其武器を以て常に止住せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる蝎の一性質であります。是故に、大王よ、長老・ウパセーナ・バンガンタプッタが、

「智見の人は智識の劍を拔いて、一切の怖畏を遠離し、
戰場に於ける勝者たらざる可らず。」

と言つて居ます。』

マングース

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、マングースの一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、マングースの蛇を攻撃するや、解毒劑を以て其の身を蔽ひます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、瞋恚、憎惡の多き世界に出で、喧嘩・口論・爭論等の支配する所となる社會に出づるに當つては、慈悲の解毒劑を以て其の心を塗らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、マングースの一性質であります。是の故に法將、舍利弗長老が、

「是の故に人は自己の同族及び他族のために慈愛を垂れ、慈悲の心を以て、

此の廣大なる世界に充ち滿たしめざる可らず、これ則ち諸佛の教なり。」

と言つて居ります。』

老豺

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、老豺の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、老豺の其の食物にありつけば、何でも嫌はずして、食ひたいだけ食ふが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其の受くる所の食物の何たるを問はず、只自らの生命を持續せんがためなりと考へ、毫も嫌ふことなく、其を食はねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる老豺の第一性質であります。是の故に(一)長老・大迦葉波が、

「われ山間の坐臥處より、行乞のために都城に下り、
癩人の食を取れるを見て、恭しく彼に近づけり。
彼は腐れ果てたる手もて、我に其の食を進めぬ、
而して食を「我が鉢に」投ずるや、指も亦其處に壞れ落ちぬ。
我は井にもたれて、其の食を喰ひぬ、而して喰ひつつありても、
喰ひ終りても、我に嫌厭の念起らざりき。」

【一】長老偈一〇五四乃至一〇五六頌を見よ。

と云つて居ります。

復た次に、大王よ、老犲の食物を得るや、其何たるかを吟味せざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、彼に施された食物の美味なるか、若くは不味なるか、又は香よきか、或は香惡しきかを吟味してはなりませぬ。換言せば彼に與へられたる食物を以て滿足せねばなりませぬ。これ則ち彼に缺く可らざる、老犲の第二性質であります。是の故に(二)長老・ウバセーナ・バンガンタブッタが、

「粗なるにても滿足し、他の多くの美味を貪ることなかれ。諸味に著する者の心は、
禪思の樂を享受すること能はず。與へらるる物もて滿足する人にのみ、沙門果は完成せらる。」

と言つて居ります。』

鹿

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、鹿の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、鹿は晝間は藪に行き、夜間は空地に於いて眠ります。今それ禪定を修する觀行の士も亦、

【二】長老偈五八〇を見よ。

る鹿の第一性質であります。是の故に、天中の天たる世尊は、

「舍利弗よ、我は夜寒く且風强き時も、雪降るときも、雲天井の下に夜を過し、森林の中に日を過せり。而して夏期の最後の月に於ては、晝閒を雲天井の下に過し、夜を森林に於て過せり。」

と宣說し給ひました。

復た次に、大王よ、鹿は投槍又は弓矢が其の上に落下すれば、ひらりと躱はして其を避け、その身を其處に留めませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、若し煩惱の落下し來る時は、ひらりと躱はして其を避け、心を其處に留まらしめてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる鹿の第二性質であります。

復た次に、大王よ、鹿は人から見らるれば、彼處此處に逃げ隱れて、見られないやうにします。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、喧嘩好きの人や、爭論・口論・爭鬪を事とするもの、或は意地惡きもの、若くは交際好きの懶け者に會へば、彼處か此處に避けて、彼等から見られないやうにするか、又は彼等に會はないやうにせなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、鹿の第三性質であります。是の故に法將・舍利弗長老が、

「罪あるもの、怠惰なるもの、精勤に乏しきもの、寡聞なるもの、
不行跡なるものをして、何れの時、何れの處にても、我と交はらしめざれ。」

と言つて居ます。』

牡牛

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、牡牛の四性質があると言はれましたが、其の四性質とは何ですか。』

尊『大王よ、牡牛の決して其の厩舍を捨てざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、無常にして斷滅すべく、次第に衰滅し、解體せらるべき性質のものなりといふ理由を以て、其の身を棄ててはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、牡牛の第一性質であります。

復た次に、大王よ、牡牛は、一たび軛をかけらるれば、樂な場合でも苦しい場合でも、其の軛を保持します。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、一たび出家の生活に入つた以上は、苦しからうと樂だらうと、兎に角、其の命の終へるまで、卽ち最後の呼吸を引き取るまで、決して其の生活を棄ててはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、牡牛の第二性質であります。

復た次に、大王よ、牡牛の、水を飲むに決して飽かざる慾望を以てするが如く、禪定を修する觀行の士も亦、頭を低うして長者の訓誡、幷に說諭を聞き、若くは年少のもの、若くは中老のもの、若く

第四性質であります。是の故に法將・舍利弗長老は、

「今日、出家入道せるのみなる、七歳の雛僧と雖も、我を教ふることを得、
故に我は、頭を低うして喜んで彼の教訓を持たざる可らず、
而して彼若し善良ならんには、何處にて彼に會ふとも、又幾度と雖も、
我は賞讃と慈愛とを彼に捧げ、又は師たる名譽の位置を彼に與ふるを惜ます。」

と言つて居ります。』

猪

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、猪の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、猪は夏期の蒸し熱くて、燒かれるやうな天氣の日は、屢屢水邊に到ります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、其心散亂し、墮落し始め、瞋恚の炎によりて焦さるる時は、清涼・不死にして、微妙なる慈悲觀の水邊に到らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる猪の第一性質であります。

復た次に、大王よ、猪が屢屢泥水の邊に到り、その啄を以て卑濕の地を掘つて、槽桶を作り、其の

中に横はるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其の身を其の心の中に攝し、而して瞑想の中に横はらねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる猪の第二性質であります。是の故に長老ピンドーラ・バーラドワヂャが、

「智者は其の身の眞性質を觀察討究し、何者にも近づかずして、
只深き觀念の妙床に横はり休むことを得るなり。」

と言つて居ます。』

象

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、象の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、象の地面を踏み潰し乍ら歩くが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其の身の性質を熟知し、一切の煩惱を壓し潰さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、象の第一性質であります。

復た次に、大王よ、象の物を見るに其の全身を轉じ、常に眞直に見て、左顧右眄せざるが如く、禪

上を仰ぎ、若くは下に俯することなく、その目を面前一軛の間に置かねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、象の第二性質であります。

復た次に、大王よ、象に常住の宿所無く、又其の食物を求むるにも、常に屢屢同一處に到らず、一定の住處なきが如く、禪定を修する觀行の士も亦、常住の宿所なく、只行乞の爲に、其周圍に行かねばなりませぬ。卽ち有智のものは、小屋の內でも、樹の下でも、洞穴の中でも、山の麓でも、何處でも、愉快にして比丘に相應はしき場所に宿り、決して住所を一定してはなりませぬ。大王よ、これ卽ち彼に缺く可らざる、象の第三性質であります。

復た次に、大王よ、象は、青黃赤白の蓮華を以て蔽はれ、清涼透明の水ある蓮地に投入して盛に水を飲みます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、解脫の花もて蔽はれ、清淨無垢にして清澄透明なる、眞理の妙水を以て滿されたる正念の池に投じ、智慧を以て[三]諸行を驅逐し、出家の人の樂とする遊戲の中に踊躍せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、象の第四性質であります。

【三】諸行(Sankhā-ā)とは、此の場合は、最極の苦の意味である。

復た次に、大王よ、象の擧足下足に注意するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、擧足下足、正念に住し、又往くにも歸るにも、若くは腕の伸縮にも、又何處にありても、正念に住せなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、象の第五性質であります。是の故に、天中の天たる、世

尊は雜阿含經の中に、

「身に於いて攝するは善なり、語に於いて攝するも善なり、意に於いて攝するも善なり、攝制は一切處に於いて善なり、罪障を慚愧し、一切の事物に於いて己に克つものを、善く其の身を守る人と云ふ。」

と宣說し給ひました。』

第五章　比喩問答

獅子

王『那伽犀那尊者よ、貴袮は、彼に缺く可らざる、獅子の七性質があると言はれましたが、その七性質とは何ですか。』

尊『大王よ、獅子の清淨無垢にして、純潔の淡黃色なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其意、淸淨無垢純潔輕快にして、瞋恚及び惡性を捨離せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる獅子の第一性質であります。

復た次に、大王よ、獅子の步るくに四足を以てし、その足取りの速かなるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、四如意足によりて行動せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、獅子の第二性質であります。

復た次に、大王よ、獅子の美麗なる髮毛の上衣を著て、甚だ快觀を呈するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、戒德の美服を著けて、快觀を呈せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる獅子の第三性質であります。

復た次に、大王よ、獅子は縱令その身命を取らるるとも、何人の前にも屈せざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、縱令出家者の所要物卽ち飮食・衣服・臥具・醫藥等を得ること能はずと雖も、決して何人にも屈してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる獅子の第四性質であります。

復た次に、大王よ、獅子は其の食物が落ちてをれば、何處ででも、要するだけのものを秩序正しく食らひ、其れ以上には何んなに善くとも、決して一口の肉でも求めませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦、行乞の爲に順次に各家の前に立ち、決して善い食物を與へさうな家庭を撰び、若くは何んな家でも省略してはなりませぬ。又彼は食物を撰び出してもいけませぬし、一口の飯でも布施を受けたならば其處で其を食ひ、決して一層善い食事を求めてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、獅子の第五性質であります。

復た次に、大王よ、獅子は己の食べるものを貯藏もしなければ、又一度その食物を喰べれば二度と其に振り向きもしませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦、決して食物を貯藏してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、獅子の第六性質であります。

復た次に、大王よ、獅子は縱令食物を得ないでも、決して驚かされませぬ。而して若し彼が其を得れば、切求もせず、弱りもせず、衰へもせずにそれを喰べます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、

衰へもせず、味に貪著するの危險なることを知り、食事の結果の十分なる智識を以て、其を食はねばなりませぬ。大王よ、これ則ち觀法者に缺く可らざる、獅子の第七性質であります。是の故に天中の天たる世尊が雜阿含經の中に、長老大迦葉を賞め給ふ時、

「比丘衆よ、この迦葉は、彼が受け取つただけの食物で滿足して居る。彼は、人が貰つただけの食物を以て滿足するものを譽める。彼は又行乞のために何等の不如法、若くは不體裁の罪も犯さないし、縱令彼が何にも得ないでも、尙ほ且つ驚かされもしない。若し食物を得れば、味に貪著するの危險なるを知り、食事の眞の目的を了解して切求もせず、弱りもせず、衰へもせずに其を喰べるのである。」

と宣說し給ひました。』

(二) チャクラヴーカ鳥

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざるチャクラヴーカ鳥の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

章『大王よ、チャクラヴーカ鳥は、縱令臨終の間際に至るも、決してその仲間を捨てませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦臨終の間際まで、決して端心正念を捨ててはなり

【一】チャクラヴーカ Cakravāka.

ませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、チャクラヴーカ鳥の第一性質であります。

復た次に、大王よ、チャクラヴーカ鳥は、セーヴーラ、及びパナカを食ひ、其によつて滿足を得ます。而して斯く滿足を得ても、そのために彼の力も、美も減へりませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦、彼が受納せるものを以て滿足せなければなりませぬ。而して若し彼が滿足しても、彼の正定の力は減へりもしませぬし、智慧に於いても、解脫に於いても、解脫智見に於いても、將た又一切の善法に於いても、決して減少することはありませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、チャクラヴーカ鳥の第二性質であります。

復た次に、大王よ、チャクラヴーカ鳥の、生物に對して何等の害をも爲さざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、縱令劍が側に横はり、棍棒が側に横はつて居ても、一切の生物に對して、謙遜・憐愍・同情・親切を垂れねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、チャクラヴーカ鳥の第三性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、チャクラヴーカ本生譚の中に、

「殺さず、滅ぼさず、壓制せず、他をして一切の生物に對する親切を捨てしめざるものは、

その平和を妨ぐるものに對しても決して怒らざるなり。」

と宣說したまひました。』

(二) ペーナーヒカー鳥

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざるペーナーヒカー鳥の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、ペーナーヒカー鳥は、彼の女自身の夫に對する嫉妬のために、その子を養ふことを拒みます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、彼が心中に起る一切の煩惱を妬み、且つその正念の力によりて、克己の妙なる罅隙の中に煩惱を追ひ込み、肉體に關する一切の事件に於て、斷えず正念を修し、心意の窓口に任せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、ペーナーヒカー鳥の第一性質であります。

復た次に、大王よ、ペーナーヒカー鳥は、食物を探さんが爲に、晝の時間を森林中に於いて費し、夜は同朋の保護のために其の群の中に宿ります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、或時は結縛を解脱せんがための故に、閑靜なる處に行かねばなりませぬ。而して其處に於いて滿足することが能きなければ、非難の危險に對して、保護を請はんがために、再び教團の中に歸り、而して教團の庇護の下に任せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、ペーナーヒカー鳥の第二性質であります。是の故に(三)ブラフマー・サハムパティが世尊の前に於いて、

【二】ペーナーヒカー Penāhikā.
【三】ブラフマー サハムパティ Brahmā Sahampati.

「邊土の坐臥を樂み、纏縛の離脫を行へ、而して若し其處に
歡樂を得る能はずんば、正念の人として、敎團の中に住せよ。」
と言しました。』

家鳩

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、家鳩の一性質があると言はれましたが、その一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、家鳩は他人の棲家に住つて、その人人に屬するものの爲に心を奪はれず、只鳥に關するものについてのみ注意を拂ひ、その他の事に關しては、全く局外中立の態度を取ります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、屢屢他人の家に行き、決して男女・寢具・椅子・衣服・寶珠若くは必要品、又は贅澤品、若くは種種の食物に關して心を奪はれず、出家人たる觀念にのみ心を向けねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、家鳩の一性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、チュッラ・ナーナダ本生譚の中に、

「飲食物の爲に屢屢人民の家に到り、飲物に於いても、食物に於いても、

と宣説したまひました。』

梟

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、梟の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、梟は烏を敵として、夜間、烏の群集する所に行き、彼等を殺します。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、無明を敵として、獨り密かに坐し、其を破滅せしめ、且つそれを根絶せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる梟の第一性質であります。

復た次に、大王よ、梟は孤獨の鳥なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦孤獨を樂み、孤獨の生活に熱心せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる梟の第二性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、雜阿含經の中に、

「弟子等よ、比丘をして苦の何なるかを知り、苦の原因の何なるかを知り、苦の斷滅の何なるかを知り、苦の斷滅に導く道の何なるかを知らしめんがために、孤獨生活を專らにし、孤獨生活を樂ましめよ。」

と宣説し給ひました。』

鶴

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、鶴の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、鶴は其の鳴聲を以て、將に起り來らんとする吉凶の運命を他に知らせます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、教法を說き、以て地獄の如何に恐るべき狀態なるかと、涅槃の如何に樂しき狀態なるかとを、人に知らせねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる鶴の一性質であります。是の故に長老（四）ピンドーラ・バーラドヴーヂャが、

「誠實なる出家の人は、地獄の如何に恐怖るべく、涅槃の樂の如何に深大なるか、此の二つの事件を、他の人に說き明かさざる可らず。」

と言つて居ります。』

蝙蝠

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、蝙蝠の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

【四】 Piṇḍola Bhāradvāja.

『大王よ、蝙蝠は、人の棲家に飛び込んで、其の中を飛び廻りますが、直ちに其處を出で去り、決し

て永く逗留いたしませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、行乞の爲に村落に入り、順次に各戸の前に立ちますが、布施を得終れば速に立ち去り、決して其處に永く逗留してはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、蝙蝠の第一性質であります。

復た次に、大王よ、蝙蝠は屢屢他の仲間の群集せる家を訪れますが、決して何等の害をも彼等に加へませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、俗人の家を訪れて、決して執拗に請ひ求め、他をして憤激せしめ、又は己の欲する物を指摘し、若くは邪なる擧止をなし、或は喋り、又は彼等の盛衰に無關係なることを言つてもなりませぬ。又彼は決して人の職業を妨げず、常に彼等の成功を祈らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、蝙蝠の第二性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、長阿含の相經の中に、

「彼は他人の利益と成功とを願望して、如何にせば彼等は、信に於ても、
戒に於ても、聞に於ても、菩提に於ても、捨離に於ても、——獻身的なること——
法に於ても、多くの善事に於ても、財寶に於ても、穀物に於ても、土地に於ても、
子に於ても、妻に於ても、家畜に於ても、友に於ても、親族に於ても、力に於ても、
美に於ても、安樂に於ても、少しも失はず、減少せしめざることを得るべきかを思惟す。」

と宣說し給ひました。』

蛭

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、蛭の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、蛭は、其を附くれば、何處にでも、確かりと食ひ附いて、血を吸ひます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、如何なる思惟の題目についても、其心を定めて、其の色、其の形、其の位置、其の廣さ、其の限界、其の性質、其の特相に就て確乎と思ひ起し、解脫の不死なる妙酒を飮まねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる蛭の一性質であります。是の故に（五）無滅長老が、

「深く禪定に入り、清淨の心を以て、不死なる解脫の酒を飮め。」

と言つて居ります。』

【五】アヌルッダ Anuruddha.

毒蛇

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、毒蛇の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

を以てせねばなりませぬ。何となれば進むに智慧を以てする出家者の心は、常に出家者の特性に合はざるものを斥け、其の特性に合ふものを發展せしむる所の、四諦の理を觀ずるからであります。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、毒蛇の第一性質であります。

復た次に、大王よ、毒蛇の動くに當りて、魔睡藥を避くるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其の道を進むに當りては、不正を避けねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、毒蛇の第二性質であります。

復た次に、大王よ、毒蛇は人より見られんことを憂慮し、努力して回避の道を求めます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、其の心に邪想、若くは不滿の念起るを見れば、憂慮し、努力して回避の道を求めねばなりませぬ。而して彼は「我は此の日を怠慢に過してはならない、予は決して其を取り返すことが能きないだらう」と獨語します。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、毒蛇の第三性質であります。是の故に(六)バッラーティヤ本生譚の中に庭の美なる鳥の言として、

「獵師よ、我等は故郷を出でて、唯一夜、此處に過した。而して我等の望に逆らつて、
終夜我等はお互の身の上に就て考へた。が、其一夜こそは實に悲しむべく、
憂ふべき一夜であつた。そは蓋し決して取り戻すことが能きないからである。」

【六】Bhallātiya Jātaka.

とあります。』

岩蛇

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、岩蛇の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、岩蛇は、その身長が非常に長いから、空腹を以て數日を過し、其胃を充たす食物を得ないでも、難澁しながら、尚且己の生命を保持することが能きます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、縱令彼は行乞して其食を得、他の布施に依賴し、他の惠を待つて暮らしますが、自ら食物を取ることを禁じ、若くはその腹を充たすに困難なる場合ありとても、若し彼が最上善を求むれば、彼は四口、若くは五口の食を喰はずとも、尚善く水を以て空腹を充さねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、岩蛇の一性質であります。是の故に法將たる舍利弗長老が、

「比丘は濕りたる、又は乾きたるを喰ひて、甚だしく飽くこともなく、
腹滿たず、食に量あり、正念にして遊行すべし。
四片五片を食ふことなくして水を飲め、「これ」專心なる比丘の樂住には足る。」

と言つて居ります。』

第六章　比喩問答

道蜘蛛

王『那伽犀那尊者よ、貴納は、彼に缺く可らざる、道蜘蛛の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、道蜘蛛は、道の上に網の幕を織り、其の網にかかれる者は、蟲でも、蠅でも、甲蟲でも、何でも捕へて其を喰べます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、(一)六窓の上に正念の幕を張り、若し煩惱の蠅が其の網にかかれば、彼等を捕虜にせねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、道蜘蛛の一性質であります。是の故に阿㝹樓駄長老は、

「人は六窓の上に、最上最善なる正念の網を張り、以てその心を閉ぢ込め、而して一切の煩惱を捕へ、智見の劍を以て、彼等を殺さざる可らず。」

と說破して居ります。』

【一】六窓とは、眼・耳・鼻・舌・身・意の感官のこと。

嬰兒

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、嬰兒の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、嬰兒は己の利益を固執し、若し乳を欲する時は、泣き出します。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、己利に粘著し、而して敎授に於いても、質問應答に於ても、行爲に於いても、獨居の習慣に於いても、その師と交はるにも、友情の開拓に於ても、何事に於いても、眞理の智識を以て働かねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、嬰兒の一性質であります。是の故に天中の天たる世尊が、長阿含經幷に大般涅槃經の中に、

「阿難陀よ、我は汝に切望す、汝自身の利益のために熱心なれ、汝自らの善行を專修せよ、汝は自らの利益のために、精勵し、熱中し、熱心せよ。」

と宣說し給ひました。』

陸龜

とは何ですか。』

尊『大王よ、陸龜は、水を恐れて、水邊に遠き場所に逍遙します。而して是の如く水を避くる習慣によりて、その永き生命を健全に保持いたします。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、怠慢の危險なるを見て、精進の優秀なる利益を知つて居ます。何となれば怠慢の危險なることを見れば、彼の沙門果は衰へず、寧ろ其れ自ら涅槃の境涯に進み行くからであります。是故に天中の天たる世尊が、

「精勤にして、放逸の恐るべきを知れる比丘は、
退轉することなくして、涅槃にこそは近づかん。」

と宣說し給ひました。』

山頂

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる山頂の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何何ですか。』

尊『大王よ、山頂は惡人の隱れ家であります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、他人の罪と墮落とを隱し、其を世に明かにしてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、山頂の第一性質であります。

復た次に、大王よ、山頂に數多の人の無きが如く、禪定を修する觀行の士も亦、貪慾・瞋恚・愚癡・傲慢等を避け、幷に邪見の網及び一切の煩惱を捨離せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、山頂の第二性質であります。

復た次に、大王よ、山頂は寂靜の處にして、人人の群集より遠ざかります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、寂靜の處にありて、罪ある不善の法を捨離し、又聖にあらざるものを避けねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、山頂の第三性質であります。

復た次に、大王よ、山頂の寂靜にして清淨なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、寂靜清淨、平和にして、情慾を捨離し、僞善を厭離せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる山頂の第四性質であります。

復た次に、大王よ、山頂は聖者の屢屢到る處なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、聖者により て追求されねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、山頂の第五性質であります。是の故に天中の天たる世尊が、雜阿含經の中に、

「閑居する人、尊貴の人、專心なる人、禪思の人、常に精勤努力する人、識者と共に住せよ。」

と宣說し給ひました。』

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は彼に缺く可らざる、樹の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、樹は實を生らせ、花を咲かせます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、解脫の花を咲かせ、沙門果の實を生らせねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、樹の第一性質であります。

復た次に、大王よ、樹は、その側に來る人、若くはその下に止まる人の上に、その蔭を投げます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、彼の側に止まり、彼に隨侍する人人を、肉體的要求に於ても、及び宗教的欲求に於いても、親切に迎へねばなりませぬ。大王よ、これ則ち觀法者に缺く可らざる、樹の第二性質であります。

復た次に、大王よ、樹はその蔭を與ふるに何等の區別をなしませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、一切の人類の間に何等の區別をなさず、泥棒にも、害心あるものにも、敵意を有する者にも、若くは彼自らの好める人にも、等しく慈悲を灌がねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、樹の第三性質であります。是の故に法將たる舍利弗長老が、

「牟尼は、彼を暗殺せんと試みたる提婆達多に對しても、泥棒の首魁たる(三)アングリマーラに對しても、彼の命を取らんとせる象に對しても、彼が唯一の愛子たる羅睺羅に對しても、其他一切の者に對しても、等しき心を以てし給ふ。」

と言つて居ります。』

【三】アングリマーラ Aṅgulimāla.

雨

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、雨の五性質があると言はれましたが、其の五性質とは何ですか。』

尊『大王よ、雨のよく一切の塵を鎮むるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其心中に起る一切の煩惱の塵垢を鎮めねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、雨の第一性質であります。

復た次に、大王よ、雨は善く大地の熱を消します。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、慈悲同情の念を以て、全世界の人天を慰めねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、雨の第二性質であります。

復た次に、大王よ、雨の善く一切種類の野菜類を成長せしむるが如く、禪定を修する觀行の士も

ませぬ。即ち天上、若くは人間界に於ける、光榮ある再生の低き到達に導くのみならず、更に又最高善たる極樂の涅槃界にも到達せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、雨の第三性質であります。

復た次に、大王よ、盛夏三伏の候に於ける雨の、善く草木・蔦・灌木・藥草・及び森の王に對して保護を與ふるが如く、禪定を修する觀行の士も亦た、謹愼の習慣を養成して、沙門果の法に保護を與へねばなりませぬ。何故なれば一切の善法は、その根本を謹愼の中に存するからであります。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、雨の第四性質であります。

復た次に、大王よ、雨の善く河・貯水池・湖・洞窟・罅隙・池・穴・井等を充たすが如く、禪定を修する觀行の士も亦、聖行によりて傳へられたる法則に從ひ、法雨を灌ぎ、以て教化を渇仰する人人の心を滿足せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、雨の第五性質であります。是の故に、法將たる舍利弗長老が、

「牟尼は、開悟せしむべき人を見ては、百千由旬も一刹那の間に行きて、之を開悟せしめ給ふ。」

と言つて居ます。』

金剛石

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、金剛石の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、金剛石の全く清淨無垢なるが如く、禪定を修する觀行の士の生活も亦、全く清淨無垢でなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、金剛石の第一性質であります。

復た次に、大王よ、金剛石の如何なるものとも鎔合され能はざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦た、決して惡人を友とし交つてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、金剛石の第二性質であります。

復た次に、大王よ、金剛石は、最も高價なる寶石と共に置かるるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、高尙・善良なるものと交はり、聖道の第一、第二、第三階級に入れる人と交はり、又は阿羅漢の寶珠と交はり、若くは三明、若くは六神通の人と交はらねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、金剛石の第三性質であります。是の故に天中の天たる世尊が、諸經要集の中に、

「おのれ淸淨にして淸淨の人と交り、而して常に正念に住せよ、斯くて〔汝は〕一切の智見を得て、苦惱を滅盡せん。」

と宣說し給ひました。』

獵師

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、獵師の四性質があると言はれましたが、其の四性質とは何ですか。』

尊『大王よ、獵師の不屈不撓なるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、不屈不撓でなければなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、獵師の第一性質であります。

復た次に、大王よ、獵師の善く其の注意を鹿の上に注ぐが如く、禪定を修する觀行の士も亦、その注意を思惟の一對象の上に傾注せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、獵師の第二性質であります。

復た次に、大王よ、獵師の善く己が事業の時期を知るが如く、禪定を修する觀行の士も亦、自ら「今や隱坐すべき時である、今や隱坐より出でて働くべき時である」と獨語しつつ、善く其の時間を知らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、獵師の第三性質であります。

復た次に、大王よ、獵師の鹿を見て、「今度は必らず射止めてやる」と決心し、心に喜悦を感受するが如く、禪定を修する觀行の士も亦、思惟の目的を一見して「今度は必らず我が欣求せる特殊の理想を握つてやる」と決心し、心に喜悦を感受せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、

獵師の第四性質であります。是の故に長老(三)モーガラーヂャが、

「其の心を涅槃の上に向けたる出家の人は、思想を導く一の目標を認め得んか、我是によつて必らず最高目的を達し得べしとの希望を起し、心は無上の喜悦もて滿されん。」

と言つて居ます。』

漁夫

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、漁夫の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、漁夫の善く釣針を以て魚を釣り上ぐるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、善く其の智慧によりて、最高最上の處に到るまで、沙門果を釣り上げねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、漁夫の第一性質であります。

復た次に、大王よ、漁夫の能く僅少の犧牲を以て大な獲物を得るが如く、禪定を修する觀行の士も亦、能く浮世の卑しき餌を捨てて、大なる沙門果の實を得ねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺

【三】 モーガラーヂャ Mogharaja.

く可らざる、漁夫の第二性質であります。是の故に羅睺羅長老が、

「世財を棄てて、空と、無相と、解脱と、無願と、四果と、六神通とを得よ。」

と言つて居ます。』

大工

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、大工の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、大工は、木に墨絲を打たる線の上を挽きます。今それ禪定を修する觀行の士も亦、是の如く、戒德の基礎の上に立ち、信の手に智慧の鋸を握り、勝者の敎に從つて煩惱を切斷せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大工の第一性質であります。

復た次に、大王よ、大工は材木の柔なる部分を不用のものとして棄て去り、堅い部分を取ります。今それ禪定を修する觀行の士も亦、無用なる戲論の道、卽ち常見、斷見、靈魂と肉體とは同一物なりと主張する論、靈魂と肉體とは別異なりと主張する論、(四)一切の敎は等しく最上なりと主張する論、爲さぬ事は益なしと主張する論、人閒の行爲は重要のものにあらずと主張する論、淸淨の生活は何の役にも立たぬと主張する論、有情死すれば九種

【四】以下の各論に就ては、可なり時間を費して、考へもし、研究もして見たが、印度の何學派に當るか見當がつかず、隨つて適當な譯語が見出せない。

の新有情現はると主張する論、有情の構成的要素は永遠なりと主張する論、作業者自ら此世で果報を受くと主張する論、甲が業を作りて、乙その果報を受くと主張する論、及び是の如き業に關する意見、若くは業果に關する他の一切の邪見を排棄して、諸行の自性の第一義空、不動無壽者、畢竟空なることを學ばねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、大工の第二性質であります。何となれば、そは天中の天たる世尊が、諸經要集の中に、

「塵を除け、埃をも拂へ、其より饒舌の徒を追へ、
沙門にあらずして沙門の思をなすもの、邪欲邪行處〔の輩〕を除き、
清淨にして正念あるものは、清淨のものと共に居を構ふべし。」

と宣說し給うたからであります。』

第七章　比喩問答

水瓶

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、水瓶の一性質があると言はれましたが、其の一性質とは何ですか。』

尊『大王よ、水瓶の水を充さるれば、音を發てざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、沙門果の最上頂點に達し、一切の傳說、學問、及び聖典を知れば、何等の音をも發てませぬ。尙ほ又其の爲に彼自ら誇の色をもなさず、自慢もせず、自慢高慢等を捨離し、饒舌せず、他を輕蔑せず、正直に世を渡らねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、水瓶の一性質であります。是の故に、天中の天たる世尊が、諸經要集の中に、

「滿たされざるものは音をなし、滿てるものは靜なり。
　愚者は半ば滿ちたる瓶に喩ふべく、智者は滿ちたる池の如し。」

と宣說し給ひました。』

鐵

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、鐵の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、鐵は打ち展ばされても、尚よく重きものを載せます。今それ禪定を修する觀行の士の心も亦是の如く、謹愼の習慣によりて、重き荷物を運ぶことが能きねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、鐵の第一性質であります。

復た次に、大王よ、鐵は一度水に浸たさるれば、其を吐き出しませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、一度正等正覺の佛陀、圓滿なる其の法、及び無上の敎團に入れば、決して其の信仰を捨てず、又彼が一度得たる色・受・想・行・識の無常性に關する智識を廢てゝはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、鐵の第二性質であります。是故に、天中の天たる世尊が、

「聖者の敎によりて訓練せられ、淸淨の智見を得、事物の眞性質を明らめ得たる人は、
何等恐怖する所なし。彼は單に阿羅漢果の一部分を實現せるのみならず、
又その全部を實現せりと云ふべきなり。」

と宣說し給ひました。』

日傘

王『那伽犀那尊者よ、貴納は、彼に缺く可らざる、日傘の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、日傘の能く人の頭上を蔽ふが如く、禪定を修する觀行の士も亦、一切の煩惱の上に卓絶せる性格を有せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる日傘の第一性質であります。

復た次に、大王よ、日傘の能く人の頭上を蔽ふに柄に依るが如く、禪定を修する觀行の士も亦、謹愼を其柄とせねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる日傘の第二性質であります。

復た次に、大王よ、日傘の能く、風を防ぎ、熱を防ぎ、暴風雨を防ぐが如く、禪定を修する觀行の士も亦、樣樣なる祕傳を有する種種の沙門、婆羅門の意見の空虛なる風を防ぎ、貪瞋癡の三火の熱を防ぎ、又煩惱の雨をも防がねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、日傘の第三性質であります。是の故に法將たる長老・舍利弗が、

「緣より緣まで穴なき大日傘の能く赫赫たる炎熱を防ぎ、天の大雨を防ぐが如く、心淸き佛子も亦、正義の勇猛なる日傘を持して、煩惱の雨を防ぎ、及び三火の炎熱を防ぐ。」

と言つて居ります。』

稻田

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、稻田の三性質があると言はれましたが、其の三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、稻田は灌漑のために、運河を以て準備されるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、佛法の稻田に水を齎らす運河、卽ち正義の人の肩に懸れる、種種なる本分の德目を準備せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる稻田の第一性質であります。

復た次に、大王よ、稻田の水を保持する爲には、堤塘を準備せねばなりませぬ。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、正義の生活の堤塘を準備し、罪を恥ぢ、且つ其によりて沙門たる狀態を不染汚にせねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、稻田の第二性質であります。

復た次に、大王よ、稻田が豐作であれば、農家の心を喜ばしめ、若し僅の種子を播いて多量の收入あり、若し又多くの種子を播いて更に多量の收入ある時は、農家の喜は非常なものであります。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、僅を與へて多くの結果を取り、多く與へて更に大なる結果を取り、以て其の心を喜ばしめ、支持せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、稻田の第三性質であります。是の故に持戒第一の優婆離長老が、

「稻田の如く結果よくあれ、一切の善業に富め、
そは播主に最上の作物を與ふる最善の因地なるを以てなり。」

と言つて居ります。』

藥

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、藥の二性質があると言はれましたが、其の二性質とは何ですか。』

尊『大王よ、藥の中には、惡蟲の生せざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、其の心に煩惱を起らしめてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、藥の第一性質であります。

復た次に、大王よ、藥は、人が〔毒蛇等に〕嚙まれ、若くは觸れられ、或は食ひ、或は飲める所の毒を消します。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、貪・瞋・癡・慢及び邪見の毒に逆らはねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる藥の第二性質であります。是故に、天中の天たる世尊が、

「諸行の眞性質を觀破せんと欲する觀行の士は、
宛も一切の煩惱を斷滅する解毒劑の如くならざるべからず。」

と宣說し給ひました。』

食物

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、食物の三性質があると言はれましたが、その三性質とは何ですか。』

尊『大王よ、食物の能く一切衆生の支持者たるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、一切衆生をして、八正道の窓を開かしむる、一種の把手とならねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、食物の第一性質であります。

復た次に、大王よ、食物の能く人の力を增すが如く、禪定を修する觀行の士も亦、功德をして增大せしめねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、食物の第二性質であります。

復た次に、大王よ、食物は一切衆生の愛望する所となるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、一切世間の渇仰する所とならねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、食物の第三性質であります。是の故に長老・大目犍連が、

「觀行の士は克己と訓練と戒行と實行とによりて、
一切世人の渇仰する所とならざる可らず。」

と言つて居ります。』

弓手

王『那伽犀那尊者よ、貴衲は、彼に缺く可らざる、弓手の四性質があると言はれましたが、其の四性質とは何ですか。』

尊『大王よ、弓手は、其の矢を放たんとする時、先づ其の足を確乎と大地に据ゑ、その膝を眞直にし、腰の細部に矢筒を懸け、不動の姿勢を取り、兩手を弓と矢との接合する點に置き、拳を固め、以て指の間に空虚なからしめ、その首を伸ばし、其口と一眼とを閉ぢ、「今射るのだ」と決心の臍を固め、喜び勇んで狙を定めます。今それ禪定を修する觀行の士も亦是の如く、精進の足を以て、戒行の基礎に据ゑ、本分の完成と克己とを以て、不動の姿勢を取り、以て興奮と無氣力の情を抑制し、不斷の思慮を以て其心に空虚なからしめ、勇猛精進以て六窓を閉ぢ、「我今智慧の槍を以て、我が一切の煩惱を殺戮せん」と決心の臍を固め、喜び勇んで、不斷に細心の深慮を排はねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、弓手の第一性質であります。

復た次に、大王よ、弓手は、曲り・歪み・且不齊の矢を眞直にする爲に鉗砧を使用します。今それ禪定を修する觀行の士も亦、彼が肉體に制せられる間は、曲り・歪み・變じ易き心を眞直にする爲に、謹愼の鉗砧を使用せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる弓手の第二性質であります。

復た次に、大王よ、弓手の的を定めて練習するが如く、禪定を修する觀行の士も亦た、彼が肉體に制せらるる間は、逆に其を制せんことを練習せねばなりませぬ。大王よ、その練習とは何であるかと

ならば、謂く、彼は諸行無常の觀念を練り、一切皆苦の觀念を練り、諸法無我の觀念を練り、個人的狀態の下に於ける訓練の必要を伴ふ肉體の疾病・困難・苦痛・疼痛・不快の觀念を練り、或は肉體は依立的なりとの觀念を練り、或はそは分解を免れざるものなりとの觀念を練り、又そは苦難・危險・恐怖・不運等に從屬するものなりとの觀念を練り、又或は變化常なき生命の下にある無常性に就いての觀念を練り、解體の傾向に就ての觀念を練り、若くは牢固なるものにあらずとの觀念を練り、若くは身體は眞の避難所とするに足らず、そは安全なる洞窟にもあらず、保護の本家鄕にもあらず、信賴すべき正當のものにもあらざることを觀じ、尙ほ又その空虛・危險・不安・浮華なる性質に就いて觀察し、或は又そは苦痛の源泉にして、責罰を免れず、不淨の性質に充ち、煩惱の餌となり、生・老・病・死・憂・悲・苦・惱等の雜種の複合せるものなることを觀せねばなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、弓手の第三性質であります。

復た次に、大王よ、弓手の明け暮れ練習を怠らざるが如く、禪定を修する觀行の士も亦、明け暮れ訓練を怠つてはなりませぬ。大王よ、これ則ち彼に缺く可らざる、弓手の第四性質であります。是の故に法將たる舍利弗長老が、

「眞の弓手は明け暮れ訓練を怠ることなし、彼が熟達の賞與及び報酬を得るは、全く其技術の訓練

を得る所以のものは、彼等が常に肉體の構成に於ける生命の條件を思惟し觀察するを以てなり。」
と言つて居ります。』

＊　＊　＊　＊　＊

茲に彌蘭陀王の二百六十二の疑問は六篇二十二章を以て其の終りを告げてをる。然るに此の外書籍として傳らざる問題が四十二ある。で、これ等を一緒にして三百四の問題が、彌蘭陀王問經と云ふ名によつて後世に傳へられたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

王と尊者との問答の終るや、八萬四千由旬の大地は六種に震動し、電光閃き、諸天は花の雨を降らし、大梵天は自ら喝采をなし、而して大地の底には暴風雨の荒れ叫ぶ如な大音響が發つた。この異狀を見たる五百の大臣等と、奢揭羅府の凡ての住民、及び王宮の婇女等は、那伽犀那大師の前に合掌低頭して伏し拜んだ。彌蘭陀王は歡喜の情を以て充たされ、剛慢の心は全く壓迫された。而して彼は佛陀の宗教を信ずる功德を悟り、三寶に對する一切の疑心を一掃し、最早異端の叢林に躑躅せず、凡ての執拗の情を捨離された。そして尊者の高い性格を無限に賞め稱へ、出家人に相應はしき彼が態度を賞め、喜びの情に充ち、執著を捨離し、一切の自慢高慢の念を排絕された。而して宛も毒蛇の牙を脫せるが如くなりて、「善哉、善哉、那伽犀那尊者よ、貴衲は佛陀の解答に價する難問を明かにせられ

た。世に佛陀の諸の弟子等の中、問題を解決するに當つて、法將舍利弗長老を除くの外、貴衲の如な人は一人もありませぬ。尊者よ、我が過失を許されよ、尊者よ、今後朕の生命のあらん限り、我が宗教の支持者として、眞の發心者として、朕を承認せられよ」と言はれた。

其の後、王と、及び其大臣等とは絶えず那伽犀那に對して尊敬の意を表し、而して彌蘭陀王は彌蘭陀寺と稱する寺を建て、其を那伽犀那長老に寄附し、而して彼及び數多の阿羅漢の比丘に隨侍して、比丘の生活の四種の須要品を施與された。而して彼は尊者の智慧に隨喜して、その王國を王子に讓り、俗的生活を捨てて出家入道し、大智見を獲得し、阿羅漢果を體得されたのである。

「智慧は「一切」世間の賞讚する所、正法維持の演說も「亦た然かなり」。
人若し智慧の上に立ち、必らず正念を失ふことなくんば、
彼は勝妙の恭敬を受くる者のうち、最上第一の人たるべし。
是の故に智者をして智慧を恭敬すること、
恰も「聖者の」靈龕を尊崇するが如くならしめよ。」

國譯彌蘭陀王問經　終

大正七年二月二十五日印刷
大正七年二月二十八日發行
大正七年十月二十六日再版發行
昭和二年八月二十五日三版發行
昭和十年七月廿五日四版發行

國譯大藏經　經部　第十二卷

【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一丁目六番地

右代表者　鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者　赤羽正己
東京市神田區神保町三丁目廿七番地

印刷所　正隆堂印刷所
東京市神田區神保町三丁目廿七番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五番
　　　　（八三八番
振替東京一八五七二番